
バカとテストと優等生？ IFシリーズ

さすらいの旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと優等生？ IFシリーズ

【Nコード】

N7752V

【作者名】

さすらいの旅人

【あらすじ】

このお話はマロさん作「バカとテストと優等生？」のオリキャラを使用するIF物語です。そして途中から作者である私が「バカとテストと優等生？」の世界に介入してドタバタ劇を起こすと言う途轍もなくあり得なさ過ぎる物語です。そんな物は下らない、見たくないと言う人はスルーして下さい。

遊佐翔 学園長に愛の告白（前書き）

重ねて何度も言いますが、これは絶対にありえない、起こるかもしれない、起こる訳が無いと言われると言つ物語です。それが嫌だと
言つお方がありましたら、引き返して下さい。

遊佐翔 学園長に愛の告白

文月学園が放課後、杉の木の下で……。

「全く、アタシをこんな所に呼んでどうするつもりさね」

学園長が悪態を吐きながら佇んでいた。

「あのクソジヤリは一体何を……」

「来てくれたか、ばーさん」

「ん？」

声が聞こえた学園長は後ろを振り向くと、目の前に遊佐翔がいた。

何やら真剣そうな顔をして見ているが。

「で、アタシに何の用だい？ まさか世間話をする為にこんな所に呼んだんじゃないんだろ？」

「アンタに大事な話があつて呼んだんだ」

「大事な話？」

大事な話と言われた学園長は腕を組みながら翔を見る。

「アンタがアタシにそんな事を言うなんて意外さね」

「ああ、俺様もばーさんにこんな事を言うなんて思いもしなかったぞ、けど……」

翔は学園長に近づいて距離が縮まり……

「な…何さね？」

「俺様は……！（ギユウツ！）」

「……！ い…いきなり何をするんだい！？」

学園長を力いっぱい抱き締めた。

「何を考えているさねクソジャリ！ 悪ふざけは……」

「ふざけてなんかいねえよ。これは俺様の本心だ」

「な……」

いきなりの行動に突き放そうとした学園長であったが、翔の言葉に手を止める。

「ばーさん、今から俺様の言う事をよく聞いてくれ」

「………言ってみな」

「一応聞いてみようと思った学園長は……」。

「カオル！ 俺様はアンタが好きだ！ 愛している！」

「アタシもさね……んん……」

翔は学園長にキスをすると、学園長は翔を抱き締めながら受け入れた。

こうして以降、文月学園の歳の差カップル 遊佐翔と藤堂カオルが誕生し、

学園に大きな衝撃を与えたのであった。

遊佐翔 学園長に愛の告白（後書き）

初めてマロさんの感想版で書いたお話でした~~~~!!!!!

そしてこれが私が物語を書く事となった原点であります!!!

中身は肉付けして多少長くしても短い事には変わりませんが……。

初めて掲載したので私、凄く緊張しております。

では以降宜しく願います。

感想と批判をお待ちしております。

来牙×美咲（前書き）

初っ端から翔と学園長の告白シーンを見て気持ち悪かったでしょうから、今回の話はちょっとした恋愛話にしました。

それではどうぞー！

来牙×美咲

日曜日の朝7時、来牙は目を覚ますとそこには懐かしい人が来牙の隣にいた。

「おはよう、お久しぶり。来牙君」

「なんでアンタがここにいる・・・」

沢渡美咲であった。それも下着姿で……。

「あら、開口一番にそれ？てっきり『久しぶりだな美咲、俺も会いたかった』って

言って抱きしめてくれると思ったのに」

「人のベッドに忍び込んでおいて、俺がそんなことすると思ってるのか？」

「してくれたらおはようのキスをしてあげただけど」

「いらん。つか、どいてくれ。起きれないんだが・・・それに服を着ろ」

「ふふふ、イ・ヤー！」

美咲をどかそうとした来牙であったが、美咲は離さないかの様に来牙を抱きしめた。

「おい、そんな冗談はいいから早くどいて…んむ!？」

美咲は来牙にキスをして、さらに口の中に舌を絡めた。

「んん…んちゅ…って!いきなり何をする!？」

「何ってキスだけど？」

「そうじゃなくて、何でこんなことするのかを聞いている!？」

「うーん…来牙君とエッチしたいからかな？」

「はあ!？ア、アンタ、自分が何を言っているのか本気で分かっているのか!？」

慌てふためいている来牙とは正反対に何事も無いように平然という美咲。

「だって久々に会った来牙君を見ると、段々エッチな気分になっちゃって…それに…」

来牙君のここも準備万端じゃない…」

妖艶な顔をして来牙の股間に触る美咲。

「ち、違う。これはただの生理現象で…お、おい!…やめ…クッ!」

抵抗をしても触られているのを感じている所為であるのか、必死に耐えている来牙。

が、美咲の前には何の意味を成さなかった。

「生理現象って言う割にはずいぶん感じているんじゃない？　ら・い・が・く・ん？」

「か、感じてなんかいない。いいから手をは・・・放せて・・・ウウー！」

「ふふふ、ダメ」

来牙の耳元で呟く美咲であったが、来牙に再度キスをした。

「ん・・・んむ・・・や、やめろ。俺には絵梨が・・・っは！」

「あら・・・もう絵梨ちゃんとエッチしてたのね・・・ふうん？」

来牙は不味いと焦ったが、美咲は怒ることも無くあまり気にしなかった。

むしろ好都合だと言わんばかりの表情だった。

「じゃあ、絵梨ちゃんの味を知ったんなら今度はアタシの味を教えてくださいあ・げ・る」

「ま、待て！・・・んむう！？」

絶対に離さないかの様に来牙にキスをする美咲。

来牙は美咲に何度もキスをされている為、抵抗が弱まってきており、

受け入れる状態になり掛けていた。

「（こいつ、本気でするつもりだ。く、くそ……このままじゃ……）」

「来牙君……いーっぱい気持ちよくしてあげる」

美咲が来牙のパジャマを脱がそうとしたその時……。

ガチャッ

と突然ドアが開いた。

「来牙くん、徹夜でゲームしててまだ寝たい気持ちはわかるけど、そろそろ起きないと……え？」

「え……絵梨？」

「あら？」

来牙と美咲がドアの方を見るとそこには固まっている絵梨がいた。

当然であろう。絵梨の目の前には美咲が来牙を押し倒し、パジャマを脱がそうとしているのだから。

これで何も無く接する人がいるとしたらかなりの大物であろう。

「な……な……なな……ななな」

「絵梨ちゃん、久しぶり。さっきから『な』しか言っていないけど如

何したの？」

「ど・・如何したのじゃな〜〜い!!!何で美咲ちゃんが来牙君の部屋にいるのよ〜〜?!

それに来牙君に何しようとしてるの〜〜!!!」

「何って、今からエッチする所だけど？」

復帰した絵梨が美咲に怒鳴り散らすが、美咲は冷静に返答する。

「エ・・エ・エッチって、こんな朝から……って違う!何で来牙君にそんなことするのよ?!」

「(むしろ俺が聞きたい)」

「だってアタシ、来牙君の事好きだから。好きな人とエッチするのは当然でしょ？」

「(当然って言われても俺は困るんだが?)」

「そんなの絶対駄目!!!来牙君とエッチするのはあたしなんだから!!!」

とにかく、来牙君が困っているんだから離れて!!!」

これ以上は許さないと怒り寸前の絵梨と余裕が持てたのか心の中で突っ込む来牙、

美咲は絵梨を挑発しているのか来牙に抱きつく。

「ふふふ、イ・ヤ！」

さらに絵梨を挑発させる為か来牙にキスをしようとする。

「フ……………フフフフ。美咲ちゃん。それはあたしに対する挑戦状だと受け取っていいのかしら？」

「好きに捉えても構わないわよ。じゃあ来牙君、続きしましょうか？」

「この状況でまだそんな事が言えるのかアンタは?!早くどかないと絵梨にぶっ飛ばされるぞ!!」

絵梨の強さは身に染みて分かっている筈だろ?!」

「ふふふ、どうかしら?絵梨ちゃん、アタシと来牙君の仲を引き裂きたいんならどうぞご自由に・・・んん」

来牙にキスをする美咲に突然ブチッ!と切れた音がした。

音の発生源は絵梨であり、恐ろしいほどの無表情である。

「そう……………じゃあ、覚悟してもらおうわよ。美咲ちゃん!!!」(ダッ
!)(」

美咲を来牙から引き剥がそうとする絵梨、それに対して美咲は……………。

「(掛かった!)(」

まるでこうなる事が分かってたかの様に、美咲は次の行動に移る。ブラの中に入っているカプセルを取り出して口の中に放り込み、突進した絵梨の

パンチをかわすとそのまま絵梨に抱きつく。

「な…なに!?! ……んむう!?!」

絵梨は美咲の突然の行動に絵梨は戸惑うと、美咲その隙にキスをした……それも舌を絡ませて何かを

飲み込ませるかのように。

「ん……んん……ゴクツ……って何するのよ?!」

絵梨は美咲からのキスに何かを飲まされたが、それ以上に美咲がキスをした事に大きく戸惑う。

「ふふ、すぐに分かるわ。」

「分かるって、もしかしてあなた……!?!」

同性愛趣味を持っているかと思っただ絵梨であったが、異変が起きた。

「え……な、なに……これ……はあ……はあ……」

「ふふふ、効いてきたわね。これで条件はクリアっ」と

「おいアンタ!絵梨に何をした?!」

絵梨は突然顔を赤らめてふらふらした状態になり倒れそうになると、美咲は計算通りと満足した

表情になり、来牙は美咲を問い詰める。

「アタシが絵梨ちゃんにキスをした時、ある物を飲ませたの。」

「なんだそれは？」

「フッフ　それはね………即効性の媚薬よ。それもちょっと強めの」

「なっ?!」

「こうでもしないと絵梨ちゃんは大人しくしてくれないから、媚薬を飲ませたってわけ。

ああ、後遺症の心配はしなくて大丈夫よ。時間が経ったら元に戻るから」

絵梨に媚薬を飲ませた美咲に啞然とする来牙であった。

「まさか、アンタは絵梨に媚薬を飲ませる為に怒らせたのか？」

「そ。怒った絵梨ちゃんの攻撃は単純だからすぐにかわせたわ。

もつとも、冷静に攻撃されたら媚薬を飲ませるのは無理だったんだけどね。

さてと、絵梨ちゃんもすっかりいい状態になっているわよ?」

「何?!」

「はあ……はあ……はあ……ら、来牙君。あたし……」

絵梨は完全に堕ちている表情になっていた。その証拠に絵梨は自分で胸を触っている。

「お、おい絵梨!」

「来牙君、あたし……変。体が凄く痛いちゃって、来牙君のが欲しいの……」

「……………」

「ふふふ、いい具合ね。じゃあ、アタシも混ぜって楽しもうっと」

「おいよせ!俺は……グツ!な…何だこれは……」

突然、来牙の体が熱くなってきた。

「あ、言い忘れていたけど来牙君も媚薬を飲んでいるのよ。絵梨ちゃんのと違って遅効性のだけど」

「何だと……お、俺はカプセルなんて飲んでなんか……」

「絵梨ちゃんが来る前にもう飲ませたわよ?」

「何だと? ……………ま、まさか……」

「気付いたみたいね。そう、来牙君と何回もキスをしている時に飲ませたのよ。液状のやつをね。」

来牙君はアタシの涎だと思って飲んでいたんでしょうけど、実は媚薬だったのよ」

美咲はニコツと笑顔で言った、それもしてやったりと。

来牙は最初から最後まで美咲の策に嵌まっていたのだった。

「く、くそ……俺とした事が……」

「さて、ここからはお楽しみ時間よ。ら・い・が・く・ん？」

「だめえ……美咲ちゃん。来牙君はあたしとするのお……んん……」

絵梨は来牙に近づきキスをする。

「あらあら、思っていた以上の効き目ね。でも、アタシも我慢できなくなってきた……」

アタシも来牙君と同様に媚薬を飲んでいるから……もう駄目……んんん……」

美咲もとうとう我慢の限界を超えてしまった為か、来牙にキスをす

る。
「あ……美咲ちゃん……だめえ、来牙君はあたしのお……」

「ふふふ……じゃあ……3人で楽しみましょ？……それならいいでしょ？」

「うん……それならいいよ……来牙君はやくう……」

「あ、ああ……んん……（何かもう如何でもよくなってきた……）」

来牙も媚薬の所為で思考能力が失っているのか、流される状態になっていた。

「（ふふふ、やっと来牙君と出来る……）」

来牙と絵梨は美咲の策にまんまと嵌まり、思惑通りに動かされていた。

そして3人は媚薬の効果が切れるまでしていたとさ。

来牙×美咲（後書き）

これは来牙と絵梨が恋人同士になった以降のお話です。

感想板でよくこんな駄作を書いていたな〜って思いました。

それでは感想と批判をお待ちしております。

来牙×絵梨（前書き）

これは来牙と絵梨が美咲に媚薬を飲まされた後の話です。

それではどうぞー！

来牙×絵梨

とある休日の昼、来牙の部屋には来牙と絵梨がいた。

「……………」

「……………」

いつもの仲のいい兄妹のだが、今回は少し違う。

それは……………。

「……………フンッ！（プイッ）」

絵梨がツインテールの髪型になっているからである。

それに加えて目が鋭くなっており不機嫌オーラ全開で、ツン100%状態の絵梨である。

デレは一切無い。

不機嫌に来牙のベッドに座っている絵梨を、来牙は隣に座っており、どうやって宥めようかと画策していた。

「……………絵梨、あの時の事なんだが……………」

「何よ来牙君？あたし今機嫌悪いから話し掛けないですよ……………」

「いや……だから……」

「もしかしてあたしに謝ろうとしてる？何それ、訳分かんない。て言うか話し掛けないでって」

「言ったでしょ？信じらんない（プイッ！）」

「……………（これは相当きてるな……………）」

明後日の方向を向いている絵梨に、来牙は絵梨がどれだけ不機嫌なのかがよく分かった。

まあ絵梨が来牙の部屋に来ているだけ、来牙の事を完全に嫌っているという訳ではないが……。

「（ふん！美咲ちゃんに誑かされた来牙君なんて知らない！！）」

どうやら絵梨はこの間の事を相当根に持っている様である。

美咲によって媚薬を飲まされてその気になったとは言え、絵梨は来牙が自分以外の女と

エッチするのが許せなかった様だ。

「（今日は来牙君をずっと困らせてやるんだから！！！！）」

おい絵梨、お前も美咲に誑かされた一人何だけどな……………その後、美咲と一緒に来牙と

エッチしただろ？

「(…………何か変な声が聞こえた気がしたけど…気のせいね)」

私の突っ込みを無視しないでくれよ絵梨……!!!!!!

「(無視無視…………)」

私の発言に無視する絵梨であった。…………ort

「絵梨、今はナレーション何て如何でもいいから俺の話聞いてくれ…………」

来牙、アンタもかよ!!…………ort

「……………」

「絵梨、頼むから聞いてくれ…………」

「……………」

完全に無視する絵梨である。

来牙はどうやって絵梨を振り向かせようかと考えたが、言うだけ言おうと決意した。

「絵梨、俺は確かに美咲とエッチした。お前にとってそれは一番許せない事なのはよく分かる。

俺自身情けなく思うし、お前に大変申し訳ないと思っている。だから俺は…………」

「……………何それ……………」

「え？」

やっと口が開き、来牙に顔を向けた絵梨であったが……………。

「ふうん。ホントに悪いと思ってるんだ、へへえ、あたしに申し訳ないってね。」

ホントにそう思っているのかな？」

「……………いや、だから……………」

「何よ！美咲ちゃん何かとエッチしちやって！！その上、美咲ちゃんのキスであんなに

気持ち良さそうな顔してたくせに！！信じられない！！」

「おい絵梨……………お前だつて……………」

流石に来牙も絵梨の発言にカチンと来たのか反論しようとしたその矢先……………。

「絶対に渡さないんだから（ぼそっ）」

「え？」

「絶対美咲ちゃん何かに渡さないんだから！！！！来牙君はあたしだけの物なんだから！！！！」

「……………」

来牙を罵倒する絵梨であったが、途中から自身の心情を表していた。

そんな絵梨に来牙は呆然とする。

「え…絵梨…お前…」

「はっ！！（／／／／／／／／／／／／／／／／）…あ…え…えーと…
…か、勘違いしないでよね！

あたしはただ美咲ちゃんにあげる物はこれっぽっちも無いって言う
てるだけなんだからね！

それだけよ！！（プイッ！）

顔が赤くなつた所を来牙に見せたくないのか、すぐに顔を明後日の
方向に向けた。

そんな絵梨をお見通しかの様に来牙は後ろから抱きしめる。

「はは…まさか絵梨が俺に対する独占欲がそんなにあつたなんて
知らなかったよ」

「！…な…何よ…もしかして調子に乗ってない？ こんな事して
あたしが許すとも思ってるの？」

「じゃあ、どうしたら許してくれるのかな？…お姫様？（ぶっつ）

」

「……………ひゃん！！……………や…やっぱり調子に乗ってる！（来牙君…耳元で…だめ…）」

絵梨の耳元に息を吹きかける来牙。そしてさらに……………。

「こつすれば許してくれるのかな？」

「あん！…だ…だめ！！……………胸…触っちゃ……………（き…気持ちいい…来牙君に触られているだけで…あたし）」

今度は絵梨の胸を揉み始めた。

どんとんとケダモノに近づいてくる来牙は、絵梨をその気にさせる為、に耳元で呟く。

「お前の感じてる声を聞いてて俺も我慢出来なくなって来た。…してもいいか？……………絵梨」

「……………（来牙君のがあんなに大きく……………あたしも……………来牙君と…エッチしたい……………）」

絵梨も来牙の股間を見て我慢出来なくなってきたようだ。

けれど最後までツンデレを貫き通す絵梨は。

「……………いいいわ……………してもいいわよ……………けど…勘違いしないでね……………これはあくまで……………」

来牙君の……………暴走を…抑えるための……………行為なんだから……………それ

を…忘れないでね」

口ではツンとした言い方をしているつもりであるが、

態度は来牙に甘えるように抱きつく完全なデレ状態であった。

「はいはい、分かったよ。じゃあ始めるとするか」

「さ…さっさとしなさいよ…（来牙くん…はやく…あたしもう我慢できないい…）」

こうして来牙は絵梨の気が済むまでエッチをしていましたとさ。

来牙×絵梨（後書き）

ツインテールになった絵梨が来牙にツンとした態度をとっていました
た〜〜!!!

ちよつと考えていたんですが、今まで感想版に書いていた話でラブ
シーン書いていましたけど、連載する内容によっては此処で載せる
事が出来ない物もありますな。

その場合はノクタ行きにした方がいいのでしょうかね？

と言う訳で失礼します!!

来牙×美咲2（前書き）

再び、来牙と美咲のカップリングです！！

ではどじぞー！！

来牙×美咲2

ここはとあるラブホテルの一室。

そこには来牙と美咲が互いにベッドで横になっていた。

それも裸で。

「ふふふ、来牙君ってすごいね。この前以上に激しかったわ」

「（どうしてこんな事になっちまったんだ？……）」

満面の笑みを浮かべている美咲と頭の中で自問自答している来牙。

なぜこの二人がこんな状態になっているのかは流石に説明しないと分からないだろうと

思うので少し時間を遡ります。

それは3時間程前の事……。

「（何か面白いゲームがあるといいんだけどな……）」

ここは街中のとあるゲームショップ店『ガオ』である。

来牙はもっているゲームを殆どクリアしてしまった為、新しいゲームを買いに『ガオ』に来ていた。

ちなみに来牙一人だけである。

『ガオ』に行く時は絵梨と一緒にであるが、絵梨のバイト先の店長から人手が足りないから

すぐに来て欲しいとの連絡があったのだ。

絵梨としては折角の休日らしい牙と出掛けるから適当な理由を言って断ろうとしたが、

店長がどうしてもすぐに来てくれと懇願されたので絵梨は渋々とバイト先に向かった。

そう言う訳で一人で『ガオ』に行った来牙は、今は何のゲームを買うか悩んでいたのであった。

「(うーん、こっちのロープレもいいんだが、これも捨てがたいな……あ、あっちの格ゲーもいいな。」

お、このアドベンチャーも面白そう……あ、駄目だ。いつも絵梨と一緒に買ってたから一人で

「買おうとすると結構悩むな……」

いろいろなゲームソフトを見ながら何を買つかと悩んでいる来牙。目当てのゲームがあったらすぐに買うのだが、適当に選んで買おうとすると悩んでしまう。

絵梨と一緒にの場合だとすぐに決まるのだが、一人で買おうとすると何かと悩む。

まあ、絵梨が「これだったらどう?」と言われたら、来牙も「面白そうだからこれにするか」と決まるのである。

「（絵梨と一緒にいないとどうもすぐに決まらないな……何かもう絵梨がいないと

落ち着かないと言うか何と言うか……）」

以前までは絵梨を単なる妹としか見ていなかった来牙であったが、恋人同士になると絵梨と

一緒にいたいという気持ちが強まってしまう。

「（それだけ絵梨に依存しちまってるって事が……こりゃもう一種の病気かもしれないな）」

それは恋の病か絵梨依存症のどちらかと思う。（私さすらいの旅人としては後者だと思います）

「纏めて買いたいのが、今月は厳しいから1つしか買えないな……けど1つだけ買おうとすると悩むな……」

「ここで今買うか、次の機会に絵梨と一緒に来て買うか…どっちにしようか……」

うっんと悩んでいる来牙。そんな来牙に近づいてくる女性がいた。

来牙は近づいてくる女性に全く気付いていない。女性は雷牙を驚かす為に背後に回り、

来牙の目を自身の手で覆った。

「だ〜れだ?」

「ん? 何だ? ……って、その声は美咲か?」

「当たたり〜。よく分かったわね? アタシだって」

来牙の目を塞いでいたのは黒いワンピースを着た沢渡美咲であった。

美咲は手を離して来牙の正面に回ると、来牙は意外そうな表情をする。

「何でアンタがここにいるんだ? あんたもゲームを買いに来たのか?」

「うっん。来牙君が店に入る所を見たから声をかけただけよ」

「だったらあんな事しないで普通に呼べばいいだろ……」

「だって普通に呼んでもつままないから…と・こ・ろ・で……」

美咲は両腕を後ろに組んでニコツと笑みを浮かべ来牙に近づき、上目遣いで見てくる。

「何だ？」

「ねえ来牙君。突然だけどアタシとデートしない？」

「はあ？ 何で俺がアンタと？」

「いいじゃない。どうせゲーム買った後、家に帰るつもりだったんでしょ？」

「だったら帰る前にアタシとデートしてよ」

「い……いや、俺は……」

「んもう、つれないわね。一緒に裸の付き合いをした仲なのに……」

「おい！ 誤解を招く発言をするな！」

「誤解も何もアタシ達それ以上のことをしたんだけどね。あの時の来牙君は凄く激しかったし……」

「だから！ そんな事を此処で言わなくても……あ……」

来牙は周りを見るとゲームを買いおつとしている客達から白い目で見られていた。

主に（彼女がいない）男性客から妬ましい視線を送られている。

「……………」

流石にこれだけの視線に耐え切れなかった来牙は、美咲を連れて店を出た。

店から出た二人は近くの路地裏にいた。

「ねえ？ゲーム買っじゃなかったの？」

「……………アンタはあんな大勢の客から視線を当てられてなんとも思わないのか？」

「うん、ただの見苦しい嫉妬でしょ？別に気にする事は無いと思うけど？」

「……………」

平然と返す美咲に来牙はすぐに言葉が出なかった。あれだけの視線を見苦しい嫉妬と表現する美咲は大物かもしれないと来牙は思った。

「そんなことより、どうするの？」

「どうするって……………あそこでゲームが買えない以上このまま帰るつもりだが……………」

「え〜？ 折角、来牙君に会えたのにもう帰っちゃうの？ ……あ、それもいつか…」

美咲は何か思いついたみたいで、来牙は嫌な予感がした。

「……アンタ今何を考えた？」

「う〜ん。家に帰るんだつたらアタシもお邪魔しようかな〜ってね」

「……待て、何故また俺の家に来る？」

「来牙君の家でまたエッチするのもいいかもしれないと思って」

「おい！！」

「だって来牙君デートしてくれないから、これしか無いと思って。まあアタシとしては」

またエッチしてくれと嬉しいんだけど」

「じ、冗談じゃない…この前は絵梨が起きる前にアンタが帰ってくれたから良かったが、」

俺が絵梨を宥めるのにどれだけ苦労した事か……」

来牙はあの子の後の事を美咲に話した。

絵梨は美咲が帰って目覚めた後、（美咲に対してのみ）烈火のごとく怒り狂ったのだ。

大好きな来牙を美咲に奪われた（と本人は思っている）絵梨にとっては凄く許せなかった。

絵梨も絵梨で来牙とエッチしていたのだが、媚薬により記憶が混乱して、エッチしていた事は

覚えてはいた。しかし美咲に嵌められたと思うと怒りが抑えきれなかったのである。

こんな状態の絵梨を来牙はずっと宥めていた。最初はどうしてもあんな事になっていたのかやら

自分より美咲の方がよかったのかと物凄い剣幕で問い詰められたが、来牙の必死の説得によって

絵梨を何とか静めた。その後は美咲を忘れさせる為にまた来牙とエッチした絵梨であったが……。

絵梨は次に美咲に会ったら今度は問答無用でぶっ飛ばすと心に誓っていた。

それを見た来牙は流血沙汰にならなければいいがと大きいため息をついた……と言う事があった。

「あらら〜そんな事があったの？」

「そんな事って……本当に大変だったんだぞ……」

しれっと言う美咲に来牙はあの時の事を思い出してげんなりとする。

「ふうん。アタシが来牙君の家に寄るのは不味いつて事だよな?」

「そう言う事だ。分かったら俺の家に来るのは止め……」

「じゃあ来牙君の家に行こつと」

「な?!ア、アンタちゃんと人の話を聞いてたのか!??」

美咲の発言に来牙はまた説明しなければいけないのかと思った。

「ええ聞いてたわよ。絵梨ちゃんがアタシを問答無用でぶっ飛ばすんでしょ?」

「それが分かっているんだつたら……」

「でも来牙君はアタシがぶっ飛ばされるのを見たくないから守ってくれるんでしょ?」

「だったらアタシは来牙君の背中に隠れているから」

「……おい美咲。俺が見捨てるという選択肢を考えていないのか?」

「だって来牙君がアタシを見捨てるなんてとても考えられないもん。それにさっきまでの話を総合すると」

来牙君はきつとアタシを守ってくれる筈だから、ね?」

「……………」

確かに絵梨が美咲をぶっ飛ばす所を来牙としては見たくない。必ず止めようとするだろう。

しかし、それはそれでまた大変な事になるのは間違いない。

「（ここは穏便に済ませたほうが良いかもしれないな）」

このまま家に帰って美咲に来られても不味いので、ここはあえて美咲に付き合った

方がいいかもしれないと思う来牙であった。

「はあ……………分かったよ。このままアンタに付き合うから家に来るのだけは勘弁してくれ……………」

「え？ いいの？ ホントに？」

「アンタが家に来られると面倒な事になるからな。ここは付き合っ
てやるよ……………」

「何か釈然としないけど……………ま、いつか！ 来牙君とデート出来るんだし」

嬉しそうに来牙に寄りかかり、来牙の左腕に絡めるように抱きつく。

「（……………アンタの事だから絵梨の対抗策を考えているんだろうけど、それは俺も絶対に関わるんだろうな……………）」

これ以上面倒ごとになるのは嫌だったので敢えて美咲とのデートに付き合う来牙。

そんな来牙の心境に美咲は気にせず行き場所を聞く。

「ねえ？ どこに行く？ 来牙君が行きたい所があったら何処でもいいけど」

「……特に無いから、美咲に任せる……」

「そう？ じゃあいくつか行って見たい所があるからそこに行くとしますか」

「何処に行くんだ？」

「ふふふ……それはお楽しみ……」

路地裏から出る来牙と美咲。二人が行くその先は……。

来牙×美咲2 ?

二人が歩いて店に着いたその先は、『平沼牧場』という定食屋であった。

「ここがその店か？」

「そうよ」

「定食屋か……俺はてつきり洋食のレストランかと想像していたんだが、随分意外だな……」

「この店長さんとは前からの知り合いで、ちょっとお世話になっていたのよ。」

「へ〜、にしても『平沼牧場』か。牧場って名前がついてるからここは豚肉とか扱っている所か？」

「そ。それも高級な豚肉を使っている有名な所よ。テレビや雑誌なんかでよく紹介されているわ」

「そんな有名な店に俺達が今入るのか？場違いな気がするんだが……」

「いいからいいから。じゃ、入りましょ？」

「お、おい……」

何かと入りづらい来牙であったが、美咲は来牙の心情を気にせず一

緒に店に入った。

店に入った矢先に年配の女性が立っていた。

「いらつしゃいませ。何名様ですか？……って美咲ちゃんじゃない」

「お久しぶりです、店長。お元気そうですね？」

「あたしが元気が無い所を見たことがあるのかい？それにしても久しぶりだね美咲ちゃん。」

何時以来かしら？あんまり来なかったからちよつと寂しかったよ」

「あははは……ちよつといろいろとありまして……」

どうやら美咲と店長と呼ばれている女性は知り合い同士の様であり、久々に再開した雰囲気であった。

「何があつたかは知らないけど元気そうで何よりだね。所で、その彼は美咲ちゃんの彼氏かい？」

年配の女性は来牙に目を向けて美咲に聞いてみた。

「うん。アタシの旦那様でもある人」

「おい、俺は何時からアンタの彼氏で旦那様になった？そんな事実は無いんだが……」

美咲はさも当然の様に言ったが、来牙は断固違つと否定する。

「もう、来牙君ったらノリが悪いんだから。合わせてくれたっていいじゃない」

「俺はただアంతタに付き合わされているだけだからな。そこだけははっきりさせて貰う。」

店長さん、悪いけど俺と美咲はそんな関係じゃ無いからな……」

「その割には仲が良さそうに見えるんだけどねえ……まあいいわ。立ち話もなんだし、

案内するよ。2名様入りまーす!!」

店長の掛け声に厨房から「いらっしやいませー!」と大きな声が返ってきた。

店長に案内される来牙と美咲は奥のテーブルの席に座る。

「へ〜結構いい所だな。俺の思っていた定食屋とは全然違うな。」

「まあ定食屋って来牙君が想像していきそうな所だと思うけど、ここは見た感じ、

レストランみたいな雰囲気だからね」

来牙は辺りを見回して店の中はラーメン屋のような雰囲気かと思っ
ていたが、

高級レストランのような静かとした雰囲気に少々驚く。

そんな来牙に美咲は苦笑しながら、近くのメニュー表を取って捲り来牙に見せた。

「これがこのメニューよ。どれも美味しいけど一番のメインは豚カツ定食ね。」

凄く柔らかくて美味しいのがこの売りなのよ」

丼物でカツ丼もあるわよと付け足す美咲。

「（翔が好みそうな所だな、此処は。けど、あいつがここで食べる所が中々想像できないな……）」

カツが大好きな翔にとって此処は大変いい所であろう。だがしかし、翔はカツを腹一杯食べるから、

食べている最中にあまりの五月蠅さに客の迷惑になるから店長に追い出されるなど来牙は思った。

おまけにここは静かな雰囲気のお店だから、翔の様な騒がしい奴は門前払いされるのが

オチだと容易に想像出来る。

「ねえ？まだ決まらないの？」

美咲はそんな事を考えている来牙を余所にメニューを早く決めて欲しいと催促していた。

「ああ……悪い。じゃあ俺は、アンタの言ってた豚カツ定食にする

か…」

「そう？じゃあアタシは、生姜焼き定食で。以上でお願いします」

「あいよ。豚カツ定食に生姜焼き定食だね。少し時間が掛かるから待ってな」

店長は伝票にメニューを書いて立ち去ろうとするが…。

「あ、そうだ店長？アレってまだあります？」

「ん？…ああアレかい？あるよ。……使う気かい？その彼と」

「ええ。折角あるんでしたら。待つのに丁度いいかと思って」

「分かったよ。直ぐに持って来るように言っておくよ」

「（アレって一体なんだ？）」

美咲と店長はアレと言つのを知っていそうだが、来牙は全く分からなかった。

「楽しみだね、来牙君？」

「（こいつの事だからまた何か考えているな…）」

ニコニコと笑みを浮かべる美咲に少し警戒する来牙。

まあ警戒したところで無駄な事だと諦めている来牙であるが。

「あ。来た来た」

「（一体何なんだ？……って、おい…これは）」

来牙は店員が持ってきたアレをテーブルに置くのを見ると、

それは少し大きめなオレンジジュース入りのグラスだ。

それもハート型のストローが付いているグラス……即ち「カップルドリンク」であった。

「（ま、まさかこれを飲むのか？俺と美咲が一緒に？）」

冗談だと思って欲しいと来牙は思ったが…。

「……おい、ここは定食屋なのに何でこんな物があるんだ？」

「細かい事は気にしない気にしない！さ、一緒に飲みましょ？来牙君？」

「（やっぱり一緒に飲むのか……）」

結局飲むことになり、ガクツと頭にテーブルをぶつけるのであった。

「どうしたの？ 飲まないの？」

「……本気でこれを飲むのか？ ……アンタと一緒に？」

「飲む為に頼んだんだからここに置いてあるんでしょ？ さ、飲もうっ」

「……………」

美咲はストローに口を付けて吸い込んでいた。

本当だったら断ると言いたい来牙であったが、ここで下手に断ると美咲が何かを

仕出かしそうな気がした。

来牙は敢えて何も言わずにもう一つのストローの方に口を付ける。

「うーん。やっぱり恋人同士で飲むのはこれでなくっちゃ！」

「（だから恋人同士じゃ無いってのに……………」

カップドリンクを飲んでいる来牙と美咲に店長は二人を見て「おあついね〜」と冷やかされていた。

美咲は満更でもない表情になり、来牙はただ黙ってジュースを飲んでいった。

おまけ

来牙が美咲とデートしている時……………。

「ん!?!?」

絵梨がバイト中に胸騒ぎがした。

「(な…何？ 今何か途轍もなく嫌な予感が…まるであたしの大事な物が誰かに

奪われるような気が…それと同時に誰かがあたしを嘲笑っているような…)」

「あ…あの〜？ お釣りはまだですか？」

「え？ あ…す…すいません！」

絵梨はお客に声を掛けられると、すぐバイトに専念したのであった。

来牙×美咲2 ? (後書き)

美咲に言い包められる来牙でした〜〜!!!!

来牙×美咲2 ? (前書き)

では次に来牙が美咲を段々意識してくるお話です。

来牙×美咲2 ?

定食屋で昼食を終えた来牙と美咲はゲームセンターにいた。

ゲームセンターに行く道中に、来牙は少々疲れきった顔をしており、美咲はずっと笑顔で来牙にくっ付いていた。

「どうしたの来牙君？疲れている様な顔をして」

「そうさせたのはアンタだからな……………」

来牙がこういう状態になっているのには勿論理由がある。

それは…………。

定食屋で飯を食べている最中に、美咲が一切れの肉を箸でつまんで…………。

「来牙君、あーんして？」

と来牙に食べさせようとしたのだ。

無論、来牙は丁重に断ろうとしたが、美咲が食べてくれないからか泣きそうな

表情をしており、それを見た店長がギロツ！と来牙を睨んできたのだ。

店長は美咲を自分の娘の様に可愛がっているから、その美咲が泣いている所を

見ると黙ってはいない人なのである。

来牙は店長からの強烈な視線に耐えられなかったので、来牙は仕方なく食べた。

他にも、美咲は来牙の口に付いていた一つの御飯粒を取ってパケツと食べたり、

食べ終わった後に来牙の口の周りをティッシュで拭いたりといろいろな事をやっていた。

見ててイチャ付いてるバカップルにしか見えなく、それらによって来牙は疲れきっている

表情になっていたのであった。

(男としては大変羨ましい状況なんですけどねえ〜 byさすらいの旅人)

現在、来牙と美咲は揃ってガンシューティングゲームをしている。

終了間際であるが、二人はとても息の合ったコンビネーションで楽々とステージを

クリアし、ハイスコアを出していた。

「ねえ来牙君、丁度よく終わったから休憩しない？」

「ああ、いいぞ」

そしてガンシューティングを終えた二人は、近くのイスに座る事にした。

「やるじゃない、来牙君」

「そういうアンタもな。俺が撃とうとしている所をよく分かったな」

「来牙君だったらず必ずここに撃ちそうだなと思って、別の所を撃っているだけよ？」

「けどアンタがそこを撃ってくれるお陰で、俺は安心して次の行動に移れるわけだ」

「もしかして、愛の力ってやつ？」

「調子にのるな」

「いたっ！」

来牙は右の人差し指で美咲の額をコツンと突く。

「痛いじゃない。あゝあ、痣が出来たかも……」

「安心しろ、そんなに強く突いて無いから」

「いゝえ、凄く痛かったです。確定です。乙女の柔肌を傷付けた来牙君には損害賠償を請求します」

「……はあ……」

あ〜だこ〜だと言って来る美咲に来牙は溜息をつく。

「…分かった。俺が悪かったから許してくれ（ナデナデ）」

と来牙は右手で美咲の頭を撫でた。

「はふう〜〜〜…何か気持ちいい〜〜〜」

「そうか？」

「うん、もっと続けて。そうしたら許してあげる」

「はいはい…（ナデナデ）」

来牙は言われたとおり頭を撫で続けると、美咲は気持ちよくなっている為か

来牙の肩に寄り添う。

「はふう〜〜〜。来牙君って撫でるの上手だね。凄く気持ちよかったですよ」

「反応が絵梨みたいだな…（それに加えて可愛いな…）」

「絵梨ちゃんにいつも撫でているの？」

「そんなにしてない。褒めたり、宥めている時にしかやってない」

「ふうん……（もしかして絵梨ちゃんとエッチする前や後にもやっていたりして……）」

美咲の考えは間違っではないなかった。来牙は以前に絵梨の頭を撫でて気持ち

良さそうな顔をしていると欲情する事がある。その後は完全にケダモノ状態に

なっていたけど（笑）。

「ねえ来牙君。何か疲れてきちゃった。もう出ない？」

「ん？ ああ、アンタがそう言うんだったら構わないが……」

二人はゲームセンターから出ると、街中を少し歩いていた。

当然、美咲がまた来牙にくっ付いている状態である。

「で、どうする？ 疲れたんだったら、もう帰るか？」

「ううん、もう一つ寄りたい所があるの……」

「疲れているのに大丈夫なのか？」

「うん。そこは休むのに最適な所だし」

「そうか。じゃあ、案内は任せるよ」

「ふふっ……」

来牙は肯定すると美咲はクスツと笑う。

まさかこれが最後の段階だと知らずに……。

「……………」

目的地に着くと来牙は目の前の看板に絶句する。

「……」

「……おい……待て……」

ホテルであった。但し、ラブホテルであるが。

「さ、入りますよ」

「ちょ……ちょっと待て……！アンタが言ってた休むのに最適な所って……！」

「だ・か・ら、……」

「か、勘弁してくれ……！俺とアンタはそんな関係じゃないだろ……！」

「でもエッチした仲だけど？」

「そ…そうだとしても、お…俺には絵梨がいるから駄目だ…っ
ておい！」

来牙は美咲に入らないと拒否をしているが、美咲は再び来牙に抱きつく。

「ねえ…来牙君？…アタシと入るのイヤ？…」

美咲は頬を赤らめ上目遣いで来牙に聞く。

「だ…だから…」

本当だったら拒否するはずが何故か拒めなかった。むしろ入りたいという思いが

強まっている。美咲の胸元を見ながら。

「……………（ゴクッ）」

来牙は美咲に抱きつかれている時に腕に当たっていた美咲の胸の感触を

思い出し始める。ここまで歩いている最中に美咲は来牙に終始抱きついていた…

それも自分の胸を来牙の腕に押し当てながら。薄い黒のワンピースを着ていた為、

胸の感触が十分に伝わっている事は来牙も当然それに気付いており、最初は美咲の胸に当たっている時は少し困っていた。

しかし、何回もやられていた為か、来牙も段々と美咲の胸の感触を楽しみ始めて

チラチラと美咲の胸元を見始めていた。

そして、美咲に正面から抱き付かれている来牙はどうするか悩んでいたが……。

「大丈夫よ。休むだけだから…ね？」

「……………本当にそれだけ何だな？…信じていいんだな？…」

「うん…………アタシからは何もしないから…」（ここ重要だからね！！）

「……………分かった。ホントに休むだけだから…」

美咲の願いを聞き入れてしまうのであった。

「…ありがとう。来牙君（チュッ）」

美咲は来牙の頬にキスをしてお礼を言い、来牙と一緒にラブホテルに入った。

ラブホテルに入ると……

「いらつしやいませ。休憩ですか？ お泊りですか？」

受付先には初老の男性であるホテルの支配人がいた。

「休憩でお願いします」

「かしこまりました。では、お部屋を決める前にこのくじをお引き下さい」

美咲が対応すると、支配人は真ん中に穴が開いている箱を取り出す。

「くじって、何かあるんですか？」

「お客様が本日100人目のご来店ですので、くじを引く事になっています。」

これには“ A ” “ G ” のアルファベットと“ V I P ” と書かれた紙が入っており、

その中のどれかを引くと部屋のランクが決まり、無料でご案内する仕組みとなっております

おります。因みにコレにはハズレは入っていませんのでご安心下さい」

「へ〜そんなのがあるんですか。アタシ達ラッキーだったね来牙君」
「……まあそうだな……」

美咲の質問に支配人は説明をすると、美咲は運が良かったと喜ぶが、来牙は釈然としない。

「どちらがお引きになりますか？」

「来牙君、どうする？」

「……アンタが引いてくれ。俺はどの部屋でもいい」

「ほんと？ じゃあアタシが引きまーす！」

「ではお願いします」

「（ゴソゴソ）えっとな〜……コレだ！」

美咲はくじを引くと、出てきた紙は「VIP」と書かれている紙だった。

「うそ！？VIPだって……」

「すごいなアンタ……」

「おめでとございませう。それではVIPルームへのご案内致しますので、此方へどうぞ」

支配人は部屋の案内をする為に先に進むと、来牙と美咲は支配人の

後に付いて行く。

「ホント、今日はついてるね。来牙君と初めていくホテルでVIP何て」

「……………そうだな……………」

来牙は美咲がくじを引くときに何かイカサマをしたのでは無いかと少し勘ぐったが

杞憂だと思った。このホテルで運良く100人目の来店であり、突然くじが

出てきたのだから、美咲がすぐにイカサマは出来ないだろうと自己完結する。

……………しかし、来牙はまだ知らない。何故、美咲がデート向きとは思えない

あの定食屋に行ったのかを……………

来牙×美咲2 ? (前書き)

今回はいつもより長めです。それではどうぞー!!

来牙×美咲2 ?

支配人に案内されて部屋に着いた来牙と美咲。

「此方です。どうぞお入りください」

「ありがとうございます。じゃ、入ろっか来牙君？」

「ああ……」

「あ、鍵はアタシが貰っておくから先に入ってて」

「分かった」

支配人がドアを開けて二人は入ろうとしたが、美咲は

鍵を貰う為にその場で留まり、来牙は先に入った。

「こちらが鍵です。お部屋を出る際には閉めておいて下さい」

「はい、分かりました。……所で……」

支配人から鍵を受け取った美咲が来牙がいないのを確認すると、

小声で支配人の耳元で呟いた。

「協力してくれてありがとう……おじさん」

「いえいえ、あの人から連絡が来て話を聞いたときには驚きました

が、美咲ちゃんの為でしたらこれくらいお安い御用ですよ。」

実はこの支配人、定食屋の店長と同様に美咲の知り合いであり、何故こう言う話をしているのかと疑問に思つてある。

それは来牙と美咲が定食屋から出た後の事……。

……

「あ、ごめん来牙君。アタシ、店の中で腕時計置いてたの忘れてた。ちよつと待つててくれる？」

「ああ、待つてるから早く取つてきな」

「ありがとう」

腕時計を取つて来るために美咲は再度、定食屋に入った。

「どうしたんだい？美咲ちゃん。忘れ物かい？」

「うん。腕時計を置き忘れてて……」

「腕時計かい？じゃあ取つてくるからちよつと待つてな」

店長が来牙と美咲が座っていたテーブルに行くと、何故か美咲も付いてくる。

くまなく探す店長であったが、結局腕時計を見つける事が出来なかった。

「腕時計なんて何処にも無いじゃないか…」

「実はここに…(チラッ)」

美咲がポケットの中から腕時計を取り出した。

「何だい？持っていたんならどうして…」

「店長に頼みたい事があります」

「頼み？」

「はい。実は……………ちょっとお耳を」

「？」

「(ボソボソ)……………」

店長は言われたとおりに耳を美咲の方に傾けると、美咲は店長に耳打ちをして

ある事を頼んだ。それを聞いた店長はニマーツと笑みを浮かべる。

「ほほう。あの彼とあそこに行くのかい？」

「うん…だから店長に頼みたくて……………」

「分かったよ。だったら今からアタシの方で手配しておくよ」

「ありがとうございます」

店長の気遣いに美咲は礼を言う。

「それにしても、美咲ちゃんがあのとラブホテルに行くとは……

よっばあの子の事が好きなんだねえ」

「……………」

美咲は顔を赤らめて俯いていたが、店長は美咲の初々しい顔に納得する。

「じゃあ支配人には連絡しておくから、美咲ちゃんはもう行きな。

これ以上長居すると怪しまれるからね」

「ありがとうございます、店長。では（スタスタ）」

店長は美咲が店を出て、来牙と一緒に歩いていったのを確認すると、携帯でラブホテルの支配人に電話をした。

「もしもし、今大丈夫かい？アンタにちょっと頼みたい事があるんだけど……………」

店長は繋がったのを確認をすると、支配人に粗方の説明をすると……。

《分かりました、では後は此方にお任せ下さい》

聞いた支配人は快く引き受けたのであった。

「さ、彼が待っていますよ?」

「うん。おじさん、ホントにありがとう」

「では、ごゆっくり」

美咲はドアを閉めると、支配人はちょっと複雑な顔をした。

「(まさかあの子がこんなに早くここに来るとは思いませんでした。

まあ、それだけあの彼に相当惚れ込んでいると言う事ですかね……)」

支配人も定食屋の店長と同じく、美咲を自分の娘の様に

可愛がっている一人である。最初、店長から聞いたときは

美咲に好きな男が?!と驚いた。それは娘を取られた父親の様な

心境では無く、過去を思い出したかのようであった。

「(昔の私と貴方を思い出しましたね……さて、戻るとしますか)」

昔、支配人は定食屋の店長と何かあったようだが、仕事に戻らなければと思ひ、

受付へと向かった。

「すごいな……流石VIPと呼ばれるだけの事はあるな。」

「お偉いさん達が泊まりそうな所だな」

VIPクラスの部屋に入った来牙は辺りを見渡すとあまりの豪華さに驚いた。

「お？ゲームもあるみたいだな。あ…これ、『ガオ』で見たやつだな。」

「それにこれも……丁度いい、買う前にここでやってみるか」

来牙はテレビの近くにあったゲーム機を見つけると、『ガオ』でどれを買うかと

悩んでいたゲームがあったので今すぐやってみようと思った。

「へー凄い部屋だね〜ここ」

来牙がゲームをやるうとした矢先に美咲が来た。

「ん？ 美咲か。鍵を貰うにしてはちよつと遅かったな…」

「支配人が部屋を使用する際の注意点の説明をされたから、ちよつと遅かったのよ」

「ふうん。どんな説明だ？」

「家具や機材を壊したら弁償してもらうとか、部屋を出る際に鍵を閉め忘れないようにとかいろいろね…」

「まあ、普通はそうだろうな」

来牙は美咲が来るのが遅かったので、何かをやっていたのではないかと疑問を感じ

理由を聞いてみたが、すぐに納得した。

部屋の注意点を説明するのは支配人として当然の事だろうと思い、ゲームをやる準備をする。

「（やはり俺の思い過ごしか……）」

「どうしたの？」

「いや、何でもない。所で、アンタが此処で休むんだったら、俺はここでゲームでもしているよ」

「そう。じゃあアタシは疲れを取る為に、ちょっとシャワー浴びてくるね。来牙君も一緒に入る？」

「遠慮する。俺は今すぐにゲームをやりたいから」

「つれない返事ね…まあ、いいけど」

美咲は来牙のあっさりとした返事に少し残念だったが、浴室に向かった。

「さて、やってみるか」

来牙はテレビをつけると、ゲームを起動させてコントローラーを持ち、ゲームを始めた。

…………… 美咲は服を脱いで浴室に入ると直ぐにシャワーを浴びた。

「（さて、ここからが本番ね…）」

いつもより体を入念に洗っていた。まるでこの後、来牙とエッチするかのよう……

「（ああ…今度は来牙君を独り占め出来る……体が熱くなって…ああ…ダメ……今は我慢しなきゃ…）」

美咲は来牙との行為をして以来、来牙を思いながら体が火照る日々がよく続いていた。

その時は一人で何度も何度も自身の体を鎮めても、あまり解消はされず

不完全燃焼だった。しかし今度は絵梨がいなく来牙を自分だけの物に出来ると思うと、

今まで以上に体が火照り、自分でも抑えきれない程に体が来牙を欲している。

「（……落ち着いて……ここでアタシから動いたらダメ……来牙君からしてもらわないと……）」

自身に言い聞かせている様に心を落ち着かせる美咲は、シャワーを一通り浴びて

浴室から出る。下着類を一切穿かずに大き目のワイシャツだけを着て、

来牙の方へと向かった。

「……何だ、思っていた以上に大した事ないな。これはすぐに買わないで正解だったな」

ゲームをやっている来牙は、あまり面白い物では無かった為か、少々不満気味であった。

「どうやら一人で買おうとすると、ハズレを引く可能性が高いな。やっぱり今度から絵梨と一緒に買おうとするか……（ガチャ）ん？」

来牙は次回は必ず絵梨と一緒に買おうと思っていた時に、ドアが開く音が聞こえたので

目を向けると、そこには大き目のYシャツだけを着了た美咲がいた。

「……!!(バッ!)」

来牙は美咲の少しはだけている胸元とすらりとした太ももを見た途端に、

すぐテレビの方へと目を向ける。

「……………美咲、その格好は何だ?」

「Yシャツだけど、それがどうかしたの?」

「違う…何故その格好をしているのかと聞いている…」

「アタシが着ている服は今洗濯に出しているから、代わりにこれを着ているのよ」

「……………そうか…(だからってその格好は俺としては困るんだが…)」
質問に淡々と答える美咲に理解はしたが、とても納得出来ない来牙であった。

「ふふふ…そんなに照れなくてもいいのに。アタシ達、エッチした仲なのに恥ずかしがる必要無いじゃない」

「そうだとしても、アンタの格好は俺には目の毒だ…他に着る物は無いのか?出来ればそれ以外の物を来て欲しい…」

「生憎、探してみたけどこれしかなかったのよ……………そ・れ・に……………」

美咲は背後から来牙に抱きつきながら耳元で呟く。

「お…おい!」

「来牙君もシャワー浴びたら? さっぱりするわよ」

「い…いや…お…俺はいい。それより…離れてくれ。話が違うぞ。アンタは何もしないって…」

「確かに何も言わなかったけど、それはあくまでエッチな事だけよ。あたしはただ来牙君に抱きついていていただけなんだから」

「だ…だからってこれは…」

「ふふふ…来牙君ってホントにかわいい…ハアッ…」

「?! (…マ…マズイ…)」

美咲は来牙の耳元で息を吹きかけると、来牙はドキッとして理性が崩壊しそうだった。

これが翔だったら、背中から抱き付かれている美咲の胸の感触だけではなく、

甘い声で呟きながら耳元に息を吹きかけているなんて事をされたら間違いなく

ルパンダイブをするだろう。

「あれ？来牙君……大きくなってる……今度は生理現象って言い訳は通じないわね……」

「……！……こ、これは……」

「ら・い・が・く・ん？……我慢出来ないならいいよ……アタシは来牙君に何をされてもいいし……」

「……（だ……駄目だ！……俺には絵梨が……）」

美咲の誘惑に未だに抵抗する来牙。

そんな来牙を美咲は正面に回って、来牙を押し倒す。

「み、美咲！これ以上はルール違反だろ！？」

「え？……アタシはただ……来牙君の顔を見ているだけよ……」

「（……！……み……美咲の胸が……ゴクッ……）」

来牙はYシャツからはだけた美咲の胸を見て唾を飲み、息も少し荒くなりかけた。

頭の中では絵梨がいるからここは離れなければいけない自分と、ここで美咲を

味わいつくそうという自分が必死に戦っていた。今は後者に俯きかけているが。

美咲はそんな来牙の考えをお見通しかの様に、来牙の顔を近づけて

最後の言葉を呟く。

「来牙君、アタシ…もう我慢できないの。して…来牙君…アタシを抱いて…来牙君しか考えられなくなっちゃう位…メチャクチャにして…」

「……………美咲!!」

「ん?!…んむ…んん…」

来牙は美咲の最後の言葉に火が付いたのか、美咲の頭を掴んでキスをした。

美咲も来牙のキスに応える為に、抱きついた。

チュプ…チュパ…ペチヨ…チュプ

舌が絡み合う音がしばらく続いていた。

キスを終わると来牙は美咲をベッドまで運び、Yシャツをひん剥かせた。

「はあ…はあ…はあ…美咲、覚悟しろよ」

「はあ…はあ…来牙君…きてえ…」

そして二人は激しく求め合うかのように何度も何度もエッチしていた。

1時間後……………

ベッドで来牙と美咲が互いに横になっていた。

それも裸で。

「ふふふ、来牙君ってすごいね。この前以上に激しかったわ」

「（どうしてこんな事になっちまったんだ？……………）」

満面の笑みを浮かべている美咲と頭の中で自問自答している来牙。

来牙はエッチを終えてようやく正気に戻ると自己嫌悪に陥っていた。

「どうしたの？…来牙君」

「……………俺は絵梨がいながら」

「来牙君、もしかして後悔してる？」

「……………」

美咲が声をかけても何も言わない来牙。

「でもね来牙君、アタシは後悔してないからね」

「え？」

来牙は美咲の方に顔を向けると、美咲は顔を天井に向けながら語る。

「アタシもさ、こんなやり方で来牙君をここに誘ったのは間違っていると思う。けど、こうでもしないと来牙君はアタシを見てくれそうに無いからこんな手段を使っただってわけ。」

「……………」

「アタシね、来牙君とデートしている時、すっごく嬉しかった。大好きな来牙君と一緒に御飯を食べて、一緒にゲームをして、ここで来牙君に抱かれて、アタシの心は幸せで埋め尽くされた。大好きな来牙君だからアタシは……………」

「……………」

美咲が自身の心情を語っている来牙は何も言わずに黙って聞いていた。

「……………なーんてね……って、何その顔？」

「美咲……………俺は……………」

「はいストップ」

「んん？」

美咲は来牙が何を言うのかを予想したので、右手の人差し指で来牙

の唇に触れる。

「そこから先は言わなくていいわ。大体予想付くから」

「……………」

「何も言わないで。全部アタシが勝手にやった事だから、来牙君は責任を感じる必要は無いわ」

「……………分かった」

来牙はここで何も言っても美咲に止められるだろうと思ったので、
敢えて何も言わなかった。

「じゃ、そろそろ出ますか。その前に、シャワー浴びないとね」

「…そうだな」

来牙と美咲は部屋を出る準備をする為、シャワーを浴びた。

一緒にではなく別々で。

夕方になり、ラブホテルから出た来牙と美咲は無言で歩いていた。

少し距離をとった状態で。

そんな雰囲気にならなかつた来牙は美咲に声をかける。

「……………美咲」

「……………何？」

「……………」

美咲は来牙の方に顔を向けると、来牙は無言で左腕を美咲の方へ向けた。

「……………え？」

「……………アンタと離れて歩くと妙に落ち着かなくなつてな……………どうした？抱きつかないのか？」

「……………いいの？嫌だつたんでしょ？」

「とてもアンタの台詞とは思えないな。それに……………俺は別に嫌だと思つてない。むしろ……………」

来牙はこれ以上何も言わなかつた。

そんな来牙に美咲は……………。

「……………ありがとう、来牙君」

来牙に感謝して抱きついた。

「じゃ、ここでお別れね。楽しかったわ、来牙君」

「ああ、俺もだ」

歩く方向が違うのか二人は交差点で立ち止まる。

「…………でも、これだけは言わせて」

「何だ？」

「…………来牙君！！」

「！？」

美咲は急に来牙に抱き付き、来牙は咄嗟の事で動けなかった。

「来牙君。アタシ、来牙君が好き…大好き！！ この地球上の誰よりも来牙君が大好き！！」

「……………」

美咲の突然の告白に来牙は呆然とした。

「これ、一度言ってみたかったの。恥ずかしいけど…」

「……………美咲」

「え？ 来牙君…んん!？」

来牙は美咲にキスをした……………ソフトなやさしいキスを。

「……………どうしたの?いきなり……………」

「美咲…俺は今でも絵梨が好きだ。けど……………」

「…けど?」

「俺も…アンタの事は好きだ……………」

「……………」

来牙の突然の告白に美咲は何も言わなかった。

「…男として最低だな俺は。絵梨も美咲も好きだ何て……………」

優柔不断だなと来牙は自身で罵る。

「……………ヒック…ヒック……………」

「ど、どうした?どこか痛いのか?」

美咲がいきなり泣いたので来牙はどこか痛くしたのかと思った。

「うつん……………違うの…アタシ…嬉しくて……………涙が……………」

「……………美咲」

「来牙君…しばらく…このままでいさせて…」

「……………分かった」

来牙と美咲はしばらく抱き合っていた。

それから二人は分かれてそれぞれの帰る場所に戻ったとき。

来牙×美咲2 ? (後書き)

以上、“来牙と美咲2”のカップリングでした〜!!!!

今回は宮永源三のお仕置きに入らせて頂きます。

地獄の幻想……ってマロさん、覚えていますかな？

宮永源三 地獄の幻想へ直行（前書き）

今回は宮永源三へのお仕置きです。

短いですけど、中身は十分に濃いです!!!

大変恐ろしいお仕置きですので、見たく無いと思われましたらスル
ーして下さい。

宮永源三 地獄の幻想へ直行

宮永源三はある場所へと向かっていた。

「ほほう、此処が噂に聞く美女たちがいる喫茶店か……ではお手並み拝見と行こうかのう」

カランカラン！

とある喫茶店に入った源三がその目に入ったのは……

「……………いらっしやいませ。おじい様、^{ハート}本日は真心を込めてご奉仕させて頂きますわ！」「……………」

妖艶なポーズを取った気持ち悪いオカマ口調で言うバニーガール姿の

学園長・鉄人・根本・常村・夏川だ！！！（全員化粧付き）

「……………！！（ダツ……………）」

「……………（サツ……………）何処へ行くのですかあ……………？」

それを見た源三は逃げようとしたが、すぐ5人に囲まれてしまった。

「な……………何じゃ貴様等は！？そこをどけい……………！」

源三は何とか逃げようと必死に抵抗していたが……………。

「おじいさま、いきなり逃げるなんてひどいですわ（上目使い）」

「!!!! うぷっ!!」

学園長が艶やかな声で言うと抵抗を止めて吐きそうな顔になった。

「本日は真心を込めてサービスさせて頂きますわ。ブチュッ!」

「%『&』%,\$%&,’』%&（）!!!!!!（ジ
タバタジタバタ!!!!!!）」

源三の唇に濃厚なキス（舌を絡める程の）をする学園長に、源三は抵抗するが……。

「私もサービスしますわ、おじいさま。チュ!」

「%,\$%+#/%-+!!!!!!!!!!!!」

左右の頬にキスをする常村・夏川に更にダメージが加わり……。

「おじいさま、本日はたっぷりご奉仕しますわ、ふう・」

「#『%』&\$%』&』（）!!!!!!!!!!!!
!!!!!!」

背後から源三に抱きつかれて耳元で吹きかける根本に完全に動きが止まる。

そして4人は源三から離れて……

「おじいさん、私のサービスはこれですわ、えい!ばぶばぶ!」

「『&、\$』&『\$#&』『』、『』%&）!!!!!!!!!!!!!!」

源三の顔に逞しい胸板を当てる鉄人に、源三は再び抵抗しようと思いき出すが……。

「『『『ああん!!私も!!パフパフ!!』』』」

負けじと源三にはふぱふをする4人（学園長・根本・常村・夏川）に昇天されてしまった。

5人は一斉に……。

「『『『さあおじいさま、ご堪能ください。』』』」

と言われて、源三は幸せに逝きましたとさ……。

宮永源三 地獄の幻想へ直行（後書き）

大変気持ち悪すぎるお仕置きでした~~~~!!!!

翔×工藤（前書き）

来牙のカップリングばかりでしたので、今回は翔のカップリングを出します。

短いですがどうぞー！！

「なあ、ホントに大丈夫なのか？」

「平気平気。この時間帯に先生が見回りに来る事は絶対に無いから」

「ならいいんだけどな……」

ここは文月学園のプール場。しかも真夜中である。

その真夜中のプール場に二人の水着姿の男女がいた。

遊佐翔と工藤愛子の二人である。

なぜこの二人がここにいる敬意に関しては割愛させて頂く（あくまでIFなので）。

まあ早い話、工藤が翔に夜のプール場に行こうと誘ったのだ。

「ま、愛子と二人つきりになればどこでもいいが………それに、こんな真夜中に泳ぐのもいいかもしれないな」

「うん、素直でよろしい。じゃあ、今度はクロールで競争する？」

工藤の提案に翔は……。

「いいぜ。サッカー部の俺様が水泳部の愛子に勝ったら自慢できそ

うだな」

やる気満々であった。

「そう簡単に勝てると思わないでね。じゃあスタート位置に着いて
つと……」

翔と工藤はスタート位置に着く。

「合図はボクが出すけどいい?」

「構わないぜ。その代わり、俺様が勝つたら言う事一つ聞いてもら
うからな」

「ボクに勝てたらの話だけどね。それじゃあ行くよ?

「何時でもいいぜ」

翔がすぐに泳げるように構えるのを確認した工藤は……。

「よーい………スタート!(ザパアン!!!)」

掛け声と同時にプールに飛び込むと、翔も同時に飛び込んだ。

「デリヤアアア~~~~!!!!(ザバザバザバ!!!)」

「フフ〜ン やるね翔君 (ザバザバザバ!!!)」

最初は互角だったと思いきや、工藤がドンドン差を広げ始めて翔を
突き放そうとしていた。だが翔も負けじと追い抜こうとしたのだが

……。

「ボクの勝ち〜」

結果として壁に手を付いた勝者は工藤であった。

「プハッ！ あ〜くそ〜！ 負けちゃった。もう一息だったんだけどな〜」

「すごいね〜翔君。危ない所だったよ。もしかしたら負けてたかもしないね」

翔はすごく悔しそうな表情をして左手で頭を搔いており、工藤は勝ちましたが翔の猛攻にヒヤリとしていた。

「よせよ。負けた事に変わりはないんだから」

「翔君にしては珍しく謙遜だね。まあいいけど。所でさあ〜……」

「ん？」

工藤はすぐに話題を変えて……。

「翔君が勝つたら何をするつもりだったの？」

いきなり翔に勝つたらどうするかを聞き出す。

「負けたんだから、聞いたところで意味無いだろ？」

「一応参考までに聞いておこうかと思ってね。ねえ、お・し・え・

て？」

翔に近づこうとする工藤。翔は一瞬ニヤツと笑みを浮かべて工藤に近づく。

「それはな……近づけるつもりだったんだよ！（ギョウツ）」

「え？キヤツ！……んむう？！」

翔は工藤に抱きついてそのままキスをする。

工藤はいきなりの事に戸惑って翔から離れようとしたが、翔が逃がすまいと強く抱きしめてキスを続けると更に舌を絡ませた。

「ん……チュ……チュプ……んんん……」

工藤は翔のキスで気持ちよくなってきているのか、翔に抱きつく様な体勢になり始める。

チュプ…チュパ…ペチョ…チュプ

「んあ……あむ……」

「（いい声だ……）」

舌が絡み合う音がしばらく続けると、翔は工藤の漏らす甘い声を聞いて満足していた。

「はあ…はあ…はあ…ずるい、いきなりキスする何て……」

「そう言う割には随分気持ちよさそうな顔してたじゃないか」

キスを終えて抱きついたまま工藤は頬を赤らめて少々息が上がっており、翔はしてやったりの表情をしていた。

「だ…だって、翔君がキスするから……」

「元はと言えば、愛子が何をするか聞きたかったからこうしたんだが………それよりどうする？このまま続けるか？……それとも止めるか？」

「………翔君のバカ…ボクをこんなにエッチな気分させておいて……翔君だってこんなに……ホントに止めるの？」

「一応聞いたただけだ。俺様がここで止めるわけ無いだろ………それに、もう我慢出来ない……」

「うん、ボクも我慢出来なくなってきた………ねえ、するんならプールから上がって………しよ？」

「そうだな。ここじゃちょっとやりづらいからな」

そしてプールから上がる翔と工藤は上がり………。

「そらっ」

「ああん！」

翔は工藤の胸を揉みながら押し倒す。

工藤は待ってたと言わんばかりに翔に抱きつき、キスをして舌を絡める。

「んん……んちゅ……んん……はあ……はあ……翔君……して……ボクが満足するまで止めないで……」

「言われなくてもそのつもりだ。何度でも天国に行かせてやるよ」

「ああ……はやくう……」

二人は激しく求め合うかのように何度も何度もエッチしていましたとわ。

翔×工藤（後書き）

少しエッチなカップリングでした〜！！！！

グレートレンジャー 地獄の幻想（前書き）

これはグレートレンジャーが恐ろしい目に遭ったと言ったお話です。

どほどほど

グレートレンジャー 地獄の幻想

想像せよ！！！！！

今日も平和（迷惑行為）のために悪（警察官）を倒したグレートレンジャー達。

「ほっほっほっほ！ 悪人を成敗すると気持ちいいのう！」

「全くだぜ！ あそこで俺様の一撃が決まらなければ斃せなかったがな……」

「何を言ってるでござるか食い太郎殿！ 拙者が一撃を繰り出さなければ斃せなかったでござろうが！？」

「違うぜ！ ミーのマツハアタックが悪を斃したんだぜ！」

「悪人を斃したのはワシじゃ！！ 断じて貴様等ではない！！」

何やら自分達が悪（警察官）を斃したと誇張していた。

「ふんっ！ まあいいわい、誰が斃そうともワシ等がいれば無敵じやと言う事には変わらないのじゃ！！」

「そうだ源三！！ 俺達が最強無敵だ！！」

「ミー達の前に敵はナッシングー！！」

「世界なんかあつと言つ間に狙えるでござるからな！！」

「美女達に拙者の英雄譚を聞かせるでござる！！」

かくしてグレートレンジャーはハーレム喫茶へと向かったのであった。

そして目的地に着いたグレートレンジャー達はハーレム喫茶に入る。

そこに入ると煙の先にいたのは、袖と裾がかなり短めのチャイナドレス着たたくさんの美女達（？）が勢ぞろいしていた。

「グレートレンジャーの皆様、本日もいらっしやいませ」

カナリアの様に美しい声を出したのは美女達（？）と、同様のチャイナドレスを着た当店の金髪美人？の店長が前に出た。

「うむ、では今日も宴を頼むぞい。それにしてもお主の声は本当に美しいのう」

「ああ、相変わらず美しい声だぜ」

「うむうむ、店長の声を聞くたびに癒されるでござる」

「ハニー、俺ノプロポーズ受け取ッテクレヨ」

「ありがとうございます。それでは此方へどうぞ。」

マツハ吉田のセリフを無視して特等席に案内する店長。

店長に案内されたグレートレンジャーは……。

「どっこしよつと！ さあ〜宴じゃ宴じゃー！」

「いつも悪いなあ、姉ちゃん達ー！」

「気分はサイコーダゼー！」

「では今から拙者の英雄譚を聞かせるでござる」

「~~~~ステキイ~~~~！！！！」

グレートレンジャー達が席に座った途端に美女達(?)が4人を囲んだ……まるで逃がさないかの様に。

「グレートレンジャーの皆様、先ずは一杯飲もうではありませんか」
金髪美人(?)の店長が酒の入ったグラスをテーブルに置くと……。

「そうじゃな、では此処はワシが乾杯の音頭を……」

「待て源三ー！！ 此処は俺様だろうがー！！」

「ナニヲイツテルネー！！ ミーがやるべきダロウー！！」

「こっちは拙者がー！！」

「でしたら私が乾杯の音頭をとらせて頂きますわ、それなら宜しいですか？」

急に言い争いになるグレートレンジャーに金髪美人(?)の店長が宥めながら乾杯すると言う。

「う…うむ、仕方ないのう」

「ここはアンタに譲るぜ」

「アナタなら文句はナッシングー!!」

「ではお願いするどいぢやぬ」

「それでは……グレートレンジャーの皆様……」

「くくくくくくかんぱ〜〜〜〜い!!……!!」(カントツ)「くくくくく」

店にいる全員がグレートレンジャーを称えるかのように乾杯をしたのであった。

「くくくく(ゴクゴク)……………ZZZZZZZZ」

飲んで早々にグレートレンジャーが酒を飲んで寝てしまったのであった。

グレートレンジャー 地獄の幻想（後書き）

大変迷惑なグレートレンジャーには死を！！ でした~~~~！！！！！！

来牙×絵梨2+ (前書き)

再び来牙と絵梨のカップリングです。

それではどうぞー！

来牙×絵梨2+

ここは文月学園の男子更衣室である。

昼休みの最中、二人の男女……………宮永来牙と絵梨である。

「全く。何度も学校に忍び込むなって前に言っただろ。それにまた、制服着ているし……………」

「やっぱり此処に入るには、この格好じゃないと怪しまれるからね。鉄人先生の目を盗むのに苦労したけど……………」

「それ以前に絵梨。お前バイトはどうした？」

「今日は休みだったの。家にいるのも退屈だったから来牙君に会いに学校に来たってわけ」

「……………」

来牙は絵梨の返答に呆れた視線を送るが、絵梨は全く気にしていなかった。

「（しかしまた来るとは予想外だったな）」

絵梨が時々、突発的な行動を起こすのはよく知ってるが、まさかまた学園に忍び込むとは思わなかった。

とは言っても別に来牙は絵梨を絶対に追い出そうとは思わないので、

見付からなければいいかと考える。

そんな来牙に絵梨は来牙にいきなり抱きつく。

「おい…何のつもりだ？」

「来牙君、今あたしをどうやって学園から追い出そうかと考えてたでしょ？」

「別にそこまで考えていない。俺はただ鉄人に見付かってもどうなっても知らんぞと思ってるだけだ」

「あたしは来牙君の妹だから、鉄人先生もそれ位は許容してくれてもいいと思うんだけどな」

「そんな事を主張した所で、学園の生徒じゃないお前は不審者に変わりないからな」

「……………来牙君の意地悪」

来牙の突っ込みに絵梨はちよつと苦い顔をする。

「で、今日は何しに学園に来たんだ？」

来牙の問いに絵梨は……………。

「……………ねえ、来牙君……………」

「ん？……………っつておい！？」

来牙を押し倒した途端に今度はキスをした。

「んん……んんん……んちゅ……」

「ん……んちゅ……ちゅぷ……はあ……はあ……」

来牙は突然の事に驚いたが、恋人の絵梨からのキスは受け入れていたのであった。

そして絵梨は来牙から唇を離しシャツのボタンを外し……。

「来牙君……此处でしょ……」

「お、お前……何を……」

「だからあ……エッチな事をしようって……言ってるのお……」

「お前な……此处に来てまでやるか？」

来牙は絵梨の発言に呆れた。

絵梨が学園に来て何を仕出かすかと考えている最中、いきなりエッチしようだなんて言われて呆れない人はいないと思う。

学校に来てはいきなり押し倒され、キスをされて、果てはエッチを懇願されているのか来牙は呆れる一方であった。

「あんな絵梨、どうして学園に来てまでそんな事をやると思ったんだ？ 別に家で何時でも出来るだろ……」

「家でするのもいいんだけどお……学園でするって何か燃えない？」

「お前は……まあ否定はしないが」

「でしょう？ 学園でやるとスリル満天で楽しめそうなんだよねえ」

絵梨の言葉に来牙は更衣室でやるのも一興かと思いは始める。

「来牙君も興奮しているね……」
「ココがすごい事になってるんだけど
(サワサワ)」

「……」

絵梨はズボン越しから来牙の股間に触っていた。

「そりやお前にキスされたからな、誰だって興奮する。それに……」

来牙は絵梨に押し倒されている時に、絵梨のブラやスカートから見える下着に釘付けだった。

「ふふふ……来牙君のエッチ」

無論絵梨は来牙の視線に気付いており、興奮していた。

「じゃあもつと興奮させてあげるね……」
(スッ)

絵梨はブラを外すと、来牙の両手を掴んで自身の胸へと誘う。

「ねえ来牙君……遠慮無く触っていいんだよ？」

「……………つたく、お前って奴は」

来牙は絵梨の胸を見て我慢出来なくなりかけており。そして頭の中では絵梨を犯したい気持ちが強まって限界寸前だ。

そんな来牙を絵梨はさらに拍車をかける。

「はあ……………はあ……………ねえ来牙君……………あたしも我慢出来なくなってきた……………してえ……………」

「……………仕方ないな（スツ）」

「きゃ！？……………ん……………ん……………」

来牙はタガが外れて上半身だけを起こすと、絵梨にキスをし始めた。

座りながら抱きついてキスをしている状態である。そしてケダモノになった来牙は絵梨を押し倒して、エッチしていましたとさ。

ちよつとしたオマケ

来牙と絵梨が情事に夢中になっている時に、ある放送が流れていた。

2 - A の教室で……。

ピンポンパンポーン

『連絡いたします！ 船越先生、船越先生。遊佐翔君が、2 - A の前で待っています。教師と生徒の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです！』

「……………（ピシッ！）」

死刑宣告と呼ぶに等しい放送を聞いた翔は固まった。

『船越先生、遊佐翔はあなたの薬指にエンゲージリングを嵌めたいと言っていました。左手の薬指を綺麗にしておく事を忘れずに！！捕まえた後の話ですが、私“さすらいの旅人”が貴方様に婚姻届をお渡しします。遊佐翔の名前と実印入りです。貴方の名前の記入と実印を押せば遊佐翔と結婚出来ます！！ さあ、お急ぎ下さい！！ あなたの幸せが目の前に！！！！』

「ふざけんじゃねえ……………！！！！！！（ダダダダダダ……………）……………！！！！！！」

翔はすぐに2 - A から出たが……………

「遊佐君……………！！！！！！（ダダダダダダ……………）……………！！！！！！」

「ひいっ！！ もう来やがった！！！！ ちくしょ……………！！！！！！（ダダダダダダ……………）……………！！！！！！」

船越先生が物凄いスピードで翔に迫ってきたのであった。

果たして、翔の運命は……。

来牙×絵梨2+ (後書き)

ちよつとエロいカップリング話でした~~~~!!!!

そして此処から私が登場と共に翔の追いかけてここが始まりました
~~~~!!!!

この追いかけてこの結末は次回にて!!

明久×秀吉（前書き）

これは秀吉救出編のその後の夜です。

明久×秀吉

深夜、明久の部屋にて……。

「……………明久」

「……………（ね…眠れない！！）」

ベッドには明久と秀吉が一緒に寝ていた。

秀吉が明久の背中に抱きついている状態である。

「ひ…秀吉？どうして僕に抱きついてるの？ ほら、こんな状態じゃ寝づらいから離れたほうが……………」

「……………明久、今夜は離さないで欲しいのじゃ」

「え？……………な…何？」

秀吉の発言に明久は固まった。どうして秀吉が抱きついてるのは明久には全く分からない。

「……………秀吉……………理由を聞いてもいいかな？」

「…………………………」

「（答えたくないのかな？）」

明久の質問に秀吉は答えなかった。その代わり、さらに明久から絶対に離れないかのようにギュッと強く抱きしめた。

「（うーん……如何すればいいんだろ？……秀吉が抱きついてくれるのは嬉しいんだけど……このまま続くと僕の身がもたないよ……）」

明久は秀吉に抱き付かれていて少しずつ理性が崩れかかっていた。そんな明久に、秀吉はポツリと言葉を述べる。

「……………見たのじゃ……………」

「え？見たって何を？」

「……………夢を見たのじゃ……………姉上がワシに熱湯をかけられる夢を……………」

「……………」

秀吉がやつと答えてくれたかと思った明久だったが、理由を言った秀吉に明久は言葉が出なかった。

「……………もう済んだ事なのは分かっておるのに……………あの夢を見た後に……………姉上を顔を見ると……………恐くなるのじゃ……………またあんな事をするのではないかと思ってしまうのじゃ……………」

「秀吉……………（僕はバカだ！……………何て事を聞いてしまった！！）」

秀吉が言葉を発する度に体が震えていた。おそらくあの時の事をまた思い出したのだろうと明久は思い、そして後悔した。

いくら解決したとは言え、まだ秀吉の心は完全に癒えてはいないの

だ。そんな秀吉に無理に理由を聞いた明久は自分自身を罵倒する。

そして明久は体勢を変え、秀吉と向き合っただけですぐに優しく抱きしめた。

「ごめん秀吉……僕が余計な事を言ったばかりに……」

「あ……明久？……何故お主が謝るのじゃ？……ワシは……」

「何も言わなくていいよ秀吉……僕は君を離さないから……一緒にいるから……だから……」

「あ……明久（//////////）……うむ……」

明久の告白とも言える言葉に秀吉は頬を赤らめる。秀吉はその言葉が嬉しかったのかモゾモゾと明久の胸に顔を埋めた。

「ふふ……秀吉……ホントに可愛い……」

「……明久……ワシは男なのじゃが……可愛いなんて言われても嬉しくないのじゃ……」

「ごめんごめん。でも、仕方ないじゃん。秀吉が可愛いのは事実なんだから」

「明久！……もういいのじゃ……明久なんて知らんのじゃ……ふんじゃ……」

先程まで明久の胸に顔を埋めていた秀吉であったが、明久の可愛い発言に機嫌を損ねてしまい、顔を離すとぷいっと天井の方向に向け



た。抱きついている状態は変わっていないが。

「（ちょっと調子に乗りすぎたかな？でも、秀吉が怒っている表情もまた可愛いんだけどね。かと言ってこのままだと、秀吉が許してくれそうにもないし……どうしょ？）」「

明久はどうやって秀吉の機嫌を直そうか考えていた。

「（そうだ！いつその事……）」

何か思いついたようだ。そして明久は決行した。

「ねえ秀吉。こっち向いてくれない？」

「何じゃ？ワシはそう簡単に許さんから……んむ！？」

秀吉が明久に呼ばれて顔を向けると、明久は秀吉にキスをした。

「ん……んん……んむっ……はあ……って明久！！　おおおお主……  
……なな何を……」

「何ってキスだけど？」

「違う！！何故お主はワシにキスをしたのじゃ！！　ワ……ワシは男  
じゃぞ！」

「秀吉、僕はね……」

「……………」

明久の真剣な声に秀吉は先程までの勢いが無くなり、黙って聞いていた。

「僕は……………秀吉が好きだ……………」

「なっ!?!」

抱きしめながらの突然の告白に戸惑う秀吉は物凄く戸惑った。

「す…好きって…………ワ…ワシも明久の事は好きじゃぞ…………親友としてじゃが……………」

「違うんだ秀吉。僕は親友としての好きじゃなく、恋愛の方の好きだと言う事だよ。秀吉、僕は君が好きだ。愛しているんだ」

「……………」

秀吉は明久の真剣な告白に何も言えなかった。

皆さんも既に御存知だと思うが、これまで秀吉は数々の男子に告白されている経験がある。

最初は姉の木下優子に間違われていると思っていたが、実際は弟の秀吉目当てで告白されていた。

今まで通りだったら、「ワシは男じゃからお主とは付き合えん」と言つと、告白した男としては二重の意味で振られたも同然だ。

だが、明久の告白に秀吉はいつもの様にすぐに言葉を発する事が出来なかった。

「あ……明久よ……ワシは……男なのじゃが……」

秀吉は頬を赤らめながら途切れ途切れに言った。

「そんな事は初めから知ってるよ秀吉」

「な?!……じゃ……じゃが、お主はいつもワシを女扱いして困らせていたではないか!」

「確かにそうだけどね。でもね秀吉、君が男の様に振舞っていても、僕には可愛い女の子にしか見えないんだよ」

「な……」

明久の言葉に秀吉は絶句した。男として振舞っても女にしか見えな  
いと言う事に。

明久は秀吉をさらにギュツ!と力強く抱きしめる……まるで秀吉を  
離さないかのように。

そしてさらにこう言った。

「けど僕は、そんな秀吉が好きなんだ。確かに秀吉は男で、同じ男  
に告白する僕は人として間違っている。許されない事なのは分かっ  
ているけど、秀吉を僕だけの物にしたいんだ。秀吉は誰にも渡した  
くない! 独り占めしたい! って僕の心がそう言ってるんだ!」

「……………明久……………」

秀吉はこれ以上無いと言う位に顔が真っ赤だ……茹蛸の様に真っ赤である。

秀吉は前から明久の事は気になっていたが、こんな心情を表した大告白に大きく戸惑うばかりであった。

しかし秀吉としては嬉しかった。自分は明久にこんなに大事にされているとは夢にも思わなかったのだ。

「……明久……ワシは……ワシは……」

「これが僕の思いだよ秀吉。ごめんね、迷惑だったよね、こんな告白……」

「……迷惑では無いのじゃ……凄く嬉しいんじゃない……明久は……そんなにワシの事を……」

顔が真っ赤な秀吉は明久に見せたくないのか、明久の胸に顔を埋めている。

「秀吉……それってもしかして……」

「……うむ……ワシも……お主が好きじゃ……明久……」

「…………秀吉!!」

「あ、明久!! 今はワシの顔を見ないで欲しいのじゃ!! 恥ずかしいのじゃ!!」

明久が好きと言う秀吉の発言に明久は秀吉の顔を見ようとしますが、

秀吉は断固として見せようとしなかった。

が、それは無駄な悪足掻きだったので見せる事になってしまつ。

「秀吉……ホントに僕でいいんだね？……嘘じゃないよね？」

「……ワシが今お主に嘘を付いていると思つのか……だとしたらそれは心外じゃ……」

「アハハ……ごめん秀吉……」

「……まあ謝つたから許しておくが……しかし、これだけは覚えておいてくれ明久。ワシは嫉妬深いからな……お主が他の女子とイチヤつておつたら……お仕置きじゃからな……」

「肝に銘じておくよ」

秀吉の警告を難なく受け入れる明久は、秀吉と付き合えるんならこれくらい安いものだと思つた。

「じゃあ……明久……早速じゃが……恋人になつたワシの最初の頼みを聞いてもらえるかの？」

「いいよ、何でも言つて秀吉」

秀吉は明久から離れ、上半身だけ起き上がり上着を脱ぎ始めた。

「では……恋人の証として……ワシを抱いてくれ……」

「え？……」

秀吉のいきなりの発言に明久は固まった。

「ひ……秀吉……それってエッ……」

「そ……そこまで言わなくていいのじゃ……！ で、どつするのじゃ？  
……」

顔を赤らめる秀吉に明久は当然、次の行動に移る。

「……… 勿論OKだよ秀吉……！」

「あ……明久……んむ……！ ……んん……んむっ……」

明久は秀吉を押し倒してキスをする、秀吉はキスに応える為、明久の背中に腕をおいた。

チュプ……チュパ……ペチヨ……チュプ

舌が絡み合う音がしばらく続いていた。

「はあ……はあ……はあ……… 秀吉……いいね？」

「明久………ワシを………好きにしてくれ………」

明久と秀吉は互いに顔を赤らめながらエッチをしましたとき。

オマケ

明久が秀吉が結ばれている時……。

明久の家の前を通り過ぎた二人がいた。

……それも物凄いスピードで。

「遊佐くううううううん!!!!!!!!!! 大人しく止まりなさい!!!!!!!!!!」

「勘弁してくれえ!!!!!!!!!! 俺様はアンタと結婚なんかしたくねえ!!!!!!!!!!」

遊佐翔と船越先生の鬼ごっこはまだ続いていた……。

『チツ！ まだ捕まってるのか。仕方ない、最終手段を取ろう。……船越先生!!!!!!!!!! あなたに朗報です!!!!!!!!!! 結婚式とハネムーンのプロデュースはこちらで企画するので早く捕まえて下さい!!!!!!!!!!』

「な、何だ!? 今、凄く聞き捨てならない声が……」

「うおおおおおおお!!!!!!!!!!」

「ぎゃああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!! さらに速くなったあ

あああああ!!!!!!!!!!」

私“さすらいの旅人”の声を聞いた船越先生がさらにスピードを上げた。

翔は必死に逃げているが、捕まるのは時間の問題だった。

そして10分後……。

「遊佐くうくうくうん!!! 捕まえたあああああ!!!」

「ぎゃあああああ!!! だ、誰か助けてくれ~~~~~!!!」

船越先生に捕まった翔は押し倒されるかのように組み伏せられていた。

翔はじたばたと必死に暴れているが、逃れる事は出来なかった。

船越先生にとってはあともう少しで幸せの道へ、翔にとっては絶望の道が待っている。

『(ピシュツ!) ようやく捕まえましたか。お疲れ様です、船越先生』

私“さすらいの旅人”がいきなり二人の前に現れた。



「さあ旅人さん、約束どおり捕まえたわ！！ 早く婚姻届を私に！  
！ 結婚式とハネムーンを！！！！」

「止めてくれええええええ！！！！ 俺を地獄に行かせないでくれえええええ！！！！」

船越先生は私に婚姻届の催促をし、翔は止めて欲しいと必死で懇願していた。

『ふむ……船越先生、大変申し訳ありませんが少し眠っていて下さい』

「え？（プスッ！……ドサッ）」

私が放った麻醉銃で船越先生を眠らせる。

『ハツハツハツハツハ。ちよつとした遊びのつもりが、まさか此処まで発展するとは思わなかったよ』

「遊びつて……アンタ俺様の純情を弄んだのかよ！？」

『お前に純情なんてあったのか？ それは意外だ』

「ふざけんな！！ アンタこの場でぶつころ……」

翔が立ち上がって私に攻撃を仕掛けようとしたが……。

『君に侘びとして綺麗なお姉さんが一杯いる所に連れて行くのかと思っただが……』

「是非お願いします!!」

急に立場を変えて私に頭を下げた。

明久×秀吉（後書き）

明久と秀吉が結ばれる話と、翔の結末でした〜！！！！

## 明久×秀吉 その後

朝6時、学園の通学路に二人の男女……では無く男子がいた。

「……明久よ、ワシと一緒に行くのは嬉しいのじゃが……ちょっと恥ずかしいのじゃ……」

「何言ってるの秀吉、僕たちは恋人同士なんだからこうして歩くのは当然じゃないか」

学園に向かっていている明久と秀吉は一緒に歩いていた……それも手を繋いで。

秀吉は少し顔を赤らめていたが、明久は微塵も気にしてはいなかった。

「じゃ……じゃが、男同士で手を繋ぐというのは……その……変な目で見られんかの？」

「大丈夫大丈夫。こんな朝早く学校に来る人なんて全然いないんだから」

何故、明久と秀吉がこんな朝早く学園に向かっていている理由を簡単に説明しよう。

秀吉は演劇部の朝練により学園に向かっており、明久は恋人の秀吉と登校したいが為に早起きをして一緒に行っているだけなのである

……以上。

「秀吉、嫌だつたら離すけど……」

明久はちよつと悲しそうな顔をして秀吉に聞いてみた。

「べ……別に嫌だと言つてないのじゃ。ワシは……明久の恋人じゃから……」

「……ありがとう、秀吉」

何だかんだ言つて満更でもない秀吉に、明久は礼を言いながら秀吉の頬にキスをした。

「あ……明久！いきなり何じゃ!？」

「お礼だよ」

「そ……そんな礼は不要じゃ!……こんな朝っぱらからキスなど……」

ドサツ!

「「?」「」

何かが落ちた音がしたので、二人はその方向に目を向けると。

「あ……ああ……ああああ……よ……吉井君が……木下君に……」

鞆を落とし、プルプルと震えた久保利光がいた。

「あれ、久保君？ 珍しいね、こんな朝早く学校に行くなんて」

「お主は何故ここにいるのじゃ？」

明久と秀吉は久保に聞いてみるが、久保の様子が段々とおかしくなっていた。

「そ…そんな…嘘だと思ってたのに…吉井君と…木下君が…  
…恋人…同士なんて…」

「え?! 何で久保君がそれを!？」

「何故知っておるのじゃ?!」

久保が何故、明久と秀吉が恋人同士なのか知っているのかと聞くと……。

『(ピシユツ) 教えたのは私だよ』

「うわ?! って誰!？」

「な…何者じゃ!？」

『ふっふっふっふ。私が何者かなんて どうでもいいじゃないですか、ご両人』

私の姿を見て驚く明久と秀吉であるが、私はどうでも良く切り捨てる。

「ど…どうでもいいって…」

「それは物凄く気になるのじゃが……」

『気にしない気にしない。あんまりしつこく問うと、昨日の君たちの情事についてここではばらすぞ?』

「「……!」」

「う…嘘だ……」

私の台詞に顔が赤くなった明久と秀吉……久保は物凄く青ざめていたが。

「よ…吉井君と……木下君が……」

『あゝ久保君に言うのを言い忘れてたね。ごめんごめん、すっかり言い忘れてたよ』

「な…何でそんな事を久保君にいうのさ!？」

「お主は何を考えておるのじゃ!？」

ortの体勢状態になっている久保に、私の台詞に抗議する明久と秀吉。

そんな3人と無視するかの様に私は……。

『久保君、そう言う事だから明久はもう諦めなさい。もう君が付け入る隙は微塵も無いから』

久保に宣告をしていた。

「……………だが、僕が今ここで吉井君に……………」

『往生際が悪い奴だな。無駄だという事を分からせる為、君にはある映像を見てもらうよ……………ほれ！（パチンツ）』

私が指を鳴らすと久保は……………。

「！！……………うわあああああ！！！！！！！！！！」

久保はピタツ！と動きが止まるがすぐに立ち上がり、両手を頭に置いて天に向かって叫んだ。

「え？！ な…何？ ……どうしたの、久保君？」

「久保が乱心したのじゃ！」

『心配するな。コイツに君たちの情事を見せてやっただけだ』

「！！！！！！！！！！」

「あああ……………嘘だ……………こんな……………こんな……………こんなのは嘘だあああああああ……………！！！！！！！！！！」

『嘘じゃない、事実だ。いい加減受け入れろ』

「嘘だあああああああ……………！！！！！！！！！！」

久保は走りながら去っていった。



『あらら、現実を受け入れないあまりに逃げたか……まあいい、どうせ時間の問題だ。さてと……（チラッ）』

私は明久と秀吉の方を見ると……

『お騒がせしてすみませんでしたね、お二人さん。それでは失礼<sup>ヒシユッ</sup>』

「……………」

謝罪しながら姿を消す事に呆然とする明久と秀吉であった。

「あ…あの人は一体何だったのかな？」

「さあ……？ 全く分からないのじゃ……………」

明久と秀吉が正気に戻ると、正体不明な私に疑問を抱くが此処に居ない私の事を考えても無駄だと思って考えるのを止めた。

そして二人は何事も無かったかの様に学園へ向かったのであった。

明久×秀吉 その後（後書き）

明久と秀吉が恋人同士になったのを見た久保が絶望しちゃいました  
）  
）  
）  
！！！！

雄二×翔子（前書き）

今回は坂本夫婦（笑）のお話です。

それではどうぞー！

## 雄二×翔子

昼休み、家庭科室の中には坂本雄二と霧島翔子がいた。

無論二人だけです!!!（ここ強く強調）

お邪魔虫は一切いません。

「……雄二、あーんして」

「おい待て翔子!! その卵焼きは何だ?! 中に何が入っている?!」

「……普通の卵焼き」

「……それがただの卵焼きなら、何故俺を椅子に縛って食べさせようとする? 明らかにおかしいだろ」

霧島は雄二を椅子に縛らせた後、卵焼きを食べさせようとしたが、雄二は即座に拒否した。

自分を縛って霧島が食べさせる行為に何か裏があると勘付く雄二である。

「……だって雄二、こうでもしないと私と一緒に食べてくれないから……」

「お前と一緒に食べるとバカ共（FFF団+明久+ムッツリーニ）

が俺を抹殺しに来るからな。それにムツツリー二の事だからここに仕掛けてあるかもしれない盗聴器で聞いているから、バカ共がいつ来てもおかしくないぞ」

「……それは平気。ここには私達以外は絶対に入ってこないから」

「何故そんな自信を持って言えるんだ？」

「……ある人が『此処におまじないをかけたから誰も入って来れない』って言った」

「誰だそいつは？」

「……それは言えない」

雄二は協力者は誰かと聞いても霧島は断固として答えない。

どうやって聞き出そうかと思っていた矢先に…。

“雄二、そんな事は気にしないで早く霧島の卵焼きを食べたら？”

「な…何だ？ 今何処からか声が…？」

「……雄二、早く食べて…」

「待て！！ お前が言っていた『ある人』って一体……」

「……食べてくれないんだったら…こっする(ぱくっ)」

「？……おい翔子…お前自分から食べて何を？ ……んん?!」

霧島は卵焼きを口に入れてそのまま雄二に抱き付いてキスをした。所謂、口移しである。自身の舌で雄二の口の中に卵焼きを押し込んで、無理矢理飲み込ませた。

「ん……んん……んむっ……」

「んん…ゴクツ…ゴクツ…んん…ぷはぁ！…おい翔子?!  
……お前！」

「……（クスッ）やっと食べてくれた」

雄二は突然の事に驚いたが、霧島は口移しを終えると頬を赤らめながら満足な顔をしていた。

「……雄二、美味しかった？」

「お…美味しかったじゃねえ!! お前何つー事を!!」

《美味かったし、翔子の舌も味わえて最高だったぜ》

何処からか、雄二の声が聞こえた。

「……雄二、えっち」

「ちょ…ちょっと待て!! 今の台詞は俺じゃねえ!! 誰だ?!」

“それは君の本音だよ、雄二”

「な……何だと?!?」

私の発言に雄二は滅茶苦茶不味い顔になる。

“この家庭科室は君の本音を言う様に私の方で設定しているんだよ。分かりやすく言えば、本音を言う召喚獣の腹の中だと思ってくれればいい。君がいくら隠した所で、ここでは君の本音はすべて駄々漏れだよ”

「……………雄二（ギユウツ！）」

私の説明に雄二は絶句し顔を青褪めると、霧島は雄二に抱きつき…。

「…………雄二、またキスしよ。雄二とキスしていると凄く気持ち良くて…………」

「…………や…止める翔子！！俺は！！！」

《ほう、またキスしたいのか？ いいぜ、何回でもしてやるよ。気持ちよくして欲しかったら、この縄を解いてもらいたいけどな。その時はもつと気持ちいいキスをしてやるぜ》

「…………ホントに？ じゃあ解いてあげる」

霧島は雄二に縛っている縄を解く。

「ち…違う！！俺は断じてそんな事…………」

《次は俺の舌で翔子の口の中をたっぷり味あわせてもらっぜ》

「…………雄二の変態。でも嬉しい」

“……あのさあ雄二、無駄な足掻きはよしたら？ さっきも言ったけど本音が駄々漏れだからね……けど、雄二がここまでケダモノだとは思わなかったな。見た目も中身も野生の狼そのものだよホント”

「喧しい!!! 俺はそんな…グツ！」

私に抗議してくる雄二は突如異変が起きた。

「な…何だ？…体が……」

「……はあ…はあ…雄二、私も……」

“おお？やつとアレの効果が出てきたか”

「な…何だと？…てめえ……俺と翔子に何をした……」

“私じゃ無く霧島がやっただけどねえ。君が霧島に食べさせられたあの卵焼き、実は媚薬入りだね”

「な?!」

『霧島の頼みで雄二とエッチしたいって要望があったから媚薬を使っただよ。これで君は霧島とエッチしない限り媚薬の効果は切れないよ。そうそう、それは抗えば抗うほど効果は強まるからね』

「……………」

私の説明に雄二は絶句するが……。



“おや、霧島はもう準備万端だね”

「何!?!」

「……………はあっ……………はあっ……………はあっ……………ゆうじい……………わたし……………がまんできかない……………(スルツ)」

霧島を見ると息が荒くなり、自分で制服のボタンをはずした。

「しょ……………翔子……………(ゴクツ)」

《翔子があんな顔をして……………俺も我慢出来なくなってきた……………翔子を抱きたい……………犯したい……………俺好みの女に開発させたい……………》

“……………雄二、君は完全にケダモノだね……………まあいいや。霧島、これで君の願いは叶えた。私はこれで失礼させてもらう。十分に楽しみたまえ……………”

私の声が途絶えると霧島は……………。

「……………はあっ!……………はあっ!……………はあっ!……………ゆうじい!……………」

「ん……………んん……………んちゅ……………」

雄二に抱き付いてまたキスを始めるのであった。

「(や……………やべえ……………俺はもう……………)(ウオオオオオ……………!!!……………)(  
バツ!……………)」

「ああっ!(ボタンツ!……………)」

雄二もようやく本性を表したのか自身の服を脱いで裸になる。そして霧島を押し倒して服を無理矢理ひん剥き、右手で胸を揉みながら乳首に吸い付き、左手は霧島のスカートの中の下着に手を突っ込んで大事な所を直に触っていた。

「……………ああ！……………はああん！……………ゆうじ……………きもちいい！！」

「……………翔子……………もう我慢出来ねえ！！いくぞ！！」

「……………きてえ……………ゆうじい……………」

そして二人は媚薬の効果が切れるまで何度も何度もエッチしてしましたとき。

雄二×翔子（後書き）

ケダモノ雄二が霧島を襲っちゃいました〜！！！！！！

来牙×絵梨3（前書き）

今回は絵梨のコスプレ物です。

それではどござー！

### 来牙×絵梨3

学校が終わって家に帰った来牙は、部屋でゲームをしていた。

そんな時……。

コンコンッ

「ん？」

ドアからノックする音が聞こえたので来牙はそこに目を向けると……。

「来牙君、入っていいかな？」

「絵梨か。別にいいぞ」

絵梨の声だと分かると来牙は絵梨を招き入れた。

ガチャッ

「はいりま〜す」

「どうしたんだ絵梨？ 別にノックしなくても俺は……」

来牙は途中から声が途切れた。

何故なら……。

「本日は再度、ご奉仕するために参りましたニヤ！」

ネコ耳付きメイド服を着た絵梨が可愛らしいポーズを取りながら来牙の前に立っていた。

「……………」

「ご主人様？どうかしましたかニヤ？」

絵梨は言葉を失っている来牙の顔を小首を傾げながら覗き見た。

「絵梨……お前その格好……」

「どこか痛い所はありますかニヤ？」

「いや……だから……」

「だからご奉仕だつて言ってますニヤ！ さあご主人様、絵梨にどんな事でも言いつけて下さいニヤ！」

「（もう絵梨はやりだしたら止まらないか…………）」

絵梨の台詞に来牙は何を言っても無理だろうと悟った。

「（だったらこの際乗ってやるか）」

絵梨がその気ならいっその事、自分もご主人様らしく命令してやるうと思ふ来牙であった。

「ねえ、ご主人様？いつまでダンマリ何ですかニヤ？」

「ああ、すまんすまん。何を命令するか考えていてな……」

「ではもう決まりましたかニヤ？」

「そうだな……じゃあまずは、俺の前に立ってスカートを捲れ」

「………分かりましたニヤ……」

絵梨は来牙の前に立ち、両手でスカートを捲り、来牙に黒い下着を見せた。

「ご主人様……これでいいですかニヤ？（は……恥ずかしい……来牙君……そんなにじっと見ないで……）」

「いい眺めだよ絵梨……けどなあ……」

「え？……ひゃあんー!!」

来牙は下着越しから絵梨の下半身に触った。

「……ご主人様あ……そこはあ……」

「ネコの癖に何で下着を穿いているんだ？」

「……これは……」

「ネコに下着はいらないだろ……今すぐ脱げ」

来牙は絵梨に下着を脱ぐように命令した。

「ニヤ！？ …… 二二二ですかニヤ？」

「そつだ」

「でも…（恥ずかしいよお… 来牙君の目の前で脱ぐなんてえ…）」

「絵梨、俺の言う事が聞けないのか？」

「…… 分かりましたニヤ…」

絵梨は下着を脱ごうとしたが…。

「待て、ちゃんと見える様にスカートの裾を口に啜えながら下着を脱げ」

「ええ！？ …… 分かりましたニヤ」

絵梨はスカートの裾を口に啜えて来牙に見える様に下着を脱いだ。下着を脱ぐと絵梨は再度、両手でスカートの裾を掴み来牙に見せた。

「二…これでいいですかニヤ？ご主人様……（来牙君…… そんなにじろじろ見ないでえ…… あたし…… 恥ずかしくて死んじゃいそう……）」

絵梨は顔を真っ赤になりながらも来牙の命令を忠実に従っていた。

「にゃあ……（ら… 来牙君に見られているだけで…… あたし…… 感



じちゃう……欲しくなつて来ちゃった……」

「さつきより凄くいい眺めだ……やはりネコには下着は不要だな……  
……そそられるよ……ん？」

来牙が床を見るとそこには水溜りの様な物が出来ていた。

絵梨の真下で……。

「おい絵梨、床が汚れているじゃないか」

「ニヤァ！……も、申し訳ありませんご主人様。すぐに拭きます……」

「いや、その必要は無い」

「ニヤァ？どうしてですか？」

「それはな……お前のここをどうにかしないとまた汚れるからな」

「ニヤァン！！ご主人様あ！！」

来牙は再度、絵梨の下半身を触りだす。

「おまえのここがこんなに濡れていちゃ、すぐにまた汚れちゃう。  
だったらまず最初にここをどうにかしないといけないなあ……」

「あん！！ ああ！！ にゃああん！！（気持ちいいよお来牙君！  
……もつと……もつと触ってえ……でもお……来牙君のが欲しいい！）」

来牙の執拗な攻めに感じている絵梨はそろそろ我慢出来なくなつて

来た様だ。

「ご…ご主人様あ…もう…立って…いられないニヤア…」

「何だ、もう立てなくなつて来たか。もう少し粘るかと思つたんだが…まあいい、立てないんならネコのように四つん這いになれ」

「は…はいい…」

絵梨は来牙に言われたとおりに四つん這いになった。

そして来牙は絵梨に近づき耳打ちをし…

「よし、じゃあ次は…（ボソボソ）」

「！！！！ご主人様…絵梨に…そんな恥ずかしい事を…やれと）  
来牙君！！恥ずかし過ぎるよぉ！！」

絵梨は来牙の次の命令を聞いて茹蛸になるくらい顔が真っ赤だった。

「そつだ絵梨、やるんだ。お前は言つた筈だろ？ 俺にご奉仕すると……だったら俺の言つ事を聞け」

「は…はいいニヤ…」

絵梨は四つん這いになりながら来牙にお尻を向けて、スカートを捲りながらこつ言つた。

「ご…ご主人様…今日は…絵梨を…満足するまで可愛がつて下さいニヤ…（…もう死にたい！！）」

「よく言えました。じゃあ始めるとするか」

来牙は服を脱いで絵梨とエッチを始めましたとき。

めでたしめでたし・・・・・・・・・・・・・・・・

おまけ

来牙と絵梨がエッチしている時……。

『いや~~~~和みますなあ、おばあさん（ズズズウ~~~~）』

「本当にですねえ。さすらいの旅人さん（ズズウ~~~~）」

「~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~!!!!!!」（ワシは和んでおらん!!!!!!）」

私は来牙の家の和室で宮永楓さん（+宮永源三）と一緒にお茶を飲みながら談笑していた。

ついでにジジイの方は十字架で貼り付け状態にしており、ギヤアギヤアと五月蠅いから私の方で喋らせない様に設定しておいた。

『つい馴染んでしまい訊きそびれてしまいましたがおばあさんとしては、来牙と絵梨が付き合っている事に反対ですか？』

「いいえ。あたしは二人の事に関して口を出すつもりはありません」

『どうしてですか？血は繋がってないとは言え、孫と娘が付き合っていたら普通は反対すると思いますが…』

「~~~~~！！！！（ワシは反対じゃ！！！！）」

私とおばあさんはジジイを無視して話を進めている。

「まあ普通はそうでしょうけど、あたしとしては二人が本気で付き合っているんですしたら別に構いませんよ」

『ほほう、ではおばあさんは世間が何を行っても二人の仲を応援し続けるのですか？』

「そうですね、あたしはあの二人を死ぬまでずっと見守り続けます」

「~~~~~！！！！（ワシは絶対に見守らんぞい！！！！）」

『いや~~~~、おばあさんは器が大きいのか懐が広いのかっていう位、偉大ですな〜』

私はおばあさんの偉大さにいたく感心した。

「あたしはそんなんじゃないやありませんよ」

「~~~~~！！！！（ワシは絶対に認めんぞい！！！！）」

『まったく、さつきからこのジジイはドタバタと五月蠅いなあ。おばあさん、始末していいですか？』

「ええどうぞ、お好きな様に」

「~~~~~!!!!!!(婆さんや~~~~~!ワシを見捨てないでくれ~~~~~!!)」

『さて、アンタにはこれだ(パチンツ!)』

「!!!!!!!!!!!!(バタツ!)」

ジジイは大人しくなりガクツとなった。

「何をしたんですか？」

『ジジイの頭の中に、絵梨の罵倒を叩き込んでやりました。さて、これでようやく静かになったところで、ではお話の続きを…』

「そうですね。あの時は…」

私はおばあさんと談笑を続けた。

来牙×絵梨3（後書き）

ちょっとヤバイと感じるラブシーンでした〜！！！！

## 混沌物語（前書き）

これは雄二と霧島が家庭科室でエッチした後の話であります。

それではどござー！





「やっぱり来たか、バカ共が……」

雄二はFFF団に囲まれた。しかし、雄二の表情は全く動じていない。

「ほお、逃げようとせず自ら裁きを受けるか……いい心掛けた坂本ならば……死ねえ!!!!」

「……抹殺!!!!」

「「「死にさせえええ!!!!」「「「「

FFF団+ムツツリー二が雄二に一斉攻撃してきた、が……。

「おい、出番だぞ。さすらいの旅人」

『（ピシュッ!）はいはい　おバカさんたちはここで終了だよ（パチンッ!）』

「「「「ぎゃああああ!!!!」「「「「「

バタバタバタバタ!!!!

雄二の声に私が突然現れて指を鳴らすと、FFF団は悲鳴をあげながら倒れた。

『私の経験値を得た……なんちゃって』

「どこかのRPGゲームのパクリか？　まあそんな事より、コイツ

等に一体何をしたんだ？」

『フッフッフ……あいつらの脳に鉄人がミニスカのセーラー服姿でパンチラしながら投げキッスをするイメージを叩き込んだのだよ！  
ハッハッハ！！』

「……………恐ろしい事をするなアンタは……………てか聞いただけで気持ち悪くなってきた……」

私がFFF団に叩き込んだイメージを聞いた雄二は気持ち悪そうな顔をする。

まあ考えるだけでも気持ち悪いだろう。

『こいつらの処理は私がやっておくから、早く愛しの霧島の所に行きなさい』

「そうだな、俺の愛妻をいつまでも待たせるわけにはいかないからな。じゃあ任せませ……」

私が『愛しの霧島』と言っても雄二は全く気にせず、寧ろそう言われたのが嬉しく、笑みを浮かべながら颯爽と教室を出た。

この時点で雄二がおかしいのは分かると思われるが、実はこの雄二は私の暗示によって操り人形になっている。何時までも素直でいて欲しいとの霧島の要望であったので私が雄二に暗示を掛けたと言う訳だ。

とまあ、そんな雄二に明久・秀吉・姫路・島田は啞然として見ていた。

「ゆ…雄二が…霧島さんの事を愛妻って…」

「いつもの…雄二ではない…」

「坂本君…霧島さんを…」

「全く…ようやく素直になったのね…」

明久と秀吉は信じられない顔をし、姫路と島田は羨ましそうな顔をしていた。

「美波ちゃん、私たちも霧島さんに負けずに」

「そうね瑞希。今からアキを連れて…」

姫路と島田が不穏な事を考えていそうだったので私は……。

『悪いけどアンタ等はダメ（パチンツ！）』

「「いやあああああ！！！！」」

バタバタ！

再び私が指を鳴らすと、姫路と島田は悲鳴をあげて倒れたのであった。

『私は10000の経験値を得たつと…これはリアルにしたいな』

「ひ…姫路さん！！美波！！大丈夫？！」

「ふ…二人が死んだような顔をしておる!？」

明久は倒れている姫路と島田に近寄って介抱する。

「お主は一体何者じゃ!？ それに姫路と島田に何をしたのじゃ!？」

秀吉は私に声を荒げながら質問をしてきた。

『では自己紹介をしましょう。私は“さすらいの旅人”です、以後お見知りおきを』

「あ、こ…此方こそ宜しく」

「明久よ、挨拶をする前に聞くことが……」

私が自己紹介と挨拶をすると、明久が私に挨拶をする事に秀吉が突っ込む。

『姫路と島田に関しては、先程のFFF団の連中と同じ物を見せてあげたと言えれば分かるかな？ 鉄人のミニス力姿で……』

「待つて!! もうその先は言わないで!! また聞くと想像しちやうから止めて!!」

内容を言ってる最中に明久がストップを掛けてきた。

『まあいい。で、姫路と島田は明久を連れて、またよからぬ事を考えてたから…つい始末しちゃったってわけ……』

「だからと言って……」

『君の大事な恋人の明久が二人に連れて行かれて、やりたい放題されるのを君は我慢出来るのかい？』

「う……そ……それは……」

流石に恋人の明久を連れて行かれるのは嫌である秀吉であるが、私はさらに発破をかける。

『ほれ、倒れている二人なんかほつといて早く明久とデートしてきたらどうだ？ それとも……私が明久を葉月ちゃんとデートさせてもいいのかな？あの子は明久の事が好きだからね、すぐに食いついて来るぞ？』

「それは駄目じゃ……！ 明久の恋人はワシじゃ……！ 明久……！  
！ 今すぐデートするのじゃ……！」

発破を掛けられた秀吉はモノの見事に嵌まり、明久とデートする事を決意する。

「ええ?!で……でも二人を……」

「そやつらは旅人殿が処理しておくと言っておる……！ ワシらはデートに行くのじゃ……！」

「ど……どうしたの秀吉!? それは大変嬉しいんだけど、何でそんなに勢い込んでるの?!」

「つべこべ言わずに行くのじゃ！！（島田の妹とデート何て絶対にさせないのじゃー！）」

私の発言に焦っているのか、秀吉は明久を連れて教室から出て行った。

『ふっ…秀吉も言うようになったねえ…まあそれだけ明久の事が好きだというのがよく分かったからいいけど…さて、こいつらの後始末をするか…』

私は倒れている死体（笑）を処理するためにある事をした。

『ふふふふ…さて、こいつらがまたバカな事したら“地獄の幻想”をすぐに発動させる様に頭の中を細工しておくか…』

そして私は死体達に細工を始めたのであった。

つづく……

おまけ

翔がグラウンドで部活をしている最中……。

「あゝあ、ハムカツ食いてえなあゝ」

と言いながらランニングをしていた。

しかしこの時、翔の発言が再び恐怖するイベントが起きる切欠である事を翔はまだ知らないであった。

同時刻、職員室にて……。

「はっ！ 私はどうして大事な事を忘れていたの！？ 遊佐くう  
うううん！……！（ダダダダダダダ~~~~~！！！！）」

船越先生が突然思い出したかのような顔になってすぐに職員室から  
出た。

「な…何だ？ 船越先生はどうしたんだ？」

「さあ……？」

「妙に迫力があつて恐かったですか……」

船越先生の行動に、布施先生・大島先生・遠藤先生が不可解な顔を  
していたのであった。

Fクラスの教室にて……。

『よし、バカ共の処置完了っつと』

私は倒れているFFF団とムツツリー二と姫路と島田に“地獄の幻  
想”発動の処理を施していた。

それが終わった時……。

「遊佐くうううん!!!!私と結婚しなさ〜〜い!!!!!!」

『ん?』

窓の方から声が聞こえたので私はそこを見てみると……。

『あれは……船越先生』

船越先生が部活中の翔を追いかけてた。

『船越先生が翔を追いかけてるって事は……あいつ、キーワードを言ったな……』

前回のリアル鬼ごっこの際に私は船越先生に記憶消去の為の暗示を掛けた。

しかしその暗示にはちょっとした欠点があった。それは……。

『やっぱり“ハムカツ”をキーワードにしちゃダメだったか』

特定のキーワードを言ったらすぐに思い出してしまうと言う欠点だった。

『ま、暇潰しとしてに見物しますか』

私は翔を助けず傍観に徹するのであった。

「逃がさないわよおおお!!!!!! 遊佐くうううん!!!!!!」



「ぎゃあああああ……！！助けてくれええええ……！！」

『さうて、今度はどっちが勝つか？』

此処に再び、第2幕のリアル鬼ごっこが始まった。

## 混沌物語 ？

さて、雄二が玄関に行くと霧島が入り口前に立っていた。

「……………雄二、少し遅い」

「悪い、バカ共（FFF団）が予想通り俺に襲い掛かって来たからな。それで少し時間食った」

「……………遅いから浮気してるのかと思った」

「おいおい、そんな短時間で浮気なんか出来るわけねえだろ。それに……………」

雄二は霧島を抱き寄せると同時にキスをした。

「んっ……………」

「んん……………お前がいるのに浮気なんかしねえよ」

「……………雄二…バカ」

霧島は頬を赤らめて恥ずかしそうな顔をする。そして雄二と霧島の周りには一種のオーラが纏っていた……………それもピンク色のオーラが……………。

玄関にいる他の生徒はその光景に目を奪われるかのように啞然として見ているのであった。

『あんたら、そんなにイチャついてる暇があったらさっさと行ったら？ 周りの野次馬が物凄い目でお前たちを見ているぞ？』

と、いきなり私が現れて雄二と霧島に突っ込む。

「ん？……いいんだよ。こう見せ付ければ翔子は俺の物だって言う証明になるからな。見たければ見せてやるさ」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！！

『……ほお、君も言う様になつたねえ……』

私の突っ込みによやく気付いた雄二は涼しげな顔をして私に切り返すと、野次馬の男子共は雄二の発言に襲い掛かりそんなほど嫉妬の怒りに満ちていた。

『霧島、嬉しいかい？雄二に自分の物だつて言われて……』

「……雄二、私は既に雄二の物。私の身も心も……全て雄二の物だから……」

「……ウオオオオオオオオオ！！！！！！」

『……ここにも大胆発言する奴がいたか……』

霧島の発言に野次馬の男子共は、絶望する雄叫びを上げた。

『はいはい、惚気はいいから早く行け』

「言われなくてもそのつもりだ。行くぞ翔子」

「……うん」

雄二は霧島の肩に手を置き、霧島は頭を雄二の胸にピトッとくっ付き一緒に歩き出す。

「じゃあ何処に行く翔子？行きたい所があったらそこに行くが……」

「……雄二と一緒になら何処でもいい」

「そう言うと思ったよ……たく……しょうがねえな。じゃあ俺が勝手に決めるから文句を言うなよ？」

「……うん」

二人は歩きながら物凄くあま〜い雰囲気を醸し出している。

『………歩いててもラブラブなオーラを発してるな。……それも激甘な……あ〜〜見ると吐き気がこみ上げて来る……』

私は二人を見てて別の意味で吐きそうだった。

「翔子、お前の髪はいつも綺麗でいい匂いしてるな。思わず髪にキスしたくなっちゃうよ」

「……雄二、髪にキスしなくていいから私にキスして」

「自分の髪に嫉妬するな。髪だけじゃなくて、お前の全てが好きだ。」

それに……いつまでもこうしているとその内、お前を抱きたくなる  
かもしれないな」

「……私も、雄二の全てが好き。雄二の遅しい体や匂い……全部好  
き。雄二が私を抱きたいんなら……いつでも抱いて……私は雄二の物だ  
から……」

『……ガハツッ！！……これ以上は見てられん！！』

二人の余りの激甘っぷりに私は退散した。

学園から歩いて10分程経つと、雄二と霧島はもう少いで町に着き  
そうだったが……。

「……雄二、どうしたの？」

雄二は突然、霧島を路地裏に連れていた。

「……翔子……先に謝っておく……スマン」

「……え、雄二？……んん……ん……んむ……んちゅ……ちゅ……」

雄二は霧島に抱きついてキスをする、霧島は雄二からのキスに驚

かずにすんなりと受け入れていた。

舌を絡めてくる雄二のキスに霧島はもっとして欲しいかのように雄二に抱き付いて自身も舌を絡める。

「んむ……ちゅ……ちゅぷ……んあ……あふ……はあ……はあ……雄二……もっとして」

霧島は頬を赤らめながら雄二にもっとキスをして欲しいとせがんで来た。

「慌てるな翔子……キスよりもっと気持ちいい事してやるから。それに……お前のここはもう準備は良さそうだな……」

雄二は霧島のスカートに手を入れて下着に手をつ突っ込んだ。

「あん！……雄二にキスされて感じてた……はあ……はあ……でも、雄二に触られて……もっと感じてる」

「その様だな……じゃあ誰かが来ないうちに始めるか……まずは味見だ……」

「雄二……早く私を食べて……」

こうして雄二は霧島を味見と言う名のエッチを始めたとき。

つづく……

おまけ

雄二と霧島が路地裏でエッチしている時……。

「遊佐くううん!!! 今度は逃がさないわよおおお!!!  
!!!!」

「いい加減に諦めてくれよぉ〜!!!!!!」

翔は部活を無視して船越先生とのリアル鬼ごっこに全力で逃げた。

それもグラウンドで何週もしている。それも物凄いスピードで……。

例えるなら、100M走で10秒を簡単に切るほどと言えば分かり  
ますかね？

オリンピック選手も真っ青になる位、速いって事です。

船越先生の物凄い勢いにサッカー部の生徒や顧問は翔を無視して部  
活を再開しているのであった。

…と言うより、関わりたくないが為に翔を無視していたと言った方  
が正しい。

『まあ人は誰も自分の命が大事ですからねえ。その判断は正しい  
ですよ…うんうん』

雄二と霧島のラブラブオーラにやられていた私がグラウンドに付く







混沌物語 ？（後書き）

雄二と霧島のイチヤイチャラブラブ物でした~~~~!!!!

どうでもいいけど感想プ~~~~ズ!!!!!!

## 混沌物語 ？

路地裏でエッチしていた二人は……。

「……雄二…はあ…はあ…私もう…これ以上…はあ…はあ…」

「何だよ、もうおしまいか？……まあいい、メインディッシュは後で頂くか…」

「……ま…まだ…食べ足りなかった？……だったら…」

路地裏で霧島を味見以上に食べつくしていた（笑）雄二は少し物足りなかったが、それでも満足な表情をしていた。

「ここまでにしとく。それにこれ以上ここでお前としていたら、誰かが来るかもしれないから……残りの続きはベッドの上で楽しませてもらうよ」

「……はあ…はあ…うん…わかった…」

雄二と霧島は服を着なおすと路地裏から出た。

と、その時……。

『（ピシユツ！）全く……あの二人ときたら』

私が突然、雄二達が出た裏路地に現れた。

『もしもの事を考えて来て見れば……やはり影分身で来たのは正解』

だったな。後で本体の私にこの情報を送らなければいかな……にしても……』

影の私は雄二と霧島がエツチしていた所を見ると……。

『雄二はケダモノの如く霧島にハードな事をしただけでなく、霧島も霧島であんなに嬌声を出しちゃって……私が二人の姿と声を隠していなければ、とんでもない事になっていたぞ』

二人の空間を一時的に断絶させておいて良かったと心底思った。

雄二と霧島はエツチに夢中で気付いていなかったが、私が断絶させなければ確実に通行人が見ていたのだ。そうでもしなければ雄二の荒々しい息と霧島の嬌声が丸聞こえだったから。

『……うわ……凄いな……床には雄二のせ（ピー！）や霧島のあ（ピー！）が合わさってるよ。雄二の奴、何度も霧島にな（ピー！）したんだな……それだけ霧島のアレが気持ちよかつたんだな』

天からは危険な用語と判断されたのか私が言うたびに規制音が鳴っている。

『これは確実にじ（ピー！）したか……もしあの二人の子供が出来たら、私が名付け親になりたいな……無理だと思うが……さて、証拠隠滅の為に掃除しておくか……』

私は周りの匂いと床に散っている物を片付ける為に掃除を始めた。

町に行こうとしていた雄二と霧島だったが、霧島が疲れていた為に雄二の家に行く事になった。

「翔子、疲れたなら正直に言え」

「……私は雄二の妻だから、夫に迷惑を掛けたくなかった」

「お前が無理してたら逆に夫の俺が疲れるからな……今度からはちやんと言え、それが妻としての役目だ」

「……うん、わかった」

雄二の発言に霧島は凄く嬉しそうな表情をしていた。

「（……雄二が私に妻って言うてくれた……私、凄く幸せを感じる……）」

「どっかしたか？」

「……何でもない」

「???(……まあいいか)」

霧島は雄二の腕を絡めるように抱き付き一緒に歩いた。雄二は霧島が嬉しい表情をしたり腕に抱きついてきた行動にふと疑問に思ったが、気にする必要は無いなど自己完結して家に向かった。

さて、少し時間を飛ばし、二人は雄二の家に着いて数十分後の事であった。

「……雄二、ホントに此処でするの？」

「当然だ。一度やってみたかったからな、こつ言っプレイは」

「……でも、お義母さんが帰って来たら……」

「それは問題無い。おふくろは今から商店街に言って3時間以上は確実にいるから」

「……でも雄二、この格好……」

二人は今、台所にいた。雄二は裸になっており、霧島も同様に裸であるがちょっと違う。

それは……

「何もエプロンを着なくたって……」

所謂、裸エプロンである。

「……恥ずかしい」

「裸エプロンは男の憧れだからな。それに……いい眺めだ、翔子がその格好だとさらにやりたくなる」

「…………雄二、エッチ…雄二のがまた大きくなってる…………（私…また雄二にあれで…）」

霧島は雄二のある部分を見ると顔を赤らめながら背ける。

「お前の格好をみて興奮しているんだよ、俺は…………それに…………お前だって凄い事になってるぞ…床がぬれてる」

雄二が床を見るとそこには水溜りの様な物が出来ていた。

それも霧島の真下で…………。

「…………これは」

「何だかんだ言って、お前も我慢できなくなってきたな…………さて、2  
回戦目といくか…………」

3回戦は俺の部屋のベッドで楽しむかと呟きながら霧島に

近づくと雄二は背後から胸を揉み始めキスをした。

「んん…………あ…ああ…………雄二…………もっと」

そして二人は台所で白熱した試合を始めましたとさ。

おまけ

雄二と霧島が台所でエッチしている時……。

『ふむ……そろそろ決着が付きそうだな……』

(本体の) 私は翔と船越先生の鬼ごっこにそろそろ決着が付きそう  
だと思った。

「船越先生……、後もう少しですよ……!!」

「遊佐……!! 頑張れ……!! 最後まで逃げ切れ……  
!!!!!!」

部活の生徒や顧問は揃って二人を応援していた。

「てめえら!! 他人事だと思つて応援してんじゃねえ!!!!  
後でおぼえ(ガッ)……はっ! しまった!!!!」

「(グワシツ!!) 遊佐くううん!!!! 捕まえたあああ  
あ!!!!!!」

ズザザアアア!!!!!!!!

翔は一瞬つまづいた事によってスピードが落ち、船越先生は今だと  
言わんばかりに一瞬でフルスピードを出した。そして翔に飛びつく  
と、逃さんと言わんばかりに抱きついて捕まえたのであった。

「さあ遊佐君!!! 今すぐ私と結婚よ!!!! 旅人さん!!!  
! 早く婚姻届を私に!!!!!!」

『はいはい。今行きますよ……』



「やめてくれえええ！！！！！！！！！！」

翔はジタバタと暴れて必死に逃げ出そうとしているが、船越先生の物凄い力で抱き付かれているので無理だった。

『まさか翔があの場合で躓くとはな……ま、翔が躓かなくても負けていただろうけど（スタスタ）』

勝負が付いたと思った私は二人に近づく。

他にも翔と船越先生とのリアル鬼ごっこを見ていた観客達は……。

「やっぱり船越先生が勝ったか。まあ当然だな」

「あゝくそ！ あのバカ、あんな所でつまづきやがって！ せつかくの賭け金がペアだよ！」

「惜しかったな〜。あともうちょイだったのに」

「まあこれで、船越先生に狙われずにすむな」

それぞれが喜ぶ者、悔しがる物、安心する者がいたのであった

「（アイツラアアアア！！！！）」

観客の好き勝手な発言に翔は切れそうだった。

「よし皆、遊佐翔に敬礼！！！！！！！！！！」

「はっ！……！！！！（ビシッ！！！！）」

サッカー部の顧問が翔に最後の見送りをするかのように軍人形式の挨拶をし、部活動の生徒は一斉に敬礼をする。

『翔、あいつらはお前に別れの挨拶をしているぞ？』

「アイツラ後で絶対にぶっ殺す！！！！」

『あいつらを殺すより目の前の事に集中しないとね』

「そんな事はどうでもいいわ！！！！旅人さん！！！！私に婚姻届を！！！！そして結婚式を！！！！ハネムーンを！！！！！！」

『はいはい、分かっています。（ゴソゴソ……ピラッ）これが翔の名前と実印入りの婚姻届です　どうぞお受け取り下さい』

「やめろ！！　アンタは俺様を人生の墓場のどん底に落とすつもりか？！！」

私が船越先生に婚姻届を渡そうとすると、翔は渡すまいと必死にもがいていたが無駄な抵抗であった。

『翔、これが君の運命だから素直に受け入れろ』

「やめろおおおお！！！！！！」

船越先生は婚姻届を受け取るうとした……しかしその時。

混沌物語 ？（後書き）

ケダモノ雄二を受け入れる霧島でした〜！！！！

おまけでは翔が地獄に行っちゃいそうです

皆さん、遊佐翔のご冥福をお祈り下さい！！！！

感想をお待ちしております！！

混沌物語 ？（前書き）

では次に雄二から明久に変わります。

それではどうぞー！

## 混沌物語 ？

「うむ、ここのコーヒ―は美味しいのう。明久のカフェオレはどうじゃ？」

「う…うん。僕のも中々美味しいよ」

秀吉は明久を連れて学園を出た後、喫茶店へ行っていた。二人は向き合う形で座っており、注文した物を飲んでいる。

「ね…ねえ秀吉。姫路さんと美波をあの人に任せてもいいのかな？  
ちよつと不安なんだけど……」

「よいのじゃ。旅人殿の事じゃから何かをしておると思うが、そんな非道な方では無いと思うのじゃ」

明久は姫路と美波の安否を気にしているが、秀吉は全く気にしていなかった。

「で…でも……僕たちがここでお茶している何て二人に知られたら……」

『心配無用だよ明久』

「うわ?! ……ま…また貴方ですか……」

「相変わらず神出鬼没なお方じゃのう……一体どこから入ってきたのじゃ？」

私の登場に明久は驚き、秀吉は喫茶店の出入り口を見ながら私が何処から入ったか聞き出している。

注) 因みにこの私も影分身である

『フッフッフ……それは企業秘密ですよ』

「企業秘密って……」

「それが何なのか聞いてみたいのじゃが？」

『まあまあ、私の事なんてどうでもいいでしょう。それより、姫路と島田の事だけどね……』

明久と秀吉は疑問に満ちた顔をしているが、私はさっさと本題に入りたかったので二人に説明した。

『あいつらにはすぐ家に帰る様に暗示をかけておいたよ。今日一日限りだけど、君たちの邪魔を一切しない様にしてあるから安心しろ。まあ邪魔した所で私が制裁してやるがな……クッククク……』

「「「……………」」」

私が笑みを浮かべていると明久と秀吉は若干引いていた。

『そう言うわけで、君たちはデートを楽しむといい。と言うか2人とも、デートプランとか考えてるの？』

「そ……それが……まだ決めてないんだよね……」

「ワ…ワシもじゃ……」

『……………まあ、秀吉が突然デートしようって言ったからプランが無いのは当然か……』

それは仕方ないなと私は付け加える。

「あ…あれは、お主がいきなりあんな事を言うからワシは……」

「何の話ですか？」

『ふふふ……それはね……』

「……！！（パンツ！）旅人殿！！言わなくていいのじゃ……！！」

明久の質問に私が答えようとすると秀吉がテーブルを叩きながら、真っ赤な顔をして私を睨んでいた。

『はいはい秀吉、そんなに怖い顔するなって』

「どうしたの秀吉？ 旅人さんを睨んじゃって……」

「……………な…何でも無いのじゃ」

『……………まあ、明久を葉月ちゃんとデートさせる何て言ったら嫉妬するのも当然か（ボソッ）』

「……！！（キッ！）」

『あ…分かった分かった……もう言わないから……』

私は秀吉に降参するかのようにな手上げた。

「秀吉……そんなに怖い顔をしちや駄目だよ。折角の可愛い顔が台無しじゃないか。それに旅人さんとはかり話していないで、僕にも話しかけて欲しいんだけど……」

「明久……す……すまぬ」

『……秀吉を一瞬で静めるとは流石だな……つか明久……秀吉と話している私に嫉妬されても困るんだが……』

「秀吉は僕の大事な恋人なのに、貴方と秀吉しか分からない話をするから当然じゃないですか。これ以上、僕の秀吉にちよつかいかけないで下さい」

『……ほお〜君も言う様になつたねえ〜。』 “秀吉は僕の大事な恋人” か……愛されてるねえ〜秀吉?』

「(////////)」

明久の発言に顔が真っ赤になっている秀吉であった。

「それで、まだ何かあるんですか?」

『いや、もう用は済んだから私はこれで失礼す……おっと、私とした事が忘れてた(ゴソゴソ……スツ)君たちにこれをあげるよ』

私は明久に封筒を渡した。



「何ですかこれは？」

『映画のチケットだよ。プランを考えていない君たちに私からの贈り物だ。受け取りたまえ』

「へ〜…つて！ これ映画の無料パスじゃないですか?! 期限は一年分!？」

『デートプランを考えていないときに使うといいよ。因みにそれは、どの映画も全部無料だから安心しな。おまけにフードやドリンクもタダで付いてくる』

「ええ!？」

凄い貰い物だと驚愕する明久に私は特に気にせず振舞っている。

「こ…これ本当に貰っていいんですか？」

『ああ、遠慮なく使うといい。それにお前、姫路や島田にたかられているから金が無いに等しい状態だろ?』

「……………(ガタッ!!)旅人さん!!……!」

『な…何だ?』

明久がいきなり席を立て私と向かい合うと……………。

「(ガシッ!) ありがとうございます!! 貴方は僕にとって命の恩人です!! 本来にありがとうございます!!……!」

私の手を握って感謝の礼を言った。

『命の恩人って……いくらなんでもオーバーだろうが……』

「いいえ！！ 貴方はホントに素晴らしい人です！！ こんな僕にここまで優しくしてくれる人は貴方が初めてです！！ この恩はいずれ僕の体で返します！！」

「あ…明久！！ お主何を言っておるのじゃ！！」

明久は感謝の言葉のつもりで言っていると思われるだろうが、私にとっては気色悪い礼であった。

『遠慮しとく、私にそんな趣味は無いから……てか離れてくれ……秀吉が睨んでいるぞ？』

「え？ ……ひ…秀吉?!」

私は指をさし、明久は秀吉の方を見ると怒った顔をして立ち上がった。

「ち…違つんだ秀吉！ これはただ……感謝の意味で……」

『おい……それは恋人に見苦しい言い訳している台詞だぞ？』

「旅人殿！！ 明久にそんな羨ましい事を言われるなんてずるいのじゃ！！」

「ごめん秀吉！！ ……え？」

『全く……つて私かよ!?!』

「旅人殿……いくら主様でも明久の気を引こうとするのは許せん  
じゃ!?! ところで成敗じゃ!?!」

秀吉は私に成敗しようと攻撃を仕掛けようとした。

『お……おい……話の流れが何か違うぞ……ここは私じゃなく明久では  
ないのか? ……ええい! ここにいては秀吉に殺される! では私は  
これで失礼する!?! さらば!?! (ピシュツ!)』

と、私は姿を消したのであった。

「あつ! ……き……消えたのじゃ……」

「今のつて瞬間移動? ドラオンールで孫〇空が使っていた技だ  
つたよね? ……あの人つてホントに何者?」

「まさか……今まで突然現れたのはそれを使っていたのじゃろうか  
?」

二人は私に対して更なる疑問を広げていた。

おまけ

私は船越先生に婚姻届を渡そうとしたその時……。

『（キンッ！）ん？』

いきなり頭の中に明久と秀吉に関する情報が流れてきた。

「何をしてるの？！ 早くそれを渡しなさい！！」

「やめろおおおお！！！！」

『……………』

船越先生と翔の声に私は反応せず、じつと動かないで上空を見上げていた。

『……………おいおい秀吉、何を考えている？ 怒る相手を間違えているぞ……………』

「「？」」

私の独り言に船越先生と翔は訳のわからない表情をしていた。

『別に明久の気を引こうだなんてこれっぽっちも思っていない。私はただ…（ブツブツ）』

「旅人さん！！ 何を訳の分からない事を言ってるの？！」

『影分身の私は一体何をしてたんだ？ まあいい、目的は達成したからこれで良しとしよう。後は明久と秀吉があそこで……………（ブツブツ）』

「（何だ？コイツは一体何を言ってる？）」

『これで私のシナリオ通りだな。後は雄二と霧島が（キンツ！）…  
…お？こつちも来たか……』

今度は雄二と霧島を見ていた影の私からの情報が届くと……。

『うわぁ…ケダモノだ…ケダモノが霧島の近くにいる……路地裏で  
あんな（ブツブツ）……まあ霧島は満更でもないからいいか……っ  
ておい！！ 今度は台所でかよ！！』

とんでもない内容に私は声を荒げた。

「ちょっと！！いつまで待たせるの??!!」

「（俺様としてはそのまま置いて欲しい!）」

船越先生は痺れを切らしたのか私に怒鳴り散らしている最中、翔は  
この隙に何とか逃げ出そうとしている。

けれど私はそれを全て無視していた。

『うわぁ……霧島にあんな事やこんな事を……うお！ こ…これは  
……来牙以上のケダモノっぷりだな……いや、もはやアイツは魔獣  
だ……路地裏であんなにしておいて……おいおい……これで何回目だよ  
……もう霧島は確実に孕んだな……あゝあ、こりゃ出来ちゃった結  
婚は決定だよ……って、そんなわけないか。雄二にはちよつとした  
特殊な暗示を掛けて子供が出来ない様にしていたんだった。けど子  
供が出来ないとしても、既成事実には変わりはないからな。仕方な

い…あいつらのプランを後で修正を……（ブツブツ）』

「いい加減にしなさい！！！！ いくら旅人さんでもこれ以上は待てないわよ！！！！ 早く私に婚姻届を渡しなさい！！！！」

私が何時までもブツブツ言っていると、船越先生が痺れを切らして私に怒鳴り散らした。

「（もう少しだ！）」

翔も翔で何とか逃げようと必死に抵抗している。

けど……。

『五月蠅い！！！！ 静かにしてる！！！！（バシユッ！）』

「え？（プスツ……バタツ）」

「お？ しめた、今の内に！…っておい？」

船越先生が五月蠅かったから私はついカツとなって麻醉銃で眠らせてしまうと、翔はその隙に逃げ出そうとしたが何故か納得しなかった。

『よし、これで静かに……あら？』

## 混沌物語 ?

私についてさらに疑問が深まっていた明久と秀吉であるが、考えていても埒があかないので映画館に行ったのであった。

「秀吉、何か見たい映画ある？」

「うむ……ワシはこれと言って特になから明久が見たいやつで構わないのじゃ」

「そ…そう？じゃあどれにしようかな？」

明久はどの映画のパンフレットを見てどれにするか悩んでいた。

「あ、これがいいかもしれない」

ふと目に入った映画の内容に明久はこれにしようかと決めると、秀吉は明久が見ている方へと顔を向ける。

「秀吉、コレを見ようかと思うんだけど如何かな？」

「んん？ これは恋愛物の映画じゃの。珍しいのう、お主がこう言っただけなんて意外じゃぞい」

秀吉は明久が選んだ映画に意外そうな顔をしていた。

「うん。僕は恋愛物の映画は見ないんだけど……内容を見て思ったんだよね」

「何をじゃ？」

「この映画って……僕が秀吉に告白したシーンによく似ているんだよね……」

「な！？（／／／／／／／／／／／／／／／／）…何を言っておるのじゃ明久！！」

さらっと言う明久に告白の事を思い出し始めて、恥ずかしそうに顔を真っ赤にしながら明久に怒鳴った。

「秀吉、顔が赤くなってるよ」

「明久！いきなりそんな恥ずかしい事を平然と言うでない！！  
全くお主はいつもいつも……」

「ごめんごめん、ちょっと秀吉をからかってみたくて」

「か…からかうでない！」

そんな明久と秀吉のやり取りに……

『おい、いつまでじゃれているんだ？君達の見たい映画がそろそろ始まるぞ……』

「え？……あ~~~~！！！！！！」

急に現れた私が話し掛けると、二人は私に顔を向けると大声を上げて指をさした。



「旅人さん（殿）！！」

「こら、指をさすな。失礼だろ」

「何で旅人さんがここに!？」

「お主は先程ワシらと別れた筈では!？」

『そんなことはどうでもいいから、早く受付を済ませて指定のホールに入れ。始まるぞ』

「え? …あ!!」

私は時計に指をさすと、明久と秀吉はそれを見てすぐに受付を済ませてホールに向かった。

『これでよし、と。さて……………（スタスタ）』

明久と秀吉がホールに入ったのを確認した私は指定の部屋へと向かった。

……………

ガチャ バタンツ

『ふむ。ここからあの二人がよく見える。お前も見えるだろ? 久保利光』

明久と秀吉が見える隠し部屋に入り、二人が見えるのを確認すると、私は目の前にいる久保利光に話しかける……………壁に貼り付けられて鎖

で縛られているが。

「吉井君!!! 君はこの男に騙されている!!! 今すぐ引き返すんだ!!!」

『無駄だ。お前が叫んだ所で、明久に届きはしない。ここで大人しく見ている』

私は久保に無駄な努力だと言いながら笑みを浮かべる。

どうして久保が此処に連れて来られたかの経緯を簡単に説明しましょう。

久保は以前（“明久×秀吉 その後”を参照）に嘘だと言いながら現実逃避をしたので、再度2人が愛し合うところを見せようと私は考えた。久保が下校中の際、私が一瞬で捕まえて、この映画館の隠し部屋に転送してこんな状態にしてある……と言っ訳である。

「貴方は吉井君を騙し、僕をこんな状態にして一体何をさせるつもりですか?!」

『何って……お前に現実を教えてやろうと思ってな』

「現実? 何を訳の分からない事を!」

どうやら久保はあの時の事を都合よく忘れているみたいだった。

『……では言い直そう。ここで明久が秀吉と愛し合い、君が付ける隙がどこにも無いと言う事を直に教えて上げるんだよ。映像ではなく実物でな』

「!!!!!!」

私の説明に久保は顔を凄く青褪めると同時に理解した。

「（僕はこれから途轍もない悪夢を見る事になるのか……!!）」

『悪夢じゃなくて、現実だと言ってるだろうが』

私は久保の頭の中を読んで、すぐに言い返した。

「止める!! 僕にそんな物を見せるな!!!!」

『お前の意思なんか関係無い。見る事は決定なんだからな』

「くっ!!!!（今すぐ此処から出て吉井君を助けないと!!）」

久保は必死に抵抗していたが…。

『止めておけ、お前には無理だ。その鎖は簡単に解く事は出来ない。おまけに、それは特別頑丈な鎖でな。どんな怪力な奴が暴れてもソレを干切る事は出来ないから諦める』

天の鎖エルキドゥからは絶対に逃れられんと私は内心付け足す。

「うおおおおお!!!!」

私が無駄だと言っても聞かずに、まだ抵抗していた。

『……………やれやれ、仕方の無い奴だ（パチンツ!!）」

「!!!!（か…体が動かない……声も出せない……）」

私が指を鳴らすと久保は突然ピタツ！と動かなくなった。

『こんなこともあるのかと、お前の全身の自由を奪う為に暗示を掛けておいてよかったよ。今のお前は動く事も、喋る事も出来ない。まあ、意思だけは動けるから安心しろ』

「!!!!（くそ！これでは吉井君を……）」

『さて、見ようではないか。あの二人の愛し合うところを……』

「!!!!（やめてくれええええええ!!!!）」

久保は頭の中で思いつきり叫んでいたが、全ては無駄な事だった。

つづく……

おまけ

映画が始まるつとんでいる時……。

『あちゃ〜。私とした事が……』

私自身が船越先生を眠らせてしまったので婚姻届を渡す事が出来なかった。

「ま……まあいい！これで逃げられるぜ……！ってその前にこれは

いただく!! (バツ! ビリビリ!)」

『あ! くら!』

翔は私が持っている婚姻届を引ったくり、その場で破り捨てた。

「よっしゃ!!これで俺様は解放されるぜ!!」

『あゝあ、何て事を……折角の船越先生の幸せが……』

「俺様にとっては悪夢だ!! それと実印も返しやがれ!!」

『え〜〜〜? そんな〜〜〜!!』

私が嫌そうに言うと……

「ふざけんな(怒)!! もう勝負は付いたんだ!! これ以上こんな茶番に付き合ってられるか!!!!」

『……………仕方ない(ゴソゴソ……………スッ)どうぞ!』

怒気を込めて言ってきた翔に、私は渋りながら実印を出すと、翔はすぐに奪い取った。

「ったく!! 一体何処で手に入れたんだよ!？」

『それは内緒』

「……………まあいい、聞かなかった事にしておく。ついでにアレも出せ」

『アレ？ 何それ、もう君に渡す物は無い筈だよ？』

「とぼけるな！！ てめえ俺様と船越先生のどっちが勝つか賭けたじゃねえかよ！」

『あゝそんなのもあったねえ。けどアレは、向こうの観客が賭けていたお金だよ？ 泥棒は良くない……って』

私は翔に言いながら観客の方を見たが誰もいなかった。

『あらあら、観客は逃げたみたいだね』

「んな事どうでもいい！！ 人の命を賭けていた奴らは後でぶつ殺す！！ その前にその金を全部寄越せ！！」

『……これは君のじゃ無いんだけど……』

『俺様のだ！！ 強いて言うならそれは俺様の慰謝料だ！』

『慰謝料って……』

翔の無理矢理の言い分に私は少し呆れた。

「さっさと寄越せ！！ アンタが渡さないならここで今すぐぶつ殺す！！！！」

『……ほお？ 私を殺すか、それは何故だ？』

私の問いかけに翔は……。

「元と言えば、アンタがあんな放送をしなければこんな目に逢わなかったんだよ……!」

もう完全にキレていた。

『でもさ、お詫びとして綺麗なお姉さんが一杯いる所に連れて行ってあげたでしょ？ だから……!』

「知った事か!! もうアンタみてえな得体の知れねえ奴は俺様が直々にブッコロス!!」

『……あらら……こりゃやる気みたいだね』

私がまたお詫びをしようと言っても翔はもう我慢の限界が切れたのが、私をぶつとばそうと意気込んでいた。

そして更には……。

「俺様に喧嘩を売った事を心の底から後悔させてやる!! 覚悟しやがれ……!」

『ハッハッハッハ、中々面白い事を言っねえ』

翔の背後から悪鬼が出ているかのような怒りのオーラを放出している。

『面白い、では少々遊んであげるよ。さっさとかかって来な、カモンカモン』

「言われなくてもやってやるぜ！……！）ダッ！……！」

そして翔は私に襲い掛かってきたのであった。



## 混沌物語 ？

映画が始まって1時間後……………。

「……………この映画って（／／／／／）……………」

「……………（／／／／／）……………」

明久と秀吉は揃って顔が真っ赤になっていた。

「これ……………僕が秀吉に告白した所と一緒にんだけど……………」

「……………（プイッ！）」

明久はまた秀吉に告白をした感じになり、秀吉はあの時の告白を思い出したのか恥ずかしくて顔を背けていた。

『（フフン そりゃそうだ。何せこれは君達を題材にした映画なんだから あれ？ 久保が妙に大人しいな…どうしたんだ？）』

「……………（あ…ああ……………また…見てしまった……………吉井君…木下君とあんなにくっついて……………」

隠し部屋から見ている私は久保の方に顔を向けてみると絶望する表情をしていた。

『（いや、あれは絶望以上に世界が破滅したかの様な顔だ。……………そう言えばあの二人が映画を見ながらイチャついている時に段々弱弱しくなってたな）』

映画を見ている最中に秀吉は明久の肩にピトツと頭をくっ付け、明久は抱き寄せるかのように秀吉の肩に手を置いていた。

久保はその光景を見ていて弱々しくなり始めたのだ。

『（まあどうでもいい事だ……私は久保が絶望すればいいだけなんだから）』

私は久保を無視して明久と秀吉を再度見始める。

映画で情事のシーンになっている時に、明久は自身の胸に顔を埋めている秀吉を見た。

「（秀吉……恥ずかしかつてる顔が可愛い……）」

「（ワ…ワシは……あんな恥ずかしい事を明久に……）」

もう映画を見る気は無いのか、顔を真っ赤にした秀吉はずっと明久に寄り添っている。

「秀吉……ちゃんと映画を見ないと……」

「ワシは……これ以上……恥ずかしくて見れないのじゃ」

「どうして？確かに告白した所や、今エッチしている所は僕達がしていた事と全く同じだけど別に気にする事は……」

「出来ないのじゃ！あの時の事を思い出して凄く恥ずかしいのじゃ……」

「……………」

明久はこんなかわいい秀吉をいつまでも見ていたいと思っていたが、それと同時に秀吉に欲情し始めた。

「……………じゃあ秀吉……………その羞恥心を一気に無くす方法を知っているけど……………試してみる?」

「え?…そ…それはどんな方法なのじゃ?」

「それはね……………こつする事だよ」

「明久?……………んむ!……………」

明久は秀吉の顎をクイツと持ち上げてキスをする、秀吉は明久になすがままにされるが如く、舌を絡まされる。

「ん……………んあ……………んちゅ……………んむ……………ちゅ……………ああ……………んむつ……………ちゅぷ……………はあ……………はあ……………」

「ふふっ……………どう、秀吉?」

「明久……………ずるいのじゃ……………ワシにそんなやさしいキスをするなんて……………反則じゃ……………」

「じゃあ……………落ちついたんなら、ここまでにする?」

「……………お主と言う奴は……………ワシをその気にさせておいて……………止めるなんて酷いのじゃ……………」

秀吉は椅子に座る明久に抱きつくようにまたがり、ねだる様な表情をした。

「明久……ワシはもう我慢出来んのじゃ……ここでワシを抱いてくれ……」

「ここは映画館だよ秀吉……いいのかい？」

「そんなの構わんのじゃ……ここはワシとお主の二人だけじゃから問題無かるう……それに明久……お主のここもその気になっておるではないか……」

秀吉は明久の股間に触ると物欲しそうな表情をしていた。

「明久…頼むのじゃ……ワシを抱いてくれ……」

「わかったよ秀吉。すぐに気持ちよくさせてあげるから」

「あきひさぁ……んん……」

秀吉は明久にキスをしてエッチを始めた。

『おお……始めた様だね』

何度も言うが隠し部屋から明久と秀吉のしている事は此方から丸見えである。

『秀吉から明久を誘うとは……そんなに明久とエッチしたかったのか……あれボーイズラブの筈なのに、何故か男女愛のノーマルラブ

に見えるんだよね。不思議な事だよ……そう思わないか久保？」

「……………」

『何だ……もう抵抗する気力が無くなったか？……っておい……』

私は反応しない久保の方を見ると、そこには真っ白な石像が立っていた。

私はその石像に近づき……。

『……………（コンコン）…硬！……………ホントに石になっちゃってるよ。てっきり“あし〇のジヨ―”みたいに真っ白になるかと思っていたけど、まさか石像化するとは……予想を遥かに上回ったな……………』

どうすればいいか悩む私であったが、取り敢えず鎖を外して持ち上げてみると凄く重かった。

『コイツ中身まで石になってるな……………どうしよこれ』

私はさらに悩む。

『う〜〜ん……………そうだ！久保にあの二人の声を聞かせてみるか……………よし……』

私は久保に二人の声を聞かせる為に、音を拾える様に設定しようと思いつく。だがそれは間違っていた。私がやるうとしている事は久保に最後の止めをさす行為だったのだ。



今更それに気付く私であった。

『……………さて、久保の灰を集めて再生させよう……………』

私は目的を達したので、久保の灰を一瞬で集めて退散した。

おまけ

明久と秀吉が映画を見ている時……………。

『さあ来〜い翔ちゃ〜ん　遊びましょ〜』

私はおちゃらけたかのように翔を挑発すると……………。

「アンタをぶったおし、そして金を手に入れてやる！！（ビュオツ！！）」

『ほお（ヒュツ！）……………中々のパンチだね、当たったら痛そうだ』

怒りの籠った翔のパンチをかわしながら賞賛していた。

「この程度の攻撃で俺様の攻撃をかわせると思ったら大間違いだ！俺様の本気を見せてやる！！　覚悟しやがれ！！！！」

『やれやれ、しょうがないなあ……………』

そして翔はパンチやキック等の攻撃をしてくるが……………。

ビュオ!…ヒョイツ…ビュオ!…ヒョイツ…

攻撃 かわす 攻撃 かわすの繰り返しだった。

「くそ! ちょこまかと動きやがって……………!」

『…………確かに凄いなえ〜。でもまだまだだよ では今度は此方から攻めさせてもらおうか』

「させるか!!(ビュオッ! ブオンッ! ビュッ!)」

『おっと!(ヒュッ!) 私に攻撃をさせないつもりか?(ヒュッ!)  
じゃあ(ピシユッ!)』

「なっ!?!」

私が一瞬で姿を消し……………。

『(ピシユッ!)(こっちだよ)』

「!?!!(ビュオッ!)」

『残念 (ピシユッ!)( )』

目の前に現れては、翔が攻撃をしてもまた姿を消していた。

『(ピシユッ!)(鬼さんこちら)(ピシユッ!)(手の鳴る方へ)( )』



『ピシュッ！』

「くそっ！！ さっきから消えたり現れたりしやがって！！ 反則だぞコラ！！！！」

完全に私に遊ばれている事に気付く翔は更にイライラしながら攻撃をしている。

『（ピシュッ！）ではこれでどうかな？（パチンッ！）』

ジャラジャラジャラ！！！！

私が指を鳴らすと翔の周りの空間から鎖が出てくると、鎖は翔の全身に巻きついて縛った。

「な……何だ！？ ……っておい！！ 何だこの鎖は！！！！」

『天の鎖エルキドゥだよ』

「それFaOeのギルOメッシュの宝具じゃねえか！！ 汚ねえぞ！！！！」

『ハッハッハッハ！ 負け犬の遠吠えにしか聞こえないねえ……さて、もうこれで君の身動きは取れないねえ。どんな攻撃をしてあげようかな？』

「！！！！！！」

完全に私が優勢となっている事に翔は戦慄する。

『フッフッフッフ、そう緊張する事は無い。私は別に暴力を振るったりはしないよ。私がやるつとするのは……これだ！（パチンツ！）』

私が指を鳴らすと“ある物”が出てきた。それは……。

「そ……それはまさか！」

『そう……君の大好物な食べ物だよ』

色々な種類のあるカツであった。

床に絨毯が敷かれると、豚カツ・チキンカツ・串カツ・ハムカツ・カツ丼・カツカレー・カツサンド等が置かれていた。

『ここにある物は全て最高級の肉が使われている。お前が食っているカツとは比べ物にならない位にな』

滅茶苦茶美味いぞと私は付け足す。

「ああ……カツが……カツが……俺様の目の前に……」

『言っておくが君は食べれないよ』

「な……何だと……」

カツを食べれないと分かった翔は物凄く驚愕する。

『君にとっては拷問に等しいだろう？ けどさ……ここにあるカツ全てを君の目の前で私が全部食べるって言ったらどうする？』

「!!!!!!」

翔にとってそれは死刑宣告に等しい言葉であった。

『さうて、どれから食べようかな?』

「ま…待ってくれ! 俺様が悪かった!! アンタのやった事は全て水に流す!! だから……俺様にもカツを……」

食わせてくれ!と言おうとした翔に…。

『ふっ………(スッ)やなこった(パクッ!)ついでに“地獄の幻想”でも見ながら、私が食べている所を見てな(パチンッ!)』

「!!!!!! アアアアアアア~~~~~!!!!!!」

私は無視してカツを食べ始めると同時に、指を鳴らして翔の頭の中に“地獄の幻想”のイメージを叩き込んだのであった。

## 混沌物語 ？

翌日の朝。

『さてさて、私の予想が正しければ……………（スッ）』

私は文月学園に訪れてFクラスを廊下から覗いて見た。

そこには……………。

「諸君、ここはどこだ？」

「最後の審判を下す法廷だ！」

「異端者には？」

「死の鉄槌を！」

「男とは？」

「愛を捨て、哀に生きる者！」

「宜しい。それではこれより、2・F異端審問会を開始する！」

案の定、不気味な覆面を被ったFFF団が教室に入ってきた。明久と雄二を取り囲んでいた。FFF団の連中が持っているそれぞれの手には、釘バット・スタンガン・鉄パイプ・木刀・カッター等の凶器を持っていった。予想がついていたとは言え、こうも簡単に自分のシナリオ通りに進んでいると、逆に予想している私がバカらしくなる。

なと思ってくる。

『（しかし、妙だな……）』

明久のデートに関して奴らは知らない筈なのに、明久も雄二と一緒に囲まれているのは何故か私には分からなかった。

「なんだよお前ら、朝っぱらから元気だな……」

「ど…どうしたの皆！ 何でそんなに恐ろしい殺気を出しているの！？ 僕等が君達に何かをした覚えは無いんだけど!？」

雄二は相変わらず冷静に返答しているが、明久はFFF団の殺気にかなり引いている。

「吉井・坂本、貴様等は我等の血の盟約を悉く踏みにじった挙句、やってはいけない事までしたそうだな!!!」（バツ!）」

FFF団代表の須川が覆面を取ると、須川の目には涙が出ていた。ただの涙ではない。それには赤色が含まれている。所謂、血涙であった。そして口からも唇を嚙んでいるのか血が出ている。

「……てめえらよくもおおお!!!」「」「」

他のFFF団も覆面を取ると、須川と同様に目から血涙と口からは血が出ている。

「おい明久、こいつらは一体何でこんな状態になっているんだ？ 俺には全く身に覚えが無いんだが、お前の仕業か？」



「(ゴゴゴゴゴゴ!!!!)アキ、それはどう言う事かしら?」

姫路と島田が教室に入った際、須川の叫びを聞いた瞬間に物凄い殺気が溢れていた。

「ひ…姫路さん!! 美波!!」

言うまでもなく明久は二人の登場に恐怖しながら後ずさりする。

「ねえ雄二!! どういう事!? 何でここにいる皆が知ってるのさ?!」

「んなもん俺だって知りてえよ!!」

明久と雄二は互いに問い詰めあっていた。

「あ! そういえば旅人さんが…」

「ああ? アイツがどうした!？」

「邪魔しない様に暗示をかけていたって言ってたけど須川君達に掛けていないんじゃない? あの時、姫路さんと美波に掛けたって言ったから…」

「って事はアイツがしくじったのか!？」

『(失敬な。私がそんなへマするわけ無いだろ……ん?……秀吉か……)』

私は明久と雄二の発言に少しムツとしている時に、登校して来た秀

吉が私の姿を見てこっちに来た。

「旅人殿ではないか。こんな所で何をしておるのじゃ？ それになにやら教室の方が騒がしいのじゃが……」

『何かちよつと妙な事になつていてねえ』

「？」

秀吉は私の台詞に首を傾げるが……。

『いやねえ、FFF団がどうやって昨日の君達のデートを知っているのかと疑問に思つてるんだよ』

「な……何じゃと！？ お主はあの時に暗示を掛けておいた筈ではないのか！？」

私の発言に状況が飲み込めた様だ。

『その筈なんだけどねえ、確かに私は暗示を掛けたんだよ。でもアイツ等は何故か知つているから、それが不思議で……』

「……もしかして旅人殿は須川達に掛け忘れたのではないかのう？」

『君も明久と同じ答えか……残念ながら違う。私はちゃんとあいつ等にも掛けた……ん？ ……いや待てよ……もしかしたら……』

私が秀吉に訂正をしている途中にふと考えたその時……。

ガラッ！



『おや?』

「何じゃ?」

私と秀吉が教室の戸が開いた音が聞こえたのでそこに目を向けると……。

「いたぞ!! さすらいの旅人だ!!! 今すぐ捕まえろおお!!」

「!!!」

須川が私を見つけてすぐ団員に私を捕らえる指示を出して、団員が私を逃がさない様に囲んだ。

姫路と島田も須川の指示に従っている様だ。

『おやおや、これはこれは……異端審問会の皆さんではありませんか。お早う御座います』

FFF団とは一応初対面なので、私は一通りの挨拶と礼儀を持って接した。

「挨拶はどうでもいい! さすらいの旅人、どうやら貴様が諸悪の根源らしいな!!」

『はあ?』

代表の須川がいきなり私に失礼な事をほざいてきた。

一体何故か……。

おまけ

一方、Aクラスでは……。

「……早く子供が出来ないかな……」

「吉井君が……吉井君が……吉井君が……（ブツブツ）」

「……………」

「……ねえ優子、あの3人どうしたのかな？」

「そんなのあたしが聞きたいわよ！ 代表は体調が悪い割には幸せそうな顔をしてお腹に手を当てるし、久保君は真っ白になりながら机に突っ伏してブツブツ呟いてるし、翔はあり得ない程ずつと無口になってる始末で……一体何があったのよ……」

登校した霧島・久保・翔の行動に、工藤と優子はどう対応すればいいのか分からなかった。

「代表はまだいいんだけど、ボクが一番気になるのは久保君と翔君の状態が……」

「あの二人があんな異常とも言える状態の原因は一体何なのかしら？」

疑問が深まっている工藤と優子であった。

## 混沌物語 ？

『諸悪の根源？一体何を仰っているのですか？』

私は何となく予想はついていたが、確認の為に聞いてみた。

「ある筋からの情報で貴様は、異端者共のデートを画策していた様だな！ 坂本には霧島を、吉井に木下とデートさせたな！！！」

『ほお、よくご存知ですね。何処からそんな情報を手に入れたんですか？』

「我が同胞のムツツリーニからだ！！貴様がそんな大罪を犯していたと聞き、俺達の心がどれだけ荒んだか貴様には分かるまい！！許せん！！！！」

「！！！！」許すまじ！！！！！！ さすらいの旅人！！！！！！  
！！！！」「！！！！」

須川と残りのFFF団の団長の叫びに私は……。

『（……やはりムツツリーニだったか。アイツの事だから盗聴器を仕掛けて録音していたんだな。確かに記憶操作と妨害阻止の暗示を掛けたが、録音した盗聴器の内容を聞かない様にとの暗示はしていなかった。……これは盲点だったな）』

ムツツリーニが定期的な作業をやることに失念していた。

『（雄二が霧島とイチャ付き始めたから、いつでも須川に報告出来

る様に仕掛けていたか。秀吉は元から仕掛けていたんだろうけど……)………。そうですか。所で情報源であるムツツリー二君の姿が見当たりませんか？ ……。後、明久と雄二はどうしたんですか？ ……。貴方達がこんな短時間である二人を始末したとは考えられないのですが……。』

コイツ等はじっくりと制裁を下す連中だと私は知っていた。

「ムツツリー二は俺達に情報を託して華々しく散っていった。そしてこう言った。“……諸悪の根源に死を！”と。異端者共は後で制裁する為に十字架で磔にしている！！ だから先ず最初に貴様を殺す……！！！」

「……………絶対殺す……！！！！」……………

『……………(ムツツリー二は大方、録音した内容を聞いている途中で、鼻血による出血多量で倒れたんだろうな)』

私はコイツ等の言っている事に呆れながらムツツリー二がいない理由を推測すると、須川達は構えた。

「さすらいの旅人さん、いくら貴方でもこればかりは許せません！！お仕置きです……！！」

「よくもアキを木下とテートなんかさせたわね……！ 絶対に許さないんだから……！！」

姫路と島田も同様に構える。

「お……お主等……！！ 落ち着くのじゃ……！！ 旅人殿を殺すなんてそ



「はい!!」

「ええ!いつでもいいわよ!!」

FFF団+姫路+島田は準備万端の様だ。

「では……………コロセエエエエ!!!!!!」

「……………死に晒せえええ!!!!!!」

「覚悟して下さい!!」

「骨折程度じゃ済まさないんだからね!!!!」

バカ共は一斉に私に襲い掛かってきた。

『ふん、バカが。数で攻めた所で貴様等が私に勝てると思ったたら大間違いなんだよ!(パチンツ!)』

私が指を鳴らすと……………。

「……………ぎゃあああああ……………」

「……………きゃあああああ……………」

バタバタバタバタ!!!!!!

FFF団+姫路+島田が悲鳴を上げて倒れ……………。





『フフ……何でしょうねえ。まあそんなことは後回しでいいから、早く吊るされている明久と雄二を助けに行くぞ。恋人の明久を助けたくないのかい？ お姫様？』

「！！！！ 大きなお世話じゃ！！ それにワシは男じゃ！！ 明久！ 今ワシが助けに行くぞい！！（ダツ）」

私と秀吉はすぐに教室に入って吊るされている明久を助け、そして雄二を助けた。

「大丈夫じゃったか明久！？」

「う…うん、ありがとう秀吉。助かったよ」

明久は秀吉から状況を説明した後、イチヤ付き始めた。

『やれやれ、イチヤ付き始めるとは……まあいい。雄二、来牙に伝えて欲しい事があるんだが……』

雄二に来牙が来た時の状況の説明とAクラスに来るように伝言を頼む。

『じゃあ雄二、来牙に伝えておいてくれよ』

「ああ、分かった」

そして私は次の目的地であるAクラスへと向かった。

おまけ

「何だこの状況は？ 一体何があった？」

「お、来たか来牙」

「雄二、状況を説明して欲しいんだが……」

「今説明する」

来牙が教室に入って来たので、雄二は状況の説明と私からの伝言を伝えた。

「……………なるほど、そう言う事か。バカな奴等だ。“さすらいの旅人”さんを殺すなんて無謀極まりないな。それとAクラスに行けばいいんだな？」

「ああ、アイツからの伝言は以上だ」

「何で呼ばれたか知らんが行ってみるか（スタスタ）」

来牙がAクラスに向こうとしたが…。

「あつ…待つんじゃないや来牙！ お主に聞きたい事があるじゃ！」

「なんだ秀吉？」

秀吉は来牙を引き止めて、ある事を聞こうとした。

「実は旅人殿があ奴等が今見ている幻想は来牙も知っておると言っていたのじゃが、心当たりは無いかの？」

「んなもん俺が知るわけ無いだろ……」

「確かキーワードが「宮永源三」・「5人」・「バニー」・「サービス」と言えば分かると言っておったのじゃ。来牙の祖父殿の事を指している様なのじゃが……」

「……………」

来牙は秀吉がキーワードを言った途端に顔を青褪めた。

「どうしたのじゃ来牙？ 顔が青いぞ？」

「……………そう言う事が……………」

「知っておるのか？ だったら教えてもらいたいのじゃが……」

「秀吉……それは聞かない方がいい……じゃあ……………」

「あ……来牙！？ まだ話は終わってないのじゃ！」

来牙は口に出したくないのか、早々にAクラスへと向かった。

## 混沌物語 ？

『さてさて、Aクラスのあの3人はどうなってるかな？』

私はAクラスに入って霧島・久保・翔の様子を窺う。

『お〜、予想通りの状態ですな〜』

「ん？ あの〜どなたですか？」

『これはこれは工藤さんではありませんか。初めまして、私は“さすらいの旅人”と申します。以後お見知りおきを』

工藤はAクラスに入った私に気付くと、私は工藤に挨拶をした。

「あ、此方こそ宜しくです（ペコッ）えっと……ボクの事を知ってるんですか？」

『ええ、知っていますよ。貴方だけでなく、此処にいるAクラスの数名を……』

「そうなんですか。所で此処に来たのは一体何の御用ですか？」

『おっと！ 私の事は“旅人”って呼んでくれ。それと敬語使う必要は無いから』

工藤の質問に私は呼び方を変える様に言う。

「そうなの？ じゃあボクの事を愛子って呼んでいいよ」

『いやいや、会って間もない女性を相手にいきなり名前で呼ぶ訳には……』

「ボクも旅人さんと同様に堅苦しいのは好きじゃないから遠慮なく呼んで」

『そうか……では愛子ちゃん、以後宜しく』

「此方こそ、旅人さん」

そして仲良くなった私と愛子であった。

「で、もう一回聞くんだけど、今日は何の用で来たの？」

『ちょっとあそこにいる3人の様子の確認をね』

私は霧島・久保・翔の方向に指をさす。

「確認つて……旅人さんは代表達がどうしてあんな状態になっているのか知ってるの？」

『ああ。霧島はともかく、久保と翔をアレにしたのは私だよ』

「ええ!?!」

私がさらっと言つと工藤は驚いた。

「い……一体何をやったの？」

『久保はちょっとした失恋で、翔は“地獄の幻想”と拷問をやったんだ……まあ拷問と言ってもそんな対したことじゃないが、翔にとつては拷問に等しいね……』

「……………久保君は大体予想が付くけど、翔君にやった“地獄の幻想”と拷問って何？」

「それはね……………」

私が工藤に説明しようとした時……………。

「ちよつと貴方!!…ここで何してるのよ!？」

『ん?』

「あれ? 優子じゃない」

木下優子が私を見て大きな声を出すと、私と工藤は優子の方に顔を向けた。

『おやおや、今度は木下さんか。初めまして、私は“さすらいの旅人”と……………』

「そんな事どうでもいいわ!! 何で学園の関係者じゃない人がここにいるのよ!??」

「優子、そんなに大声を荒げて言わなくても……………」

声を荒げている優子を工藤が宥めようとしたが……。

「愛子！ どうしてすぐに追い出さないのよ！？ それに見るからにこんな怪しい人を！」

『（ムツ）初対面の相手に向かって随分辛辣ですな』

優子の発言に私はムツとした。

「当然じゃない！！ 貴方、昨日に続いて今日も騒ぎを起こしておいてよくそんな事言えるわね！？」

『はて？何の事やら……』

「惚けないで！ あなたが騒ぎを起こしたのは学園中に知れ渡っているわよ！？ それにさつきから旧校舎側で聞こえる叫び声はあなたの仕業なんでしょ！？」

私は惚けたふりをする。優子は叫び声が聞こえる方向に指をさしながら私が犯人だと決め付けた。

『……………どうして私だと決め付けるんですか？ 私がやったと言う証拠は無いでしょうに……………』

「教師でも生徒でもない貴方がここにいるのはおかしいでしょ！？」

『…………………………大正解！！ お見事です木下さん！！！！』

「…………………………正解も何も犯人は貴方しか思い浮かばないんだけど……………」

私が賞賛すると優子は凄く呆れながら言う。





『ああ、あいつの（ドキューン！）は衰え知らずだったよ。な（ズギューン！）がこれ以上出来ないと分かると次は霧島の口でフ（バキューン！）させてたぞ。霧島の頭を掴んで腰を振って……何度もせ（スガーン！）を出して。霧島も雄二のせ（ドツカーン！）を美味しそうに飲んでたよ。それから……』

「もういい！！！！ それ以上言わなくていいわ！！！！」

私が説明している途中に優子が中断させようとした。

『おい、まだ途中だぞ』

「優子、まだ続くんだから最後まで話を……」

私は優子の中断宣言に不満を言い、工藤は最後まで聞きたいのか優子に話を続けさせようとしたが…。

「朝っぱらからそんな話は聞きたくないわ！！ もう分かったから次行きなさい！！！！ ここには他の生徒もいるのよ！！！！」

『「え……？」』

私と工藤は非常に残念そうに言った。

「旅人さん、それ以上風紀を乱す発言をすると（スツ）」

『あ……はいはい……分かったよ』

優子は近くにある椅子を投げようとしたので私は仕方なく中断した。

『（あらあら、他の子も聞いてたのね）』

私が周囲を見ると他のAクラスの生徒が私の話に聞き耳を立てていたらみたいで、男子は想像していたのか股間に手を当てており、女子は優子と同様に顔が真っ赤だった。霧島・久保・翔は全く聞いていなかったが。

『愛子ちゃん、済まないけど霧島の話はここで終わりだ』

「ええ！？ そんなあ~~~~~！」

『私も不本意だが、これ以上言うと木下さんが黙っていないからね……後で話してあげるから（ボソボソ）』

「ホント！？ 絶対だよ！ じゃあまた後で（ボソボソ）」

私が工藤に耳打ちをすると、工藤は了承した。

「それにしても坂本君……代表とそんな事したんなら責任取らなきゃね」

「アタシとしては、どうしてあんなのがいいのか理解できないわ……」

『いいじゃない。人様の恋愛に我々が口を出す物じゃないよ。まあこれで、霧島は晴れて“坂本翔子”になっただも同然……』

私が坂本翔子と言つと……。

「……………呼んだ？」

『……………呼ばれた途端にすぐ来たね、霧島…』

「……………私は雄二の妻だから」

霧島はすぐに私の近くに来た。

「代表……………よく聞こえたね……………」

「……………アタシはそれより、代表が一瞬でここに来たのが驚きなんだけど……………」

工藤と優子は全く話を聞いていなかった霧島のいきなりの登場に驚いていた。

『所で霧島、昨日はどうだった？』

「……………素晴らしかった」

『そうかそうか、それは何より』

「あれ？ 代表って旅人さんと知り合いなの？」

私と霧島の会話に工藤が聞いてきた。

『ああ、霧島とはちょっとした関係で……………』

「……………私と雄二の仲を後押ししてくれる友人」

『嬉しい事を言ってくれるねえ〜霧島』

霧島に友人と言われて私は笑みを浮かべる。

「へえ、そうなんだ」

「……………代表はどうしてこんな得体の知れない人を……………」

「……………所で話は変わるけど、旅人さんはどうしてAクラスに来ていの？」

『（……………質問をするのはさっきまでの私の話を聞いていなかったという事か…それだけ昨日の余韻に浸っていたのか）……………ああ、愛子ちゃんと木下さんに久保と翔が何であんな状態になってるのかを説明しようかと思ってるね』

「……………そう。私もあの二人の事は気になってた」

『（さっきまで君の事を話していたんだけどね……………）』

ここで下手に霧島に先程の事を言うと延々と惚気話が続きそうだから、私は霧島にさっきまで話していたことを伏せた。

「……………旅人さん、どうしたの？」

『いや、何でも無い。では久保が何であんなになっているか説明しましょう……………』

「……………ねえ優子、旅人さんってさっきまでの話を無かった事にしてるよね……………」



通行の妨げとなっているFFF団+姫路+島田は来牙以外にも他の生徒に迷惑を掛けていた。



男子で秀吉が取られたのが相当ショックだったんだな。一斉にカミングアウトしたね。』

私は3人の反応よりAクラス生徒達の反応に呆然としていた。

「…………ボクとしては吉井君と弟君の関係よりこっちの方が凄いなと思うんだけど」

「…………愛子、人にはそれぞれ秘密にしている事はあるんだから」

『秀才なAクラスもFクラスと同様に、変人がたくさんいましたな。何か弱みを握っちゃいましたね。(書き書き)』

私の目の前でカミングアウトしちゃったんだからと言いながら私はさらさらとメモする。

「旅人さん、さりげなくメモしているけど？」

『気にしない気にしない』

愛子は私にジトツと見ながらも私はメモを書き続けた。

「……………あ……………あ……………ああ」

『ん？ どうしました木下さん？』

私は顔を俯いている優子の顔を覗くと……………。

「アンタは何考えているのよ……………!!……………!!」



ドッカーーーーン!!!!!!!!!!

と爆発した。

『お~~~~、火山が噴火した様な憤りですな』

「アンタね~~~~!!!!!!!!!!」

「ちょ!? (ガシッ!) ちょっと優子!??」

「………… (ガシッ) 優子」

優子は私に掴み掛かろうとしたが、工藤はそれを阻止する為に羽交い締めを行い、霧島は優子の正面に立って両肩を抑えていた。

「優子!! 落ち着いて!!!!」

「………… 優子、旅人さんに乱暴は……」

「離して愛子!!! 代表!!!! あたしはアイツを始末しなければいけないわ!!!!!!!!!!」

「始末って………… そんな事しちゃダメだよ!!!」

「………… 優子、私はこの人の強さを知っている。優子が挑んだ所で返り討ちに遭うだけ。それに私は返り討ちにされる優子を見たくない」

「それでもやらなければいけないのよ!!!!!! だから離して!!!」

優子は工藤と霧島の説得を聞かずにジタバタと暴れている。

『（ふむ、困ったな。これじゃ落ち着いて話が出来ない。どうしよう……）』

私が優子をあんなにさせた元凶でありながら、どうすればいいかと考えていた。

『（仕方ない……私が優子を落ち着かせよう……ちょっと2人も、木下さんから離れて……）』

私はある事を考え優子を落ち着かせようと決めて、優子と霧島に離れるように言おうとしたが……。

「優子……！ 駄目だよ……！」

「……優子……！」

工藤と霧島は優子のあまりの抵抗に思わず怯んで優子を離してしま……い……。

「この……！（ガッッ……！）」

優子は私の胸倉を掴む。

「アンタって人は……！ よくもアタシの弟を……！」

『……………』

「覚悟しなさい……！ ただじゃ済まさないんだから……！」

『……………ねえ木下さん……一つ聞いていいか?』

私は少し声を低くして優子に尋ねた。

「何よ!?!」

『君は何故そんなに怒っているんだ? 怒る理由があるのか?』

「何訳の分からない事を言っているのよ!! 弟に人としての道を踏み外させておいて!!」

『という事は、君は秀吉の為に怒っているのか?』

「当たり前でしょ!?!」

『……………ほづ?』

私は優子に胸倉を掴まれながらも笑みを浮かべた……それも蔑みを含んだ笑みを。

「何がおかしいのよ!?!」

『いやいや、前に秀吉を虐待した君からそんな台詞を聞けるとはな……………』

「!?!?!?!」

優子は私の発言に体がビクツツとして胸倉を掴んでる腕の力が弱まると同時に教室も静かになった。

『木下さん……そろそろ離してくれ、苦しいから（バシッ！）』

「あつ………」

私は胸倉を掴んでいる優子の腕を振り払いながら少し離れる。

「ちよ！ ちよつと旅人さん！？ 何でそれを知ってるの!?!？」

「……旅人さん、その話は」

工藤と霧島は此处でその話題は不味いと止めようとしたが……。

『おつと、悪いがここからは私と木下さんだけの話しにさせてもらうよ（パチンッ!）』

私が指を鳴らすと私と優子以外の周りがすべて停止した。

「あ…あれ、代表？ 愛子？」

優子はいきなり周りが全て止まった事に戸惑った。

『落ち着け、今この世界全体の時間を停止しただけだ。動ける私と君以外はな………』

「て…停止って………」

『君にとっては好都合だろう？ これから話す事について』

「………」

優子は先程の話を思い出したのか、再度ビクツとした。

『愛子や霧島は問題ないだろうが、他の生徒の前で話してもいいなら時間を元に戻すが？（スツ）』

私が指を鳴らす仕草をすると……。

「ま…待って！？ ……戻さなくて…いいわ」

『そっかい？ なら早速本題に入ろうか』

優子がしなくていいと言ったので、私は指を鳴らすのは止めて話を再開させた。

『えっと？ どこから話していたんだっけ？』

「……………あなたが『秀吉を虐待したあたしからそんな台詞を聞くとは』からよ」

『あゝそういえばそうだったねえ』

私は思い出したかのように言うと、優子は顔を顰める。

「……………本題に入ろうとしながら人に聞く？」

『君がちゃんと覚えていたかどうかの確認をしたまでだよ。忘れていたら、映像を見せてやるうと考えていたけど……………』

「……………（嫌な人）」

優子は私のやる事に嫌悪感を抱いた。

『少なくとも、君が今まで秀吉に対してやってきた事に比べれば、まだマシだと思っが？』

「!?!?!」

優子は何故自分の考えている事が分かるのかと思った。

『フッフッフッフッフ……君の考えている事は手に取るように分かるよ。追い詰められている人間の考えなんてすぐに分かる』

まあその気になれば心を読む事が出来るけど、と私は内心付け足す。

『まあ、そんな事はどうでもいい。さて、私が何故あんな事を言ったのか教えてあげるよ』

「……………」

優子は黙って私の話しに耳を傾けていた。

『それはな……………』

混沌物語 ? (前書き)

今回は少しシリアスな話ですのでご注意ください。

混沌物語 ？

私は近くの椅子に座って話し始める。

『お前が秀吉を虐待した事によつて、秀吉は明久と恋人同士になつたんだよ』

「……………」

『秀吉はお前に虐待されていても学校では何事も無かつたかの様に振舞っていたが、心は酷く荒んでいた。毎日お前にまた虐待されるのではないかとビクビクしながら家に帰っていたそうだよ。それでも秀吉は姉に演劇を続けさせてもらう為に必死で説得しようと根気よく続けた』

「……………」

優子は私の話を黙って聞いていたが……。

『だがお前はそんな秀吉の思いを踏みにじって罵倒した挙句、風呂で秀吉の背中に熱湯をかけながら演劇を辞める様に脅した』

「……………」

優子は何故そんなに知っているのかと言う顔をしていた。

『当事者でもないのに何故知っているってか？ 悪いけどそれは教えないよ』



私は笑みを浮かべながら話しを続ける。

「そして秀吉は風呂での出来事によって心が完全にズタズタになり塞ぎ込む寸前だったが……そんな秀吉を明久が救った」

「秀吉も最初は拒否していたけど、明久の純粋な思いやりで心を癒され、明久に全て打ち明けた。そして秀吉は自分を大切にしてくれる明久に惹かれ始めたんだ」

「お前は明久の事を、成績が悪くて騒ぎばかりを起こす迷惑極まりないバカとしか見ていなかったと思うが実際は違う。明久は確かにバカだ。けどな、アイツは自分がバカだと分かっていながら自分がどうなるうとも、周りに何を言われても大切な友人の為ならば、平然と自分を犠牲にする奴なんだよ。私はそんなバカは嫌いじゃない、寧ろ好きな部類に入るね」

「そんな明久に秀吉はもう惚れたも同然になった……明久と一緒にじゃなければ嫌と言う位にな。そして……」

私はオカルト召喚大会が終わった数日後に秀吉が明久の家に再度泊まった出来事を話す。

「う……ひっく……ひっく……」

私がその話を終えると優子は顔を手で覆い、涙を出しながら泣いていた。

『と言う訳で明久と秀吉は恋人同士になったと言う事だ……おい、何で泣いているんだ？』

「ひつく…ひつく…ひつく…」

『今更自分がやってきた事に対して後悔でもしてるのか？』

「ごめんなさい…ごめんなさい…あたし…」

『謝る相手は私じゃないぞ。それは秀吉に言う事だ……それに何時までも泣くな』

椅子に座っていた私は立ち上がって優子に近づいた。

「ひつく……な…何？」

『で、この話を聞いたお前は どうする？ ここで私をぶっ飛ばすか？ それとも秀吉に今すぐ明久と別れるとでも言いに行くか？』

「……………」

『どうするかはお前の勝手だが、これだけは言っておく。秀吉が明久と恋人同士になった原因はお前だ。それだけは忘れないで貰いたいね。私はあくまで二人の仲を後押しをしただけに過ぎないんだから』

私はこの先も明久と秀吉の仲を応援し続けるからと付け加えると…

…。

「……………アタシ……………」

『ん？』

「……………秀吉に謝らなくちゃ……………今までの事を全部」

『……………』

ようやく口を開いた優子は顔を俯きながら離し始めたので私は黙って聞いていた。

「あたし……………Fクラスの騒ぎが原因で自分が目指そうとしている大  
学に行けないんじゃないかって悩んでた……………そう思っていると、大  
した勉強もしくなく演劇に夢中になっている秀吉を見てアタシはイ  
ライラしてた。どうして自分はこんなに頑張っているのに秀吉はあ  
んなに楽しそうにしているのかって……………」

『……………』

「そんな秀吉にアタシはムシヤクシヤしてその後……………ストレス  
を解消するために秀吉を罵倒したり殴ってた……………でも時間が経つに  
つれてまた同じ事を何度も繰り返していく内に……………今度は演劇を辞  
める様に脅迫した」

優子はまるで私に懺悔でもしているかの様に語っている。

「勉強が全てだから下らない事はすぐに辞めろと言っているアタシ  
は正しい事をしていると思うってた……………けど、それは間違いだった。

宮永君や吉井君に言われるまで…そして、宮永君の妹に罰ゲームをされるまでは……うつく……」

『……………』

優子にとってあの時の事はかなりの屈辱であり、そして自分がどれだけ愚かだったと思いき知らされた出来事だったのだろう。その証拠にまた泣き始めている。

「だから……あたしは……ひつく……秀吉に……」

『もういい、それ以上言う必要は無い』

「え？」

私が優子の話を中断させると優子は俯いていた顔を上げて私を見た。

『お前自身がどれだけ愚かだったと聞けただけで私はもう十分だよ。それにお前はもう秀吉に謝ったんだろ？ だったら謝る必要は無い……』

「でも……アタシ……」

『何度も謝り続けたで過去は消えやしない。それはかえって迷惑な行為だから止めておけ。逆に秀吉が気を遣わせる事になる』

「……………」

『そう言う事だから謝るなよ、いいな？』

「……（コクン）…分かった」

『分ければよろしい（ナデナデ）』

私は優しい声で言いながら右手で優子の頭を撫でた。

「……………（何か気持ちいい）」

『おや？ 随分気持ち良さそうな顔をしていますな。そんなにいいかい？』

「…!!…ち…違つわよ…!!…」

優子は私の手を振り払った。

『因みにこれは来牙のやり方を真似ただけだ。またして欲しかったら来牙に頼むといいよ。アイツの方が気持ちいいから』

絵梨で実証済みだよと私は付け加える。

「~~~~~!!!!（//////////）な…  
何でそこで宮永君が出て来るのよ!？」

優子は顔を真っ赤にしながら叫ぶ。

『だって君、来牙の事が少し気になるでしょ？ だったら私より来牙の方がいいかなあ〜と思って……』

「あんな妹にべつたりな宮永君なんて微塵も思っていないわよ…!!…」

『またまたそんな事言っちゃってえ。だったら私が君と来牙が二人つきりになる様に仕向けてあげようか？ そしたらアイツの事がよく分かると思うよ?』

「余計なお世話よ!!! そんな必要は無いわ!!!」

優子の力強い否定に私は少し悲しい顔をする。

『……………そこまで拒否されると逆に来牙が可哀想な気がするんだが……………まあいいや…（私はその気になれば優子と来牙をデートさせてその後エツチまで……………）』

「旅人さん、何か不穏な事考えていない？」

「（チツ！勘付いたか）…いえいえ、滅相も御座いません」

「……………ならいいけど……………」

私は優子の勘の良さに心の中で舌打ちをした。

『まあ来牙の話は置いて……………で、秀吉が明久と付き合っている件はどうするんだ?』

「……………いいわよ。秀吉が吉井君と付き合う事を望んでいるんなら、あたしはもう口を出すつもりは無いわ」

『おやおや、さっきまで私に凄いい勢いで胸倉を掴んでいた時とは大違いだねえ』

「……………あれだけアタシを追い詰めておきながらそんな事言う?」

優子は私に恨みがましい目で見ていた。

『ハッハッハッハ！ そう言えばそうでしたなあ』

「全く……その代わり……」

『んっ』

優子は腕を組みながら……。

「秀吉が吉井君とデートしていることがあったら、アタシに教えてよ」

私に報告するようにとの条件を出した。

『（……すっかり忘れていたよ。優子が腐女子である事を）』

「で、どうなのよ？」

『……まあそれくらいならいいでしょう。でも報告するのは面倒だから（ゴソゴソ）コレをあげるよ（スッ）』

私は懐から小型携帯テレビを出して優子に渡す。

「これは？」

「秀吉と明久がデートする際に起動するテレビだよ。例えば君が見過ぎてもそれは自動的に録画されるからいつでも見れる。どうだい？ ポーイズラブがリアルに見えるのは……」

「……………凄く良いかも……………」

優子は嬉しい表情をして大事そうに持っていた。

『気に入ってもらえて何よりだよ……………それじゃあ、そろそろ時間を戻すか。何時までも止めて置く訳にはいかないからね（何時までも止めているとランディが勘付きそうだからな）』

「あ……………そういえばそうだった」

優子は私が時間を止めていたことを忘れていた様だった。

『今から時間を戻すけど、その前にテレビを隠していた方がいいと思うよ？他の（腐）女子が知ったら奪い合いになりそうだから』

「！そ…そうね」

優子は私の忠告を聞き、すぐにテレビを隠した。

『じゃあ今から時間を戻すよ。君が私の胸倉を掴む前まで戻すからね、準備はいいかい？』

「いつでもいいわ」

『よし、それじゃあ（パチンツ！）』

私が指を鳴らすと泊まっていた時間が元に戻った。

ほんの少し遡って……………。



混沌物語 ？（後書き）

優子と仲良くなる私でした〜！！！！

混沌物語 ? (前書き)

注) Aクラス生徒達が完全にキャラ崩壊していますのでご注意ください。  
い。

## 混沌物語 ？

私が時間を戻した後、優子は……。

「ちょっと！！ それどういう事よ!？」

前に言った台詞を変えて私を軽く問い詰める感じに言い直すと、私も当然それに合わせる。

『いいじゃないですか木下さん。いくら君でも二人の本気の恋愛に口を出すものではありませんよ』

「だ…だからって……」

優子が若干下手な芝居を打っているかのように言つと……。

「優子、旅人さんの言っている事が本当なら、誰が言ったところでその2人の関係はもう止まらないと思うよ。ここはいつそ吉井君と弟君を祝福しようよ」

「……優子、吉井と木下が望んでいるなら私達が口を出す権利は無い」

工藤と霧島は優子を宥める様に説得した。

『それに、君としては好都合な展開だと思えますけどね』（既に携帯テレビを渡したけど……）』

「……し…仕方ないわね。アタシとしては反対だけど、二人の仲が

そこまで深いんなら、これ以上何も言わないわ（アレも貰った事だし存分に楽しませてもらうわ）」

『（……………下心が丸見えだぞ優子）』

優子は渋々認めたと言う事になっているが、既に私と密約を交わした為か顔が少しにやけており、私はそんな優子に呆れの視線を送った。

「あれ？ 優子にしては随分素直だね……………どうしたの？」

「……………何時もの優子だったらすぐに反対する筈」

工藤と霧島は優子の発言に疑問を抱いていた。

『まあまあ二人とも、木下さんが認めたならそれはそれでいいじゃないですか、ね？』

「うーん……………あの優子がねえ」

「……………意外すぎてちょっと信じられない」

「そ……………そうかしら……………？」

「（やばい……………二人が優子の様子がおかしい事に気付き始めた……………よし、こうなったら……………）」

優子がドモリ始めたので私はある事を考えて実行する。

『Aクラス女子の皆さん！！！！ 吉井明久と木下秀吉が付き合う事に賛成でしたら挙手をお願いします！！ 賛成してくれた方にはB

し本を贈呈します！！！！ それ以外に欲しい物がありましたら、私に言ったださい！！！！』

私がAクラス女子に多数決で決めてもらう様になると……。

バババババツ！！！！！！

「……………賛成します！！！！！！」「……………」

物の見事に餌に釣られた女子たちは一斉に挙手した。

『過半数以上の賛成が出ましたので、吉井明久と木下秀吉が付き合うことを承認します！！！！！！』

「……………キヤアアアアア！！！！！！」「……………」

「……………くそおおおお！！！！！！」「……………」

女子たちは嬉しそうな悲鳴を上げて狂喜乱舞を起こし、秀吉狙いの男子達は非常に残念そうな声を出していた。

「……………まあいつか、祝福しようと言いだしたのはボクだし……………あ、旅人さん！ ボクも賛成だからね！！！！」

「……………私も愛子と同じ。だから……………」

愛子と霧島は賛成の挙手をしようとした時……………。

「それについて意義あり！！！！！！！！」

と、いきなり反対の声が出てきた。

『何だよ！ 折角決まろうとしていたのに水を差す奴は！！……  
つて久保か。よくあの状態から復活したな……』

私は反対者の声が久保だと確認すると何故か脱力した。そして久保は私に指をさしてこう言う。

「女子の皆！！ 騙されてはいけない！！ この男の言っている事は全て出鱈目だ！！！」

『出鱈目って言われても本当の事なんだが…… つか人に指をさすなよ。失礼だろうが』

「僕に散々悪夢を見せた貴方にそんな事言われる筋合いは無い！！！」

『……あつそう（久保にとっては明久と秀吉のエッチは悪夢か……）』

私は久保の言い分に呆れているが、内心では確かにそうだろうと思っただ。

「ちょ……ちよつと久保君？ 何で貴方がそんなに反対するの？（何で邪魔するのよ！！）」

「そつだよ、もうこれは決定事項なんだから（久保君は吉井君の事が好きだからね）」

「……久保、人の恋愛に口を出すのはいけない」

優子は久保の言い分に問いかけながらも内心では邪魔をするなど思っており、工藤は何故久保がこんな行動に出ているのかが分かっていた。霧島は単に邪魔はしない様にと叱咤している。

「木下さん・工藤さん・代表！！何を言うんだ！！君達はこんなペテン師を信じるのかい！！」

『おいコラ久保……ペテン師って私の事か？』

「貴方以外に誰がいる！？」

『……………（ピキッ！）』

私は久保の発言で頭に青筋を浮かべた。

『ほお……………そう言いますか？へえ……………？』

「兎に角！貴方が何を言おうが僕は吉井君と木下君が付き合っ事を断じて認めない！！」

「そつだそつだ！！」

「お前が何と言おうが木下は皆の物だ！！」

「……ブーブー！！！！」

久保の反対の声に躍起になったのか、木下狙いの男子達も一斉に反対の声を上げた……それ以外の男子達は呆然と見ていたが。





女子たちは是非と言わんばかりに賛成した。

「アタシも見たいわ!!!」

「ボクはボーイズラブには興味無いけど、ちょっと見てみたいかも……」

「……2人のラブシーンを見て参考にさせてもらおう」

優子・工藤・霧島の3人も同様に賛成だった。

『よし、それでは再生しましょう!!! 皆さん……活目せよ!!!  
!(パチンツ!)』

私が指を鳴らすと教室が暗くなるとスクリーンの電源が上がり、昨日の映画館の出来事を再生させた。

「~~~~!!!(止めてくれえええええ!!!!!)」

久保は必死に止めようとしたが、それは無駄な行動だった。

その頃、翔は……

「…………カツ…………カツ…………カツが食いたい…………」

ようやく口が開いたかと思えば、カツの事しか考えていなかった。

おまけ

「…………… Aクラスに来たのはいいが、物凄く入りづらい……………」

来牙は既にAクラスの前に来て覗いていたが、Aクラス生徒達のテーションに付いて行けないのか、入ろうか止めようかと悩んでいた。それに加えて私がスクリーンで“ある動画”を再生させたので、入るにはかなり勇気が必要だった。

「…………… 明久と秀吉のラブシーンの最中に俺が入ったら、女子達は俺の事を同性愛者扱いするだろうしな…………… しかし旅人さんは何て物を再生させたんだよ……………」

余りに安易な予想が出来る為に来牙は嫌な顔をし、それと同時に私に対する不満を愚痴っていた。

そんな時……………。

「宮永君、そこで何をしていますか？ HRが始まっていますよ。すぐFクラスに戻りなさい」

学年主任の高橋洋子がAクラス前に来て来牙にFクラスへ戻るように示唆した。

「あ…………… いや…………… これはその……………」

「何時までもここにいないで、自分の教室に戻りなさい。…………… それ

にしてもAクラスの教室が何故か暗いですね、一体何をしているんでしょうか？」

「あ！？ ダメだ！！ 今Aクラスに入るのは……」

来牙は止めようとしたが、高橋先生はAクラスに入り…。

「こ…これは！！ ………………何て素晴らしい……」

明久と秀吉が情事に夢中になっているシーンを見て、女子達と同様に動画を見始めた。

「アンタもかよ！！！！！！」

来牙は高橋先生の早代わりに突っ込んだ。

混沌物語 ？（後書き）

何と高橋先生までも見ることになってしまいました！！！

混沌物語 ? (前書き)

混沌物語の最終話です。

## 混沌物語 ？

私が動画を再生するとAクラス女子達は食い入る様に見ていた。

《……じゃあ秀吉……その羞恥心を一気に無くす方法を知っているけど……試してみる？》

《え？…そ…それはどんな方法なのじゃ？》

《それはね……こつする事だよ》

《明久？……んむ！……》

明久が秀吉にキスをするシーンに入ると……

「……キヤアアアアアア！！！！！！」

「……吉井君…秀吉にあんなキスを…ああ…いい…」

「弟君が吉井君のキスで感じてる……ボク…吉井君を尊敬しちゃいそう」

「……私も雄二と一緒に映画館に……」

Aクラス女子達は（大変嬉しい）悲鳴を上げている。優子は悦に入った表情になり、愛子は吉井のキスを見て尊敬の念を抱き、霧島は次の雄二とのデートプランを考えている。

『（フフフフフ……あの程度で悲鳴を上げるのはまだ早いぞ。次



私は思わず商売にしようかと思ったが、すぐにその考えを捨てて自分に渴を入れる。

『（そういえば久保は……またアレかよ……）』

私は忘れていた久保を見ると前回と同じくまた石像化していた。

「（……………ああ……………僕は……………僕は……………）」

『（あ、今度は石になっても思考が……地球が破壊されるかの様な恐怖と絶望だな……もうグチャグチャになってるよ。じゃあ……………）  
コンコン……………コッチは相変わらず硬いままか……………他の男子は“あし〇のジョー”だな……………）』

久保は前回見ていた為に多少耐性が身に付いていたが状態は大して変わらなかった。木下狙いの男子達は久保みたくに石にはなっていないが真っ白になっている。

『お〜い愛子ちゃん・霧島、ちよっといい？』

「旅人さん？」

「……………何？」

下手に優子に声を掛けると不味いので、私は優子を見無視して愛子と霧島に近づく。

『あっち見て〜』



「? ……………え!?!」

「…………久保が石になつてる」

私が石になつてゐる久保の方に指をさし、愛子は分からないまま私が指した方向を見ると顔が引き攣り、霧島は驚く事なく久保をじつと見ていた。

「く…………久保君が石に…………」

「…………旅人さん、久保の様子がおかしかった原因はもしかして…………」

『「」名答。けど、もうちょっと見れば更に凄い事になるよ』

「「?」「」

『まあ少し待てば分かるから…………』

愛子と霧島はこれ以上何か変化があるのかと疑問に思つてると、明久と秀吉のエッチのクライマックスに入った。

《明久…浮気なんかしたら…………ワシは絶対に…………許さんから…………》

《浮気なんかしないよ…………僕はもう…………秀吉しか愛せないんだから!?!》

「!?!?!?!?!?!」

久保がスクリーンでの明久の台詞を聞いて…………。

『ほぐれ、変化の第2弾だよ』

「あ……………久保君が……………石から……………」

「……………灰になった」

また灰となって姿を消していった。

『そして私が灰になった久保を再生させた翌日、壊れた人形みたく同じ台詞を何度も呟いていたと言う訳さ。お二人とも、お分かり頂けましたか？』

「……………どおりであんな状態になっていた訳か」

「……………納得した」

愛子と霧島は久保のおかしな状態になっていた理由が漸く分かった。

『じゃあ久保は後で再生させておくから放って置いて、次は翔だけど……………つとその前に、アレがもう終わるか……………（スッ）』

翔について説明しようかと思っていたが、動画がそろそろ終わりそうだったので電気を付けようとする……………。

『……………って！…いつの間にか高橋先生がいるじゃないか！！』

しかし、Aクラス担任の高橋先生が女子達と一緒に動画を見ていた事に気付く。

『（不味い……………高橋先生がここにいると私にいろいろ面倒な事をさせ

そつだ……ここは退散しよう)……愛子ちゃん・霧島、途中で悪いが私は失礼させてもらう』

「ええ！？ ま…まだ翔君の説明が……」

「……せめて翔の説明だけでも……」

『あれはただ単に私があいつの目の前でカツを食って、“地獄の幻想”を喰らわせたただだよ。じゃあ失礼！！！』

私はAクラスの教室から出て行った。

「た…旅人さん！！ 待ってよ！ 地獄の幻想って何！？ そこが凄く気になるんだけど！？ ……行っちゃった」

「……愛子、その前にここをどうにかしないと」

「あのさあ代表、どうにかって……この状況どうすればいいの？」

愛子が周りを見ると……。

「……………はあ……………よかつた……………」

「これって録画されているんだよね？ そつよね？ ちょっと確認……あ、入ってる…良かった〜これでまた……」

「何と素晴らしいドラマ………これを見せてくれた人は今何処に……」

動画が終わって悦に入っている女子達 + 木下優子 + 高橋先生に……。



『来牙、Aクラスに来てたら入れればよかったのに……』

「あんな状況でとても入る気にならないな」

私はAクラスから抜け出すと来牙に会った。廊下で話すと教師に会うかもしれないので、私と来牙は屋上にいる。

『入ったらすぐに用件が済んだのにね〜』

「そんな事はどうでもいい……で？ 俺に何の用だ？」

『君にある物を渡そうと思ってね（ゴソゴソ……スッ）はいどうぞ』

来牙は私にどんな用件かと聞いたので、私は懐からある物を取り出して来牙に渡した。

「これって……もしかしてコードギョースのダモクレスの鍵か？」

『「」名答、よく知ってるね』

「そりゃあアニメ見てるからな……ってか何でコレを俺に？」

『君にソレのスイッチを押してもらったよ』

「断る」

『それを押すとね……って説明する前から断らないでよ！』

来牙はすぐに断り、私にダモクレスの鍵を返そうとした。

「どうせこれを押したら、何か凄い事になるんだろ？ だったら俺は遠慮する」

『いや、別にフレイヤが発射される訳じゃないんだから……ってかそんな大量殺戮破壊兵器は出ないよ』

「アンタの事だから、これは“地獄の幻想”が発動するスイッチなんだろ？」

『あらら、よく分かったね……なら聞くけど、どうして押さないんだい？』

来牙の予想は確かに合っているのに私は来牙が押さない事に疑問を持っていた。

「こう言った物はな、押す覚悟があると同時に押さない覚悟もあるんだ。だから俺はコレを押すつもりは無い」

『……………ホントに押さないの？』

「ああ。絶対にな」

『ふん』

私は念の為に聞いてみたが決意は変わらない様だった。

『そう、じゃあ仕方ない……ああその前にこれだけ一つ言わせて』

「何だ？」

『この間さあ、絵梨が学校に忍び込んでいる時の事だけど……』

「それで？」

『ムツツリーニが更衣室で絵梨の着替えシーンとパンチラシーンを盗撮していたけど……』

カチツ！

『その写真が……おい、押さない覚悟は何処に行った？』

私が最後まで言う前に来牙はダモクレスの鍵のスイッチを押した。

「何の事だ？ それより盗撮した写真は何処にある？」

『……切り替えるの早いね、来牙』

「そんな事はいいから、早く写真の在り処を教える」

来牙は私に写真が何処にあるか問い詰めた。

『……自分の女の事となると、なりふり構わないんだね。まあいいや……ここにあるよ（ゴソゴソ……スッ）』

私はズボンのポケットから写真とネガを出して来牙に見せた。

「これだけか？」

『流石のムツツリーニも絵梨の警戒で簡単に撮れなかったから、こ

れしか無いよ』

「そうか……なら今すぐ此处で処分しろ」

数が少ない事に安堵した来牙は私に処分するように言う。

『いらないのかい？ 来牙にあげるつもりだったんだけど』

「そんな物は必要ない」

『……………あ、そうか。体を隅々見ている上に、じっくり味わっているから写真なんて必要ないんだ』

「……………」

来牙は私の言っていることが当たっていたので黙っていた。

「さっさと処分しろ」

『もうそんな怖い目で睨まないでよ……………はいはい、今処分するから（パチンツ！ シュボツ！ ……ジジジジ……………）』

私が指を鳴らすと、ネガと写真が急に燃え出して塵となった。

さらにおまけ

来牙がスイッチを押した後……………。



「……任務失敗、次こそは必ず諸悪の根源を……」

出血多量になっていたムッツリーニは家でFクラスに仕掛けていた録音付き盗聴器で内容を聞いていた。

「……抹殺する……！」

と、勢い込んでいたその時……。

「！！！！！！（ガクッ！）」

頭の中が5人のバニー達の姿が映ったのでムッツリーニはそれを見た途端に倒れた……それもビクンッ！ビクンッ！としながら。

『（ピシュッ！）はっはっは！ 私が情報源であるお前を始末しないわけ無いだろ』

影の私が突然現れて、ムッツリーニの苦しむ状態を面白く見ている。

『復讐完了……では（ピシュッ！）』

そして影の私は姿を消した。

混沌物語 ？（後書き）

以上、混沌物語でした~~~~~!!!!!!

次回をお楽しみに!!!

## 来牙×優子

「混沌物語」から数日後……………。

放課後の屋上で私は……………。

『で、携帯テレビの調子はどうだい？』

「良好よ。流石は貴方から貰っただけの事はあるわ。随分と高性能な代物ね」

『そりゃどうも』

木下優子と密会しているかの様に話していた。

『フッフ……………気に入ってもらえて何よりだよ』

「ねえ旅人さん？これ以外には無いの？」

優子はいきなり新作が出ていないか尋ねてくる。

『そんなすぐに出来るわけ無いでしょ……………少し待ちなさい。物事には順序と言う物があるんだから』

「出来るだけ早くしてね。見たいから」

『はいはい、分かったから、そんな鬼気迫る様な顔しないでくれ……………見てるこっちが怖いよ』

優子の表情を見て私は少し怯えながら……。

『（明久と秀吉の関係を認めた途端こんなに変わるとは。腐女子…  
恐るべしと言った所だな）』

余りの変わりように少々驚いていた。

「じゃあ、アタシの用は済んだから失礼するわ。次は必ず秀吉を吉井君とデートさせてね」

『ちゃんとデートさせるから、そんな念を押すように言わないでくれ……あ、そういえば』

「何かしら？」

優子は屋上から出ようとしたが、私がふと言いかけたので足が止まり、此方に顔を向ける。

『確か今日はア○メイトで期間限定物のＢＬ同人誌が売ってるみたいだよ』

「えっ！？ ホントに！？ ……………ゴホンッ！ 残念だけど、あたしはそこで買わないの。まあ、情報には感謝するけど」

優子は一瞬喜んだ顔をしたが、すぐに表情を戻した。

『いえいえ、どういたしまして。…………それとあともう一つ』

「今度は何よ？」

『来牙に頭を撫でてもらったかい？』

「してないわよ！……！」

私の質問に優子はすぐに怒鳴りながら否定した。

『そうかい……あいつの撫で方は結構気持ちいいみたいだからねえ  
〜。何だったら私のほうで来牙に頼んでみよっか？』

「お断りよ！……！（ボタンッ！）」

優子は屋上を去り、ドアを乱暴に閉めて行った。

『あらあら、ツンツンですな〜、ちよつとはデレてもいいのに。来  
牙の事となるとすぐにああなるんだから……はあっ』

私は校庭を見下ろしながら優子のへそ曲がりな性格に溜息を付いた。

『少しは素直になりやいいのに……それにしても』

私は同人誌の事を話した優子の顔が気になった。

『あれは絶対アニ〇イトに行くな。期間限定と言った時に揺れてる  
顔してたから、行くに決まってる……ククク』

私は優子の行動を想像して笑いながら校庭の方を見る。

『まあ、私には関係の無い事だ。さて、明久と秀吉のデートプラン  
でも考えますか。早くしないと優子が五月蠅いからねえ〜……おや  
？』

私が校庭を見てると学校から出る来牙を見かけた。

『……………ふむ……………ちょっと来牙で遊ばせてもらおう  
(ピシユッ!)』

私は顎に手を添えて来牙を見ながら考えると……………姿を消したのであった。

「(さて、早く帰ってゲームの続きといくか)」

来牙はどこにも寄り道せずに家へ帰るようだった。

「(今日は絵梨が家にいるみたいだから、一緒にゲームをするか…  
…絵梨がまたコスプレをして俺を誘わなければいいが)」

この間の絵梨の猫耳メイド姿で来牙は完全にその気になっていた為、ゲームが中途半端にしか出来なかったのだ。今度は絵梨が誘っても自分は絶対にゲームを優先すると心に誓うが……………。

「けど駄目だろうな……………どんなに我慢しても体が絵梨を優先するか、すぐにまた中断しそうになるな……………」

『ほほう、頭では否定しても体は正直ですか……………やはりケダモノだね、絵梨限定だけど』

「!!!!!!」

私の声に反応してすぐに後ろを向くと、目の前には私がいた。

『やつほゝ来牙』

「またアンタか……」

来牙は私を見た途端に嫌そうな顔をした。

『おいコラ……人の顔見てそんな嫌そうにするなよ』

「アンタが現れるとまた面倒な事になるからな……」

『私がトラブルメーカーだとも?』

「事実そうだろ」

『……………くすん』

「演技は止める。見てて気色悪い」

私が泣き真似をすると来牙はすぐに演技と見抜き、叱咤した。

『チッ! ばれたか……』

「……………人の目の前で舌打ちをするなよ。で、今度は俺に何の用だ?」

来牙はさっさと本題に入りたいのか、すぐ私に用件を聞く。

『全く、少しは乗ってくれてもいいのに……まあいいや。ねえ来牙、この後何か用事入ってる？』

「いや、特に無いが……」

『そうかい。じゃあ今から私と一緒にアニ〇イトに行かないかい？』

「……………何故だ？俺がアンタと一緒に行って何の意味がある？」

『質問を質問で返さないでよね。別に意味なんて無いからさ』

来牙は私の誘いにはすぐに乗らなかった。何か裏があると思っていた様だった。

「アンタと行くと何か嫌な予感がするからな」

『……………私ってそんなに信用無い？』

「信用はあるが、何故か油断出来ないんだよ……………」

『……………それはつまり行かないって事？』

「……………そう言う事だ」

来牙はどうやら私と一緒に行ってくれない様だ。

『あっそう、なら仕方ないや……………』



「分かったんなら、俺は家に帰らせて……」

『君が沢渡美咲とラブホテルに行った事を絵梨に報告でもするか……』

「おいちょっと待て!!! 何でアンタが知ってる!?!」

来牙は去ろうとしたが私の一言ですぐに止まった。

『君は私を誰だと思っているんだい?』

「……………そうだった。アンタはそう言う奴だって事をすっかり忘れていたよ……………」

『フフフフフ……………私の情報収集能力を甘く見てはいけないよ、来牙君?』

来牙は私が既に美咲との件を知っている事に失念し、私は笑みを浮かべながら得意げに言った。

『さあ、このまま家に帰る? それとも私と一緒にアニメ〇トに行く? 好きな方を選びたまえ……………』

「……………分かった。アンタに付き合っよ……………(家に帰ったらまた面倒な事になるからな)」

来牙は私と一緒に行く事を渋々了承した。

『後者を選択したと言う事は絵梨が恐いのかな?』

「……………」

『まあ嫉妬に狂った絵梨の相手をするのは面倒だからねえ。私も君の立場だったらそうしてるよ』

「……………おい、さっさと行かないのか？」

私の台詞を無視して来牙はスタスタと行った。

『待つてよ来牙、そんなに怒らないでよ。お詫びにアニメのDVDやゲームを買ってあげるからそれで許して、ね？』

私はすぐに来牙に追いつき、謝りながら一緒に歩いた。

「……………俺はそんなにガキじゃないんだが……………」

『まあまあ、そう言わずに……………（よゝし、）来牙に優子の頭を撫でさせよう作戦』開始！！』

そして私と来牙は目的地へと向かった。

おまけ

来牙が私と一緒にア○メイトに向かっている時。

『なあ絵梨、次はこんなコスプレで来牙を誘ってみたら？』

「うーん、これもいいけど……こっちも捨てがたい……」

影の私が絵梨の部屋へとお邪魔し、絵梨にコスプレ衣装を決めさせる為に雑誌を見せていた。

「うーん……よし!! これに決めた!!!!」

『ほほう、バニーガールかい?』

「今度は寂しがりやのウサギを演じて来牙君を誘ってみる。さあ出して旅人さん」

『はいはい(パチンツ!)』

絵梨の要望が決まると影の私はすぐに指を鳴らして、バニーガールの衣装を出した。

「帰ってきたらこれで来牙君を……ふふふ」

『(その来牙は、本体の私と一緒にアニイトに向かっているんだけどね……)』

影の私はここで絵梨を足止めさせる為に来牙の家にいるのであった。

来牙×優子？

さて、アニメトに向かっている私と来牙であったが……。

「おい旅人さん、あそこ……」

『ん？……おやおや、雄二と霧島じゃないか』

私は来牙が指をさした方向に目を向けると坂本雄二と妻の坂本翔子（笑）が映画館に入ろうとするのを見かけた。あの二人は周りの空間がピンク色に染まっているかの様にイチャ付いて歩いていたが…。

「翔子、どうしていきなり映画が見たいなんて言い出したんだ？」

「……ちょっとやってみたい事があった」

「なんだそりや？ 映画館で映画見る以外になんかあるのか？」

「……後で教えるから早く入る」

「へいへい、分かったよ……」

そして坂本夫妻（笑）は映画館に入っていった。

『あの二人は映画館に入る前からイチャついてるねえ〜。完全にバカップルだよ』

「……………」

私は坂本夫妻のあまりのイチャ付き振りに別の意味で感心し、来牙は無言で二人を見ていた。

「……………旅人さん、雄二はあんなに素直な奴だったか？」

『素直だからあんな事してるんですよ』

「……………俺にはあの雄二があそこまで素直に霧島とイチャ付いている事に物凄く疑問なんだが……………まさかアンタ雄二に何かしたのか？」

『……………さあ来牙、早くア　メイトに向かおうではないか』

「おい……………まさかアンタ……………」

『いいじゃんそんな事！　ほれ、さっさと行くよ!!』

「おい！　やっぱり何かしたんだろ!？」

私は来牙の話しを無視しながら腕を引っ張って目的地へと向かった。

……………

そしてアニメ　トに向かった私と来牙は店内に入って、アニメDVDを見ていた。

『さあ来牙、何が欲しい？無理やり連れてきたお詫びとして私が買ってあげるから。勿論ゲームでも構わないよ?』

「……………アンタは何の目的で俺をここに連れてきたんだ？」

来牙はまだ私を疑っているのか目的を聞き出そうとする。

『だから言ったでしょ。別に深い意味は無いつて……あんまりしつこいと流石の私も傷つくよ』

「……………まあいいか」

来牙はこれ以上追求をした所でボロは出ないだろうと分かったので止める事にした。

『私がここに来たのはアニコスを見たくて来ただけだよ（本当は優子と鉢合わせる事だけどね…………ええと優子は…………）』

「……………アンタ買う必要ないんじゃないか？ その気になれば出す事出来るだろ？」

『アニメ見ただけじゃちょっと今一なんだよ。だから実物を見てから創造する…………（あいつは同人誌売り場にいる筈…………お！ いたいた）』

私は来牙に嘘を言いながら辺りを見回していたが、漸く優子を見つけた。

『（思った通り優子がいたな。買わないって言ってたくせに結局は買うんじゃないか。制服姿と言う事は、あの後すぐここに来たか…………）』

「旅人さん、さっきからどうしたんだ？」

『ん？ いやいや、何でも無いよ。さて、私は後で見るからまず最

初に来牙の方から済ませようか。早く家に帰りたいだろ?」

「ああ、そうさせてもらおうよ。確認するが、限定品の高いのを選んでもいいか?」

『「自由」……』

「そうかい、じゃあ遠慮なく。その代わりに……」

『分かってるよ。絵梨には言わないから……』

来牙は私に念を押す様に言おうとしたが、私がすかさず言わないと答えた。

「ならいいが……じゃあこれにするか」

『ほくくプレミア限定品DVDセットか。おお！それも十万円以上するな……』

値段を見た私は思わず驚愕する。

「アンタがご自由について言ったから選んだんだが……」

『ただ単に値段に驚いていたただけだよ。これでいいのかい?』

「ああ、これが欲しかったからな……この人にしてはやけにあっさりしてるな」

『じゃあ私はコレ持ってレジに行くってくるから、そこら辺ブラブラしてて……見ての通りちょっと混んでるから』

私がレジを見ると他の客がレジ前で並んでおり、少し時間が掛かりそうだった。

「じゃあ、そうさせてもらおう」

『では後でね……（よし、これで優子と鉢合わせられる）』

私はレジに向かい、来牙は他のアニメDVD以外の方を見回り始めた。そして来牙は……。

「あ……この漫画、今日発売だったのか。こっちもついでに頼めば良かったな……」

漫画売り場にいたその時……。

「旅人さんの言ったとおりだったわね。期間限定の乙女本がここにあったなん……って！ 宮永君!？」

「ん？ 木下か……」

BL本を持っている優子が来牙と会った。

「アンタがここにいるなんて凄く意外だな……ってか、その本」

「え？……はっ！（サッ！）ち……違うのよ……これはね……その……」

来牙が優子の持っているBL本を見ると、優子は即座に持っている袋を背に隠す。



「……………旅人さんの言ったとおり、アンタが腐女子だって事は本  
当みたいだな……………」

「な……………何でそこで旅人さんの名前が……………って！ あの人、宮永君に  
喋ったのね!？」

優子は私が来牙に喋ったと知ると急に烈火の如く怒り出した。そんな怒っている優子に回りの客は来牙と優子の方を見ている。

「おい、そんなに騒ぐなよ。客が見てるぞ」

「そんな事どうでもいいわよ!！」

「どうでもいいって……………俺としては非常に困るんだが」

「宮永君、旅人さんは何処にいるの!？」

「いや……………だからそんなに大声で……………」

『呼んだかい?』

「きゃあ!！」

「……………アンタもアンタで突然現れるなよ」

私が現れると優子は驚き、来牙は私に突っ込みを入れた。

おまけ

私と来牙がアニメ トに入っている時……。

「旅人さ〜ん、入っていいよ」

『ほいほ〜い、それじゃあ失礼しま〜す』

(影の) 私が絵梨がバニーガールの着替えが終わるのに部屋の前で待っていると、絵梨が入っていいと言ったので私は絵梨の部屋に入った。

『おお〜〜似合ってるね絵梨』

バニーガール姿の絵梨が似合っていたので私は賞賛した。

「ふふ……ありがとう旅人さん」

絵梨も満更でも無く、私の言葉に笑みを浮かべながら礼を言った。

『後は来牙が帰ってくるのを待つだけだねえ』

「来牙君、早く帰って来ないかな〜」

ガチャッ!

『「?」「?」』

私と絵梨が開いたドアを見ると……。

「おおお~~~~~!!!!!! 絵梨のバニーガール姿じゃ~~~~~!!!!!!」

宮永源三（以降は爺と呼ぶ）が絵梨の部屋に入って、絵梨のバニーガール姿に興奮していた。

「お……お父さん……」

「旅人さんや、絵梨にあの格好をさせたのはお主か？」

絵梨はいきなり部屋に入ってきた爺に呆れており、爺が急に真剣な顔になり私に聞く。

『私は服を渡しただけに過ぎない……』

「そうか………でかしたぞ~~~~~!!!!!! お主は最高じゃ~~~~~!!!!!!」

『何が最高なんだ？（…ってか鬱陶しい）』

私は爺のハイテンションに付いて行けず、内心では辟易していた。

「ワシが絵梨にこの格好をさせようと思った矢先にお主がやってくれたから嬉しいんじゃない！ これで婆さんに怒られずに済む!!! ワシがやったのではないからな!!! さあ絵梨!!!! その格好でワシに酌をしてもらえんかの!？」

「ちょ……ちよっとお父さん……あたしは……」

爺は絵梨を自室に連れて行くつもりだ。

「何を言う絵梨！！　ワシの為にその格好になったんじゃろ！？  
じゃったらワシに奉仕してくれい！！」

「あたしはお父さんじゃなくて……来牙君を」

「あんな小僧なんかどうでもいいわい！！　さあ絵梨！！　今すぐワシの部屋に行くぞい！！　さあ！！　さあ！！！！」

『おいちよつと待て』

爺は絵梨を連れて危ない事をやりそうだったので、私は二人の間に割って入った。

「旅人、ワシの邪魔をせんでくれ！！」

『いや、だから……絵梨がその格好になっているのは来牙に……』

「くだい！！！！　あんなクソガキに絵梨の酌をさせよう等と100億万年早いわ！！！！」

『アンタが絵梨に酌をしてもらう以前に別の事をしそうな気がするんだが？』

「酌じゃわい！！　ワシはただ単に酌をしている絵梨に胸を触ったり、お尻を触ったりして……」

『……………（ガチャ……………バシユツ！）』

「うー！（プスッ！……………ボタン！）」

私は爺が絵梨に対するセクハラを阻止する為に麻醉銃を使って眠らせた。

「お父さん！？」

『心配するな、眠らせたただけだ』

絵梨は突然気を失った爺に驚いたが、私はすぐ理由を言った。

『絵梨、私はこの爺のある部屋に連れて行くからちょっと待っててね。すぐに戻ってくるから……………』

「うー…うん、分かった」

私は爺を担いで、絵梨の部屋を出た。

『さて……………この爺には“地獄”を味わってもらうか。猫という名の地獄をな……………（ピシユッ！）』

私は爺を猫がいつぱいいる“猫部屋”に連れて行く為、姿を消した。

## 来牙×優子？

私は来牙と優子を鉢合わせたがその後……。

「おい木下、アンタが騒ぎを起こした所為で俺たちは暫らくあの店に入れないんだが？……」

「う……………」

『全く、あそこで大声を出すわ、私に怒鳴り散らしながら掴みかかって来るとは…………君は本当に頭に血が上りやすいね…………』

「うう……………って！ 貴方が宮永君に余計な事言わなければあんな事にならなかったでしょ！？」

『私が言わなくても来牙に見られた時点で、すぐに騒ぎを起こしそうな気がするんだけどね…………どう思う来牙？』

「その時は俺に掴みかかりそうな事になったと思う…………」

「……………」

優子が騒ぎを起こした為、私と来牙はすぐに優子を連れてアニイトから出て行き、近くの路地裏にいた。そして今現在、私と来牙は優子に少し説教をしていると言っ事である。

『まあ私や来牙はいいとして、君としては期間限定物が買えなかったのは凄く残念だろうけどね…………』

「木下の持ってたあれって限定版だったのか…」

「うつつ！！（ガクツ！）…………折角の限定本が…」

優子は限定本が買えなかったのか、涙を流しながら地面に膝と手をついていた。（表現を例えるなら（TOT） ortって事）

「俺達が悪い訳でも無いのに何か罪悪感が…………」

『よっぽど欲しかったんだね…………』

優子の様子に私と来牙は少し引き気味になっていた。

『（ん？ 待てよ…………これは寧ろいいタイミングだな…………）来牙、優子の頭を撫でてやれ（ボソボソ）』

「は？何で俺がそんな事をするんだ？」

『いいから早く！ さもないと絵梨に…………』

「…………分かったよ」

私は来牙に優子の頭を撫でるように指示したが、来牙が少し難色を示したから、ちょっとした奥の手を出すとすぐに了承して優子に近づいた。

「木下、そんなにガツカリするなよ（ナデナデ）」

「うっ？……………（気持ちいい…………）」

来牙は優子に声を掛けながら頭を撫でると、優子は気持ちよそそつな顔をしていた。

「（急に落ち着いてきたな……そんなにいいのか？）」

「（あ~~~~何か凄く気持ちいい~~~~。さっきまでの事がどうでもよくなってきた~~~~）」

『（思っていた以上の効果だな……）随分と気持ちいい顔をしていますな、木下さん。』

「!?!?!?!?!（バツ!）」

優子は私の声で反応して来牙から離れ、すぐ私に近づく。

『だから前に言ったでしょ？ 来牙のほうが凄く良いって』

「ち…違つたのよ!! ベ…別にアタシは……宮永君に撫でられて気持ちよくなかないんだから!!」

『今更、ツンな態度を取ってもねえ』

「だから違つって言うてるでしょ!?!?!?!」

「（一体何の話をしているんだ？）」

私と優子のやり取りに来牙は頭に「？」が浮かんでいた。

『まあ、私としては来牙に撫でられている君の顔が見ただけで十分だったよ。凄く良かったって（これで私の目的は達成した）』



「旅人さん!! いい加減にしないと怒るわよ!?!」

『全く……来牙の事となると、すぐこれだよ。少しは素直になったら?』

「素直になる以前にあたしは宮永君の事は何とも思っていないわよ!」

「おい旅人さん、さつきから何の話をしてるんだ?」

話しが分からず蚊帳の外であった来牙が私に聞いてくる。

『ん?ああ、私が木下さんにね……』

「旅人さん!! 余計な事は言わなくていいわ!」

私が来牙に説明しようとするとうと優子が遮ってきた。

『……………私が説明するより、木下さんに言わせたほうがいいのか  
スツ)……』

「え? ……(トンツ)」

「旅人さん、一体何を?……」

私は右手の人差し指で優子の額に当てると、来牙は更に分からなくなった。そして私が優子の額から離すと……。

「ふふふふ……宮永く〜ん (ギユウツ!)」

「お…おい木下!？」

優子がいきなり来牙に抱きついてきた。

『ふむ……やっぱりな……』

「やっぱりって何だよ、アンタ木下に何した？」

「宮永君って結構遅いんだね〜」

私が予想通りだと思つてると、来牙は何故優子がこんな状態になっているのかを聞き、優子は来牙の胸を頬ずりしていた。

『私の暗示で優子の抑圧されていた願望を引き出したんだよ』

「抑圧されていた願望？」

『分かりやすく言えば優子が素直にやりたい事を私がそれを実行させたって事。まさかそれが、来牙に好かれたいとはな……予想が付いていたとは言え、それはそれで驚きだよ』

「な………木下が……俺を？」

私の説明に来牙は驚いて優子の方に顔を向けると……。

「ねえ宮永君、もう一回あたしの頭を撫でてくれないかな？」

優子が来牙に再度、撫でて貰う様におねだりしてきた。

「は？ 何でまた？」

「だめ…かな？」

優子がウルウルと涙目になりながら来牙を見てきたので……。

「……………わ…分かったよ（ナデナデ）」

「ああ…やっぱり気持ちいい…」

来牙は仕方なく優子の頭を撫でると、優子は来牙に撫でられて心地良い顔をしている。

「こいつ……（絵梨みたいな顔しているな）」

「ふふふふ…宮永くん…」

『やっぱり人間素直が一番だね。来牙、優子が可愛くて欲情してない？』

「え？ 宮永君、アタシに欲情したの？」

「おい、何を言ってる。俺が木下に欲情するわけ……………」

私の言葉に来牙は突っ込むと……。

「宮永君……アタシの事……嫌いな…ひっく……………」

「あ…いや…違う木下……別にそう言う意味じゃなくて……………」

『おやおや、これは予想外の展開だね。来牙、女の子泣かしちゃダメだろ…』

「アンタはちょっと黙ってる」

「宮永君…ひつく…あたしの事…嫌い？」

「いや…別に嫌いでは…（何か…こいつ凄く可愛い…）」

優子は来牙に抱きついたまま涙目の上目遣いをしており、来牙は凄く戸惑っている。

「じゃあ…アタシの事…好き？」

「いや…だから…ああ、アンタの事は好きだよ」って人の声を使って何を言ってるんだ…

「ホントに！？アタシも宮永君の事大好きだよ！！」

私が来牙の声色を使うと優子が大変嬉しそうな表情をしている。

「いや違う。今は俺が言ったんじゃないなくて『じゃあ俺の事が好きなら今すぐここでアンタを抱いてもいいか？』アンタもいい加減にしる！」

「え！？…ここですか？宮永君…」

「おい！アンタが余計な事言った所為で木下が引い…いいよ…は？」

「あたし……宮永君に抱かれてもいいよ」

「ちょ……ちょっと待て。アンタは自分が何を言ってるか本当に分か  
ってるのか？　ってかここで服を脱ぐなって……！」

『こりやまた予想外な展開だな。仕方ない、姿と声を隠す為にこ  
この空間を一時的に断絶するか』

「そこのアンタも何をやろうとしている！？」

優子が抱きついている来牙から離れて服を脱ぎ始めたので、私は空  
間の断絶の準備をしようとしたが、来牙が私に詰め寄りながら言う。

『何って、君と優子のエッチの邪魔をされない様に空間を断絶しよ  
うと……』

「アンタが余計な事言ったからこんな事になってんだろ！？　だっ  
たらアンタが責任を持って木下を何とかしろ！」

『いいじゃない別に、据え膳食わぬは男の恥だよ。優子も満更じゃ  
ないんだから、ここは君も優子とエッチを……』

「俺が絵梨以外の女を抱くと思ってるのか！？」

『……………沢渡美咲とエッチしておいてよく言うよ。まあ、このま  
まだと君が素直に優子とエッチしてくれそうにないから、君が優子  
に抱いている性欲を私の方で引き出してあげるよ（スッ）』

「お……おいまさか（トンッ）」

私は優子と同様に右手の人差し指で来牙の額に当てた。

そして私が指を額から離すと……。

「ハアツ…ハアツ…ハアツ…木下…!!」

「え!?宮永君!?…んむう!!」

『おっと!今すぐ断絶しなければ(パチンツ!)』

来牙は服を脱いで下着姿になった優子を地面に押し倒してそのままキスをしたので、私は路地裏の空間を断絶した。

「ん…んちゅ…ちゅぷ…んああ…」

来牙は優子の舌を絡めて濃厚なキスをしている。

優子もそれに応える為に来牙に抱きつきながら来牙の舌を絡めてキスをしている。

チュプ…チュパ…ペロ…チュプ…

しばらく濃厚なキスは続いていると来牙のほうから優子の唇を離し…。

「はあ…はあ…はあ…はあ…宮永君…あたし…もう我慢出来ない…抱いて…宮永君しか考えられない位に…あたしを滅茶苦茶にしてえ…」

「ああ…そうさせてもらうよ…俺も我慢出来なくなってきた…

…」

「宮永君……あたしを……好きにしてえ…ああん!!」

そして来牙は優子とエッチを始めましたとさ。

『始めたか……っつかあいつ、性欲を解放したただけでああなるとはな。やはりケダモノだったか…さて、あの二人のエッチが終わったら記憶を改変しておくか。そうしないと、私が二人に殺されるからな。それまで私は一時退散！（ピシュツ！）』

私はエッチが終わるまで姿を消した。

おまけ

来牙と優子がエッチしている時……。

コンコン

『絵梨、私だけど入っていいかい？』

「旅人さん？ いいよ〜入って」

『それじゃ失礼しまゝす』

私（分身体）が絵梨の部屋の前のドアにノックして声を掛けると、絵梨が私だと認識したので部屋に招き入れる。

「旅人さん、ちょっと遅かったね。お父さんを何処に連れて行ったの？」

『なに、爺にはちょっとした地獄を見せる部屋へとね……』

「え！？ ……それって“地獄の幻想”へと誘う部屋の事？」

バニーガール姿の絵梨が私に聞いてきたので、私（分身体）はすぐに答えると

絵梨は気の毒そうな顔をした。

『いやいや、それは違う。まあ爺にとっては地獄だよ。猫の大群と戯れている事は……』

「……………お父さんは猫が嫌いな筈だったと……」

『だから嫌いな猫と遊んでもらっているんだよ』

「……………お父さんがおかしくなっていないければいいけど」

『あの爺がおかしいのは元からでしょ。さあ、私たちは来牙が帰ってくる前にどうい風誘つか考えましよう』

「……………お父さん、どうか生きていてね」





## 来牙×絵梨4

来牙は優子とのエッチを終えて家に帰っているのだが……。

「……俺は今まで何をしていたんだ？ 路地裏で木下と一緒に倒れていたけど、アイツも俺と一緒に何故か全く覚えが無い」

優子とのエッチは全く覚えていなかった。

それは当然である。私の方で来牙と優子がエッチを終えた後に、記憶を改変したのだから。念の為に私が会った事も無い事になっている。そう言う訳で、来牙は全く分からない状態で家に帰っているのだ。

「まあいいや。分からない事を何時までも引きづっても意味無いからな。さっさと帰って、ゲームの続きでもするか」

そう思った矢先、来牙は家に着いたので中に入った。

「ふゝ、何か疲れた気がするな」

来牙は自分の部屋に入って私服に着替えると、ベッドの上で横になった。

「もしかしたら、あの路地裏で木下とエッチでもしてたってか……いやそれは無いな、俺の思い過ごしか……さて、ゲームでもするか」

来牙の予想は当たっていないながらも、それは思い過ごしと片付けてゲームをやり始めた。

来牙がゲームをやり始めて一時間後……。

「くそっ！こいつ中々しぶといな……けど、後もう少しで……」

『調子はどうだい？』

「ああ、あと一息で止めを……は？」

『おい、やられるぞ？』

「な…何でアンタがここに？ ……あっ」

『あゝあ、やられちゃった』

来牙がゲーム画面から目を離して私を見たので、来牙の操っていたキャラクターはやられてしまい、画面にはゲームオーバーが表示された。

「アンタって人は……」

『それシン・アスカの台詞でしょ？ 流石アニメ好きだね。ここでその台詞を使うとは恐れ入ったよ』

「そんな事はどうでもいい。何で旅人さんがここにいるんだ？」

『いえいえ、私はそんな名前ではなく蒼崎黒斗あまつかろとと申します、以後お見知りおきを。親しみを込めて、ミスターブラックと呼んでください』

私が偽名を名乗ると……。

「それは月〇のキャラのパクリだろ？ それも蒼の家系の魔法使いの苗字を使うのはおこがましいにも程がある……ってかさつきから話の腰を折るな、何でアンタがここにいるんだ？」

すぐにツツコミを入れた。

『来牙、そのツツコミ疲れない？』

「アンタがそうさせているんだろうが」

来牙はさつきから私にツツコミを入れている所為か、少々ウンザリしている。

『はいはい、私が悪かったよ。けど蒼崎黒斗やミスターブラックって結構気に入っているんだけどね。まあ、それは置いといて……私がここに居るのは、絵梨と相談をしてね』

「相談？」

『ああ、絵梨がコスプレエッチに興味を持ち始めて私に相談してきたんだよ。どんな衣装がいいかとね』

興味を持ち始めたのは来牙がよく知っているんじゃないの？と私は付け加える。

「……………」

『その反応を見る限りでは心当たりがあるみたいだね』

来牙の無言に私はすぐに確信した。

「……………」それでアンタは俺の家に来て、絵梨にコスプレ衣装をアレコレと勧めていたって事か……」

『私の質問は無視かい……………まあいいけど。端的に言えば、そう言う事だね』

「……………で？ アンタは絵梨に何を勧めたんだ？」

来牙は私に家にいる理由が分かるとすぐに本題に入った。

『言っとくけど、私じゃなくて絵梨が決めたからね。そこんとこ理解してよ？』

「……………じゃあ言い直そう。絵梨は何の衣装を選んだんだ？」

『私が言うより、今すぐ絵梨を呼んだほうがいいと思うよ。と言っても部屋の前にいるけどね。絵梨〜！ お入り下さ〜い！〜！』

「おいちょっと待て……………」

「は〜い、今入ります」

ガチャッとドアが開き、来牙が見たその先は……。

「来牙君、似合うかな？」

下半身にストッキングを履いた上から丸い尻尾の飾りを付けた黒いレオタードを着ており、首には赤い蝶ネクタイを身に付け、頭には白いウサギの耳をかたどったヘアバンドを付けている絵梨がいた。

「え…絵梨…お前…その格好…」

「バニーガールです」

「……………」

来牙はいきなりの展開に言葉を失う。

『ほ〜ら絵梨、私の言ったとおりでしょ？ 来牙は絶対言葉を失うって』

「ふふふ……来牙君ったら、目が点になってるよ」

『さらに言えば、来牙は絵梨の姿に鳩が豆鉄砲を食ったような顔してるよ』

私と絵梨は予めに打ち合わせをしていたのでこういう会話になっている。

『取り敢えず、“第一段階 来牙を驚かす作戦”は成功〜』

「いえ〜い」

パンツ！と私と絵梨は互いの手を合わせて叩いた。

「……………」

来牙はまだ無言であった。

放心状態になっている来牙を放っておいて、目的を果たした私は部屋を出ようとする。

『さて絵梨、私はここで退散するから後は君に任せるよ』

「うん、ありがとう旅人さん」

『いえいえ…………でも退散するその前に…………（パンツ！）』

「…………いきなり何をする!？」

来牙がまだ放心状態だったので私は来牙の前で手を叩くと、来牙は漸く正気に戻った。

『いつまでも放心してないで、早く絵梨の格好についての感想を言ったらどうだい?』

「え……あ……」

「来牙君、どこがおかしいかな?」

絵梨がちよっと不安になってきたので来牙に再度聞いてみた。

「い……いや、結構似合っているぞ」

「ホントに!?! うれしい来牙君!?! (ギユウツ!)」

「お……おい!?!」

絵梨は嬉しさの余り座っている来牙に抱きつく……。。

『はいはい、イチヤ付くんでしたら私はここで失礼……』

バタンツ

私は来牙の部屋から出て行き、ドアを閉めたのであった。

「ふふ……さして旅人さんがいなくなったから始めよう」と

「……………絵梨、始めるって何をする気だ?」

「んもっつ分かってるくせに。そんな来牙君にはこれでお仕置きだよ……」



「おい、今度は何を……うわっぷ！」

絵梨は来牙の頭を掴んで自身の胸に当てた。

「来牙君には“ぱふぱふ”攻撃だ〜」

「え……絵梨、やめ……」

「フッフフ〜ン」

来牙は絵梨の“ぱふぱふ”攻撃に戸惑っていたが、次第に大人しくなっていた。

「……………」

「ふふふ……どうしたの来牙君？ 随分大人しくなっているけど……」

……

「なに……今度はこつちも攻めるかと考えていただけだ……」

「え？ ……ああん！ ……来牙君……いきなり触っちゃダメだよお……」

来牙は絵梨の胸を揉み始めたが……。

「触るのがダメなら……今度はこっしょうしよう……」

「ああん！！だ……だめえ来牙くん……摘まんじゃだめえ……」

今度は絵梨の胸を露わにして乳首を吸い始めた。



ロペロと舐められていた。

そして10分後

『(ピシュツ!) さ〜てと、爺はどうなっているかな〜?』

猫部屋に突然私が現れて、爺の様子を見に来た。

「くくくくにああああ(ぺろぺろ)」「」「」

「クヒッ……ヒヒヒヒヒヒ……ヒヤヒヤヒヤ……」

『………おお……これはまた……』

猫達は爺の顔を舐めまくっており、爺は変な声を上げながら倒れていた。

『………この辺で勘弁してやるか………猫の皆さん、今日の遊びは「こまどび〜すー!」』

「くくくくにああああ(了解)」「」「」

猫達は私の声に反応して、一斉に爺から離れた。

『では爺と遊んでくれた猫の皆さんには、高級キャットフードをプレゼントします（パチンッ）』

私が指を鳴らし、猫達の目の前にキャットフードが出てきた。

「「「「「にゃあああ〜！〜！（こ）馳走だ〜！〜！（「「「「「

『ではお食べ下さい』

「「「「「にゃあああ〜！〜！（いつただきま〜す！〜！（「「「「「

猫達は一齐にキャットフードを食べ始めた。

『さて、爺を連れて帰るか』

「アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ……ウヒヒヒヒヒヒ……」

爺の顔がアへ顔になっており、見てて気持ち悪かった。

『……………触りたくないから、これで飛ばそう（パチンッ！）』

「イヒヒヒヒ……（ピシユッ）」

私が指を鳴らすと爺が消え……………。

『では私も（ピシユッ！）』

私の姿も消えた。

来牙×絵梨4（後書き）

バニーガールのコスプレをした絵梨でした〜〜！！！！

来牙・翔×優子+

授業が終わって昼休みの時に来牙は屋上におり、壁に寄りかかりながら座っていた。

何故か私も隣にいたが……。

『すぐに教室から出てよかったね来牙』

「全くだ。出なけりや姫路が作った弁当を食うはめになってたからな……」

来牙は今日弁当を持って来ていないので、姫路に声を掛けられる前にすぐに教室から退避したのだ。

「明久達には悪いが、俺は死にたくないからな……」

当然、明久達は来牙を逃がすまいと阻止しようとしたが、姫路と島田に声を掛けられたので実行する事が出来なかった。来牙が颯爽と教室から出た後、明久達は来牙に恨み言を呟きながら姫路の弁当を食べて断末魔の悲鳴をあげていた。そして来牙が購買に向かっている途中で私に会い、私が『屋上で昼飯ご馳走するよ?』と言ったので来牙は私と一緒に屋上へ向かったと言う訳である。

『しかし明久達はどうして素直に“不味くて食えん!”って言わないのかな?』

「姫路を傷つかせないように気を遣っているんだとさ」

『……………あいつ等はバカか？　それが逆に姫路を増長させるって事に気付いていないのか？　私としては傷付かせて、二度と料理しないで欲しいんだけど』

「俺はそうしたいんだが、明久がな……………」

私の発言に激しく同意している来牙であったが、明久が阻止する為に不味いと言えることが出来ないのだ。明久の行動を理解に苦しむ私であったが、暫く忘れる事にする。

『……………まあ今は姫路の糞不味い料理はどうでもいいや。さて、昼飯でも食べますか（パチンツ！）』

「そつだな」

私が指を鳴らすと、私と来牙の目の前にカツ丼が入っている丼が出てきた。

『では食べるとしますか（パキッ）』

「カツ丼か……………美味そうな匂いだ（パキッ）」

私と来牙は丼の上に乗っている割り箸を割って食べようとしたその時……………。

「そこでカツ丼を食べようとしている二人！！　ちよつと待ったよ  
~~~~~！！！！」

『……………やっぱり翔が出てきたか』

「……………来ると思った」

私と来牙が声に反応してそこに顔を向けると、翔が優子を連れて現れた。

「で、何の用だ翔？俺はこれから飯を食う所なんだが………つてか何で木下も一緒にいるんだ？」

『来た理由は大体想像が付くけどね……………それでご用件は？』

来牙と私は来た理由が分かっていたが、敢えて翔に聞いてみた。

「決まってるだろ！！俺様を差し置いて二人だけそんな美味そうなカツ丼を食おうだなんてそうはいかないぞ！！つてか俺様にも食わせる！！」

「言つて置くけどアタシは翔に無理やり連れて来られただけだからね。その所は理解してよ」

『「あつそ……………」』

私と来牙は揃って同じ事を言った。

そして翔は……………。

「で？旅人さん、俺様の分は？無いとは言わせないぞ！！」

『……………はいはい、分かつたから出すよ。それとそんなに顔を近づけないで欲しいんだが（パチンツ！）』

私にカツ丼を出せと言わんばかりにと催促してくるので、私は仕方なく指を鳴らして翔と優子の目の前にカツ丼を出した。

「よっしゃああああ！！！！食ってやるぜえええ！！！！」

「ねえ旅人さん、アタシも食べていいの？ 別にアタシは……」

『いいよ別に、一人増えた所で問題無いから。それに木下さんもまだ食べてないんでしょ？』

「そ…そうだけど……」

『だったらここで食べな。お代はいらないから』

「そ…そう？ だったらアタシも遠慮なく頂くわ（それに本当に美味しそうだし……）頂きます（パキッ）」

優子が割り箸を割ってカツ丼を食べようとすると…。

「旅人さん、お代わりを頼むぜ！！！！」

既にカツ丼を食った翔がまた催促してきた。

「……翔……お前な……」

「……翔……アンタね……」

『……食べるの速いな』

来牙・優子・私は揃って翔に呆れていた。

全員がカツ丼を食べ終わって15分後……。

「はあ~~~~~食った食った！ 美味かったぜ旅人さん！！ あんな美味しいカツ丼は初めて食ったぜ！！」

「お前はカツ丼だけじゃなく、カツカレーやカツサンドや串カツも頼んでいただろうが」

「ついでにハムカツもね……アンタは遠慮って言葉が無いのね……」

『翔、この間の事をまだ根に持っていたのか？』

翔は私の出した料理を絶賛し、来牙と優子は翔に呆れており、私は翔がいろいろと催促する理由を聞いた。

「当たり前だ！！ アンタが出した料理は最高級の材料を使っているって言ってたからな。俺様がそれを食わなきゃカツ達が可哀想じやねえか！！」

『「」……………「」』

翔の言い分に最早何も言えない3人であった。

「……………翔の言い分はどうでもいいとして、確かに美味かったな」

「……………翔が催促する程の美味しさだって事は分かるけどな」

『そりゃ当然だよ、高級な無菌豚を使っているからね。来牙は以前食べた事があるでしょ？ ……………誰かさんと一緒にね（ボソッ）』

「……………アンタはまだその話題を出すか？」

来牙は私の発言に反応し恨みがましい視線を送ってきた。

『別に私はそんなつもりで言ったわけじゃないよ。ただ単に食べたことがあるだろ？ っって言っただけだ』

「……………ならいいが」

「なんだ来牙、お前カツ丼を以前食ったことあるのか？ っつか旅人さんの言ってた誰かさんって誰の事だ？」

「ねえ宮永君、一体何の話？」

翔と優子が耳聴く私の小声が聞こえていた様だ。

「何でも無い、気にするな」

「俺様としては、そんな言い方されると余計気になるんだが？」

「宮永君、素直に話したらどうかしら？」

来牙が何も無いと言っても、諦めない翔と優子であった……………それに何故か優子が少し怒っている。まるで浮気している彼氏に問い詰めている感じだ。

「だから何も無いって言ってるだろ」

「そこまで否定するって事は何かありそうだな。そう思わないか優

子？」

「そうね翔、これは聞く必要があるみたいね」

「翔はいいとして、何で木下がそんなに聞きたがるんだ？ 寧ろ怒っているように見えるが……」

来牙は頭に青筋を浮かべている優子に疑問を抱いていた。

「別にアタシは怒っていないわよ宮永君。アタシはただ宮永君がどんな女の子と一緒に行ったか聞こうとしているだけだから（怒）」

「何でそうなる。ってか俺が他の女と一緒に行った事は確定なのか？ それだったら絵梨がいるだろ」

「旅人さんが言っていた“誰かさん”が絵梨だったら、すぐに名前と呼ぶからな。それに来牙、お前のその反応は他の女と一緒に行ったって認めてるぞ？」

「……………」

『（……あらら、こりゃちょっと数蛇だったな）』

翔の推理に来牙は無言になり、私はここで言う事では無かったと後悔していた。

「沈黙は肯定と受け取るぜ、来牙？」

「じゃあ聞かせてもらおうかしら、宮永君？」

「だ……だから……」

最早逃げ場が無い来牙であったが……。

『悪いけど、君達には忘れてもらおう為に食後の運動をしてもらおうよ
(パチンッ！)』

「は？ 食後の運動って……グッ！！」

「何言ってるの旅人さん？ ……ウツ！！」

私が指を鳴らすと、翔と優子は突然呻き声を上げた。

「お…おい旅人さん、何をしたんだ？」

『2人を見てればすぐに分かるよ』

「え？……っておい！？」

来牙は2人を見ると……。

「ハアッ！…ハアッ！…ハアッ！…優子！！」

「はあ…はあ…はあ…翔……んむっ……」

翔と優子はお互いに抱き合っけてキスをし始めた。

「旅人さん！何でああなっているんだよ！？」

『あの二人の性欲を引き出した。この間、君にしたようにね』

「この間？ ……何の話だ？」

『おっと！ こっちも余計な事を言ってしまったな。仕方ない、お前もこうだ！（パチンツ！）』

「お…おいちょっと待て！？ ……グウツ…！」

私が指を鳴らすと来牙は苦しそうな顔になっていたが…。

「ハアツ！…ハアツ！…ハアツ！…翔！ 木下！ 俺も混ぜろ…！」

翔と同様に来牙は優子に近づいてキスをする。

「ん？ ……来牙か？ いいぜ。俺様と一緒に優子を気持ちよくしてやるうぜー！」

「ああ…宮永くん…一緒に楽しもう…ああん！」

来牙は優子の背後から胸を揉み始めた。

そして3人は…。

「来牙…お前にしては珍しいな。一緒に混ぜるなんてよ」

「目の前にこんな御馳走を見逃せるか」

「んん…もつと…もつとしてえ…」

仲良く行為に夢中になっていた。因みに私は既に退散してるので何

処にも姿が見当たらない。

優子を座らせて、来牙は背後から優子の服に手を突っ込んで胸を揉み、翔は優子のスカートに手を入れながら優子とキスをしている。優子は二人に攻められて大変気持ちいい表情をしていた。

「随分と気持ち良さそうな顔をしているな木下……そんなにいいのか？」

「こっちはもうヌルヌルだぜ……それに洪水状態だ……」

「ああ……2人とも……そんなに恥ずかしい事を言わないでえ」

優子は恥ずかしながらも来牙と翔の攻めに感じまくっていた。

「じゃあ優子、今度は更に気持ちよくしてやるぜ」

「ああ、アンタに天国を味あわせてやるよ」

翔と来牙は立ち上がって服を脱ぐと、今度は優子が着ている服を脱がす。

優子は……。

「ああ……2人の逞しい体」

2人の裸を見てウツトリしていたのであった。

おまけ

行為が終わった後……………。

「うーん、何で俺達は屋上で寝ていたんだろうな？」

「そんなの知らないわよ！ 寧ろアタシが知りたいくらいだわ」

翔と優子は屋上から出て教室に向かっていた。

「まあいいか、俺様としては美味いカツが食えたしな。それに優子が来牙の事が好きなのを知れたし……………」

「なっ！！（／／／／／／／／／／／／）な…何言ってるのよ！！ アタシがあんな妹べつたりな宮永君に恋愛感情なんてひとかけらも抱いていないわよ！！」

「顔が赤くなりながら強く否定してもな。逆に肯定しているみたいぞ？」

「……………！！！！！！」

翔の発言に優子の顔が真っ赤だった。

と、その時……。

『いきなり参上じゃじゃじゃ〜ん!〜ん!〜ん!〜ん!〜ん!〜ん!』

「きゃあああ!〜! い…いきなり出て来ないでよ!〜! びっくりしたじゃない!〜!」

「旅人さん、アンタってホントに神出鬼没だよな?」

私が参上すると優子は物凄く驚き、翔は大して驚かずしれっとしていた。

『いや〜〜それ程でも〜〜』

「誉めてないからな」

「そんな事はどうでもいいわよ!〜! と言っか何で貴方は心臓に悪い登場の仕方をするのよ!〜?」

『まあまあ木下さん、そう怒らずに。お詫びにこれあげるから許して(スッ)』

私が優子にとある薄い本を渡そうとすると……。

「こんな本でアタシを(パラッ)……………ゴホンッ! いいわ、許してあげる」

優子は中身を見ると「ロツ」と手のひらを返してすぐに許してくれた。

「早っ!!! つつか何の本を渡したんだ!？」

『「それは秘密」』

「ハモってるし!!! お前等どう言う関係だよ!？」

珍しく突っ込む翔であるが、優子はすぐ本題に入ろうとする。

「所で旅人さん、今度は何の用なのよ」

『ああ、ちよつと翔にね……』

「はあ？ 俺様に？ てつきり何時の間にかいなくなったからもう用が済んだと思ったんだが……」

翔は何故自分に用があるのか分からなかった。

『君にはこれからちよつとした鬼ごっこを始めて貰おうかと……』

「鬼ごっこ……ってまさかまた船越先生との鬼ごっこかよ!？ 冗談じゃねえぞ!！」

『いいや、相手は船越先生じゃない。君の相手は……あそこにいる人だ!』

「「え?」」

私が翔と優子の後ろに指をさし、2人はその方向を見ると……。

「あらあん、弟子の翔じゃなあい？ お主があたしの相手をしてくれるのお？」

バニーガールの格好をして気持ち悪い化粧をしている宮永源三がいた。

「うっ！！」

「うぎゃあああ！……！！！」

優子は余りの気持ち悪さに口に手を当てており、翔は一目散に逃げ出した。

「酷いじゃなあい翔う、師匠のあたしの顔を見て逃げるなんてえく。そんな弟子にはお・し・お・き・よ！」

オカマ化している源三は翔を追い掛け始めた……それも物凄いスピードで。そして此処には私と優子だけとなった。

「た…旅人さん、今の人って宮永君のお爺さんなの？」

『当つたり〜 爺にはちよつと私の方で洗脳してああなっているんだよ』

「……どうしてあんな事を？」

『あの爺は最近、自分の娘である絵梨にセクハラ以上の事をやりそつで大変危険だからね〜。だからあんな状態にしたんだよ』

「……自分の娘にそんな事をやろうとしているの？変態もいい所じゃない……」

『あれは元から変態だったから、私の方でさらに変態にさせた。これであの爺も絵梨にセクハラはしなくなるだろう』

「……逆に男好きの変態になったのね。追い掛けられている翔も気の毒に……」

『いいんだよ翔は。ギャグキャラの翔はどうせすぐ復活するだろうし』

「……そうね、人の事を詮索する翔には丁度いいお仕置きだし」

私の発言が気になる優子であった。

それから翔は……。

「かけるう〜。早くあたしと楽しみましょうよお〜!」

「いくらお師匠様でもそれは勘弁してくれえ〜!」

師弟の追いかっこが終わるのが、時間の問題であった。

因みに他の生徒や教師は、関りたくないが為に必死に無視していた。

次第に大人しくなった。

「うふふふふ、それじゃあ師弟愛を高めるエッチスタート〜!!」
爺は翔を裸にしておいしく食べましたとき。

来牙・翔×優子+ (後書き)

翔にはカツを食った至福から一気に地獄へと落ちてしまいました
!!!!

今回は来牙×絵梨のラブシーンでノクターン行きになりますので、
ノクターンノベルズでご確認下さい!!

休日物語

とある休日の最中……。

『御機嫌よう、読者の皆さん。今回は私“さすらいの旅人”が色々な所を見て回ります。先ず最初は来牙の部屋に行つて参ります（ピシュツ）』

私は来牙の家へと向かった。

来牙の部屋にて。

『（ピシュツ！）ハロ〜お二人さん』

「ん？ 旅人さんか……何か用か？」

「あたし達に何か用事？」

来牙と絵梨はゲームをやっている様だ。

『いえいえ、特に用はないんですけど……』

「珍しいな、アンタが何の用も無く来るなんて」

「いつもなら来ては必ず何かするからね」

私の発言に意外な顔をする2人に私は少々いじける。

『なんだい、用が無ければ来ちゃ駄目なのかい？』

「別にそんな事は言っていないだろ」

「そんなにいじけないでよ、旅人さん」

私が少しいじけると絵梨が慰めてくれた。

『うつつ……やっぱり絵梨は優しいですな、来牙と違って』

「そうかな？」

『うん、慰めてくれるついでに膝枕をして……（ゴソッ！）アイタッ！……』

「……………」

私が悪ふざけで絵梨の膝に頭を乗っけようとすると、来牙が無言で辞書を投げて私の頭に当ててきた。

『アタタタ……おい来牙！！ 今のは冗談抜きでマジ痛かったぞ！……』

「旅人さん、いくらアンタでも俺の絵梨に膝枕をするのはどうかと思うんだが？」

「ちょ……ちょっと来牙君？」

絵梨は俺のだと言う様に来牙は絵梨を片手で抱きしめる。

『イテテテ……全く、来牙は冗談が通じないんだから』

「絵梨以外の事だったらいくらでも乗ってやるよ」

「ああそうかい………ったく、美咲や優子とエッチしておいてよくそんな台詞が言えるな（ボソッ）」

私が小声で言う……。

「ちょっと待て、それは何の話だ？」

「ねえ来牙君、旅人さんが言った事は本当かな？」

「待て絵梨、俺には木下とそんな事をした覚えは………」

「美咲ちゃんとはかく、どうして木下さんとエッチしたのかな？
あたし知りたいなあ〜」

来牙と絵梨の耳はバツチリ聞こえていたようで、絵梨は来牙に笑みを浮かべながら来牙に問い詰めている……私や来牙から見ると恐い笑みであるが。

『………どうして私の小声がこんなに聞こえてしまうんだろう？
ホントに小さく言った筈なのに………』

「おい！！ そんなことはどうでもいいから、この状況をどうにかしろ！」

「来牙君、何で旅人さんにそんな事を言うのかな？ あたしは来牙君に聞いているんだけど……」

「だ……だから……」

『どうやら私はお邪魔虫の様ですから退散しますね……では！（ピシユッ！）』

私は姿を消した。

「ま……待て！！」

「ら・い・が・く・ん？ 聞かせてね？」

「だから……俺は知らないって」

絵梨が来牙を問い詰める状況はしばらく続いていた。

『やれやれ、来牙も絵梨も耳聡いな』

私は公園のベンチに座って少々愚痴っている。

『どうして私の小声が聞こえるんだよ。てっきり絵梨が“旅人さん、今何か言った？”って台詞を期待していたのにも拘わらず、すぐに来牙を問い詰めるんだから。あゝもう、迂闊に小声で言えないなこれは……』

「旅人さん、さっきから何を一人でブツブツ言ってるの？」

『ん？』

私が声の主の方に顔を向けると……。

『おお、明久ではないか』

明久が怪訝な顔をして私を見ていた。

「こんな所で何をしているの？ 旅人さんがベンチに座っていたからつい声を掛けたんだけど」

『ああ……ちょっとね。そういう明久こそどうしたんだい？ 休日は家でゲームをしている君が出かけているなんて珍しいね』

「いや……姉さんが……」

『……………スマン、余計な事を聞いてしまったな』

どうやら明久は姉の玲から逃げている様だった。

『何だったら私と一緒にいるかい？ もし災難が来たらすぐに追いかけてあげるよ』

「ホントですか!？」

明久は私からの誘いに嬉しそうな顔をする。

『丁度暇だったからな。それに明久って家でも学校でも散々な目に遭っているから、偶には平穏な生活を送らせてあげようかと思ってな』

「うう……旅人さんの気遣いが僕にとっては心のオアシスですよ。何時も僕の周りは敵だらけですから……」

『……………(ポント) 明久、お前って本当に普段から……………』

涙を流して感動している明久に、私が明久の肩に手を置いて同情している……………。

「あら、アキ君はこんな真昼間から不純同姓交遊ですか？」

「え!？ ねねね姉さん!? いつの間に来てたの!？」

『今度は姉の方が……………ってか不純同姓交遊って何だよ!？』

明久の姉の吉井玲が来たので、明久はすぐに私から離れた。

「アキ君、姉さんは悲しいですよ。姉さんと言う者がいながら不純同姓交遊に走るなんて……………」

「何を言ってるんだよ姉さん!? この人にそんな誤解を招く様な事を言わないでよ!！」

『たかが肩に手を置いた位で不純同性交遊って無理があるぞ?』

「アキ君には女の子に興味を持ってもらう為、今から姉さんとベッドで……」

「ちょっと待って!! どうすればそういう結論になるの!?!」

『おいコラ!! アンタは明久の実の姉だろうが!?! 近親相姦は止めなさい!!』

明久と私は即座に玲に突っ込んだ。

「ではアキ君。今からアキ君のベッドで姉さんと……」

『人の話を聞けよ!! ってか人の道に反しているぞアンタ!?!』

「どなたか存じませんが、私はこれからアキ君と不純異性交遊をしなければいけませんからこれで失礼します」

『(……駄目だコイツ。話を聞かない所か、勝手に進めていやがる)』

頭のネジが外れまくっている玲の会話に全く付いて行けない私であった。

「では家に戻りますよ、アキ君」

「ちょっと姉さん!! だから僕はそんな事望んでいないから!! お願いだから離して!!」

玲は明久の腕を掴んで強制的に連れて行くみたいだ。

『……………明久のお姉さん』

「何でしょうか？」

「助けて旅人さん！！ このままだと僕は人様に頭向けが出来ない事をされてしまうよ！」

『分かったから、ちょっと待ってる。それに“頭向け”じゃなくて“顔向け”だ』

私は明久に間違いを訂正しながら玲に近づいて…………。

「あの、ナンパはお断りですが……………」

『……………どこをどうすれば、そう言う解釈になるのかは分からないが、あなたには退場してもらおう（スツ）』

「え？（トンッ）」

玲の額に人差し指を当てて…………。

『明久は連れて行かず、このまま大人しく家に帰って寝てる』

「……………分かりました。ではアキ君、私はこれで失礼します』

暗示を掛けると玲は公園から立ち去って行った。

「え！？ な…何なの！？ 旅人さん、姉さんに一体何をしたの！」

「？」

『暗示を掛けたただけだよ。今日一日は家でずっと寝てもらおうように設定したから』

「え？ ……そ…それって、姫路さんや美波に掛けたやつ？」

『まあそんな所だ。さてと、これで邪魔者もいなくなった。では行こうか明久』

「あ…はい。でも何処に行くんですか？」

明久は行く事に何の疑問も持たずに、私に行き先を問う。

『とりあえず少々腹が減ったから、どこかのレストランで飯を食つ。安心しろ、私が奢るから』

「ほ…ホントですか！？ 助かります！」

奢ると言う単語を聞いた瞬間に明久は凄く嬉しそうな顔をする。

「いや、ホントに旅人さんには感謝しますよ。この所、姫路さんや美波に色々高い物を無理矢理買わされて……」

『……………ホントにお前って碌でもない目に遭わされているんだな。てか姫路や島田は何故お前に買わせようとするんだ？』

「それが……………」

明久が説明すると……………。

「……………何が男に華を持たせるだ、あのバカ共は。完全に集り同然だろうが」

私は怒りを通り越して物凄く呆れていた。

「（明久は女の子の頼みは断れないから買っているんだろうが、その所為でバカ共を余計に増長させているからな。これは後で私の方で何とかしておくか）」

「どうしたんですか旅人さん？ 何か急に恐い顔になっていますよ」

「……………いや、何でもない。それじゃあ行こうか」

「あ…はい」

私は明久を連れてレストランに向かおうとしていたが…………。

「旅人殿！！ お主は明久を何処に連れて行こうとしているのじゃ！？」

「ひ…秀吉！？」

「……………おいおい、今度は秀吉か」

嫉妬に満ちた秀吉が私達に近づいてきた。

休日物語 ？

私は明久と秀吉を連れて洋食レストランにいた。

「秀吉、僕は旅人さんと何の関係は持っていないからね」

「す…すまぬ明久…」

『秀吉君、前にも言ったが私は明久に恋愛感情なんて抱いていない。嫉妬するのは構わんが、それは私にではなく明久にぶつけてくれ』

「申し訳無いのじゃ…(しゅん)」

『(前にもやったな、このやり取り。少し違うけど……)』

私は秀吉を説教をしている時に、優子とのやり取りを思い出した。相違点については、秀吉は優子と違って自分の非を素直に認めている所と言った所であるが。

レストランに行く前に秀吉は私と明久を見かけてすぐに、明久ではなく私に突っかかってきたのだ。その時の秀吉の心情は、明久が私に奪われるのではないかと危惧していたらしい。秀吉はそれを阻止する為、私に関節技を仕掛けようとしたが、明久が止めに入り秀吉を抱きしめて落ち着かせた。そして秀吉を落ち着かせた後に、私と明久と秀吉はレストランにいますと言う事だ。因みに座っている席はこうなっている。

通
私

路

テーブル窓

明久・秀吉

『（まあ…明久が大好きだと言うのがよく分かったから、それはそれでいいけどね）』

私は秀吉が明久に対する想いが強いと言うのがよく分かった。

「秀吉、僕や旅人さんはもう怒ってないから、そんな泣きそつな顔をしないで」

「じゃ…じゃが、ワシは……」

『明久の言うとおり、私もそんなに怒ってないから』

「……旅人殿、本当に申し訳なかったのじゃ」

秀吉はこれ以上無い位、縮まっているように見えた。

『……………はあっ…明久、私は料理を頼んでくるからその間に秀吉を慰めておけ』

「え？ ……あ、はい。分かりました」

『さてと（スツ）……………すいませ〜ん！ ちょっといいですか〜！』

私は席を離れて、奥にいるウェイトレスに声を掛けた。

「秀吉（ギョツ！）」

そして明久は秀吉を抱きしめて…。

「安心して、僕は秀吉以外の人は好きにならないから」

「……じゃが…ワシはまた（明久が旅人殿と仲がいいから…）」

「その時は僕がまた止めるから大丈夫だよ（ちゅっ）」

「あ…明久！（//////////）」

明久が秀吉の頬にキスをして、秀吉は顔が赤くなりながら驚いた。

「ふふ……秀吉、可愛い」

「またお主はそう言ってワシを……」

「じゃあ今度は……唇にキスしてあげようか？」

「……明久は卑怯じゃ」

「え？」

「ワシが拒めないのを知っておきながら……そうするのはホントに卑怯なのじゃ」

「あ…あはは……」

少し拗ねながら言う秀吉に明久は苦笑する。

「じゃあ止める？ 僕はどっちでもいいけど」

「……………やっぱりお主は卑怯じゃ…ん」

秀吉は明久に顔を向けて目を瞑り、キスをされるのを待った。

「ふふふ……………それじゃあ……………」

明久が秀吉の顎をクイツと持ち上げてキスをしようとするが…………。

『……………慰めろと言ったが、そう言う事は2人っきりの時にやってくれ』

「……………!」

明久と秀吉は私の声に反応して、すぐに止めた。

「た…旅人さん、いつの間に……………」

『余りにラブラブな雰囲気を出すから止めさせてもらった……………つかお前ら、ここはレストランだって事忘れてない？ 周りを見てもよ』

「……………(……………(……………(……………」

レストランにいる他の客はじつと明久と秀吉を見ていた。男性客は妬みの視線を送り、女性客は私もあんな事されてみたいと羨ましそうと等々の物があった。

『御理解頂けましたか？』

「……………すみませんでした（のじゃ）」

『よろしい……………それでは…（キツ！！）』

「……………（ビクッ！ ササッ！！）」

私が周りに一睨みすると野次馬達は明久達を見るのを止めて、何事も無かったかのように振舞うのを確認すると私は椅子に座る。

『さして、料理が来るのを待つとしますか。2人の分は私が勝手に決めておいたから』

「ま…まあ、僕たちは奢られる側だから文句は言いませんが」

「一応何を頼んだのかを聞いてもいいかの？」

『私はハンバーグステーキ、明久はパエリア、秀吉はスパゲッティナポリタンだよ』

秀吉の質問に私は頼んだメニューを言った。

「あれ？ 旅人さん、僕の好物がパエリアなのを知ってたんですね？」

『一応な……………頼んで不味かったか？』

「いえいえ、旅人さんは僕の事を色々知っているんだなあと思っ
て」

『何だったら、君がこの間の定期テストで何て名前を書いたか当てやろうか?』

「!!!! それは勘弁して下さい。思い出したくない過去ですから」

明久はすぐに拒否した。

『ハツハツハ、そりやまあ思い出したくないよね、“アレクサンドロス大王”君?』

「(バンツ!) 言った!? 僕の思い出したくない事を言った!! (グイッ!)」

『ハツハツハツハ! (ガシッ!)』

明久はテーブルを叩きながら私に頭突きをしそうな位に顔を近づけたが、私は右手で明久の頭を掴んで近づかせないようにした。

「ぐぐぐぐぐぐ……もうちょっとで……!」

「ハツハツハツハ……どうした? もう限界か?」

「……………(やっぱり旅人殿はズルイのじゃ)」

私と明久のやり取りを見て秀吉は無言になりながら、私に対する嫉妬心がマグマの如くグツグツと煮えたぎる様にまた高まった。秀吉は私達に見えない様に、テーブルの下で手を強く握りながら顔を俯かせる。

「……………（明久はあんなに楽しそうに……………ワシに見せた事の無い顔をして）」

『ん？ 秀吉、どうした？』

「どうしたの秀吉？ 顔を俯いちゃって、何処か痛い所あるの？」

私と明久は秀吉が顔を俯かせたのでやり取りを中断した。

「……………何でも無いのじゃ」

「いや…そんな顔で言われても」

『……………（どうやら原因は私みたいだな）』

私が秀吉の思考を読むと、原因が私だと言う事が分かった。

『（私と明久はそんなに親密な関係では無いけど、秀吉にとっては面白くないんだろうね。……………仕方ない、秀吉の為に私は退散しますか）』

私はレストランから出る一芝居をする為に、ポケットから携帯を取り出す。

『おや？』

「旅人さん、どうしたの？」

『メールが来てて（パカッ）……………すまん明久。私は失礼する』

「え、どうして？　まだ料理は来てませんよ？」

私はメールを見る振りをしてすぐに退散しようとする、明久は引き止めた。

『急に野暮用が出来たからすぐに行かなければ不味いんだ。ああ、ここのお金は払っておくから気にせず食べるといい。それじゃ！』

「あ……ちょ……ちょっと……！」

明久の制止を振り切って私はすぐにレストランから出る。

「……………行っちゃったね、秀吉」

「……………旅人殿の野暮用とは一体何だったのじゃろっ？」

「さあ……………？」

私と秀吉は呆然とレストランの出入り口を見ながら呟いた。

「（クシャ）ん？」

秀吉は膝の上に紙が置いていたのでそれを取って見ると……………。

“明久とじゃれててすまんね。秀吉に謝罪をする代わりに私は退散させて頂きます。どうぞ二人っきりの時間をお過ごし下さい。ただし、人がいない時にイチャ付くんだぞ！　いいな？　by さすらいの旅人”

「……………そんなにワシに気を遣わなくても（ボソツ）」

「ん？ 秀吉、何か言った？」

「何でもないのじゃ」

秀吉はすぐに紙をズボンのポケットに入れると、私が注文した料理をウェイトレスが持って来てテーブルに置いた。

「それじゃあ、旅人さんには悪いけど食べよつか？」

「そ…そうじゃの……………（気遣い感謝するぞい、旅人殿）」

明久と秀吉は料理を食べ始めた。

『やれやれ、秀吉も結構嫉妬深かったのね……………』

私はレストランから出て、ブラブラと歩いていた。

『飯が食えなかったのは残念だが、このまま散策を続行しますか……………おや？……………あれは』

私が歩いている先には姫路と島田の後ろ姿を見ると……………。

『……………うん……………何か嫌な予感がするから、少し様子を探って

みるか
『

姫路と島田に気付かれないように後を追った。

休日物語 ？

『さてと、あいつ等は何処へ行くのかなあ〜？』

私は姫路と島田が何か良からぬ事をするのではないかと思い尾行している。

『これを読んでいる皆さん、決してストーカーではないからね！
って私は何を言ってるんだ？ …… まあそんな事はどうでもいい
や』

私が勝手に自己完結すると、姫路と島田は歩く足が止まった。

「ここです、美波ちゃん」

「へえ〜、結構いい店じゃない」

『（…………… ケーキ屋か、てつきり明久の拷問道具を買うのかと思って
いたが……………）』

私はケーキ屋をみると結構良さそうな店であった。

「このケーキ屋は持ち帰りだけじゃなく、店内で食べる事も出来るんですよ」

「おいしそうなケーキがいっぱいだよ」

2人は展示されているケーキを見ながら美味しそうに見ていた。

『(……)ふつっ。どうやら私の取り越し苦労だったみたいだな。あの二人を見るとまた明久に何か仕出かそうと思っていたが……そうでないなら退散するか』

私は退散しようとしたその時……。

「でもこのケーキって凄く高いわね。ウチらが買うとすぐに無くなりそう」

「大丈夫ですよ。明久君が買ってくれますから」

「そうね、アキだったら喜んでウチ達の為に買ってくれるから安心ね」

『(ピタッ)……(前言撤回!! アイツ等、明久に集る気だ! っつかあのケーキやタルトよく見ると結構いい値段するじゃないか!!)』

私は姫路と島田の発言に退散するのを止めて撤回すると、展示しているケーキやタルトの値段を見て高いのが分かった。

『(1ピースで7〜800円ばかりするじゃないか! 一番高いので1200円もするぞ!! 1ホール何か5000円以上は確実にやないか!!! どんだけ高いんだよ!!!)』

私は余りの値段の高さを見て内心ツッコミまくる。あんな物を明久に買わされたら財布が確実に破産するのが目に見えていた。

「今度、明久君と一緒に行く時に此处にしましょう」

「うん、アキに一杯奢ってもらおうから」

「やっぱり明久君に花を持たせるのはいいですからね」

「じゃあ、そのアキの為に今の内に何を頼むか考えておこうかしら？」

「そうですね」

島田がケーキを選ぶと姫路も賛同した。

『（……おい待て！！ お前らそんな高いやつを明久に集るつもりか！？ 頼むとしても1ピースだけだよな！？）』

私の思いを2人は見事にぶち壊してくれて……

「ウチはケーキ3つを頼もうかしら」

「私はタルト2つを明久君に頼みます」

「アキにはケーキとタルトを一つずつね」

「はい」

『……（待てコラ！！ お前等なんで1000円以上のケーキやタルトばかり選ぶんだよ！！ それも複数で！！ ってか明久の分も含めて合計7〜8000円以上するぞ！！ お前等は何考えてんだ！？）』

私は内心でさらにツッコミまくった。

「でも、ここのケーキ見るとすぐに食べたくなくなって来ました」

「うん、ウチもそう思ってきた。だったら今からアキを呼んでここに入るうか？」

島田が携帯を使って呼ぼうとしていたので……。

『（マズイ！！ 明久は秀吉とデート中だ！ 今明久に電話して秀吉とデートしている事がばれたら、あのバカ共は確実に明久を抹殺する！！ ここは止めねば！！！！）』

私は意を決して二人に近づいた。

『これはこれは、姫路さんと島田さんではありませんか。奇遇ですね〜』

「あ！ アンタ！！」

「あなたは！！」

姫路と島田は私を敵意を抱くかの様に見た。

『おや？ そんなに怖い顔をしてどうしたんですか？ 私は貴方達に何かしましたっけ？』

私は惚けながら言うと姫路と島田は更に憤慨する。

「アンタの所為でウチ等がどれだけ酷い目にあっただけだと思ってるのよ！？ あの後、何度も夢に出てきたんだから！！」

「そうです!! 私達がどれだけ苦しんだと思っ
ているんですか!
? 本当に大変だったんですよ!!」

コイツ等は多分、先日『混沌物語』の件で、あの時の「地獄の幻想」についての怒りを私にぶつけていると思う。そして周囲にいる
通行人は私を非難がましい目で見ているが、二人の話を聞いただけ
では確かに私が悪いと見える。

『……………貴方達、私を袋叩きにするつもりだったのによくそんな台
詞を言えますね? 自業自得じゃないですか?』

私が正当防衛だと主張したが……………。

「元はと言えばアンタがアキと木下をデートさせたからでしょ!?
あれは当然の報いよ!!」

「私たちは今でも貴方を許していませんからね!!」

『……………あつそう』

言っても無駄であり、通行人達も今度は姫路と島田の言い分に呆れ
た目で見ていた。

「丁度いいわ! 今すぐここで、恨みを晴らさせてもらおうわ!」

「美波ちゃん! 私もやります!!」

島田が指をポキポキ鳴らしながら私に近づき、姫路も私にお仕置き
をしようと近づいて来た。

『……………へえ？ 私に恨みを晴らすとは……………随分いい度胸してるね？（スツ）』

私は近づいてくる二人に右手を鳴らそうとしたが……………。

「同じ手は通用しません！！ 美波ちゃん！！」

「分かってる！！（ヒュンツ！）」

『ん？（バチンツ！）……………クツ！』

姫路は小さな鞆を出して島田に鞭を渡し、島田は私の行動を阻止するべく鞭を使い私の右腕に当て、私は鞭が当たった痛みで怯んだ。

「今です！！」

「よっしゃあ！！（ガシツ！！）」

『グツ！（バタンツ！）』

姫路の合図で島田は私を押し倒してマウントポジションを取り、姫路は島田に渡した鞭を使って私の両手をグルグル巻きにする。

『クツ！！ お前等！！』

「さあ覚悟しなさい！！！！（ポキポキ）」

「美波ちゃん、存分にやっちゃって下さい！！！！」

「言われなくても!! (ビュオツ!)」

『クソオオ!!! …… なんてね (ピシュツ!)』

私は島田に殴られる寸前に姿を消した。

「あ…あれ!? 何でいないの!？」

「き…消えてしまいました!？」

2人は私が突然消えたので大きく戸惑い周りを見る。 通行人達も同様に私が消えた事に驚いていた。

『フフフフ…… 私はここだよ』

「…!!」

私の声に反応して2人や通行人はその方向を見ると…。

「きゃあああああ~~~~~!!!!!!」

「~~~~~きゃあああああ~~~~~!!!!!!」

「」

常夏コンビの片割れである夏川のゴスロリ姿(に変身した私)をみて絶叫が響いた。

「きゃああ~~~~~! お化けじゃ無いですけど怖い~~~~~!!!!!!」

「いやあああ~!!!!!!」

私は夏川の声を使ってオカマ口調で言っている。

「あ……ああ……あ……」

「いや……こないで……」

『では行きますよぉ〜』

姫路と島田は私の姿に完全に怯えており、私が更に近づこうとする
と……。

「「いやあああ〜〜〜！！！！」（ダダダダダ〜〜〜！！！！）」

「「」

仲良く揃って逃げ出した。

『愚か者共め、私に刃向かうからこんな目に遭うんだよ（ジ〜〜！）』

私は背中中のチャックを下ろして、夏川の着ぐるみを脱ぐ。

『ふう〜。これであいつ等も今日は明久を誘わないだろう……さてと、これをしまっ為に（タッタッタッタ）』

私は着ぐるみを隠す為に路地裏に入る。

『これはここで（パチンツ！）』

私が指を鳴らすと、夏川の着ぐるみは消え……。

『よし！いつまでもここにいと不味いから場所を変えよう（ピシユッ！）』

そして私はケーキ屋から離れる為に姿を消した。

因みに後日、ケーキ屋の近くに気持ち悪い女装姿をした夏川が出現した事によってケーキ屋の評判が悪くなったのは言うまでも無い。

『さて、今度は誰に会うかな〜？』

私はケーキ屋から500m以上離れた所で出現して、路上を歩いていた。

『色々な所見ていると必ず誰かに会うからね〜。こうなったら、見かけ次第に声を掛けて（トントン）……………ん？』

私は肩を突っつかれたので後ろを見ると……………。

「……………お久しぶり」

『おや、ムッツリー二君じゃないか』

ムツリーニ
土屋康太がいた。

休日物語 ？

私とムッツリーニは路地裏にいる。

『久しぶりに会って早々で悪いが、何の用かな？ 君もFFF団や姫路と島田と同様に私に恨みを持っていると記憶しているが……』

私は少し警戒しながらムッツリーニの様子を見ている。

「……待て、俺は貴方とやりあうつもりは無い」

『ほう？ それは何故かな？』

ムッツリーニは敵対意思は無いと言っているが、私は警戒を緩めない。隙あらば攻撃してくる奴なので私は簡単には信用出来なかった。

「……貴方に頼みたいことがある」

『なんだい？』

ムッツリーニが真剣な顔をして私に……。

「……（スツ）このカメラに宮永絵梨のコスプレ姿を撮ってもらいたい」

『……』

カメラを渡して絵梨の写真を撮ってくれと頼んできたので、私はいきなりの事に啞然とした。

『……………何で私に?』

「……………貴方は宮永絵梨と仲が良いと言う事は知っている」

『……………何処で知った?』

「……………それは企業秘密」

一気に警戒心が解けた私はムツツリー二に理由を聞いたが教えてくれなかった。

『……………(まあ、コイツの事だから来牙に盗聴器でも仕掛けて聞いていたんだろうな)』

「……………だから貴方にこのカメラで宮永絵梨の被写体を!!(ズイッ)

ムツツリー二が私にカメラを差し出すが……………。

『断る』

私はすぐに断った。

「!!……………何故?」

『んな事したら来牙と絵梨に殺されるじゃないか。何で私がそんなリスクを背負ってまで絵梨の写真を撮らなきゃならん。そんなのお断りだ』

その気になれば撮れるがと私は内心付け足す。

「……………貴方ならやってくれろと信じていたのに！！（ガクッ！）」

『……………（何だ？ あたかも私が悪いような罪悪感が湧いて来るんだが？）』

ムツリーニがortの体勢になって涙を流しながら悲嘆した表情に、何故か私は罪悪感が湧いていると……………。

「……………ぐっぐっ！！」

『……………おいおい』

今度は血の涙を流すムツリーニにはある提案を出す事にした。

『……………なあ、絵梨の被写体じゃないと駄目なのか？』

「……………この際、美しい被写体なら誰でもいい！」

少々やけくそ気味なムツリーニである。

『だったら、愛子ちゃん……………じゃなくて工藤愛子にでも頼んでみたらどうだ？ お前の為なら喜んでコスプレ撮影をしてくれるんじゃないか？』

君は愛子ちゃんの事が好きなんですよ？と付け加える。

「（ブンブン！）……………必要ない。それに俺は工藤の事など何とも思っていない」

ムツツリーニはすぐに立ち上がり私に向かって否定した。

『あらそう？ お互い得意科目同士だから気になっているかと思っただんだけ…』

「（ブンブンブン！）……そんな事実はない！（ガシッ！）」

もげてしまいそうなほど必死に首を横に振って否定しながらムツツリーニは私の胸倉を掴んでくる。

『あゝはいはい、分かったよ。分かったから手を離してくれ、ちょっと苦しいんだけど……』

「……ならいい」

私としてはもつとからかいたかったが、これ以上やるとムツツリーニの首が飛んでしまうのではないのかと思ったので止め、ムツツリーニは理解してくれたと思っって手を離れた。

『（ゴソゴソ）え〜と美しい被写体ね〜。誰がいるかな〜？）
パラパラ（）』

私は懐からあるリストを出して、パラパラと捲る。

「……それは？」

『君と同じく企業秘密だから教えません。所でいきなり話が変わるんだが、君は何故私に敵対しないんだ？ 他の奴等だったら問答無用で襲い掛かってくるのに』

私はリストを見ながらムッツリーニに問う。

「……あれだけの地獄を見て、あなたに刃向かうほど愚かではない」

『……君らしい理由だね』

ムッツリーニの想像力が半端ではないから、恐らく鮮明に残って苦しんだのだろう。

『じゃあ、今後は私に敵対するつもりは無いと思ってもいいんだね？』

「……あなたとは同盟関係を結びたい」

『そんな関係を結ばなくても、私は友好的な相手には喜んで仲良くするけどね。お！ いい人が見つかったよ。この子でいいかい？』

私がムッツリーニに指定の相手を見せると……。

「……交渉成立」

『別に交渉したつもりはないけどね……とりあえず、場所を変えるか（パチンツ！）』

私が指を鳴らすと、私とムッツリーニは消えた。

私とムツツリーニが現れた所は、ある撮影スタジオだった。

『(ピシユッ) さあ、到着だ』

「(ピシユッ) ……ここは？」

『撮影をしたいなら、そこは聞かないでくれ』

これも企業秘密の一つなのでムツツリーニに教える事は出来ない。

「……分かった。それで例のモデルは？」

『あそこにいるよ、お〜い！』

私が指をさすと、そこにはビキニ姿の女の子がいた。女の子は私の声に反応すると私達に近づいて来た。

「旅人さん！ お久しぶりです！！」

『久しぶりだね、愛奈ちゃん』

この子は私の知り合いの江藤愛奈であり、何故知り合いかは内緒だ。黒髪のベリーショートでボーイッシュな容姿で………早い話、工藤愛子に良く似ているのだ。ムツツリーニはそれに気付いているのかは知らないが。愛奈が愛子と違う所は………胸が大きい一言だ。因みにバストはEとFと言った所である。

『愛奈ちゃん、この少年が今回君を撮影するカメラマンだ』

「君がカメラマン？ 初めまして、ボクは江藤愛奈って言います）
ペコッ…プルンッ）」

「！！！！（プシャアアア！！！！）」

愛奈ちゃんの揺れた胸を見た所為でムツツリーニは鼻血を出した。

「えー？ ど…どうしたの！？ いきなり鼻血出しちゃって大丈夫
！？（プルンプルンッ！）」

「！！！！（プシャアアア！！！！）」

『……はあ…来て早々これかよ…』

愛奈ちゃんはムツツリーニを開放する為に頭を持ち上げるが、胸を
至近距離で見たのでまた鼻血が噴出した。

「ちょ…ちょっと旅人さん！！ この子死にそうだよ！？」

『……取り敢えずコイツを回復させるから、ちょっと待っててね』

私がムツツリーニを愛奈ちゃんから離れさせて、輸血パックを取り
出してムツツリーニに輸血させた。

そして10分後……。

『もう大丈夫か？』

「…………問題無い」

『ならさっさと始めてくれ、あそこで愛奈ちゃんがスタンバイしているから』

「…………了解」

『愛奈ちゃん！撮影始めるよ〜〜！！』

「は〜い！」

ムツツリーニはカメラを持って愛奈に近づき、撮影を始めると…………。

パシャパシャパシャパシャパシャパシャパシャパシャ！！！！

撮影を開始して早々にシャッター音が響いていた。しかしその30分後、愛奈にいろいろなポーズをさせて撮影しているムツツリーニであったが、愛奈が際どいポーズをした瞬間に紐で結んでいたビキニが解けてしまって、胸を晒す事になってしまった。当然、愛奈の胸をもろに見たムツツリーニは物凄い勢いで鼻血を噴出した。

「カメラマン君！？」

「（ピクッ…………ピクッ…………ピクッ…………）…………死して尚、一片の悔い無し」

『…………あゝあ、また後で掃除しておかないとね〜』

私は再度、ムッツリーニを回復させる為に輸血パックを取り出し始めた。

撮影が終わって、私とムッツリーニは路地裏に戻っていた。

『おい、大丈夫か？』

「……………（ボ〜〜）」

私が声を掛けてもムッツリーニは無言だった。

『……………もしかして、愛奈ちゃんに惚れた？』

「……………（ブンブンブン！……………）」

ようやく私の声に反応したムッツリーニはすぐに首を横に振る。

『そんなに否定してもね〜。あの子はお前の事が気に入ったみたいだけど』

「……………（／／／／／／／／／／）」

私の突っ込みにムツツリーニは顔が赤くなった。

実はここに戻る前の事……。

撮影が終わったので私はムツツリーニを連れて路地裏に戻るつと指を鳴らそうとしたのだが……。

「あ！旅人さん、ちょっと待って！！！」

『ん？』

愛奈ちゃんが引き止めてムツツリーニに近づいた。

「……………何？」

「カメラマン君にボクを撮影してくれたお礼をしてあげる（チュッ）」

「……………！！！」

愛奈ちゃんはムッツリーニの頬にキスをした。

「次に会う機会があったら、ボクと一緒に遊ぼうね？」

「……………」

「ボクのおっぱい見たんだから、嫌とは言わせないよ？」

「！！！！（プシャアアア！！！！）」

ムッツリーニは思い出したのかまた鼻血を噴出した。

「ふふふ、じゃあね！」

愛奈ちゃんはもう見慣れたのか、普通に対応していた。

……………と言う事があったのである。

『ムッツリーニ、目的は果たしたからここでお別れだね』

「……………」

ムッツリーニはまた愛奈ちゃんの事を思い出しているのか、全く私

の話聞いていない。

『……………とりあえず私は失礼するよ。じゃあね』

私は放心状態になっているムツツリーニを後にして、路地裏を出た。

『ムツツリーニの奴、愛奈ちゃんに恋でもしたかな？』

路地裏から出た私は、路上を歩いている。

『これでアイツも、FFF団から脱退するかも知らないな。明久に
対する邪魔者が一人消えて良かった良かった』

とは言ってもここはあくまでIFの世界なので、現実はそうは行かないが……………。

『さして、今度は誰に会うかな？』

休日物語 ？（後書き）

此方でのオリキャラ、江藤愛奈の登場でした〜〜！！！！！！！！！！

休日物語 ？

私がブラブラと街を歩いていると……。

『~~~~~ (ドンッ!) おや?』

急に誰かとぶつかってしまったので足を止めて相手に目を向ける。

「……………すみません……あ……」

『いえいえ、こっちも余所見をして……………って霧島じゃないか』

ぶつかった相手は偶然にも霧島翔子だった。

「……………旅人さん。また貴方に会えて良かった」

『何か私に用事かい?』

「……………貴方に頼みたいことがあるけど……………いい?」

どうやら霧島は私に何かをして貰いたい様だ。

『いいよ、丁度退屈していた所だったから。それで私に何をして欲しいんだい?』

「……………雄二を探して欲しい」

『雄二? 何でさ?』

いきなり変わった頼み事に私は首を傾げる。

「……雄二が私とデートしている最中、突然変な声を上げながら私から逃げていった」

『君の事だから、すぐに捕まえる事が出来たんじゃないの？』

「……今まで雄二が素直でいてくれたから油断してた」

霧島のはすっかり気が緩んでいたみたいで、すぐに対応出来なかったのだろう。

『それはそれは、君にしては珍しい……ん？ ちよっと待て霧島、雄二が突然変な声を上げたって言ったよね？』

「……そうだけど？」

『何て言ってたか覚えてるかな？』

「……確か……大きな声で“俺は今まで何をしていたんだ”とか“旅人の野郎、絶対ぶっ殺す”って言った」

『OK、理由が分かったよ』

私は霧島が雄二が言っていた台詞を聞いてすぐに理解した。

「……分かったの？」

『ああ、どうやら雄二は元の雄二に戻ったみたいだな』

「…………どう言う事？」

『つまりアイツの素直な部分を引き出す為の暗示の効果が無くなっ
たんだよ』

「…………旅人さん、貴方が雄二に掛けた暗示はそう簡単には解けない
って言っていた筈だけど？」

霧島は少し怒り気味になりながら私に問い詰めるように言った。

『そんな恐い顔しないでよ。確かにアレはあれは永続的な暗示だけ
ど、ちよっとした欠点があるんだよ』

「…………欠点？」

『そう、あの暗示はあるキーワードを言わない限り永遠に続く暗示
でね』

「…………そんな欠点があるんなら、どうして私に説明しなかったの？」

『言わない方がいいと思ってね。下手に知るとキーワードに気を配
りすぎるんじゃないかと思ったんだよ。君はヘマをやらないと思う
けど、敢えて言わなかったんだ』

「…………確かに旅人さんの言うとおり、知ってしまうと神経質になる
かもしれない」

『納得してくれて何よりだよ』

私の説明に霧島は納得してくれたので、私は安心した。

「……………それで、キーワードは何だったの？」

『絶対言わないと思うキーワードだったんだけど……………“ワシはこの世界で一番美しい！！”だよ』

「……………誰もそんな台詞言つとは思えない」

『そんな事言つ奴は自意識過剰なバカだよ。でもそれを言った奴がいるんだよねえ。一体何処のバカが言ったのやら』

「……………そう言えば」

『何？ 心当たりあるの？』

霧島がふと思い出したので、私は即座に聞くと……………。

「……………私が雄二とデートしていた時……………変な格好をしたお爺さん達を見掛けた」

『……………』

物凄く心当たりがある事を言った霧島に私は急に無言となる。

『……………ねえ、その変な格好をした爺の一人に、くのいちの格好をした爺がいなかった？』

「……………確かにいた。その人がノロノロと走りながら大きな声で叫んでた。もしかしたら叫んでいる最中にキーワードを言っていたかもしれない」

『…………あのクソ爺共!!!』

私は犯人がグレートレンジャーだと知ると怒りが込み上げて来た。

「…………旅人さん、その人達を知っているの？」

『知りたくないが知っている。私の目障りな連中ベスト3に入る老害共だ!!! アイツ等後で絶対ブチノメス!!!』

「………………………（旅人さんにここまで言わせるお爺さん達って一体…………？）」

霧島は私が物騒な発言をしている事に少し引きながらも、ここまで怒らせる爺共を少し知りたいと思っていた。

『まあ、爺たちは後で抹殺するから今はどうでもいい。とにかく今は雄二を探さないとな』

後で爺共をゆつくり料理してやると思いながらも、私は即座に雄二を捕まえる事に頭の中を切り替える。

「…………でも、この街中で雄二を探すのには時間が掛かる」

『問題無い。こっちから雄二を誘き出す』

「…………どうやって？」

『フフフ…………いい方法があるから付いて来い（スタスタ）』

「……………（スタスタ）」

私がある所に行くと、霧島も私に付いて行った。

そして私は目的地に着いてある事をする……………。

『よ〜〜〜〜〜し！！ スタンバイ完了！！』

「……………これは」

『フッフッフッフ……………このデパートは結婚式会場の宣伝をしていたからな』

デパートの壁にデカデカと飾ったポスターを見た。そこには、タキシードを着た雄二とウェディングドレスを着ている霧島が写っていた。

「……………素晴らしい」

『さ〜て、これで奴がここに来るのを待つだけだ（ニヤニヤ）』

霧島は顔が赤くなりながら感動しており、私は笑みを浮かべながら雄二を待っていた。あと何分で来るか非常に楽しみだ。

「……………旅人さん」

『ん？ なんだい？』

「……あのポスター欲しい。後で譲って」

『そう言つと思つてたからここに「てめえ！！ 何て事してやがる！？」……おお、もう来たか』

私は霧島にポスターを渡そうとしたが、雄二が出てきたので手を止める。

「……雄二、来るのが早い」

『随分早いご到着ですなあ雄二。もう少し時間が掛かると思つていたけどねえ』

「あんな恥ずかしい物を貼つといて来ない訳が無いだろうが！？」

霧島と私の突っ込みに雄二は弾き飛ばすかのように大きい声で怒鳴り散らしてくる。

『いいじゃない。いい宣伝になると思つよ？』

「てめえは俺の人生を何だと思つてやがる！？」

『そりゃまあ……ねえ……』

雄二の分かりきつた人生に私はすぐに言えず眼を逸らした。

「てめえ！！ 一度ならず二度までも人を嵌めやがった挙句、よく

もあんなのを貼りやがったな!! 絶対ぶつ殺す!!!」

雄二はすぐに私に襲い掛かるほどの勢いだ。

『フッフ……私に勝てると思うのかな?』

「その余裕面をいまずぐ消してやる!! 覚悟しやがれ!!!」(ダ
ツ!!!)」

雄二はすぐに私の懐に入り攻撃を仕掛け様としたが……。

「(ガシツ!)……雄二、旅人さんに攻撃はさせない」

「しよ……翔子!? 離せ!!!」

霧島が背後から雄二に抱きついたので攻撃が出来なくなった。

「おい離れる翔子!!! お前も巻き添えをくらうぞ!?!」

「……嫌」

『ハッハッハッハ!!! 流石の雄二も霧島の前では形無しだねえ』

「てめえは黙ってる!!!」

『けどねえ雄二、君が攻撃を止めちゃったからゲームオーバーだよ
(スツ)』

「っは!!! しまった!!!」(トンツ)」

私は右手の人差し指で雄二の額に当てた。

『雄二に命じる。私の指示に従え』

「……………何をすればいい」

『今から霧島と一緒に家に帰って、霧島をお前好みの女に開発しろ』

「……………え？」

「分かった、行くぞ翔子」

私の指示に雄二は従って霧島を連れて行こうと腕を引っ張ろうとする。

「……………でも、まだ（旅人さんからあのポスターを）」

「何だ翔子、俺の家に行くのが嫌か？」

「……………嫌じゃない、夫の言う事に妻は従う」

「なら行くぞ」

「……………うん」

そして雄二は霧島を連れて家へと向かった。

『よし、これで雄二はしばらく私の操り人形だから。雄二の件は—
先ず終了だ（パチンツ！）』

私は指を鳴らすと、飾っていたポスターが消えた。

『さて、次は爺どもを片付けに行くか』

次の目的の為に、私は変態爺共を探しに行く私であった。

休日物語 ？

『さてと、この屋上なら一通り見えるな』

雄二が霧島をどの様に開発するのかを見てみたいと思う私であったが、それは後回しにてグレートレンジャー達の抹殺を優先した。

現在、私は20階立てビルの屋上におり、双眼鏡を使って辺り一体を見回していた。

『え〜〜爺達はどこかな〜？……………くそっ！ 500m以内にはいないみたいだな。仕方ない、探索範囲を広げるか（スッ）』

今度は予め用意した望遠鏡を使って半径1km〜3km辺りを見回した。

『やっぱり遠くから見るとは望遠鏡だな。え〜〜何処にいるかな〜？ 見つけたらすぐに処刑してやるよ〜。私が釘バツドで滅多打ちにしてやるか……………また“地獄の幻想”を頭に叩き込むか……………それとも此処で紐無しバンジーをやらせるか……………どれも迷っちゃうな〜〜〜』

私は凄く物騒な事を言いながら爺達を探している。それと私の考えた選択肢は爺達がどれを選んででも死ぬ事に変わりは無かった。

『まあそれは後で考えるところとして、先ずは爺共を見つけるのが先決だな……………ん？ あれは……………』

公園で小さな子供達が遊んでいる所を見掛けたので、そこに目を向

けたら……。

『……………フッフッフッフッフ……………見いつけたあ……………待ってるよ爺共。すぐにブツ飛ばしてやるからね……………(ピシユッ!)』
爺共を見つけたので私はすぐに姿を消した。

場所は公園に変わる。

『(ピシユッ!)さて到着つと、爺達は……………』

私が爺達を見ると言葉を失い、その先には……

「さあ皆の者よ、世界で一番美しいのは誰じゃ!？」

「……………グレートレンジャー!……………」

「世界で一番カッコいいのは誰だ!？」

「……………グレートレンジャー!……………」

「世界で一番ツヨイノハ誰だ!？」

「……………グレートレンジャー!……………」

コイツ等の相手をするのは疲れるので私は一纏めに言う。

「何じゃと!? 何故貴様がそんな事をする!? ワシらが何かしたとでも言うのか!？」

『……………してはいるけど、私としては子供の教育に大変悪い事をしているお前達に問題があるのでは?』

「失礼な!! ワシらはただ舎弟達に真実を教えたまでじゃ!!」

『……………もう舎弟にしているのかよ』

源三の発言に私は呆れるばかりであった。

「おい源三! いつまでもこんなザコに構っていないでさっさと片付けるぜ!」

「コイツニミータチノ実カヲ見セテヤルゼ!!」

「ここで積年の恨みを晴らすでござる!!」

「そうじゃったな!! 今こそワシらに対して数々の侮辱をした旅人に成敗じゃ!!」

『ほう~~~~? 私とやる気か?(ポキポキ)』

爺共は私に恨みを晴らすと言ったので私は臨戦態勢に入った。

「甘いわ!! 貴様がワシらの相手をするなど100億万年早い!

「どうだ!! 思い知ったか旅人!？」

「イヤザマダナ!!」

「見ていて爽快でござる!」

『……………(コイツ等本当に最低な連中だな)』

爺共は私が子供達に手が出せないのをいい事に優越感に浸っている。あの様子を見る限りでは自分達のやっている事が悪の親玉だという事に気付いていないのだろう。

『(先ずは子供達をどうにかするか……君達、私を倒す前にちよつといいかな?)』

「……………なあに……?」「……………」

子供達は攻撃を止めて私の話を聞こうとしている。

『君達に面白いものを見せてあげるよ、ほれ(パチンツ!)』

私が右手で指を鳴らして左手からクツキーがパツ!と出すと……………。

「……………わあ……! すご……い!!!!!!(パチパチパチ!!!!)」

「……………」

子供達は私に拍手をした。

「ねえねえ! どうやったの!？」

「ひょっとしてまほーつかいなのか？」

「ぼく、そのクッキーたべてみたい!!」

「ぼくも〜!!」

「あたしも〜!!」

『はいはい、落ち着いて。そんな一斉に言われても答えられないから』

私は子供達の頭を撫でながら言った。

『私がどうやってこのクッキーを出したのかを知りたい?』

「~~~~しりたい~~~~!!」「~~~~」

『じゃあ知りたかったら、あそこの砂場でいい子にして待っていてくれないかな?』

「~~~~は~~~~い!!!!」(タッタッタッタ)「~~~~」

子供達は一斉に砂場に向かった。

『.....よし。.....さて、本題に入ろうか』

私は子供達が砂場にいるのを確認したら、子供たちに見せていた優しい笑みから狂気に満ちた笑みを爺共に向ける。

「き...汚いぞお主!! 我が舎弟達を騙しおって!!」

「人間の風上にも置けねえ野郎だな!!」

「外道二モ程ガアル!!」

「卑劣でござる!」

『……………子供達をけしかけたお前等に言われる筋合いはないよ』
「というか絶対こいつ等には言われたくないと思う。」

『お前等と此処で何時までも押し問答するつもりは無いから、すぐにブツ飛ばしてやるよ。覚悟しな(ギンツ!)』

「……………!!!(ダツ!!)」「」「」

私の殺気に押し当てられた爺共は即座に逃げるが……………。

『……………逃げられると思ったたら大間違いだよ(パチンツ!)』

「……………あっ(ピシユツ!)」「」「」

私が指を鳴らすと、爺共は姿を消した。

『では私も……………とその前に』

私は姿を消す前に砂場にいる子供達に向かって……………。

『君達……!! 私にはちよっとの間いなくなっちゃうけど、すぐに戻るから……! それまで良い子にして待っててね……!!』

「「「「は〜〜〜い！！」「「「「

待つように言つと子供達は分かってくれたので……。

『よしよし、それでは私も爺共がいるお仕置部屋へ（ピシユッ！）』
私は姿を消したのであった。

「あ〜〜！ おにいちゃんもきえた〜〜！！」

「やっぱりまほーつかいだ〜〜！」

「ぼく、ぜったいにまほーのつかいかたおしえてもらつー！」

「あたしも〜〜！！」

「ぼくも〜〜！！」

子供達は完全に私を魔法使いだと思っていた。

休日物語 ？（後書き）

次回は惨いお仕置きになりますのでご注意ください。

休日物語 ？（前書き）

今回の話は滅茶苦茶気持ち悪い話ですのでご注意ください。

休日物語 ？

『（ピシユツ！）さして…爺達は、と』

私がお仕置き部屋に現れて爺達を見ると……。

「旅人よ！！貴様はワシ等をここに連れて何をするつもりじゃ！？
返答次第では許さんぞ！！！」

「ぶっ倒してやるぜ！！！」

「ユーアキルダゼ！」

「今すぐ成敗してやるでござる！！！」

『……………そんな姿で、どうやって私を倒すのかを聞いてみたいよ
鎖で糞虫状態に縛られて倒れながらもジタバタと暴れているグレー
トレンジャー達を見下ろして言った。コイツ等をここに連れてきた
瞬間には鎖で縛られる様に設定しておいたのだ。』

「今すぐ縄抜けの術を使ってお主を倒してやるわい！！！」

『それは縄じゃなくて鎖』

「正義の力で引き千切ってやるぜ！！！」

『特別頑丈な鎖だから簡単には千切れないよ』

「ミーンスピードタツクルデキルダゼ!!!」

『ご自慢のスピードも立ち上がらなければ発揮できないだろ?』

「鎖抜けの術で抜け出すでござる!!!」

『例え抜け出してもすぐにまた縛ってやるから、二重三重にね』

天の鎖エルキドゥからは絶対に逃れられんからな……まあこいつ等に言っても無駄だから敢えて言わないけど。

『さてと、これ以上はお前達とお喋りする気は無いから黙って貰うよ（パチンツ!）』

「……!……!」

私が指を鳴らすと、爺共の動きが止まったと同時に声も出なくな

『さてと……どんなお仕置きをしてやるうかね?』

私は停止している爺共を見下ろしながら考えた。

『（情報によると、一度やられただけでは懲りないって言うていたから簡単なお仕置き（釘バット滅多打ち・スタンガン地獄）をしても無駄だろうな。“地獄の幻想”をやってもたったの数日で回復するし、どうすれば暫く復活出来ないようにすればいいかな?）』

こんな性質の悪い爺共には徹底的に叩きのめさねばいけないと私は思う。

『(うゝゝん……………お！ いい事を思いついた！！！)
お前達のお仕置きはこれだ(パチンツ！)』

私はお仕置き内容を思いついたので指を鳴らした。

「……お呼びですか……？」

そして私の後ろから気持ち悪い化粧をしてヒモパンしか身に着けていない4人のオカマ達が現れた。(オカマ達は恋姫○双の貂蝉だと思ってくれればいいです)

「……！！！！！！！！！！」

爺共はオカマ達の姿を見て吐きそうな顔になっていた。

「旅人様、本日はどのような様なご用件ですか？」

『お前達にはあそこにいる爺共の相手をしてもらいたい』

4人のオカマ達の一人であるローズが代表して私に聞いてきたので私はすぐに用件を言った。

「あらあ？ 素敵なお爺ちゃん達ですわねえ……。好きにしてよるしいのですか？」

『それは構わないが、それは私の指示に従った後にしてくれないか？』

「分かりましたわ。それでワタシ達は何を？」

『先ずは爺共にお前達の踊りを見せてやれ、至近距離でな。その方が興奮するだろ?』

ローズの質問に私が指示をすると私は指示を出し……。

「了解しました。みんな行くわよ〜!」

「……は〜い!」「」「」

ローズ達は爺共の近くによって踊りを始めた。

「……さあ〜存分にご堪能下さ〜い(フリフリフリ!)」「」「」

主に腰を振った踊りであるが……。

「……!!!!!!(ギャアアアアア!!!!)」「」「」

爺共はオカマ達のモツコリとした股間を至近距離で見た為に物凄い表情になっていた。

踊りを始めて10分後……。

「ああ……お爺ちゃん達に見られて……ワタシのアソコが……興奮してきた……」

「……ワタシも〜」「」「」

オカマ達は見られて興奮しているのか、股間がかなり大きくなっている。

「……………（もうやめて……………死にそう）」

『皆さん、爺共はヒモパンの中身を見たいそうだよ〜！』

私は爺共4人の（嘘の）心の声を代弁して言った。

「……………！……………！（そんな事は言つてねえ〜……………！……………）」

「あらやだ！！ エッチなお爺ちゃん達なんだからあ〜……………もうしようがないわね……………じゃあ見せてあげるわ（スルツ）」

「……………！……………！（嫌ジャアアアア〜……………！……………）」

ローズ達はヒモパンを一斉に脱ぎ、露わとなった一物が大きく勃起していた。

「さあ見てえ〜！ 私の中身を〜」

「……………あは〜ん……………」

「……………！……………！（ギョエエエエエエ……………！……………）」

『お〜爺共は凄い顔になっているなあ〜』

爺共はオカマの一物を見て心の声で大きな悲鳴を上げ、私は爺共の顔を見て妙に感心する。

爺共の心の声はもう何を言っているのか全然分からなかった。

「仕方ないわねえ〜。存分に味あわせてあげるわ!! (グイグイ!)」

「『ああ〜ん!!! (グイグイ!)』」

オカマ達は爺共の頭を掴んで自分達の一物を擦りつけ始めた。

『……ローズ達も何だかんだ言って結構感じているように見えるけど……あら〜爺共も死ぬ寸前になって来ているな〜』

悦な表情になっているオカマ達に私は爺共を見て死期が近づいているように見えた。

オカマ達が爺共に一物を擦りつけて5分後……。

「ああ……ワタシも……そろそろ出ちやいそう……」

「『『ワタシも〜』』」

『!……お……おい……まさか……お前達待て!! それ以上は……』
「御免なさい旅人様あ〜。ワタシ達もう我慢できなくなっちゃった〜」

「『『もう出そうなの〜!』』」

「『『!……!』』」

爺共を適当な所に置いてきて私は再び公園に戻ってきた。

『(ピシユツ)さてと、爺共のお仕置きが済んだから子供達に……』

「あ~~~~!!戻ってきた~~~~!!」

「まほーつかいさ~~~~ん!!……!!」

「まほーおしえて~~~~!!」

「ぼくがさき~~~~!!」

「あたしがさきだよ~~~~!!……!!」

子供達が私に群がってきた。

『ただいま戻りました。君達、いい子にして待っていたかな?』

「~~~~うん!!」「~~~~」

『それはそれは何よりです(ナデナデ)』

私は笑みを浮かべながら子供達の頭を撫でる。

「ねえまほーつかいさん」

『なんだい?』

「グレートレンジャーはどこにいったの?」

『.....』

一人の子供が爺共の所在を聞いてきたので、私は答えられず無言になった。

「ねえ〜?どこにいったの〜?」

「.....おしえて〜!」

『.....(パチンツ!)』

私は指を鳴らして、左手からクッキー缶を出現させた。

「.....わあ〜!おかしだ〜!」

『食べるかい?』

「.....うん!」

『じゃあ、どうやってこれを出したか食べながら教えてあげるから、あそこの椅子に座ろっかね?』

「.....はい.....」

子供達はグレートレンジャーの事を忘れて、私に言われたとおりベンチへと向かった。

『……………あの子達には口が裂けても絶対言えないな……………』

「……………まほーつかいさ……………ん！はやく……………！」「……………」

『はいは……………い……………！』

私は子供達が座っているベンチに向かい、クッキーを食べながらお話をしましたとぞ。

休日物語 ？（後書き）

旅人『うぶっ……………今回は流石に気持ち悪かったな』

ローズ「旅人様〜〜〜！！！！ ワタシの登場をありがとうございます
〜〜す！」

旅人『舞台に出た感想は？』

ローズ「もう最高でしたわ お爺ちゃん達がワタシ達を奪い合う
所が嬉しくてワタシ……………ビンビンに来ちゃいました〜〜〜！！！！」

旅人『……………あっそう』

ローズ「旅人様、今度はワタシと翔ちゃんのカップリングをお願い
しますわ」

旅人『翔が聞いたら絶対に断固拒否するだろうけどな……………』

江藤愛奈 文月学園に訪れる

此処は文月学園の校内、そこには……。

「ねえ旅人さん、文月学園に来ちゃったけどホントに大丈夫なの？
おまけに、ここの制服を借りちゃっているけど」

『そこは問題無いから安心して』

私と愛奈がいて学校内を歩いていた。

私が学園に入ってもすぐに姿を消せるからいいが、愛奈は別だ。愛奈には文月学園の制服を着てもらって此処の生徒だと周りに錯覚させている。下手に別の学校の制服や私服で来られると、いろいろと面倒な事になるから私がムツツリ商会で調達していただいた……その時に調達した制服のサイズがピッタリだった事に驚いたが。

そして今回はちょっとしたコネを使って堂々と学園に入っている。

「けどさあ、此処の先生がすぐにボク達を追い出しそうな気がするけど……」

『だからそうなる前に先手を打ったんだよ』

「……………先手ねえ」

『そ…そんな顔しないでよ愛奈ちゃん、折角自由に入る事が出来るんだから』

愛奈は私をジト目で見てきたので、私は少し焦った顔をする。

「学園長さんに多額の寄付金で買収したって聞いた時には、凄く呆れたんだけど……」

『……………いいじゃない別に、自由に入れるんだから』

ではここで時間を少し遡ります。

私は愛奈を連れてくる前日、学園長に会いに行っていた。

『と言う訳で学園長、今後は私が学園に入っても問題無いようにして貰いたいんですが』

「やれやれ。散々学園に忍び込んだ挙句、今度はお願いとは……………呆れて物が言えないさね」

流石に何度も学園に忍び込んで好き放題するのも限界があるので、自由に行き来が出来る様に頼んだ。

「それにアタシがそんな事を許すと思ってるのかい？」

『まあ普通は許さないでしょうね。ですから（パチンツ！）』

無論、学園長もいきなり私の頼みを聞いてくれる筈が無いのは承知していたので私は指を鳴らし……………。

「……これは!？」

『これで手を打ってくれませんかねえ?』

私は取引と称して学園長の目の前で1億円が入っているジュラルミンケースを出した。

『どうですか学園長? 悪くない取引だと思いますが?』

「いいだろう、学園の出入り自由を許可するさね」

そしたら学園長はコロツと掌を変えて私が自由に行き来が出来る様に許可してくれた……学園長の両目が\$になっていたが。

「アンタとはいい関係になりそうだねえ」

『ああそれと、私の友人も連れてくる事があります……その時もちやんと用意しますのでどうぞ御贖戻に』

「クツクツクツ……本当にいい関係になりそうだ……」

今の学園長には金の亡者にしか見えなかった。

とまあ、昨日にそんな取引があったと言うわけで私の出入り自由が

認められていると言う事である。」

「で？ 一体いくら出して買収したんですか？」

『買収とは人聞きが悪いね。私はちゃんと取引を……お？』

私と愛奈が昨日の事を話していると目的地の場所に着いた。

『愛奈ちゃん、ここがAクラスね』

「ん？ へえ、話には聞いていたけど、ホントに凄い設備ですねえ。ボクの通っている学校とは大違いです」

愛奈はAクラスの教室を見ると感心しながらも自分の学校と比較する。

「普通の学校だったらDクラスみたいな教室だからな」

「でも旅人さんが言っていたFクラスはかなり酷いんですよね？」

『そう。Fクラスはその中で一番の最低設備なクラスだからね。それと同時に生徒の成績も低い』

私としては成績では無く人格としての問題があると思うが。

「成績が低いクラスだからって、ボクは楽しくやればいいと思いませんけど」

『……………楽しくねえ』

「旅人さん、その間は何ですか？」

「いや、何でも無い（……愛奈ちゃんがFクラスの連中を見たら絶対呆れると思う）」

何しろFクラスにはFFF団のバカ共がいるから………奴等の活動内容を聞いたら愛奈は絶対に呆れると思う。

「所で旅人さん、何でボクをこの学園に連れてきたの？ カメラマン君に会うなら学校で会う必要は無いんじゃない？」

『今回はムツツリーニをサプライズさせる為に君を呼んだのだよ』

「……………ボクが来ただけでサプライズになるとは思えないけど」

『（ふっ……………どうかな？……………）』

愛奈は大した事は無いと言っているが、私としては十分サプライズになる。

既にご存知の通り、愛奈は髪の色と胸以外は工藤愛子にそっくりであるのだ。もしAクラスの誰かが愛奈を見かけたら絶対に愛子と間違われると私は断言できる。

そんな事を思っている矢先に……………。

「愛子じゃない、ここで何をしているの？」

「え？」

『おや？』

木下優子が愛奈に声を掛けていた。

「あ…あの〜……」

「何で愛子が旅人さんと一緒にいるの？」

「だ…だから〜」

『木下さん、ちょっといいかな？』

優子に話しかけられている愛奈は返答に困っていたので、私は優子に声を掛けた。

「旅人さん、悪いけどアタシはこれから愛子と一緒にクレープを食べに行く約束をしているの」

『いや、この子はね……』

「さ、行くわよ愛子。さっきから思ってたけど、いつの間に髪を染め……え？ ……な…何で……」

『ん？』

「え？ 今度は何？」

優子は愛奈の胸を見た瞬間、信じられない顔になっていた。

「ちょ…ちょっと愛子……何であなたがそんなに……」

『「?」「?」』

「何で胸がこんなに大きくなってるのよ!?!」

「ええ!?!」

『何だ、そっちか』

優子が何て顔をしているのかと思ったが、愛子と勘違いしている愛奈の胸を見て驚いているのだと知ると私は呆れた顔をした。

「何で? どうして? どういうことなのよ!?! (ガシッ!)」

「(ガクンガクン!!) あわわわわ!?!」

『ちょ…ちょっと木下さん!?! 落ち着いて!?!!』

優子は愛奈の胸倉を掴んでガクンガクンと揺さぶりながら問い詰めるが、私はすぐに優子を愛奈から引き離す。

「離して旅人さん!?! アタシは愛子に聞きたい事があるのよ!?!!」

『あの子は工藤さんじゃないよ!?!』

「嘘よ!?! 髪の色は違っても愛子に間違いないでしょ!?!」

「あ…あの…旅人さんの言っている事はホントですよ」

「愛子も悪乗りしていないでさっさとその胸の説明をしなさい!?!」

聞く耳を持たない優子に愛奈は訂正するが、聞く耳を持たない優子であった。

『（……ダメだ、優子は錯乱状態に陥ってるよ。）』

これ以上、優子といるとFクラスにいるムツツリーニが帰ってしまうのでどうしようかと悩んでいたが……。

「優子、どうしたの？ さっきから怒鳴り声が聞こえているんだけど……」

「愛子！ 邪魔しないで！！ アタシはそこにいる愛子に……あれ？」

「えー？ ぼ……ボクがここにいる！？」

工藤が来てくれたので優子が漸く落ち着いたようだが、今度は工藤が慌て始めた。

『この子は私の友人の江藤愛奈だよ』

「初めまして、江藤愛奈です」

事態が何とか落ち着いたので、私は仕方なくAクラスで愛奈を紹介する事にした。

「信じられない。愛子にそっくり」

「……………双子かと思った」

「旅人さん、何で俺様に紹介してくれなかったんだよ！」

優子と霧島と翔は愛子と愛奈の見比べて瓜二つの様に見ている……………
翔の発言は当然無視だ。他の生徒も3人と同様に愛奈を見てびっくりした顔をしていた。

そして当の本人の工藤は……………。

「………………………………………」

何故か面白くない顔をしていた。愛奈の胸を見ながら。

『はあ……………まさかAクラスでサプライズする事になるとはなあ……………
誤算だよ』

「旅人さん、そんな残念そうな顔をしなくても」

『君には分からないよ愛奈ちゃん。私としてはFクラスでサプライズしたかったのに……………はあっ』

「そんな事をボクに言われても困るんだけど……………」

『はあ~~~~~』

私はガツクリとして溜息を吐きながら顔を俯かせた。

と、そんな私に愛奈が……。

「まあまあ、そんな落ち込まずに。ボクが慰めてあげるから……えい
」!

『（ポフッ!）んっ?』

私の頭を抱きしめるかのように持って、自分の胸へと引き寄せた。

「ほくら、落ち着いた?」

『ふがふが! ふがふが!（離しなさい!! 苦しいだろ!!）』

「そんな事言わずに（ギュウッ!）、ボクの胸……柔らかいでしょ
」?

『ふが~~~~!!（離せ~~~~!!）』

私は愛奈の胸に顔を挟まれて苦しかったので離れようとしたが、愛
奈が離さず更に力を込めた。

「何かしら……この物凄い敗北感は……」

「……今度、雄二にやってみる」

「おいコラ旅人さん!! アンタだけいい思いしてんじゃねえよ!

「！　つーか俺様も混ぜろ！！」

優子は愛奈と自分の胸を見比べて敗者の顔になっており、霧島は雄二に愛奈と同じ事をやってみようと画策し、翔は私が愛奈の胸に挟まれているのを見て羨ましがっていた。

「……………何さ…あんなの大きな脂肪の塊じゃん（ボソッ）」

そして工藤は大変悔しそうにボソッと呟いた。

『ぶが~~~~~！！！！（いい加減離せ~~~~~！！！！）』

私が抵抗しているのにも拘らず、愛奈はずっと胸を押し付けているのであった。

おまけ

私がAクラスで愛奈を紹介している時……………。

「……………！！（何故江藤がAクラスに？）」

「どづしたのムツッリーニ？」

「……………何でも無い」

「そづ？ならいいけど」

ムツッリーニが下駄箱で偶々Aクラスを盗聴していると、江藤愛奈

がいると分かったので目を見開いた。明久はムツリー二の様子がおかしかったので声を掛けてみたが、ムツリー二がすぐに無表情に戻ったので気のせいかと自己完結したが……。

「……………」

「ムツリー二、帰らないのか？」

「……すまない、忘れ物をした。すぐに戻る（スタスタ）」

ムツリー二はすぐにAクラスへと向かった。

「珍しいね。用心深いムツリー二が忘れ物をするなんて」

「何を忘れたのじやろうかのう？」

「アイツの事だから、写真の回収でも忘れていたんじゃないか？」

「そういえば土屋君、ここの所いつもより挙動不審な感じがしますね」

「瑞希の言つとおり、確かにおかしいわね」

明久と秀吉は何を忘れたのか気になったが、雄二が写真ではないかと思っており、姫路と島田は土屋の行動にいつもよりおかしいと勘付き始めた。

江藤愛奈 文月学園に訪れる ?

漸く開放された私は愛奈にちよつと説教をしていた。

『全く、窒息死するかと思つたよ。離せと言つたのに聞こえなかつたの?』

「アハハハ……ゴメンなさい（ペコツ……プルン）」

「旅人さんよお、俺様としては変わつて欲しかったんだが」

愛奈は反省して頭を下げた際に胸が揺れた。翔の発言に私は無視している。

「（ギリツ！）……何で頭下げただけであんなに胸が揺れるのよ」

「優子、あんなのはただの脂肪の塊なんだから（ヒクヒク）」

「……優子と愛子が少し怖い」

愛奈の胸が揺れて歯軋りしながら睨む優子と、目元をヒクヒクさせながら優子を落ち着かせる愛子、そして2人の不機嫌オーラの放出に怯える霧島である。

「なあ旅人さん、愛奈ちゃんとは何処で知り合つたんだ?」

『お前には教えん』

「じゃあ愛奈ちゃん、旅人さんとはどういふ関係なんだ? もしか

して旅人さんのコレか？」

翔は私に聞きだそうとしても無駄だと悟り、愛奈に聞きながら小指を立てる。

「旅人さんとはただの友達だよ。えっと……君は何て名前だっけ？」

「俺様は遊佐翔だ、よろしくな。親しみを込めて翔って呼んでくれ」

「よろしくね。でもボクはまだ君の事がよく分からないから遊佐君って呼ばせて貰うね」

「分からないなら今から俺様と一緒にデートでもしようか？ じっくりと教えてやるぜ」

愛奈にデートの誘いをする翔であるが……。

「遊佐君とデートするんだったら、もう少し知ってからにするよ」

「そんなつれない事言わないでくれよ。俺様泣いちまうぜ？」

アッサリと断られてしまい、翔は悲しそうな顔をした。

『諦める翔、愛奈ちゃんは断ると言った以上、撤回する気はないぞ』

「そう言う事。ごめんね遊佐君」

「何だよ旅人さん、まるで愛奈ちゃんの事をよく知っているような言い方じゃねえか」

面白く無さそうに言うてくる翔に私は当然のように言い返そうとする。

『そりゃ翔よりは知っているからな』

「ボクも旅人さんの事はよく知っているよ（ギユウ）」

愛奈は私の腕を掴んで、絡めるように抱きしめて翔に見せ付けた。

「チツ！ 見せ付けてくれるじゃねえか。つまんね〜の」

『すぐに断られたからって腐るなよ。時間を使って愛奈ちゃんの事を知ればいいんだから。“果報は寝て待て”って言う言葉があるだろ？』

「遊佐君、今度旅人さんと一緒に遊びに行く予定だけど良かったから一緒に遊ぶ？」

「勿論付き合わせて貰うぜ、旅人さんもいいだろ？」

『ああ、構わないよ（現金な奴だ……）』

翔の早代わりに私は少し呆れたのであった。

「それはそうと旅人さん、一体何の用で学園に来たのかしら？（秀吉と吉井君のデートの報告？）」

『ああ、ムツツリー二に会いに行く予定だったんだよ（残念ながら違）』

「あらすつ(早くしてよね！ 楽しみにしているんだから！-)」
優子と私は特定のアイコンタクトをしながら普通の会話をしている事に周りは気付いていない。そんな私と優子の会話に工藤が食い付く。

「ムッツリーニ君に？ どうして旅人さんが？」

『それはね……………ムッツリーニ！ 其処にいるのは分かっている！
出て来い！-！』

「「え？」」

「……………(ジー)」

「ムッツリーニだと？」

「カメラマン君？」

私が近くのソファアに向かって大声をあげ、愛子と優子は突然の事に戸惑い、霧島は私と同様にソファアを見ており、翔と愛奈は本当にいるのかと疑問を抱いた。

そしてすぐに……………。

「……………よく分かったな」

ムッツリーニがソファアの陰から現れた。

「「ええ！？」」

「カメラマン君!? 何時からそこにいたの!？」

「……やっぱりいた」

「代表……アンタは気付いてたのかよ」

優子と愛子と愛奈はムッツリーニの登場に驚き、霧島は気配が感じ
ていたみたいで、翔は霧島の感知に驚いていた。

『さてと、本人が来たから本題に入るとするか』

「……旅人さん、何故俺がいる事に気付いた? 気配は完全に消し
ていた筈なのに……」

私が本題に入ろうとする前にムッツリーニが質問をしてくる。

『気配は完全に消せても殺気が出ていたら意味無いぞ?』

「……………」

「え? 旅人さん、それどういう事?」

ムッツリーニは私の言っている事が分かるみたいで、愛奈は分から
ず私に質問する。

『さつき君が私に引っ付いた時、ソファアからムッツリーニの殺気
を感じたんだよ』

「それって……」

『つまりムツツリーニは私に嫉妬していたって事だよ』

「……………（ブンブン）そんな事実はない」

私の説明にムツツリーニは否定したが……………。

「そうだったんですか……………ゴメンねカメラマン君、不快な思いをさせちゃって」

「……………嫉妬などしていない」

『嫉妬していなかったら、私に殺気をぶつけるとは思えないが？』

「じゃあカメラマン君にはお詫びとして……………えい！（ギョウツ！）」

「（ポフツ！）！！！！！！」

「！！！！！！」

愛奈は私にやった時の様にムツツリーニの顔を自身の胸へと引き寄せ、工藤はそれを見てムツとした顔になっている。

「どうカメラマン君？ 気持ちいい？」

「……………（ムニユムニユ）気持ちよくななんか無い！！」

「無理しちゃって……………ホントは気持ちいいんでしょう？」

愛奈の大きな胸に顔を挟まれているムツツリーニは大変気持ち良さ

そんな顔をしているが、そろそろ鼻血が噴出しそうだ。

それを見ている他の面々は……。

「今度はムツツリーニかよ!? 俺様も混ぜてくれ〜〜!!」

大変羨ましがる翔に……。

「~~~~~!!……（ギリギリッ!）……この怒りを誰にぶつければ良いのかしら?」

「……………ムツツリーニ君ったら……気持ち良さそうな顔して……!」

更に怒りのボルテージが上がる優子に、ムツツリーニを睨みつける工藤に……。

「……………やっぱり怖い（ビクビク）」

優子と愛子が恐ろしい殺気を放っている事に怯える霧島……。

「……………ゴクッ」「……………」

「……………しゅしゅ」「……………」

愛奈の胸を見て唾を飲み込むその他のAクラス男子に、完全に敗者の顔になって泣いているその他のAクラス女子であった。

『アハハハ……多種多様な反応ですな〜〜。ってそう言えば久保の姿が見当たらないな……もう既に帰ったのかな?』

Aクラス生徒の反応を見ながら、久保の姿が見当たらない事に私は気付く。

「カメラマン君？　ボクの生おっぱいを見た責任は取ってもらおうからね？」

「！！！！！！（プシャアアアア！！！！　バタンツ！！）」

愛奈の一言でムツツリーニはすぐに離れた途端、鼻血が物凄い勢いで噴出して倒れた。

「ムツツリーニ！！　しっかりしろ！！？」

「……………（ドバドバ）」

翔は鼻血が出続けているムツツリーニを介抱しているが……。

「せめてあの世に行く前に聞かせる！！　愛奈ちゃんの生おっぱいを見たのは本当か！？」

実に下らない理由で問い詰めていた。

「答えるやがれムツツリーニ！！　ってかお前、愛奈ちゃんと何時・何処で知り合っただんだよ！？」

「それはボクも聞きたいな、ムツツリーニ君？」

頭に青筋を浮かべながら工藤も便乗してムツツリーニを問い詰める。

「……何か凄い事になっちゃってますね」

『だから言ったでしょ？ サプライズな事になるって（翔はどうでもいいとして、愛子ちゃんは完全に嫉妬してるな）』

私は愛子の嫉妬している様子を面白く見ていた。

おわり……………

おまけ

ムッツリーニが倒れている時……………。

「ムッツリーニの奴、いつの間に工藤さん似の女の子と知り合ったんだ!？」

「どうやらムッツリーニにも春が訪れたみたいじゃのう」

「にしてもホントに工藤にそっくりだな…髪と胸以外は……………」

「土屋君、頑張ってください！ 応援しますから！」

「……………強敵が現れた」

Fクラスメンバー（明久・秀吉・雄二・姫路・島田）が廊下でAクラスを覗いていた。

「ムツツリーニを殺したいほど妬ましい!!」

「……明久よ、何に対して妬ましいのじゃ？」

「そりゃあんな可愛い子の大きな胸に挟まれているムツツリーニに……はっ!!」

「ほお〜？ そんなにムツツリーニが羨ましいのかのう？」

秀吉が冷たい笑みを浮かべながら明久に近づいてくる。

「ち…違うんだ秀吉!! これには訳があつて……」

「じゃつたらその訳を聞かせて貰おうかのう？（ガシッ!）今日は演劇部が休みじゃから部室でじっくり聞かせてもらうのじゃ」

「ま…待つて秀吉い〜!!（ズルズルズル）」

秀吉は明久の襟首を掴んで引き摺り、演劇部の部室へと向かった。

「明久はバカだな、秀吉の前であんな事言うから……にしてもホントに胸が大きいな」

「……雄二」

「翔子!? お前いつの間に!？」

「……私がいながら他の女の子に目を向けるなんて」

「ち…違う!! 俺は浮気なんか断じてしてない!! ただ単に…」

…」

「（ガシッ！）……言い訳は後で聞く」

「俺の話聞いて〜〜〜！！！！（ズルズルズル）」

霧島は雄二を連れて何処かに行った。

「土屋君、私は何処までも応援しますから負けないで下さい！！！」

「……………あの胸はウチに対する当て付けなの！？」

姫路と島田は周りを全く見ずAクラスを覗き続けていた

知らないが、私にして見れば完全な負け犬の遠吠えにしか聞こえなかった。

……とまあそんな事があったのである。

「そういえば旅人さん、遊佐君はどうしたんですか？ 今日遊佐君も一緒に遊ぶ約束をしていた筈だけど……」

『……アイツは急用が出来たから来れないんだってさ』

「遊佐君が急用ですか？ ボクが見た感じでは、遊佐君は急用が出来たからって休むとは思えないんですけど」

『……そりゃアイツ等に追われていたら絶対来れないだろうね（ボソツ）』

「何か言いました？」

『いや、何でもないよ』

翔が来ない理由はある4人に追い掛けられている。その4人とは、私が以前にグレートレンジャー達をお仕置きしたオカマ達の事だ。

内容については“休日物語？”参照して下さい。

時間を少し遡る。

アアア！！！！！ 翔ちゃ~~~~ん！！！！ 逃がさないわよ~~~~
~~~~！！！！ オール・ハイル・ブリタ〜ニア~~~~！！！！（？）「

「~~~~（ダダダダダダ~~~~~~~~！！！！！！！！）オール・ハ  
イル・ブリタ〜ニア~~~~！！！！！！（？）「「「

『……………何だ？ あの最後の台詞は……………神聖ブリタニア帝国 第98  
代皇帝シャルル・ジ・ブリタニアの物真似か？』

……………と言つ訳で翔はオカマ達に追い掛けられて欠席である。

『さて、翔が来ないから私と一緒に遊びましょうか？』

「もしかしてエッチな遊び？ ボクは旅人さんだったら構わないけ  
ど」

『残念ながら違うよ。ついでにその台詞はムツツリーニ言ってや  
れ』

「もう、冗談が通じないんだから」

『私をからかうんだったら、君が前から頼んだ高級チーズケーキを  
奢るのは無かった事にするよ？』

「ごめんなさい。もうしませんからそれだけは……………」



私がちよつと脅し掛けると、愛奈はすぐに降参した。

『分ければ宜しい……………ん?』

「どつしたの?」

私は窓越しから来牙の姿を見掛けた。

『……………フッフッフッフ…………… 愛奈ちゃん、店から出るよ』

「え? ……あ…はい(旅人さんが見ている人って知り合いかな?)」

私は愛奈と一緒に店を出て、来牙を追い掛け始めた。

「たく! あの迷惑レンジャーは人の家であんな事しやがって……………  
けどまあ、偶に一人で出かけるのも悪くないな」

来牙は一人で街中をブラブラと歩いている。本当だったら家でゲームをしていたかったが、祖父の源三が他のグレートレンジャーとフアンクラブを家に招き、パーティーを開催しており凄く喧しかったので出掛ける事にした。

絵梨はバイトで家におらず、お婆さんはパーティーに出掛けていた。

「とりあえずパーティーが終わるまで何処かで時間を潰すか……」

『だったら私達と一緒に遊ばないかい？』

「！！！！……またアンタか」

私が声を掛けると来牙はすぐに後ろを向いて私だと確認すると少し嫌な顔をする。

『ちよつと、人の顔を見た途端に嫌そうな顔しないでよ』

「アンタが現れると碌な事が無いからな。この間は絵梨に下らない格好をさせておいて」

『その割には君も随分と楽しんでいたんじゃないの？』

「……………」

『沈黙は肯定と受け取らせて貰うね』

「……………（駄目だ、この人相手じゃ何を言ってもすぐに切り返される）」

来牙は私と口論をしても無駄だと悟り、用件を聞く事にした。

「……………それで？ アンタと一緒に遊ぶってのはどついう事だ？」

『私だけじゃないよ。愛奈ちゃん、自己紹介を頼む』

「はい」

愛奈は来牙の前に立ち……。

「？……工藤か？」

「残念ながら違います。初めまして宮永君、ボクは江藤愛奈です」

『私の友人だよ』

「……………」

自己紹介をすると、来牙は愛奈の顔を見て呆然とした。

『どうした来牙？ 鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしているぞ』

「……………アンタは本当に工藤愛子じゃないんだよな？」

「そつだよ」

「……………（物凄くそっくりだな。まあよく見ると髪の色が違うが、それに…………）」

来牙は愛奈の胸を盗み見るようにじっと見ている。

「……………確かに工藤じゃないな。アイツの胸はこんなにでかくないし、それに絵梨よりでかい」

『来牙？ 誰かさんに対して凄く失礼な事考えているでしょ？』

「……気のせいだ」

『あっそう（絵梨に報告しようかな？）』

「ふふふ……宮永君のエッチ……」

「……………（／／／／／）……………スマン」

「いいよ、ボクは気にしてないから」

愛奈の発言に顔を赤らめながら謝罪する来牙に愛奈は特に気にしなかった。

「顔が赤くなっちゃって可愛いね……………」

「……………そ…それより、アンタはどうして俺の事を知ってるんだ？」

『それは私が教えた』

私はサラッと言うと、来牙は顔を顰める。

「……………予想が付いているとは言え、それはそれで腹が立つな」

『そんなに怒らないでよ』

「……………まあいい。で？ アンタ達はこれから何処に行くんだ？」

突っ込んだ所で無駄だと分かっている来牙は、私に何処に行くかと聞いてくる。

『隣町にあるレジヤスポに行くかどうかと思ってね、君もどうだい？  
時間潰しには持って来いだよ』

「……………ああ、付き合わせて貰うよ」

『おや？ 随分と素直だね』

少し間があつたが素直に付き合おうと言う来牙に私は意外そうな顔を  
する。

「どうせ断つたら面倒くさい事になるだろうから、一緒に行くよ」

『……………何か釈然としないけど……………まあいいや。それじゃあ行く  
としよう』

「はい じゃあ行くのか（ギョッ！）」

「っておいアンタ、何してんだ？」

愛奈は来牙の腕をつかんで絡めるように抱きついてきたので、来牙  
は戸惑った。

「何って……………腕に抱きついてるだけだよ？」

「そういう事を言ってるんじゃない。何で俺にそんな事をするんだ  
？（それに当たってるし……………）」

来牙は腕に愛奈の胸が当たりながらも離れようとするが、愛奈は離  
さなかった。

「いいじゃない別に。減るもんじゃあるまいし」

「俺じゃなくて旅人さんとすればいいだろうが」

「うん、それもそうだね。旅人さん、いいですか？」

『はいはい』

私は愛奈に近づいて腕を寄せ、愛奈は私の腕を絡めた……来牙の腕を離さないまま。

「ちょっと待て。何で俺から離れないんだ？」

愛奈が来牙と私の間に入って腕を絡めている状態である。

「んふふふふふ」 逆の意味での両手に花だ〜」

『ではレジヤスポに向かってレッツゴー!!!』

「お————!!!」

「（勘弁してくれ……江藤、アンタの胸が当たってるんだが……）」

来牙は腕に当たっている愛奈の胸を意識しながら歩く。

おまけ

「逃がさないわよ翔ちゃ〜ん!!!」

「誰か助けてくれ〜〜〜!!!」

未だに翔はオカマ達に追われていた。

通行人はオカマ達の姿を見て吐いたり、気絶している者が続出している。

「ワタシ達が天国に逝かせてあげるわ〜!!!」

「天国じゃなくて地獄だよ〜!!!」

果たして、翔はオカマ達から逃げられるのだろうか。

来牙×愛奈（後書き）

今回はノクターン行きの話になりますので、今回のお話は此処で終了となります。

続きを見たい場合はノクターンの方へと行って下さい。

それでは失礼します！！！！

それと感想もお待ちしております！！！！！！



明久×秀吉2（前書き）

今回、秀吉がいつもと違いますのでご注意ください。

## 明久×秀吉2

文月学園が昼休みの時、屋上にて……。

「ハアツ！ ハアツ！ ハアツ！ とりあえず助かったあゝ」

『お前な……』

そこには息切れをしている明久と私がいた。

「はあっ……はあっ……どうしてこんな事になったんだろう？」

『私ほとんどばっちりだがな……』

「た…旅人さんが余計な事を言わなければ！」

『お前が原因だろうが!!』

私は何故、明久と一緒にいるのかは少し時間を遡ります。

私と明久が屋上に来る前の10分前…。

明久がいつものメンバーと昼食を食べている時……。 (因みに男子

勢は姫路の弁当を避けるために全員自分用の弁当を持って来ている)

「……………(旅人さん、早くアレを持ってきてくれないかな?)」

「明久、お前どうした?」

「え!?!……………な…何でもないよ」

「明久よ、お主さつきから何かソワソワしておらんかのう?」

「だ…だから本当に何でもないんだってば……………」

「……………何か怪しい」

「べ…別に怪しい事なんか無いよムツツリーニ」

「明久君、何処か痛い所があるんですか?」

「アキ、ホントにどうしたのよ?」

明久が何か様子がおかしいので雄二・秀吉・ムツツリーニ・姫路・島田が揃って聞くが、当の本人の明久は何にも無いと答える。

「も…もう! 僕は別におかしい所なんか無いんだからね!」

「いや…さつきからソワソワしたり、チラチラと廊下を見ていたら誰もがおかしいと思うぞ?」

「ら…来牙まで!?!?」

来牙も他のメンバーと同様に明久の行動に疑問を持っていた。

「明久、お前何か隠していないか？」

「何でそうなるんだよ、雄二！？」

「お前が落ち着かない理由は何か隠しているんだろ？ だったら言えよ」

「だから何も隠している事なんか無いんだってば！」

明久は雄二の問いを必死に否定するが…。

「そんな怒鳴り気味に何も無いって言ってもなあ…」

「逆に何かありそうに見えるのじゃが…」

「……早く言った方がいい」

雄二と秀吉とムツツリー二は呆れており…。

「何か困っている事があるんですか？」

「ウチ等が相談に乗って上げるわよ？」

姫路と島田は何か遭ったのかと思っており…。

「明久、いい加減に白状したらどうだ？ お前の姉が家に来ているのを必死に隠している時みたいにな、また一悶着が起きると思うぞ？」

「う……わ……分かったよ」

明久は来牙に言われて素直に白状することにした。

「じ……実は旅人さんにちょっと頼み事をしていて……」

明久が私の名前を出すと……。

「旅人だと！？ あのクソ野郎にか！？」

「何で明久君が！？」

「アンタ！ アイツに何を頼んだのよ！？」

雄二・姫路・島田は嫌な顔しており……。

「……………（また明久は恋人のワシを差し置いて旅人殿と）」

秀吉は私に嫉妬し始め……

「……………旅人さんに何を？」

「お前が旅人さんに頼み事をするとはな……………」

ムツツリーニ・来牙は珍しそうな顔をしていた。

「おい明久！ アイツは此処に来るんだな！？」

「そ……そうだけど……………」

「丁度いい、アイツが来たらすぐにぶっ殺してやる!!」

私が来ると分かった途端に雄二は私に復讐しようとして燃えている。

「何で雄二が旅人さんに対してそんなに怒ってるの?」

「あのクソ野郎の所為で俺は地獄に落とされたんだ!? アイツをぶっ殺さなきゃ俺の気が済まん!!」

「地獄に落とされたって……霧島さんとデートされた位でそんな……」

「お前は知らないだろうが、アイツに暗示を掛けられて俺は翔子と……くそおおおお!!!! 俺の人生があ~~~~!!!!!!」

雄二は霧島とエッチした事を思い出したのか、慟哭の様に叫ぶ雄二。

「あの人 cameたら絶対にお仕置きです!!」

「あの時の恨みを絶対に晴らす!!」

「姫路さん! 美波! 何で君達が!? ってか旅人さんに何かされたの!? (いくら旅人さんでも……)」

明久は私に説教をしようとしたが……。

「はい! この間の休日の時、明久君にケーキを奢って貰う為に呼ぼうとしたんですけど……」

「アイツに邪魔されたのよ!!」

「(旅人さん! 助かりました!!)」

姫路と島田の理由を聞いた明久はすぐに前言撤回して私に感謝した。

「……………むう(明久は旅人殿に何を頼んだのじゃ? ワシではダメなのか?)」

「どうした秀吉?」

「……………不機嫌そうな顔をしているが?」

「何でもないのじゃ、来牙・ムツツリーニ」

来牙とムツツリーニが秀吉の様子がおかしかったので聞いてみたが、秀吉はすぐに何事も無い顔をした。

「“さすらいの旅人”が来たらすぐに抹殺するぞ!!!」

「……………了解!!!!!!」

須川率いるFFF団が明久達の話聞いて、私を迎え撃つかの様に入口で待ち構えていた。コイツ等は異端審問会を妨害された理由により、私をブラックリスト入りしているのだ。

「ねえ秀吉、何で旅人さんが来るだけで皆がこんなに騒いでいるのかな?」

「……………(プイッ)知らんのじゃ」

「（何で秀吉まで不機嫌なの？）」

ますます原因が分からない明久であった。

ガララッ！！

『失礼します！』

私が教室に入ろうとすると……。

「来たぞ！！ さすらいの旅人を抹殺しろお~~~~！！！！！！！！」

「~~~~うおおおおお~~~~！！！！！！！！」

『邪魔だ貴様等！（パチンッ！）』

「~~~~ぎゃあああああ~~~~！！！！！！！！（バタバタバタ！

！）~~~~」

FFF団は私を殺そうとしていたので、迎撃する為に指を鳴らした  
らすぐに悲鳴を上げながら倒れた。

『教室に入って早々に私を抹殺とは……随分といい度胸しているじ  
ゃないか』

“地獄の幻想”はまだ有効だなと思っていると……。

「旅人！！てめえ覚悟しやがれ！！」



「お仕置きです!!」

「覚悟しなさい!!」

『って今度はお前等もかよ!?』

雄二・姫路・島田は屍となっているFFF団を踏みながら私に襲い掛かってきた。

『お前等も大人しくしてろ！（フッ！ ドンッ！×3）』

「くくくうっ!!！（ボタン!）」

私は3人の背後を取って襟首に手刀で（かなり強めに）当てて気絶させた。

『ったく！ FFF団に続いてコイツ等も私を抹殺かよ。今度から教室に来るのを止めようかな?』

「アンタも随分と恨まれているな」

「僕としては一瞬で倒す旅人さんの方が凄いと思うけど……」

「普通の人間には出来ん芸当じゃのう……」

「……まるで鉄人」

来牙・明久・秀吉・ムツツリー二は私に対して思った事を言う。

『さて、こんなバカ共は放っておいて……待たせてすまなかったな

明久  
『

「あ……はい」

『頼まれた物を持ってきたよ（ゴソゴソ）』

「あ！ そ…それは別な所で！（ガシッ）」

私はある物を出そうとしたが、明久が咄嗟に私の腕を掴んで止めた。

『何でだい？ 別にここで渡しても問題は無いと思うが？』

「だ…だから早く教室から出ましょう（グイグイ！）」

明久は私の背中を押しながら教室から出ようとする。

「明久よ、旅人殿と何処へ行くのじゃ？」

「え？ な…何で秀吉がそんなに怖い顔をしているの？」

『……………（また私に嫉妬か）』

私は嫉妬する秀吉に少々呆れていた。

『言っておくが秀吉、私は明久に……むぐー!!』

「ちよつと旅人さん！？ 余計な事は言わないで!!」

私が要件を言おうとすると、明久は両手を使って私の口を塞いだ。

『むぐむぐ！（明久！その手をどける！！）』

「僕が後で言いますから旅人さんは何も言わないで下さい！！」

「むぐむぐ！（分かったから早く手をどける！！）」

「……………（明久はまた）」

私が明久とじゃれあっていると秀吉はさらに嫉妬する。

「一体、明久は旅人さんに何を頼んだんだ？」

「……………全く分からない」

来牙とムツツリーニは明久の行動に理解出来なかった。

『ぷはっ！ お前は どうして 誤解を 招く 行動を 起こすんだよ！』

「別に誤解されていないでしょ！？」

『じゃあアッチの方を 見て みるよ！（ビシッ！）』

「え？……………ひ…秀吉！？」

「……………」

明久は私に言われたとおり指をさした方を見てみると、私と明久を物凄く睨んでいる秀吉がいた……………正確には私だけであるが。

『ほれ見ろ！ 秀吉が物凄く誤解しているじゃないか！？』

「ち…違つんだよ秀吉！ 別に僕はただ旅人さんとは何の関係も無くて……」

「……………旅人殿」

『な…何かな？』

秀吉は明久を無視して私を呼んだので、私は恐る恐る返事をする……。

「やっぱりお主はワシの敵じゃ……！」

『何でだよ！？』

完全に爆発した秀吉は私に怒りをぶつけた。

「お主はいつもいつも明久と仲が良い所をワシに見せ付けておいて……！」

『だから違つって言ってるだろ……！』

「旅人さんとは何の関係も持ってないよ秀吉！ 僕は秀吉一筋なんだから……！」

私と明久は必死に秀吉を説得するが……。

「もう許せんのだじゃ……！ 旅人殿を成敗するのだじゃ……！」

『だから何で明久じゃなくて私なんだよ！？ 怒る対象を間違えて』

いるぞ!？」

「た…旅人さん!! ここは一先ず逃げよう!! (ガシッ! ダダダダダ~~~~!!!!!)」

『っておい待て!! そんな事したら余計秀吉に……聞けよコラ~~~~!!!(ダダダダダ~~~~!!!!!)』

秀吉は私を成敗する為に襲い掛かってきたが、明久は私の腕を掴んで無理矢理連れて行きながら教室から出た。

「~~~~!!!! 旅人殿!! 絶対に許さんのじゃ!!!(ダダダダダ~~~~!!!!!)」

秀吉も教室から出て、私達を追い掛け始めた。

「……………秀吉があんなに怒るのは初めて見たな」

「……………秀吉が怒った顔も凄くいい」

来牙は秀吉の意外な一面を見て驚き、ムツツリーニは秀吉の怒った顔をカメラで撮っていた。

後ほど、秀吉は私の方で沈静化させて事情を説明をし、事を収めたのであった。

明久×秀吉2（後書き）

あり得ないと思われる、秀吉の嫉妬大爆発でした~~~~!!!!

次回はノクターン行きの話になります!!!!

続きを見たい場合はそっちを見てください!!

それでは失礼します!!

## 来牙×絵梨6

私は絵梨に呼び出されて、絵梨の部屋にいた。

『それで、私に何の用なんだい？』

「実は旅人さんに新しい猫耳メイド服を頼もうと思って……」

『何故だい？ 今持っているやつはどうしたんだ？』

「それが……その……」

『？』

私が聞くと絵梨が答えづらそうな表情になっている。

「……ユーにゃんの所為で着れなくなっちゃったの」

『……………』

「にゃん？」

私は絵梨が抱きかかえている飼猫であるユーにゃんを見ると、ユーにゃんはつぶらな瞳で私を見ていた。

『……………どついう風に悪戯されたんだ？』

「悪戯って……あたしが猫耳メイド服を着ている時にユーにゃんが飛びついて来て、毛だらけになっちゃったから一度洗濯したんだけ

ど、干している最中にユーにゃんが服を伸ばしたり引っ掻いたりしてダメにしちゃったの……」

悪戯と言う単語に少し引つ掛かる絵梨であったが、取り敢えず着れなくなつた原因を私に話す。

『あらあら……そりゃ気の毒に……』

「にゃ〜」

『おいコラ！ お前が犯人…もとい犯猫なのに何故にそんな何でもない顔をしているんだ？』

「にゃ〜？」

私が軽く叱咤しても、ユーにゃんは何も分からない顔をしている。

「いいんだよ旅人さん。ユーにゃんだって悪気があつてやった訳じゃないし」

『………まあ、こんな生まれて間もない小さな猫に説教をした所で意味無いか』

「説教つて……まるで猫と話せるような言い方だね」

『話せるよ』

「へえ〜そうなんだ〜……って嘘でしょ!？」

私がサラッとと言うと絵梨が少し間を置くと凄く驚いている顔をした。



『いや、ちゃんと話せるから』

「……………前から思ってた事だけど、旅人さんはホントに何でもアリなんだね」

『いや〜照れるな〜』

「……………別に褒めたつもりは無いんだけど…」

絵梨は呆れながら見ているが、私からしてみれば十分な褒め言葉であつた。

『まあそれは置いといて、取り敢えず私の方で新しい猫耳メイド服を新調すればいいんだね?』

「……………あたしとしては旅人さんがユーにちゃんと話す所を見てみたいけど、来牙君がそろそろ帰ってくるから服の方を優先するね。ユーにゃん、ちよつとゴメン（スツ）」

「にゃ〜」

絵梨は抱きかかえているユーにゃんを床の上に座らせ、メイド服のカタログを開いてを私に見せる。

「えつとねえ〜（パラパラ……………スツ）この猫耳メイド服を出して欲しいの」

『赤いミニスカの猫耳メイド服ね……………了解（パチンツ！ パツ！）』

私が指を鳴らすと、絵梨の手元に指定のメイド服が突然出てきた。

『それでいいのかい？』

「ありがとう旅人さん！」

『どういたしまして。今度からはユーにゃんの届かない所で干しなよ。』

「うん！」

私が絵梨に念を押しで言うと、絵梨は大事そうにメイド服を持っていた。

『それじゃあ私は用が済んだから、お婆さんと一緒にお茶を飲んでから失礼するよ』

絵梨の部屋から出ようとする私であつたが……。

「あ…旅人さん、今からこのメイド服に着替えるからちよつと見てくれないかな？」

絵梨が突然、不可解な事を言い出してきた。

『いや、私じゃなくて来牙に見せればいいでしょ？』

「そうだけど、メイド服を出してくれた旅人さんにちよつとお礼に見せようかと……それに」

『それに？』

「来牙君が戻ってくる前にまたお父さんが来たら旅人さんの方で何とかしてもらいたいな〜って」

『……………それが本音か』

どうやら絵梨は私にボディガードをして欲しいみたいだ。

「ダメかな？」

『……………はあっ…分かったよ。部屋の前で待っているから、着替え終わったら呼んでくれ（ガチャ）』

「は〜い」

『ユーにゃん。君に話があるからこっちに来なさい』

「にゃ〜（分かった〜）」

『それじゃあ終わったら呼んでね（ボタン）』

私はユーにゃんに来るように言うと、ユーにゃんは言われたとおり私と一緒に絵梨の部屋を出た。

「……………ホントに猫と話せるんだね」

絵梨は私の言った事が本当だと思いながらも着替えを始めたのであった。

絵梨の部屋の前で私はユーにゃんと一緒に座っていた。

『さてユーにゃん、私と君で絵梨を守るよ』

「にゃ〜？（どうして？）」

『どうしてって……君の大好きなご主人様が悪い人に連れて行かれてもいいのかい？』

「にゃ〜！（それはやだ！）」

『じゃあ私と一緒にここにいて、悪い人から絵梨を守ろうね？』

「にゃ〜！（分かった！）」

傍から見れば猫に話しかけている私は変な人に見られるだろうが、本当に猫と話しているのだ……言っても誰も信じてくれないと思うが。

「にゃ〜？（所で悪い人って誰？）」

『ああ、悪い人はね……』

ユーにゃんに悪い人を名前を挙げようとすると……。

「コラ旅人！！ 貴様は絵梨の部屋の前で何をしておる！？ さて

は絵梨を襲いに来たな！？ じゃったらグレートレンジャーのリーダーであるこのワシが成敗してくれる！！」

私がユーにちゃんと話している最中に源三（以降は爺）がやって来た。

『……………ユーにゃん。アレが絵梨を連れて行く悪い人だよ』

「にゃ？ ……フリーー！！（え？……………こいつか！！）」

「ひよえええええ！！ 何故ソイツがワシに敵意を向けておる！？」

ユーにゃんが爺を敵と認識して毛を逆立ちながら威嚇すると、爺は怯えているかの様に後ずさっていた。

「き…汚いぞ旅人！！ ワシが猫嫌いなのを知っておいてよくも！！」

『アンタがいきなり失礼極まりない事をほざくからだろ』

「事実じゃ！！ どうせ貴様の事じゃから、絵梨のピチピチボディを舐め回すように見た後でたっぷりと味わうつもりじゃろ！？」

『……………（ピキッ！）……………よしユーにゃん、私が合図したら爺を倒すんだ』

「ニャー！（早くしてー）」

爺の発言に切れた私はユーにゃんに戦闘準備をさせると、ユーにゃんはいつでも動ける体勢になっていた。





『……………あの程度の殺気で怯えるとは……………あの駄犬も爺に似て弱いな。正に“類は友を呼ぶ”だよ』

爺と長嶋三番の余りの弱さに呆れる私であった。

おまけ

私が長嶋三番と会話をしている時……………。

「ニャー!…」

「ばーさんや〜!…!助けてくれ〜!…!…」

「何ですか? 騒々しいですよ」

猫に追い掛けられている爺は楓さん(以降はお婆さん)に助けを求めていた。

「た…助けてくれ! 猫が…猫がワシを!…」

「あらユーにゃん、どうしたんだい?」

「ニャー!…」

「しっしっ!…! あっち行け!…」



爺はお婆さんの背中に隠れながら猫を追い払っていた。

「お爺さん、ユーにゃんに失礼ですよ」

「そんな猫に失礼もクソもあるか!? おのれ旅人め! よくもワシにこんな恥辱を!!!」

「おや? 旅人さんが来ているのですか?」

お婆さんは私が来た事に嬉しそうな表情をする。

「あの無礼者め! ワシが絵梨を守ろうとしたのに、こんな黒い悪魔を差し向けおって!!!」

「……………あの人が絵梨を襲うなんて事は絶対に無いと思いますよ?」

爺の言い分に呆れながら、それは無いだろうと言ってお婆さんであったが……………。

「それは無い!!! 絶対に絵梨の裸体を好き放題にする!!! じゃからワシが代わりにじっくり絵梨の発育を観察して……………ばあさんや!!! 何故ワシから遠ざける!?!」

爺の動機が分かった途端にお婆さんは即座に離れた。

「旅人さんがお爺さんにユーにゃんを差し向けた理由が分かりましたよ。ごめんねユーにゃん、邪魔しちゃって」

「ニヤー!」

「ば…婆さんや〜!! ワシを見捨てないでくれ〜!! ぎよ  
ええええ〜!!! (ダダダダ〜!!!)」

爺はまたユーにゃんと再び追いかけてくる事になった。

「さてと、旅人さんにお茶を出す準備でしようかねえ」

そう言ってお茶を出す準備をするお婆さんであった。

来牙×絵梨6 ?

爺を追い払い、絵梨の部屋の前で待つて10分後……。

「旅人さん、さっさと入ってきなさいよ！」

『はいはい……ん？ 何か絵梨にしては随分と横柄な……（ガチャツ）』

私がドアを開けて絵梨の部屋に入ると、ミニスカの赤い猫耳メイド服を着た絵梨がいた……何故かポニーテールからツインテールに変わっていたのは分からなかったが。

『……絵梨、どうして髪型を変えたんだ？ 別に変える必要は無いと思うが？』

「あたしが髪型を変えるのに文句でもあるニヤ！？」

『いや別に……文句は無いが……』

『だったら早くあたしの格好を見るニヤ！』

『あ……ああ……（どうしたんだ？ 絵梨の性格が変わっているぞ？ それに加えて何でニヤを付けているんだ？）』

私は絵梨の変貌に大きく戸惑うばかりで対応に困っていたが、取り敢えず絵梨のミニスカ猫耳メイド服を見て感想を述べる事にした。

『よ……よく似合っているよ。流石は絵梨が選んだだけの事はある』

「……………それだけかニヤ？」

『はい？』

「他には何か言う所は無いのかって聞いているニヤ！」

『え？ え？（何で絵梨はこんな変なキャラになっているの？）』

もうどうすればいいかわからない私であったが、絵梨はそんな事お構い無しと言わんばかりに……………。

「旅人さん！ 他に言う所があるニヤらさつさと言つニヤ！」

『え？ あ……………えくとね……………』

私に近づいて顔を見上げて言うが、私はすぐに言う事が出来なかった。

『（何なの！？ 私はどうすればいいの！？）』

「黙っていないで早く答えるニヤ！…！」

『え……………えくと……………猫耳が絵梨の可愛らしさをさらに強調していて、赤いメイド服もバッチリだし、そのミニスカも絵梨の綺麗な足を十分に引き立てているから凄く似合っているよ』

「…………………………」

私が絵梨の格好を評価すると、今度は絵梨がダンマリとなる。

『「…これでいいかい？」』

「……ふん！（プイツ！）まあまあと言った所ニヤ！ か…勘違いしニヤいでね！！ そんな褒め方であたしはまだ満足してニヤいんだから！！」

『「……………ネコ語を使つてのツンデレかよ……………（成程、そういう事か）」』

顔を背けながら赤くなる絵梨であったが、私は絵梨の豹変の理由が漸く分かった。どうやら絵梨はツインテールの髪型にしてツンデレキャラを演じているみたいだ。

『おい絵梨、私の前でそんなキャラを演じなくてもいいんだが……………』

「あ…あたしを褒めた御褒美として、何かあげニヤいと……………」

『つて人の話を聞けよ！！』

「じゃ…じゃあほっぺにチュウしてあげるニヤ！（ガシッ！）」

『お…おいちよつと待て！ そんなお礼はいらん！ 離せ！（ジタバタ）』

私は暴れるが絵梨は離さなかった。

「ニヤによ！ あたしからの御褒美が気に入らニヤいの！？」

『（ジタバタ！）とりあえず離せ！ こんな所を来牙に見られたら

……っおっ!』

「ニヤ!!!」

バタンツ!!

私がジタバタと暴れていると、絵梨がバランスを崩して倒れたので私も道連れになった。私が絵梨をベッドの上で押し倒している体勢になっているが。

『イテテ……す……すまない絵梨……大丈夫か?』

「何するニヤ! 凄く痛かったニヤ!!」

『絵梨が私を離さないからこうなったんだろ!?!』

「旅人さんがあたしの御褒美を拒んだからニヤ!!」

『人の所為にするんじゃない! 責任転嫁するならこのまま襲っぞ  
!!!』

「ニヤ!?! (//////)」

私がふざけ半分で言うのと絵梨が突然無言になりながら顔を赤らめた。

『おい待て……何でそこで顔を赤らめる?』

「……………ごめんニヤ来牙君。あたし、旅人さんに食べられちゃうニヤ」

『いきなり元のキャラに戻って来牙に誤解を招く事を言ってるじゃねえ!!』

私が逆切れ気味で絵梨に怒鳴ると……。

「そんな体勢になっていて誤解じゃ無いって証明出来るのか?」

『え? ……あ……』

後ろから声を掛けられてので見てみると、そこには運悪く来牙がいたのであった。

「絵梨の部屋が騒がしいから入ってみれば、まさかアンタが絵梨を襲うとはな……恐れ入ったよ」

『お…お帰り来牙。随分早かったね』

「お…遅いじゃニヤい来牙君!! あたしを待たせるニヤんていい度胸ニヤ!!」

「(ガシツ!) おい旅人さん、アンタに話があるんだが……」

来牙は私と絵梨の言葉に耳を傾けず、私の腕を掴む。

『ちよ…ちよっと待って来牙、君は激しく誤解している』

「誤解ねえ」。絵梨に向かって、でかい声で襲うぞって言うておきながらか?」

『(汗) ……ち…因みにどこら辺から聞いていたの?』

「アンタが押し倒す所からだよ」

『な…何でよりによって一番最悪な所から!?!』

これじゃ誤解するのも無理は無いと思う私であった。

「そんな事はどうでもいいんだよ旅人さん。さっさと絵梨から離れる(グイッ!!)」

『おおっと!』

来牙は私の腕を引っ張って私を絵梨から引き剥がした。

「大丈夫か絵梨? 何もされていないだろうな?」

「か…勘違いしニヤいでよね! 別に来牙君に助けられて嬉しくニヤいんだから!(ゴメン旅人さん。悪ふざけが過ぎましたので後で謝ります)」

絵梨は内心で私に謝罪しながらも来牙にツンデレキャラを演じている。

「……………何でそんな格好で髪型が変わっているのかは知らんが、とりあえず無事みたいだな。さて……………何処に行くんだ旅人さん?」

『(ギクツ!)……………あ…アハハ……………やっぱり見逃してくれない?』

私がそつと絵梨の部屋から抜け出そうとしたが、来牙が目敏く私を見る。



「アタタがまさか俺の絵梨に手を出すとはなあ、恐れ入ったよ（ジヤキツ）」

『おい（汗）…何で感心しながら特殊警棒を出すんだ？（汗）』

「何であんな状況になったのかをじっくりと聞き出すのに最適な物だから出したんだよ」

『……私はそんな物で殴られて喜ぶ趣味はないから！　じゃあね！（ピシユツ！）』

私は一時退散する為に瞬間移動をした。

「チツ！　逃げたか……（少しからかい過ぎたか。あの人の本気で絵梨を襲う事は無いのは分かっていたが、それでも腹が立つことに変わりはないからな）」

「そ…そんな事より来牙君！！　いつまでもあたしを待たせるなんていい度胸ニヤー！（本当にゴメンなさい旅人さん。来牙君にはあたしから説明しておくね）」

私の本気で絵梨を襲う訳が無いと分かっている来牙と、ツンデレキヤラを演じながらもまた内心で私に謝罪する絵梨であった。

「そんな事より絵梨、俺がいない間に旅人さんと随分お楽しみだったみたいだな……」

「ええ！？　な…何をいつてるニヤー！？　あたしは旅人さんとそんな関係じゃないニヤー！！」

「へえ？　じゃあその格好は一体何なんだ？　旅人さんに着せられたのか？」

「違うニヤ！！　あたしが旅人さんに、この服を頼んで自分で着たんだニヤ！！」

絵梨は誤解を解く為に説明しているが、ツンデレキャラと元のキャラがごっちゃになっていておかしなキャラになっていた。

「……………まあそんな事だろうと思ったよ。それはそうと絵梨、ご主人様に向かってその口の聞き方は何だ？（ムニユ）」

「ひゃあん！！　い…いきなりニヤにをするのよご主人様！？」

絵梨は来牙に胸を揉まれて感じながらも呼び方を直していた。

「ツインテールでツンデレキャラを演じながらも感じているみたいだな（モミモミ）」

「ご…ご主人様、ちょ…調子に乗らないで欲しいニヤ！　あ…ああん！！」

「ふん、俺以外の男でその気になっていた絵梨に言われる筋合いは無いな（スルツ）」

「ご…ご主人様！？　何で下着を…あああ！！…ニヤアア！　触っちゃダメエ！！」

来牙はしゃがんで絵梨の下着を下ろし、スカートを捲って露わにな

った絵梨の恥ずかしい所を触り始めたのであった。

おまけ

『来牙の奴、私が絵梨を襲う気が無いのを知っているながら……（ズズウ〜）』

「まあまあ旅人さん、そう怒らずに。来牙だって大事な妹が襲われていたら怒るのは当然ですよ（ズズ〜）」

私はお婆さんと一緒に和室でお茶を飲みながら愚痴を零していた。

『まあ私にも落ち度はあったがな……（ズズ〜）』

「しかし、来牙が貴方に対してそんなに怒るなんて……もしかして来牙と絵梨は付き合っているんですか？」

『……………さあ？（ズズ〜）』

「その顔は何か知っているみたいですね……………」

『……………（ズズ〜）』

お婆さんの発言に私は無言でお茶を飲んでいた。

「ふふ……………あたしは別に聞こうだなんて思っていないですよ」

『……………』

「前にも言いましたが、あの2人が本気で付き合っているんですから、あたしは口を出すつもりはありませんよ」

『……………お茶のお代わり下さい（やっぱり寛大な人だよ）』

「はい、少々お待ち下さい」

お婆さんは私がお茶を飲んだ湯飲茶碗を取って、お茶を新しく入れた。

「どござ」

『すいませんね、じゃあ今度は和菓子と一緒に味わいますか（パチンッ！）』

私が指を鳴らすと、突然テーブルのから芋羊羹が出てきた。

「おや、これは高級芋羊羹ではありませんか」

『お茶を飲ませてくれたお礼です』

「何もそこまでしなくてもいいのに」

『気にしない気にしない』

そして私とお婆さんは芋羊羹を食べながら談笑していた。

「ニヤ~~~~~！~！~！」

「誰か助けてくれ……!!!!」

爺は未だユーにゃんに追いかけられていたが……。

来牙×絵梨6 ? (後書き)

今回はノクターン行きの話になりますので、ここで終了とさせていただきます。

気になるのでしたら、ノクターンへお進み下さい。

坂本雄二 奈落の底に堕ちる（前書き）

これは明久が理不尽な目に遭っていた頃の話です。

詳しくは「バカとテストと優等生？」の第百六十五話辺りを参照して下さい。

そして一番調子に乗った大バカの坂本雄二をお仕置きすると言つ話となります。

## 坂本雄二 奈落の底に墮ちる

授業が終わり、生徒達が下校している頃。

『さ〜とて、雄二にはたつぷりと地獄を体感させてやる』  
バカユリッラ

私は屋上から雄二が学園から出たのを確認した。

『明久、お前の無念は私が晴らしてやる（ピシュツ！）』

そして雄二を追跡する為、姿を消す私であった。

「今日は明久が鉄人の相手をしてくれたから楽に過ごせたぜ」  
バカ

雄二は明久を陥れていて満足していた様だ。

「あのバカはああ言う時に利用価値があるから助かるんだよなあ」

『そうかい、だったら今度は私がお前を利用してやるよ』

「！！！！！！」

私が後ろから雄二に声を掛けると、雄二はすぐに反応し後ろを向い



た。

「旅人！……！」

『やあ雄二、君と向かい合って話すのは久しぶりだねえ』

「てめえ………よく俺の前で姿を見せやがったなあ（ポキポキ）」

雄二は私の顔を見た途端に、憎しみを込めて睨みながら戦闘準備に入っていた。

『おやおや、会って早々私に襲い掛かりそんな雰囲気だな』

「当たり前だ！！ てめえの所為で俺がどれだけ地獄を見たと思っ  
ていやがる！！」

『地獄？ はて……私がお前に地獄に送った覚えは無いんだが？』

敢えて惚ける私に雄二は苦々しい顔をしながら私にこう言う。

「てめえが余計な事をした所為で俺は翔子と完全に付き合う羽目になっちまっただろうが！！」

『霧島と付き合う事が地獄ねえ……、天国の間違いじゃないの？』

「ふざけるな！！ 俺の人生を奪いやがったお前に何が分かる！？」

『別にいいじゃん。それに私が霧島に手を貸さなくても、貴様ほどの道逃げられない運命だったと思うよ？ 何時までも無駄な抵抗をしないで、いい加減に受け入れれば良いのに』

「てんめえ（怒）！！！」

私が雄二に諭す様に言うと、雄二は怒り狂った顔をして何が何でも私をぶつ飛ばすと勢い込んでいた。

『あれ？ 私は何か間違った事を言ったかな？』

「~~~~！！（ブチブチブチ！！）これ以上てめえと話すつもりはねえ！！今すぐぶつ殺してやる！！」

『ほう？ お前が私をねえ〜？』

完全に怒り狂う雄二に私はまだ余裕の対応をすると……。

『無理だと思っけどね』

「その余裕面をすぐに消してやる！！ 覚悟しやがれ！！（ダッ！）」

雄二は私に襲い掛かってきた。

『真正面から私に挑むのは愚かだよ？（スッ）』

「それは対策済みだ！！（ブンッ！）」

『（ガンッ！）ゲッ！』

雄二は私が指を鳴らす前に咄嗟に鞆を私の顔に目掛けて投げてきたので私はそれに当たって怯む。

「（ガシッ！）捕まえたぜ！！」

『ぐっ！ 貴様！！』

私の胸倉を掴んだ雄二に私はすぐに指を鳴らそうとするが……。

「おらあー！（ビュオッ！）」

『（バキッ！）（ゴフッ！）』

雄二はさせまいと私の顔に思いつきり殴り飛ばしてきた。

「まだまだあー！！（ドカッ！ バキッ！ ドゴッ！）」

『ゴブ！！ ガアッ！！ グフッ！！』

雄二は片手で私の胸倉を掴みながら空いている手で私の顔や腹を殴り続ける。

『「」…この…調子に……』

「さっさとくたばりやがれ！！（ビュオッ！）」

渾身を込めた拳で私の顔を殴ろうとした雄二であったが……。

『（ガシッ！）……んもっっ痛いじゃなっっい！』

「何！？ ん？ コイツの喋り方がいきなり……」



かべながら頭に青筋を浮かべている。相当、顔を殴られて頭にきて  
いるのだろう。

と、そんな時……。

『フッフッフッフ……雄二、束の間の優越感は楽しめたかな？』

「！！（バツ！）旅人！？ てめえが何でそこに!?!」

雄二が後ろを向くと、そこには本物の私がいた。

『フッフッフッフ……今のお前がそんな事を気にしている余裕がある  
のかな？ ローズ！ そいつを離すなよ!?!』

「（ガシッ！）分かってますわぁ旅人様あゝ」

「（ウプッ！）て……てめえさっさと離しやがれ!! 気持ち悪いん  
だよ!?!」

ローズが雄二をガッチリ抱きしめると、雄二は悪態をつきながら未  
だに無駄な抵抗していた。

では何故あんな状況になっているのかを少し時間を遡ります。

私は雄二に会う前……。

『さてさて……ゴリラに会う前にと（パチンッ！）』

「（ピシュッ）お呼びでしょうか？」

オカマ軍団の一人であるローズを呼んでいた。

『お前にはある事をしてもらいたい』

「ある事……ですか？」

『そつだ。内容は……』

そして私がローズに以下の説明を始める。

内容を端的に言う……ローズが私の姿になって雄二に会い、優越感を浸らせる様にとの事だ。

「ええ〜！？ そんなのは嫌ですわあ〜！！」

それを聞いたローズは嫌だと最初は拒否していたが……

『私の指示に従ってくれたら、捕まえた奴をお前の好きにしてもいいんだが？』

「喜んでお引き受けしますわ」

後の事を言うと快く引き受けてくれた。

『フフフ…そう言ってくれて助かるよ』

「若い子を食べさせてくれるんでしたら、文句は言いませんわぁ」

『それは何より……では先ずお前の姿を私に、と（パチンツ！）

」（ポンツ！）……………あら

私が指を鳴らすと、ローズが私の姿になった。

『そして標的はコイツだ（ピラツ）』

「あらぁ、野生的な男の子ですねえ。すぐに食べちゃいたいですわ

ぁ（ジュルリ）」

私の姿をしたローズは雄二が写っている写真を舌なめずりしながら見ていた。

『食べるのはいいが、それは私の指示に従った後でだ。それとゲン、私の姿でその口調は止めてくれ』

顔を顰めながら言う私にローズは……………。

「あらこれは失礼。けど旅人様もワタシをそんな名前で呼ばないで下さい。その名前はもう捨てたんですから」

此方も負けじと言い返すのであった。

『すまない、私も悪かった。……………では気を取り直して、行くとし

ますか』

「はい旅人様。しっかりと貴方様を演じさせていただきます」

そして私と私の姿をしたローズは姿を消して作戦を実行したのであった。

という事である。

『さて雄二、お前には特別な部屋でローズと遊んで貰うよ』

「ふざけるな！！ 何で俺がこんな妖怪と遊ばなきゃいけないんだよ！？」

「妖怪なんて失礼しちゃうわね！ 美しい乙女に向かって！！ プンブン！！」

「（ケプツ！）…て…てめえ…：…自分の顔を鏡で見てみるよ！！」

雄二は顔を膨らませながら怒っているローズを至近距離で見て、吐き気を催しながら抵抗していた。

『無駄だよ雄二、そいつの腕力は鉄人並だから簡単には逃げられない』



い  
』

「ってか何で俺がこんな目に遭わなければいけないねえんだよ!?  
理不尽にも程があるぞ!!!」

『理不尽ねえ〜』

雄二の台詞に私は少し呆れた顔をする。

『貴様は友人である明久に理不尽な目に遭わせておきながら……………』

「ふざけるな!!! あんなバカでカスな野郎とは友達だと思ってねえ!!!」

この状況で明久を罵倒する雄二は大物なのかバカなのかよく分からなかった。

『……………お前がここで反省したら見逃してやろうと思ったんだけどな』

「（ハッ!）……………い…いや、すまなかった。俺も今更ながら明久に  
対して凄く悪かったと思ってる……………だから……………（何とかこの妖怪か  
ら抜け出して逃げ切ってやる!!!）」

雄二は私に取り繕うかのように言いながらも、内心では逃げようと  
画策しているが……………。

『……………言い忘れていたけど……………私はお前の頭の中を覗いてい  
るから、考えている事は分かるよ? お前ってホントに最低だな』

私は軽蔑の眼差しを送りながら見ていた。

「て…てめえ!!! 人の頭の中を覗いてんじゃねえ!!! 人権問題だぞコラ!!!」

『明久を散々な目に遭わせている貴様のようなクズ野郎に人権もクソも無いと思うが』

「俺の人生を陥れているてめえにクズ呼ばわりされたくねえ!!! このカス野郎が!!!」

『………… お前の命は私が握っていると言うのに、よくそんな台詞を言えるな? 自分で自分の首を絞めてるんだぞ』

「ハッ!!! し…しまった!!!」

私が指摘すると、雄二は私に対する怒りの余りに自分を見失っていた事に後悔していたがもう遅かった。

『どうやらお前には反省の色と言うのが微塵も見当たらないようだな。だったら遠慮なく貴様を処刑してやる』

「ま…待て!!! 俺が悪かった!!! だから…………」

『今更謝った所でもう許しはしない。ローズ…………やれ』

「はあ〜い! 分かりました〜! (ズイツ!)」

「!!! や…止める!!! 俺は(ブチユツ!!!)…………!!!」

「…………!!!」

私の指示でローズは雄二の唇を目掛けてキスをした。

「（ジュルジュルジュル！！！！）」

「~~~~~！！！！（ジタバタジタバタ！！！！）」

ローズはキスをしながら雄二の口を無理矢理開かせて舌を絡ませる。当然、雄二は抵抗をしているが無駄な事であった。

そしてローズが雄二とキスをして1分後……。

「ジュルジュルジュル！！……プハアッ！！……あ~~~~この子の唾液が美味しかったあ~~~~！！」

「……（ピクッ）……（ピクッ）……（ピクッ）……」

ローズがキスを終わると、雄二は完全に虫の息状態になっていた。

『よくやったローズ。それじゃあ次は指定の部屋でお楽しみと行くか』

「待ってました！ この子をじっくりとワタシ好みにしちやいますよ~~~~！！」

『そうか』

待ち切れないと言わんばかりのローズに私は笑みを浮かべていた。

『それじゃあ雄二を案内しま~~~~す！！！！（パチンッ）』

「楽しみねえ〜!! (ピシュツ!)」

私が指を鳴らすと、ローズと雄二の姿が消え……。

『フフフフフフフフ……ハハハハハハハハ……アーツハ  
ツハツハツハツハ!!!! (ピシュツ!)』

狂った様な笑い声を出す私も姿を消したのであった。

坂本雄二 奈落の底に堕ちる ? (前書き)

今回の話はグレートレンジャーにやったのと同様に物凄く気持ち悪いのでご注意ください。

坂本雄二 奈落の底に墮ちる ？

『（ピシユツ！）ククククククク……あ〜〜楽しみだな〜』

私は遅れながら、ローズと雄二を連れて行った部屋に到着すると…。

「お待ちしていましたわあ、旅人様」

「……待ってましたわあ〜〜！」「」

目の前には私の部下であるオカマ達のリーダーであるローズとその他のオカマ達が私を歓迎した。

『雄二はどうした？』

「あの子でしたらあそこにいますわ」

ローズが指をさすと、その先にはベッドの上で両手足を鎖で縛れて横になって気絶している雄二がいた。

『フフフフ……よくやったよ。それじゃあ前回と同様に雄二を好きにする前に私の指示に従ってもらおうよ』

「分かりましたわあ」

「……了解しましたあ」「」

私がローズ達に条件を言うときにすぐに承諾してくれた。

『よし、まずは雄二を起こすか（スタスタ）起きる雄二（パチンツ！）』

「！……ここは!？」

私はベッドで気絶している雄二に近づきながら指を鳴らすと、雄二はすぐに目覚めた。

『お早う雄二、気分はどうだい?』

「旅人!! てめえよくも俺を!!」

『フッフッフ……いいザマだよ雄二』

雄二は目覚めてすぐに私を睨んで来たが、私は全然恐く無く、寧ろ笑みを浮かべていた。これから起こる惨事を思うと笑いが止まらないのだから。

「てめえ! 俺にあんなエイリアンとキスさせやがって!! 絶対許さねえぞ!!!」

『妖怪の次はエイリアンか……ローズに失礼極まりないぞ』

「あんな化け物に失礼も糞もあるか!？」

と、ローズに大変失礼な事を言っている雄二だが……。

「だあれが化け物ですってえ……!？」

「「「ローズ様を侮辱するのは許しませんよ〜〜！！！！」」」

「ぎゃあああああ〜〜〜！！！！！！！！ 化け物がさらに増え  
た〜〜！！！！！！」

私の後ろにいるローズとオカマ達を見て雄二は絶叫とも言える悲鳴  
をあげた。

『おい雄二、それ以上私の部下を罵倒するのは許さんぞ？』

「てめえの目は節穴か！？ あんな化け物を見て何とも思わねえの  
かよ！？」

『……………そりやまあ最初は驚いたけど、今は恐くも何とも無い。  
それにコイツ等は見た目は酷いが、実はかなり良い奴等だぞ』

フオローとも言えない私の言葉に……………。

「酷いですわあ〜旅人様あ〜（ウルウル）」

『……………ああスマンスマン。私が悪かったよ』

ローズは私を涙目で訴えて来たので、私はローズに謝罪した。

「…………………………ウプツ！（気持ち悪過ぎる！！！！）」

涙目になったローズを見て雄二は吐きそうになったのを見て私は顔  
を顰める。

『雄二、お前さっきから失礼極まりない事ばかりしているな……………



『やはりお仕置き確定だ』

「何でそうなる!? ってかお仕置きって何だよ!? あれ以上の事を俺に何かさせる気か!？」

『ローズ達! 配置に付け!』

「人の話を聞けよ!？」

「くくくはあゝゝゝい!」「くくく」

雄二の言葉を見殺した私はローズ達に雄二が寝ているベッドの周りに立つ様に指示を出す。

「くくく準備OKですわあゝゝ!」「くくく」

『よろしい。では次にお前達の踊りを雄二に見せてやれ……ヒモパンを脱いでな』

「!!! や…止める!!! ソイツ等は唯でさえ気持ち悪いのにそんな物を見られたら俺は死ぬ!!!」

『見ただけで死ぬ人間はいないから大丈夫だよ(スツ)』

「だったら何でサングラス掛けてんだよ!？」

『これは単にローズ達の大事な所を見ないようにするサングラス。ローズ達に対する気遣いだよ』

サングラスをかける私に雄二は即座に突っ込むが、私は気遣いだと



『おやおや、ローズ達の踊りを見て吐きながら気絶するとは……  
ただどね雄二、そう簡単に気絶しては困るよ（パチンツ！）』

「！！！！ て…てめえよくも！！！！」

私が指を鳴らすと雄二は目覚め、雄二の嘔吐物で汚れていたシーツが新しく替わった。

『言つたる？　ローズ達と遊んで貰うつて。お前が何度も気絶した所で、私が即座に起こしてやるから』

「~~~~~！！！！ この外道！！　てめえには良心と言う物が存在しねえのか！？」

『はて、何を言ってるのかさっぱり分からないなあ。つてか私ばかりを見ていないで前を見たらどうだい？』

「え？　……………ギヤアアアアアアア！！！！！！！！！！」

雄二がローズ達を見ると勃起したアレが雄二の目の前にあった……  
それも至近距離で。

「~~~~~ああ~~~~~もつと見てえ~~~~~」

「んなもん見たくねえ~~~~~！！！！（ジタバタジタバタジタバタ！！）  
つてか何だよこの鎖！！　全然外れねえぞ！！」

必死に暴れて逃げ出そうとする雄二であったが鎖を外す事が出来なかった。



「了解しました〜！ あ…ああ…」

「は〜い…あ…ああ…」

ローズ達は雄二からちよつと離れて、勃起したアレを自分達で握り始めた。

「（\$’%）#\$\*…ハツ！…お…おい待てお前ら！！ 今度は何をする気だ！？」

「これからあなたにいい物を送る準備よ…あ…ああ」

「ワタシ達が貴方に美味しい飲み物をあげるわ…ああ…」

「…！！…よ…止せ！！そんな事したら俺はマジで死んじまう…！！」

ローズ達のやりたい事が分かった雄二は死が迫っているかの如く顔が青褪めまくりながら止めると言う。

『大丈夫だよ雄二。せ（ピー！）を顔にかけられた位じゃ死にはしないから』

「てめえは俺をどこまで陥れたいんだ〜！？」

『聞くまでも無いだろう。地獄の底…いや奈落の底まで叩き落してやる』

私がサディスティックな笑みで言うと、雄二は完全に退路が絶たれ

て絶望し始めると……。

「（も…もうこの手しかねえ!!!）頼む旅人!!! 俺が悪かった!!! 翔子を生涯愛すると誓うから勘弁してくれ〜〜!!!」

『!?!!』

雄二は何か思いついたかのような顔になった途端、本気で私に命乞いとも言える程の懇願をすると、私は目を大きく見開く。

『……………ほう、霧島にプロポーズをねえ……………その言葉は嘘じゃないだろうな?』

「本当だ!!! アンタの目の前で俺は翔子にプロポーズをする!!! だからコイツ等を今すぐ止めてくれ!!!」

ローズ達がアレを握っている最中、雄二は涙を流しながら私に言うてくる。

『（ふむ……………頭の中を覗いているが、どうやら本気で霧島にプロポーズをするみたいだな）……………良いだろう、だがもう一つ条件がある。明久を今後酷い目に遭わせないと誓うか?』

私が雄二を試すように条件を突きつけると……………。

「誓う!!! 何でも誓うから化け物共をすぐに止めてくれ!!!」

『……………これは本気みたいだな（あの雄二が泣いて私に頼むとは）』

涙を流しながら懇願する雄二に私はこれ以上は止そうと思いはじめた。

『……………いいだろう、その涙と覚悟に免じて許してやる。と言う訳でローズ達！ そこまでだ！！』

「ええ！？ もうちょっとで出そうだったのに！！」

「……酷いですわ旅人様！！」

「た…助かった……」

私はローズ達に中断の指示を出すと、雄二は九死に一生を得た顔をする……………ローズ達は不満顔でだったが。

『お前達には別の相手を用意してやるから、それまで少しの間は我慢している』

「……そんなあ……！！」

そして私はサングラスを外すと……………。

『雄二、お前の覚悟を見せてもらった。その証として今から霧島にプロポーズをしてもらうぞ、いいな？』

「ああ！！ プロポーズをするから今すぐこの鎖を解いてくれ！！」

『よし、それじゃあ今から鎖を外そう（スッ）』

私は鎖を外す為に指を鳴らそうとしたが……………。

「ごめんなさい旅人様！！ ワタシもう我慢出来ません！！」

「……ワタシも……！！」

『な！？ ちょ……ちよつと待てお前等！！ 私の命令に……』

「お……おい！？ 約束が違うぞ……！！」

ローズ達は私の命令に背いて、アレを雄二の顔に近づけさせた。

「も……もう出る……！！」

「……出ちゃっ……！！」

「#&”%！\$#’\$&”&#\$（）\$’&！……！！……！！……！！」

『あちゃ…… やっちゃったよ……』

そしてローズ達のアレは雄二の顔を目掛けて欲望をぶちまけ、それを見た私は頭に手を置きながら雄二の悲惨な末路を見ていた。

「……」

『……ダメだこりゃ……』

モロにローズ達の欲望を顔に当たった雄二はピクリとも動かず虫の息状態であった。

『お前等……私の命令に背くとはいい度胸しているじゃないか、あ  
あ？（ジロツ！）……』



「……（ビクッ！）……も…申し訳ありません旅人様」「…私の睨みに先程まで豪快であったローズ達は打って変わり、縮こまりながら怯えて謝ると……。」

『私の命令に背いたお前達には罰として暫く謹慎してもらおう。文句は一切受け付けんぞ、いいな？』

「……はい、旅人様の仰せの通りに」「…」

すぐに頭を下げながら私の命令に従うのであった。

『……とは言え、まだ満足しきれていないお前達が謹慎中にまた私の命令に背きそうだから、他の奴等の相手をさせてやる。それ以降は必ず姿を現さず謹慎する事』

「……はい、分かりました」「…」

ローズ達は自身を戒めながら私の指示に従う。

『よし、それじゃあお前達にはコイツ等の相手をして貰う（パチンッ！）』

私が指を鳴らすと……。

「な…何だ此処は！？ ってさすらいの旅人！！ 貴様の仕業かってぎゃああああ！…！！」

「……さすらいの旅人！！ 今すぐここでぎゃああああ！！」



坂本雄二 奈落の底に堕ちる ? (後書き)

バカな事をした坂本雄二とFFF団には死を!!!!!!!!!!

## 合コン物語

時間は夕方の5時過ぎ。

私は公園で今回の合コン参加者を待っていた。

『ん〜まだ来ないかな〜？ ……お！ 来た来た』

私が辺りを見回していると、よく知っている2人である……。

「遅れてすまない」

「こんにちは」

来牙と絵梨が来たのであった。

『やお二人さん、よく来たね。ってか珍しいな、指定の時間より早めに来る君達がギリギリに来るなんて……何か遭ったのか？』

「それが……家の爺さんがな」

「旅人さんの合コンに参加させろって凄く五月蠅くて……」

『……………あの爺か』

遅れた理由を聞いた私は凄く顔を顰める。

『まあ奴が此処に来た所で即刻追い返すつもりだったが……それで、爺はどうした？ 姿が見当たらないが……』

「婆ちゃんが爺さんを黙らせたって言えば分かるか？」

『ありがとう、それだけですぐに分かった。お婆さんには感謝しなきゃな』

恐らく、駄々を捏ねた爺に辟易したお婆さんが暴力と言う名の説得をしたのだろう。

「お父さんは物置部屋で監禁状態になっているよ」

『うんうん、お婆さんのやる事は凄く正しい。正に“臭い物に蓋をする”だ。で、後は明久と秀吉とムツリーニが来れば……』

「旅人さん！！俺様もいるぜ！！」

『……………翔、何でお前がここにいる？』

翔のいきなりの登場に私は再び顔を顰めると……。

「スマン旅人さん、此処に来る途中で翔に会って……」

「合コンの話をしたら、絶対行くなって無理矢理付いてきて……ゴメン」

来牙と絵梨が申し訳無さそうに謝っていた。

『翔、お前が来た所でどの道は参加出来ないぞ？』

「そんな冷たい事を言うなよ旅人さん！俺様とアンタの仲じゃな

いか！（バシバシ！）」

『……………痛いんだが』

「気にすんなって！！（バシバシ！）それより旅人さん、今回の合コンには勿論カツが出るよな！？（バシバシ！）」

『……………（怒）』

翔の余りの凶々しさに私は頭に青筋を浮かべる。

「翔の奴は旅人さんがキレる寸前なのに全然気付いていないな」

「何で遊佐君はあそこまで凶々しいんだろっね？ まるで参加するのが当然と言わんばかりな横柄な態度を取っちゃって……………」

「翔の態度に旅人さんは何か仕出かしそうだな」

来牙と絵梨も翔の行動に呆れており、来牙は絶対にタダではすまないだろうと直感する。

『……………翔、お前はこの間のグレートレンジャー主催のパーティーで散々楽しんだ筈だろ。今回の合コンには出る必要は無いんじゃないか？』

「ソレはソレ！ コレはコレだ！ 今回の合コンは可愛い女の子がいるんだろ？ だったら俺様に参加しないと女の子達に失礼極まりないぜ！—」

『……………（自意識過剰極まりないな）』

「……………（どうやってたら、あんな解釈が出来るんだ？）」

「……………（まあ遊佐君だし）」

私と来牙と絵梨は内心で完全に呆れていた。

『……………豪語している所を悪いが、翔は出れない事に変わり無  
いから今すぐ退場して貰うよ（スツ）』

「旅人さん！！ アンタが何を言っても俺様は…（トンツ）あ？」

私が翔の額に右の人差し指を当てて…………。

『文月学園に行つて学園長に愛の告白でもして来い』

「……………分かったぜ！ バーさん！ 待ってるよお〜！！ 俺  
様のハートをアンタにぶつけてやるぜ〜！！（ダダダダダダ〜  
〜〜〜！！！！）」

暗示を掛けると、翔は学園長に愛の告白をする為に文月学園へと向  
かったのであった。

『よし！ これで邪魔者はいなくなった』

「……………旅人さん、アンタ翔に平然と恐ろしい事をやらせる  
な」

『アイツは弄り易いからねえ〜。それにギャグキャラだし』

「そんな身も蓋も無い事を言つなよ」

『来牙だってそう思ってるでしょ?』

「.....」

「言い返せないよね、来牙君.....」

『沈黙は肯定と受け取るからね』

来牙は私の言った事に反論が出来なかった為、無言であった。

と、そんなやり取りをしている時.....。

「すいませ〜ん！ 遅くなりました〜ん！」

「遅れてすまないのじゃ〜！」

「.....すまない、遅くなった」

明久と秀吉とムツツリーニが漸くやって来た。

『ふむ.....やっと来たか』

「明久はともかく、秀吉とムツツリーニが遅れるなんて珍しいな」

「まあ良いじゃない来牙君、これで全員揃ったんだから」

そして公園には私が呼んだメンバーが全員揃う。



『これで全員揃ったな……よく来たな』

「ごめん旅人さん、集合時間に少し遅れちゃって……」

『玲を誤魔化すのに大変だったんだろ？』

「……よく分かりましたね」

私が明久が遅れた理由を当てると、明久は驚いた顔をしながら正解と言った。

「どうして分かったんですか？」

『大体想像出来るからな……それにこう言ったイベントに関して絶対早く来そうな明久が遅れるのは、必ず玲が絡んでいるだろうと容易に予想が出来る』

「……まあそうですね。でも誤魔化せたのはいいけど、もし今回の合コンで姉さんや姫路さんや美波に知られたら凄く恐ろしい目に遭いそう……」

明久は後の事を考え、玲達にお仕置されるのを想像すると顔が物凄く青褪める。

『安心しろ明久、その時は私の方で手を打っておくから。お前は心置きなく合コンを楽しむといい』

「ほ……ホントですか？」

『私が明久にこれまで嘘を吐いた事があるかい？』

「……………そうですね。旅人さんだったら安心ですよね」

『ふふふ……………そう思ってくれて何よりだよ』

明久は私の言葉を信じて漸く安堵してくれた。

けれど明久が不信がるのも仕方ない。何しろ明久はこれまで学校だけでなく家でも散々酷い目に遭っているのだから。バカ共（姫路＋島田＋雄二＋FFF団＋玲）によって。もし私が明久の立場だったら、完全に人間不信に陥る自信がある。いや、私だけでなく誰でも人間不信になるだろう。

とりあえず明久は信じてくれたので、私は次に秀吉へと話しかける事にした。

『秀吉、君も明久と一緒に遅れるなんて珍しいね』

「ワシも明久と一緒に明久の姉上殿を誤魔化していたのじゃ」

『……………』

秀吉の遅れた理由に私は無言になる。

『……………大変だったでしょ？』

「うむ。あれ程まで嘘を付いたのは生まれて初めてじゃ」

『ハハハ……………後は私に任せておいて』

恐らく、かなりの嘘八百を並べたのだろう。流石の秀吉も玲の相手をするのは悪戦苦闘だと思つ。

『それにしても悪いね秀吉、急に呼び出して』

「別に構わんのじゃ。旅人殿が明久の事を思ってくれるだけでワシは嬉しいのじゃ」

『そうかい、だったら私も呼んだ甲斐があつたね』

と、ここまでは何とも無い会話だったのだが……

「じゃがのう旅人殿……（ギョツ！！）」

『いつ！！ ひ…秀吉君、痛いんですけど？』

秀吉がいきなり私の耳を思いっきり引っ張ってきた。

「ワシと明久の關係を知っておきながらも合コンに連れて行くことするのは少しばかり許せないのじゃ（ギョウウウ〜！！）」

『アイタタタタタ！！ そ…それは悪かつたから許して！！』

秀吉が怒るのは尤もである。秀吉は明久の恋人にも関わらず、私が勝手に明久を呼び出した事に怒っているのだろう。もし今回の合コンで明久が他の女の子が好きになったと知れば、秀吉は怒り狂って真つ先に私を殺しに来ると予想出来る。それを防ぐ為に私は秀吉を呼んだので、耳を引っ張られても甘受している。

「（ギョウウウ〜！！）」ワシは常に明久の傍に居させて貰うのじゃ、

文句は無いじゃろう、旅人殿？」

『はい、どうぞ自由に……』

「なら良いのじゃ（スッ）」

『イテテテテ………』

秀吉はやっと私の耳を離してくれど、私は秀吉に引つ張られた耳に触れる。

「見るよ絵梨、旅人さんが弱く見えるぞ？」

「うん、初めて見たよ。旅人さんがあんな下手に出てるなんて」

『（ほっとけ！！ こっちにはこっちで事情があるんだよ！！！！）』

勝手な事を言っている来牙と絵梨に私は内心で突っ込むと、最後にムツツリーニに話し掛ける。

『ムツツリーニ、お前が遅れ気味なんて珍しいな。どうして遅れたか聞いてもいいか？』

「………写真の整理をして遅れた」

『写真の整理？ そんな理由で？』

「………俺だって時々そう言う事はある」

ムツツリーニの遅れた理由に私は何故か信じられなかった。

いつもは一通り準備をするムツツリーニがそんなつまらない理由で遅れる筈が無い。そう思った私はムツツリーニを少し引っ掛けてみると……。

『……もしかして、久々に会う愛奈ちゃんの写真でも見て気を取られてた？』

「……！！……（ブンブン）」

ムツツリーニは顔が赤くなりながらも否定しているが、私には予想通りの反応だった。

『そして以前見た生おっぱいとその感触を思い出したって所かな？』

「……！！（プシャアアアアア……！！）」

「む……ムツツリーニ……！！ しっかりするんだ……！！」

『……やはり貧血で少々遅れて来たか』

これもまた予想通りにムツツリーニはまた愛奈の胸を思い出した為に事により鼻血を噴出した。そんな倒れたムツツリーニを明久が介抱する。

「旅人さん……！！ ムツツリーニを殺すなんてあんまりだよ……！！ ムツツリ商品が買えなくなっちゃったじゃないか……！！」

「明久の発言はどうでもいいとして、折角の合コン前にムツツリーニを再起不能にしたら不味いだろっ」

『スマンスマン、ちょっと確認したかったただだよ。大丈夫、すぐに戻すから（パチンツ！）』

「…………ハッ！　ここは？」

私が指を鳴らすとムツツリーニは息を吹き返した。

「ムツツリーニ！　大丈夫かい！？」

「…………俺は今まで何を？」

『都合のいいように忘れているな……………まあいい。それは後で教えてあげるから、取り敢えずは合コン会場へ向かい……………』

と、私が先導して合コン会場へ行こうとすると……………。

「旅人さ～～ん！！！！！！」

『愛奈ちゃん！？　何で此处に！？　君は現地にいる筈じゃ……………』

愛奈が突然私たちの前に現れた。

「良かった～～！　まだここにいてくれて」

『良かったじゃ無い！　何で君が此处にいる！？』

「現地で待つより、旅人さん達と一緒に行くこうかと思って。それに……………真っ先に会いたい人もいたしね（チラッ）」

愛奈は理由を言った後、ムツツリー二と来牙を見る。

「カメラマン君と宮永君、久しぶり 会いたかったよ」

「……久しぶりだな江藤」

「アンタは相変わらずだな」

「……！！（何で来牙君がこの人を知ってるの！？）」

愛奈がムツツリー二と来牙に挨拶をしていると、絵梨はムツとした顔をしていた。

「……………ムツツリー二と来牙が羨ましい。あんな胸が大きくて可愛い子と知り合いだなんて（ボソッ）……………」

「明久よ、何か言ったかのう？」

「（ビクッ！！）……………は……ははは……………何でも無いよ秀吉」

明久が不穏な発言をすると秀吉が恐い笑みを浮かべて見ていた。

『（愛奈ちゃんが来ただけでこれか……………先が思いやられるよ）』

そして私は、全員を誘導して合コン会場に向かった。

## 合コン物語（後書き）

現在の合コンの参加者は、

宮永兄妹、吉井明久、木下秀吉、ムッツリーニ。

そして私のオリキャラである江藤愛奈です。

次回は新たなオリキャラ……と言っても似非オリキャラですがお楽しみ……！！！！



## 合コン物語 ？

私は全員を連れて合コン会場へと向かっていた。

「旅人さん、合コン会場って言うがどこでやるんだ？」

『来れば分かるよ』

「宮永君、行けば分かるから」

「……………（ギョウー）」

絵梨は愛奈を牽制するかのように来牙の腕に抱き付いている。

「……………えっとお……………宮永君の妹さんだね？ 何してるの？」

「気にしないで下さい」

「じゃあ何でボクを睨むのかな？」

「別に他意はありませんので気にしないで下さい」

「……………そう（そんな事言われても説得力が無いんだけどね）」

愛奈は絵梨の威嚇とも言える睨みにどう対処すればいいか分からなかった。私にそつと耳打ちをする。

「旅人さん、どうして絵梨ちゃんはボクを目の敵にするんですか？」

（ボソボソ）「」

『絵梨の事は放っておけ。そして今回は余り来牙に近づいて誘惑するようなからかいは止めておく事だ（ボソボソ）』

「で…でも、久しぶりに宮永君に会ったんですし…（ボソボソ）」

『下手に来牙に近づいて誘惑したら、妹の絵梨からキツイお仕置きを食らう事になるよ。それでも良いのかい？（ボソボソ）』

「……分かりました（ボソボソ）」

愛奈が私に近づいて耳打ちをしている最中、絵梨は先程まで愛奈を睨んでいたのが嘘のようにしなくなった。

『と言う訳で、今回はムツツリー二を中心に相手をしな。ムツツリー二にも会いたかったんでしょ？』

「はい」

『聞き分けのいい子で助かるよ』

聞き分けのいい愛奈に私は安堵すると、愛奈は次にムツツリー二へと近寄り……。

「ねえカメラマン君、ボクに会えて嬉しい？」

「……別に嬉しくは無い」

「またまたあ、照れちゃって」



「明久よ、もう忘れてしまったのかのう？　ワシが嫉妬深いと言っ  
のを……（ギユウ！）」

恐い笑みを浮かべながら明久の腕を掴み抱きしめた。

「……ごめんなさい。僕は秀吉が一番大好きです」

「分かれば良いのじゃ」

『（何か恐妻家みたいなやり取りだ……まあ穏便に済んでるから  
いけど）』

明久と秀吉を見てそう思ってしまった。これが姫路や島田だったら  
絶対に地獄の拷問という名の制裁を下されているだろう。それに比  
べたら明久と秀吉のやり取りは天国の様に見える。

そんなこんなで歩いている最中、私たちは目的地に着いた。

『ここが合コン会場だよ』

私が建物に向かって合コン会場と指をさすと……。

「ふん、レストラン&バーか。レストランはいいが、バーはちょ

つとな……」

「旅人さん、あたし達は未成年なんだけど」

来牙と絵梨は少し難色を示し……。

「でも結構いい店じゃない？」

「洒落た感じがするのじゃ」

明久と秀吉は良好であり……。

「……俺は写真さえ取れる場所なら何処でもいい」

「カメラマン君は撮影以外の事に関しては何処でもいいんだね。まあ君らしいけど」

ムツリーニの反応に愛奈は苦笑して見ていた。

『バーは気にしないで、メインはレストランの方だから。それに此処はレストランがメインの店でバーはおまけみたいな所だ。未成年の客だつて結構来るよ』

「だつたらいいがな」

「それだつたら、あたしも問題無いです」

来牙と絵梨はレストランがメインだと分かると安堵する。

『このレストランの料理は洋食中心だけど、品数は豊富だよ。そ

れに結構美味しい』

「ホントですか！？　じゃあ僕は一杯食べちゃうよ！　家ではあまり大して食べてないから……」

『そう早まるな明久、今回のメインは合コンで女の子達と……』

「旅人殿？」

私が明久に言っている最中に殺気を込めて私を呼んだ秀吉に……。

『……………ゴホンッ！　明久、注文しておくから一杯食べなさい』

「分かったよ旅人さん！　よし！　今日は一杯食べるぞ〜！」

コロッと変わるかのように、食べ物の話へと戻した。

「やっぱり旅人さんって木下君相手だと弱いね」

「旅人さんは秀吉に狙われたからな」

「……………それは誤解だったか」

「旅人さんの意外な弱点を見つけちゃった」

好き勝手な事を言う絵梨・来牙・ムッツリーニ・愛奈であった。

そんな時に店のドアから……

「おかしいですねえ〜、そろそろ来る頃なんですけど……………あ！　遅

「いですよ旅人さん！」

一人の美人な女性が見つけたので近づいて来た。

「一体何をしていたんですか!？」

『スマン明菜。少々遅れた』

「もう! 時間厳守って言ったのは旅人さんじゃないですか!？」

『いや〜ちよつといろいろあつてねえ〜』

私が明菜と呼ぶ女性と話していると……。

「ね…ね…ね…ね…姉さん!？」

「はい？」

「な…何で姉さんが此処にいるの!？ ま…まさか僕をここで止めを刺す為に……!」

明久は明菜を見て姉の玲と勘違いしていた。

「お…おい……何で玲が此処にいるんだ？」

「吉井君のお姉さんは連れて来てない筈だよね？」

「な…何故明久の姉上殿が……」

「……明久、お前の犠牲は忘れない」

「え？みんなどうしたの？」

来牙と絵梨と秀吉も明久と同様に勘違いし、ムツツリーニは明久に黙祷をし、愛奈は全然分らない顔になっていた。

『（これはまた予想通りな反応をしてくれるねえ〜）』

私は明菜と愛奈を除く全員を面白く見ていた。

「あの……何故君は私を姉さんと呼ぶんですか？ 私と君は初対面の筈では……」

「姉さん！！ 僕を殺しに来たんだね！？」

「ですから、一体何を仰っているんですか？」

「ああ〜！！！！ もう死んだ〜！！！！（ガシッ！）酷いよ旅人さん！！！！ 僕を騙すなんて！！！！」

明久は涙を流しながら私の胸倉を掴んでグラグラと揺らしていた。

『明久、とりあえず落ち着いて話を聞け』

「僕がこれから三途の川に飛ばされるのに落ち着けるわけ無いよ！！」

「（ガシッ！）旅人殿！！ お主は明久に何て事をしたのじゃ！！」

今度は秀吉も加わって私を責めていた。



『2人とも（スッ）』

これじゃあ埒があかないので私は明久と秀吉に……。

『落ち着け（トンツ×2）』

「「あ……………」」

額に指を当てて沈静の暗示を掛けると落ち着いた。

『勘違いしているから言っておくけど、あそこにいるのは明久の姉の玲じゃない。私の友人の明菜だ。明菜、すまないが自己紹介を頼む』

「はあ……ではとりあえずそうしましょう。初めまして皆さん、吉田明菜と申します。以後お見知りおきを（ペコッ）」

明菜は自己紹介をしながら礼をする。

『因みに明菜は玲と違ってちゃんとした常識人だ』

「あの、何ですかそれは？」

「旅人さん、どういう事？」

『明菜・愛奈ちゃん、こちらの話だから気にしないでくれ』

「「「？」」」

明菜と愛奈は頭に私の言っている事が全然分からないと言った感じの顔になる。

と、そんな時……。

「……………はあっ!?!」「……………」

私を除く玲の事を知っている全員は素っ頓狂な声を出したのであった。

「……………今度は工藤に続いて玲のそっくりさんかよ」

「しかも吉井君のお姉さんと違って常識人」

「これ程の度肝を抜かれたのは初めてじゃ」

「……………どっちにしてもいい被写体である事に変わりはない」

「……………ハハハハハ……………姉さんが常識人だったら、僕はどれだけ幸せだったんだろう」

5人はそれぞれ思った事を口にしていた……………明久だけはやたらと悲しげな雰囲気醸し出しているが。

「あの〜旅人さん? あの子達は何故私を見てあんな事を言っているのですか?」

「吉井君だけが何故か悲しげな顔をしていますけど」

『……………2人とも、とりあえず明久のことはそっとしておいてやれ』

「「はあ……………」」

私の台詞に全く分からない明菜と愛奈であった。

合コン物語 ? (後書き)

先ずは吉井玲のそっくりさんの吉田明菜でした~~~~!!!!!!

旅人『言っておきますけど、グレートレンジャーのマツハ吉田とは一切関係ありません!!』

## 合コン物語 ?

漸く全員が落ち着いたので、私たちは店に入った。

「しかしまあ、玲似のそっくりさんがいたとはなあ……」

「あたし、目が点になったよ」

「ワシもじゃ」

「……いい被写体だ（パシャパシャ）」

「……うつつ、吉田さんが女神様に見えるよ」

席に座った来牙・絵梨・秀吉・ムッツリーニ・明久は私の隣に座っている明菜を見ていた。

因み席順は以下の様になっている。

絵梨 来牙 土屋 秀吉 明久

テールブル

空 空 愛奈 私 明菜

「え〜と……つまり私はあの子のお姉さんだと勘違いされていたんですね？」

『そつ言つ事』

「吉井君のお姉さんが明菜さんにそっくりだなんて……ちょっと会ってみたいかも」

『愛奈ちゃん、それは明久の命に関わるから止めなさい』

愛奈が恐ろしい事を言い出したので私はすぐにストップを掛ける。

「え？ 旅人さん、どうして会っただけであの子の命に関わるんですか？」

『……………ねえ明菜、もし君が明久の姉だとする。例えば明久がエロ本を持っていたら明菜はどうする？』

「質問を質問で返さないで欲しいんですが……………」

『いいから答えて』

「はあ……………年頃の男の子ですからそう言うのは持っていてもおかしくは無いですし、私は別に何もしません」

「そうですよ。至って普通じゃないですか？」

質問に答える明菜に、何を当たり前な事と言ってくる愛奈であったが……………。

『まあ普通はそうなんだけど、玲は……………いや、君そっくりのお姉さんは明久がエロ本を持っているだけで……………散々殴った後に屋上へ連れて行き、十字架で磔にするんだよ』

「……………」  
私が答えると明菜と愛奈は無言になった。

『おまけにエ口本を見た際には死を覚悟しなければいけないみたいだよ』

「……………そんな事で？」

「……………嘘ですよね？」

信じられない顔をしながら私に聞くが…………。

『残念ながら真実だよ。信じられないなら明久に聞いてみな？』

「……………」

私が真実だと告げると、また無言になる明菜と愛奈であった。

「あれが本来の反応だよな」

「そうだね。もしあの人が玲さんだったら至極当然の様に言い切るし」

「……………（パシャパシャ）」

来牙と絵梨は明菜の反応を見て、本当に常識人だと分かったみたいだ。

ムツツリーニはまだ写真を撮っているが…………。

「吉井君……ボクは今凄く君に心底同情するよ」

「吉井君、君がそんな辛い目に遭っていたなんて……思わず涙が出そうになりました」

「あ……アハハ……どうも……」

「もし何か遭った時は此方へお越し下さい。何時でもご相談に乗りますよ（スツ）」

明菜は明久に名刺を渡す。

「え〜と……吉田さんってセラピストだったんですか？」

「はい、まだまだ未熟ですが、精一杯相談に乗ります。どうぞ遠慮なくお話下さい（ニコッ）」

「……女神が僕の目の前にいる」

「女神だなんて……吉井君は大袈裟ですよ」

「そんな事はありません。僕にとって貴方は女神です」

「もう、煽てた所で何も出ませんよ？」

「……………」

秀吉は明久と明菜が楽しそうに話をしているのを見てムツとした顔になっている。



『おいおい、そんな恐い顔をするなよ秀吉。明久だってまともな女性と話すのは久しぶりなんだから大目に見なよ』

「……………ふんじゃ（プイツ）」

『あらら……………拗ねちゃったよ。おい明久』

「何ですか？」

『秀吉が拗ねちゃったから、何とかして』

「え？ どうしたの秀吉？」

そして明久が秀吉を宥め始めると、愛奈と明菜は私に話しかけてくる。

「旅人さん、公園に集まった時から気になっていましたけど……………」

『なんだい？』

「吉井君と木下君って随分と仲がいいですね？」

「私も気になっていたんですが、あの2人を見ると親友以上の関係が見受けられるんですが？」

まるで付き合っているんじゃないかとの質問に私は……………。

『そりゃあ2人は付き合っているからね。恋人同士だから』

「「……………ええっ!?!」」

質問に答えると、愛奈と明菜は驚愕した。

「そ…それってホントですか？ ボーイズラブって本でしか見たこと無かったけど……………」

「わ…私も驚きました。まさか2人がそんな関係だなんて……………」

『説明するのも面倒だから、これで理解してくれ（パチンツ!）』

「「!?!?!」」

私が指を鳴らし、明菜と愛奈に明久の過去を頭の中で見せると……………。

「……………そう言う事だったんですね。吉井君が木下君を好きになるのが分かりますよ……………ボクも吉井君の立場だったら絶対にそうしてる」

「……………成程。クラスメイトでの吉井君の味方は木下君だけだったんですか」

明久と秀吉が付き合っているのかをすぐに理解し……………。

『分かっただろ？ 2人が付き合うことになったのかを……………』

「「はい、それはもう」」

『だったらあの2人の仲を応援してやってくれ』

「「分かりました」」

揃って応援する事になった。

「所で旅人さん、俺と絵梨の向かいの席は空いているが他にも誰か来るのか？」

「ん？ ……ああ、そう言えばそうだね。明菜、あの2人は如何した？」

「えっと……一人は既にここに来ているんですが……」

「だったら何でここにいないんだ？」

「その……貴方に会う為におめかしをしていて」

「……………そんな事をする必要は無いと思うが（って事はあの子か）で、もう一人は？」

「学校の部活で少し遅れて来るそうです」

「そうか……………なら仕方ない、遅れて来るんだったら開催すると旅人さ〜ん!!!（ギユウツ!）……………」

私が開催宣言をしようとしたが、座っている私の後ろから突然一人の女の子に抱きつかれた。

「全く、君はどうして何時も私に抱きつくんだ？」

「だってだって、旅人さんに会いたかったし」

私に抱き付かれた女の子は、絵梨にそっくりであった……違う所は髪型がツインテールになっているぐらいであるが。

「（ガタツ！）お…おい！？ 何で絵梨が！？」

「嘘！？ 今度はあたし！？」

来牙は立ち上がって絵梨と綾ちゃんを見比べ、絵梨は鏡を見ているのではないかと錯覚していた。

「うわぁ、今度は絵梨ちゃんのそっくりさんだ」

「これはまた驚いたぞい」

「……またいい被写体だ（パシャパシャ）」

明久と秀吉も驚いており、ムツツリーニは驚きながらも綾ちゃんを撮っていた。

「？ ねえ旅人さん、皆がアタシを見ているんだけど何で？……つてアタシがもう一人いる！？」

『はいはい、ちゃんと説明してあげるから。とりあえず自己紹介してくれろ？』

「は…はい」

女の子は絵梨を見て驚いていたが、私が自己紹介する様に言つとすぐに離れ……。

「え〜っと、お騒がせしてすみませんでした。初めまして、アタシは宮本綾です（ペコッ） 旅人さんに合コンに誘われて参加しました。皆さんの事は旅人さんから聞いています。どうか仲良くして下さい」

向かいの席にいる来牙達に自己紹介をした。

「あ…ああ、此方こそよろしく」

「ど…どうも」

「よろしく、宮本さん」

「よろしくじゃ」

「……此方こそ」

来牙と絵梨は戸惑いながら挨拶をし、明久・秀吉・ムツツリー二はすぐに順応して普通に対応する。

『にしても結構似ているな……………絵梨、ちょっと綾ちゃんの隣に立ってくれるかな？』

「う…うん（ガタッ）」

私は絵梨に綾ちゃんの隣に立ってもらおうように言つと、絵梨はそれに従つて綾の隣に立つ。

『フム……………髪型以外はそっくりだねえ』

綾と絵梨を見比べて、顔も体型も瓜二つだった。

『実は双子でしたって嘘を吐いても騙されそう……』

「おい旅人さん、アンタは他にもそっくりさんの友人がいるのか？  
もしかして、もう一人の奴も誰かのそっくりさんなのか？」

『さあ？ どうだろうね？』

「はぐらかすな、ここまで来たら教える」

『フフフフ……それは来てからの楽しみだよ』

「それにしても、ホントにアタシそっくりなんですねえ」

私と来牙のやり取りを他所に、綾は不思議な感じで絵梨を見ている。

「何か、双子みたいですねアタシ達」

「そ…そうかな？」

「うん！ よく似ているからお姉ちゃんかと思っちゃった。えっと、  
名前は確か……」

「絵梨だよ。宮永絵梨」

「宮永さんですか。よろしくお願ひします」

「そんな畏まらなくていいよ。絵梨って呼んで」

どうやら絵梨と綾ちゃんはすぐに仲良くなったみたいだ。

「じゃあ絵梨ちゃんって呼んでいいですか？」

「いいよ、あたしも綾ちゃんって呼ぶから」

「よろしく、絵梨ちゃん」

「こちらこそ、綾ちゃん」

『それじゃあ仲が良くなったから席に座ってもらいましょうか』

「はい」

絵梨と綾は上機嫌で席に座り、綾ちゃんは絵梨の向かいの席に座ったみたいだ。……しかしこの後、綾の発言で私と愛奈と明菜以外が大絶叫することになるとは誰も思わなかった。

「そう言えば絵梨ちゃんって何処の学校に通ってるの？」

「あたし学校に通っていないんだ。バイトしながら家事の手伝いをしていて……」

「え？……バイトって確か高校生ぐらいの年じゃないと出来ない筈だよな？」

「何を言ってるの？それが普通だけど……」

「えっと……絵梨ちゃんってアタシと同じ年じゃないの？」

「はい？」

絵梨と綾の話が段々食い違っているみたいだったので……………。

『あ〜〜絵梨、ちょっと君に言う事がある』

私が2人の話に割って入った。

「何を？」

『綾ちゃん、向かい側の席に座っている人達は君の事を誤解しているみたいだから、年齢を言ってみよう』

「……………やっぱり勘違いされていたみたいだね（ガタッ）……………えつとお、アタシは……………」

「……………？……………」

向かい側に座っている来牙達は何故立ったのかわからなかった。しかし……………。

「アタシは年齢は12歳の小学6年生です」

「…………………………」

綾の発言により来牙達は急に無言となった。

『愛奈ちゃん・明菜・綾ちゃん、数秒後にデカイ声が出ると思っから耳栓をどうぞ』



「は…はい（キュッ）」

「やっぱりそうなりますよね（キュッ）」

「ううう…絵梨ちゃんと同じ年だと思ってたのに…」（キュッ）」

私が耳栓を用意すると、3人は耳栓を耳に詰めた数秒後…。

「……嘘……」

「」

大絶叫が響いた。

## 合コン物語？

来牙達は大絶叫を響かせた後、放心状態になっていた。

『いや〜〜凄く響いていたねえ〜。もしここが貸切じゃなかったら、他の客が絶対文句を言ってるよ』

「あ…危なかった。ボク達の耳が危うい事になるかと……」

「旅人さんが耳栓を用意しなかったらどうなっていたか…」

「うっうっ〜〜やっぱりアタシって老けているのかな？」

私・愛奈・明菜・綾はそれぞれ思ったことを言っていた。

「は…葉月ちゃんと大して変わらないのに」

「……これはまた度肝を抜かれたのじゃ」

「……小学生であるスタイル、素晴らしい（パシャパシャ）」

「旅人さん、アンタの友人はビックリ箱の集まりだな」

「……あの子が小学生……あたしと同じ体型なのに小学生……」

明久・秀吉・ムツツリーニ・来牙はまだ驚いていたが、絵梨は物凄く意外そうな顔になりブツブツと呟いている。

『綾ちゃん、そんなに落ち込むこと無いよ。皆はただ君が小学生だ』

って事に驚いているだけだから。決して老けているとかじゃない』

「でもアタシ……また……」

先程まで元気に振る舞っていた綾が嘘みたいに落ち込み、何か思い出したかのように怯え始めた。

『大丈夫だって、目の前にいるお兄さん達は君が思っている様な酷い人じゃない。君の学校のクラスメートの連中とは全然違うから安心して』

「う……うん……」

ここで少し、綾の過去について少し説明しましょう。

綾が小学生で、体型が絵梨と殆ど同じと言っただけで分かると思います。綾は小学校の生徒の中では一番大きく、周りから浮いている子であったのだ。体型だけでなく仕草も大人っぽいので、クラスメイトからは散々な嫌がらせをされていた。悪口を言われたり、物を隠されたり、果ては苛めまで発展する始末だ。私が綾と知りあった時には完全に心が塞がっている状態であったが、何とか今のようになり元気な女の子に取り戻させた。

当然、私は綾に嫌がらせをしたクラスメイト達に何故そんな事をしたのかを聞いてみると、それは実に下らない理由であった。男の子の大半は綾の事が好きだったみたいで苛めたい衝動に駆られ、女の子は自分が好きだった男子を綾に奪われたのが気に入らなく苛めていたみたいだ。衝動を抑えることが出来ない子供故の行為であったが、私はそれを許すことが出来なかった。苛めていた子供達には私の方で、今まで綾が味わった体験を頭の中に叩き込ませた。

その後は泣きじゃくりながらごめんなさいと言い続ける子が続出し、今更とんでもない事をしたと反省している子供達に私は呆れた。自分も同じ体験をしなければ絶対分らないのだと言う事に。私は子供達に『また綾ちゃんを苛めた時は覚悟しておきなよ?』と脅しをすると、子供達は面白い位に顔を真っ青になって私の言う事を聞き、以降は綾ちゃんを苛める事は無かった。

とまあ話は脱線してしまっただが、つまり綾は自分の体型にコンプレックスを抱いていると言う事である。小学生である綾を合コンに呼んだのは、来牙達と仲良くなって貰う為であったのだ。

しかし先程、来牙達が大絶叫した時に、また苛められるのではないかと勘違いしている綾であった。

『おい絵梨、いつまでも呆けているな。綾ちゃんがショックを受けているよ』

「えっ? あ! ご…ゴメン綾ちゃん! あたしったら……」

「いいですよ……別にアタシは……他の人とは違って老けていますし……」

絵梨を正気に戻すために指を鳴らすと、塞ぎこみそうになった綾に絵梨は謝る。

「そんな事無いよ綾ちゃん! 綾ちゃんは凄く可愛い女の子だよ!」

「え?」

「綾ちゃんみたいなのは、あたしの妹にしたい位だよ！」

「……そう思いますか？」

「うん！ 綾ちゃんもっと自分に自信持ちなよ！ 凄く可愛いんだから！」

自分で自分を褒めている様な感じである絵梨であったが、本心に言っていた。

『綾ちゃん、絵梨は本心で言っているよ』

「……ありがとう、宮永さん」

「そんな畏まらなくていいよ、絵梨ちゃんって呼んでよ」

「でも、年上ですし」

「あたしはそんなの気にしないから。何だったらお姉ちゃんって呼んでいいよ？」

「……じゃあ、絵梨お姉ちゃんって呼んでいいですか？」

「いいよ！ あたしも妹が出来たみたいで嬉しいから」

そして絵梨と綾は更に仲良くなり……。

「さつきはごめんね綾ちゃん、大きな声を出しちゃって」

「すまなかつたのじゃ」

「……申し訳ない」

「俺もすなまかった」

「い…いいですよ、もう気にしていませんから」

明久・秀吉・ムツツリーニ・来牙は謝ったが、綾は気にしていないみたいだ。どうやら綾は元気を取り戻し、完全とは言わないが吹っ切れたみたいであった。

「よかったですね旅人さん、綾ちゃんにやっと心から話せるお友達が出来て」

「相手は全員年上だけだね……まあ最初は綾ちゃんを合コンに連れて行くのはどうかと思ったけど、うまくいったみたいだね」

『絵梨には感謝だな』

絵梨だったら綾とはこれからも仲良く出来そうだと私は思った。

「ねえ旅人さん、合コンはまだ始めないの？」

『そうだな。では開催し「ごめん旅人さん！遅れました！！」よう……』

綾と話している最中に後ろからセーラー服姿の女の子が私に声を掛けてきた。

『君か、明菜から部活で遅れてくるって聞いたからもう始めようか』

「思ったんだが……」

「何とか部活を早めに終わらせて来ました!!」

『フツ……どうせ仮病を使ったんでしょ？ 君は演劇部のホープだから相手を騙すのは造作も無い事だからね』

「ひ……ひどいですね。それが必死で此処に来た私に言う台詞ですか！？」

『事実を言っただけだ』

もう気付いているだろうが、目の前にいる女の子が遅れてきた参加者である。

と、私と女の子のやり取りに……

「え？ ……何で？」

「あ……明久が目の前に？」

「……違う、あれはアキちゃんだ」

「………最後は明久のそっくりさんかよ」

「違うよ来牙君。吉井君の女装姿のそっくりさんだよ」

向かい側の席に座っている明久達は口が開けっ放しの状態になり……。

「これで全員揃ったね」

「ですが仮病を使って早退するのは感心しませんよ」

「また同じ手を使ったんだね」

愛奈・明菜・綾は普通は普通に話している。

明久達が呆然としている理由はもう分かっているが、あの女の子は明久の女装姿のアキちゃんにそっくりである……アキちゃんと違う所は胸が大きく強調している所だけだが。

「所で旅人さん、相手の人たちは何故私を見て呆然としてるんですか？ 特に右の人が信じられない顔になっていますけど……」

「ん？ ……どうした明久？ 真美ちゃんが自分に似て声も出ないか？」

「ちょ……ちよつと旅人さん！！ 何でその人が私に似てるんですか！？」

「……………」

女の子は私に怒鳴っているが、明久は放心状態になって聞いていない。

『じゃあ証拠を見せてあげるよ（パチンツ！）』

「え？ ……わ……私が目の前にいる……！？」



私が指を鳴らして明久にアキちゃんのカツラをかぶせると、女の子は明久と同様に信じられない顔をして絶叫を響かせた。

『ハツハツハツハツハ！ 驚いたろ？』

「ま……まさかカツラをかぶせただけで私にそっくりだなんて……ねえ君！ 演劇部に入らない！？ 私と似ているんだったら双子役で……」

「明久をナンパするのは止めて貰おうかのう」

明久に近づく女の子であったが、秀吉が間に入った。

「え？ ここにも可愛い女の子が……」

「ワシは男じゃ……！」

「ええ……！？ 嘘……！？」

真美は秀吉を見て驚いているが……。

「は……はは……はははは…… はははははははは……」

「あ……明久？」

「どうしたの？」

明久から笑い声が聞こえたので、秀吉と真美は明久を見る。

『（さて、明久が大絶叫をするまで3……2……1……）』



## 合コン物語 ?

明久を何とか落ち着かせた私は真美に自己紹介させようとした。

『それじゃあ自己紹介をお願いね』

「はい。皆さん初めまして、沢井真美です。高校2年生で演劇部に入っています。以後よろしく願いします」

自己紹介をした真美は席に座ると、私は合コンを開催する為に立ち上がって……。

『乾杯の音頭を執らせて頂きますので、皆さんグラスをお持ち下さい。それでは………かんぱい!』

「………かんぱい!!!(カンッ!)」

乾杯と言うと、全員はグラスを持って近くにいる人と乾杯をした………明久は少々ヤケクソ気味であったが。

因みに私を含めた全員はジュースだ。明菜は大人であるが、周りに合わせる為にジュースにして貰っている………後から酒を頼むみたいだが。

『それじゃあ心ゆくまで楽しんでください!!!』

私は席に座ろうとしたが………。

「ねえ旅人さん、その席に座っていいですか？ 吉井君や木下君と話してみたいので」

『はいはい、じゃあ席交代っ』

真美が席を替わってくれと言って来たので、私は席を移動した。

因み席順は以下の様になっている。

絵梨 来牙 土屋 秀吉 明久

テーブル

綾 私 愛奈 真美 明菜

私が座っていた席の向かいが秀吉から来牙に替わったのである。

それではここからグループ別に分けます。

明久・秀吉・真美・明菜の会話シーン

「しっかし驚いたわね。カツラをかぶせただけで私にそっくりだなんてビックリ。君、女装の素質あるわ。私が保証する」

「……………そんな事言われても嬉しく無いよ」

「沢井と言ったか、明久を侮辱するのは止めてもらおうじゃ」

真美は褒めていたが、明久には非情な言葉であり涙を流していたので、秀吉は真美に注意した。

「木下君の言うとおりですよ真美ちゃん。貴方は褒めているつもりでしょうけど、それは男の子にとって心の刃に等しいですよ」

「そうですか？ 私は本心で褒めているんですが……………」

「一度じっくり教えて差し上げましょうか？ 今度の休みに2人つきりで（ニコツ）」

「……………いいえ、遠慮します（汗）」

明菜がニコリと笑みを浮かべて真美を誘ったが、真美は冷や汗をかきながら謹んで断る。

「ごめんなさい吉井君、真美ちゃんが大変失礼な事を言って。私が代わりに謝ります」

「え……………いや、別にいいですよ。そんなに気にしていませんから」

「そうですよ明菜さん、吉井君もそう言ってますし……………」

「真美ちゃんは反省していないみたいですので、じっくりと話し合う必要がありますね」

「ごめんなさい吉井君、私が悪かった」

真美が少し調子に乗って言うと、明菜がすぐにまた対処したので即座に明久に謝った。余程、真美は明菜と2人つきりで話すのが嫌だと見える。

「（ああ……明菜さんって本当に素晴らしい人だ。僕の姉さんとは大違い）」

明久が明菜を神聖視するかのように見ていると……

「明久よ……」

「え？ なんだい秀吉？」

何やら秀吉がムスツとした顔で目を細めながら明久を見ていた。

「お主は料理を食べるのが目的で来たのじゃろう？ 早く旅人殿に料理を頼んで貰ったらどうじゃ？」

「あ……そうだったね。ごめん、すっかり忘れていた」

秀吉に言われて明久はメニュー表を取って何を頼もうかとメニューを見て考え始める。

「あらあら、吉井君はお腹が空いていたのですか？」

「ええ、家では余り食べていなくて。だから今日はたくさん食べようかと」

「それはそれは（クスクス）」

明久の食欲旺盛振りに明菜は口元に指を当てながら小さく笑っていた。

「まあ男は一杯食べなくちゃいけないわ。私も目一杯食べさせて貰うとしましょうか。ねえ吉井君、私とどれくらい食べられるか競わない？」

「ほえ？」

真美の提案に明久は何故？と言うような顔をする。

「私も今日の合コンで一杯食べるつもりで来たんだけど、吉井君も一杯食べるんだったら競おうかと思って。どうかしら？」

「沢井、明久は競うつもりは無いぞい。ただ料理を食べる為に来たのじゃ」

「そうですね真美ちゃん、そんな事をする必要はありません」

秀吉と明菜が真美に注意をするが……。

「いいですよ」

「明久！？」

「吉井君！？」

明久が競うのを承諾すると、2人は驚いた顔をした。

「明久、お主は何を考えておるのじゃ」

「そうですねよ吉井君。真美ちゃんと競う意味などありません。それに真美ちゃんのことですから、勝った際に吉井君に何かをしたいと思います」

「酷いわね明菜さん。私はただ勝ったら吉井君に演劇部を入れて貰おうかと」

「お主、まだ諦めておらんかったのか……」

本音を言う真美に秀吉は呆れながら見ていた。

「だって吉井君は私にそっくりだから、今度の舞台で双子役には持つて来いだし」

「明久は演劇に関して全くの未経験じゃぞ？ 演劇はそんな簡単な物では無いと言う事ぐらいお主も知っておる筈じゃ」

「沢井さん、秀吉の言うとおり僕は経験無いよ？」

「大丈夫よ、そこは私が吉井君と2人つきりでミツチリ演技指導するから」

「えー!? (沢井さんが僕と2人つきりで?)」

「何じゃと!? それはダメじゃ!!! (明久と2人つきりなど絶対に皆さんのじゃー!!!)」



真美の発言に秀吉は即座にダメ出しをすると、真美は不思議そうな顔をする。

「何で木下君が断るの？ 私は吉井君に言ってるんだけど」

「ダメと言ったらダメじゃ！」

秀吉は恋人の明久を渡したくないと言う理由で必死に断っていた。

「木下君には聞いていません。ねえ吉井君、私が勝ったら演劇部に入って……」

「真美ちゃん、悪ふざけはそこまでにしなさい」

真美が再度明久に言うと、明菜はすぐに間に入ってきた。

「明菜さんまで木下君の味方ですか？ 私は吉井君に聞いて……」

「ダメです。それ以上、木下君を困らせるのでしたら……貴方がこれまで演劇で失敗した恥ずかしい過去をここで暴露しますよ？」

「……！ それは言わないで下さい……！」

先程まで何とも無いような顔をしていた真美が急に立場が悪くなっただかのように焦りだす。

「でしたら、もう吉井君と競ったり誘ったりしないで下さい。いいですね？（ニコッ）」

「はいはい」

恥ずかしい過去を暴露すると言われたのが相当堪えたのか、真美は大人しくなったのであった。

そんな中、明久と秀吉が明菜に話しかける。

「あの〜吉田さん？ 沢井さんの恥ずかしい過去って何ですか？」

「何を失敗したのじゃ？」

「それはですね……」

「わ〜〜！〜！ わ〜〜！〜！ お願いですから言わないで下さい！！

（バツ）」

明菜が言おうとした瞬間、真美は即座に明菜の口を両手で塞いだ。

「沢井さんが必死に止めるなんて……」

「余程恥ずかしい事じゃろうな……… まあそれはいいとして。明久よ、もうメニニューは決まったのか？」

「え？ …… ああ、うん。これから頼む所だよ」

「では早く旅人殿に頼むのじゃ」

「そうだね。旅人さ〜ん！！」

明久は私に向かって大声を出して呼ぶと、私は反応して明久達の方へ近寄る。

『なんだい？ 急に呼び出して。来牙達とは良い所で話していたんだが……所で真美ちゃんは何で明菜の口を塞いでいるんだい？』

「明菜さんが私の過去を言おうとしていたので……」

『……ああ、そう言う事ね』

私はすぐに真美のおかしな行動をしていた理由が分かった。

「旅人殿は知っておるのか？ 沢井は過去に演劇で失敗した恥ずかしい過去と言うのを……」

『一応ね』

「旅人さん！！ 言わないで下さいよ！！」

秀吉の問いに答えると、真美は私に言わせないように釘を刺してくる。

『はいはい、分かってるよ。それに明菜は言わないと思うから、そろそろ手をどけたら？』

「（コクッ）」

「……………じゃあ離します」

真美は明菜が言わないと首を縦に振ると手を離れた。

『それで明久、私に何の用だ？』

「料理頼んでもいいですか？」

『ああ〜そう言えばそうだったねえ。で、何が食べたいんだい？』  
私は用件を聞いて思い出すと何を食べるか聞く。

「え〜と…ステーキとパエリアとハンバーグとビーフシチューとエビフライを」

『随分と食べるねえ、明久以外で注文は？』

秀吉達に聞いてみたが……。

「ワシはクリームコロッケを頼むのじゃ」

「私はトマトリゾットをお願いします」

「私はとろーストビーフとスープスパゲッティとグラタンを」

『真美ちゃん、食べ過ぎは良くないよ』

真美の注文する量に私は突っ込んだ。

「いいの旅人さん、ちょっとやけ食いたい気分ですから……」

『……………あつそう、じゃあ注文するね。すいませ〜ん！』

私は近くにいた店員に明久達が頼んだメニューを持って来るように言った。

『それでは料理が来るまで少々お待ち下さい』

私は明久達の用件を済ませると席に座って再度、来牙達と話し始める。そして15分程経つと料理が来て、明久と真美はすぐに食べ始めたのであった。

## 合コン物語 ? (前書き)

注 “合コン物語 ?”の方はアッチの方に載せています。

決してサブタイトル表記ミスではありません。

## 合コン物語 ?

時間を少し遡って、私・来牙・絵梨・綾の会話に入ります。

「ねえ旅人さん、今度の休日に予定入ってる？」

「特に無いよ。何処かに行きたいのかい？」

「うん！ 旅人さんと一緒に買い物したいの！」

「私と？ 別に構わないが」

「ホント！？ ありがとう旅人さん！（ギュウツ！）」

「綾ちゃん、嬉しいのは分かったから抱き付かないでくれ……」

綾は嬉しい余り私に抱きついたが、私はすぐに離れる。それを見ている来牙と絵梨は綾をじっと見ていた。

「見た目は絵梨にそっくりだが、中身はホントに小学生だな」

「そうだね。綾ちゃんって旅人さんの前だと幼く見えるし」

「まるで父親と娘みたいだな」

「もしくは年上のお兄さんに甘える妹だね」

私と綾のやり取りを見て、来牙と絵梨は微笑ましそうに見ていた。

『綾ちゃん、今は私とじゃなくて向かいの2人と話さない』

「はい」

そして綾は来牙と絵梨の方に顔を向ける。

「え〜と……宮永さんのお兄さんに聞きたい事が……」

「何だ？ ……つてか俺の事をそんな風に呼ばなくていいぞ、敬語も必要ない」

「じゃあ……来牙お兄ちゃんって呼んでいいかな？」

「……別に構わないぞ」

少し間がありながらも承諾する来牙に綾は嬉しくなった。

「ホント！？ じゃあ来牙お兄ちゃんもアタシの事を綾って呼んで！」

「……分かった」

何故か綾と会話をしていると小さな絵梨と話している気分である来牙に私は茶々を入れようとす。

『なあ来牙、レスポンスが遅かったのは何故かな？』

「……何でもない」

『ふうん……何でもないねえ……（ニヤニヤ）』



「何だその笑いは？」

私がいやらしい笑みを浮かべると来牙は若干顔を顰める。

『べっつに〜』

「……………だったらその笑い方は止める。見てて不愉快だ」

『これは失礼』

来牙に注意されると私は笑うのを止めると……………。

「まあまあ来牙君、そう怒らない」

絵梨が来牙を宥めた。

「……………」

『スマン来牙、調子に乗って悪かった……………ん？』

来牙が無言で見てるので私が謝っていると、隣にいる愛奈とムツツリーニが何やら卑猥な話をしているのを聞こえた。

「だってこれからカメラマン君にエッチな事をしても倒れないから」

「……………」

『（全く愛奈ちゃんときたら……………ここには綾ちゃんがいるのに）』

私はテーブルの下でメッセージ入りの紙を出して、愛奈の頭目掛けて投げると……。

「(コツンッ)イタッ!」

命中すると、愛奈は紙を広げて内容を見た後に私にペコツと頭を下げた。

『(分かればいいんだよ)』

「何してるの旅人さん？」

『何でもないよ綾ちゃん、気にしないでくれ』

「？」

私の言っている事に分からない綾であった。

「旅人さんは綾ちゃんの事を考えてやったんだね(ヒソヒソ)」

「確かに隣の会話は綾には聞かせられないな(ヒソヒソ)」

来牙と絵梨は当然、隣の2人の会話を聞いていたのでヒソヒソと話しながら私の行動に納得している。

『それより綾ちゃん、来牙に聞きたい事があつたんじゃないの?』

私が話題を変えると綾は思い出したかのように来牙の方を見る。

「あ…うん、えっと……旅人さんから聞いたんだけど、来牙お兄ち

やんつて絵梨お姉ちゃんと恋人同士なんだよね？」

「「！！！（バツ！）」」

綾の質問に来牙と絵梨は焦ったかのように私を見てくるが……。

『心配するな、綾ちゃんは2人の味方だ』

「誰にも言わないし、それにアタシ……お兄ちゃん達の事を応援していますから」

「……………そうか」

「……………ありがとう綾ちゃん」

綾が味方だと分かり、来牙と絵梨は安堵した。

「だから2人が結婚式を挙げる時には絶対呼んで！アタシが代表してスピーチするから！」

『綾ちゃん、それはまだ先の話だから気が早いよ』

「それに俺達は結婚式を挙げれる立場じゃないからな」

「いいじゃない来牙君、可愛い妹の頼みを聞かないと」

「いや……………だから俺達は……………」

「公の場で結婚式を挙げなくても、誰もいない所で挙げればいいんだから」

「……………」

「綾ちゃん、あたしと来牙君の結婚式には必ずスピーチしてね？」

「うん！ 任せて！（ドンッ！）」

綾は大役を任されたかのように自分の胸を叩いた。

『良かったね綾ちゃん』

「うん！ アタシ合コンに来て良かった！ そうじゃなかったら絵梨お姉ちゃんや来牙お兄ちゃんに会えなかったから！」

『君が喜んでもらえて何よりだよ』

「旅人さん、アタシを合コンに呼んでくれてありがとう！（ギョウツ！）」

綾は私に感謝の表現を表しているかのように抱き付く。

『はあっ……………私に抱きつくのは、これで4回目だよ……………』

「いいじゃない旅人さん、あたしから見ると綾ちゃんの抱擁は羨ましいよ」

『……………まあ悪い気はしないが、こう言うのは私じゃなくて好きな男の子が出来たらやって貰いたいんだけどねえ……………』

「アタシは旅人さんが好きだよ？」

『……………綾ちゃん、私が言っている好きと君が言っている好きは違うんだよ』

「？」

『……………君が中学生になったら、私の言った意味が分かるから』

「……………旅人さんの言っている事がよく分からない」

『ふふふ……………いずれ分かるよ（ナデナデ）』

私は父親のように頭を撫で、綾は私の言っている事は分からなかったみたいだ。

皆さんも知つての通り、綾は私と会うまでに苛められていたので恋愛と言う経験が全く無かった。苛めていた男の子達の大半は綾の事が好きだったが、綾には自分を苛める対象にしか見ていなかったのが好かれていたという事には微塵も感じていない。だから私は綾に新しい出会いや恋愛をさせる為に日々奮闘中である。

「何かもう旅人さんは完全に綾ちゃんの保護者だよな？（ヒソヒソ）」

「一瞬、親子だと思った（ヒソヒソ）」

『（親子ねえ……………まあ私にとって綾ちゃんは娘も同然だけど）』

来牙と絵梨が小声で話していたが私はバツチリ聞き取っていた。

『そう言えば、まだ料理を頼んでいなかったね。綾ちゃん、何か食べたい物はあるかい？』

「え〜と……………コレ食べてみたい!」

『ハンバーグステーキね。来牙と絵梨は何を食べる？』

「俺は牛ヒレのステーキ」

「あたしはフォアグラのソテーで」

『……………随分と高い料理を注文するね』

堂々と高い料理を選択する来牙と絵梨に私は呆れ混じりの視線を送った。

「アンタの奢りなんだろう？ だったら高くても美味しい物を食わせて貰う。じゃなきゃ損だからな」

「あたしフォアグラって一度食べてみたかったんだよね〜」

『……………まあいい、それじゃあ……………』

私は料理を注文しようとウェイトラーを呼ぼうとしたが……………。

「旅人さ〜ん!」

『ん？ 明久か……………悪いけどちょっと席を外すね』

明久が私を呼んだので、私は席を離れ明久達の所へ行った……………

移動する際に、ムツツリー二と愛奈の姿が見当たらなかったが、敢えて気にしなかった。

そして私が席を外している間に絵梨は綾と話し始める。

「ねえ綾ちゃん、ちょっといいかな？」

「何？」

「今度の休日に旅人さんとショッピングに行くなら、あたしと来牙君も一緒に行っていいかな？」

「いいよ。絵梨お姉ちゃんと来牙お兄ちゃんも来るんだったらアタシ嬉しいし」

絵梨がショッピングに付き合おうと言うと、綾は大変嬉しそうな顔をしていた。

「おい絵梨、綾と旅人さんの買い物に俺達がいるのは無料だよ」

「そんな事無いよ、来牙お兄ちゃん」

『そうそう、私や綾ちゃんは全く気にしていないから』

と、いきなり私が会話に混ぜてきた。

「……随分と戻ってくるのが早いな」

『たかが注文でそんなに話が長引くわけ無いでしょ』

「……まあそれはそうだが（てつきり旅人さんが秀吉に八つ当たりをされていると思ってたが）」

来牙は私に対してかなり失礼な事を考えていた。

『ねえ来牙、何か失礼な事を考えていない？』

「気のせいだろ」

『……まあいい、取り敢えず料理は頼んだから少し待っていてくれ』

「はい」

「了解」

そして15分後に料理が来て、来牙と絵梨と綾はすぐに食べ始めた。

『（そういえば翔の奴は学園長に告白したのかな？）』

私は頼んだカツサンドを食いながら翔の安否が気になっていた。

おまけ

文月学園にて……。



「ばーさん！ 俺様の愛を受け取ってくれ……！」

「くそジャリの愛なんかいらないよ……！」

私に暗示を掛けられた翔は、学園長に告白をしていたが断られていた。

「じゃあこうなったら……最終手段だ（ガシッ！）」

「……！ いきなり何するんだいくそジャリ！？ ま……まさか……！」

翔は学園長の両肩を掴んでキスをしようとしたが……。

「……ギャアアアア……！！！！ 何で俺様が妖怪ババアにキスしなきゃいけないんだ……！！！？？」

「それはこっちの台詞だよ……！！！！」

学園長とキスする寸前に暗示の制限が切れ、翔は慟哭の如く叫んでいた。

## 合コン物語 ？

私達は頼んだ料理を食べ終わるとムツツリー二と愛奈が戻って来た……何やら2人もスツキリとした顔だったが、敢えて気にしなかった。何でそうなっていたのかは、裏の方を参照すれば分かるとだけ言わせてもらう。

全員がいるのを見計らって私はあるゲームをやるかと提案すると、全員は了承して皿やコップを片付けて真剣な顔をして待っていた。

『それでは………王様ゲームを始めるぞ………!!!!』

「……………イエー!!」「……………」

私が宣言すると、全員のテンションが上がった………来牙はあまり上がっていなかったが。

『それではルールを説明します！（ドンッ！）この箱の中には1～9までの数字と、“王”と書かれたクジがあります（ガサガサ）』

私は真ん中に穴が開いている箱をテーブルの上に置いてルールを説明しながら、箱の中に入っているクジを掻き混ぜる。

『王様のクジを引いた人は、他の番号を引いた人に命令が出来ます。例えば1番が王の肩を揉むとか、2番が3番にしつぺをするとか…』

…そして王様の命令は………』

「……………絶対!!」「……………」



「7番はボクだね」

「私が8番です」

「……………」

3番 綾 7番 愛奈 8番 明菜 1番 来牙であった。

『ほほお〜良かったね来牙』

「……………アンタ分かってやったんじゃないだろうな？」

『私がそんなアンフェアな真似をするわけ無いだろ。ほれ、早く王様の命令を……………』

「ちょっと旅人さん!!!」

ワタシが言っている最中に絵梨が抗議してきた。

「何で来牙君なのよ!?!」

『だから私は相手の番号を知らないって言ってるでしょうが』

「まるで狙ってやったかのように思えるんだけど!?!」

『もし狙ってやるとしたら君が持っている番号を言ってるし……………』

私が言っても絵梨は全然納得してくれなかったが……………。

「ダメだよ絵梨お姉ちゃん、旅人さんの説明を忘れちゃったの?」

「そつだよ絵梨ちゃん」

「ルールはちゃんと守りましょうね？」

「……………ぐうー」

綾と愛奈と明菜に言われて渋々と従う絵梨であった。

『では確認しておきます。王様の命令は……………』

「……………絶対!!」「……………」

揃った声の中に、来牙と絵梨は押し殺しているかの様に言っていた。

数分後……………。

3人に抱擁されて頬にキスをされた来牙は顔が赤くなっており、絵梨は私を殴ろうと言わんばかりに物凄く睨んでいた。

「ゴホン！ そ…それじゃあ2回戦を始めるか……………」

「来牙君……………随分と嬉しそうな顔をしているけど？」

「それは気のせいだ。それじゃあ……………せーのっ！」

『……………王様だ〜れだ!?』『……………』

「……………俺だ」

今度はムツツリー二だった。

「……………では3番と9番でポツキーゲームをして貰う」

『「何い!?!」』

3番 私 9番 明久 であつた。

「な…何で僕が旅人さんと!?!」

『お…王様の命令とはいえ、これは……………(チラッ)』

私は秀吉の方を見ると嫉妬の炎を燃やしながら物凄く睨んでいた。

「ダメだぞ旅人さん、ちゃんとやらないとなあ」

「そうだよ、王様の命令は絶対なんだから」

『おい2人とも……………それは仕返しのもりか?』

私が来牙と絵梨に聞いてみるが、2人は関係無いと言う感じで私にポツキーを渡そうとする。

「そんな事はどうでもいいから早くポツキーゲームをやりな」

「そうそう」

『……………(コイツら……………)』

絶対私に対する仕返しだと思った……………何故なら来牙と絵梨の顔が嬉



『（全く！…秀吉の誤解を解けたのに何でこんな目に…）』

言うまでも無いと思うが…私と明久がポツキーゲームをしている時に、秀吉は私の腕を掴んでいつでも関節技を仕掛ける様に準備をしていたのだ…もうこんな目に遭いたくない。

『はあっ……明久、掛け声を頼む』

「あ…はい。それじゃあ…せーのっ！」

『「「「「「「「王様だ〜れだ!？」」「」「」「」』

そして3回戦が始まり、王様のクジを引いたのは…。

「今度は私ですね」

真美が引いた。

「じゃあ…8番が5番に“結婚して下さい”とプロポーズをして」

「おいおい…」

「またアタシだ」

8番 来牙 5番 綾 であつた。

『真美ちゃん、何でそんな命令を出したか聞いてもいい?』

「演劇の参考になるかと思って」



『でも選ばれた2人は素人だよ?』

「それはそれでいいじゃないですか。それに……宮永君が何て言うか気になりませんか? (ボソボソ)」

『確かに……ほら来牙、早く綾ちゃんにプロポーズをしな』

真美の耳打ちに私は頷いて来牙に早くやるように言う。

「……え……え」と

「来牙お兄ちゃん、早く言ってよ」

「……あ……綾……お……俺と……結婚してくれ」

「(ギユウ!) 嬉しい来牙お兄ちゃん!」

「お……おい綾!? いきなり抱きつくなんて」

来牙はしどろもどろになって言ってたが、綾はちゃんと演じきっていた。

「宮永君、途切れ途切れになっていたからもう一回言ってね」

「言ったからいいだろ……」

「ダメ。私が良いと言つまで何回もやってもらつから」

「……」

「ちょ… ちょっと沢井さん！ もついいでしょ!？」

無言の来牙に突如絵梨が乱入して真美に抗議して来たが、真美は涼しげな顔をして言い放つ。

「宮永君の妹さんの絵梨ちゃん、悪いけど続けさせて貰うわ」

「何ですよ!？ いいじゃない！ 来牙君はもう命令通りにしたんだから!？」

物凄く納得が行かない絵梨であったが……。

『絵梨、真美ちゃんは一度言った以上は撤回しないから諦める。前にも言ったけど、王様の命令は絶対だよ』

「うっうっうっう!！」

私がルールの掟を言うと唸りながら引つ込んだ。

「じゃあ宮永君、TAKE2を」

「……………（勘弁してくれよ）」

そして数分後……。

来牙は綾にプロポーズをはっきりと言い、綾はまた嬉しそうに来牙に抱きついた。綾に抱きつかれている最中に絵梨と勘違いして欲情しそうになったが、絵梨がさり気なく引き止めると、真美は十分満足したみたいでOKを出した。

「来牙君、綾ちゃんに欲情しかけたでしょ？」

「気のせいだ」

「ホントにい〜？」

絵梨は来牙を問い詰めていたが、シレッと答える来牙だった。

『それじゃあ4回戦だ。せーのっ！』

「「「「「「「「「王様だ〜れだ!?」「「「「「「「「

「私ですね」

4回戦の勝者は明菜だった。

「それでは王の私が7番の肩を揉みます」

「ってまた俺かよ!？」

7番 来牙 であつた。

『おいおい明菜、命令する王が相手の肩を揉んでどうするんだ?』

「こっちが一方的に命令するのもどうかと思ひまして」

『ふ〜ん、優しい女王さまですね〜。部下に慕われそつ』

「ふふふ……では宮永君、こっちへ来て下さい」

そして明菜は来牙の肩を揉み始めた。

5分後……。

「よ…吉田さん、もういいから」

「そうですね？ まだ始まったばかりですよ」

「も…もう十分だ……（アンタの胸が当たってるんだよ！）」

「そうですねよ吉田さん！ 来牙君から離れて下さい！」

「……仕方ありませんね」

明菜は残念そうに肩を揉むのを止めて離れると、来牙は何故か安堵したかのような顔になる。。

「いいなあ～来牙、吉田さんに肩揉まれるなんて……おまけにあんな大きな胸を当てられて（ボソッ）」

「明久？」

「……！！ な…何でもないと秀吉……アハハハ」

明久の小声に反応した秀吉が目を細めて見ると、明久はビクツとしながらも何でもないように言っており……。

「……殺したいほど妬ましい！」

「だったらカメラマン君、後でボクがやってあげようか？」

「……………それはまたの機会に」

来牙を妬んでいたムツツリーニであったが、愛奈が言った途端に殺気が薄れ…………。

『ハツハツハツハ！ 来牙は随分と役得だねえ、羨ましいよ』

「旅人さん、アタシで良かったら肩を揉んで上げるけど？」

『それは良いねえ、綾ちゃんに肩揉みをされると私は嬉しいよ。今度お願いね』

私が大いに笑い飛ばしている、綾が肩揉みをすると言い出したので私は承諾したのであった。

「（アイツ等好き勝手言ってくるな）」

「ねえ来牙君、あたしが代わりに（胸を押し付けながら）肩を揉んであげようか？」

「……………いや、遠慮しておく（そんな事されたら我慢出来なくなる）」

来牙は絵梨の魂胆が見えていたので丁重に断った。

そして…………。

『それじゃあラストと行きましょうか！ せーのっ！』

「「「「「王様だ〜れだ!?!」「「「「「「「「「「「「

全員クジの中身を確認し、ラストの勝者は……。

「最後は俺だ」

来牙だった。

「命令内容は(チラツ)……1番が王を含めた2〜9番の全員が欲しがっている物を買ってやれ」

『!!! おい来牙、貴様私の番号を見ただろ!?!』

来牙の命令内容に私は即座に反応した……言うまでもなく1番は私だ。

「何の事かな? 俺はただ適当な番号を言ったただけだが……」

『嘘付け! 今チラツと私の番号を見てから言っただろ!?!』

「旅人さん、来牙君がそんな不正行為をするわけがないよ」

『(くっ! 絵梨の奴め……ここで来牙の味方をするか。だったらコッチにも手がある)』

ここで私が何を言っても絵梨が来牙を擁護するので私は諦める事にして、ある事を思いつく。

『……いいだろう、全員欲しい物があつたら私に言え!! 買ってやるぞ!?!』

私が買ってやると言った直後に全員は大いに喜んでいた。

『つとその前に来牙、お前にコレをあげるよ(ピラッ)』

「ん？ 何だこの写真は(スッ)……………ちよつと待て!!  
何でアンタがこの写真が持つてるんだよ!？」

私が来牙に渡した写真は、来牙と沢渡美咲が抱き合っている写真であつた。

「ねえ来牙君？ どうして来牙君が美咲ちゃんと抱き合っているのかな？ あたし詳しく知りたいな」

「落ち着け絵梨、これは単に……………」

絵梨は私達を無視して来牙を問い詰め始めた。

『それじゃあ来牙達は放って置いて、欲しい物を言っして下さい』

私は全員の欲しい物をリストに書き、翌日以降に届けると約束をすると合コンは終わって全員解散しましたとさ。

## オリキャラ紹介(前書き)

今更ですがオリキャラ紹介です……似非なオリキャラですけど。



## オリキャラ紹介

### 江藤愛奈

身長 工藤愛子と同じ位

体重 本人により秘密

バスト 87cm ウエスト 54cm ヒップ 82cm

外見 工藤愛子にそっくりの女の子であるが、違いは大きな胸と髪の色が黒である。

備考 工藤愛子と同様に保健体育の実技が得意な女の子。但し工藤愛子とは違い本当に得意。性格も工藤と似ており人をからかう事に關してはお手の物。

### 宮本綾

身長 162cm

体重 40kg

バスト 85cm ウエスト 55cm ヒップ 81cm

外見 宮永絵梨にそっくりな女の子。髪型はツインテール。

備考 小学6年生。ツインテールであるが決してツンデレではない。  
(真つ黒な) 絵梨とは違って純真無垢であり、気に入った相手には  
少し甘えん坊になる女の子。体型が他の同年の生徒と違って大き  
かった為に、以前までは苛めに遭っていた。

#### 吉田明菜

身長 165cm前後

体重 5……失礼しました

バスト Eカップ ウエスト 57cm ヒップ 86cm

外見 吉井明久の実姉の玲にそっくりな女性

備考 吉井玲とは違って常識人であり、母性溢れる女性。セラピ  
ストをやっており、彼女にカウンセリングをされた患者達は瞬く間に  
癒されていると言っかなりの経歴を持つ。

#### 沢井真美

身長 160cm前後

体重 本人により秘密

バスト 83cm ウエスト 56cm ヒップ 83cm

外見 吉井明久の女装姿 アキちゃんにそっくり女の子

備考 女優を目指す為に演劇部に所属して日々努力をしている女の子。性格は少々キツイ所があるが、気に入った相手には親身になって接し、目上の人には必ず敬語を使う。但し翔みたいな軽い男や、グレートレンジャー共の迷惑集団には一切の容赦はせず、自慢の格闘技(合気道)でスタボロにする。

ローズ

身長 190cm

体重 98kg

外見 鍛えに鍛え抜かれた筋肉を持ち、大変気持ち悪い化粧を施しているオカマ。

備考 私“さすらいの旅人”の一番の部下。普段はメイド服を着て町を徘徊している危険極まりない存在と周りから認識されて相手にされていないが、心優しきオカマ。以下同様に、3人のオカマがいてローズがリーダーである。

明久×葉月（前書き）

今回はほのぼの話です。

## 明久×葉月

とある休日、私は商店街にいた。

『さてと、明久の家にお邪魔する際の菓子折りを買ったから行くとしますか』

私は明久の家に行く為に瞬間移動をしようとしたが……。

「あ…あのー！」

『ん？』

後ろから声を掛けられたので振り向いてみると誰もいなかった。

『気のせいか……』

「下を見て下さいですー！」

『え？ ……あ…』

言われたとおり下を見るとツインテールの髪型をした小さな女の子がいた事に気付く。

『えっと……小さなお嬢さん、私に何か用かな？』

「小さなお嬢さんじゃありません！ 葉月ですー！」

私が見たまんまの姿で呼ぶと、女の子はすぐに自分の名前を言った。

『これは失礼。で、その葉月ちゃんが何故私に声を掛けたのかな？  
君とは初対面の筈だが……』

「え……えつと……あなたは……バカなお兄ちゃんと知り合いですよ  
ね!？」

『はい?』

女の子（以降は葉月）はいきなり訳の分からない事を言ってきたので私は首を傾げる。

『あの……“バカなお兄ちゃん”とは誰の事を指しているのかな  
?』

「バカなお兄ちゃんはバカなお兄ちゃんです!!」

『いやだから……誰の事? もっと具体的に言ってくれないと分からないよ』

葉月の言っている事がいまいち理解していない私は戸惑う一方だった。

「えつとお……お姉ちゃんと一緒の学園の生徒さんです!!」

『何処の学園の生徒だい?』

「文月学園です!!」

『文月学園ねえ……何処のクラスの生徒かまでは知ってる?』

私は段々と予想が付いてきたが、確認の為に葉月に聞いてみると……。

「確か……2年のFクラスでした!!」

『え〜つとお……“文月学園”・“2年のFクラス”・“バカなお兄ちゃん”ねえ……』

心当たりがありすぎた。何しろあそこにはバカばかりなのだから。

『う〜ん……一杯いすぎて特定しにくいよ』

「その中で一番すつごくバカなお兄ちゃんがいますです!!」

『ああ、明久の事か』

葉月が何とも分かり易い表現をしてくれたので私はすぐに特定できた。

『それで？ 明久の知り合いである私に何の用かな?』

「あの……その……葉月も一緒にバカなお兄ちゃんの家連れて行って貰えないですか?」

『何でだい?』

「バカなお兄ちゃんにお礼をしたいのです!」

『お礼ねえ……(この子はそんな悪い子には見えないから大丈夫か)』

付いて来な、案内するよ』

「はいです!」

私が明久の家に向かうと葉月も一緒に付いて来た。

『私の名は“さすらいの旅人”、旅人って呼んでね。葉月ちゃん、君の苗字は何て言うんだい?』

明久の家に向かっていている最中に私は名を名乗り、葉月の苗字を聞いてた。

「島田です。島田葉月です」

『へえ〜島田ねえ〜』

聞き覚えのある苗字に私はすぐに島田美波を連想した。

『もしかして君って島田美波の妹かい?』

「はいです! 旅人さんはお姉ちゃんを知っているんですか?」

『まあ一応は……(島田姉とは大違いだな)』

「お姉ちゃんはずるいです! いつもバカなお兄ちゃんに会ってい



るから……」

葉月は島田（美波）を羨ましがっているみたいだ。

『葉月ちゃんは明久の事が好きなのかい？』

「はいです！ バカなお兄ちゃんとはフィアンセですから！」

『……フィアンセ？』

「バカなお兄ちゃんとは結婚を前提としたお付き合いをしています！」

『………結婚式には是非呼んでね？』

「勿論です！」

『（もし秀吉がここにいたら私は絶対に殺されているな）』

今日の事は秀吉に黙ろうと誓う私であった。

場所は変わって明久の家の前のドア。

『じいじだよね』

「ここがバカなお兄ちゃんのお家ですか、葉月は初めてです！」

『じゃあ鳴らすよ（ピンポン！）』

“はい！今開けます！”

私が呼び鈴を鳴らすとドアの向こうから明久の声が聞こえた。

ガチャツ！

「どなたですか？ って旅人さんじゃないですか」

『やあ、遊びに来たよ』

「お久しぶりです！ バカなお兄ちゃん！！（ギョウツ！）」

「うわ！？ え？ は…葉月ちゃん！？ 何で君がここに！？」

葉月は嬉しさの余り明久に抱き付き、明久は葉月がいる事に大変驚いていた。

『会って早々明久に抱き付くとは……随分と葉月ちゃんに好かれて  
いるんだねえ明久』

「って言うか、旅人さんがどうして葉月ちゃんと一緒にいるんですか！？」

「商店街で菓子折りを買った後に葉月ちゃんと会ってねえ。ほれ明久、これが菓子折り（スツ）」

「あ……どうも……コレ高級なお菓子ばかりじゃないですか!？」

私が菓子折りの入った袋を渡すと、明久は葉月に抱き付かれたまま袋を持って中身を見ると高級菓子ばかり入っていた事に驚いた。

『どうせ明久の家にはお菓子類が無いと思ったから買ってきた』

「だからってこんな高級なお菓子ばかりを……勿体無くて食べられないじゃないですか!？」

『心配するな、私も食べるから』

「……貴方が食べる事前提で僕の家に来たんですか？」

『何を当たり前な事を……』

明久の発言に私が呆れていると葉月が急に会話に割り込んでくる。

「そんな事よりバカなお兄ちゃん！早く葉月を家に入れて下さいです!」

『ほら明久。葉月ちゃんもこう言ってるんだし、早く入らせてくれ』

「え……え」と

私と葉月は家に入りたかったが、明久が家に入らせるのを渋っていた。

何故なら……。

「あらアキ君、お友達ですか？」

玲が家にいたのだ。

『（そう言う事が……）』

「うわあ……綺麗なお姉さんです」

私は明久が渋っている理由が分かり、葉月は玲の美しさに目を奪われていた。

「ね…姉さん。そうなんだ、僕の友達が家に来て……」

「友達じゃないです！ ファイアンセです！！」

『「！！！！」』

葉月の発言に私と明久は不味いと直感しながら玲を見る。

「ファイアンセ？ ……アキ君、一体どう言う事ですか？ 姉さんの知らない間にファイアンセが出来たのですか？」

「ち…違つんだ姉さん！！ これにはちゃんと訳があつて……」

と、明久は玲に説明をしようとするが……。

「バカなお兄ちゃんとはファーストキスもしたです！」

『「（駄目だ葉月ちゃん！それはタブーだ！！）」』

葉月がまた（玲に対して）NGワードを言ってしまった。

「……………（ガシッ！）アキ君」

「待つて姉さん！！僕の話聞いて！！」

葉月の火に油を注ぐ発言に玲は明久の腕をガツシリと掴む。

「アキ君……………どうやら姉さんはアキ君にお仕置きをしなければいけません」

「何でそう言う事になるの!?!」

「心配しないで下さい。今日から毎日鞭打ち100回と屋上で吊るすだけですから」

『待て！ アンタ子供の発言を真に受けてどうする!?! ってかお仕置きは決定なのかよ!?! んな事したら明久は確実に死ぬぞ!?!』

「あら？ 貴方は以前にお会いした気が……………」

『そんな事はどうでもいいから今すぐ明久をお仕置きするのは止めなさい!! 姉以前に人として間違っていますよ!!』

私が何とか玲を止めようと説得したが……………。

「申し訳ありませんが、これからアキ君にお仕置きをしなければいけませんのでお引取り下さい」

『（駄目だコイツ、以前と同じで全く人の話を聞こうとしない!）』

言っても無駄だった。

「さあ行きますよアキ君（グイッ！）」

「（ググググググ！！！）待って！！ だから僕の話聞いて！！  
お願い旅人さん助けてえ〜！！！」

『言われなくても分かってるから』

玲はドアを閉めようとしたが……。

『（ガシッ）はいはい玲さん、ちょっと待ってくれませんかねえ〜  
？』

私がすぐに阻止すると顔を顰めた。

「何ですか？ 先程も申し上げましたが、これからアキ君にお仕置きをしますのでお引取り下さい」

『そうはいきませんよ、これから私と葉月ちゃんは明久の家で遊ぶんですから』

「……………」

『何です？』

玲が私の顔をじっと見てくるので聞いてみたが……。

「……………そう言えば思い出しました」

『何をですか？』

「貴方はアキ君と不順同姓交遊をしようと思いましたね？」

『……………（ブチッ！）』

勘違い極まりない発言に私は切れた。

『……………もういい。アンタにはさっさと退場してもらおうよ（スッ）』

「はい？（トンッ）」

私は暗示を掛けようと玲の額に人差し指を当てた。

『今日一日そこら辺をブラブラしている。そして家に帰って来た時には私と葉月ちゃんに関する記憶は全て忘れる』

「……………分かりました。アキ君、姉さんは出掛けますので夕飯はいりません」

「え？ あ……………うん、分かったよ」

「それでは行って来ます」

私の暗示に掛かった玲は掴んでいる明久の腕を離して出掛けていったのであった。

『よし、これで邪魔者がいなくなった』

「はあ~~~~助かったよ旅人さん。もう死ぬかと思つたよ」

『確かに私が助けなかったら、お前は確実に死んでいたな』

明久は心の底から安堵しながら私に感謝していた。玲の突然の行動に葉月は何がなんだか分からない顔になっている。

「あの〜旅人さん？ 綺麗なお姉さんはどこへ行つたんですか？」

『葉月ちゃん、そんな事は気にしないでいいから早く明久の家に入る。フィアンセの家に入りたかつたんじゃないの？』

「そうでした！ バカなお兄ちゃん、早くフィアンセをお家に入れてください！」

「そ…：そうだね葉月ちゃん」

フィアンセと言う単語に引つ掛かる明久であつたが、玲の事を誤魔化せるのだつたらいいだろうと思つて葉月を家に招き入れた。

明久は葉月が家に入るのを確認すると……。

「旅人さん、葉月ちゃんに何て事を言つんですか！？」

『別に子供の戯言なんだから気にする事無いでしょ？』

「そうですけど、もし恋人の秀吉に知られたら僕は殺されちゃいますよー！」

『秀吉が子供相手にムキになるとは思えないけど……（確かにそう



なりそうだな」』

口ではサラッとと言う私であったが、内心では明久の発言に同感だった。

『まあ今日の事は秀吉に言わなければいい事だし、早く入ろつや』

「……………ホントに言わないで下さいよ」

『分かってるって』

そして私は明久と一緒にリビングに向かった。

明久×葉月（後書き）

ほのぼのと思いきや明久の処刑寸前になるお話でした。

次回は本当にほのぼのになりますのでお楽しみに！！

明久×葉月 ? (前書き)

今回はちゃんとしたほのぼののです!!

それではどうぞ!!

明久×葉月？

『どうした明久、もうこれで終わりか？（カタカタ）』

「まだまだ！ 勝負はこれからですよ！（カタカタ）」

「バカなお兄ちゃん！ 頑張るです！」

明久と一緒にリビングで寛いでいる私と葉月は買ってきたお菓子を食べながらお茶を飲んで談笑した後、格ゲーの「BLAZBLUE」をしていた。葉月は明久の隣に座って明久を応援している。

『なあ明久、私が使っているキャラって何処かで聞いたことがある声なんだよね〜（カタカタ）』

「マコト」ナナヤですか？ 確かに僕も聞いた事がありますね（カタカタ）」

「葉月もどこかで聞いたことがある声です」

『うーん、何処で聞いたかな〜？（カタカタ）』

「思い出せませんね〜（カタカタ）」

私が話しながら対戦していると、明久は隙を見せたので……。

『よし！ ここだ！（カタカタカタ！）』

「ああっ！ しまった！」

決め技を放つと明久の使用キャラがやられ、私の使用キャラが勝利ポーズをとった。

「バカなお兄ちゃん、残念です」

「くそ〜〜！ まさかあそこでアストラルヒートを使うなんて…」

『ふう、今ので決まらなかったら確実に負けていたよ』

冷や汗を掻きながら勝利する事に安堵する私と、非常に悔しがる明久であった。

「今度は葉月ちゃんもやってみる？」

「葉月はゲームをするより見ている方が面白いからいいです」

「でもそれだと葉月ちゃんが仲間外れになっちゃうな〜」

「そんな事無いですよ、未来のお婿さんを応援するのは当然です」

「あはは……ありがとう葉月ちゃん」

『（ここにバカ3人（姫路+島田+玲）がいたらとんでもない事になっっているだろうな〜）』

私はあの3人が葉月の台詞を聞いたら、絶対に明久は拷問されているだろうと容易に予想する……そうなった所で私が即座に止めるが。

『そうだ明久、ここは人生ゲームをやるう。それだったら葉月ちゃんも参加できるから』

「あゝそうですね。でも、僕はそれ持ってませんよ？」

『心配ない、私が用意する（パチンツ）』

私が指を鳴らすと、ボードゲーム用の人生ゲームが出て来た。

「旅人さん凄いです！　どうやって出したんですか!?!」

『それは内緒だよ』

「えゝ!?!　教えて下さいです!」

『そんな事より葉月ちゃん、人生ゲームを始めるよ』

「あ！　葉月もやるです!!!」

葉月は私がどうやって出したのかを気になっていたが、人生ゲームを始めると分かった途端に忘れてやり始めた。

『ほれ明久、早くサイコロを振って』

「あ…はい（コロコロ）」

最初は明久であり、サイコロを振って人生ゲームが始まった。

15分後

『おい明久……いつまで借金地獄が続くんのだ？』

「くそ〜〜！！ 何で僕だけ運が無いんだよ！？」

『明久と違って葉月ちゃんは大金持ちだな』

「やったです！ 宝くじで1億円が当たったです！」

『私はサラリーマンと同じ収入だな〜』

30分後……。

『う〜む……恋愛運は大して無いな〜』

「旅人さんはまだ良い方ですよ。僕なんか全員女の子にフラれちゃってます」

「バカなお兄ちゃんは葉月がいるから気にしなくていいです！」

「あはは……ありがとう葉月ちゃん」

『よかったね〜明久。ゲームでは振られても現実には相手がいるか』  
『う』

「はははは……（僕には秀吉がいるんだけどな〜）」

1時間後……。

「やったですう！ 葉月が1番です！！」

『私は2位か……』

「葉月ちゃん凄いねえ、僕と違って大金持ちで恋愛運も高くて最高の人生だね」

『明久はその逆だな……』

「大丈夫です！ バカなお兄ちゃんは葉月が養いますから安心です！」

『はははは〜小学生に言われちゃったね明久』

「うつつ……何か自分が情けない……」

『そんなに落ち込むなって（グウ〜）ん？ もう昼過ぎか……』

人生ゲームが終わって、敗者の明久を慰めようとした時に私の腹の虫がなったので時計を確認してみると、時計は午後1時を指していた。

「遊んでてすっかり時間を忘れていましたね。僕もお腹が空きましたよ」

「葉月もです」



『よし、それじゃあ昼御飯にしますか。2人は何が食べたい？』

私が何時でも昼御飯を出せるように指を鳴らす準備をする。

「え？ 旅人さんが用意してくれるんですか？」

『そりゃまあ何の前触れもなく君の家に押し掛けたからね。飯の用意くらいはするよ』

「そんな気を遣わなくてもいいのに。パエリアの材料があるから僕が作るうかと思っただんですけど」

『君が作るパエリアを食べてみたいけど、やはり気が引けるから私の方で（スツ）』

「葉月はバカなお兄ちゃんの作る料理を食べてみたいです！」

私が料理を出す為に指を鳴らそうとしたが、葉月が明久の手料理を食べたいと言った。

『コラコラ葉月ちゃん、いくらフィアンセだからと言ってそんな図々しい真似はしちゃ駄目だよ』

「はづ……でも、葉月は食べてみたいです」

私が注意すると葉月はシヨンボリとした顔になる。

「いいよ葉月ちゃん。腕によりをかけて作るから」

「ホントですか!?!」

『明久、そこまでしなくても……』

「葉月ちゃんが食べたいなら、喜んで作りますよ。それじゃあ今から作るか? (スタスタ)」

どうやら明久はパエリアを作る気満々であり、台所に向かいパエリアを作る準備を始めた。

『良かったねえ、葉月ちゃん』

「ありがとうございます、バカなお兄ちゃん!」

「どういたしまして。旅人さん、ちょっと手伝ってくれませんか?」

『ほいほい、何をすればいいかな?』

私が台所に行こうとすると……。

「葉月もお手伝いするです!」

『「ええっ!?!」』

葉月の発言に私と明久は驚いた。

「葉月ちゃんは座って待っていていいよ」

『怪我したら危ないからねえ』

「そんな子供扱いしないで下さい！ 葉月だって家庭科の授業でお料理を習いましたです！」

プンスカと怒る葉月は私と明久に抗議する。

「ご…ごめん」

『スマン、私が悪かった。けど3人で作る必要は無いから……』

「葉月はバカなお兄ちゃんと一緒に料理をしたいです。それに…花嫁修業に丁度良いです！」

「……………」

『しょうがないな……明久、葉月ちゃんは本気みただから一緒に作りな。葉月ちゃん、場所交代ね』

「はいです！」

呆然とする明久に私は台所から離れ、葉月と入れ替わり……。

「バカなお兄ちゃん、葉月はどうすればいいですか？」

「え？ ああ…そうだね。まずは野菜を切って貰おうか、頼める？」

「了解です！」

明久と葉月と一緒にパエリアを作り始めた。

『何かまるで夫婦の共同作業みたいだな』

「ちょっと旅人さん！ 茶化さないで下さいよ！」

「ふ…夫婦？ ……葉月は嬉しいです。バカなお兄ちゃんと夫婦だ何てとても幸せです……」

「ちょ！？ ちょっと葉月ちゃん！ 指切っちゃうよ！」

明久は幸せな気分になっている葉月が包丁で指を切りそうだったので、すぐに止めた。

『葉月ちゃん、夫を困らせたら駄目だよ』

「旅人さんはもう何も言わないで下さい！」

『はいはい』

「出来ればもつと言って欲しいです」

何だかんだとやって20分後

『それでは頂きます。（パクツ…モグモグ……）』

パエリアは完成し、私が食べ始めると……。

「……………」

私の評価を聞きたいのか、明久と葉月は黙って私を見ている。

『……うむ！ 美味しいですな』

「わーい！ やったです！」

「良かったね葉月ちゃん！」

葉月はとても嬉しそうに喜び、明久も一緒に喜んだ。

「バカなお兄ちゃんがいてくれたから美味しく作れたですう〜！」

「そんな事無いよ葉月ちゃん。葉月ちゃんがいなかったら美味しく出来なかつたんだから」

「嬉しいです！（ギョウツ！）」

『本当に仲の良い事で……』

明久の言葉が嬉しくて抱きつく葉月に私はほのぼのと見ている。

『今度は君達が食べたら？』

「そうですね。葉月ちゃん、食べようか」

「はいです！ でも……」

「ん？ どうしたの？」

葉月がモジモジとしていたので明久は気になって聞いてみた。

「ば…バカなお兄ちゃん、葉月にあくんして貰っていいですか？」

「いいよ（スツ）はい葉月ちゃん、あくんして？」

明久はパエリアをスプーンで掬って葉月の口に運ぶと……。

「あ…あくん（パクツ…モグモグ…ゴクン）………凄く美味しいです  
！！」

葉月はそれを口に含みパエリアを美味しそうに食べていた。

「凄くつて………大げさだよ葉月ちゃん」

「そんな事無いです！ 葉月、凄く美味しくて感動したです！」

「ははは………ありがとう葉月ちゃん」

と、2人が何やらラブラブオーラを出していると……。

『（ア~~~~暑いな~~~~真夏のように暑いよ）』

私は暑く感じて手を団扇のように扇いでいた。

「今度は葉月がバカなお兄ちゃんにあくんするです！」

「そうかい？ じゃああくんして貰おうかな？」

「はいです！ はい、あくんです！」

「あくん（パクツ…モグモグ…ゴクン）………うん！ 葉月ちゃんの

言つとおり凄く美味しいよ！」

「当然です！夫婦で作った料理ですから！」

『（アア~~~~~！！ 何時までこのやり取りは続くんだ~~~~！  
？ 暑いよ~~~~！！！！）』

さらにパタパタと手を扇ぐ私はパエリアを食べていたのであった。

そして夕方頃

「すづ……すづ……」

『おやおや、葉月ちゃんは遊びつかれて寝てしまったか』

「そつみたいですね」

夕方までいろいろなゲームをして遊んでいた私達があつたが、葉月が疲れて眠ってしまったのでお開きにした。

私は葉月をおんぶして玄関先で……。

『それじゃあ葉月ちゃんは私が家に送るから』

「お願いします」

『しかしこの娘は最初から最後まではしゃいでいたねえ。それほど明久の事が好きみたいだね』

「あははは……」

『じゃあ私もこれで失礼するね、今日は楽しかったよ。また遊ぼうな』

「いつでもお待ちしていますよ」

『では（ピシユッ！）』

葉月と一緒に姿を消した。



寸劇劇場 対グレートレンジャー用結成部隊 お色気レンジャー（前書き）

今回はギャグですので、温かい目で見て下さい。

寸劇劇場 対グレートレンジャー用結成部隊 お色気レンジャー

旅人『突然ですが、ここでグレートレンジャーに対抗するメンバーを紹介します！！ 先ずは一人目……お色気レンジャーグリーン  
愛奈！！』

愛奈「は〜い グレートレンジャーの皆さん！ ボクの胸で地獄に逝かせてあげるよ！！（チュッ！）」

グリーンのパニースーツを身に纏い、投げキッスをする愛奈。

旅人『つづいて二人目……お色気レンジャーブルー 真美！！』

真美「お爺さん達！！ 私の魔法で、貴方達の心を壊して、私の奴隷になってもらおうわ！！」

青いビキニを身に纏い、黒いマントと三角帽子を被っている真美。

旅人『三人目は……お色気レンジャーイエロー 綾！！』

綾「ニヤ……ニヤア……お爺ちゃん達はアタシの肉きゅうパンチとしつぱ攻撃で倒しちゃうニヤ……」綾

顔が見える猫の着ぐるみを着て、恥ずかしながらも猫耳と尻尾を揺らして肉きゅうパンチをする綾。

旅人『そして最後は……お色気レンジャーレッド 明菜！！』

明菜「グレートレンジャーの皆さん！ 貴方達の悪事を防ぐ為にこの剣で裁きます！！」

ビキニアーマーと兜を身に纏い、剣を持って宣戦する明菜。（明菜の格好は“ドラ〇エ？”に出て来る女戦士と思ってください）

旅人「さあグレートレンジャー共！ この4人を倒せるなら今すぐ出て来い！！」

グレートレンジャー VS お色気レンジャー

果たして、勝つのはどちらであろうか！？

旅人「次回をお楽しみに！！」

明菜「次回なんてありません！！！（ドゴツ！）」

旅人「アイタツ！ って何すんだよ明菜！！ いくら非殺傷の剣とは言えメチャメチャ痛いんだぞ！！」

明菜「何で私がこんな恥ずかしい格好をしなければいけないんですか！？」

愛奈「まあまあ明菜さん、そんな怒らずに」

真美「そうですね、中々面白いじゃないですか」

綾「ちょっと恥ずかしいけど、慣れればどうって事無いよ」

旅人『ほら！ 三人もこう言ってるんだし。だからこっちは……』

明菜「嫌です！！」

旅人『え〜〜〜？ そんなあ〜〜』

明菜「とにかく私はこれで失礼します！！（スタスタ）」

旅人『あゝあ、行っちゃったよ』

愛奈「明菜さんはノリが悪いですねえ〜」

真美「ホント真面目なんだから」

綾「じゃあアタシが明菜お姉ちゃんが着ていた服でやってみようかな？」

旅人『いや、綾ちゃんはそのままでいいから（流石に小学生には着せられないしね）』

綾「？」

旅人『と言う訳でグレートレンジャーの皆さん、明菜が辞退しましたので、この話は無かった事にさせていただきます』

愛奈「あゝあ……折角、自慢のパフパフ攻撃をしようかと思ったのに〜」

真美「私は文字通り骨抜きにしてあげようと思っていたけど……」

綾「旅人さん、愛奈ちゃんと真美ちゃんは何を言ってるの？」綾

旅人旅人「綾ちゃんは気にしなくていいから。着替え終わったらご飯を食べに行くけど一緒に行くかい？」

綾「うん！行く！」

旅人「よし！じゃあ今日はカツ丼を食べに行こ〜！」（スタスタ）」

綾「お〜〜〜！（スタスタ）」

愛奈「旅人さんと綾ちゃんが行っちゃったね」

真美「私達も着替えて旅人さんと一緒に行く？」

愛奈「そうだね。それでは皆さん、これで失礼します！（スタスタ）」

真美「次はあの人達が結成します（スタスタ）」

翌日

旅人『では明菜が辞退したから別のお色気レンジャーで再結成だ！  
！一人目は……お色気レンジャーパープル ラベンダー！！』

ラベンダー「はい お爺ちゃん達、ワタシのあつゝい口付けで  
天国に逝かせてあ・げ・る！（チュツ）」

パツンパツンの紫色のバニースーツを着て、投げキッスをする  
オカマの一人であるラベンダー。

旅人『つづいて二人目……お色気レンジャーピンク チューリップ  
！！』

チューリップ「お爺ちゃん！ワタシの魔法で誘惑してあ・げ・る  
！（パチッ）」

ゴツイ体格で紫色のビキニを纏い、杖を持って片目でウインクする  
チューリップ。

旅人『三人目は……お色気レンジャーホワイト マーガレット！！』

マーガレット「ニヤ〜〜ン お爺ちゃん達はワタシの美しい体  
で癒してあ・げ・る！」

パツンパツンのナース服を着て猫耳と尻尾を付けながら、艶や  
かなポーズを決めるマーガレット。

旅人『最後はリーダーである……裏お色気レンジャーレッド ロー  
ズ！！』

ローズ「グレートレンジャーのお爺ちゃん達！ オイタをすると

……この愛と美少女の戦士、ローズが月に代わってお仕置きよん」  
パツンパツンのセーラー服とミニスカを身に纏い、決めポーズ  
をするローズ。

旅人『さあグレートレンジャー共！この4人を倒せるなら今すぐ出て来い！！』

お色気レンジャー「「「ワタシ達の虜にしてあげるわ」」」  
「

グレートレンジャー VS お色気レンジャー

果たして、勝つのはどちらであろうか！？

旅人『次回をお楽しみに！！ …… って確認するけどお前達、  
辞退はしないよね？』

オカマ達「「「勿論ですわ」」」

ローズ「このままお爺ちゃん達と戦いますわよー！」

旅人『それは良かったよ』

綾「旅人さん、またやってるの？」

旅人『あら綾ちゃん、どうしたんだい？』

綾「アタシも出ようかと……」

旅人「綾ちゃんはお出なくていいよ」

綾「どうして？」

旅人「そりゃあねえ……まあいろいろと（綾ちゃんをこのグループに入れる訳にはいかないし）」

綾「？」

ローズ「綾ちゃん、旅人様を困らせてはいけないわよ」

綾「あ…ローズおじちゃん」

ローズ「おじちゃんじゃなくてお姉ちゃんよ」

綾「あ、ゴメン……ローズお姉ちゃん」

ローズ「分かってくればいいのよ　うふっ」

旅人「（流石は綾ちゃん、ローズ達を見ても全然動じていないね）」

綾「ねえ旅人さん」

旅人「なんだい？」

綾「今日、学校で家庭科の調理実習でクッキーを作ったんだけど…」



旅人「それで？」

綾「旅人さんに食べて貰いたいんだけど……いいかな？」

旅人「勿論だよ」

綾「嬉しい！（ギョウツ！）」

旅人「クッキーを食べるだけで、そんなに嬉しく私に抱き付くのかい？」

ローズ「旅人様、綾ちゃんは嬉しいんですよ。旅人様はもう少し乙女心を学んだ方がよろしいですね」

旅人「お前が言うか？」

ローズ「ワタシ乙女ですから」

旅人「あっそう……綾ちゃん、悪いけどクッキーを持ってきてくれないかな？」

綾「うん！ 今持ってくる！（タッタッタッタ）」

旅人「さてと、綾ちゃんが戻ってくる前に……お前達、準備いいか？」

ローズ達「……はい！」「……」

旅人「では……さあグレートレンジャー共！ローズ達は戦う気満々だから近い内に、お前達と戦わせるために仕向ける！覚悟して

おくように!?!」

お色気レンジャー「「「「待ってるわよ〜〜!?! ちゆ  
「「「「

旅人「次回をお楽しみに!?!」

旅人「おいローズ、とりあえず謹慎は解いたけど、今度はちゃんと私の命令に従ってくれよ?」

ローズ「心得てます。もう同じ轍を踏みませんわ」

旅人「お前達もいいな?」

オカマ達「「「はい「「「

旅人「よし……では行くぞ! お色気レンジャー!?!」

お色気レンジャー「「「「了解ですわ〜〜」  
「「「「

## 合コン物語 その後（前書き）

これは明久が秀吉の家でパーティーを終えたその後です。

詳しくは「バカとテストと優等生？」の第一百七十話辺りを参照してください。

## 合コン物語 その後

授業が終わって来牙は家に帰っている最中……。

「何でアンタが俺と一緒に帰るんだ？」

『気にしないでいい気にしないでいい』

私と一緒に歩いていた。

『それはそうと来牙、合コン終わった後どうなったの？』

「……………アンタが余計な事をしてくれた所為で絵梨に散々問い詰められたよ」

『お互い様だよ。君が人の番号を見なければそんな目に遭わなかったんだからね』

「……………」

私が指摘すると来牙は言い返すことが出来なく無言になる。

『ま、ここは痛み分けて事にしようよ。私だって明久達の欲しい物を買ったんだから』

「その前に俺と絵梨の分はまだ貰っていないんだが？」

『そう言えばそうだったねえ。良いでしょう、何が欲しいんだい？』

「だったら最新ゲーム数本を買って「何なのよアンタ達!?!」……何だ?」

『ん? 今のは優子の声か?』

私と来牙は優子の声が聞こえたのでその方向を見てみると……。

「吉井!! お前みたいな最低の異端者は最早生かして帰さねえ!」

「木下秀吉だけでなく姉にまで手を出す貴様は死刑だ!!」

「木下優子! 俺達が今から助けてやるから安心しろ!!」

「そしてお礼に抱かせてくれ!!」

FFF団のバカ共が明久と優子を囲っていた。

「待つてよ!! 何で僕が木下さんに手を出さなきゃいけないの! ? それに僕はただ木下さんにこの間のパーティーのお礼をしただけなのに!!」

「アンタ達は何考えてるのよ!? アタシに話しかけた吉井君を死刑にする何て頭おかしいわよ!! それに何でアタシがアンタ達にそんな事しなければいけないの! ?」

明久が状況説明、優子が嫌そうに断ると……。

「吉井は黙ってる!!」



バタバタバタバタ……!!

「え！？ 何！？ 何が起こったの！？」

「どうしたの！？ 一斉に変な悲鳴をあげて倒れているわ！？」

FFF団が声にならない悲鳴をあげながら倒れる様子に、明久と優子は戸惑っていた。

『ハッハッハッハ！ 最高の悲鳴だよ』

「……………旅人さん、アイツ等に何を見せたんだ？ 尋常じゃない悲鳴をあげていたんだが……………」

『フッフッフッフ……………聞きたいかい？』

「……………一応聞こうか」

来牙は恐ろしい内容だと予想していたが、確認の為に聞いてみる。

『来牙は筋肉がムキムキで気持ち悪い化粧をしてメイド服を着ているオカマの集団を見た事ないかい？』

「……………そう言えば見た記憶があるな。余りの気持ち悪さに吐きそうになった……………」

オカマ達の姿を思い出したのか、来牙は顔を青褪めて口に手を当てているが……………。

『実はソイツ等、私の部下なんだよねえ』

「……………アンタはあんな奴等を配下に行っているのか？」

『まあね。で、そのオカマ達が勃起した“ある部分”を相手の顔に向けながら、“ある物”を発射して浴びた体験をして貰ったのさ』

「…オエ！ 気持ち悪い……………」

FFF団が体験した内容を話すと来牙は吐きそうな顔をしていた。

『因みにグレートレンジャーや雄二が体験しているよ』

「マジかよ！？ そう言えば……………雄二が学校に来ていても死んだような顔をしていたな……………」

『あらら〜まだ尾を引いているんだねえ〜。いいザマで愉快愉快』

「……………（この人は）」

雄二の状態を聞いて嬉しそうな顔をする私と、ortの体勢なり聞いて物凄く後悔した来牙であった。

「あ……………来牙と旅人さん！」

「何で貴方達がここに！？」

明久と優子は苦しんで倒れているFFF団を踏みながら私達に近づいた……………特に優子は汚物を踏むかのように歩いていったが。



『災難だったねえ〜お二人さん』

「ホントですよ。僕はただ木下さんにパーティーを開いてくれたお礼を言おうと思ってただけなのに……」

「あそこで倒れている連中は何を勘違いしているのか、アタシが吉井君に襲われているから助ける何て訳の分からない事を言ってたわ」

『あのバカ共は都合の良い解釈しかしないからねえ〜。本当に傍迷惑極まりない奴等だ』

グレートレンジャーと同様にと私は内心で付け加える。

「所で、須川君達は何で変な悲鳴をあげながら倒れたんですか？」

「まるでかなり恐ろしい体験をしたかのような顔になってたけど……」

……

『来牙が君達を助けたんだよ』

「え？ それどう言う事？ って言うか、どうして宮永君は吐きそうな顔をしているの？」

『ああ、それはね……』

私がFFF団が体験した内容を教えると……。

「オエエエエエ！……！ き…聞いただけでも吐きそう！」

「ウツ！ い…今一瞬……ホントに吐くかと思ったわ……」

明久と優子も来牙と同様にortの体勢になり、口に手を当てて吐きそうな顔をしていた。

『さつき来牙にも言ったけど、雄二が受けた実体験をあいつ等も味わったんだよ』

「……………旅人さん、もしかして雄二が“あし〇のジョー”みたいに真っ白になってたのって……………」

『だから言ったら、雄二がオカマ達のせ（ピー！）を顔に……………』

「それ以上言わなくていいわ！！！！」

私が言っている最中に優子はストップをかけた。

『流石に聞きたくないか』

「当たり前よ！！　って言うより、そんな残酷極まりない事をする貴方は鬼か悪魔よ！！！！」

『ハッハッハッハッハ！　いい褒め言葉だよ！』

優子の台詞に私が笑い飛ばすと、優子は何か悟ったような顔になる。

「宮永君がアタシ達と同じ体勢になった理由が分かったわ……………」

「へえ〜そうだったんですか。雄二があれを……………ナイスです旅人さん！！（グッ！）」

優子が未だに吐きそうな顔になっている最中、明久は雄二がローズ達にやられたと知ると、いきなり元気になって私に親指を立てた。

『そうだ明久、今までFFF団に散々な目に遭っていただろ？ コイツ等が更にもがき苦しむ様子を見てみないかい？』

「何をするんですか？」

『それはね……（ゴニョゴニョ）』

私が明久に内容を教えると……。

「いいですねえ〜」。面白い事になりそうですよ」

明久は名案と言わんばかりに私と同様に悪魔の笑みを浮かべた。

『だろ？ 西村先生を連れてアイツ等と一緒にアレを見せるから…』

…』

「うんうん、是非とも鉄人を呼ばないとダメですよねえ。でしたら僕も一緒に見ます！」

『よし、決まりだ。それじゃあ私がアイツ等を視聴覚室に連れて行くから、明久は西村先生を連れて来い』

「分かりました。では今から学校に戻って鉄人を視聴覚室に連れて行きます！」

『では待つてるよ（ピシユッ！）』

私は倒れているFFF団と共に姿を消すと……。

「さてと、それじゃあ学校に戻るか。木下さん、僕は学校に戻るから。それとこの間のパーティーはありがとうね」

「え…ええ。どういたしまして」

「それじゃあ（タッタッタッタ）」

明久は優子に礼を言いながら別れを告げ、急いで学校に戻った。

「はあ……あの二人の事だから良からぬ事を考えているわね。そう思わない、宮永君？」

「そうだな……まあFFF団のバカ共がどうなるのが俺の知った事じゃないが」

漸く回復した来牙は優子と話している。

「同感ね。それより宮永君、これからどうするの？」

「どうするって……俺は家に帰るんだが」

「と言う事は何もする事がないのね？」

「まあそうだが……」

「ふ〜ん……ねえ宮永君、アタシの家に来ない？」

「は？ 何で俺が木下の家に？」

優子の提案に来牙は怪訝な顔をした。

「今日、家庭科で調理実習をして料理を作ったの。宮永君に味の評価をして欲しいのよ」

「別に明日の弁当のおかずで出せばいいじゃないか。それに今しなきゃいけない事か？」

「い……いいじゃない！ 早く試してみたいんだから！（ガシッ！）さあ行くわよ！」

「お……おいちよっと……！」

優子は来牙の腕を掴んでいき、来牙と一緒に自宅へと向かった。

おまけ

優子が来牙を引っ張って自宅に向かっている最中に……。

「そ……それと宮永君」

「何だ？」

「その……助けに来てくれてありがとう」

優子は顔を赤らめながら来牙に礼を言った。

「俺は旅人さんに言われてスイッチを押したただけなんだがな……」

「それでも……助けてくれた事に代わりは無いわよ」

「そうかい。じゃあ……どういたしまして」

「……………うん」

そして優子の家に着いた。

合コン物語 その後（後書き）

次回は明久と一緒にFFF団がもがき苦しむ様子を見ますのでお楽しみに！！

## FFF団 鉄人と一緒に動画を見る

文月学園の視聴覚室で……。

『よし、バカ共が無駄な抵抗をしない為に鎖で糞虫状態にしたから安心つと』

私は気絶しているFFF団を鎖でグルグル巻きにして壁に貼り付けさせた。

『後は明久が西村先生を連れてくるのを待つだけか。けれど……元グレートレンジャーのアメリカンクリスを呼べなかったのは残念だったな』

本当だったらアメリカンクリスを呼んで一緒に見せようかと思っていたが、諸事情により連れてくる事が出来なかったので仕方なく断念した。

『あの子は見たいと言っていたが呼べないんじゃないか。ではそろそろコイツ等を……』

ガラッ！

「旅人さん！ 西村先生を連れて来ましたよ！！」

「一体何なんだ吉井？ 俺を此処に連れてくるとは……」

私がFFF団を起こそうとしたが、明久が鉄人を連れてやって来た。



『おお来たか、丁度いいタイミングだよ』

「お前か、俺に用があると云うのは」

西村先生こと鉄人は私を見て顔を顰める

『西村先生、お初にお目に掛かります。私は“さすらいの旅人”と申します。以後お見知りおきを』

「……………学園長から出入り自由の許可を得ていると云う話は聞いているが、随分と好き勝手に暴れているみたいだな」

『では私を補習室送りにしますか？』

「そうしたい所だが、学園長は決してお前に手を出すなど言われている」

『フッフ……………まあそう仰らずに』

鉄人の顔を見ると本当に私を補習室送りにしたそうであった。しかし、流石の鉄人でも最高権力者には逆らえないみたいだから、敢えて踏みとどまっているようだ。

「それで、お前は俺に何の用なんだ？ 吉井が職員室に来た時は何を仕出かすかと思っていたのだが……………」

「酷いですよ！ 僕がそんなに悪い事をしているように思えます！？」

「吉井は普段から問題を起こしているだろうが」

「ぐっ……………」

鉄人の言い分に明久は言い返せず苦々しい顔をする。

『ハハハ……ちょっと脱線しかけていますから話を戻しますね。私  
が貴方をここに呼んだ理由はある動画を見てもらう為ですよ』

「ある動画だと？ 何だそれは？ ……まさかいかかわしい動画じ  
やないだろうな？」

『そんな物じゃありません。ある試合の動画ですよ』

「試合？」

『まあ見れば分かります。ではその椅子に座って下さい』

私は予め用意した椅子に座らせると……。

「……………もし問題がある動画だったらお前を容赦無く指導室に連れ  
て行くからな」

『どうぞご自由に』

鉄人は取り敢えず椅子に座り私に警告したのであった。

「それと気になっていたが、あそこで貼り付けにされているFクラ  
スのバカ共は何なんだ？」

『Aクラスの生徒にいかかわしい行為をやりそうでしたので、成敗

致しました』

「……………そこは感謝しておこう」

『恐れ入ります。それでは動画を流しますので、どうぞごゆっくり鑑賞下さい（パチンツ！）』

私が指を鳴らすと室内の電気が消え、スクリーンの電源が付く。

『ついでにお前等もさっさと起きろ（パチンツ！）』

「……………ハッ！！さすらいの旅人！！てめえよくも！！！！」  
「……………」

再び指を鳴らすと今度はFFF団起きて真っ先に私へと怒鳴ってきたが……………。

「お前等！！ 静かにしろ！！！」

「……………げ！！ 鉄人！！！！……………」

鉄人の声を聞いた瞬間に不味い相手にあつたと顔を顰めた。

「いい度胸だなお前等、後で全員補習室に連れて行くから覚悟しておけ！」

「……………嫌だあ……………！！！！……………」

FFF団は心底嫌そうな声を出しながらジタバタと暴れている……しかし鎖からは逃げられないので無駄な抵抗だ。

『まあまあ西村先生、バカ共は放っておいて動画に集中して下さい』

「……まあいいだろう。それで何時になったら始まるんだ？」

『もうすぐ始まりますよ。では私は少しの間失礼します』

「お前はここで見ないのか？」

『ちよつとやる事がありましたね。行くよ明久<sup>スタスタ</sup>』

「あ…はい、それでは西村先生、失礼しました（スタスタ）」

ガラッ ピシヤッ

私と明久は視聴覚室から去って行くと……。

「……………（ズシッ）では何の動画かじっくり見せて貰おうか」

本当にいかがわしい物だったらすぐに私を連行してやると心に決めながらドツシリと構える鉄人だった。

そして動画が始まり、その内容は……。

「ん？ こ…これは!?!？」

「「「「「「「「「「うぎゃあああ~~~~!!!!!!」「「「「「「「」

十年以上前の夏にあった、鉄人がブラジルの留学生とレスリングをしていた動画だ。





「~~~~~お願いだから補習室に連れて行ってくれ~~~~!!  
!!!!!!」

これ以上の地獄は耐えられないのか鉄人に補習室に連れて行ってくれと懇願するFFF団であったが……。

「静かにしろお前等!! 今良い所なんだ!! 邪魔するな!!」

「~~~~~勘弁してくれ~~~~~!!!!!!」  
「~~~~~」

そして鉄人は最後まで動画を見続けていた。

場所はまた別室に変わる……。

『アツハツハツハッハ!! いい悲鳴だ! 最ツ高だよ!!』

「アハハハハハ!! 思い知ったか須川君達!!」

FFF団が死にそうな顔になっても未だに嘲笑う私と明久であった。

『ハハハハハハ……ああ……バカ共の悲鳴は何て素晴らしい』

「ホントにいいですねえ……見てて愉快ですよ」

私と明久は悪魔の様な顔になっている。

『さて、動画はそろそろ終わるから視聴覚室に言ってバカ共の顔を直に見ようじゃないか』

「そうですね。じゃあ行きますか」

そして私と明久が視聴覚室に着くと……。

『うわあ………これは凄い』

「須川君達が死んだような顔になっていますよ」

FFF団は目を開けたまま気絶していた。

「ん？ お前達か」

『どうでしたか西村先生？ 懐かしかったですでしょう？』

「うむ。見ている最中に思わず、あの頃の俺に戻ってしまったかのような感覚だった」

『そうですね。それは何よりです』

「所であれば何処で入手したんだ？ あの試合は撮影されていない筈だぞ？」



『フッフッフッフ……それは企業秘密です』

「……………まあいい、出来ればあの動画を譲って貰いたいんだが」

『ここにありますよ』

私はDVDを出して鉄人に見せるが、すぐに渡さずある事を聴き出す。

『これを渡す前に聞きたい事があります。西村先生、あの動画を見て私を連行しますか？』

「……………どうやら俺はお前を勘違いしていたみたいだ。お前ほどの奴は学園にいても問題は無いだろう」

『そうですか。ではどうぞ（スッ）』

「うむ、では俺はこれで失礼する。吉井、お前はいい友人を持ったな」

「え？ ああ、はい」

DVDを渡すと鉄人は凄く上機嫌で視聴覚室から去って行ったのであった。

『さてと、あのバカ共の後始末だが……………』

「ねえ旅人さん、鉄人のレスリング動画ってまだ余ってる？」

『余っているが、それがどうした？』

「いや、雄二対策に使おうかと」

『ほほう、それはいい案だね。じゃあ雄二がまた調子に乗ったら使うとするか』

「是非お願いします」

明久の提案を受け入れた私は余分のDVDを保管する事を決めると、FFF団を縛っている鎖を解いてFクラスの教室に転送し、明久と一緒に視聴覚室から去って行ったのであった。

おまけ

その頃、優子の家では……。

「ん……んちゅ……どうかしら宮永君、アタシの唾液は美味しい？」

「き……木下……も……もう止めてくれ」

優子は部屋で来牙をベッドの上で押し倒してキスをしていた。

「ふふふ……だぐめ（カチャカチャ）」

「何でこんな事に……」

来牙のズボンを脱ぎ始めている優子に、来牙はされるがまま状態だった。

**FFF団 鉄人と一緒に動画を見る(後書き)**

おまけの続きを見たい方はノクターンへ

宮本綾 文月学園を訪れる

文月学園は授業が終わって昼休みになったばかりに……

「旅人さん、ここが文月学園なの？」

『そう。君がいずれ入学する学園だよ』

学校の入り口前に佇んでいる私と綾であった。

『しかし綾ちゃん、本当にいいのかい？』

「何が？」

『今日は綾ちゃんの学校は開校記念日でお休みなんですよ？ 折角の休みなのに私と一緒に居たいだなんて……』

私の言葉に綾は……。

「旅人さん、アタシと一緒にじゃ嫌？（ウルウル）」

『何でそうなるの？ 私はただ綾ちゃんにも予定があるんじゃないかと聞こうとしただけだよ』

涙目になりながら私に聞いて来たが、私はすぐに対応した。

「アタシは特に予定は無いし。それに……」

『？』

「旅人さんと一緒にいたいから……それでもダメ？」

『……………OK。今日一日は綾ちゃんと一緒にいるから、好きなだけ私に甘えなさい！』

「嬉しい！（ギユウツ！）」

私と一緒に居ていいと分かった綾は嬉しさのあまり私に抱きついて来る。

『それじゃあ学園に入りますか。綾ちゃん、ちょっと歩きづらいから離れてね』

「うん、分かった」

綾は離れて私は学園に入ろうとしたが……。

「ねえ旅人さん、手を繋いでいいかな？」

『どうぞ（スツ）』

「」

綾が私に手を繋いで欲しいと欲しかったので、私は手を差し出すと嬉しそうに握ってきた。

『それじゃ学園に入りましょう〜！〜！』

「お〜〜！〜！」

そして私と綾は学園に入った。

学園の廊下を歩いていると……。

「あ…またあの人だ」

「よく学園に来る人だよな？」

「今度は女の子を連れてきているよ」

「結構可愛い子じゃないか。俺めっちゃタイプだよ」

「俺達に見せ付けるかの様に手を繋いでいるし……！」

「あの子もしかして、アイツの彼女か？」

「ってかあの子、何処かで見た事があるわね……」

私と綾を見ている生徒は色々な事を言っていた。

『好き勝手言ってくれるねえ〜。私と綾ちゃんはそんな関係じゃ無  
いっての』

「……………アタシは旅人さんの彼女じゃなくてお嫁さんだもん（ボン

ッ」

『綾ちゃん、何か言ったかい？（何か今、物凄く聞き捨てならない台詞を言ったような気が……）』

「……何でも無い（ギョウ）」

『ならいいけど（気のせいか……）』

綾は周りの生徒に見せ付けるかのように私の腕に抱き付き、私は特に気にせず歩いていた。

「……（あの野郎！！いつか殺す！！）」

と、男子生徒達は殺気を込めて睨んでいたが……。

『私を殺すんだったら、死を覚悟して挑んでね　その時はこの辺りに現れているオカマ達とランデブーして貰うから　因みにソイツ等は私の部下で、私が呼んだらすぐに駆けつけてくるから』

「……！！！！」

私がちよつとした切り札を出すと、先程まで嫉妬していた男子生徒達が急に大人しくなった。

もう知つての通りローズ達の事はこの町ではかなり有名で、あまりの気持ち悪さに誰も相手をせず見て見ぬ振りをしたくなるほど係わりたくない相手である。そんなローズ達とのランデブーは死ぬほど嫌なのか、男子生徒達の殆どが私に対する敵意が完全に無くなって怯えている。それは当然だろう。私に敵対した後でローズ達に食わ



れる位なら、何もしない方が得策なのだから。

「さ〜て、さつさと飯を食うか」

「そうだな、早く購買に行かないと」

敵意を無くした男子生徒たちは何事も無かったかのように、昼食の準備を始めていた。

そんな時……。

「旅人さん、また学園に来たの？」

『やあ木下さん』

優子が私達に近づいて話し掛けて来た。

「あ…秀吉お兄ちゃん。どうして女子の制服を着ているの？」

「ん？ 誰かと思えば宮永君の妹さんじゃない……って今何て言ったの？」

綾の発言に顔を顰める優子。

「だから秀吉お兄ちゃん……」

「ちょっと妹さん、貴方アタシに喧嘩を売ってるのかしら？」

「！…！(サッ)(サッ)」

『はいはい木下さん、ちょっとストップね』

優子は綾を絵梨と間違えており怒鳴ろうとしたが、綾がすぐに私の背中に隠れたので私はすぐさま間に入って勘違いしている優子に説明をする。

『この子は絵梨じゃないよ、木下さん』

「……………妹さんじゃない？」

絵梨じゃないと言われた優子は顰めていた顔を緩めて言い返した。

『そう、私の友人の綾ちゃんだ』

「……………ふん、そう言う事」

『おや？ 前回みたいに驚かないんだね』

優子のそっけない反応に私はちよつとガツカリする。

「……………愛子のそっくりさんで十分驚いたからね。……………今でもあの大きな胸は腹が立つけど……………」

『おいおい木下さん、恨み言は他所で言ってね』

愛奈の事を思い出した優子は怨念を込めていたので、私がすぐに抑えると元に戻って綾の方を見始めた。

「……………それにしても、妹さんのそっくりさんだけあって随分と……………(ジー)」

「（ビクッ！）」

優子は私の後ろに隠れている綾の胸を見て恨めしそうに見ていると、綾は怯える。

『コラ！ 綾ちゃんを怖がらせるんじゃない。と言っか綾ちゃん、いつまで私の後ろに隠れているのかな？』

「……………だつてこのお姉ちゃん、ちよつと怖いから」

『大丈夫だよ、すぐに襲つて来ないから』

私が綾に離れるように言うと、優子は気分を害したかのように睨んで来た。

「ちよつと旅人さん、アタシを凶暴な女だと勘違いしていないかしら？」

『いやいや滅相も無い。でもそう思つたんなら謝るよ？』

「……………貴方に謝られたらそれはそれで腹が立つから遠慮しておくわ」

『あつそう』

「……………（やっぱり後でシメようかな？）」

あつさりと返事を返す私に優子は青筋を浮かばせていた。

『ほら綾ちゃん、早く木下さんに自己紹介しなさい』

「う…うん。は…初めまして、宮本綾です（ペコッ）」

「アタシは木下優子よ。弟の秀吉とは何処で会ったかは知らないけど、アタシは秀吉の双子の姉よ」

「そうだったんですか。秀吉お兄ちゃんと間違ってしまったってゴメンナサイ（ペコッ）」

「いいわよ、もう気にしていないから（妹さんと違って礼儀正しいわね）」

キチンと謝る綾に優子は好感を持ち始めた。

「それで？ 貴方は何処の学校の生徒なの？」

『！…！ あゝ木下さん。ちょっと君に言わなければならない事が

………』

「何を言つの？」

『え〜とね……綾ちゃんは木下さんと同い年じゃないんだよ』

「同い年じゃない？ じゃあ後輩なのかしら？」

『ま…まあ間違っではないね。いずれこの学園に入学するから』

優子の質問に私は歯切れの悪い答え方をする。

「じゃあこの子中学生なの？（中学生であんなに胸が……何か腹立

つわね」

『…………綾ちゃん、悪いけど…………』

「まあ、こうなる事は予想していましたが。えっと、木下さん……」

「？」

「実はアタシ…………小学6年生なんです」

「……………………え……………………ごめん、もう一回言ってくれろ？」

綾が6年生と言つと優子は聞き逃したのか様にもう一度聞こうとしたが…………。

「アタシは小学6年生の12歳です」

「(ピシッ!)(」

優子は綾がもう一度言った瞬間に石となった。

『おや？ 木下さんが(久保みたく)いきなり石になったね』

「……………………(コンコン)……………硬い」

石になった優子の状態を確認する為に綾は軽く叩いてみたが、凄く硬いみたいだ。

『現実から目を背ける為に石化したか。けどね木下さん(パチンッ

「！）」

「！……！……あれ？」

私が指を鳴らすと、石になっていた優子が元に戻った。

『ちゃんと現実を受け入れようね　綾ちゃんが小学生だという事を……』

「……ねえ旅人さん、この子が言った事は嘘よね？　絶対嘘よね？」

『嘘じゃないよ』

「（ガシッ！）嘘よね！？嘘って言って！！」

信じたくないと言わんばかりに私の両肩を掴んでくるが、私は死刑宣告のように言い放つ。

『木下さん……残念ながら真実だよ』

「……………」

優子は真実と聞いた途端に無言になり、そして……。

「（ダダダダダ~~~~~！！！！！！！！）あれで小学生何て詐欺よ~~~~~！！！！！！！！」

デカイ声を出しながら涙を流して去って行った。

「旅人さん、あのお姉ちゃんはどうしたんですか？」

『さあ……？（小学生の綾ちゃんに胸で負けたのが相当悔しかったんだろうね）』

優子の心情を察する私であった。

おまけ

優子と別れてFクラスへ向かっている最中……。

『ん？』

「どうしたの？」

私が掲示板を見ると中々面白そうな新聞が載っていた。

〈文月新聞【芸能】〉

【遊佐翔熱愛発覚！ 学園大震撼！！ Aクラス問題児に想い人！  
？ お相手は学園長！！】

色々と風紀を乱して話題に上がる2年生のAクラスだが、他の生徒は『問題児であるが人付き合いはいい』と言う大変面白い男子生徒であるY佐K君に好きな相手がいると言う話だ。『Aクラスの問題児』として名を馳せる彼だが、密かに想われている女子生徒がいる

と言う事実が少なからず認められている。そんな彼の真実に我々文月学園新聞部は勇氣を持って迫ってみた。部員のうち数名が彼に直接話を伺いに言ったところ、その途中で不幸にも事故に遭ってしまったようなので直接取材を断念。代わりに彼をよく知る周囲の人々に話を聞いてみた（詳細は次項インタビュー記事にて）。

そこで発覚したお相手とは、なんと我々の想定を覆す驚きの人物学園長（推定80歳 住所不明）だった。どうしてあんな老婆を好きになったのかは不明だが、学園長の事を「I LOVE カオル!」と言っているなどの証言もあり、その気持ちはかなりの物の模様。時間を置いてからは冷静になったためか、その想いを物凄く否定する動きも見られたものの、それでは好きな相手がいないのかと聞き返すと赤面して俯いてしまつとか。彼の性格を考慮するに素直になれていないだけでその想い自体は本物だろうといえるだろう。記者個人としては理解できない気持ちはあるが同じ校舎の生徒として、できるだけ彼を応援したい。

【彼をよく知る人々へのインタビュー】

：友人であるM永R牙さん

『いろいろあるんだよ。これ以上はノーコメントだ』

M永さんは一言だけそういつたあと、あとは押し黙ってしまった。

：親友である“さすらいの旅人”さん（本人より名前を出す許可を頂いている）

『アイツの老婆好きには困つたもんだよ。私に何時も相談して、常日頃から学園長を見ており、絶対告白すると豪語していたんだから。例え告白して振られても、最後まで諦めないと言っていたよ』



この方はかなり彼の事を知っている様子。これはもう、これ以上無いと言う位の証拠と言うべきでしょう。

さらに深い真実を探ってみると、彼は学園長と寝たと供述しています。

皆さん、彼はかなりの老婆好きと決定しましたので、ここは祝福しましょう。

#### 【学園長へのインタビュー】

証拠は掴んでいるのだが、我々は念の為の確認と言う事で学園長にインタビューを行った。

『あたしがクソジャリ何かとそんな関係になる訳無いさね！！！！！！』

インタビューの趣旨を説明した我々に対して彼女はそう言うと、インタビュー全員に停学処分を下された。本記者は偶然にも所用で送れて参加した為に辛うじて難を逃れることに成功した。この件に関してのこれ以上のインタビューは困難を窮めるため、断念することにした。

『.....』

「この新聞、旅人さんの名前が載ってるね」



宮本綾 文月学園を訪れる ? (前書き)

今回の話は姫路がまだ暴走していた時の話ですのでご理解下さい。

宮本綾 文月学園を訪れる ?

その頃、Fクラスでは……。

「さあ皆さん、遠慮なく食べて下さい！」

「アンタ達、瑞希の作ったお弁当は残さず全部食べなさいよ」

「……」

「さて、弁当でも食うか（カポツ）」

姫路が明久・雄二・秀吉・ムツツリー二に弁当を食べてくれと言いながら手を広げ、島田は残さないようにと釘を刺し、食べると言われた4人は無言になり、来牙は一人だけ弁当を食べようとしていた。

明久達は弁当を持ってこなかった為、授業が終わってすぐに学食に行こうとしたが、姫路がそれを阻むかのように大きな弁当箱を持って食べてくれと言われたので逃げ道を塞がれたのである。こうなる事が予想してた来牙は明久達が悲惨な目に遭うと分かりながらも弁当を食べ始めていた。

「ね……ねえ来牙、君も一緒に食べない？」

「そうだな、それだけじゃ足りないだろ？」

「明久と雄二の言つとおりじゃ、お主も一緒に混ざらんかの？」

「……是非一緒に」

明久達は来牙を誘おうとしたが……。

「必要無い。俺はこれで十分足りるから、姫路の作った弁当はお前達だけで食べな」

当然、来牙は明久達が自分に声を掛けてくるのが分かっていたから、すぐにいらないと切り返した。

「……（裏切り者！！）」

来牙を恨めしそうな目で見る明久達は必死にこの場をどうやって凌ごうかと必死に考えている。

「アンタ達、早く食べなさいよ」

「今日は皆さんがお腹一杯食べれるようにたくさん作りましたさあどうぞ」

「アンタ達はホントに幸せ者ね。女の子からの手作り弁当をたくさん食べれるなんて……ウチもアキに作ってみようかな？（ボソッ）」

「……」

早く食べてくれと催促する姫路に、明久達を茶化す島田。そして完全に逃げ場が無くなった明久達であった。

と、そんな時……。

ガラッ！

『皆さま、お邪魔しますねえ』

私がFクラスに入ってきた。

「さすらいの旅人をコロセエ~~~~!!!!」

「~~~~うおおおお~~~~!!!!」

須川率いるFFF団が私に襲い掛かってきたが……。

『懲りないねえ〜アンタ等。今度はサウナの中でレスリング動画を見せてやるつか?』

「~~~~!!!!(ピタッ!)」

レスリング動画と言うとFFF団は動きを止める。

『見たいんだったら、今すぐ貴様等の頭の中に叩き込んで(スッ)』

「~~~~すいませんでした~~~~!!!!」

暑苦しいサウナで暑苦しい動画を見たくない為か、すぐに土下座をして降伏勧告をするFFF団であった。

『今度また同じ事をしたら、サウナに連れ込んでローズ達と激しい運動をして貰うからな』

「~~~~オエエエエ!!!!」

想像したのか、吐きそうな顔をして倒れるFFF団を確認する。

『さてと、うるさいバカ共を静まらせたから……』

「旅人さんじゃないですか、どうしたんですか？」

「アンタがここに来るのは久しぶりだな」

「相変わらずじゃのう、旅人殿は」

「……お元気そうで何より」

綾ちゃんを呼ぼうとしたが、急に明久達が私に声を掛けた……まるで逃げる口実が出来たかのように。

『何だ雄二、お前が私に挨拶をするとは意外だな。てっきりまた襲い掛かるかと思っていたが……何かよからぬ事を考えているんじゃないか？』

「何言つてんだよ旅人。挨拶をするのは当然じゃないか」

『……私がお前をあれだけの目に遭わせたのにも拘らず、挨拶する事自体が怪しいんだよ』

雄二の接し方に疑問を抱く私は少し警戒するが、明久は私に接近してくる。

「まあまあ、そんな事を言わずに。所で旅人さん、昼食はもう食べたんですか？」

『何でそんな事を聞くんだった明久？ 私は……』

「まだ食べていないんですか！？ じゃあ仕方ありませんね、僕が旅人さんを学食へと案内しま……」

「いやいや、俺が旅人を学食に案内するぞ明久」

「雄二よ、ここはワシが代わりに旅人殿を案内するのじゃ」

「……俺が案内させる」

『何だお前等？ 揃いも揃って私を学食へ案内しようだなんて。そもそも私は学食の場所は既に……』

知っていると云おうとしたが……。

「知らないんですか！？ 仕方ありませんねえ、ここは友人として僕が案内を……」

「何言っただよ明久。俺がFクラス代表として案内を……」

「ワシは旅人殿とは親友じゃからのう。案内はワシに……」

「……友人を代表して俺が案内する」

『残念ながら私は既に昼食を済ませたから、案内する必要は無いよ。つてかアンタ等さつきからしつこいよ』

「……ああ、そうですか」「」「」



阻止するかのように私を学食へ案内させたがる4人であったが、私が昼食を済ませたと言うと非常に残念そうな顔をしていた。

「ちょっとアンタ達！　いつまでソイツと話しているのよ!？」

「そうです！　そんな人に案内させる必要はありません!」

『おやおや、姫路さんと島田さんではありませんか。会って早々に随分と辛辣な言葉ですなあ……（なるほど、そう言う事か）』

不機嫌な顔をする姫路と島田を見ると、明久達が何故私を学食に案内したがつている理由が分かった。

『ほお……。見た目だけは（美味しそうなお弁当ですね……（コイツ等は姫路の毒物料理から逃れる為の口実を作りたかつたんだな）』

私は姫路に近づいて弁当を見ると……。

「アンタ！　瑞希のお弁当を食べるつもり!？」

「貴方にあげるつもりはありません！　これは明久君達が食べるんです!」

姫路と島田は渡さないと言わんばかりに奥にしまう。

『いいや。（本当に見た目だけは（美味しそうだったから見ていただけだよ』

「そんな事言われても絶対にあげません!」

「そうよ！ アンタ何かに瑞希のお弁当を食べさせないんだから！」

『あらら……それは残念（チラッ……ニヤリ）』

私が明久達の方に向かって笑みを浮かべると……。

「……（最後の手が……）」

私を道連れにしようと考えていた明久達であったが、食べさせる事が出来なく完全に逃げられなくなった。

明久達が逃げられないと悟った時……。

「ねえ旅人さくん。アタシはいつまで待てばいいの？」

『ああ綾ちゃん。ゴメンゴメン、すっかり忘れていたよ』

綾がFクラスに入ってきて私に近づいて来た。

「酷いよ旅人さん、アタシを忘れるなんて」

『悪い悪い、呼ぼうと思っていたんだけど邪魔が入ってね……』

「……………」

綾が如何にも“不機嫌です！”と言う顔になっていた。

『そんな顔で睨まないでよ、折角の可愛い顔が台無しだよ？』

「……………フンッ（プイッ）」

『（あらら……拗ねちゃったか）』

「おい旅人、アンタが絵梨と一緒に来てるとは意外だな」

「絵梨ちゃん、何しているんですか？」

「そんなのと話すと碌な事が無いわよ？」

私と綾が会話をしている時に雄二と姫路と島田が加わって来る。

『ん？ ああ……3人はこの子と初対面だったな（ってか島田、お前にだけは言われたくないね）』

「久しぶりだね綾ちゃん」

「元気そうじゃのう……と言いたい所じゃが何やら不機嫌そうじゃ」

「……久しぶり」

「綾か……お前がFクラスに来るとはな」

綾の事を既に知っている明久・秀吉・ムツツリーニ・来牙は綾に声を掛けた。

「何言ってるんだ？ そいつは絵梨なんだろ？」

『私が言うより、本人に自己紹介させますか。綾ちゃん、ちょっと自己紹介してくれるかな？』

私は綾に自己紹介をするように言うが……。

「……………」

当の本人はまだ不機嫌中だった。

『綾ちゃん、私が悪かったから許してくれ』

「……………」

『……（やれやれ、仕方ない）今度のデートに綾ちゃんの手料理を食べてみたいな』

「……！（ピクッ！）」

『……でも今の綾ちゃんはとっても不機嫌だし、デートは無かった事にして明菜と……』

「（ギユウツ！）やだ！ アタシが旅人さんとデートするの！」

私がちよっとした意地悪を言い出すと、綾はすぐに食い付いて私に抱き付く。

「ははは……綾ちゃんはホントに旅人さんの事が好きなんだね」

「旅人殿も随分と意地の悪い事を言うのお……………」

「…………旅人さんに甘える綾ちゃんもいい（パシャパシャ）」

「綾は相変わらず、旅人さんにベッタリだな」

綾の事を知っている4人は微笑ましそうに見ており……ムツツリー  
ニは撮影をしているが。

「な…何だ？ いつもは来牙にベツタリな絵梨が旅人に？……」

「ど…どういう事なんでしょうか？」

「絵梨ってあんなキャラだったかしら？」

綾の事を知らない3人は信じられない目で見ていた。

『分かった分かった。じゃあ約束通り今度の休みにはデートしよう  
ね』

「うん！」

『それに綾ちゃんの手料理も楽しみにしているから』

「うん！ アタシ頑張る！」

『ハツハツハツハ、楽しみにしてるよ。それじゃあ、もう一回自己  
紹介して貰えるかな？』

「分かった。………初めまして、アタシは宮本綾です（ペコッ）」

綾は上機嫌になったので、私から離れて雄二達に自己紹介をする。

「宮本綾？ 絵梨じゃないのか？」

『この子は絵梨にそっくりだけど別人だよ』

「……………そう言えばアンタ、以前に工藤のそっくりさんを連れて来ていたな」

雄二は以前に私が愛奈を連れてきた事を思い出した。

『あれ？ 雄二って愛奈ちゃんと面識あったか？』

「アンタが以前Aクラスにいた時にちよつとな……………」

『ふ〜ん、霧島には見付からなかったの？』

「……………」

『その顔は見付かってお仕置きをされたみたいだね』

雄二の末路を容易に想像出来た私であつたが……………。

「明久君？ どうしてこの子の事を知っているんですか？ 私ちよつと知りたいんですけど」

「それはウチも是非聞きたいわね」

「え……………いや……………その」

バカ二人（姫路+島田）はすぐに明久を問い詰めていた。

「美波ちゃん、どうやら明久君にお仕置きをする必要がありますね」

「そうね。全く、ウチ等の知らない間に他の女の子と仲良く……何をしていたのかじっくりと聞かせて……」

『そのこの2人、明久に手を出したら私が速攻でお化け屋敷に連行するからな』

「「！！！！」」

姫路と島田が明久にお仕置きをしそうだったので、私はすぐに二人を阻止する。

「アンタ卑怯よ！　ウチ等が苦手なの知ってて！」

「そうです！　私達はただ明久君にちよつとしたお仕置きを……」

『それ以上言うとお敵対行為とみなして、本当にお化け屋敷に連行する。君達はエイ○アンと追いかけてこしたいのかな？』

「「……………」」

流石にお化けやエイリオンに追い掛けられたくないのか、すぐに静かになる姫路と島田。

『私に非道な真似をさせないでくれよ、お二人さん？』

「既に実行したアンタが言う台詞じゃないけどな」

『それは言わないでよ』

私の台詞に突っ込む来牙に、私は言い返すことが出来なかった。

『まあいいや。綾ちゃん、今度は年齢を言ってね』

「うん。実はアタシ……小学6年生の12歳です」

「おい！？マジかよ！？」

「」「(ピシッ！)」「」

綾が年齢を言うと、雄二は物凄く驚き、姫路と島田は優子と同様に一瞬で石化した。

「やっぱり、ああ言う反応するよね？」

「ワシ等も最初は驚いたのじゃ」

「……これは誰でも驚く」

「確かに、絵梨と同じ体格で小6だったら誰もが絶対驚くな」

3人の反応を見て明久達は合コンの出来事を思い出し……。

『雄二はともかく、姫路と島田は完全に現実逃避をしているねえ』

面白く見ていた私であった。



宮本綾 文月学園を訪れる ？

綾が小学生だと言って数分後、姫路と島田は未だ石になっていて話すことが出来ない状態であったので……。

『さてと、まだ石になっている2人の隙を見計らって、あそこにある兵器はこつだ（パチンツ）』

私が指を鳴らすと、姫路の弁当の中身が全て消えた。

『姫路の弁当の中身は転送しておいたから、これで一安心だろ？』

「……助かった（のじゃ）」

明久達は私の行動に物凄く感謝し、安堵するのであった。

「旅人さん、どうしてあのお姉ちゃんの作ったお弁当を消したの？」

『それはねえ、あの弁当は物凄くマズ……』

「ダメだよ旅人さん！！ここでそんな事を言っちゃー！！」

綾に姫路の弁当は不味いと言おうとしたが、明久がそれを阻止する。

『（何故だ？ 私はただ事実を言おうとしただけなのに）』

「（もし姫路さんが聞いていたら、凄く傷つくじゃないか！！だから言っちゃダメだって！！）」

『（私としては、深く傷ついて一生料理しないで貰いたいんだがね）』

小声で私に話しかけてダメと言ってくる明久の言い分に呆れる私であった。と言うか、コイツ等が何で姫路にそこまで気を遣うのかが理解出来ない。そんなに食べたくないなら事実を言えばいいのに。

「しかしまあ、チビツ子と一つしか歳が違わないのに、差が全然違うな」

雄二が姫路の弁当の話題から離れたかったのか、話を切り替えた。

『雄二、チビツ子って誰の事?』

「あそこでまだ石になってる島田の妹だ」

『島田の……? ああ、葉月ちゃんの事か』

雄二の台詞に私は思い出したかのように言う。

「何だお前、チビツ子と面識があるのか?」

『まあちよつとね……（ここで明久と一緒に家に行ったなんて言ったら絶対チクるんだろうな）』

「そ…そんな事より旅人さん。今日は何しに学園に来たの?」

私が雄二と話していると、明久が葉月の話題をこれ以上言わせない為に割りながら入って来た。

『綾ちゃんが文月学園に行って見たいと言う理由で来たんだよ』

「けど旅人さん、態々こんな汚いFクラスに来るか？ 見本を見せるならAクラスだろ？」

『綾ちゃん知っている人のクラスに行きたいって言ったんだよ』

「……確かに、綾の事を知っているのは俺達だけか」

私が来牙の質問に答えていると……。

「綾ちゃん、今日は絵梨ちゃんと同じでポニーテールなんだね。一瞬、絵梨ちゃんが来たかと思ったよ」

「汚い所じゃがゆっくりするといい」

「……俺はずっといても構わない」

秀吉とムツツリーニは綾と話し始めていた。

「この間ありがとう。明久お兄ちゃん、秀吉お兄ちゃん、康太お兄ちゃん（ペコッ）凄く楽しかったよ」

「僕達も楽しかったよ、綾ちゃん」

「礼には及ばんのじゃ」

「……寧ろこつちが礼を言いたい（パシャパシャ）」

『おいムツツリーニ、綾ちゃんの写真を撮るのは構わんが絶対に売

るなよ。もし売ったら……」

「……そんな事はしない。それに貴方とは敵対したくない」

『ならいい』

ムツツリーニは私に従順の姿勢をしながら言ったので、私はそれに安堵する。

「おい旅人、一つ聞きたいんだが」

『なんだい？』

「明久達が何でアイツの事を知ってんだ？ それと来牙も知っているみたいだが……」

『この間の合コンで知り合ったんだよ』

私が雄二の質問にサラッと答えると……。

「何！？ 合コンだと！？（ガシッ！）てめえ何で俺にも声を掛けなかつたんだ！？」

私の胸倉を掴んで抗議して来ると、綾や明久達が何事かと此方を見てる。

『いや、雄二には霧島と言う奥さんがいるからアウトだろ？』

「と言う事は何か！？ 明久は他の女と知り合ったのか！？」

『まあ、そう言う事になるね』

「……………俺が地獄に行っている最中に明久は天国……………ふざけんな明久〜〜！！！！」

「え？ 何！？ 何で雄二が逆ギレしてるの！？」

雄二は綾と話している明久に標的を変えて、胸倉を掴んでいた。

「てんめえ！ 俺が地獄を彷徨っている最中に一人だけ天国だと！？」

「何訳の分からない事を言ってるの！？」

「うるせえ〜〜！！！！ お前を殴らなければ俺の気が収まらねえ〜！！！！」

『やれやれ（スツ…ピツ）……………もしも霧島、雄二が明久に迫ろうとしているよ？』

「旅人！ てめえ何て事を！！！！」

私が携帯を使って霧島に連絡すると、雄二がすぐに反応して突っ掛かるうとしたが……………。

ガラッ！

「……………雄二、吉井との浮気は許さない」

「待て翔子！ 俺はただ『取り敢えずもう一回地獄に落ちろ（パチ



寄ってきた。

「あ……石化したお姉ちゃん達が元に戻った」

「ま……不味のじゃ！ 明久が姫路達に！」

傍で見ていた綾が姫路と島田が石から戻ったと言つと、秀吉がすぐに明久を助けようとしたが……。

「大丈夫だろ秀吉。旅人さんが傍にいるんだから」

「……あの人がいるなら問題ない」

「……ならよいのじゃが……」

来牙とムツツリーニ言われて秀吉は見守る事にした。

「姫路さん！ 美波！」

『何だ、何時の間にか復活したのか？』

「そんな事はどうでもいいわ。ねえアキ、合コンへ行ったのは本当なの？」

「もし本当でしたら、お仕置きをしなければいけませんね」

『アンタ等ってさ、私が言った警告を忘れていないかな？』

姫路と島田に先程の警告を忘れていないか聞こうとしたが……。







「「「……………」」」

「追いかけてっこ？」

綾を除く来牙達は明久と同様に絶句する。

「ねえ旅人さん、アタシにも見せて」

『綾ちゃん、悪いけど君には見せられないよ。これは君の苦手な化け物が出ているから』

「……………」

『いい子だ（ナデナデ）』

化け物と言ったら、綾は嫌そうな顔をして見るのを止めたので私は綾の頭を撫でた。

宮本綾 文月学園を訪れる ?

「しかしアンタはホントに酷な事をするよな。そんな事をするからアイツ等に敵視されるんだぞ？」

『あのバカ共の事など知った事か。それに……（チラッ）』

来牙の注意を流す私はムツツリーニを見て……。

「！！！！………何ですか？」

『元はと言えば、ムツツリーニが明久達のデートを盗聴して、FF F団に言わなければこんな事にはならなかったんだけどねえ』

「……………申し訳ない」

ちよつとした嫌味を込めて言うと、私に謝罪するムツツリーニであった。

『もし君がまだバカ共と一緒に加担してたら、雄二と同様にローズ達と遊ばせようかと考えていたんだけどねえ』

「！！！！……………ウプッ！（危なかった……………）」

想像して一瞬死にかけたムツツリーニは、敵に回さなくてよかったと心底思っていた。

「ダメだよ旅人さん！！ そんな事したらムツツリーニ商会が滅んじゃうよー！！」

「明久……」

『お前はそっちの方の心配かよ……』

明久の言い分に呆れる秀吉と私は溜息を吐くと、綾が私に聞いてくる。

「旅人さん、ムツツリーニ商会って何？」

『碌でもない商会だよ（綾ちゃんには教えたくないし）』

「？」

綾が分からない顔をしている時に……。

「絵梨ちゃんそっくりの子に萌え〜！！！！」

「綾ちゃんサイコ〜！！！！」

気絶していたFFF団の須川と武藤が綾に近寄ってきた。

「綾ちゃん！俺と付き合ってくれ！！」

「いいや！この武藤啓太が綾ちゃんを幸せにするから！！」

「え…え〜と」

『お前等は何考えてんだ？相手は小学生だぞ？』

綾に告白する須川と武藤に私は呆れる。

「けど綾ちゃんって、見た目が高校生だから何の違和感も無いよね？」

「そうじゃのう、綾がもしここで高校生と嘘を吐いても、すぐに信じてしまうのじゃ」

「……それに加えて、あのスタイルはモデル並み（パシャパシャ）」

「確かに。絵梨も中学の頃にはスカウトされていた事があつたな」

告白されるのは分からなくもないと思う明久達であった。

「……綾ちゃん！！俺と付き合ってくれ……！！！！」

『貴様等もか！？』

「た…旅人さん、この人たち何か怖いよ」（ギユウ）」

FFF団の気迫に押されてか、綾は私の背中に隠れながら抱きついた。

『おい貴様等、綾ちゃんを怖がらせるなよ。ってか小学生相手に告白する貴様等はロリコンか？』

「どけ旅人！ テメエに構ってられねえんだよ！！」

「綾ちゃん！ いつまでもそんな最低のクズ野郎なんかに関わると





「ひつく……旅人さんは……ぐすつ……クズじゃ……ひつく……ないもん……」

『綾ちゃんがそう言うてくれるだけで、私は嬉しいよ』

「うつく……旅人さんは……アタシの……ひつく……恩人だもん……うつつ……だから……ひつく……」

『ほらほら、もう泣かないで。そんなに泣くと折角の可愛い顔が台無しだよ（フキフキ）……それに（ギユウ）』

綾が流している涙をハンカチで拭いた後、私はそつと綾を抱きしめる。

「旅人さん？」

『君はもう泣かないって言ったんじゃないかな？』

「（ギユウツ！）……ごめんなさい。アタシ……約束破っちゃった……」

抱き締め返して謝る綾に私は頭を撫でる。

『約束をした覚えは無いけどねえ……まあいいや。じゃあ約束を破った罰として、今日の夕飯は綾ちゃん一人で作って貰うからね』

「え？ それって、旅人さんがアタシの……」

綾は離れて確認するかのように私の顔を見て……。



『嫌だつたら別な罰でもいいんだけど?』

「うん！ 作る！ アタシが旅人さんのご飯を作る！！ 旅人さんに一度食べて貰いたい物があるの！！」

綾は笑顔に戻り、私に食べて欲しい料理があるみたいだ。

『ほほう、何を作るの?』

「カレーライス！」

『へえそれは楽しみだ。じゃあ夕方頃に綾ちゃんの家に行くから』

「うん！ 分かった！」

『決まりだね。明久！ ちょっといいか?』

私は綾との話を終わると、近くにいる明久を呼ぶ。

「何ですか?」

『すまないけど、綾ちゃんを屋上に連れて行って貰えないかい?』

「え？ それは構いませんけど……でも僕たちまだ昼食が……」

『屋上には私の方で昼飯を用意しておいたが……』

「綾ちゃんを屋上に連れて行きます！！ さあ綾ちゃん！ 一緒に屋上に行こうね！」

「う…うん」

明久は飯があると分かった途端に綾を連れてすぐに屋上へと向かい……。

「ま…待つんじゃない！ ワシも一緒に行くのじゃ！」

「……俺も行く」

秀吉とムツツリー二も明久に続いて屋上に向かった。

『さてと、綾ちゃんがいなくなったから……早速本題に入ろうか』

「旅人さん、アンタFFF団を制裁する為に綾を屋上に連れて行かせたんだろ？」

『ご名答だよ来牙……（チラッ）』

私がFFF団を見ると……。

「嘘だ……綾ちゃんが俺達を……」

「大嫌いだなんて……」

「……嘘だ……！！……！！……」

綾に言われたのが相当に堪えていたのか、未だに引き摺っていた。

『では今回はこれで（スッ）』

「武器を使うなんて珍しいな。いつもは精神攻撃ばかりしているア  
ンタが……」

来牙は私が釘バットを出すのを珍しそうに見ている。

『今日は私自ら成敗してくれる。来牙、お前も早く屋上に行くんだ  
な。ここは間も無く戦場になるぞ?』

「そうさせてもらう。俺もまだ飯は食い終えてないからな」

『綾ちゃんには後で屋上に来るって伝えておいて』

「了解。なるべく早く終わらせてくれよ」

そして来牙は弁当を持って教室を出て屋上に向かった。

『では……ショータイムの始まりだ!!!!!!』

私は釘バットを持ってFFF団に襲い掛かり……。

バキッ! ドゴツ! ボゲツ! ドガツ! グシャツ!

「~~~~ギヤアアア~~~~!!!!!!」

「クハハハハハ!!!! 綾ちゃんを泣かせたバカ共には死だ!

!!!!!!」

「~~~~誰か助けて~~~~!!!!!!」

「

気絶するまでFFF団を殴り続けていた。

おまけ

FFF団を始末した私は屋上に向かっていった。

『さてと、バカ共の制裁が終わったから屋上に行くか……とその前に（パチンツ）』

私は指を鳴らして、前回消した姫路の弁当のおかずの一つであるカツサンドを出す。

『このカツサンド……見た目は本当に美味しそうなんだが毒物なんだよな〜〜』

『そのカツサンドは貰ったあ〜〜!!!!!!』

と、突然私が持っているカツサンドを翔が奪い取った。

『ん？ 翔か……久しぶりだな。ってかお前それは………』

「おい旅人さん！ よくも俺様を合コンに行かせなかったな！！  
アンタの所為で俺様は学園長のばーさんに告白しちまったじゃねえか！！ それと同時に文月新聞に俺様が老婆好きって噂が流れてん

だぞー！！ どうしてくれるんだコラー！！」

『そ…それは悪かったら、早くそのカツサンドを返してくれないかな？』

私は無駄だと分かりつつも翔に返せと要求したが……。

「断る！！ アンタのカツサンドは絶品だから、仕返しがてらに俺様が頂くぜ！！」

『！！ お…おい待て！！ それを食べたら……』

翔は要求を却下してカツサンドを食べて……。

「うゝむ、パンはしっとりしてカツの衣がザクザクして肉はグチャグチャで不味い……んごぼっ！」

『……………』

そして倒れた。

『翔、人の話は最後まで聞きましょうね。因みにそれは姫路が作ったカツサンドだったんだよ』

「（ピクツ…ピクツ…ピクツ）」

『仕方ない。屋上へ行く前に翔を蘇生させるか』

私は翔を担いで保健室へと向かって蘇生させた後、屋上へと向かった。

**宮本綾 文月学園を訪れる ? (後書き)**

以上、宮本綾の文月学園来訪話でした〜!!

次回は神のランディ達に会いに行きますのでお楽しみに!!

## 神の会合物語

ここはとある無の空間。

『(ピシュッ!) ここが無の空間か……』

私はあの連中に会う為、無の空間に来ていた。

『うわ〜ホントに何も無い所だねえ〜。アイツ等はここで一体何しているんだ? こんな面白味のおの字も無い所でよく生活できるなあ〜』

辺りを見回しても何も存在しない無の空間に、私は奴等がどういう風に過ごしているのが気になって、辺りをずっと見回している。

と、そんな時……。

「よく来たねえ〜旅人さん。歓迎するよ」

「きゃはははははっ! イカレ男がホントに来たよ!」

「おーほっほっほっほっ、御待ちしていましたわよ、旅人さん」

「ぶくくくく、ようこそ旅人様。貴方様の御要望通りに、コーヒートドーナッツをご用意致しました、ぶくくくくく」

『早速お出ましか……』

私が声がする方向を見ると4人の男女がいた。

カボチャの仮面を被り、ピエロのような服装をした少年。

全身にピンク色のドレスを羽織っており、髪の毛の色は銀色でブロードヘアが特徴を持つ少女。

紫と白の混じったようなドレスを着飾った貴婦人。

黒い服と帽子の老紳士のような姿の男性。

今のコイツ等に共通して言える事は、狂った笑みを浮かべて私を見ている事だ。かなり不愉快な笑みであるが、私は気にしないでいた。

『お初にお目に掛かります皆さん。私は“さすらいの旅人”です、以後お見知りおきを』

「そんな畏まった挨拶はいらないよ旅人さん。僕は君の事を知っているからね」

私の挨拶に不要だと言いつつランディ。

『知っていても挨拶をするのは基本じゃないですか？ ラヴィールン・デイルさん』

「ランディでいいよ。これから君と友達になるのにそんな呼び方は嫌だなあ。それにその喋り方も止めてくれる？ 聞いててイライラするからね」

ランディは笑みを浮かべながら私に近づき、親友の様な態度で接していた。



『……………あつそう、それじゃあ遠慮無く呼ばせて貰うよ、ランディ』  
「ギャハハハハッ！ そうそう、そう言う喋り方をして欲しいんだよ。畏まった喋り方をするとう腹の探りあいをするみたいで嫌なんだよねえ」

『じゃあ貴様もさっさとその嫌な笑い方は止めてくれないか？ 聞いててイライラするんだけど』

「おやあゝこれは手厳しいねえ。以後気をつけるよ、ヒッヒッヒッヒッヒッヒッ！」

『（言っても無駄か……………）』

笑い方を注意した所で直そうとはしないランディに、私は諦める事にする。

「さあ旅人さん、あそこにテーブルと椅子を用意しているから座って座って」

ランディは予め用意していた椅子に私は座った。

「所でアンタ、今日は一体何しに此処へ来たのかしら？ つまらない理由で来たら、すぐに消してやるからね」

『リリーナ・コルトバインか』

リリーナが私にどんな用件で来たかを聞いて来る。

「ふうん、あたしのフルネームはちゃんと知っているみたいね。もし知らなかったら食べ物に変えてやるうかと思っただけど、キャハハハハハッ!!」

機嫌が良くなったかのように大笑いをするリリーナであったが……。

『もう一つの名前があるだろ？ 寿 梨々奈ちゃん』

「……………今何て言った？」

前世の呼び名で言うと、さっきまで笑っていた声が急に無くなって私を睨み付けていた。

『寿 梨々奈と呼んだんだが、それが何か？』

「……………口の聞き方に気を付けた方がいいよ。あたしがその気になれば、アンタみたいなチンケな存在は一瞬で消せるんだからね」

『ほお？ どうやるんだ？』

「……………どうやらアンタはホントに消されて欲しいみたいね。いいわ、【さすらいの旅人は…】」

「リリーナ、そこまでにしておきなよ」

リリーナは【】を使おうとしたがランディが止めに入った事に更に機嫌が悪くなる。

「ちょっとランディ、邪魔しないでくれる？ この下等生物にお仕置きをしなきゃいけないんだから」

「僕は別に続けても構わないけど、【】を発動させたら大変な事になっていたよ。後ろを見てご覧」

「？……………！！！」

リリーナが後ろを見ると……………そこには宙に浮いている歪な形をした短剣がリリーナに狙いを定めていた。

『……………チツ！ランディの奴、気付いていたか……………』

「危なかったねえ〜リリーナ　僕が言わなかったら、刺されていたよ」

「キャハハハハハッ！　アンタ、こんな変な形をした短剣であたしを殺そうとしたの！？　バカみたい！！　アハハハハハハ！！」

リリーナが私を嘲笑うかのように笑っていたが……………。

『だったら試してみるか？』

「何？　あたしとやる気？　下等生物の分際であたしを殺そうだなんで……………やっぱりこの身の程知らずな下等生物は……………」

「リリーナ、僕は止めると言っているんだよ？」

再び止めに入ったランディはリリーナに近づいた。

「旅人さん、この物騒な短剣は返しておくよ（ポイツー！）」

『（パシッ！）……ランディ、お前はこの短剣を知っているのか？』

「勿論だよ　僕は神だからね、ヒヒヒヒヒヒ！」

『……フンッ』

「ちょっとランディ！　あの短剣が何だっけ言うの！？」

私とランディのやり取りにリリーナは憤慨して、ランディに問い詰めた。

「あれはねえ〜……この世界には存在しない武器である“破戒すへルールブレイカー”き全ての符”って言うんだよ。もし君がアレに刺さっていたら、僕との契約が完全に切れていたよ？　危なかったねえ〜」

「！……！！！」

「その時は元の人間に戻って寿　梨々奈に戻っていた……ってオチになっていたからねえ〜」

『（チッ！　ランディめ、余計な事を……）』

ランディが短剣の効力を暴露するとリリーナは凄く驚いている顔になっており、私は内心でランディに舌打ちをしていた。

「……………ふ〜ん、下等生物のクセに随分と生意気な武器を持っているのね。じゃあ【破戒すへき全ての符ルールブレイカー”は存在しない】っと」

リリーナが【】を使うと、私が持っていた短剣は何も無かったかのよう消える。

『（もうこの手は使えないか……）』

「さて……これでもう、アンタはもうあたしに生意気な口は……」  
お仕置きを再会しようと、リリーナは【】を使おうとしたが……。

「だからさぁリリーナ、今は引っ込んでいてくれないかな？ 旅人さんは僕の大事なお客さんだから。これ以上、僕の機嫌を損ねさせると……どうなるか分かってるよね？」

「（ビクッ！）」

ランディが途中から声を低くして言うと、リリーナは急に怯えだした。

「僕を怒らせないでくれよ……リリーナ？」

「……………わ……………分かったわよ。引っ込んでればいいんですよ！（スタスタ）」

リリーナはランディの気迫に負けたかのように、何処かへ行ってしまった。

「ごめんねえ〜旅人さん。リリーナが失礼な事を言って。彼女に代わって僕が謝罪するよ」

先程まで声を低くして言っていたランディが、元の陽気な声で私に話しかけてくる。

『よく言っよ、私とリリーナのやり取りを面白そうに見ていたくせに』

「あれ？ ばれちゃった？」

『ついでにそこにいる連中もな……』

私が近くにいる2人を見ると……。

「おーほっほっほっ、中々面白い物を見せて頂きましたわ」

「私はハラハラして見ていましたよ、ぷくくくくく」

マダム・セブンとアーネストは愉快と言わんばかりに笑っていた。

「二人とも、悪いけどちょっと外してくれないかな？ 旅人さんと二人つきりで話したいから」

「分かりましたわ。では旅人さん、私はこれで失礼致します」

マダム・セブンはいなくなり……。

「旅人様、コーヒーとドーナッツは置いておきますので、どうぞいゆっくり」

アーネストは私が頼んだコーヒーとドーナッツを置いて姿を消した。

「さあ、これでゆっくりと話せるねえ、旅人さん」

『……………私はそんなに長話をする気はないんだが？』

「遠慮しないでよ。僕と旅人さんの仲じゃないか、イッヒッヒッヒッヒッヒッ！」

『まだ会って間もないんだがな……』

「気にしない気にしない。じゃあ何から話そうかな？」

こうして私とランディの話が始まった。

おまけ

私がランディと話している時……。

「何よ何よ何よ！ ランディったら、あんな下等生物の味方をするなんて！！ バカみたい！！」

リリーナはランディが私を擁護するのに憤慨していた。

「あらあらリリーナちゃん。ご立腹ですわね」

憤慨しているリリーナにマダム・セブンが出てきて、からかうように言ってくる。

「おばさん、今のあたしは機嫌が悪いから何処かに行ってくれろ？」

「おばさんって誰の事です？　ここには美女と小娘の二人だけではありませんか？」

「……………あつそ。そんな事はどうでもいいからさつさと……………いい事思いついた」

マダム・セブンの不愉快な台詞にリリーナはいなくなれと言つが、途中から何かを考えて閃いたようだ。

「ねえマダム・セブン、ちょっと連れてきて欲しい人間がいるんだけど」

「誰を連れてきて欲しいのです？」

「あの下等生物が大切にしている宮本綾って人間をね……………」

何やら碌でも無い事を考えているリリーナであった。





『(ズズ……)……お前達と違って、相手を石像にしたり食べ物にはしていないがな』

「それはリリーナが勝手にやった事だ。僕は関係ないね」

『何処かの政治家みたいな回答だな(ズズ)……このコーヒー、結構いけるな』

ランデイの回答に突っ込みを入れながら、コーヒーの評価をする私であった。

「当然だよ、そのコーヒーやドーナッツはアーネストの自信作だからね。あ、僕もそのドーナッツを頂くよ(ヒョイ!)」

『おい、ソレは私が食べているドーナッツなんだが……』

「細かい事は気にしない気にしない (モグモグ……ゴックン) あゝ美味しかった」

『……まあいいか』

言った所で聞こうともしないと思った私は諦める事にして、ランデイにある事を聞こうと決める。

『私からも聞きたい事があるんだが?』

「いいよいいよ、何でも言ってご覧。人間の質問に答えるのが神の役目だからね、ギャハッハッハッハ!」

『……何か質問する気が失せるよ』

「そんな事言わないでよ、旅人さ〜ん。僕泣いちゃうよ？ アハハハハハハハ！」

『……………』

色々と茶化すランディに私は嫌気が差してきた。

『……………ランディ、私もあまり人の事は言えないが、お前はそうやって相手をイライラさせるのが好きなのか？』

「滅相も無い。僕はただ場を和ませているだけだよ、ヒヤハハハハハハ！」

『……………あつそう。それじゃあ場を和ませてくれたランディ君に質問していいかな？』

「ぐんぐんぐんぐん」

漸くランディは質問を聞いてくれるみたいだ。

『では一つ目だ……………お前はこれからどうするつもりだ？』

「んん〜？ 質問の意図が分からないなあ〜。もう少し具体的に言ってくれない？」

『（分かっているくせに……………）では言い直そう、お前は今後どう言う風に物語を弄るつもりだ？』

私の質問にランディは……………。

「ゴメンねえ、悪いけどその質問には答えられないよ。この先どうするかは後のお・た・の・し・み 何だから、ヒヤハハハハハハハハ！」

『だろうな、そう言うと思ったよ』

予想通りと言うべき回答が来た事に、私は対して驚きもしなかった。それにコイツが物語について、そう簡単に答えてくれず、はぐらかされるのがオチだと思っていたのだから。

「他に何か質問は？」

『……………二つ目……………お前はこれからも人間の不幸を操って見続けるのか？』

「当然だよ。僕にとっては最高の暇潰しなんだから。君にも見せたかったなあ、ほんの少し前まで仲の良かった家族が簡単にお互いを憎しみ合って殺し合う所をねえ、イヒヒヒヒヒ！」

『私はそんな悪趣味に付き合う気は毛頭無い』

相手の人生を弄んで面白く笑うランディに私は顔を顰める。

「悪趣味だなんて酷いなあ。君だってその気になれば出来るんでしょ？ 人を憎しみ合わせたり、そして思いのままに殺し合わせる事も……………」

『……………やった事が無いから分からね。けど私としてはお前達が憎しみ合って殺し合う所を見て見たいがな』

「おんやあゝ？ 君も随分と悪趣味な事を言うねえゝ、ヒツヒツヒツヒツヒ」

ランディは私の返答に気を悪くせず、寧ろ面白がっていた。

「お前がその内、人間の不幸に興味を持たなくなったら、神同士を争わせるんじゃないのか？ 例えば……負の感情を抱いている連中を仮初めの神にして、生き残った物だけが本物の神になれると言う醜い争いをさせる最悪なゲームを。貴様が考えそうなゲームを考え見てたが、どうかな？」

「……………クククククククク……………ヒヒヒヒヒヒヒ……………アハハハハハハハハハハ！！ それは面白そうだねえゝ！！ 是非とも候補の一つとして考えておくよ、アハハハハハハハ！」

名案だと言わんばかりにランディは大笑いをする。私は本当にコイツがその内やりそうだと思っていた。

「いやゝ君と話すのはホントに面白いなあゝ。僕が考えてもいなかっただ事を言ってくれるなんて、イゝヒツヒツヒツヒツヒ！」

「人間に興味が無くなったら本気でやるつもりか？」

「さあゝ？ どうだろうねえゝ、でも君が言ったゲームをやるかもしれないねえゝ、ヒヤハハハハハハハ！」

「勝手にしてくれ」

「もしやるとしたら、かなり先の話になると思うけどねえゝ、アハ

ハハハハハ！」

ランディが本当に神同士を殺し合わせるかどうかは分からないが、言いたい事を言った私にとってはどうでもいい事であった。

「話がちょっと逸れちゃったけど、他に質問は？」

『もう無い、私からの質問は以上だ』

「え〜？ 残念だなぁ〜、他にも色々な質問を期待していたのにい  
」

『質問をした所で茶化したり、はぐらかすからな』

「アウチ！ これは手厳しいね」

痛い所を突かれたかのようにランディは顔を背ける。

『そう思っただったら、一つ目の質問に答えて欲しいんだがね』

「残念でした〜それは答えられないよ〜、ヒヤハハハハハハ！」

『あつそ（モグモグ……ゴックン……ズズ）』

私はドーナッツを食べた後にコーヒーを綴った。

「ああ！ 最後の一つは僕が頂こうかと思ってたのに！」

『何を勘違いしているのかは知らんが、これは私のだ。お前のじゃない』

「酷いなあ、この美少年の僕にドーナツの一つも分けてくれないなんて……鬼！ 悪魔！」

『それはお前だ』

「失礼な！ 神である僕に向かって悪魔だなんて！ 僕怒っちゃうよ！ プンプン！」

『……………そんなカボチャの仮面を被って怒ってるって言われてもねえ』

仮面をしているランディに怒っているとわかれても今一実感が湧かない。

「……………やっぱり分からない？」

『当たり前だ』

「……………あはっ これは失礼しました、イッヒッヒッヒ！」

取り繕うかの様に笑うランディだった。

「じゃあ気を取り直して……質問は？」

『だからもう無いって言ったろ』

「あらそうだったけ？ ごめんねえ、忘れていたよ、ヒヤハハハハハハ！」

『……はあつ。もうその笑い声は聞き慣れたよ』

先程までランディの笑い声に嫌気が差していた私であったが、ずっと聞き続けた為に耳が慣れた。

『話はもう済んだから、そろそろ帰っていいか？』

「ええ！？ もうちょっといようよ！ 久しぶりのお客さんなんだから！」

『こんな何も無い空間にいて何をすればいいんだ？』

「そりゃあ僕と遊んで欲しいよ」

『………此处でか？』

「そっだよ」

コイツは本気で私と遊んで欲しいみたいだ。

『………何だったらゲームでもするか？ 神であるお前が、下等な世界の物に興味は無いと思うが……』

「いいよ。偶には人間の遊びに付き合うのも悪くないね」

『じゃあ格闘ゲームでいいか？』

「いいよ、早く出して」

『へいへい（パチンッ！）』



私が指を鳴らすと、ゲーム機とテレビが出てきた。

「うわあ〜便利な能力だねえ〜。僕も持ってみようかな、その能力。何たって僕は神だからね、ウヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

『さっさと始めるぞ』

「オツケ〜、誰を使ってみようかな〜？」

こうして、私 VS ランディのゲーム対決が始まった。

おまけ

私とランディがゲームをしている時……。

「あ…あれ？ アタシさっきまで家にいたのに……」「ココは？」

綾が無の空間にいた。

「お〜ほっほっほっほ。連れてきましたわよ、リリーナちゃん」

「ありがとう、マダム・セブン。後はあたしがやるから外してくれる？」

「わかりましたわ」

「!?!?!」

背後から声が聞こえた綾が後ろを向くと、ドレスを着ている女性と女の子がいたが、女性がいなくなった。

「あ…貴方は誰ですか？」

「……………ふん、ホントに絵梨ちゃんにそっくりだねえ、キャハハハハハ！」

「だ…だから……………貴方は一体……………？」

綾が怯えながらリリーナに誰かと聞いても……………。

「あゝあ……………絵梨ちゃん本人じゃないのが惜しいけど、アタシのコレクションにするには丁度いいわね」

リリーナは答えてくれなかった。

「……………ですから、貴方は一体誰なんですか!?!」

「うるさいわね! 人間の分際であたしに質問しないでくれる!」

「ひっ!」

リリーナが怒鳴ると綾は怯えた声を出す。

「あらゴメンなさい、あなたが余りにもうるさかったから怒鳴っちゃった、キャハハハハハ！」

「……………」

「でも安心して、貴方はあたしのコレクションにするから」

「こ…コレクション?」

「フフフ…それは後で分かるわ。でもその前に(スッ)」

「…!(ビクッ)」

リリーナが綾の頬を触ると綾がビクッと体が震える。

「あたしに恥を掻かせた下等生物をお仕置きしてから、コレクションにさせてもらっわ」

「え?」

「フフフフフ…見てなさい下等生物、大事な者が失っていく絶望をあたしが教えてあげるわ、キャハハハハハハ!!」

リリーナは私に対する仕返しを思いついて、大きな下品な笑い声をあげていると……………。

「おやおや、これはランディ様に報告する必要がありますね」

2人のやり取りを見ていたアーネストは、ランディに報告をする為に姿を消したのであった。

神の会合物語 ？（後書き）

感想者が少なくて寂しいです。

感想プリ~~~~ズ!!!!!!

神の会合物語 ? (前書き)

連載して1カ月半になりました。

今更ですが、総合PV50000 ユニークアクセス数7000を  
突破しました。

こんな駄作を読んで頂き、誠に有難う御座います m | | m

## 神の会合物語 ？

リリーナが私に対する復讐を画策している時に私はランディとゲームをしている。

『おい！ お前このゲーム初めてやるくせに何でそんなに巧いんだよ！（カタカタ）』

「ヒヤハハハハ！ そりゃあ僕は神だからねえ〜！ こんなのは簡単さ！（カタカタ）」

因みにやっているゲームは「機動戦士ガンダムSEED DESTINY 連合vs.Z・A・F・T・I I P L U S」である。私はキラ・ヤマトでストライクフリーダムを操り、ランディはシン・アスカでデステイニーだ。

「アンタって人は〜！（カタカタ）」

『……………お前このゲームのアニメを見たのか？（カタカタ）』

「さあねえ〜。けど旅人さんが使ってるキラって可笑しいよねえ〜。『撃ちたくないんだ！』って言うてるくせに、ドバドバ撃っちゃっているから全然説得力無いんだよねえ〜、アハハハハ！（カタカタ）」

『私に言われても困るんだがね（カタカタ）』

私とランディは話しながらも対戦しており、戦況はお互いの体力ゲージが無くなる寸前だった。

「これで止めだ！（カタカタ）」

『あ……』

ストライクフリーダムがLOSEと赤く表示し、デステイニーがWINと青く表示すると……。

『負けた……』

『残念だったねえ〜旅人さん、ギャハハハハハ！』

ランディは大変嬉しそうに喜んでいた。

『もうちょっとで勝てるかと思っていたんだけどねえ〜』

「チツチツチ、神様である僕に勝とうだなんて100年早いよ、アツハツハツハツハ〜！」

『……………その割には随分と真剣な顔して、冷や汗を掻いていたみたいだが？』

「（ギクツ！）……………な…何の事かな〜？（汗）〜」

先程とはうって変わりランディは目を逸らして口笛を吹いている。

『やっぱり焦っていたんだな』

「あ…焦ってなんかいないよ！！ 旅人さんの見間違いじゃないの！？」

『……………そう言う事にしておきますか』

「何その目は！？ 僕は決して焦っていないんだからね！！」

『はいはい、分かりましたよ（こいつが必死になる顔を見る事が出来るとは…………）』

ランディの必死な顔に私はちょっとした収穫があったと思い、内心笑っていた。

「信じていないでしょ旅人さん！？ じゃあもう一回勝負しようよ！ 僕が旅人さんに華麗に勝つ所を見せてあげるから！」

再びコントローラーを持って再戦しようとするランディだったが……。

『残念だけど、ここまでだ。私はもう帰るから』

「ええ！？ もう帰っちゃうの！？」

私が帰るのに凄く不満顔だった。

「ねえ旅人さ〜ん！ もうちょっと僕に付き合ってよ〜！」

『その内、また会いに行くから（…………いつになるかは知らんがな）』

「え…………？」

ランディが引き止める事に私は少々疑問を抱く。



『つつか、神のお前が何故私を引き止める？ 遊び相手は他にもいるだろ？』

「だって旅人さんと一緒だと面白いんだもん、ヒヤハハハハハハ！」

『……………また今度遊びに来るから、私はこれにて失礼するよ。ついでにそのゲーム機とテレビはやるから（スタスタ）』

私は立ち上がって颯爽と去って行くと、ランディは膨れっ面になる。

「ちえ！ つまんないな。……………でもいつその事、今度来た時には簡単に倒せるよう練習しとこ（カタカタ）」

私が去っていくのに不満そうなランディだったが、私が用意したゲームを一人でやり始めた。

ランディが一人ゲームをはじめて30分後。

「ランディ様、ちょっとよろしいですか？」

「何の用？ 僕は今忙しいんだけど（カタカタ）」

アーネストが声を掛けてきた事にランディは顔を顰める。

「お楽しみの所を邪魔をして申し訳ありません。ですが、ご報告する事が御座います」

「報告？（カタカタ）」

「ええ。リリーナ様が旅人様の友人を連れて良からぬ事をしています」

「（ピクッ）……………」

アーネストの報告に、ランディはコントローラーを動かしていた手を止める。

「……………それは本当かい？」

「はい、現在リリーナ様が旅人様の友人を利用して殺そうと……………」

「ふ〜ん」

ランディは完全にゲームを止めて、アーネストの報告を聞いていた。

時間を30分前に遡り、私がリリーナと会う直前の事。

『やれやれ、アイツは私と話している時も全く隙を見せなかったな』

ランディとの会話で隙を見せたら私は即座に仕掛けようとしたが、簡単には出来なかった。無論、奴も同様に私が隙を見せたら即座に攻撃していただろう。今回はお互い警戒をしてお喋りだけで終わった事にちょっと悔しかった。けれどアイツの必死な顔を見れた

のは意外であり、ちょっとした収穫だったので、私は多少の目的を達成させた事に嬉しく思う。神を必死にさせる事が出来たなら、今回はこれで十分と満足する私であった。

『さてと、さっさと無の空間から出るとしますか』

私は姿を消そうとしたが……。

「キャハハハハハ！ 何処へ行くの下等生物。あたしの用はまだ済んでいないけど？」

リリーナが私の前に現れた。

『リリーナか。私はお前に用は無いんだが？』

「アンタには無くても、あたしはあるの。これからアンタにお仕置きをするんだから、キャハハハハハ！」

『お仕置きだと？』

「ええそうよ。あたしに恥を掻かせた報いを受けて貰うわ」

『……………恥とは私の目の前でランディに怒られた事かな？ それとも、神としてのプライドを傷つけられた事か？』

「両方よ」

『……………はあつ。女神様がそんな理由でお仕置きとはな……………馬鹿馬鹿しい』

リリーナの理由に私は少し呆れた。

「口の聞き方に気を付けなさい、下等生物。女神であるアタシに無礼じゃない？」

「ふんっ！ ランデイがいないと随分と強気だなクソガキ。アイツの前では子犬みたいにビクビクと震えていたくせに」

私の挑発にリリーナは頬をヒクヒクと動かし、米神には青筋を浮かべている。

「…………… ホンツトにアンタは人の神経を逆撫でするのが得意みたいね。あたしがその気になればアンタみたいな下等生物の命なんか一瞬で消せるのに」

「一瞬か…………… ならばお前が【】を発動させる前に、私が一瞬でお前の懐に入って喉を潰してやるよ。お前の能力は確かに凄いが、口で言わなければ【】を発動する事が出来ないんだろ？ それにお前の身体能力は人間と大して変わらない筈だ。もし何処か間違っているところがあつたら教えてくれ」

「……………」

『沈黙は肯定と受け取らせてもらつよ』

私の指摘でリリーナは何も言えずに黙っており、私は内心で勝機があると思つた。

「…………… フンッ！ 下等生物のクセに、随分と頭が回るみたいね」

『じゃあ、ここで一戦やるか？ お前の【】が速いか、私がお前の懐に入るのが速いか……（スッ）』

私は構えて、リリーナの懐に入ろうとするが……

「勘違いしないで、下等生物の相手はアタシじゃない。別の人間が戦うわ」

『何？』

「【出てきなさい、宮本綾ちゃん】」

『！……！……！』

リリーナが【】を発動させると、私の目の前には綾が現れた。

『綾ちゃん！？ 何で君が此処に！？』

「……………」

「キャハハハハハ！ 良い顔ねえ〜下等生物」

『クソガキ！ 貴様、綾ちゃんに何をした！？』

綾が反応しない事に、私はリリーナを怒鳴るかのように聞いた。

「この子はアタシの操り人形にしているのよ、キャハハハハハハ！」

『ふざけるな……！ 綾ちゃんは関係ないだろ……！』



ハ！」

『くっ！』

私がやるうとした事をリリーナは【】を使って先手を打った。

「さあ下等生物、綾ちゃんと存分に戦ってね。さあ綾ちゃん、【持っているナイフで“さすらいの旅人”の心臓を貫いて】」

「……………分かりました（スツ）」

操られている綾はリリーナの【】でナイフを持って構える。

『……………仕方ないな（綾ちゃんには大変申し訳無いが、気絶させるしか無いな）』

「もうついでに言うておくけど、気絶させた所で無駄よ。【綾ちゃん気絶しても再度起き上がる】から、キャハハハハハ！」

『……………くそっ！（考えている事はお見通しか）』

「さあ、下等生物同士殺し合いなさい！！」

リリーナの合図で綾は動き始めた。

## 神の会合物語 ？

リリーナが綾を使って私に襲わせて10分後……。

『止めるんだ綾ちゃん！（パチンッ！…パチンッ！）』

「……………」

私は綾の攻撃をかわし続けて何度も指を鳴らし、元に戻そうとしても効果は無かった。

「キャハハハハハハ！ 無駄よ下等生物！ 【私以外の能力では元に戻せない】から！ キャハハハハハ！」

『貴様！！』

「でもおゝ、やっぱり綾ちゃん程度の動きじゃ全然当たらないわねえゝ。つまんなゝい！」

リリーナは最初、私が綾の攻撃をかわし続けるのに楽しんで見ているが、段々と飽き始めていた。

「じゃあごうしよう 【さすらいの旅人の体が10倍重くなる】ってどうかしら？ キャハハハハハハ！」

『（ズシッ！）ぐっ！…！』



リリーナの【】で私の体が物凄く重くなり、思うように動けなかった。

「……………隙あり（ヒュッ！）」

『くっ！…………（ドスッ！）うぐっ！！』

綾がナイフを使って私の左胸を貫こうとしたが、私は体をずらして左腕を盾にした。

『だ…だが！！（ガシッ！）』

「……………（ググググ）」

「あら残念　左腕に刺さっちゃったみたいねえ、キャハハハハハハハ！」

綾に左腕を刺された私にがっかりするリリーナであったが、私はすぐに片腕を使って綾の腕を掴んでいた。

『せめてナイフだけでも……………』

私はナイフを消そうと、刺さっている左腕で指を鳴らそうとしたが……………。

「させないわよ。【さすらいの旅人の両腕は麻痺する】」

『！！！！！　う…腕が……………』

私の両腕が完全に麻痺して動く事が出来なかった。

「両腕が麻痺したら、そのチンケな能力が使えないのよねえ、アハハハハハ！」

『うっ……くそ……』

「さあ綾ちゃん、早く下等生物の心臓を貫きなさい」

「……………（グググググ）」

綾は私が掴んだ腕の握力が強い為に離す事が出来なかった。

「離す事が出来ないの？ 腕を麻痺させた所為で離せなくなっちゃったのね……………しょうがないわねえ、【綾ちゃんは一度アタシの所までテレポートする】」

リリーナが【】を使うと、綾は一度姿を消してリリーナの所まで戻すと……………。

「ついでだから、【さすらいの旅人の両足も麻痺する】って事にしておこーうっ」と

『うぐっ！』

そして私の両足までもが動けなくした。

「キャハハハハハ！ 無様ね下等生物！ これでチェックメイトよー！」

『……………』

リリーナは動く事が出来ない私を見て大きく嘲笑うと、私はリリーナを睨む。

「所詮、下等生物如きが女神であるアタシに挑む事自体が大間違いなのよ！ キヤハハハハハハ！」

『……………』

「無様な顔ね。その顔がすぐ綾ちゃんに刺されて、絶命するのを考えるとゾクゾクしちゃう」

『……………』

「本当だったら、すぐにでも【】を使って消そうかと思っていたけど、大切なお友達に殺される方がロマンチックよねえ、キヤハハハハハ！」

『……………』

陶醉しているリリーナの言葉に私はただ黙っていた。

「ああ〜アタシってホントに優しい女神様よねえ。【】で殺せるのに、それをやらないなんて…………アタシはやっぱり慈悲深く、強くて美しい女神様よ、ア〜ハッハッハッハッハ！」

『……………よく言う、借り物の力で女神を気取っているだけのクソガキが（ボソッ）……………』

「あらあ？ 今何か言ったかしら？」

リリーナは私の小声が聞こえていたみたいだ。

「……………貴様は元々、綾ちゃんと同じ人間だったんだろ？」

「……………確かにそうね。けれどそれは大昔の話、今のアタシはランディに力を貰って心優しい女神様になったわよ、キャハハハハハ！」

「それじゃあ貴様は、力さえ無ければ唯の人間である寿 梨々奈か」

「……………」

話す立場が替わったかのように、今度はリリーナが黙り私が話しました。

「その【】はランディによって得た力なんだろ？ 他人から貰った力で満足しきっている貴様が女神とは聞いて呆れる。まあソレは他の奴にも言える事だがな……………」

「……………」

「女神になる前までは、ちっぽけで無力な人間だったんだろ？」

「……………」

「貴様がどれだけ不幸な境遇にあったのかは知らん。だがな、貴様以上に不幸な目に遭っている人間はたくさんいるんだぞ？ 皆がこう思っている筈、“自分に力があれば”とな」

「……………うるさい」

『けれど貴様は、ランディから力を得ると、女神を気取って人間を不幸にさせる。貴様のやっている事は、今までの溜まりに溜まった不満の憂さ晴らしをやっているに過ぎん。断じて女神ではない』

「うるさい」

『今の貴様は、力に溺れて陶醉している自惚れやさんも良い所だ。いや、自分を不幸なヒロインと気取ってる我侷なガキと言った方が正しいか』

「うるさい！！！！いつまで喋ってるのよ！？」

リリーナは大きな声で出して憤慨していた。

「さつきから黙って聞いていれば言いたい放題ね！アタシが憂さ晴らしをしている？力に溺れている？不幸なヒロインを気取ってる？何を根拠にそんな事が言えるのよ！？」

『私は思った事を言ったまでだ』

私の言葉にリリーナは更に憤慨して睨んでくる。

「アンタ自分が何を言っているのか分かってる？自分から殺して下さいと言っているも同然よ！アンタは余程、アタシに殺されて欲しいみたいね！！」

『ほう……………綾ちゃんを使って私を殺すんじゃ無かったのか？』

「もう遊びは止めよ！ アンタはアタシが直々に殺してやるわ！！」  
私に言われたのが相当頭に来ているのか、リリーナは私を殺そうとする殺意に燃えていた。

「【さつさと元に戻りなさい！ 宮本綾！】」

「……………え？ ……あれ？ ……アタシ……………」

リリーナが【】を使うと、先程まで無言だった綾が元に戻った。

『どうやら元に戻ったみたいだな、綾ちゃん』

「え？ ……た…旅人さん！！（ダツ！）」

綾はすぐに私を見つけると、近くににいるリリーナを無視してすぐに近づく。

『無事で何よりだよ』

「な…何で旅人さんの腕にナイフが刺さっているの？」

『大丈夫、大して痛く無いから』

私が心配無用だと綾に言うが……………。

「フッフ……………綾ちゃんにナイフで刺された腕が大した事が無いねえ、キヤハハハハハハ！」

リリーナが態と大きな声を出して綾の仕業だと言う。

『貴様!!』

「え? ……それ…どういう事? ……アタシが……旅人さんの腕を……刺した?」

「そうよ、綾ちゃんがやったのよ」

リリーナはいい事を思いついたと言わんばかりの顔をして、綾に話しかけた。

『綾ちゃん!! 奴の言葉を聞くな!!』

「貴方のだ〜い好きな旅人さんの腕を刺したのは貴方なのよ、綾ちゃん もうホントに信じられない 自分の大好きな人を刺しちゃうんだから。これって恩を仇で返すって言うのかしら? キヤハハハハ!!」

「……嘘……アタシが……旅人さんに……そんな事を……」

『綾ちゃん!! 君は何も悪くない!! だから……』

私が必死に説得しようとしたが……。

「いや……いや……いや……いやあ~~~~~!!……!! (ダッ  
!……)」

綾は私から目を背けて離れると、何処かへと行ってしまった。

『綾ちゃん!!……』

「あらら〜、現実逃避をしちゃったみたいねえ〜、キヤハハハハハハハ〜！」

『このクソガキ〜！』

「まあいいわ、あの子は後で殺してあげるから。まずは下等生物の方から始末しなきゃ」

リリーナは私の罵倒を無視して近づく。

「女神であるアタシを侮辱した罪は死で償ってもらおうよ。愚かな下等生物さん」

『……………クソガキ、貴様のやった事は絶対に許さんぞ……………！』

「フフフフ……………すぐに殺してあ・げ・る」

笑みを浮かべるリリーナに私はある事を言う。

『……………なら私はクソガキに味遭わせてやるよ。“奈落の底”をな……………貴様が何を言っても容赦なく実行してやる』

「ふ〜ん。今のアンタはアタシの【】で能力も使えず、動く事も出来ないのにならぬってアタシを倒すの？」

『………………………………………』

「どつやらただの負け惜しみみたいね。それじゃあ（ズツ！）」







私の声が聞こえたと同時に、いきなり現れた鎖がリリーナの首を思いつきり絞め始めていた。

「な…何なのよこれ！？（ググググ！！）あああああ~~~~！！！！」

『ただでは済まさんぞ、このクソガキが……！！』

「……な…何で？ ……あ…アンタは……確かに……死んだ筈……（ググググ！）ぐあああああ~~~~！！！！」

『それはお前が勝手に思い込んでいただけだろ？』

リリーナは私の顔を見ると信じられない顔をしていたが、すぐに鎖がリリーナの首をさらに絞める。

「あ……あああ……何ですよ？ ……アンタの……ぐああ！……胸を……アタシが……貫いた筈……（グギギギ！！）ああああ~~~~！！！！」

天の鎖  
エルキドウで首に巻き付かれながらも、リリーナは振り絞りながら声を出していた。

『ああ、お前が貫いたのはこれだ（ゴソゴソ……ポトツ）』

私は懐からある物を取り出して床に落とした。

「！！！！……に……肉と……袋……（ググググ！！）あああああ~~~~！！！！！！！！」

『豚肉と輸血袋だ。貴様が私の胸を貫いた手応えと出血多量で死んだと思い込ませる為の小道具だ』

「……………が……………ああ……………」

リリーナは首に巻き付いている鎖を外そうとするが、その度に鎖の巻き付ける力が強くなり言葉が出せずになっており、一瞬意識が飛びそうになったが何とか凌ぐ。そんな苦しんでいるリリーナを嘲笑うかのように私は侮蔑の笑みを浮かべる。

『感謝するよりリリーナ、私の思惑通りに動いてくれて』

「な…何ですって…（グギギギギギ！！！！）があああ~~~~！！！！！！」

『ああ、エルキドウ天の鎖が首に巻きつけられて上手く喋れないんだったね。心の声を読んでやるから、早く言ったら？』

「あ……………がが……………（アタシが何時アタシの思惑通りに動かされたのよ！?）」

『貴様は私が仕掛けた催眠術によって踊らされていたんだよ。あたかも自分の意思で私を殺したと思わせる為に』

「！！！！（け…けどアタシ、アタシに向けて力を使っていないですよ！?）」

『使ったよ、綾ちゃんが私に攻撃している時にね』

「！！！！！！」

リリーナは首に鎖が巻き付けられていながらも、あの時の事を思い出した。

《止めるんだ綾ちゃん！（パチンツ！…パチンツ！）》

《……………》

《キャハハハハハハ！ 無駄よ下等生物！ 【私以外の能力では元に戻せない】から！ キャハハハハハ！》

「ぐ…ああ…（あ…あの時に…）」

『思い出したみたいだな。そう、貴様はその時に私が綾ちゃんを元に戻そうと力を使ったと思っていたみたいだが、それは違う。あれは貴様に使ったんだよ、私の思い通りに動いてくれる催眠術をな』

効くかどうかは不安だったがと私は内心で付け足す。

『綾ちゃんには大変悪い事をしたよ。貴様を騙すには、どうしても綾ちゃんが私を傷つける必要があった。そうでもしなければ、私の催眠術から逃れてしまうからな』

「が……がが……あああ……」

『私は綾ちゃんに後で土下座をしなければいけないが……その前にリリーナ、貴様を“奈落の底”に叩き落してやる。綾ちゃんを此処に呼び出し、怖がらせた報いを受けて貰うぞ』

私は鎖を首に巻かれて抵抗しているリリーナにこれ以上無い位の怒りをぶつけていた。

『ついでだから、お前の無様な姿を見る為に、糞虫状態にさせてやるよ（パチンツ！）』

「！……！！」

私が指を鳴らすと、エルキドウはリリーナの首から離れて体中に巻き付き、リリーナは糞虫状態になって転がっていた。

「くっ！ この下等生物が！ 【この鎖はアタシから……】」

『悪いけど、もうそれは使わせない（パチンツ！）』

「！……！！（こ……声が出ない！）」

私が指を鳴らすと、【】を使おうとしていたリリーナが突然喋れなくなつた。

『リリーナ、確かに貴様の力は恐ろしい。だが声さえ封じればザコ同然だ。それじゃあ……ショータイムの始まりだ（パチンツ！）』

私が指を鳴らすと……。

「お呼びですかあゝ旅人様」

「「「旅人様」」」

「！！！！（き…気持ち悪！！）」

私の配下で、気持ち悪い化粧をして筋肉隆々でヒモパンしか穿いていないローズと同様のオカマ達が現れた。

『今からお前達にやって貰いたい事がある、この糞虫になっているクソガキにお前達のアレを浴びさせてやれ』

「分かりまし…！！ 旅人様！ その腕は！？」

ローズは私の左腕から血が出ていることに目を大きく見開いた。

『私の腕はどうでもいいから、早く配置に付け』

「し…しかし…」

『何度も同じ事を言わせるなよローズ。私は今、物凄く機嫌が悪いんだ』

「……しよ…承知しましたわ。皆、配置に付きなさい！」

「「「はい！」」」

ローズ達は私の指示通りに動き、リリーナの回りに立つ。

「！！！！！！（か…下等生物！！ アンタはこの醜い化け物共でアタ







キスをされているのが分かると心の声が悲鳴にならない声を出していた。

「……………」

『リリーナ、まだ気絶しちゃダメだよ（パチンツ！）』

「……！！（……この人でなし……！！ 鬼！ 悪魔……！！）」

また気絶したリリーナを私が起こすと、リリーナは私を罵り始めた。

『ふんっ！ 私を殺そうとしたクソガキに言われたくないね。それじゃあローズ達、最後の仕上げと行こうか』

「……は……い（ニギニギ）……あ……ああ……」「」「」

「……！！（ちよ……ちよっと、何をするつもりよ……？）」

ローズは持っている蓑虫リリーナを降ろして他のオカマ達と同様にアレを握り始めると、リリーナは言て無いほどの恐怖を感じた。

そして5分後

「あ……ああ……そ……そろそろ……イキそうになってきた……（ニギニギ……）」

「……ワタシも……（ニギニギ……）」

『よし、ソイツの顔を目掛けて当ててやれよ』

「くくくはいい（ニギニギ）」「」「」

「……………（い…嫌よ…！ そんな汚い物をアタシの美しい顔に向けないで……………）」

リリーナはローズ達の行動が分かり、ジタバタと暴れていた。

『言い忘れていたけど、エルキドウは絶対天の鎖に解けないぞ。ランディから貰った力とは言え、神の力を持っている貴様では絶対無理だから』

「……………！！！」

私の言葉を聞いていないのか、リリーナは未だにジタバタと抵抗していた。

「た…旅人様……………ワタシ……………もう……………（ニギニギ！）」

「くくくワタシもです（ニギニギ！）」「」「」

『それじゃアカウントダウンといきますか』

「……………！！（止めて……………！！……………！！）」

リリーナの必死な懇願に私は無視してアカウントダウンを言い始める。

『5……………4……………3……………』



『……………』

ローズ達は欲望を出した後、小便まで出した……それもリリーナに目掛けて。

「……………はあくすつきりした〜」

『……………ま、いつか。コイツは暫くショックで寝込んでいるだろうし』

小便をかけられたリリーナを見て、私は結果オーライと片付ける。

『よくやったお前達、お蔭でコイツに対する私の恨みが晴れたよ』

「……………ありがとうございます」

ローズ達は脱いだヒモパンを穿きながら礼を言っている。

『さて、お前達を戻すでしょう……………』

「た…旅人様！ その前に腕を！」

ローズが私の左腕を見ようとしたが……………。

『それは綾ちゃんを連れ戻して、此処から出た後にするよ』

私は後で良いと突っ撥ねる。

「綾ちゃんが此処にいるんですか!?!」

『ああ。場所は分かっているから私が連れ戻してくる。お前達は戻った後、私の腕を治療する為の医療道具を用意しておいてくれ』

「し…しかし…」

『これは命令だ』

「……………分かりましたわ。綾ちゃんを見つけたらすぐにお戻り下さい」

『分かってる（パチンツ！）』

私が指を鳴らすと、ローズ達が消えた。

『さてと、早く綾ちゃんを見つけるとしますか』

「その必要は無いよ旅人さん」

『ん？』

私が声が聞こえた方に目を向けると、そこにはランディがいた。

## 神の会合物語 ？

「（パチパチパチ！）イッヒッヒッヒッヒ！ いや〜凄かったよ旅人さん！ まさかりリーナを倒すなんて驚きだよ！ ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！！」

「ぶくくくくくく、私も大変驚きましたよ。流石は旅人様ですね、ぶくくくくくく！」

ランディとアーネストは下品な笑いをしながら私に賛辞を述べていた。

『ランディとアーネストか。何の用……綾ちゃん！！』

アーネストの方をよく見ると、綾が気絶してアーネストに抱えられていた事に気付く。

『貴様等！ 綾ちゃんに何をした！？』

「そう早まらないでよ、僕達はこの子に何もしていない」

『信じられると思うか？』

「信じないだろうねえ、ヒヤハハハハハハ！」

『そうか……ならば貴様等にもりリーナと同じく、“奈落の底”を味遭わせてやるよ（スッ）』

「ま……待つて！ 僕達は本当に何もしていないから！！！」

「そうです！ 私達はただ、気絶している旅人様のご友人を連れて此処まで来たのです！！」

私がランディとアーネストに“奈落の底”を体験させようとすると、2人は物凄く焦りながらも嘘じゃないと主張する。

『……………本当だろうか？』

「と…当然じゃないか。僕がこの場で旅人さんに嘘を吐く理由があると思う？」

『人間の不幸を楽しむお前が何もしない事に、些か疑問だな』

「まさか、僕は旅人さんの友達は傷付けないよ（あんな目には絶対遭いたくない！！）」

「この子が余りにも見ていられない状況でしたので、少しばかり眠って頂きましたが（リリーナ様と同じ目には遭いたくありません！！）」

『……………あつそ、なら信じてやるよ』

一応2人の心を読んだ私だったが、“奈落の底”を喰らいたくない為なのか真実しか告げていなかったため、この場は信じることにした。

『ならば綾ちゃんを早く此方に引き渡して貰いたいんだが』

「勿論だよ。アーネスト」



「畏まりました……………どうぞ」

『……………（どうやら本当に何もしていないみたいだな）』

アーネストから綾を引き渡されると、私は綾の状態を確認してみたら異常が無かった事に安堵した。

「酷いな〜旅人さん。まだ僕達を疑っていたの〜？」

『何もしていないと言う保障が無かった為の確認だ。もしこんな土壇場で嘘を吐いていたら、“奈落の底”をお前達の頭の中に叩き込んでやる所だったかな』

「（汗）…………………………」

私の言葉にランディとアーネストは冷や汗を掻いて無言になっている。

『それじゃあ私はこれで失礼させてもらっ』

「そ…そう？ また今度来てね〜。楽しみに待っているよ」

「何時でも御待ちしております」

『と、その前に（ゴングゴング）』

「「？」」

『受け取れランディ（ポイッー）』

「ん？（パシッ！）……旅人さん、これ何？」

私が懐から出した小型の押しボタンスイッチ（交通バスにある押しボタンと違って下さい）をランディに渡すと、ランディは何故渡されたのが分からなかった。

『ちょっとした起爆装置だ。私がいなくなった後に、それを押せ』

「……もしかして、これ押したら僕達が酷い目に遭うのかな？」

『安心しろ、それはランディとアーネストに対する起爆装置じゃない』

「……信じてもいいのかな？」

『信じられないなら、それを今すぐ破棄しても構わん。ただ一つ言えるのは、それはお前にとって大変面白い物だ』

「ふ〜ん……分かった、信じるよ」

私をじつと見ていたランディだったが、信じたみたいだ。

『人間である私を信じるとは意外だな、ランディ』

「ヒッヒッヒッヒッヒ、親友の言葉を信じないとね」

『……まあいい。では今度こそ失礼する（ピシユッ！）』

「またねえ〜！」

「それではまたお越し下さい」

私と眠っている綾は姿を消すと、ランディとアーネストは次に会えるのを楽しみに待っていた。

場所は無の空間からローズ達のセーフハウスに変わる。

『（ピシユツ！）今戻ったぞ、ローズ』

「お待ちしておりました、旅人様」

私と綾がローズ達のセーフハウスに着いて早々に、白衣を着ている男が私達を出迎えた。

『ん？　ローズ、さっきまでしていた化粧は落としたのか？　ってか久しぶりに見るな、お前の素顔を』

この白衣を着ている男性はローズであった。化粧を落としたローズの素顔はともダンディで女性にモテそうな顔をしている。

「そんな事はどうでもいいですから、早く治療を開始致します。綾ちゃんは別の部屋で寝かせますので」

『分かったよ。マーガレット、綾ちゃんを頼むよ』

「畏まりました」

『……………（コイツもコイツでその気になれば女にモテくるんだがな……………）』

マーガレットと呼ばれた白衣を纏っているイケメンに綾ちゃんを引渡して、私は治療室へと向かった。

「それでは旅人様、腕を見せて下さい」

『フフフ……………久々に見せて貰うよ。“名医のゲンさん”』

私が左腕を見せると、ローズは治療を開始した。

ローズに治療されて一時間後、私は綾が寝ている別室にいた。

「ん……………んん……………あれ？　ここは？」

『漸く起きたね、綾ちゃん』

「……………！　た……………旅人さん……………」

ベッドから起きた綾が私を見た途端に泣きそうな表情になり……………。

「旅人さん……………ゴメンなさい……………ゴメンなさい……………ゴメンなさい……………ゴメンなさい……………」

ぼろぼろと涙を流しながら私に謝っていた。

『どうして綾ちゃんが謝るんだい？ 謝るのは私の方なんだけどね』

「ひつく……アタシ……旅人さんに……うつく」

『綾ちゃんは何も悪く無いよ。悪いのは君を操っていたリリーナって言う悪ガキだ。ほら、前に泣かないって約束したでしょ？（スツ）』

包帯で巻かれている腕を見て泣いている綾に、私は右手に持っているハンカチで綾が流している涙を拭こうとしたが……。

「（ビクッ！）……アタシ……旅人さんに……ひつく……酷い事をしちゃった……ひつく……ゴメンなさい……ゴメンなさい……」

綾は怯えながら私に何度も謝り続けていた。

『謝るのは私の方だ。私が悪ガキにお仕置きをする為に綾ちゃんを利用したんだから。あの時は本当にすまなかった』

「それでも……アタシがやった事に……変わらないよ……ひつく……」

『（これはもう何を言っても駄目だな。全部自分が悪いとしか考えていない）』

完全に自己嫌悪している綾に、どうやって説得しようかと考えていると……。

「アタシ……帰る……（ダッ！）」

綾がベッドから離れて家に帰ろうとした。

『！！（ガシッ！）ちよつと綾ちゃん！ こんな夜中に帰ったら危険だよ。君のお母さんに、今日はココに泊まらせると連絡しておいたから。だから……』

急に帰ろうとする綾に、私は腕を掴んで引き止めた。

「アタシ……ひつく……もう旅人さんに……優しくされる資格なんて無いもん……ひつく……旅人さんだって……うつく……アタシの事……嫌いに……ひつく……なつたでしょ？」

『何故私が綾ちゃんを嫌いにならなければいけないんだ？』

「だって……アタシは……う……うつく……ひつく……」

綾が涙を出しながら本格的に泣き始める。

『綾ちゃん』

「ひつく……うつく……ひつく……」

『……………（ギョウ）』

私は泣いている綾に片腕を使ってそつと抱きしめると、綾は離れようとする。

「ダメだよ旅人さん……アタシは……」

『綾ちゃん、もういいんだ。君は決して何も悪くない。だからこれ以上は……』

「だって……だって……ひっく……」

『君はそんなに自分が許せないのかい？』

「アタシが……旅人さんに……怪我を……負わせちゃったんだよ……だから……もう……」

『……綾ちゃん、私は……』

「（ビクッ！）……！」

綾は次の言葉を聞きたく無いかのように離れようと抵抗していたが……。

『嫌いにならないよ』

「……え？ 何で？」

思いもしない言葉に抵抗を止めて私を見る。

『私が綾ちゃんを嫌いになる理由はない。これからもずっと友達でいたいからね』

「……」

「それとも、綾ちゃんは私の事が嫌いになったのかな？」

「……………じゃない」

『ん？』

「嫌いじゃない！ 大好きだもん！！（ギュウツ！）」

『おお？』

綾は突然大きな声を出して私を強く抱きしめた。

『ハハハ……………私も綾ちゃんが大好きだよ。友人として』

「……………」

私の言葉に綾は物凄く釈然としない顔になっている。

『どうしたの？ そんな不機嫌そうな顔をして』

「……………何でもない（ブスッ）」

綾が私から離れると今度は、頬を膨らませて睨んでくる。

『？ な…何で急に睨むのかな？』

「（絶対……………旅人さんを振り向かせるんだから）」

どうして睨まれているのかが分からない私と、恋愛関係に発展させようとする綾であった。



と、そんな時……。

ガチャッ！

「旅人様　　お怪我の具合と綾ちゃんはとうですかあ？　……  
あら？　もしかして、お邪魔でしたか？」

気持ち悪い化粧でヒモパンしか穿いていないローズが突然部屋に入  
つて、私と綾が抱擁しているのを見て無粋な真似をしたかと思った。

『別に邪魔じゃない。それにゲン、お前また化粧をしたのか？　あ  
つちの方がカッコいいのに』

「旅人様、今のワタシはローズですよ？」

『これは失礼。訂正しよう、ローズ』

「分かって頂ければ良いですわ。所で旅人様、左腕の調子は如何で  
すか？」

『ああ、問題無い』

「そうですね。けれど、完治するまで左腕は極力動かさないで下さ  
いね。生活に支障をきたす可能性がありますので」

『分かった、肝に銘じておこつ』

元名医であるローズの言葉には重みがあるので、私は素直に従う事  
にする。

「ねえローズお姉ちゃん、旅人さんの怪我はどれ位で治るの？」

綾はローズに私の怪我の状態を聞くと、ローズは考える仕草をしながら綾に教える。

「そうねえ、長くて1週間って所かしら」

「そうなんだ」

『普通こう言った怪我は1ヶ月以上掛かるけどな』

ローズの医術はそこらへんの医者とは違って超一流であり、医学会では物凄く有名である。何故コイツが私の部下で、オカマになっているのかは私だけしか知らない。因みにその他のオカマ達は、ローズの助手達であり、かなりの腕を持つ医者でもある。

「綾ちゃん、旅人様の怪我が治るまで暫く看護してくれないかしら？」

「うん、分かった」

『おい待てローズ、何でそうなるんだ？』

「だって旅人様の左腕が使えない状態なんですから、誰かが看護をしなければいけませんわ」

『必要無い、自分の腕くらいは自分で……』

「旅人さん、アタシが看護しちゃダメ？（ウルウル）」

『あ……いや、それは………』

綾が涙目で訴えてきたので最後まで言い切れず……。

「ほぐら旅人様、ここは素直に綾ちゃんの看護を受けて下さいね」

『……………』

左腕が完治するまで、私は綾の看護を受ける事となった。

おまけ

無の空間で……。

「では、旅人さんに渡されたスイッチを押してみますか」

「一体何が起きるんでしょうね？」

「……………（ピクッ……………ピクッ……………）」

ランディがスイッチを押そうとするのを、アーネストはじっと見ていた……リリーナは未だに気絶している最中だが。

「それじゃあ……3……2……」

「あらお二方、こんな所で何をしていますの？」

「おや、マダム・セブンですか」

マダム・セブンがランディ達の前に現れたが……。

「1…それっ！（ポチッ！）」

「#%\$&%\$（%\$=#\$）#—%#%\$!……!……!……!  
!……!（ボタン……!）」

「「……は？」」

ランディがスイッチを押すと、マダム・セブンが声にならない悲鳴を出して倒れた。

「（ピクッ…ピクッ…ピクッ）」

「……もしかして…このスイッチは……」

「……どうやらマダム・セブン様のお仕置き用スイッチみたいでしたね」

ランディとアーネストが倒れているマダム・セブンを見て冷や汗を掻いている。

《マ……には……仕置きを……》

「ん？ 何か声が」

「ランディ様、そのスイッチから聞こえるみたいですね」

「どれどれ……（スッ）」

ランディがスイッチに耳を近づけると……。

《綾ちゃんを連れてきたマダム・セブンには連帯責任として、リリーナと同じ運命を辿って貰う》

録音していた私の声だった。

「……………」

「……………ランディ様？」

「……………僕しらない！ さくて、ゲームの続きでもやる〜っと。アーネスト、お菓子を出して（スタスタ）」

「畏まりました（スタスタ）」

ランディとアーネストは倒れているリリーナとマダム・セブンを放置して、去って行った。

神の会合物語 ？（後書き）

以上、神の会合物語でした〜！！！！

次回はアッチのお話になりますので、〜注意下さい。

お色気レンジャーVSグレートレンジャー（前書き）

今回はグレートレンジャーが無残になるお話です!!

それではどじろー!!

## お色気レンジャーVSグレートレンジャー

ローズ達のセーフハウスにて……。

『それでは……（バッ！）出でよー！ お色気レンジャー！』

私が右腕を掲げながら呼ぶと……。

「「「お色気レンジャー、参上お」

パツンパツンの紫色のバニースーツを着て、投げキッスをするオカマの一人であるラベンダー。

ゴツイ体格で紫色のビキニを纏い、杖を持って片目でウインクするチューリップ。

パツンパツンのナース服を着て猫耳と尻尾を付けながら、艶やかなポーズを決めるマーガレット。

パツンパツンのセーラー服とミニスカを身に纏い、決めポーズをするローズ。

以上、4名のメンバーが出てきた。

『おお〜数週間振りの登場だね〜。何か（気持ち悪い）化粧がいつもより派手になっちゃってまあ〜』

『当然ですわ これからお爺ちゃん達と会うのに、より美しくならなければいけませんから念入りにおめかししましたわあ』

「「「そうですわあ」

『ほう、それは何より。爺達もさぞかし喜ぶだろうね〜』

グレートレンジャー達がローズ達の顔を見た瞬間、吐きそうな顔をするのは確実だと思った。



『さてと、お次は爺共を誘き出す為の準備準備　ローズ達、写真を撮るから、もう一回ポーズを決めてねえ』

「……はあ〜い」「……」

『はいチーズ（パシャ）』

私カメラを出すと、ローズ達は艶やかなポーズを決めるとシャッターを押した。

場所は来牙の家が変わる。

「お爺さん、貴方に挑戦状が送られてますよ」

「挑戦状じゃと？」

お婆さんは和室に居る源三に手紙を渡した。

「ふおっふおっふおっ……グレートレンジャーのリーダーであるワシに挑戦状とは、いい度胸をしておるのう。それで婆さんや、送り主は誰じゃ？」

「旅人さんからですよ」

「何じゃと！？　あの極悪人が！？」

送り主が私だと分かると源三は怒り狂った顔をする。

「お爺さん、旅人さんに失礼ですよ」

「あんな奴に失礼も糞も無いのじゃ！　おのれ旅人め！　ワシを倒

してグレートレンジャーのリーダーの座を奪おうと言う魂胆じゃない！ そうはさせんぞい！！（ビリビリ！）  
「それは絶対違つと思ひますよ」  
「どれどれ……」

お婆さんのツッコミを無視して源三が挑戦状を読むと……。

《グレートレンジャー、貴様等の見るに耐えない悪行を見るのは好い加減ウンザリしてきたので、そろそろ決着を付けさせてもらいます。本当だつたら私が相手をしてやりたい所だが、生憎と怪我をしてしまつて戦えない状態だから……》

「ぶわっはっはっはっは！！ あの極悪人が怪我じゃと！？ こりや傑作じゃわ！！」

「あらあら、旅人さんは大丈夫ですかねえ」

最初は怒り狂つていた源三であつたが、私が怪我をした文の所を読むと大笑いしており、お婆さんは心配そうな顔をしていた。

《私の代行として、ある4人を貴様等と戦わせるよ。4人も快く引き受けてくれて、早く戦いたがつているよ。因みに相手だが、封筒の中に4人が写っている写真があるからそれを見る。決闘場所は町の近くにある公園だからすぐに来い》

「旅人の代わりにある4人が……で、これが相手の写真で……」

源三が封筒の中に入っている写真を見ると……。

「よ～～～し！！ 今すぐ戦いに行くのじゃ～～～！！！！！！（ダダダダダ！！！！）」

「待て源三！！ てめえだけいい思ひはさせねえぞ！！！！（ダダダダダ！！！！）」

「ミーモ戦ウゼ〜！……（ダダダダ！……）  
拙者も無論行くでござるよ〜！……（ダダダダ！……）」

すぐに決闘場所へと向かったのであった。

「……………あの人たちは何時からここにいたのかねえ〜。え〜と……」

お婆さんも写真を見たが……。

「……………あの旅人さんが、お爺さん達にこんな可愛い子達と戦わせるとは思えないねえ。旅人さんは一体どう言っつもりで……」

それには、愛奈・真美・綾・明菜がお色気レンジャーの格好をした姿が写っていた。

しかし……。

「おや？ 写真の中身がどんどん変わって……………うっ！……  
す〜は〜す〜は……………ふうっ。なるほど、お爺さん達はこの人達と相手をするみたいだね」

写真の中身が愛奈達からローズ達に変わったので、吐きそうになったお婆さんであるが何とか落ち着いていた。

「お爺さん達は旅人さんの畏に見事嵌ったと言っ事ですか。ん？  
まだ続きがあるみたいですね、どれどれ……………」

お婆さんは文に続きがあったのでそれを見てみると……………。

《どうせ爺達の事だから最後まで読んでいないだろうけど書いておく。あの写真は時間が経つと中身が変わる仕掛けになっているんだよねえ〜。で、写真の中身が変わった奴等が、貴様等が戦う相手だから十分覚悟してから来るように。あと楓さん、本日は爺達が写真に写っている連中と付き合うことになるので夕飯はいりませんから。

by さすらいの旅人》

「フフフツ……お爺さん、旅人さんからの手紙は最後まで読みましたよ、ようねえ〜」

お婆さんは最後まで手紙を読まなかった源三を嘲笑っていた。

「婆ちゃん、爺さんとその他が物凄い勢いで家を出たけど何かあったのか？」

「お父さん達が嬉しそうな顔をしていたけど……」

来牙と絵梨が和室に入って、お婆さんに源三がどうなったのかを聞いた。

「お爺さん達は餌に釣られたんだよ。さてと、アタシは夕飯の準備でもしますかねえ〜」

「「？」」「」

お婆さんは夕飯の準備をする為に台所へと向かった。

おまけ

『よし！ 爺達は見事罨に嵌ったから公園に行くぞ〜！！』  
「〜はあ〜い！」「〜」

私はローズ達を連れてセーフハウスを出ようとする為に、指を鳴らそうとしたが……。

「旅人さん、アタシも一緒に行く」  
『綾ちゃん、君はお留守番だよ……ってか何その格好は？』

綾が私と一緒にいくと言い出したので、私はすぐさま手を止めた……綾の格好が何故か白のナース服だった事に突っ込む。

「ローズお姉ちゃんがコレを着て、旅人さんを看護するようにつて言われたの」

『……………（ギロツ！）』  
「〜」

綾が言い切った後に私は即座にローズを睨むが、当の本人は明後日の方向を向いて口笛を吹いている。

「旅人さんの腕はまだ完治していないんですよ？ だったら……」  
『アハハ……大丈夫だよ綾ちゃん。私はただ見物しているだけだから、心配無いよ』  
「それでも行く。アタシは何時でも旅人さんを看護するって決めるから」

『いや、だからって……（今から爺共を始末しに行くのに綾ちゃんを連れて行くわけには……）』

「綾ちゃん、もし旅人様の腕が何かあった場合はワタシが治療するから」

私がどうしようかと悩んでいる最中に、綾にナース服を着せた元凶であるローズが助け舟を出してくれた。

「でも、アタシは旅人さんと一緒に……」

「旅人様の事はワタシに任せなさい。それに……」

ローズは綾に顔を近づけて……（綾は気持ち悪い化粧をしているローズの顔を見ても特に動じていない）。

「夫である旅人様の帰りを待つのは、妻である綾ちゃんの役目よ（ボソボソ）」

「……！……アタシが旅人さんの妻）……（ボンツ！）はう~~~~」

『お……おい綾ちゃん！？』

綾が突然顔が茹蛸の様になった。

「……旅人さん、アタシお留守番するから」

「ちょ……ちよつと綾ちゃん、何で君はそんなに顔が赤いの？　ローズに何か嫌な事でも言われたのか」

と、私が見当違いな事を言つと綾は急に不機嫌顔になって……

「……旅人さんのバカッ！（スタスタ）」

「あ……綾ちゃん？」

綾は先程まで赤くなっていた顔が元に戻り、今度は不機嫌な顔を捨て去って言った。

「……な…何なんだ？ ……つてかローズ！ お前さっきの耳打ちで綾ちゃんに何て言った!?」  
「ワタシはただお留守番をする様にと……」  
「嘘吐け！ それだけで綾ちゃんがあんなになる訳が無いだろ!?」  
「言えローズ！ お前は綾ちゃんに何を言った!? 返答次第ではただじゃ済まさんぞ!」

私はローズにさっさと吐けと命令するが、ローズは真剣な顔になって私に近づく。

「旅人様……」  
「な…何だ？ 急に真剣な顔をして……」  
「もう少し綾ちゃんの心情を理解して下さい」  
「はあ?」

ローズが訳の分からない事を言ったので、私は頭に“?”しか浮かべられなかった。

「さあ旅人様、早くお爺ちゃん達の所へ行きますわよ」  
「ちよつと待てローズ、まだ私の質問に答えていないぞ」  
「旅人様、後で教えますから早く行きましようよ。そろそろ時間ですわ」  
「む……仕方ない、後できっちり教えて貰うぞ。それじゃあ気を取り直して……行くぞ!! (パチンツ! ……ピシュツ!)」  
「……はあ〜い!! (ピシュツ!)」

私が指を鳴らすと、私とお色気レンジャー達は姿を消した。

## お色気レンジャーVSグレートレンジャー（後書き）

書き方のスタイルをちょっと変えてみました。

こっちが読み易かったら、以降はこのスタイルで行きますけど。

どっちが良いかを、感想で教えてください。



お色気レンジャーVSグレートレンジャー ? (前書き)

グレートレンジャーが悲惨な目に遭っていますので、ご注意ください

## お色気レンジャーVSグレートレンジャー？

『そろそろ来る頃かな……』

ローズ達を待機させ、町の公園で待っている私は爺達を待っていたが……。

「どこじゃ……!? ワシの相手をするピチピチギヤル達はどこにおる……!?」

「てめえは引ッ込んでる源三!! 俺が相手をするんだ!!!」

「ミィのスピードで虜にシテヤルゼ!!」

「拙者の卓越した忍術を見せてやるでござる!!!」

見事に引ッ掛かってくれた(生贄である)グレートレンジャー達が到着すると、私は笑みを浮かべた。

『(来た来た) ……ようこそ。お待ちしていましたよ、グレートレンジャーの皆さん』

「挨拶等どうでもいいのじゃ!! さっさとお主の代行である美女達を出さんかい!!!」

「ここで怪我したてめえを始末するのは簡単だが、今はそれ所じゃねえ!!!」

「ハヤク美女達をダセ!!!」

「さもないと刀の錆にしてくれるでござる!!!」

グレートレンジャー達は愛奈達に早く会わせるとせがんでいる。

『そう慌てるな。ちゃんと(ローズ達を)呼ぶから、先ずは私の話を聞け。挑戦状に書いてあった……』

「お主と話す事など何も無いわい!!」  
「さつさと会わせやがれ!!」  
「コレ以上ミー達をマタセルナ!!」  
「成敗するでござるよ!？」  
『.....』

聞く耳を持たない阿呆共（グレートレンジャー達）に私は呆れた。

「さあ諸悪の根源!! 早くワシ等に美女達を会わせないと.....」  
『人の話を最後まで聞かないと会わせないぞ?』  
「.....」  
『さつさと言え』  
「.....」  
『やっと聞いてくれるみたいで、助かるよ』

流石に話を聞かない阿呆共（グレートレンジャー達）でも、会わせないと言ったら急に大人しくなった。

『では先ず.....アンタ等、挑戦状の中身を見たのか?』  
「勿論じゃ!!」  
「その為に此処に来たんだろうが!!」  
「ビューティフルなレディーを前ニシテ来ナイ何てアリエナイ!!」  
「可憐な乙女達に会わないのは失礼でござる!!」

私の質問に即座に答えるグレートレンジャー達。

『ふん.....もう一つ、私が書いてあった文を最後まで読んだか?』  
「.....」  
『読んでない!!』  
「.....」  
『読んでないか.....本当にコイツ等は私の思い通りに動いてくれるよねえ〜』

阿呆共（グレートレンジャー達）がここまでの短絡思考だと分かる

と、逆に哀れみを感じる。ちょっと餌を撒いただけで。直ぐに突っ走るのだから。

『ハアツ……（やっぱりコイツ等、FFF団並みのバカだよ）』

「何溜息を吐いておるのじゃ!？」

『別に………』

「質問はそれだけか!? だったら早くピチピチギヤル達に会わせるのじゃ!?!」

源三がさつさと会わせると催促してきたので、私は呼ぶ事にした。

『はいはい、今から会わせてやるよ。言うておくが、逃げたら承知しないからな』

「誰が逃げるか!?!」

「俺達が逃げる訳無いだろ!?!」

「ココデ逃げるノハアリエナイゼ!?!」

「そんな事をする奴は拙者が成敗するでござる!?!」

『（ププツ! その台詞は自ら死を選んでいるんだよねえ）』

阿呆共（グレートレンジャー達）が自信満々に答えたのを見て、私は必死に笑いを堪えている。

『その言葉、絶対に撤回するなよ。それじゃあ出て来い!?!（パチンツ!）』

私が指を鳴らすと……。

ボンツ!?!!

「「「「!?!?!?!?!」」」」

突然、私の後ろから煙が出てきたので、阿呆共（グレートレンジャー達）はそこに目を向けた。

「おお〜〜！？ ついに出てくるかあ〜！！！ ワシは着ぐるみの子と相手をするのじゃー！！」

「俺様はバニーちゃんだー！！」

「ミーはマジシャンダー！！」

「拙者はグラマラスな美女と剣の勝負をするでござるー！！」

「ダメじゃジミー！！ グラマラスな美女はワシが相手をするのじゃー！！」

「ナニヲ言ッテル源三！ サツキト言ッてルコトガ矛盾シテルゼ！！」

「いくら源三殿でもこれは譲れ無いでござるー！！」

「てめえが猫ちゃんと相手をしないなら、俺がしてやるぜー！！」

「やかましいわー！！ 猫ちゃんもグラマラスな美女はワシのもんじやー！！」

阿呆共（グレートレンジャー達）は誰と相手をするかを争っている。

『争っている所悪いけど、そろそろ煙が晴れるぞ？』

「「「「「！！！！！！！！」」」」」

阿呆共（グレートレンジャー達）が争いを止めて、晴れた煙を見ると……。

パツッパツッの紫色のバニースーツを着て、投げキッスをするオカマの一人であるラベンダー。

ゴツイ体格で紫色のビキニを纏い、杖を持って片目でウインクするチューリップ。





私の弱点を狙おうとした爺共であつたが……。

ガシツ!! x 4

「ダメよお爺ちゃん達、今は旅人様じゃなくワタシ達の相手をしなきゃ……」

「……いけないわよ……」

「……嫌ダ……!!!! (ジタバタジタバタ!!!)」

ローズ達に捕まってしまい、無駄な抵抗をしていた。

『さてと……貴様等は騙したと言っているから、ここで訂正させておこう(ピラッ)……貴様等が見たこの写真はね……(ジジジ)……時間が経つと本当の相手が写る仕掛けなんだよねえ』

息を整えた私は写っていた写真をグレートレンジャーに見せるようにすると、映っていた愛奈達からローズ達に変わった事に……。

「汚いぞお主!!」

「俺達を騙しやがって!!」

「コノ外道!!」

「男の風上に置けないでござる!!」

騙されたと勘違いしている私を罵倒していた。

『最後まで挑戦状の文を読まなかった貴様等に、そんな事を言われる筋合いは無いよ。それではグレートレンジャーの皆さん、存分に楽しんで下さい さあお色気レンジャー! タップリと御もて成





ローズ達は余韻に浸っているのか、私の突っ込みを無視している。

『……………まあいいか。にしても……………本当に綾ちゃんを連れて来なくて正解だったよ』

「子供の綾ちゃんには大人の愛をとても見せられませんからね」

『いや、私はそう言う意味で言ったんじゃ無いんだが…………………………もういい、帰るぞ』

「お爺ちゃん達を放って置いていいんですか？」

『構わん、そんな（色々な意味で）汚れきった連中を連れて行きたくないし、送る気も無い』

「そうですか……………残念ですね。お爺ちゃん達にはワタシ達のセーフハウスで引き取るうかと思っただんですけど」

『それはまた今度にしてくれ。ってかそんな事より、綾ちゃんに耳打ちした内容を聞かせて貰うからな（パチンツ）』

ローズは非常に残念そうな顔をしていたが、私は気にせず指を鳴らして、ローズ達と一緒に姿を消した。

坂本雄二 霧島翔子にプロポーズをする

文月学園の屋上にて……。

《……もしもし》

『こんにちは霧島、久しぶりだねえ〜』

私は霧島に電話していた。

《……お久しぶり旅人さん、何の用？》

『君に良い話があつて電話したんだよ』

《……良い話？》

『うん、ちよつと電話で話すのは難だから、至急屋上へ来て貰いたい』

《……悪いけど、これからFクラスに行つて雄二に会わなければいけないから》

霧島はすぐに断るうとしたが……。

『あら残念、雄二が君にプロポーズをしようと屋上で待っているのに……』

《……今から屋上に行く（プツツ……ツ……ツ）》

『フフフフ……やはり来るか』

私が用意した餌に食い付き、電話を切つて屋上へと向かつたみたいだ。

『さあ雄二、きつちりとプロポーズして貰うからね。指輪も忘れるなよ』

「分かった（ふざけんじゃねえ〜〜〜〜！！！！！！！）」

何故こんな事になっているのかは少し時間を遡る。

霧島を呼び出す15分前に、私は既に文月学園の屋上にいた。

『霧島へのプロポーズの内容は考えたかい？』

私が視線を下に向けると……。

「何で俺が翔子にプロポーズしなきゃいけないんだよ！？」

そこには鎖で雁字搦めに巻き付けられて、糞虫状態になっている雄二がいた。

『だって君、私の近くで霧島にプロポーズするって約束したでしょ？ その証拠に（ゴソゴソ……ピッ）』

私はMP3プレーヤーを取り出して再生すると……。

《頼む！！！！俺が悪かった！！！！翔子を生涯愛すると誓うから、これだけは止めてくれ〜〜〜〜！！！！！！》



私が脅す為に指を鳴らそうとすると、雄二は漸く自分の立場が理解したようだ。

『フッフッフッフ……じゃあ今度はローズ達に、お前の尻の穴を掘らせるように命令しようかな？』

「すみませんでした！……！！！」

地獄以上、もしくは人としての人生終焉の体験をしたくない雄二は、即座に謝った。

『ハツハツハツハ！ 冗談だよ。これから霧島にプロポーズをするお前に、そんな酷い事はしないよ』

「俺はどの道地獄に堕ちるのか！？」

『ローズ達に比べれば、霧島のプロポーズの方が極楽に近い天国だと私は思うが？』

「翔子にプロポーズしたら、俺の人生は破滅だ！！！」

『私が雄二の立場なら、喜んでプロポーズするんだけどねえ』

コイツはいい加減に観念すべきだと思う。

『さあ雄二、もうお前に逃げ場は無い。大人しく霧島にプロポーズするんだな』

「絶対嫌だ！！！」

『だったら……今すぐローズ達を呼ぶよ？（スッ）』

「それも絶対嫌だ！！……！！！」

『アレは嫌、コレも嫌か……我が俣な奴だ』

「てめえの選択はどっちも地獄なんだよ！！！」

『……もう一度言おう。霧島とのプロポーズが嫌なら、ローズ達を此処に呼ぶぞ？ それでもいいのか？』

「どっちも嫌に決まってるだろうが！！！」

『……………』

雄二の嫌々発言に辟易してきた私は最終手段を使う事を決意する。

『では仕方が無い。また私の操り人形になってもらうか（スッ）』

「！！！！ や…止めるおおお~~~~！！！！（トンッ）」

私は雄二の額に指を当て……………。

『私の指示に従え』

「……………何をすればいい？（な…何だ！？ 声が勝手に

……………）」

雄二を洗脳させた。

『霧島にプロポーズをして、この婚約指輪を霧島の薬指に嵌めた後にエッチしろ』

「（ふざけるな！！ そんな事したら俺は確実に…）分かった、翔子を妊娠させてもいいのか？（何を言ってるんだ~~~~！！！！！！）」

『どうぞご自由に』

「じゃあ翔子を孕ませるほど、何度も犯してやる（止めてくれ~~~~）！！！！！！）」

『フッフッフ……………霧島は本望だろうねえ、好きな男に抱かれるんだから。そう思わないかい、雄二？』

「（ temeエ！！ 俺に何をした！？ ）」

『言っただろ？ 私の操り人形になってもらうって。まあ心までは操っていないから安心しろ』

つまり、雄二の意思があっても体が動くことが出来ない状態だと言

う事だ。

『さあ私の操り人形の雄二君、この婚約指輪を使って霧島にプロポーズしてね（スッ）』

「ああ、確かに受け取った（受け取ってんじゃねえ〜！！！）」

私が婚約指輪が入っている箱を雄二に渡すと……。

『さてと、さっさと霧島を呼ぶとしますか（スッ）』

「（止めてくれえ〜！！！！）」

携帯を使って霧島を呼ぼうとした。

と言っ訳である。

『そろそろ来るかな？』

そして1分もしない内に……。

「……旅人さん、雄二は？」

いつの間にか、霧島が屋上にやって来た。

『本当に霧島って神出鬼没だよね〜』

「……そんな事はどうでもいい。雄二は何処？」



『はいはい、今呼ぶから（パンパン！）来たぞ雄二！』  
「……………翔子」

私が手を叩きながら呼ぶと、雄二が登場する。

『さて、私は（ゴソゴソ……………スッ）』

私は雄二と霧島から少し離れて、録音機とビデオカメラを懐から取り出して、収録作業を開始した。それと同時に2人は互いに向き合っ  
つて言葉を発した。

「……………雄二、この時をずっと待っていた」

「俺もだ翔子（何を言ってるんだ俺は！？）」

「……………私、凄く緊張してる」

「大丈夫だ。その緊張は直ぐに解ける（今すぐ止める……………！）」

雄二はポケットに入っている婚約指輪入りの箱を取り出し……………。

「翔子、俺はお前が好きだ、愛してる。だから、学園を卒業したら（パカッ……………スッ）……………俺と結婚してくれ（うわあああああ……………）……………！！！！！！！！！！」

プロポーズをした後に箱を開けて、霧島に指輪を見せた。

「……………」  
『（ん？ 霧島が涙を……………）』

録音と撮影を同時にしている私は、霧島が涙を流しているのに気付く。

「おいおい、どうした翔子？ 泣くななんてお前らしくないぞ（しょ…翔子？）」

「……私、嬉しくて涙が……止まらないの」  
（ギユウツ）  
翔子

雄二は泣いている霧島をそっと抱きしめ……。

「俺は翔子の傍にずっといる。そして……一緒に幸せになろう（おい！？ テメエは何を言ってるやがる！！）」

「……………（ギユウツ！）」

霧島もそれに応える為に雄二を抱きしめた。

「なあ翔子、お前の左手の薬指に指輪を嵌めていいか？（止める…）  
……………！！！！！！！！！！）」

「……………うん」

雄二は霧島から離れて指輪を取り出して嵌めようとすると、霧島はそっと左手を雄二の方に手を持っていく。

そして……。

「これで翔子は俺の妻だ（俺の人生があああああ……………！！！！！！！！！！）」

「……………私と雄二の……………永遠の愛の証」

左手の薬指に指輪を嵌められた霧島は、ウツトリするかの様にじつと指輪を見ていた。

『(うーん……………感動なシーンの筈なんだけど、心の中の雄二が慟  
哭しているから笑いが込み上げて来る……………)』

凄く複雑な心境である私であったが、目の前の2人はそんな事はお  
構いなく続けている。

「なあ翔子、俺の女だと証明する為に、今此処で抱いてもいいか？

(おい!!! 何を口走ってやがる!?)」

「……………雄二のエッチ」

「嫌か? (断れ翔子!!!)」

心の中の雄二は懇願しているかのように念を送っているが……………。

「……………私が雄二の誘いを断ると思ってるの?」

「あくまで確認の為だ(ふざけんな!!! ってか止める~~~~!!  
!~!!)」

「……………私は元々雄二の物。雄二が抱きたい時は何時でも抱いていい」

「そうか、それじゃあ……………(お…おい!!! 止めるおお~~~~!!  
!~!!)」

「んむう!?……………ん……………んん」

雄二は霧島を抱きしめて、舌を絡めるキスをやり始めた。

『(始めたか。それじゃあ一時退散しますか)』

雄二と霧島がエッチを始めようとしたので、私は屋上から一時姿を  
消した。

数年後、とある教会で……………。

カラ〜ン！ カラ〜ン！

と鐘が鳴り響き……………。(結婚行進曲を頭の中で思い浮かべて下さい)

パパパ〜ン    パパパ〜ン    パパパパン    パパパパン    パパ  
パパン    パパパパン

ラッパが響きながら、教会の扉が開き……………

〜    〜    〜    〜    〜    〜    〜

音楽が流れ始めると、タキシードを着た雄二とウェディングドレスを着た霧島が教会から出てきた。

「(パチパチパチ!) おめでとう〜雄二〜!!」

「(パチパチパチ!) おめでとうございます、坂本君!」

「(パチパチパチ!) おめでとうじゃ!!」

「(パチパチパチ!) おめでとう〜坂本〜!! 霧島さんとお幸せ

に〜!!」

「(パチパチパチ!) ……おめでとう!!」

Fクラス卒業生の明久達が雄二を祝福し……………。

「……………取り敢えずおめでとう」  
「まあまあ来牙君、坂本君を祝福しなきゃ。2人共おめでとう！」  
「！」

来牙と絵梨も同様に祝福し…………

「（パチパチパチ！）おめでとう代表~~~~！！ アタシはずっと  
2人を見守っているから~~~~！！」

「（パチパチパチ！）代表~~~~！！ 未永くお幸せに~~~~！！！！

ヒュ~~~~ヒュ~~~~」

「（パチパチパチ！）おめでとう2人とも~~~~！！（次の結婚式は  
僕と吉井君で！！）」

Aクラス卒業生達の優子達は霧島を祝福していた

そして雄二と霧島は結婚して、幸せな家庭を築きましたとさ。

めでたしめでたし……………

おまけ

雄二と霧島が結婚式を挙げる前……………。

「ハッハッハッハ。出来ちゃった婚だから雄二も絶対逃げられない  
ねえ~~~~」

「アンタもよくまあ、こんな大層な結婚式をプロデュースをするよ

な」

「費用は全部旅人さん持ちだし」

私は来牙と絵梨を連れて結婚式場の下見をしていた。

『2人の幸せの為なら、これくらい安いもんだ』

「……………」

『何さその顔は？ いずれ君達だって此処で結婚式を挙げるんだからね？』

「…………… まあ、其処だけは感謝しておく」

「楽しみだね来牙君 じゃなくて…………… アナタ」

『私の苦勞を無駄にしないでよ？（チラッ） 木下さんと沢渡さんを諦めさせたのに、物凄く時間が掛かったんだから……………』

私が視線を下に向けると、来牙と絵梨の左手の薬指には同じ形をした指輪があり……………。

『そして、絵梨のお腹の中にいる子もね』

「…………… 分かってるよ」

「ふふふ ねえ来牙君、名前はもう考えたの？」

絵梨はお腹をさすりながら、名付け親の来牙に問うのであった。

坂本雄二 霧島翔子にプロポーズをする（後書き）

プロポーズ後の行為については、翌日にアッチの方で出しますので  
お楽しみに。

沢渡美咲 再び

とある休日、ローズのセーフハウスにて……。

「旅人様、包帯を解いても構いませんよ」

『ふむ（シユルシユル）……どうやら腕は完治したみたいだな』

先日の“神の会合物語”にて負傷した左腕の傷跡が無くなっていた。

『流石は元名医だ。あれから数年経ったとは言え、腕は全く落ちていないな』

「恐れ入りますわ」

『……………』

私は無言でローズを見た後……。

『……なあローズ、こう言っちゃ何だが……お前もそろそろ私の部下を辞めて医者に戻っ……………』

「あーら、ワタシとした事が今日はお爺ちゃん達とデートをする日でしたわあ。それでは旅人様、ワタシは今日一日お出掛けしますの  
で、お帰りの際は鍵を掛けて下さい」

本来の居場所に戻るよと言ってる最中にローズは颯爽と出て行った。



『……………全く、お前はまだ引きずってるのか。あの親子を救えなかつた事に……………全ては……………あの金と権力に溺れたクソ医者共が……………』

ローズの過去を思い出している最中に……………。

ガチャツ

「旅人さん、ローズお姉ちゃんが行っちゃったけど何かあったの？」

『……………デートだったさ』

メイド服を着た綾が現れたので、思い出すのを止めた。

『所で綾ちゃん、何故メイド服を着てるの？ ってか、私はもう腕は完治したから看護する必要は無いよ？』

「今日は旅人さんにご奉仕をしようかと思って……………」

『……………え……………遠慮しておくよ。今日は町に出かける予定で……………っつ』

「ダメなの？（ウルウル）」

私が町に出かけると行った途端に綾が涙目で訴えて来る。

『あ……………いや……………それは……………その……………』

「旅人さん、アタシと一緒にいるのは嫌？（ウルウル）」

『……………分かった。今日は君と一緒に過ごそう』

「嬉しい！（ギョウツ！）」

綾は私と一緒に過ごせるのが分かると嬉しさの余りに抱き付いて来た。

「それではご主人様、今日は精一杯ご奉仕します！」

『いや、別に“ご主人様”と呼ぶ必要は無いからね。今までどおり

（　　）おや？』

突然、懐に入っている携帯が鳴りだした。

『ちよつとゴメンね綾ちゃん……（ピッ）はい、もしもし。……

……ああ、お前か……綾ちゃん？ 今此処にいるけど……はいはい、今すぐ替わるよ。綾ちゃん、君のお母さんから』

「え？ ……もしもし」

綾に携帯を渡すと……。

「え〜〜！！ やだよお母さん！ 今日旅人さんと過ごそうと思つてたのに！ ……う〜〜〜……分かった（ピッ）」

『どしたの？』

綾が話し終えて電話を切ると、物凄く不満そうな顔をしていた。

「……………お母さんが家に帰って来なさいって」

『あらら〜』

「ゴメンなさい、今日は家に帰ります」

『良かったら家まで送ろうか？』

「いいです。お母さんから旅人さんの力を借りずに帰るようになって言われてるから」

綾はローズから借りている部屋に戻って私服に着替え終わると、トポトポと家に向かって行った。

『アハハハ……綾ちゃんも、アイツには勝てないみたいだね。では、綾ちゃんが帰ったので町に出掛けますか』

私は玄関の扉に施錠すると、町へと向かった。

『さてさて、今日は何かあるかな〜？』

町に着いた私はいろいろと散策していた。

と、そんな時……。

「旅人さん、こんな所で何をしているの？」

『ん？……おやおや、君は沢渡美咲さんではありませんか』

後ろから声を掛けられたので、そこに振り向くと私服姿の美咲がいた。

『こんな所で会えるとは奇遇ですねえ』

「それはアタシにも言える事だけだね」

まるで久々に会った友人みたいに会話している私と美咲である。

『そう言えば、研究所では色々とゴタゴタがあったみたいだねえ。あれからどうなったの？』

「……………何処で知ったのかを突っ込みたい所だけど、いくら旅人さんでも話す事は出来ないわ」

『あらそう、まあいいけど。では次、来牙とラブホテルへ行った後は会ってないの？』

「なっ！？（//////////）」

私がすぐ話題を変えると、美咲は顔が赤くなる。

「な……な……………何でアナタが知ってるのよ!？」

『フフフフ……………私を誰だと思っているんだ？（ピラッ）』

「い……………いつの間にかこんな写真を……………」

私が懐から出した写真を美咲に見せると、それは来牙と美咲が抱き

合っている写真であった。

『それは企業秘密さ　　欲しかったらタダであげるよ』

「……………一応、貰っておくわ」

『どうぞ　（スッ）』

写真を渡すと、美咲は受け取って懐に収める。

『でもさあ、写真だけじゃ物足りないと思うから……………今から私と一緒に来牙に会いに行かないか？　無論、君が来牙といけない事をする時は、邪魔が入らない様にして、絵梨についても私の方で足止めしておく』

「……………随分と美味し過ぎる話じゃない。旅人さんはアタシに、何の見返りを求めているのかしら？」

『別に何もいらないよ。君は私が見返りを求める男だと思っているのかな？』

「……………ならいいわ。それで、来牙君は何処にいるの？」

『ちょっと待ってね（ゴソゴソ）うーんと……………（ピッピッ）』

美咲が来牙に会いに行く事を決意すると、私は懐から携帯を取り出して、“来牙探知機”のアプリを使って来牙の居場所を探し始める。

『えっと……………どうやら来牙は家にいるみたいだね』

「……………ねえ、貴方の持っている携帯の機能を知りたいんだけど」

『ヒミツ（スツ）』

私の持っている携帯の画面を覗こうとしたが、私はすぐに懐にしまった。

「……………」

『さて、来牙の居場所が分かったから……………沢渡さん、ちよつと着いて来てね（スタスタ）』

「ちよ…ちよつと待ってよ！」

私が路地裏に目指して行くと、美咲も付いてきて……………。

『ここなら人に見られる事は無いだろう』

「意外だわ。貴方が人目を気にするなんてね」

『流石に私の力を人前に見せる訳にはいかないからねえ。それじゃあ来牙の家へしゅっぱっつ（パチンツ！）』

路地裏に着いて私が指を鳴らすと、私と美咲の姿が消えた。

場所は来牙の家の前に変わる。

『（ピシュッ）はい到着〜』

「（ピシュッ）貴方の能力はホントに便利ね。町から一瞬で来牙君の家に着くんだから」

『そうそう沢渡さん、これ渡しておくから（スッ）』

美咲の突っ込みを無視して、私はとあるカプセルを渡すと……。

「……ありがとう。遠慮なく使わせて貰うわ」

美咲は笑みを浮かべながら快く受け取った。

『フッフッフッフ……コレを使って来牙との甘〜い時間を過ごして下さいね』

「フッフッフ……にしてもあの時はホントに凄かったわ。来牙君ったらアタシを貪るかの様に……」

『私特製の媚薬の前では、どんな男でも確実に堕ちるからね〜』

来牙に前回会ってエッチした事を思い出す美咲と、媚薬の効力を言う私であった。

『では来牙の家に入りますか……と、その前に（パチンッ！）……よし』

「何をしたの？」

『気にしな〜い気にしな〜い　では気を取り直して（ピンポン！）』

美咲は私が指を鳴らした事に疑問を抱いていたが、私はそれを無視してインターフォンを鳴らした。

《はい、どちら様ですか？》

『お婆さん、私ですよ』

《旅人さんですか。どうぞ遠慮なく入ってください》

お婆さんは私だと分かったと、すぐ家に招き入れてくれた。

『それじゃあ入るよ　私はお婆さんと話しているから、君は来牙と二人つきりで過ごしてね』

「分かったわ（この人にはホントに感謝しなきゃね）」

そして私は来牙の家に入った。

おまけ



私と美咲が来牙の家に入った時……。

「~~~~~」

アニメ〇トで限定のBL本を買い終わった優子は上機嫌で家に帰った。

「さてと、家に帰ったら早速……」

『BL本を読む前に、ちょっと私に付き合ってくれないかなあ〜？』

「きゃあああああ！……！！！！！！」

私が優子の背後から声を掛けたので、優子は大きな悲鳴をあげて、BL本が入っている袋を落とした。

『おいおい……そんな悲鳴をあげられると、私も少々傷付くんだが……』

「な……な……な……何で貴方が此処にいるのよ！？」

『私に見られても別に不味くは無いでしょ？』

何故ここに私が優子の目の前にいるのかと疑問に思っているでしょうが、ここにいるのは私の影分身です。私が来牙の家へ入る前に、指を鳴らしたのを思い出して下さい……その時に影分身の私が出たのです。

そして気を取り直した優子は落としたBL本入りの袋を持って私に話しかける。

「そ…それで、アタシに何の用なの？」

『君をこれから来牙の家に連れて行くこうかと思ってね』

「宮永君の家に!？」

影分身の私が用件を言うと、優子は大層驚いた顔をした。

「ちょ…ちょっと待って!？ どうしてアタシが!？」

『おや？ 好きな男の家に行きたくないのかい?』

「!!!!!! (//////////) 何を言ってるのかしら

? アタシが…宮永君の事なんて微塵も…その……」

『そんな顔を赤らめて否定しても全然説得力無いよ?』

優子が顔を赤らめていたので、私はそれに突っ込む。

『で、どうする? 行くの? 行かないの?』

「だ…だからアタシは……」

『今、来牙は君の知らない女の子と二人っきりなんだけどねえ』  
ボソッ(』

「!!!!!!」

『おっと、口が滑った』

私が態とらしく眩くと、優子は睨むかのように私を見て……。

「旅人さん、それに関して、もっと詳しく聞かせて貰えないかしら？」

『あれ？ 来牙の事は微塵も思っていないんじゃないの？』

「そんな事はどうでもいいわ、早く教えて」

見事に食い付いてきた。

沢渡美咲 再び？

ガチャッ！

『お邪魔しまーす！』

「いらつしゃい旅人さん、どうぞ上がって……おや、美咲ちゃんじゃないかい。久しぶりだねえ〜」

「お久しぶりです、おばーさん」

私と美咲が玄関に入るとお婆さんがいた。お婆さんは美咲を姿を見て嬉しそうな顔をしており、美咲はお婆さんに挨拶をする。

「旅人さん、美咲ちゃんとは知り合いですか？」

『まあちよつとね』

「そうですね、さあ上がって上がって」

お婆さんが私と美咲を和室に案内させようとするが……。

「おばーさん、申し訳ないんですけど、来牙君の部屋に行つていいですか？」

「なんだい？ アタシより来牙に会いたかったのかい？ ちよつと傷つくねえ〜」

『まあまあ、沢渡さんも久しぶりに来牙に会いたいんですから』

ちよつと拗ねた顔をしたお婆さんに私はフォローを入れた。

『さあお婆さん、私と一緒にお茶でも飲みながら談笑でもしましょ  
うよ』

「そうですね。美咲ちゃんは、年寄りのアタシより、若い来牙の方がいいでしょうし」

「あ…アハハ……」

ちよつとした皮肉を込めるお婆さんに、美咲は苦笑をする。

『じゃあ沢渡さん、私とお婆さんは和室にいるから、何かあったら呼んでね？』

「分かったわ」

『それじゃあ久々の来牙との再会を楽しんでね　お婆さん、今日も和菓子を用意しますよ』

「それは楽しみですねえ」

私とお婆さんは和室に入って行ったのを見た美咲は……。

「……………旅人さんって気が利くのか、お節介なのか分からない人ね……………まあいつか、来牙君の部屋へ行こつと」

来牙の部屋へと向かった。

来牙の部屋では……。

「何かこのゲームの主人公の声が何処かで聞いたことがあるな……」  
来牙がP〇3の“魔界〇記ディスク〇イア4”をやっていた。

「このヴァルバトーゼってキャラクターがなあ……うん、何処で聞いたんだ？」

「来牙君、そこを2マス進めて攻撃した方がいいと思うよ？」

「言われなくてもそうするつもりだ。ここで必殺を……って」

「やつほゝ来牙君、久しぶり」

「美咲！？ アンタいつの間に俺の部屋に入ったんだ!？」

ゲームに集中していた来牙が美咲に声を掛けられると、少し反応に遅れ気味だったがすぐに驚いた。

「ちょっと、久々の再会の言葉がそれ？ “久しぶりだな美咲”  
って言うのを待ってたんだけど……」

「だから何でアンタが此処にいる!？」

「まあまあ、そんな細かい事は気にしないで（ギョウ）」

「お…おい!? いきなり引っ付くな!」

「はあゝ 来牙君の匂いだゝ」

美咲は背後から座っている来牙に抱き付いて、猫みたいにゴロゴロと甘えていた。

「だから……いい加減に俺の話を……」

コンコン…ガチャッ!

『おいお二人さん、お婆さんに代わってお茶を用意……』

「」

話が長くなりそうだと思ってお茶とお菓子を持ってきた私であったが……

『……………失礼しました』

バタンッ

大変野暮な事をしてしまったのでドアを閉めた。

「待て! 旅人さんがここにいるって事は、アンタが美咲を連れてきたのか!？」

「来牙君、旅人さんは放って置いてアタシ達だけで楽しみましょ」

「その前に俺の質問に答える〜〜〜!!!」

部屋からは来牙の絶叫が響いた。

そして5分後

「やっぱり旅人さんが一枚噛んでいたのか……」

『スマン来牙、ちょっと悪ふざけが過ぎたよ』

「アタシは割と本気だったんだけど」

何とか来牙を落ち着かせ、私と美咲は来牙の向かいに座っていた。

「それで？ アンタが美咲の知り合いで、美咲を俺の家に連れて来たって事でいいんだな？」

『はい、そうです』

「アンタ何処で美咲と知り合ったんだ？」

「来牙君、アタシと旅人さんの関係が気になるの？」



「……………少しだけな」

「ふん」

美咲は来牙が少しばかり私に嫉妬しているか、嬉しそうに顔をしている。

『来牙、質問はもういいか？』

「ああ。けどな旅人さん、美咲が来るんだったら、前もって連絡して欲しかったんだが……………」

『なんだい、沢渡さんが来たら何か不味いことでもあるの？』

「俺は別に無いが……………ただ……………」

『ただ？』

「もし絵梨がいたら、とんでもない事になっていたからな」

『ああ、そっちの心配ね』

どうやら来牙は絵梨の暴走を危惧していたようだ。

「確かに、アタシが来牙君に抱き付いてエッチな事をしてたら、絵梨ちゃんはアタシをボコボコにしてるでしょうね」

『まあ来牙がそんな事をさせないとは思っけど』

「その時は俺が凄く疲れる……………」

『「(だよねえ)」』

私と美咲は来牙が絵梨を必死に押さえ込む姿を想像した。

『まあいいじゃん、当の絵梨はバイトでいないんだから(絵梨がいないのは知ってるし……)』

「ねえ来牙君、絵梨ちゃんが帰ってくる前に(スッ)……」

「待て美咲、何で抱きつく?」

美咲は再び来牙に近づいて抱き、来牙は戸惑いながらも美咲から離れようとする。

『それじゃあ私は、お婆さんがいる和室に行ってるね(スッ)』

「ちよつと待て!」

『なんだい?』

来牙は私が部屋から出ようとするのを引き止めた。

「もうすぐ絵梨が帰って来るから、美咲と一緒に和室に連れて行ってくれないか? もし絵梨にこんな所を見られたら……」

『ふむ……一応聞くけど、沢渡さんを庇う為に?』

「……………一応な」

『ほほう　来牙に愛されているねえ　沢渡さん』

「それ程でも」

「人の話を聞け!!」

ボケる私と美咲に来牙は突っ込んだ。

『絵梨の事だったら心配無いよ。暫く帰って来ないから』

「は？　それはどう言う事だ？」

『私の友人2人に頼んで、引き止めて貰っているんだ』

「.....」

『私が沢渡さんを連れて来るのに、絵梨の対策について考えていない訳が無いでしょ？』

絵梨はあと2時間は帰って来ないよと私が付け加える。

「.....既に先手は打っていたと言う訳か」

『そう言う事　それじゃあごゆっくりい　(ピシュッ!)』

「.....はあっ」

私が姿を消すと、来牙は溜息を吐いた。

「(ギョッ!)と言う訳だから来牙君、それまで2人つきりでいま

「しよ」

「……………もう好きにしてくれ」

抱きつく美咲に、どうでもよくなり始めた来牙。

「それじゃあ……………（スッ）」

「ん？ ……（ドンッ！）イタッ！ おい美咲、いきなり何をする？」

「んふふ〜」

美咲は来牙を押し倒した。

「ねえ来牙君、久しぶりにキスしていいかな？」

「アンタは会って早々にするのか？」

「いいじゃない、キスするくらい。もしかして……………アタシの事、嫌いになった？」

美咲はちよっぴり寂しそうな顔で言うと……………。

「……………いいや、俺は今でも美咲の事は好きだよ」

「嬉しい。アタシでっきり……………やっぱりあの時の事は忘れてくれって言うと思った」

「アンタは俺が告白したのを撤回すると思っていたのか？」

だとしたら心外だと来牙は顔を顰めている。

「ゴメンなさい、ちょっと言い過ぎたわ。お詫びに……………んん」

「んんん……………（美咲のキスは久しぶりだな）」

美咲にキスをされた来牙は、何の抵抗もせず受け入れていた。

おまけ

私と美咲が来牙の部屋に入っている時……………。

「ねえ絵梨ちゃん、このケーキなんてどうかな？」

「私はこのケーキをお勧めするわ」

「え…え〜と……………」

絵梨がバイトが終わって家に帰ろうとした矢先に、愛奈と真美に会ってケーキ屋に連れて行かれた。

「あの〜江藤さんと沢井さん、あたしもう家に帰らないと……………」

「久々に会ったんだから、もうちょっとボク達に付き合ってよ。それにボクの事は愛奈って呼んで」

「私も真美でいいわよ」

「で…でも…早く帰らないと来牙君が…」

絵梨は来牙とゲームをする約束をしていたので、早く帰りたかったのだが、合コンで知り合った愛奈と真美の誘いを無下に断ることが出来なかった。

「絵梨ちゃん、宮永君の事が大好きなのは分かるけどさあ」

「お兄ちゃんにベツタリなのは、あまり良くないと思うわ。それとも、私達と一緒にいるのは嫌なのかしら？」

「そ、そんな事は無いですけど」

真美の言葉に絵梨は否定する。

「じゃあ早くケーキを選んで。私は絵梨ちゃんが宮永君の何処が好きになったのかを聞いてみたいし」

「……………ま…真美ちゃん……………もしかして来牙君の事……………」

「勘違いしないで、私は宮永君に恋愛感情なんて抱いていないわ」

「そ…そうなんだ（ホッ）」

真美に少し警戒した絵梨であったが、それは杞憂であった。

「ボクも真美ちゃんと同じく聞いて見たいなあ。言っておくけど、ボクも宮永君に恋愛感情は持って無いよ……」（エッチはしたけどね）」

「……………しょ…しょうがないですね」

既に来牙に手を出した愛奈であるが敢えて伏せていると、絵梨は来牙をどうして好きになったのかを惚気ながら話し始めた。

「（旅人さん、上手く行つたよ）」

「（後で報酬を貰いますからね）」

愛奈と真美は内心、絵梨を引き止めるのを成功した事に安堵していたのであった。

862

さらにおまけ

『もう少しで来牙の家に着くよ……って木下さん、いつまで写真を  
見てるの？』

「……………」

影分身の私と優子は来牙の家に向かっていた。優子に美咲の事を少し話して写真を渡すと、目の敵にするかの様にじっと写真を見ていた。どうでもいい余談だが、優子が持っていたBL本が入っている

袋は、既に影分身の私が優子の部屋へと転送させている。

「……………ねえ旅人さん、この女は宮永君の何？」

『だからそれはさっき答えた筈なんだけど？ 来牙に好意を持っている女の子だって』

「……………」

『（また写真を睨み始めたよ）』

これまで私が先程から質問に答えると、優子は写真を見ると言う事が何回も続いていた。

『……………あのさあ木下さん、来牙の事が好きなのは分かったから……………』

「だ…誰が宮永君の事が好きなのよ！？ アタシはただ……………」

『ただ？』

「（……………）……………」

『……………はいはい、もう答えなくていいよ』

影分身の私は来牙の家に着くまで優子と会話するのを止める事にし、優子は再び写真を睨み付けていた。



沢渡美咲 再び ? (後書き)

次回はアッチの方に進みますので、お楽しみに!!!

沢渡美咲 再び 閑話（前書き）

この閑話はアッチの方と連動しているので、ご注意ください。

沢渡美咲 再び 閑話

何故優子があんな状態になっているのかを説明しましょう。

来牙と美咲がエッチしている時……。

『さあ着いたよ木下さん』

「……………」

影分身の私と優子は来牙の家の前に辿りついた。

「ねえ旅人さん、宮永君の部屋にはあの写真に写っている女がいるんでしょう？」

『そうだよ』

「ふ…ふふふふふ……」

『木下さん、恐ろしい笑みを浮かべながら来牙の部屋を見るのは止めなさい』

優子が嫉妬に満ちた顔をしているのを、私は何とか落ち着かせようとす。

「さあ……宮永君の部屋に乗り込むわよ」

『それはちょっと待ってね（ピシュッ！）』

「え？ ど…何処に行ったのかしら？」

影分身の私が姿を消したので、優子は少し戸惑った。

「……………まあいいわ、早く宮永君に（ピンポーン）」

優子がインターフォンを押すと……………。

《待ってたよ、木下さん》

「は？……………ってアナタが何で既に宮永君の家に入っているのよ？」

私が応答したのに、優子が分からない顔をしていた。

《教えてあげるから、早く入りな》

「…………………………」

そして優子は来牙の家に入った。

『さて、優子も来た事だし……………お婆さん、ちょっと失礼しますね』

「旅人さん、何をやろうとしているんですか？」

「じゃ〜？（どいどいくの〜？）」

私が和室から出ようとすると、何故か出かける準備万端のお婆さん

とユーにゃんは私に質問をした。

『フフフ……ちょっとした事ですよ。ではお婆さん・ユーにゃん、先に温泉地にお送りしますので少しの間待っていて下さい』

「分かりました」

「にゃ〜（わかった〜）」

『それでは（パチンツ！）』

「すぐに来て下さいねえ〜（ピシュツ！）」

「にゃ〜（まってるよ〜）」

私が指を鳴らすと、お婆さんとユーにゃんの姿が消えた。

『よし、さっさとこっちの用事を済ませるか……（スー）やあ木下さん』

和室の戸を開けると、玄関には優子がいる。

「旅人さん、アナタ何時の間に宮永君の家に入っていたの？」

『私は木下さんが此処に来るまでずっとここにいたよ』

「え？……でもアナタ……」

『木下さんに会っていたのは、私が作った影分身だよ』

「……………アナタってホントに何でもアリなのね」  
影分身を作った私に優子は呆れながら見ていた。

『まあ、そんな事はどうでもいいからさ……………来牙は部屋で沢渡さんとエッチしているよ』

「！！！！！！……………ふ……………ふ……………ふ……………ふ……………ふ……………」

優子はすぐに恐い笑みを浮かべながら笑い始めた。

『（うわー、これは来牙を殺しそうな感じだよ）』

「み〜や〜な〜が〜く〜ん〜（ガシッ）……………旅人さん、その手を離してくれる？」

『好きな男に嫉妬するのは構わないけど、殺しちゃダメだよ？』

「！！！！だ……………だ……………誰が！？」

『まったく、此処まで来ておいてまだ素直じゃないな……………仕方ない（スッ）』

「え？……………ちょ……………ちょっと（トンッ）」

未だに素直になりきれない優子に私は暗示を掛けることにした。

『素直な所を来牙に見せてやりなさい』

「……………分かった。大好きな宮永君とエッチしてくる（何を言っ

るのよ!? アタシは別に宮永君なんて……」

『さあ愛しの来牙の部屋に行つて来なさい』

「うん……（誰が愛しの宮永君よ!! ちょ…ちょっと待って!?!）」

暗示に掛けられた優子は来牙の部屋へと向かった。

『フフフフフ……さあ優子、そろそろ観念すべきだよ……ククククク』

今の優子は体を操られても心は操っていない状態にしている。

『絵梨には悪いけど、今回は来牙を2人に譲つて貰うからね……（ピシユッ!）』

そして私はお婆さんとユーにゃんがいる温泉地に向かう為に姿を消した。

因みに爺は家にはおらず、ローズに無理矢理デートさせられていて、家にはいない。

沢渡美咲 再び 閑話？（前書き）

何度も言いますが、この閑話はアッチの方に連動していますので、  
ご注意ください。



沢渡美咲 再び 閑話？

3人がエッチしている時……。

『お婆さん、足湯の湯加減はどうですか？』

「気持ちいいですねえ」

とある温泉地で、私とお婆さんは足湯に浸かっていた。

「にゃにゃ〜（旅人さん、僕お腹空いた〜）」

『ほいほい、これあげるよ（ゴソゴソ……）はいどうぞ』

「にゃ〜（いただきます〜）」

私の膝の上に座っているユーにゃんは食べ物を催促してきたので、私が懐から煮干魚を出すと、ユーにゃんはすぐに食べて無くなった。

「にゃ〜？（まだある？）」「

『お代わりかい？ ユーにゃんは食欲旺盛だねえ〜。じゃあ今度はツナでも食べる？』

「にゃ〜！（食べる！）」

『はいはい、分かったからそんなに顔を近づけないで。今から「あの〜旅人さん」ん？』

私がユーにゃんとじゃれ合っていると、お婆さんが私に話しかける。

『何です?』

「にゃ〜? (おばあちゃん、どうしたの〜?)」

「あたしがユーにゃんにご飯を食べさせますから……その……」

『要はユーにゃんと喋りたいんでしょう?』

「そ…そうとも言えますね」

『ほらユーにゃん、お婆さんが君と話したがっているから、座る場所交代ね』

「にゃ〜 (分かった)」

ユーにゃんが私からお婆さんの膝元に座ると、お婆さんは嬉しそうな顔をしている。

『はいお婆さん、コレをユーにゃんに (スッ)』

「どうも……ほらユーにゃん、たくさんお食べ」

「にゃ〜 (いただきます)」

私がかつオのツナが乗っている皿をお婆さんに渡し、お婆さんは翻訳機を持ちながらユーにゃんに食べさせている。

「どうだいユーにゃん、美味しいかい?」

「にゃ〜（す〜くおいし〜）」

「そうかいそうかい」

『（お婆さんは暫くユーにゃんと話しているだろうな……その間に私は名湯でも探してるか）』

私はお婆さんとユーにゃんが仲良く話しているのを尻目に、どこかにいい温泉が無いかとマップを見ていた。

沢渡美咲 再び 閑話？（後書き）

次回はまた、アッチの方に行きますので、お楽しみに!!!

沢渡美咲 再び 後始末

私がお婆さんとユーにゃんと一緒に観光をしていると……。

『おっと、一度戻らないといけないみたいだな』

「どうかしましたか、旅人さん？」

「にゃあ〜？（どうしたの？）」

私が言葉を漏らすと、お婆さんと私の肩に乗っているユーにゃんはこっちを見てきた。

『お婆さん、すみませんがユーにゃんを抱えてて下さい（スッ）』

「え…ええ。それは構いませんが……」

『ちよつと野暮用がありますので、少しの間いなくなります。では……（ピシユッ！）』

肩に乗っているユーにゃんをお婆さんに渡し、すぐに姿を消す私であつた。

「にゃにゃ〜？（旅人さんは、どうしたんだろう？）」

「さあ……？」

ユーにゃんの鳴き声に、翻訳機を使っているお婆さんは分からないと言った感じで答えた。

来牙の部屋にて……。

『（ピシュッ！）いきなりで悪いけどお邪魔するよぉ〜……………っで、これは……………』

私がいきなり参上すると、そこには物凄い事になっていた。

「はあ…はあ…はあ…はあ……………」

「ああ……………も…もうダメ……………」

「あ…アタシも……………むりだよ〜〜〜」

来牙が優子と美咲の間に横になって倒れており、その2人も来牙と同様に倒れてノックダウン状態だ。

『……………取り敢えず、私の方で後始末をしておくか（パチンッ）指を鳴らした私は、3人が気絶したのを確認すると、来牙の部屋中を綺麗にする為に能力を活用したのであった。』

来牙の部屋を綺麗にして15分後

『いや〜驚いたよ。この部屋に入った瞬間、とんでもない事になつてたからねえ〜』

「……………」

私の台詞に、服を着て座っている来牙達は無言であつた。

3人が気絶している最中に、私は来牙と来牙の欲望塗れになっている美咲と優子の体を一瞬で綺麗にさせて服を着せ、部屋の周りの匂いも除去して元の状態に戻した。

そして何もかも元に戻した私は3人を起こして、現在に至ると言う事である。

『来牙の性欲は凄いなえ〜』

「ホントよ、来牙君つたら何度も何度もアタシ達の中に出して……………」

「もうこれは妊娠確実よ……………宮永君、責任取つてよね」

「……………分かった、責任は全て俺が……………」

『来牙、責任取らなくても大丈夫だよ』

「……………え?……………」

私がサラッと言うと3人は揃って私の顔を見る。

『君が沢渡さんに飲まされた媚薬には、ちょっと副作用があつてね』

「副作用？」

『媚薬を飲んだら子供が出来ない様になるって言う副作用だよ』

「そ…それは本当か？」

『私が大事な事を言うのに嘘を吐くと思つているのか？』

「……なら良いが……ん？ ちょっと待て、そうしたら俺はもう子供を作る事は出来ないのか？」

『安心しろ、あれは薬が効いている時の副作用に過ぎないから』

「そ…そうか、よかった…（ホッ）」

私が媚薬の副作用を言うと、来牙はホッと安堵した。

しかし……。

「ちょっと旅人さん、そんな副作用はアタシ聞いてないんだけど？」

『どうせ沢渡さんの事だから既成事実だと言って、来牙を自分の物にしようって考えていたと思うから、敢えて言わなかったんだよ』

「……………（ばれてたのね……………）」



私に考えが読まれていた美咲は無言になる。

『それで、どうだった木下さん？』

「……………」

『暗示がもう解かれているのは分かっているんだよ』

「何？ 暗示だと？」

「旅人さん、それどういう事？」

『ああ、2人は知らないんだったね……私が木下さんに掛けた暗示は…………』

「わ……………！！！！ 言わないで……………！！！！」

私が優子に掛けた暗示を言おうとすると、優子は即座に私の口を塞ぐ。

『むぐむぐ（木下さん、手をどけてくれよ）』

「おい木下、その手を離したらどうだ？」

「そ…そんな事より宮永君！ ずっと気になっていたんだけど、この女は貴方の何なのよ！？」

優子は私の口を塞いでいた手を離すと、来牙に美咲との関係を聞きます。

『あの〜木下さん？ それはもう私が教えた筈なんだけど？』

「旅人さんは黙ってて!!」

『……………はい』

教えたのにも拘らず、優子は有無を言わさず私を黙らせた。

「いや……………何なのって言われてもな……………」

「アタシは来牙君の恋人よ（ギユウ!）」

「!?!?!?!」

美咲は優子に見せ付けるかのように来牙に抱きつく。

「おい美咲、俺とアンタはそんな関係じゃ……………」

「でもアタシの事を好きって言ってくれたでしょ?」

「ま……………まあそうだが……………」

「……………」

優子は来牙と美咲のやり取りを見て無言になる。

「と言つ訳で分かった、木下さん?」

「……………だって……………」



「~~~~!! こ…コレだけ言ってもまだ分からないなんて……教え  
てあげるからちゃんと聞きなさい!!」

「は…はい」

優子は来牙が好きになった理由を暴露しまくった……そこには私と  
美咲がいるにも拘らず。

「来牙君って他の女の子にも好かれていたのね……」

『本人は全く自覚は無いけどな』

「と言うかあの娘、ここにアタシ達がいるのに話してもいいのかな  
？」

『いいんじゃない？ 私達が証人になればいいんだから』

と、来牙に好きな理由を言っている優子は私と美咲がいる事に今更  
気付き……。

「（／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／……イヤアアアア  
~~~~!!!!!!（シュバツ!!））」

火が出るほど顔が真っ赤になって部屋から一瞬で出て行き、来牙の
家を去った。

『瞬間移動したかのような速さで出て行ったねえ』

「世界を狙えるほどの速さだったわね。オリンピックで金メダル取
れるんじゃないかしら？」

「……………」

私と美咲は優子のスピードに感心しており、来牙は優子の告白に呆然としていた。

そして美咲はそろそろ絵梨が帰ってくる時間だと気付いたので会わない為に素早く来牙の家から去って行き、私は再びお婆さんとユーにゃんがいる温泉地へと向かった。

優子に告白された来牙は未だに呆然としていが。

Fクラス成敗物語（前書き）

これは原作8巻にて、Fクラスが嫉妬暴走して明久と坂本を襲った後の話です。

『ちよつと失礼しますねえ』

「「「「「「「「「「「「「「」

私の声にくクラス生徒全員は私の方に顔を向けた。

「あ…アンタはいつも学園で騒動を起こしている変質者じゃない！
？」

『コロコロ。騒動を起こしているのは認めるけど、変質者は余計だよ』

いきなり失礼な事を言う小山に私は少し顔を顰める。

『初対面の相手に随分と失礼な事を言いますなあ、くクラス代表の小山さん。まずは挨拶からだと思うけど？』

「学園の風紀を乱すアンタみたいな変質者に、挨拶をする価値なんて無いわ！」

また更に失礼な事を言う小山に続き……。

「そつだそつだ！」

「貴方みたいな人は学園の恥晒しよ！」

「騒動を起こすお前はくクラスと同等だ！」

「いつまでこの学園にいるのよ！？」

「この前連れて来たツインテールの女の子を俺に寄せせ！」

他のCクラス生徒も私を罵倒していた……最後に言った奴は綾の事を言っていると思うが私は無視する。

『……ふつつ。どうやらCクラスは礼儀と言う物が無いみたいだね。Fクラスと良い勝負だよ』

「……何ですって!?!?!」

「……何だと!?!?!」

私が少し言い返すと過敏に反応するCクラス生徒達。

「私達をあのバカ共と一緒にしないでよ!?!」

『別に私はただ礼儀に関して言っただけに過ぎないが?』

「あのバカ共と一緒にされるのが嫌なのよ!?!」

『あつそ……』

小山の顔を見て分かるくらい、Fクラスを相当嫌悪しているのが分かる。

『まあそんな事はどうでもいいから、そろそろ本題に入るとしますか』

「本題?」

『そう、君達Cクラスが今日予定しているFクラスとの試召戦争を、明日にして貰いたいとお願いしたくてね。承諾してくれたら、何か欲しいものをあげるよ』

「ふざけないで！ 私達は何でアンタのお願いを聞かなきゃいけないのよ！？ って言うか私達は物で釣られて食い付くほど卑しくないわよ！」

案の定、小山は私のお願いに憤慨した。

『いや〜今日は私の方でバカ共をお仕置きしようかと思ってねえ〜』

「そんなの別の日にすればいいじゃない!？」

『私としては出来れば今日がいいんだよ。だからさ、今日の試召戦争は無しにして明日に……』

「却下よ!!--」

『どうしてもダメ?』

「当たり前よ!!--」

『はあっ……なら仕方ない』

断固と却下する小山に何を言っても無駄だと分かったので、別の手を使う事にした。

『じゃあ聞くけど小山さん、今回の試召戦争は君が指揮するんだよね?』

「代表の私が指揮するのは当然よ」

『ふうん』

「さつさとこの教室から出て行ってくれないかしら？ 私はこれから作戦を練らないといけないの、それに変質者のアンタとこれ以上話す気は無いわ」

『作戦を練るねえ』

「さあ、アンタはさつさと……」

小山が出て行けと言おうとした瞬間……。

『どうせ3年の先輩にFクラス攻略法を聞くだけでしょ？』

「なっ!?!」

「……………!……………」

私の発言に小山とCクラス生徒は驚いた顔をする。

『何でアンタが知ってるんだ？ ってな顔になっていきますな〜皆さん』

「な…何を言ってるのかしら？ 代表の私がそんな事を……」

『それじゃあコレはなんだい？（ゴソゴソ……ピラッ）』

「！……！」

私は懐から写真を出して小山に見せると、それにはこの教室で小山が3-Aクラスの小暮葵と密会しているのが写っていた。

「一見、世間話をしているかの様に見えるけど、Cクラス生徒全員が真面目な顔して小暮さんの話を聞いているにも見えるよねえ。」
まるで作戦を聞き逃さず聞いているみたいに」

「……………あ…アンタ……………一体それを何処で……………？」

『教える気は無いよ。それに私とこれ以上話す気は無いんでしょ？』

「……………」

『試召戦争前に聞くのは問題無いとは思うけど、もしこれが戦争の最中で3年に聞くとしたら、ちょっととした違反じゃないかな？ まあ黙っていれば問題無いとは思うけど……………』

「……………アンタ、私達を脅しているのかしら？」

『お好きに捉えてどうぞ』

「……………（厄介な奴に知られたわね）」

小山は私を此処で捕まえて試召戦争が終わるまでに監禁させようと思案しているみたいだ。

『小山さん、私はただ今日の試召戦争は少しの間は手を出さないと貰いたいとお願いをしているだけだ。だから此処は大人しく引いて

くれないかな？ 明日になったら、この写真はすぐに燃やすし、私は君達がやるうとして、口を出す気は無いから」

「……………私がそれを信じると思う？」

『信じてくれた方が私としては好都合なんだけど』

「……………」

小山は考えている顔をしている。

そして5分後…………。

「……………いいわ、此処はアナタに従いましょう」

『助かるよ、では私はこれからFクラスへ……………』

小山が漸く聞き入れてくれたので、私は教室から出ようとするが…………。

「何て言うと思っていたかしら？」

『ん？』

「皆！ そいつを逃がさないで！…！」

小山の指示でCクラス生徒は私を取り囲んだ。

『おいおい小山さん、どう言つつもりだい？』

「私が変質者の言う事なんか聞くわけ無いでしょう」

『何故だ？ 私は単にFクラスのバカ共をお仕置きするだけだ。君たちCクラスには何の害は無い筈だよ？』

「確かにそうね。けどアンタはFクラスの中には仲の良い友達がいるみたいね？」

『それが何か？』

「その友達に言っくんじやないのかしら？ 私達がやるうとしてしている事を……」

『言っつもりは毛頭無いぞ……』

「信じられないわね」

本心で言っているつもりだが、小山は信じてくれないみたいだ。

『じゃあもう少し誠意を見せれば信じてくれる？（シュボッ！）これで良いかな？』

私が何の道具も使わず手に持っている写真を燃やすと、小山達は若干驚いた顔をする。

「……………言った筈よ、アンタ何か信じないわ。皆、コイツを捕

「まえなさい!!」

「大人しく捕まってもらうぞ!」

「てめえにはちょっとした恨みがあるから、のしてやる!!」

「ツインテールの女の子を俺に寄せさせ!!」

小山の指示でCクラス男子生徒が私に襲い掛かってきたが……。

『バカが……信じていればいい物を（ドンッ!!×3）』

「くっくっ!!!!（ボタン!）」「」

「なっ!?!」

私は一瞬で3人の攻撃をかわして、首筋に手刀で当てて気絶させた事に小山は驚く。

『小山さん、君はFクラスと違って話が通じると思っていたが……どうやら見当違いみたいだな』

「くっ! だったら、これならどうかしら!?!」

今度は女子生徒達が私を捕まえようとした。

『言うておくけど、女の子だからって私は向かって来る相手には容赦しないよ?!』

「もし手を出したら、私が廊下で叫ばせてもらうわ。女の子に手を

同時にドアを開かないように設定している。

「(ドンドン!!) 誰か助けてくれ~~~~!!!!!!」

『ハツハツハツハ！ 無駄だよ、ドアを叩いた所で誰も助けには来ないから』

この教室を防音にしてあるからねと内心付け加える。

「旅人様あゝワタシ達は何をすればいいんですかあゝ？」

『そうだな……とりあえず窓から逃げようとしている男子生徒共を捕まえる。それとあそこにいる奴は、綾ちゃんを狙っているから成敗しておいて』

「分かりましたわあゝ。いくわよみんなあゝ」

「~~~~はあゝい」「」

「~~~~ギヤアアアア~~~~!!!!!!!!」「」

ローズ達は凄い速さで窓から出ようとしている男子生徒を全て捕まえた。

「それじゃあアナタにはワタシからの熱いキスをプレゼントをするわ」

「や…止めてくれ!!!! 俺はまだ死にたくない!!!!!!」

「綾ちゃんに手を出そうとするアナタには、お・し・お・き・よ

Fクラス成敗物語 ？

『ではCクラスの皆さん、今日一日大人しくしてくれますね？』

「……………はい……………貴方に従います（泣）」……………」

ローズに抱擁されて気絶している小山を無視して、生き残ったCクラス生徒に確認をすると漸く承諾してくれた。

因みにローズ達は既に教室にはいない。

『私を捕まえるなら策を二重三重に練っておけど、小山さんに伝えておいてね』

「……………分かりました（泣）……………」……………」

『ついでに……………次からは覚悟して私に挑むように。分かったかい？』

「……………肝に銘じておきます（泣）……………」……………」

生き残ったCクラス生徒達は二度と私に楯突く等と言う愚かな真似をしないと誓った。

『それでは失礼するよ（ガチャ……………ボタン）』

私がCクラスの教室から出ると……………。

「……………俺、もうあの人に反抗するの止める」

「……………私も」

「……………俺も」

「……………楯突いたら最後、あのオカマ達に食われちまう……………」

「……………絶対嫌……………」

「……………そんな事されたら……………あいつ等と同じ運命を辿っちまう」

Cクラス生徒達はローズ達に抱擁されたりキスされた男子生徒達を見て再度、絶対私に逆らわないと強く心に留めた。

私はトコトコとFクラスの教室に向かっていた。

『小山の奴、私を追い出そうと考えなければいい物を……………まあ、Cクラスが私に従順になってくれたのは収穫だったかな……………』

小山が愚かな行動に走った事に少し不機嫌になった私であったが、それがかえって良かったかもしれないと思う。

『では、早くFクラスに行くとしますか……………（スタスタ）』

私が階段の所まで辿り着き……

『（ピタッ）……………何時までも尾行してないで、そろそろ出て来たらどうだ？』

私は足を止めて階段の方に顔を向けると……………。

「良く分かったな、俺が尾行してる事に」

『君は……………』

そこには意外な人物がいた。

Fクラス内では……………。

「おかしいな……………」

「どつしたの雄二？」

怪訝な顔をする雄二に明久が尋ねる。

注：この話で明久はまだ風邪を引いてはいません。

「試召戦争が始まつてる筈なのに、Cクラスの連中が攻めて来ない」

「僕達を誘い込むための罠でも仕掛けてるんじゃないの?」

「あのCクラス代表の小山の性格を考えると、罠を仕掛けるタイプじゃないと思うんだがな」

3年の力を借りてたら話は別だがと雄二は付け加える。

「じゃが雄二、現にCクラスはまだ攻めてこないのじゃ。じゃつたら明久の言うとおりに罠を仕掛けているのではないかの?」

「俺にはとてもそうは思えないんだがなあ……」

雄二がCクラスの不可解な行動に疑問を持っている時……。

ガラッ!

『生憎、Cクラスは本日Fクラスとの試召戦争はやらないよ』

「旅人!!」

「あれ、旅人さん?」

「旅人殿ではないか」

「アンタ!!」

「旅人さんがどうして此処に!？」

「……………どうして？」 ムツツリーニ

「旅人さんが此処に来たって事はもしや……………」

上から順に雄二、明久、秀吉、島田、姫路、来牙は私が入室したのを見て色々な顔をする。

しかし……………。

「さすらいの旅人をコロセエ……………!!!!!!!!!!」

「……………うおおおおお……………!!!!!!!!!!」

須川が率いるFFF団のバカ共が私を見てすぐ私に襲い掛かろうとした。

『相変わらず懲りない連中だな。丁度いい、ここでバカ共を始末……………』

「待てお前等!! ソイツに挑んだ所で返り討ちに遭う! ここは大人しくしてろ!!」

私は撃退しようとするが、雄二がFFF団の動きを止める。

が……………。

「止めるな坂本!! それでも俺達はコイツを殺さなきゃいけない

んだ!!」

「こんなクズ野郎はすぐに殺さなきゃならん!!」

「学園に女の子を連れ込んで来る奴は死刑だ!!」

「綾ちゃんを俺達が救わなければならん!!」

雄二に身勝手極まりない理由を突きつけて来る。

『私はそんな理由で殺されなければならんのか』

「お前等もいい加減学習しろ! もし此処でコイツを殺しても、あの化け物共が来るんだぞ!? それでもいいのか!？」

「……………うっ!!」

雄二の正論とも言える正論にFFF団は私に対する攻撃態勢を解除する。

「漸く理解してくれたみたいだな……………悪いな旅人、ウチのクラスがバカな真似をして」

『別に気にしていないよ』

「そう言ってくれて助かる。で、Cクラスが試召戦争をやらないってのはどういう事だ? お前が何かしたのか?」

『まあね。私の方でCクラスに“今日はFクラスとの試召戦争をしないで欲しい”って頼んだんだよ』

「何故だ？ アンタがそんな事をして何の意味がある？ てか、あのCクラスの代表がアンタの要請を聞いてくれる奴だとは思えないが……」（小山が来ない原因はコイツか）」

疑問を抱きながらも雄二は聞いているが、恐らく私の仕業と内心で感づいていた。

『まあそこはちょっと力づくでね』

「……………それで？ Cクラスとの試召戦争を止めてまで、俺達に何の用だ？」

雄二は私が来た目的を聞き出そうとする。

『さあ？ 何でしょうね？』

「質問に答える」

『そんな命令口調で言われてもねえ。所で雄二、左手の薬指に嵌めてたアレはどうしたの？』

「……………（ピクピク）……………ああ、アレか。今はちょっと外しててな……………あの時は随分と世話になったなあ……………」

『それはそれは でもちゃんと嵌めといてね、じゃないと霧島が悲しむから』

「……………（ギリギリ！）……………そうだな、気をつけておくよ」

雄二は頭に青筋を浮かべて歯軋りしながら怒りを押し殺し、笑みを浮かべて私を見ている。

（私が仕組んだ事であるが）先日のプロポーズで霧島のフィアンセになってしまった雄二は、自由と言う単語が完全に無くなった状態になっている。

『（しかし解せんな……）』

雄二が何故、怒り狂っている状態にも拘らずバカ共（FFF団）の動きを止めるのが理解出来なかった。

と、私が疑問に思っている時……。

「旅人さん、ちょっと聞きたい事があるんですけど」

『どうした、明久？』

明久が私に話し掛けてきた。

「先日、旅人さんが左腕を怪我してたのを見かけたんですが、何かあったんですか？」

「ワシも聞きたかったのじゃ、旅人殿が怪我をしたと聞いた時は驚いたぞい」

『……………まあ色々だね』

流石に明久の質問には言葉を濁すことしか出来なかった。まさか神と戦って怪我をした等と言える訳が無い。

「それでアンタ、ウチ等に何の用で此処に来たの？」

「もしかして、また誰か連れて来たんですか？」

『姫路さんと島田さん、そう嫌そうな顔をしないでくれよ。と言っ
か、いつもの様に私に襲い掛からないの？』

「……………ウチ等を猛獣か何かと勘違いしていないかしら？ そこま
でバカじゃ無いわよ」

「私達だって、学習しているんですからね」

『（明久の事となると暴走するくせに）』

島田と姫路の言葉にはどうも説得力が感じられない。

『そうそうムツツリーニ、君に言いたい事があって』

「……………何？」

『愛奈ちゃんが君に会いたがっていたよ（ボソボソ）』

「……………」

ムツツリーニに耳打ちをすると目を見開く。

『けど……………君が昨日FFF団と一緒に明久をリンチした事を言った
ら、愛奈ちゃんが幻滅していたよ？（ボソボソ）』

「！！！！！！……………異端審問会は人の幸せは許さない（ボソボソ）」
『……………君がそう言うなら仕方ない、FFF団と一緒に君も始末させて貰うよ（ボソボソ）」

「！！！！！！……………まさか貴方が来た目的は……………」

私がムツツリーニに此処に来た用件を言うと、ムツツリーニは私から逃げるようにジリジリと後ろに下がる。

そして私は来牙に近づき……………。

『来牙、昨日は大変だったみたいだな（ボソボソ）」

「全くだ、あのバカ共にはホントにウンザリしてくる（ボソボソ）」

『私が此処に来たのは知っていると思うが、FFF団とおまけを始末しにやって来た（ボソボソ）」

「そうか、なら遠慮なくやってくれ（ボソボソ）」

『フフフ……………了解』
ボソボソ

耳打ちをして用件を言った。

実は来牙が昨日のCクラスとの試召戦争で、Fクラスの大半が下らん真似をしていたから罰を下して欲しいと依頼されたので私は此処に来たのだ。

「おい旅人、さっきから何コソコソと話していやがる」

『何でもないよ、では私が此処に来た用件を言いましょう』

「……………てめえ、さっきまではぐらかしておきながら漸く言つ氣になつたか（まあ俺としては好都合だつたがな……………）」

『悪い悪い……………（ん？）』

雄二の後ろにいたFFF団が何故か陣取っている。

まるでこれから何かをやらかすかのように……………。

「そうそう、アンタに渡す物があつたんだ」

『それは何かな？』

「渡すのは……………これだ！！（ビュオツ！！）」

雄二が私の顔を目掛けて、バスケットボールを投げてきた。

『（パシッ！）……………漸く本性を現したか、いつ私に攻撃してくるかと待っていたよ』

「やはり俺からの攻撃はお見通しだったか」

『顔を見ただけですぐに分かったよ、私に復讐したいってね』

「そうか、以後気を付ける事にしよう」

バスケットボールを両手で取った私と雄二は何事も無く話している

事に……。

「ちょっと雄二ー！！ 旅人さんに何してるんだよ!？」

「やって良い事と悪い事があるぞい!!」

明久と秀吉が雄二に抗議する。

『明久、秀吉、気にすんな。コイツが私に復讐する事は既にお見通しだったから。さて雄二、私に挑むと言う事は無論覚悟があるんだろっな?』

「どうかな?」

『ほお、随分いい度胸をしているな。だったら貴様もこの場で……
……あれ? 何だ?』

私がバスケットボールを投げようとしたが離す事が出来なかった。

「どうだ? 接着剤着きのバスケットボールは?」

『貴様……私がコレを両手で防ぐのを見越して投げたな?』

「そう言う事だ。てめえの能力は手を使わなければいけないんだろ? と言う事は、これでてめえも俺達と同等の存在になったな」

『くっ!!』

「お前等! 今こそ復讐の時だ!! コイツに対する恨みを存分に晴らしやがれ!!」

「旅人、てめえには今までの恨みを晴らさせて貰うぞ（ポキポキ）」

雄二は悪魔の顔をして私に近づき……。

「漸く復讐が出来る……」

「ブツコロ……ス」

「積年の恨み……」

「……で晴らしてやる……」

「これで綾ちゃんが俺の物に……」

FFF団も一緒に私に近づき……。

「ならウチも晴らさせて貰おうかしら？」

島田も私に対する恨みを晴らしたがっているみたいだ。

「ちょっと皆……！ そんな事したら不味いよ……！」

「此処で恨みを晴らしたとしても、後から恐ろしい目に遭うのは明白じゃぞ……！」

「お前等、止めといた方がいいと思うぞ？」

「皆さん、一人相手にそこまでしなくても……」

「……俺はやりたくない」

Fクラス成敗物語 ? (前書き)

秋雨さんの許可は頂き、「バカとテストと召喚獣 試験召喚のす
め」の主人公、久遠光一が参加しています。

『(ズキズキズキ!!) うつつ! ……これ以上は無理か……【時間よ戻れ】』

再度【】を使うと……。

「おらあ!! (ビュオッ)」

「うおお〜!! (ビュオッ!!)」

「(ドゴッ!!)(グア! ……何するんだ坂本…島田……(ボタン)」

「何!? ……どう言う事だ!?!」

「どうして!?!」

雄二と島田は私を攻撃したかと思いきや、FFF団の一人を殴って気絶させてしまった。

「あれ!? ……旅人さんは!?!」

「何処に行ったのじゃ!?!」

「旅人さんが消えた?」

「え? ……え? ……さっきまでいたのに……」

「……何処へ?(キヨロキヨロ)……いた」

明久、秀吉、来牙、姫路は私がいなくなった事に戸惑い、ムツツリ

「一は回りを見ると私が入り口にいるのを発見した。」

『雄二と島田さん、味方を殴るとは酷いな』

「なっ!? あの野郎、いつの間に!?!」

「どう言う事なの坂本? アイツは手を使わないと能力が使えないって言ったじゃない!?!」

「そつだぞ坂本! 話が違つぞ!?!」

「そんなの俺が知りてえよ!?!」

雄二、島田、FFF団が揉めている時に……。

『では能力を使えない私は退却しますね〜(ガラッ!) それでは…
…(ボタン!)』

私は逃げた。

「待ちやがれ旅人!?!」

「逃がさないわよ!?!」

「……………絶対殺す……………!?!!?!」

私が逃げた事にバカ共(雄二・島田・FFF団)は私を追い掛け始めた。

「うっん……旅人さんがどうやってあそこから切り抜けたのかな?」

「そうじゃのう、一体どうやったのかが凄く気になるぞい」

「一体どうやったんでしよう?」

「……………あの人はホントに摩訶不思議」

明久・秀吉・姫路・ムツツリー二は私に対して更に謎めく。

「まあ何にせよ、雄二達はこれから旅人さんに始末されるだろうな」

「え? どう言う事なの来牙? だって旅人さんは両手が使えない状態だから逃げたんじゃないの?」

「明久の言う通りじゃぞ、どうして逃げている旅人殿が雄二達を始末するんじゃない?」

来牙の発言に明久と秀吉が質問する。

「考えてみる、もし旅人さんが本気で逃げるんだったら雄二達の前に姿を現さない筈だ」

「あ……………」

「確かにそうじゃ……………」

明久と秀吉は私の性格を考えて、あんな逃げ方はしないと納得する。

「それなのにも拘らず、雄二達の前に姿を現して態々教室から逃げた……………」と言ふ事は即ち「

「旅人さんはこれから雄二達を罠に嵌めると言う訳か……」

「しかも雄二達は旅人殿に対する復讐に頭が一杯で、そこまで考えておらんと……」

「そう言う事だ」

旅人さんはアイツ等の心理を上手く利用してるなと付け加える。

「旅人さんって策士もいい所だよね……ってムッツリーニ、さっきから何してるの？」

「……白旗を作っている」

「どうして白旗何て作っているんですか？」

「……旅人さんに降伏する為の準備」

「旅人殿がそれで許してくれるかのう？」

「……誠心誠意を込めて土下座をする」

「ムッツリーニ、そんなに旅人さんのお仕置きは嫌なのか？」

「……もう地獄は見たくない」

明久、姫路、秀吉、来牙のそれぞれの質問に答えるムッツリーニは白旗を作っていた。

「あれ？ そう言えば姫路さんも旅人さんに恨みを持っていたのに、
どうして雄二たちと一緒に加わらなかったの？」

「え？ あ…そ…それは…その…」

「？」

「（明久君と一緒に泊りしていると、何かどうでも良くなってしま
いました）」

モジモジしている姫路に明久は頭に“？”ばかりが浮かぶ。

「（何なのじゃ？ あの二人の雰囲気は…）」

そんな二人を見た秀吉は心の中がモヤモヤとしていた。

一方、私は……。

「さあ覚悟しやがれ旅人、てめえにはもう逃げ場はないぞ（ポキポ
キ）」

「今度こそ……（ポキポキ）」

「……………ブツコロ〜ス！…！！……………」

「どつ言つ事よ!?!」

突然、空き教室にある掃除用具入れの扉が開くと男子生徒がマシンガンを持ってぶっ放してきた。主にマシンガンの餌食になっているのはFFF団であり、雄二と島田には当たっていない。

『とりあえずFFF団を倒したか……お見事だよ』

「感謝するよ旅人さん、俺にこんな機会を与えてくれるなんて」

マシンガンをぶっ放した男子生徒が私に近づき礼を言う。

「な!?! て…てめえは文月学園最強の過激派 久遠光一!?!」

「何でココにいるのよ!?!」

「さあ…て……どうしてだろうな?」

久遠光一は笑いながら雄二と島田を見る。

何故私が久遠光一と結託しているのかと言つものには少し時間を遡る。

私がFクラスへ行く前に階段の前で立ち止まっている時……。

『……………何時までも尾行してないで、そろそろ出て来たらどうだ？』

「良く分かったな、俺がアンタを尾行してる事に」

『君は……………』

私が向けたその先には……………。

「初めまして、さすらいの旅人さん」

文月学園最強の過激派の久遠光一であった。

「いつから俺に気付いていたんだ？」

『私がCクラス代表の小山を成敗している時にな』

「へえ、あんなバカ騒ぎをしている最中でも俺がいた事に気付いていたのか。流星はさすらいの旅人さんだな」

『私を知っているのか？』

「勿論さ。アンタがバカ共を容赦なく始末する所を見て共感してな、学園での出来事はいつも見させて貰ってるよ」

久遠光一は私が今までやって来た出来事を思い出したのか、笑いながら私に近づいてくる。

『それで、久遠君は私に……………』

「俺の事は光一って呼んでくれ。その代わり俺もアンタの事を旅人さんと呼ばせてもらおうよ」

私が言っている最中に久遠光一は名前で呼ぶよう言ってくる。

『はいはい……では光一、君は私に何の用かな?』

「俺もバカ共を始末するのに混ぜてくれ」

『何故だ? 今まで通り見物していればいいだろう』

「もうそれは飽きてな。俺もアンタと一緒にバカ共を始末したいんだ」

『……………』

私は念の為に久遠光一（以降は光一）の頭の中を覗いて見たが、どうやら本当みたいだ。

「旅人さん、アンタ俺の頭の中を覗いていただろ?」

『……………一応な』

「分かっただろ? 俺が本心で言ってるって事が」

『……………良いだろう。丁度協力者が欲しかった所だから、君も一緒に付いて来るといい』

「よっしやー!」

光一は嬉しそうな表情でガッツポーズをする。

『……………そんなに嬉しいのか?』

「旅人さんと一緒にバカ共を撃退出来るんだ。こんなチャンスは滅多に無いからな」

『……………あつそう。じゃあとりあえず私はFクラスに行くから、君は隣の空き教室に行って、掃除用具入れに隠れてくれ』

「おいおい、俺と一緒に撃退するんじゃないのか?」

『安心しろ、光一の出番はちゃんとある。私を信じてくれ』

「……………まあアンタは嘘を吐かないだろうし……………分かった、隣の空き教室だな（スタスタ）」

光一は空き教室へと向かい……………。

『それじゃあ私はFクラスへと（スタスタ）』

私はFクラスへと向かった。

と言いつ訳である。

『(ニコッ) さあ形成逆転だよ、雄二、島田さん?』

「お前等をどうやって始末してやるつか(ジャキ! バチバチ!)」

「くっ!」

私は笑みを浮かべながら二人を見ており、光一はマシンガンとスタンガンを持ち構えている。私と光一を見て雄二と島田は追い詰められている顔となっていた。

「と、その前に……(ゴソゴソ)……ほら旅人さん、接着剤の中和剤だ(ポタポタ)」

『お?……(ベリッ! コロンコロン)……アハハ……これで力が使えるねえ』

「!!! 不味い、逃げるぞ島田!!!」

「分かったわ!!!」

光一が私の手に中和剤をかけると、くっ付いていたバスケットボールが外れた。

雄二と島田がそれを見ると空き教室から逃げようとしたが……。

『逃がさないよ(パチンッ!)』

ジャラジャラジャラ!!!

「グアアア！！ こ…この鎖は！？」

「何なのよコレ！？」

私が指を鳴らすと、鎖が現れて雄二と島田の体に巻きついた。

「凄いな、本当に指を鳴らしただけで物が出てくるとは……それで旅人さん、アイツ等を縛り付けてどうするんだ？ 抵抗しているみたいだが」

光一が天の鎖エルキ下ウに縛られた雄二と島田が抵抗しているのを見て私に聞く。

『今は放置だ。あの鎖に縛られた以上、奴等は絶対に逃げる事は出来ん。まずは……床に倒れているFFF団を始末する』

「そのFFF団って言う奴等は俺がマシンガンで下半身目掛けて撃つたから、暫くは起き上がれないぞ？」

私と光一は倒れているFFF団を見ると……。

「うおお……」

「か…かか……」

「お…お婿に……行けなくなる……」

「し…死ぬ……」

全員が股間に手を当てて悶えていた。

「殺られる前に殺ってやる〜〜!!!!!!」

FFF団を見ると教室の戸を開けようとしているが、私が開けられない様になっているので無駄な行為であった。それが無駄だと知ったFFF団はローズ達に喰われる前に迎撃の構えを取る。

『フハハハハハ。無駄だ、絶対に勝てん。ソイツ等の身体能力は鉄人並だ』

「~~~~ボウヤ達、大人の階段に上らせてあげるわあ~~~~」

「~~~~~~~~ふざけんな~~~~~~~~!!!!!!!!!!!!」

そしてFFF団は一瞬でやられてしまい、ローズ達に食われるのであった。

『さて光一、君にはこれ以上この惨劇を見せるのは余りに酷だから、あそこに行って貰うよ』

「そ…それは助かる……オエッ!」

『じゃあコレを渡すから、よろしく頼むよ（パチンッ!）』

「分かった（ピシュッ!）」

ローズ達がやっているのを見て光一は吐く寸前の顔になっているので、私は光一ある事を実行させる為にとある部屋へと移動させた。

因みに雄二と島田はFFF団がローズ達に食われる所をモロに見て完全に吐いている。

Fクラス成敗物語 ？（後書き）

秋雨さん、光一の使用許可を頂きありがとうございます。

Fクラス成敗物語 ？

ローズ達に食われると言う地獄絵図が終わると……

「アハ……アハハハ……へへへへ」

「フヒヒヒ……尻が……尻が……」

「アへへへ……ベロチューされた……ヒヤハハハ……」

「イ……イヒヒヒ……ウヒヤヒヤヒヤ……」

「へへ……ウへへへへ……飲んじまった……化け物の……ウへハハハハ……」

「アヒヤヒヤヒヤ……クヒヤヒヤヒヤヒヤ……！！」

「キヒヒヒ……お尻が痛いよう……何か出てくるよお……」

FFF団が倒れており、完全に自我崩壊していた。

須川は合体されて尻から白い物が出ており、武藤は長いディープキスをされて色々な物を吸われたり、近藤は太い物を啜えられていたり等々があったのだから。

『正に地獄絵図と呼ぶに相応しい惨劇だったな……』

「……………」

私は視覚遮断のサングラスをかけて最後まで見物し、雄二と島田は余りに気持ち悪過ぎる惨劇に散々吐きまくった後に気絶している。

それは当然だろう。何しろ裏お色気レンジャーの衣装を着て、更に気持ち悪い化粧をしたローズ達がキスしたり、喘ぎ声を出したり、感じている顔を見るのは誰でも耐えられないと思う。

もしこんな惨劇をテレビで放映されたら……間違いなく大絶叫が響いて気絶しているだろう。

と私が思っている時に……。

「旅人様あゝ、終わりましたわあゝ」

「……気持ち良かったですわあゝ」「……」

ローズ達が私に近づいて完了報告をする。

『須川達の味はどうだった？』

「とても美味しかったですわあ、若い子達を食べるのは久々で張り切りすぎちゃいました」

「……ワタシ達もですわあゝ」「……」

『……………協力感謝する』

一応、礼を言う私であった。

「旅人様、ワタシ達はこれからどうすればよろしいですか？」

『ローズ達の仕事はこれで終わりだから退散してもらおうよ』

「分かりましたわ。では……」

ローズ達が空き教室から出ようとしたが……。

『待て、お前達は私の方で転送するから教室から出るな』

「何故ですか？」

『……………理由は後で教えてやるから、お前達はセーフハウスに戻れ（パチンツ！）』

それを阻止する為に私は指を鳴らし、ローズ達をセーフハウスへと転送させた。

『さてと……………雄二と島田を始末する前に（パチンツ！）……………教室を綺麗にしておかないとね』

私は再度指を鳴らすと、空き教室がローズ達によってぶちまけた物とその匂いを一瞬で消し、欲望塗れになっていたFFF団の体を綺麗にして隣のFクラスへと転送しておいた。

Fクラスで……

バタバタバタバタバタ！！！！！！

「うわっ！？ 何！？」

「須川達が突然現れたのじゃ！！」

「何が起きたんですか！？」

「……………これはまさか」

「旅人さんがやったんだろうな……………」

須川達が上から突然降ってきた事に、明久、秀吉、姫路が驚き、ムツツリーニと来牙はすぐに私がやった事だと分かった。

明久達が須川達の顔を見ると……………。

「す…須川君達の顔が物凄く変なんだけど……………」

「壊れた顔になっているのじゃ……………」

「おまけに何か呟いていますし……………」

「……………一体何が？」

「まあコイツ等がとんでもない目に遭っていたのは確かだろうな」

それぞれ思った事を言っていた。

「あれ？ 雄二と美波がいない……………」

「アイツ等がまだ此処にいないと言う事は、まだお仕置きされていないみたいだな」

「い…一体、坂本君や美波ちゃんはどうなっちゃうんでしょうか？」

「さあな、けどコレだけは言える。あの二人はこれから地獄を体験する事になると言う事が……………」

来牙が更なる目に遭うと断言し……………。

「ムツツリーニ、もしかしたらお主も須川達と同じ目に遭うのではないかの？」

「……………早く降伏準備を終えなければ（イソイソ）」

秀吉の突っ込みに、ムツツリーニは私に対する謝罪文と献上物を出す準備をしていた。

場所はまた空き教室に戻り……………。

『おい二人とも、さっさと起きろ』

「……………」

『早く起きないと……………ローズ達をまた呼んで今度はお前達を食わせる様に命令するぞ？（スッ）』

「……………！！（バツ！！）」

椅子に座っている私が指を鳴らそうとすると、私の目の前に天の鎖エルキドゥで縛られて糞虫状態になっている雄二と島田を起こした。

『へえ、あの言葉は結構有効みたいだね』

「て…：テメエ！！ よくも俺達にあんな……………」

「汚すぎる物を見せたのよ！！！」

雄二と島田は起きて早々、私に文句を言う。

『何だ？ お前達もFFF団と一緒に混ざりたかったか？』

「……………」

『そこはダンマリなんだね……………まあいいや。これから君達には命を懸けた超スリル満天なアトラクションを楽しんで貰うから』

「ふざけんな……………」

「何でウチ等がそんな事しなきゃいけないのよ……………」

『言っておくけど、君達に拒否権は無いからね。それともローズ達に喰われたいかな？（スツ）』

私が指を鳴らそうとするアクションをすると……。

「くそう！！ オカマ達に喰われる位なら、アトラクションをやったほうがマシだ！！」

「さつさとそのアトラクションを始めなさいよ！！」

『チツ！ 残念だよ（でも……まだローズ達の方がマシだったと後から後悔すると思うけどね）』

ローズ達に喰われたくないのか、雄二と島田はアトラクションをやる事にしたみたいだ。

『ではアトラクションを選んだ君達には（パチンツ！）……その状態でやって貰うよ』

私が指を鳴らし、倒れている雄二と島田が一瞬消え……

「何だこれは！？」

「何でこんな状態なのよ！？」

また現れると、二人は立っていて二人三脚状態になっていた。二人の足には鎖が巻き付かれている。

「ちょ……ちよつと坂本！！ 何処触ってんのよ！！」

「くっ！ ……て…手が離れない！！ テメエ！！ 何で俺が島田の胸に触っているんだよ！？」

雄二が後ろから島田の胸に触っている状態になっており、雄二が手を離そうとしても離れない。

『いやいや〜その方がさらに面白くなるからねえ〜』

「ふざけんな！！ さっさと戻せ！！」

「いつまでウチの胸に触ってるのよ！！ さっさと離しなさい！！」

「手が離せねえから無理だよ！！」

雄二と島田がじゃれ合っていると……。

『さてと（ゴソゴソ……ピッ……）……光一、私だ』

私は懐から携帯を出して光一に連絡した。

『此方の準備が出来たから始めてくれ……（プツッ）……さあ二人とも、そろそろ始まるよお〜』

場所は放送室に変わり……。

「それじゃあ始めるか……」

そこには光一がいた。

私が光一にある事を放送して貰う為に放送室へと転送したのだ。

「では先ず、音を鳴らして（ピッ）」

ピンポンパンポーン

光一が音を鳴らしてマイクに顔を近づけ……。

「連絡いたします！ 船越先生、船越先生。2-F代表の坂本雄二が3階の空き教室で待っています。生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです！」

と言った。

そして空き教室では……。

『アハハハハハハ！！』

「おいてめえ！！ 何だあの放送は！？」

雄二が憤慨していた。

まだ放送は続き……。

“船越先生、坂本雄二はあなたの薬指にエンゲージリングを嵌めた
いと仰っていました。左手の薬指を綺麗にしておく事を忘れずに
！”

『コラコラ雄二、婚約者の霧島がいるのに浮気はダメだよ？（笑）』

「ふざけるな！！ テメエが仕組んだんだろうが！？」

“そして2・Dの清水美春さん、清水美春さん。2・Fの島田美波
も3階の空き教室にいます。君にプロポーズをして愛を確かめ合
いたいと言う、大事な事があるそうです！”

『それでは島田さん、清水とお幸せに』

「アンタは何て事を放送させるのよ！？ ウチにそんな気は全然無
いわよ！！！！」

そして光一からの放送が終了すると私は満天な笑みを浮かべる。

『さあお二人さん、命を懸けた超スリル満天なアトラクションを楽
しんで貰うよお〜』

「くっ！ 確かにこれは命がけだ！！」

「こんなのアトラクション嫌よ！！！」

「そんな事言ってる場合じゃねえ島田！！　すぐに逃げるぞ！！」

雄二と島田が逃げようとしたが……。

ドガンッ！！！！！！

『「！！！！！！」』

突然、空き教室の扉が吹っ飛んだ。

そこには……。

「……雄二」

どす黒いオーラを撒き散らし、虚ろな目をしながら紅く光らせ、釘バットを持った霧島翔子がいた。

「しよ……翔子！？」

「霧島さん！！」

『コワッ！！　一瞬、殺人鬼かと思ったよ！』

「……雄二、アナタは婚約者である私を裏切ったの？　……それに、何で島田の胸を触ってるの？　……島田、アナタは私から雄二を奪うつもりなの？」

霧島は驚いている私達を無視して雄二と島田にユラユラと近づき……

…。

「違う翔子!! これはアイツに仕組まれたんだ!!」

「そつよ霧島さん!! だから落ち着いて!!」

「……私は落ち着いてる……だから聞かせて……雄二は何で私を裏切ったの? 事と次第によっては……」

全然聞く耳を持たない状態であった。

「……雄二と島田を殺して……私も死\$ %*#&\$……」

途中から何を言っているのか分からなくバーサーカー状態になっている霧島に続き……。

「サカモトクウ~~~~ン!!!!!! ワタシトケツコンヲ~~~~
~~~~!!!!!!」

「オネエサマ~~~~!!!!!! ミハルトコヅクリヲ~~~~!!!!!!  
!!!!!!」

こちらもバーサーカー状態である船越先生と清水美春も現れて雄二と島田に急接近してくる。

「島田!! 窓から逃げるぞ!!!!!!」

「嫌だけど分かったわ~~~~!!!!!!」

雄二と島田は窓から飛び降りて逃げると……。

「……逃がさない……雄二……島田……」

「マチナサイ~~~~!!!!!!」      「ワタシノエモノ~~~~!!!!!!」

「マツテオネエサマ~~~~!!!!!!!!」

バーサーカー3人組も窓から飛び降りて、雄二と島田を追い掛け始めた。

『アツハツハツハツハ!!      それではアトラクションを楽しんでくれ!!!      アツハツハツハツハ!!!!』

二人三脚状態になって逃げる雄二と島田、その二人を追いかけてバーサーカー状態になっている霧島と船越先生と清水。

果たして、雄二と島田は逃げ切れるのだろうか!

Fクラス成敗物語 ？（後書き）

さあ読者の皆様！ どうなったかを予想してみてください！！

これを知っている人はネタバレしないように！！

## Fクラス成敗物語 ？

Fクラスのバカ共（雄二＋島田＋FFF団）を始末した翌日……。

「全く、アンタは学園に来る度バカ騒ぎを起こすさね。アンタの辞書には平穩と言う単語は無いのかい？」

『失礼な、私だって騒ぎを起こさない日だってありますよ』

私は昼休みに学園長室で、学園長と昨日の件について話していた。

「昨日やる筈だったFクラスとCクラスの試召戦争を延期させるだけでは飽き足らず、試召戦争の要であるFとCの代表が揃って今日も延期させて貰うと担任から聞いたさね」

『あらまあ……翌日には元気になってるってオチじゃなかったのね』  
Cクラス代表の小山友香と生徒達はともかく、ギャグキャラ揃いであるバカ共（雄二＋島田＋FFF団）が未だに回復していないのは意外であった。

「担任の話によると、生徒達の様子がおかし過ぎるって言ってたさね。Fクラスの連中はともかく、Cクラスには一体何をしたんだい？」

『Fクラスはどうでもいいんですか？』

「何時も下らない事で騒ぎを起こすFクラスなんかどうでもいいさね」

『最高責任者がそんな事言ったら不味いんじゃないですか？』

学園長の切り捨てとも言える発言に、私は突っ込みを入れる。

「それとアンタが騒動を起こした理由も聞かせて貰うさね」

『無視ですか……………まあいいでしょう。順をおって説明しますので、先ずは理由から話します』

私が昨日の騒動を起こした理由であるFクラスの事を言うと……………。

注：明久と姫路の同棲に関しては伏せています。

「……………あのバカ共のやる事は全く理解出来ないさね」

学園長は呆れまくっていた。

『で、そのバカ共を私が制裁したって事です』

「……………理由は分かったが、何でCクラスまでやったんだい？」

『それはですね……………』

私がCクラスで起こした出来事を途中まで話すと……………。

「確かに指揮する代表が3年の力を借りて戦うのは少々頂けないが、別にルール違反じゃないさね」

『まあそうですね……………』

「寧ろ学園の生徒でもないアンタが交渉して延期させるのが問題だと思っが？」

『そこは言わないで下さいよ』

学園長に一部指摘された事に苦笑した。

「もしかしてアンタはそんな理由でCクラスを制裁したのかい？」

『まさか。これにはまだ続きはありますよ……』

そして私がCクラスの出来事の結末まで説明した。

「……………成程ね、アンタを学園から追放させよう……………」

『セコイ手を使われましたけど、撃退してやりました』

「……………まあ今回は、Cクラス代表が喧嘩を売ってはいけない相手に楯突いたと言う事か」

『人を危険人物みたいな言い方をしないで下さいよ。別に私は学園に追放されても問題は……………』

「それは困るさね!！」

問題は無いと言おうとした私であったが、学園長は焦った顔になって引き止めるように言う。

『何故ですか?』

「言わなくても分かっている筈だよ。それと……アンタはあの江藤愛奈って女の子以外にも、他の子を連れて来た見たいだねえ」

『ああ……そう言えば……』

「何時になったら渡してくれるんだい？」

『では今此処で渡しませう（パチンツ！）』

私が指を鳴らすと、学園長の机から札束が入っているジュラルミンケースが出てきた。

『はい、綾ちゃんの分の紹介料と昨日の迷惑料です』

「クツクツクツク……これを待つてたんだよ」

学園長は札束を見た瞬間に目が\$マークになっている。

『それでは私はこれで失礼しますね……って聞いていないな』

「ひい……ふう……みい……（パラパラパラ！）」

『……まあい、渡す物は渡したからさっさとFクラスに行くか（ピシュツ！）』

私は札束を数えている学園長を放つといてFクラスへと向かった。



私がFクラスに着き……。

『失礼します』

「ちよつと旅人さん！」

教室に入ると明久が早々に私へと近づく。

『どうした明久？』

「どうしたじゃありませんよ！！ あそこ見て下さい！！」

『どれどれ……』

私が明久が指をさす方を見ると……。

「……雄二は私の婚約者よ。さあ言って……」

「俺は翔子の婚約者……俺は翔子の婚約者……俺は翔子の婚約者……  
俺は翔子の婚約者……」

霧島が虚ろな顔をした雄二に何度も同じ事を言わせており……。

「アハハハハ……美春に奪われた……体も……心も……全て……アハハハ……」

こちらも虚ろな顔で壊れた笑いをしながら清水に全てを奪われたと言いつける島田であり……。

「ウへへへへ……まだ尻が痛えよお……」

「クヒヒヒヒ……オカマが……オカマが……」

「アヒヤヒヤヒヤヒヤ……何を食ってもオカマのアレの味かしねえ……」

「イヒヒヒヒヒ……太くて硬いものが……欲しい……」

「シシシシシ……あの時のキスを思い出す……」

「ウヒヤヒヤヒヤヒヤ……うほっ……いい男がいる……」

ローズ達に喰われて完全に心が壊れているFFF団がいるのであった。

『……見事に壊れている連中ばかりだね』

「そうさせたのは旅人さんでしょ！？ その所為で午前中の授業は大変だったんですから！」

『だろっね』

私があっさり認めると……。

「旅人殿、お主は相変わらず容赦ないのう」

「……今の須川達には近寄りたくない」

「旅人さん、昨日の放送の所為で美波ちゃんがおかしくなっちゃってますよ」

「アンタのやる事はホントに半端無いよな」

秀吉、ムツツリーニ、姫路、来牙も私に近づいてくる。と言うより明久達はあの壊れた連中から離れる為、此方に避難しているみたいだ。

『本当だったら、ムツツリーニもあの中の一員になっていたんだよねえ〜』

「（ビクッ！）！！！！……申し訳ありませんでした」

私がそう言つと、ムツツリーニはすぐ私に土下座をする。

『私はもう君に制裁をする気は無いから土下座する必要は無いよ…』

……

「……………助かります」

本来だったらムツツリーニも制裁予定だったが……。

時間を昨日に遡り、雄二と島田が地獄の鬼ごっこをしている時はFクラスへと戻っていた。

『さうて、ムツツリー二にもお仕置きしなくちゃな』

と言って私がFクラスの戸を開けると……。

ガラッ！

「……申し訳ございませんでした」

目の前には白旗を立てて土下座をしているムツツリー二がいた。

『お仕置きをする前にもう既に降伏か。君はあのバカ共と違って話  
が分かるみたいだね……だけど……（スッ）』

「……！」

『今更謝った所で、君もFFF団と一緒にやった事は変わりはない。  
君もバカ共と同様に……』

「……待って下さい！ 貴方に渡すものが……」

『ん？』

ムツツリー二に渡された物を見ると……。

『何なの、この写真は？ ガラの悪い男ばかり写っているが……』

「……その連中は宮本綾を狙っている」

『……………へえ〜』

何と私が欲しい情報であった。

と言う訳で、ムツツリー二は私に綾ちゃんを狙おうとしている不良共の情報提供をしてくれたから、お仕置きを免除したのである。

因みに写真に写っていた不良共には綾には二度と手を出さない様に、私が直々に制裁を下しておいた。

もし懲りずにまた綾に手を出そうとしたら、ローズ達の愛人にする  
と脅して……。

『それにしてもFFF団はどうでもいいとして、霧島はまだあんな

「事やってるのか……」

「旅人さんが昨日、あんな放送をさせたからでしょ？」

「あの放送を聴いた時は雄二の死が確定だと思ったぞい」

「美波ちゃんも清水さんに食べられるかと……」

「雄二と美波を追い掛けていた3人が化け物かと錯覚したぞ」

「………捕まったら絶対に殺されるかと思った」

私の発言に明久は突っ込み、秀吉、姫路、来牙、ムッツリーニは窓から雄二と島田の鬼ごっこを見て思った事を言う。

『アツハツハツハツハ、あれは夜まで続いていたよ』

「今はあんな状態になっているが、あの後どうなったんだ？」

『では教えてあげましょう……と、その前に』

来牙が昨日の結果を知りたかったので私は説明しようとしたが、私は待ったをかけた……。

「何だ？」

『（パチンツ！ ……ポンツ！）話が長くなると思っから、飯食ってからにしない？』

私が指を鳴らし、弁当箱を出す。

「それもそうだな」

「そうですね、先ずはお弁当を食べてからにした方がいいですね」

「ワシも賛成じゃ」

「私事です」

「……しかし此処で食べるのは避けたい」

『では屋上へ行きましょう』

そして私達は各自に食べる弁当を持って屋上へと向かった。

おまけ

私達は屋上で各自昼飯を食べている。

『ん？ 姫路さん、君のお弁当のおかずが明久と同じだね』

「え！？ あ…これは……その」

私が姫路が食べている弁当について言うと……。

「そんな事より旅人さん！ 今日の旅人さんのお弁当は随分と量がありますね！」

『あ…ああ、まあな』

明久がすぐに話題を変えた。

が……。

「安心しろ明久。君と姫路さんと同棲している事はもう知ってるから（ボソボソ）」

「！……！」

明久の考えが既に見抜いている私であった。

「ど…どうして知ってるんですか？（ボソボソ）」

『フフフフ……どうしてでしょうねえ〜？（ボソボソ）』

「この事を秀吉には言わないで下さいよ？（ボソボソ）」

『別に言うつもりは無いよ（ボソボソ）』

私と明久は互いに小声で話す。

「明久よ、旅人殿と何を話しておるのじゃ？」



「……いや、何でも無いよ」

『気にするな秀吉』

「？」

秀吉が頭に？を思い浮かべると、私は秀吉に近づき……。

『明久を誰かさんに取られないよう頑張ってね（ボソボソ）』

「……それはどういう意味じゃ!？」

『さあねえ〜?』

私に食って掛かるうとする秀吉に、私は惚ける。

「旅人さんと秀吉って仲がいいよねえ」

明久は私が秀吉とじゃれあっている所を羨ましそうに見ており……。

「木下君はどうしてあそこまでムキになっているんでしょう?」

姫路は秀吉の行動に不可解に見ており……。

「……秀吉の慌てる顔もいい（パシャパシャ）」

ムツッリーニは秀吉を撮っており……。

「旅人さんはホントに人をからかうのが好きだよな」

来牙は私が秀吉をからかっているのだろぅと思った。

## Fクラス成敗物語 ？

### 問題

次の意味を持つ4字熟語を答えなさい。

“自分の都合のよいように強引に事を進めたり話をこじついたりすること”

江藤愛奈の答え

我田引水

さすらいの旅人のコメント

お見事。てつきり“自分勝手”と答えるかと思ったよ。

沢井真美の答え

自分勝手・我田引水

例文……FFF団は自分勝手であり、言う事は何時も我田引水である。

さすらいの旅人のコメント

……別に複数で答えなくてもいいけど正解だよ。しかもこ丁寧に例文まで作ってくれてありがとうございます。

私や明久達が昼飯を食べ終えた。

『ではお話ししましょう。雄二と島田さんが昨日どうなったのかを…』

「」「」「」「」「」「」

私が説明しようとする、明久達は真剣な顔をして私を見る。

『……あのさあ、怪談話じゃないんだから』

「雄二と美波を追い掛けていたのは3人の人外共なんだろう？」

「それだけで十分怪談話になります」

『……………』

来牙と明久の言い分に否定する事が出来ない私であった。

『……まあいい、それじゃあ始めるよ』

私は昨日の事を話し始めた。

昨日の夜中……

「(ダダダダダ！) 島田！！ 絶対にリズムを崩すなよ！？」

「(ダダダダダ！) 分かってるわよ！！」

二人三脚をしている雄二と島田は……。

「(ダダダダダ！) …… ユウジ…… シマダ…… ゼツタイニニガ  
サナイ……！！！」

「(ダダダダダ！) サカモトクウ……ン！！！！ オト  
ナシクワタシトケツコンシナサ……イ！！！」

「(ダダダダダ！) オネエサマア……！！ ハヤクミ  
ハルトコヅクリヲ……！！！！！」

未だに人外組(霧島・船越先生・清水)から逃げていた。

『あの二人はまだ捕まっていないんだねえ』

そして私は遠くから雄二と島田の追いかけてここに双眼鏡を使って見物している。

『しかしあれから結構時間が経っているけど、未だに走るペースが落ちていないなあ。もしこれがマラソン大会があったら確実に優勝してるな』

あの5人をマラソン選手として登録してみようかなと思った。

と私が考えている時……。

「(ダダダダダダダダダ！) オネエサマノシヨジヨハミハルガ  
イタダキマ〜〜〜ス！！！」

清水が二足歩行から四足歩行に替わってスピードアップした。

「(ダダダダダダダダダ！) なっ！？ 清水が此処に来てスピ  
ードが速くなりやがった！？」

「(ダダダダダダダダ！) 早くペースを上げてよ坂本！！」

「(ダダダダダダダダ！) 言われなくても分かってる！！！！  
！」

「(ダダダダダダダダ！) ちょっと！！ ドサクサ紛れに胸  
を強く掴まないでよ！！」

「(ダダダダダダダダ！) コノブタヤロウ〜〜！！！！  
オネエサマノウスイムネハミハルノダ〜〜！！！！」

「クロス！！！！ と言わんばかりに雄二を紅くなった目で睨みつける  
清水であり……。

「(ダダダダダダダダ！) ……ユウジ……ソナニシマダノ  
ムネガスキナノ？ ……ダツタラフタリトモクロス！！」

「(ダダダダダダダダ！) サカモトクウン〜〜！！！！ ワタ  
シノムネヲスキナダケサワラセテアゲルカラ〜〜！！！！」

島田の胸を強く掴んでいるのを見た霧島は完全な殺戮モードに入り、清水と霧島に負けじと言わんばかりに更にペースを上げる船越先生。

「（ダダダダダダダダダ！）誰か~~~~~!!!!!!」

人外……もとい、既に化け物となった3人に全速力で逃げながら助けを求める雄二と島田。

「……………あれはもう捕まったら確実に死ぬな。本当に我ながら外道な事を考えたもんだ」

そして遠くから人事のように言う私。

「ん？ ……あ、島田が小石に躓いた」

島田が躓くと……。

「（ガシッ！……！）……ユウジ……ヨウヤクツカマエタ」

「（ガシッ！……！）サアサカモトクウン　ワタシノクスリユビ  
ニエンゲージリンググヲ」

「（ガシッ！……！）サアオネエサマア~~~~　コノトキヲマツテ  
マシタワ~~~~」

一瞬の隙を狙った化け物3人組は雄二と島田を捕まえてすぐに押し倒す。

「おい島田……！　お前何やってんだよ……！」

「仕方ないでしょ!! 石に当たっちゃったんだから!!!!」

捕まった事に絶望する雄二と島田は互いに言い争う。

「……サアユウジ……イマスグコロシテアゲル……アンシンシテ……  
ワタシモスグニアトヲオウカラ……」

「サアハヤクワタシトケツコンヲ……!!!!」

「ミハルトコヅクリシマシヨ……!!!!」

「ぎゃあああああ……!!!!!!!!!!」

「いやあああああ……!!!!!!!!!!」

そして雄二と島田は……。

『ぶっ……ちよっと小休止させて』



私が話を一時休憩すると……。

「ちょっと！　そこで止めないで下さい！」

「物凄く気になるのじゃ！」

「止めないで下さい！」

「おいおい旅人さん、それは無いだろ？」

「……早く続けて欲しい！」

明久達が早く続きをと懇願する。

『ええ〜〜、そんなに早く言って欲しいのかい？』

「「「当然だよ！（じゃ！・です！・だ！）」「「「」

「……（コクコク！！）」

『……しょうがないなあ〜』

明久達の熱意に負けて話を続ける私であった。

雄二と島田がお終いかと思った時……。

『はいはい御三方、ちょっとストップねえ〜（パチンツ！）』

私が何時の間にか雄二達の近くにおり、指を鳴らすと……。

「…………アレ？ ……ユウジガイナイ？」

「ドコ？ サカモトクンハドコニッタノ？」

「オネエサマア〜？ ドコヘイッタンデスカ〜？」

雄二と島田が突然消えて、化け物3人組は辺りを見回す。

『君達の後ろだよ』

「「「！！！！」」」

化け物3人組が私を見ると……。

「…………ユウジ…………ソコニイタノネ…………」

「サカモトクウ〜ン、ハヤクワタシトケツコンシテ〜」

「オネエサマア〜、ミハルガオネエサマノジュンケツライタダキ  
マスワ〜」

無視して私の隣で二人三脚状態から開放し、気絶している雄二と島田に近づく。

『……………取り敢えずアンタ等は気絶しててね（パチンツ！）』

「ハッ！ハッ！ハッ！（バタンツ！×3）」「」「」

私が指を鳴らすと、化け物3人組は倒れ…………。

『さて…………お次は（パチンツ！）』

「ハッ！ハッ！ハッ！」

再度指を鳴らし、今度は雄二と島田が目覚めた。

『やあお二人さん、鬼ごっこは楽しめたかな？』

「旅人！！ テメエよくも！！！」

「死ぬかと思っただわよ！！！！」

目覚めた2人は私に襲い掛かるうとしたが…………。

『今すぐあの3人を起こすよ？（スッ）』

「……………」

指を鳴らそうとする私に襲うのを止めるのであった。

『フフフフ……それでいいんだ』

「（くそうー！！ このクソ野郎を一発でもいいから殴りてえー！！）」

「（この外道を何とかしないとウチ等の未来が……！！）」

『（コイツ等………さあお二人さん、あそこで倒れている3人にまた襲われなくなったら、私に忠誠を誓って貰うよ』

2人の心を読んでいる私は呆れながらも条件を提示した。

「何で俺達がてめえに忠誠を誓わなければいけないんだよ！？」

「どこまでウチ等を陥りたいのよ！？」

『別に忠誠と言っても、今後は明久の幸せや恋愛に関して一切手を出さず見守って貰いたいだけだよ』

「ふざけるな！！ あの野郎の幸せを見守る気何かサラサラねえ！！」

「アキにはウチがお仕置きをしなければいけないんだからー！！」

『……………言っておくけど二人とも、今回はお願いじゃない……………命令だよ』

立場を忘れて抗議する雄二と島田に私は顔を顰める。

「テメエの命令なんか聞く気はねえ!!」

「お断りよ!!」

『……………はあっ……………お前等には本当に呆れる。私に対する怒りで我を忘れているのは分かるけど、此処まで聞き分けの無いバカ共だとは思わなかったよ。では私の命令を蹴ったから3人を起こすしますか(パチンツ!)』

「しまった!!」

私が指を鳴らすと……………。

「……………アア……………ユウジ……………ソコニイタノ？」

「オネエサマア〜〜」

「サカモトクウ〜〜〜〜ン」

ゆったりと起き上がる化け物3人組に……………。

「ギヤアアアア〜〜〜〜!!……………!!」

雄二と島田は各自逃げようとしたが……………。

『言ったたる？ 逃がさないって(ドンツ!×2)』



「……旅人さん、どうして雄二が倒れているの？」

『私が気絶させた』

「お姉さまにも手をかけたのですか!？」

『一応ね』

霧島と清水の質問に答える私に……。

「……何で雄二を気絶させたの？」

「これだから男と言うブタヤロウは許せませんわ! お姉さまにはやはり美春が……あ……これはチャンスですわ」

霧島は私に問い詰め、清水は私を罵倒する途中に何かを閃いたようだ。

「今すぐお姉様を美春の家に連れてって永遠の愛を確かめ合って……」

『やっぱりお前は気絶してる(ドンッ!)』

「うつつ!(バタンッ!)」

清水が正気に戻っても危険だと思った私は一瞬で清水に近づき、首筋を手刀で強めに当てて気絶させた。

『ぶつつ……島田と清水には愛を確かめ合った記憶を植え付けてお

く必要があるみたいだな』

「……旅人さん、私の質問にまだ答えていない。どうして私の雄二を気絶させたの？」

島田と清水の対処方を考えると、霧島が再度私に詰め寄る。

『え……え……と……雄二が婚約者である君を放つといて、他の女の子とイチャ付いてたから私が代わりに成敗したのさ』

私が適当な言い訳をすると……。

「……どうやら雄二は、まだ私の婚約者だと言う自覚がまだ無いみたいね」

『そ……そう言う訳だから、雄二をちゃんと躡けておいてね』

「……分かった。ありがとう旅人さん、雄二を成敗してくれて」

『どづいたしまして』

「……それじゃあ（ズルズル）」

霧島は雄二を引きずって、自分の家へと向かった。

『さてと……島田と清水を転送後に記憶を植えつけておくか（パチンッ！）』

私が指を鳴らすと、島田と清水の姿が消え……。



『では私も（ピシユッ！）』

私も姿を消した。

「……………何故私は此処にいるんでしょう？」

船越先生は未だに分からない顔をしていた。

『雄二と島田が壊れていたのはこつ言つ訳さ』

「……………」

私が話を終えると、明久達は揃って無言だった。

『どうしたの？ そんな気の毒そうな顔をして……………』

「……………何でだろう、雄二はどうなるかと構わないのに……………凄く気の毒に思ってくる」

「さぞかし恐かったじやろうな……」

「私だったら恐くて……（ブルブル）」

「……3人の執念が恐ろしい」

「前半は怪談話より性質が悪かったが、後半からはバカな選択をした雄二と美波の末路と言った所か」

明久達は私の話を聞いてそれぞれ感想を言う。

『あの二人がバカな真似をせず、私に忠誠を誓えばあんな目に遭わなかったんだけどねえ』

「それだけ旅人さんに対する怒りが強かったって証拠だろ？」

『まあそうだろうね。これで暫くアイツ等はバカ騒ぎを起こしはしないと思いたいけど……』

来牙の言い分に私が認めながらバカ騒ぎを起こさないのを祈ると……。

バタンッ！

「ここにいたか旅人さん！！」

『どづした、翔？』

翔がいきなり現れた。

「すぐFクラスに行ってくれ！！ アイツ等が悍まし過ぎる事をやり始めてるんだよ！！」

『悍ましい？』

「アイツ等、男同士でキスしたり、それ以上の事をやってるんだよ！！」

「くくくくく！！！！（ピシッ！）」「」「」

『あらら〜』

翔の発言に明久達は石の様に固まり、私は完全に堕ちたかと思った。

「（ガシッ！！）早く何とかしてくれ！！ アイツら俺様を見た時に獲物を見つけたかのような目をして襲いそうになっただんだ！！ あのまま放置していると、この学園の男子達がアイツ等に喰われちゃう！！」

『（ガクンガクンガクン！！）分かった分かった〜〜〜。だから手を離してくれ〜〜〜』

翔が私の肩を掴んでガクガクと揺らすので私は手を離してくれと言った。

『それじゃあFFF団の対処を始めますか』

「早くしてくれ！！ でないと俺様の貞操が……！！」



Fクラス成敗物語 ？（後書き）

次回は沢井真美の参入話です！！

## 沢井真美 文月学園に訪れる

午後12時過ぎ、文月学園の正門前にて……。

『(ピシユッ!) はい文月学園に到着』

「ここが文月学園ですか……」

私と真美が現れた。

『しかしいいの真美ちゃん? 学校をサボってまで来るなんて……』

「サボってはいません。今日は午前授業だけでしたので……旅人さんは私を何だと思ってるんですか?」

『面白い事があると、今やっている事をすぐにほっぴり出すと思ってる』

「……………ゴホンッ! 確かにそれは否定出来ませんね」

私が思ったことを言うと、真美は咳払いをして言いながら顔を背ける。

『まあ私もあんまり人の事は言えないけど……さあ真美ちゃん、入るとしますか』

「……………そうですね」

そして私と真美は文月学園に入って行った。

が……。

『ああ忘れてた。真美ちゃん、ちょっとゴメンね（パチンツ！）』

「え？ ……あ、制服が……」

学園に入る前に、私が指を鳴らして真美が着ている他校の制服を文月学園の制服に変えた。

『他校の生徒が来てたら少し面倒になると思ったので、勝手ながら変えさせて貰ったよ』

「そつでしょうね。あのまま学園に入ってたら私は注目的になつていたと思いますし」

『（いや、君は別の意味で注目的になるんだよねえ〜）』

「どつしました？」

『いやいや、それでは気を取り直して向かきましょう〜』

今度こそ文月学園に入る私と真美であった。

Aクラスにて……。

「……………はあ〜」

「どうしたの優子？」

「おい優子、お前さっきから溜息しかついてねえぞ？」

昼食中に優子が何度も溜息ばかりをしているので工藤と翔が声をかけた。

「よし！ ここは俺様が一肌脱いで……………」

「翔の裸なんか見たく無いわ。アッチ行って」

「って即答かよ！」

「う〜ん……………取り敢えず、言い返す元気はあるみたいだね」

「ゴメン二人とも、悪いけどアタシ考えている最中だから一人にしてくれない？」

「う…うん」

「仕方ねえなあ……………」



優子に一人にしてくれと言われたので、工藤と翔は優子から離れる。

「……二人とも、どうだった？」

「木下さんは何処か調子が悪かったのかい？」

優子を見ていた霧島と久保は二人に聞いてみるが……。

「いや、溜息しか吐いてねえけど、いつも通りの優子だったぜ」

「あの溜息は何なのかは全く分からないよ……」

「……そう」

「木下さんは一体どうしたんだ？」

満足を得る回答ではなかったので未だに分からない顔をする。

と、そんな時……。

ガチャッ！

『失礼します！』

私がAクラスの教室に入ってきた。

「……旅人さん」

「あ、旅人さんだ」

「お、丁度良い時に来てくれたな」

「さすらいの旅人！？ どうして奴が此処に！？」

霧島、工藤、翔は私を見て私に近づき、久保は私を憎らしい目で見ている。他のAクラス生徒の面々も私を見て、何を仕出かすかと思っていた。

特に女子達は、私がまた明久と秀吉のラブシーンの動画を見せてくれるのかと期待して見ていたが。

「……いらっしやい旅人さん」

『お出迎えどうも霧島、いや……これからは坂本と呼んだほうがいいかな？』

「……どっちでもいい。でも私としては坂本と呼んでくれた方が嬉しい」

『そうかいそうかい、ハッハッハッハッハ！』

「……貴方には数え切れない程の恩があつて頭が上がらない」

『ハッハッハ！ 結婚式は任せてねえ』

「……凄く楽しみにしてる」

霧島は左手の薬指に嵌められているエンゲージリングを見ながら、早く卒業して結婚式を挙げたいと願っている。

「おい代表、惚気話はいからさっさと本題に入らないか？」

「幸せな気分浸っている所を悪いけど、旅人さんに聞きたい事があるのを忘れてない？」

「……そうだった。旅人さん、聞きたい事があるの」

「なんだい？ 聞きたい事って……（早く真美ちゃんを紹介したいのに……）」

翔と工藤が悦に入っている霧島に言うと、霧島は元に戻り私に聞く。

「……優子の様がおかしいんだけど、何か知らない？」

『木下さん？』

「あそこに座っているんだが……」

「ここ数日、溜息ばかり吐いているんだよねえ」

翔と工藤が優子に入る所に指をさしたので私は見ると……。

『……………何だ、まだ気にしてたのか』

優子が溜息を吐いている姿に私は来牙にした大告白を引き摺っているのかと予想が付いた。



『むぐむぐ……』

「はあ……はあ……余計な事を言わないでよ!？」

『むぐむぐ…（分かったから手を離してくれ）』

優子が私の口を塞いでいた手を離し……。

『やれやれ、その様子だとあれから来牙に会ってないみたいだね』

「うっ…うるさいわよ!! 誰の所為だと思ってるの!？」

『けどあの時のアレは君の本心なんですよ?』

「~~~~~!!!!!!（//////////）」

私がからかうと、優子は顔が真っ赤になった。

『まあそれはどうでもいいとして……』

「人をからかっておきながら、どうでもいいって片付けられないですよ!

「!」

『じゃあ今から来牙に会いに行く?』

「うっ! そ…それは……」

私が優子と話していると……。

「おい二人とも、さっきから一体何の話をしてるんだ?」

「ボク達にも教えて欲しいんだけど」

「……………一体何を？」

翔、工藤、霧島が痺れを切らしたみたいだ。

『木下さん、君の様子がおかしかったから翔達が心配しているぞ』

「え？ あ……………そ……………そうだったの……………ゴメン皆、アタシ……………」

「まあいつもの優子に戻ったから別にいいんだけど……………何でここ数日あぁなっていたのか教えて」

「ここは是非とも教えてもらうぜ」

「た……………大した事じゃ無いのよ……………アハハ……………」

翔と工藤が優子に問い詰めていたが……………。

ガチャ！

「ちょっと旅人さん！ いつまで私を待たせるんですか!？」

『え？ ………………ああゴメンゴメン、すっかり忘れていたよ』

教室の出入り口から真美が出てきた。

「全く、呼ぶから廊下で待っててと言っておきながら……」

『スマンスマン、君を紹介しようとした時に翔達が……』

私が真美に謝りながら話していると……。

「あれ？ 何で女装姿の吉井君が……」

「よい吉井、お前ついにソツチ系に目覚めて女装しているのか？」

「え？ え？ どうしてなの吉井君？ 秀吉に女装させられたの？」

「……吉井、その格好はどうしたの？」

真美を明久と勘違いしている4人であり……。

「……………う…美しい……………はっ！？ いけない、僕は何を考えてしまったんだ！？」

私から離れて見ていた久保が真美に見とれていたが、すぐ正気に戻った。

「ちょっと貴方達、初対面の相手に向かって随分と失礼な事を言うてくれるわね？」

『落ち着け真美ちゃん、翔達は君の事をまだ知らないんだよ』

「確かに私が吉井君の女装姿に似てるのは分かりますが、それでも





「そうか、彼女は沢井真美と言うのか。本当に美しく可憐な女性だ……ハッ！？ いけない！ 僕はまた何を……（僕には吉井君と言う、心のマイルスイートハニーがいるのに……しかし、彼女のこの世ならざる美しさは……いや、それでは吉井君に対する僕の気持ちに嘘を吐く事に……彼女が何処のクラスかを聞くべきだ……だ、だ、僕には吉井君が……今からお近づきになれば彼女と……だが、僕には吉井君が……）あ~~~~！！ どうすればいいんだ~~~~  
く!?」

久保が頭の中で天使の久保と悪魔の久保が戦っていて、どちらを優先するか悩んでいた。

『（いい加減に明久の事は諦めて欲しいんだがな……）』

久保の頭の中を覗いていた私は内心突っ込む。

沢井真美 文月学園に訪れる ?

真美の紹介を終えると……。

「ま……まさか愛子のそっくりさんに続いて、今度は吉井の女バージョンのそっくりさんかよ……」

「……予想外もいい所……」

翔と霧島は冷や汗を掻いており……。

「よ……吉井君の女装姿じゃないのは分かったけど……何であんなに胸が大きいのよ……」

「何か……別の意味で吉井君に負けた気がする……」

OTLの体勢になって敗北感を漂わせる優子と工藤……。

「ダメだ……僕には吉井君がいるのに……でも彼女の美しさが……」

未だに葛藤している久保……。

「……可愛い子だ……」

「……この複雑な感情……何処にぶつければいいのか……」

他のAクラス男子生徒は真美に見とれており、女子生徒は優子と工藤と同様に敗北感を漂わせる。

『相変わらずAクラスは多種多様な反応してくれるねえ』

「……………どうして私が登場しただけであんなになるの？」

『だから言ったでしょ？ 君は明久の女装姿によく似てるって……………』

「……………此処に来る選択を間違えたかな？」

『どのクラスを選んだ所で、Aクラスと同様の反応しかしないと思うよ……………いや、そうでもないか……………』

「え？ 何処のクラスです？」

『Dクラスの玉野美紀って言う女子生徒がいてねえ……………』

「それで？」

『もしかしたら、君を見た瞬間、着せ替え人形にするんじゃないかと思うよ』

「…………………………」

私の言い分に真美は無言となったので話題を変える事にした。

『所で真美ちゃん、君はこのAクラスで気になる男子生徒はいるかな？』

「……………いきなり何ですか？」

『いや、君も偶には演劇を忘れて、恋愛と言う物に走ってみたらど

うかな〜と思って……』

「女優を目指す今の私に恋愛は不要です」

『あらら……つれないことを言うのね。お父さんは悲しいよ……シクシク』

「貴方がいつ私のお父さんになったんですか？」

ハンカチを出して涙を流す私に突っ込む真美。

「……けど……貴方が私を好きになってくれたら……女優を諦めて……（ボソボソ）」

『ん？ 何か言った？』

「何でもありません！！（この鈍感！！）」

『？』

小声が聞こえなかつたので聞いてみると、真美は急に怒鳴り返した。

「と……所で旅人さんよお〜。今日はどんな用件で来たんだ？」

『真美ちゃんが文月学園に来たいって言ってたから、私が連れてきた』

「そうかい……しかしアンタ、ホント吉井（の女装姿）にそっくりだよな〜」

「貴方は誰？」

「おっと失礼、俺様は遊佐翔って言うんだ。よろしくな、真美ちゃん」

「……………いきなり人を名前で呼ぶのね」

翔のフレンドリーな態度に真美は顔を顰める。

「真美ちゃんも俺様の事を翔って呼んでくれてもいいぜ」

『おい翔、真美ちゃんにあんまり馴れ馴れしく接していると痛い目に遭うぞ?』

「え? 何で?」

翔が真美の肩に手を置こうとすると……………。

「(ガシッ!)(フンッ!!)」

「うおっ!?(バタンッ)……………いててて……………」

「あら、見た目とは裏腹に大した事無いのね(ググググ!!)」

「イタタタタ!!! ちょ…:ちょっとタンマタンマ!!!」

真美は翔の腕を掴んで、翔を組み伏せて関節技で締める。

『言い忘れていたけど、真美ちゃんは合気道の使い手だから』

「それを先に言ってくれよ!」

「まだ喋る余裕があるの? (グググググ!)」

「アタタタタタ!!! ギブギブ!」

『おいおい真美ちゃん、そこまでしておきな』

「……………もう少し続けたかったのですが、仕方ありませんね」

私が離すように言うと真美は翔の腕を離した。

「……………翔、大丈夫?」

「翔君、今回は君が悪いよ」

「馴れ馴れしい態度を取るから、そんな目に遭うのよ」

霧島は翔を気遣い、漸く復活した工藤と優子はさも当然の様に言う。

「イテテテ……………アンタ容赦しねえなあ。もうちょっと優しくしてくれよ」

「生憎、チャラチャラした男はあんまり好きじゃないんで」

「これは手厳しい事で……………」

『翔、これに懲りて少しは女の子に接する態度を改めたらどうだ?』

ピシヤリと言われた翔に私は指摘する。

「へッ！ 俺様が一度や二度で懲りると思ってるのか？」

『敢えて言ったただけだ。けど目の前の相手には気を付けた方がいいぞ？』

「……………どうやら貴方は一度完全に絞めた方が良さそうね（ガシッ！）」

「ちょ！？ ちよつと待ってくれ！！ 俺様はもう勘弁ギヤアアアア~~~~~！！！！！！！！！！」

真美は翔に再度、関節技と投げ技を使ってノックダウンさせた。

5分後……………。

「（ピクッ……………ピクッ……………ピクッ……………）」

「（パンパンパン！）ふうっ……………良い練習台になったわ」

虫の息状態になって倒れて気絶いる翔を尻目に、真美は埃を取り払っているかのように両手を叩き合ってスッキリした顔をしている。

「す……………翔君をあつと言つ間に申しちゃった」

「……………雄二の浮気対策の為に色々……………」





『どうでもいいって……ちょっと酷くない？ それよか何故か顔が赤いけど？』

「……………それ以上詮索すると、技の練習台になって頂きますよ？」

『はいはい分かったよ、もう聞かないから』

脅しを掛けられたので詮索を諦め、真美から離れる事にした。

『（私はただ違う理由を聞こうとしただけなのになあ〜）』

「（全く、貴方はそうやって何時も人の心を………言える訳無いじゃないですか………貴方が私の初恋の人だなんて………）」

私と真美はそれぞれ心の中で思った事を言う。

「ねえ優子、もしかして沢井さんって旅人さんの事が好きなのかな？（ヒソヒソ）」

「愛子、余計な好奇心はかえって身を滅ぼすわよ（ヒソヒソ）」

「……………もし沢井の耳に入ったら、愛子も翔と同じ運命を辿るかもしれない（ヒソヒソ）」

「そ…それは勘弁して欲しいかも（ヒソヒソ）」

工藤、優子、霧島は揃って小声で話している。

と、そんな時……。

「あ…あの、沢井さん!!」

「ん？」

久保が真美に話し掛けてきた。

「貴方は？」

「あ、すみません。僕は久保利光と言います」

『（おお？ 久保が真美ちゃんに接触したか……これで真美ちゃんも漸く春が訪れるかな？）』

真美と久保のやり取りを見て、私はワクワクしながら見ている。

「それで？ 久保君は私に何の用かしら？」

「え…えっと……そのう……ぼ…僕と……」

「？」

『（いいぞ久保、そのまま真美ちゃんに……おや？ 久保の事が好きな女の子が此処にいるみたいだね〜）』

久保を内心で応援する私は早く言えと視線を送っていたが、一部のAクラス女子生徒の数人が真美に嫉妬の視線を送っている。

「で……ですから……」

「早く言ってくれない？ 私あんまり待つのは好きじゃないから」

「ぼ……僕と……友達になってくれませんか!？」

「……………はい？」

『（でかした久保！ もし付き合ってくれ何て言ったら、翔と同じ運命を辿ってたからな!）』

大きな声を出して言う久保に真美は間の抜けた返事をしており、私は久保に賛辞を送っていた。

「……………私と友達に？」

「は……はい」

「……それは別に構わないけど……………」

「ほ……本当ですか!？」

「え……ええ……………」

『（よっしゃ!）』

久保の喜びに戸惑う真美に、私は事が上手く運んでいる事に安堵する。

「良かった……………もし断られたらどうしようかと思いましたよ……………」

「随分と物好きね。私と友達になりたいだなんて……」

「物好きだ何てとんでもない！ 僕は純粹に貴方と友達になりたかったんです！」

「そ…そうなの？」

「そうです!!」

「わ…分かったから。そんなに顔を近づけないで」

「あ…す…すいませんでした!!」

真美に言われた久保は謝りながら離れる。

「えっと…沢井さんは何処のクラスですか？」

「残念だけど私はここの生徒じゃないわよ」

「え？ でも、その制服は……」

「この制服は旅人さんが用意してくれた物なの」

「あの男に!? あ…いえ、さすらいの旅人さんですか？」

『（おいコラ、急に畏まるなよ）』

久保がコロツと変わる所を見た私は内心突っ込む。

「久保君は旅人さんの事が嫌いなの？」

「え！？ いや……そう言う訳では……」

「隠さなくてもいいわよ、私は相手の表情を読み取るのは得意だから」

『（おお〜流石は真美ちゃん。久保が私に対する憎しみを読むとはな……演劇部のホープと呼ばれるだけの事はあるねえ〜）』

私が真美と久保のやり取りを見ている最中に……。

「旅人さん、ちょっと聞きたい事が」

『ん？ どうしたの木下さん？』

「色々あつて言うのを忘れていたんだけど、携帯テレビの事で……」

優子が私に話し掛けてきたので、そっちに集中する事にした。

「久保君も旅人さんに散々振り回されたんでしょ？」

「え……ええ、まあ……」

「でしょうね。旅人さんは、いつもああだから……（チラッ）」

「……………（何だ？ 沢井さんがあの男を見る目が……）」

私が優子と話しているのを見ている真美に、久保は何か嫌な予感が走る。

「あ…あの沢井さん、貴方はもしかして旅人さんの事を……」

「!!!! な…何を勘違いしてるのよ!? わ…私は別にあの人の事なんて……（ノノノノノ）」

「あの人!? や…やっぱり貴方は……」

「……………ゴホンッ! ……………と…友達として……………内緒にしてくれ  
る?」

「!!!!!!!!!!!!（ピシッ!!!!!!!!!!!!）」

真美の発言に久保は石化した。

「久保君? どうしたの?」

「……………（さすらいの旅人……………お前は僕から何もかも奪うのか…  
……………吉井君だけではなく……………沢井さんまで……………許さん……………絶対に許  
さん……………!!!!）」

久保は石になりながらも私に怨念を込める。

『何だ? 妙な憎悪が私に向けられているな……………』

「ちょっと旅人さん、アタシの話はまだ終わってないわよ」

『ああ、そうだね。で、あの明久と秀吉のデートを早く催促しろと  
』?』

「そつよ」

と、私が優子と話している時……。

「……………さすらいの旅人お……！！！！！！ 貴様は絶対に許さな  
く……い！！！！！！」

「ちょ……ちよつと久保君!？」

「ん? 何だ?」

石から元に戻った久保は私に襲い掛かり、真美は咄嗟の事で止める  
事が出来なかった。

「貴様は僕が倒す!! 喰らえ!! 無限拳むげんパンチ!!!!!!」

「(パシッ!) お前はアクオリオンのアポロか? ってか唯のパン  
チだろ……」

パンチを受け止める私は久保に突っ込む。

「まだまだ!! 連続無限拳れんぞくむげんパンチ!!!!!!」

久保が再度私に殴りかかってきたが……。

「はあっ……付き合いきれん(パチンッ!)」

「!!!!!! (バタンッ!!!!!!)」

私が指を鳴らすと何故かショックを受けて倒れた。

「やめる…やめる……僕にこんな物を見せるな〜！！！！！！」

「た…旅人さん、久保君に何をしたの？」

『コイツにとっての悪夢を見せてやった』

「……ああ、そう（秀吉と吉井君のラブシーンを見せたのね）」

私の発言に優子は久保がどうして苦しんでいるのかを容易に想像出来た。

『ってか真美ちゃん、久保はどうして私に襲い掛かってきたんだ？』

「さ…さあ、私にもさっぱりで……」

『真美ちゃんが知らないって……一体コイツはどうしたんだ？』

未だに苦しんでいる久保を見て、私は更に疑問を抱く。

そして、私と真美は苦しんでいる久保を無視して霧島たちと談笑し終わると文月学園から去って行った。

おまけ



私と真美が文月学園から出ようとしている時……。

『どうだった真美ちゃん？ Aクラスの生徒たちと話して……』

「…………… いけ好かない相手が一人いましたが、他の人達はとても友好的で良かったです」

『いけ好かないって翔の事言ってるの？』

「当然です」

『…………… あっそ（確かにそうだろうな）』

キツパリと言い切る真美に私は納得した。

『しかし、久保の奴は一体どうしたんだろうな？』

「私にもさっぱりです…………… ただ……………」

『ただ？』

「…………… いえ、何でもありません」

『おいおい、そこまで引張っておいてそれは無いでしょ？』

「私の思い過ごしです。どうかお気になさらず」

『…………… ならいいけど』

「……………（久保君が私が旅人さんの事が好きだと知った時からおかしくなつたわね。どうしてかな？）」

『どうしたの真美ちゃん？』

「な…何でもありません！！」

『？』

真美が早足でスタスタと行くのを見て私は頭に？を浮かべた。

『何なんだ一体？……………（コツンツ）ん？』

私が歩いていると足に何かが当たった。

『薄い本……………優子が落としたBLかな？（パラッ）』

私が本を捲って中身を見ると……………。

『……………何だよコレ……………』

固まったかのように立ち止まった。

『（パタン）……………何で翔のBL本が出ているんだよ……………ってかこの本のタイトルって……………』

私は本のタイトルを見ると“師と弟子の禁断の愛（源三×翔）”と書いてあった。

『……………源三が攻めで翔が受けかよ……………どれどれ（パラッ）』

.....『気持ち悪.....』

中身を読んですぐに後悔してしまう私だった。

宮本綾 宮永家の訪問

とある休日の昼頃……。

『綾ちゃん、来牙の家にはもうちょっとで着くからね』

「……………」

私は綾を連れて来牙の家へと向かっていた……………しかし何故か綾が不機嫌そうな顔をしていたが。

因みに綾の格好は、髪型がツインテールで文月学園の制服を着ている。理由は制服を一度着てみたいそうだ。

『どうしたの綾ちゃん？ さっきからずっとダンマリだけど……………』

「……………」

『何か嫌な事でもあったの？ 良かったら私に話してご覧』

綾の不機嫌な理由を私は聞いてみた。

「……………旅人さん」

『なんだい？』

「……………昨日、真美お姉ちゃんと一緒に文月学園に行ったでしょ？」

『行っただけど、それがどうかしたの?』

「……………それも二人つきりで……………しかも帰って来た時には腕を組んで歩いていたし……………」

『確かに二人で行ったよ。それに腕を組んでって……………あれは真美ちゃんか腕を組んで欲しいと言われたから……………』

「……………」

私の発言に綾はまた不機嫌顔になった。

『もしも〜し、綾ちゃん?』

「……………(ギョツ!)」

『今度は何?』

綾は無言で私の腕をつかんで絡めるように抱きついてきた。

「……………旅人さんを振り向かせるのはアタシなんだから。真美お姉ちゃん何かに絶対渡さない(ボソボソ)」

『綾ちゃん、何か言ったかい?』

「……………何でも無い」

『ならいいけど』

「そんな事より、早く来牙お兄ちゃんの家に行こう」

『それじゃあ手っ取り早く力を使って来牙の家に行くか（スッ）  
私が指を鳴らそうとしたが……。』

「旅人さん、このまま歩こう」

綾が歩こうと言う。

『何で？ こっちの方が手っ取り早くていいんだけど……』

「……アタシと一緒に歩くのは嫌？（ウルウル）」

『……はいはい、最後まで歩くとしますか』

「（ギユウツッ！）」

綾の提案を呑んだ私はこのまま歩き、綾は嬉しそうに私に抱き付きながら歩いた。

10分程度歩いて、来牙の家の前に着いた。

『着いたよ』

「ここが来牙お兄ちゃんと絵梨お姉ちゃんの家？」

『ああ。因みにあそことあそこが来牙と絵梨の部屋だよ』

「そうなんだ」

私が2階の窓を指すと、綾は覚えておくかのように見る。

『さうと、まずは呼び鈴を押して……』

私がかの呼び鈴を押そうとしたが……。

「旅人！！ 絵梨から離れるのじゃ！！！」

『「ん？」』

「絵梨よ！！ お主は何故、そんな外道の腕に抱き付いているのじゃ！！！」

家に帰ろうとしていた源三が私と綾を見て、いきなり失礼な事をほざいていた。

「あ……竜お爺ちゃんだ」

『綾ちゃん、アレは君のお爺さんじゃない』

「人を指でさすな！！！」

『アレは竜爺さんと違って凄く弱いから』

「そうなんだ」

「だからワシを無視するでない!!」

無視されていた源三が突っ込む。

「はっ！ イカンイカン、つい乗せられてしまったわい！ 絵梨よ、早くこの外道から離れるのじゃ!!」

「あの、アタシは絵梨お姉ちゃんでは……それより旅人さんの事を悪く……」

「何を言っておる!? お主が絵梨ではなくて誰だと言うのじゃ!? 悪ふざけを止めて、ワシの元に来るのじゃ!!」

『おい爺さん、この子は本当に絵梨じゃない』

「黙れ!! 犬畜生である外道の言葉など信用できんわ!!」

「……………」

源三が私に悪口を言っている事に、綾はプルプルと体が震えている。

『じゃあどうしたら信用出来る?』

「じゃったらこう言えい!! “私のような卑怯で外道で邪悪な塊であるクズ野郎をどうかお許し下さい”と言って土下座すれば考えやめるのじゃ!!」



『……………』

「さあ外道！　ワシを信用して欲しかったら今迄の非礼を詫びて土下座せい！！　ダァーッハッハッハッハ！！」

「……………（ブチッ！）」

優越感に浸っているであろう源三に私は呆れて見ており、綾は我慢の限界を超えたかのように何か切れた。

「……………（スッ……………スタスタ）」

『綾ちゃん？』

「おお絵梨！　分かってくれたか、さあ早く家に入ってワシにマッサージをしてくれ」

綾は源三に近づき、絵梨と勘違いしている源三は家に連れて行くこととしたが……………。

「絵梨が肩を揉んでくれるとワシは……………（バシンッ！）ブヘッ！！」  
頬を叩かれた。

「え…絵梨？　いきなり何を？」

「……………嫌い……………」

「へ？」

「貴方なんか大っ嫌い!!!!」

「!!!!!!!(ガビ~~~~ン!!!!)!!」

綾の大嫌い発言に源三は物凄くショックを受けた。

「え…絵梨よ! 嘘だといっしてくれ!!」

「大っ嫌い!!!!」

「ウギヤアアアア~~~~!!!!!!!!!!!!」

『あ…絶望した顔だ……』

聞き間違いかと源三がもう一度綾に聞いてみたが、綾にまた大嫌いと言われて叫び声をあげ……。

「(ダダダダダダ!!)びええええ~~~~~~~~ん(泣)!!!!!!  
婆さんや~~~~~!!!!!!(ガチャ! バタン!)」

泣きながら家に入ってお婆さんのいる所に向かったみたいだ。

『……………勘違いしていたとは言え、大嫌いと言われたのが相当ショックみたいだな』

「……………」

『綾ちゃん、私の為に怒ってくれるのは嬉しかったけど、平手打ちはダメだよ』

綾ちゃんの手が腐るからと内心付け加える。

「だって……あのお爺さん、旅人さんの事を悪く言うから……」

『だからと言ってあれは不味いよ、アレでも一応お年寄りなんだから（私は容赦しないけどね……）』

「……」

『さあ、来牙と絵梨に会いに行こう』

「……アタシ、旅人さんを悪く言うお爺さんの家に入りたくない」

『会わなければいいだけだから』

「……」

家に入りたくないと言った綾は動かずにいる。

『（全く、あの爺は余計な事をしてくれやがって……しょうがない）……綾ちゃん（ギョ！）』

「ふえ！？ た…旅人さん！？（//////////）」

私に抱きしめられた綾は顔が赤くなりながら戸惑った。

『（スツ）……機嫌を直してくれたかな？』

「……はう~~~~~」（//////////）」

「  
『お…おい綾ちゃん！？（ガシッ）』

私が離れると綾がフラフラと倒れそうだったので私は両肩を掴む。

「ちよつとちよつと。いつもは私に抱き付いているのに、私から綾ちゃんに抱き付いたらどうしてこうなるの？」

「……………（旅人さんに抱き締められちゃった……………嬉しい……………）」

『綾ちゃん？ 綾ちゃん？ お〜い綾ちゃん？（ペシペシ）』

呆然としている綾に頬を弱く叩いても全く反応が無い。

と、そんな時……………。

ガチャツ

「おい、いつまで人の家の前でイチャついてんだ？」

「旅人さん、そういう事は二人っきりの時にやってね」

家から来牙と絵梨が出て来た。

『あれ？ 来牙と絵梨じゃん、どうしたの？』

「それはこっちの台詞だ。綾を連れて来ているみたいだが、今日は一体何の用だ？」

「綾ちゃん、久しぶり〜」

「……………はっ！ あ、絵梨お姉ちゃん」

来牙は私に話し掛け、絵梨は放心状態になっていた綾に声を掛ける。

『綾ちゃんが君達の家に行って見たいと言われて来たんだよ』

「そうか……………」

『けど呼び鈴を押す前に爺が現れて……………』

「……………また何かやらかしたんだな、家の爺さんは……………綾、大丈夫か？」

「綾ちゃん、もしかしてお父さんに何かされたの？」

私が爺と遭遇したと言うと、来牙と絵梨は綾を気遣う。

「アタシは何もされていないよ……………けど……………あの人、旅人さんの悪口ばかり言ってた」

『まあその後は、綾ちゃんが爺にビンタして大嫌いと言われたら泣き出して家に引っ込んだんじゃないよ』

「……………(どおりで爺さんが泣いてた訳だ)」

「……………（自業自得だよ）」

源三に全く同情しない来牙と絵梨であった。

『で、綾ちゃんを宥めてたら君達が来たってわけだよ。と言う訳で来牙、絵梨、お邪魔していいかい？』

「俺は別に構わないが……（と言うか綾を宥めてたじゃなくてイチヤ付いてただろ……）」

「あたしもいいよ」

「ありがとう。来牙お兄ちゃん、絵梨お姉ちゃん」

綾は二人に礼を言う。

「綾ちゃんにはユーちゃんを紹介したいし……」

「ユーちゃん？」

「あたしが飼っている猫なの。凄く可愛いんだよ　けど綾ちゃん  
の格好も可愛いな」

「そ…そう？」

「うん！　もう抱き締めなくなる位に」　（ギュウッ！）」

絵梨は綾を抱きしめながら家に入り……。

『二人のやり取りを見ると姉妹に見えるな……』

「どっちも似てるからな……」

そして私と来牙も家に入って行った。

おまけ

「びええ~~~~ん（泣）！！ 婆さんや~~~~！！！！」

「何です？ 帰ってきたかと思えば泣いていますし……」

綾に大嫌いと言われて家に入った源三は楓さんに泣き付いていた。

「絵梨が……絵梨が……うえええ~~~~ん（泣）！！！！」

「……………はあっ……………誰か助けて下さい」

子供より性質の悪い源三の相手にするのをウンザリしている楓さんであった。

宮本綾 宮永家の訪問 ?

来牙の家に入った私と綾は……。

「初めましてお婆さん、宮本綾です（ペコッ）」

「此方こそ、アタシは絵梨の母の宮永楓です」

和室にいる楓さんに会って、綾が挨拶をしている。

「本当に絵梨そっくりだねえ」

「そうですか？」

『ほほう、絵梨の母親であるお婆さんも認めましたか……』

「認めるも何も、綾ちゃんを見た時に絵梨が分身したんじゃないか  
と思いましたよ」

「お母さんったら……」

「俺も初めて会った時は、婆ちゃんと同じ事を思ったよ」

楓さんの例えに絵梨は苦笑し、来牙は同感だと言う。

『所でお婆さん、泣きじゃくった爺はどうしました？』

「未だに隣の部屋で泣いて……」



お婆さんが隣の部屋に顔を向けた時……。

ガラッ！！

「綾ちゃんや！！　ワシが悪かったわい！！」

爺が襖の戸を開けて登場すると、いきなり綾に謝っている。

『……………意外と早く復活してるし』

「さっさと俺達の部屋に連れて行けば良かったな」

「お父さん、今度は何やらかすの？　綾ちゃんの前では止めてもらいたいんだけど……………」

「お爺さん、アタシとしても出来れば何もしないで欲しいんですが……………」

「……………」

私、来牙、絵梨、お婆さんは爺が何かを仕出かすと思って突っ込み、綾は先程の事が遭った為に不機嫌な顔をする。

「どうか許して欲しいのじゃ綾ちゃん。ワシは心から反省してある」

「……………」

「どうか機嫌を直してくれ、頼む！」

「……………」

土下座して謝罪する源三に綾は口を開こうとしない所か、目も合わせようともしない。

「くっ！ これでもダメか…………ならば！！」…………綾ちゃん、ワシは旅人さんを心から尊敬してある！！」

『「「「！！！！」（ズルツ！！）」「「「『

源三の発言に、綾を除く全員が一斉にコケた。

「……………さっきはとてもそうは思えませんでしたけど」

「あれはワシと旅人さんのちょっとしたコミュニケーションなんじゃ」

「……………」

「本当じゃよ。ワシと旅人さんにしか分からぬ物なのじゃ」

「（ピクッ）」

源三と私しか知らないと聞いた途端に綾は源三の顔を見る。

『（嘘吐け！！ さっき言ったのは私に対する罵倒だろうが！！）

『

「（よくあんな嘘八百を並べられるな）」

「（お父さん、そこまでして綾ちゃんに近づきたいの？）」「

「（お爺さんが今まで旅人さんを敬う所なんて見た事ありませんよ）」

コケた私達は起き上がり、内心で源三に突っ込む。

「……………お爺さんと旅人さんにしか分からない物ってどう言う事ですか？」

「知りたい？」

「……………一応」

「では、隣の部屋でじっくりと教えるのじゃ。さあ綾ちゃん、コッチへ来て二人つきりで……………」

『「「「（やっぱそう言う魂胆か！！）」「「「『

綾を隣の部屋に連れて行く源三に私達は……………。

『来牙、絵梨、綾ちゃんの目と耳を塞いで』

「了解。綾、ちょっとすまないが（スッ）」

「は〜い。綾ちゃん、少しの間我慢してね（スッ）」

「ん？ 来牙に絵梨よ、何をしておるのじゃ？」

「？」

来牙は綾の目を塞ぎ、絵梨は耳を塞ぐ事に源三は疑問を抱き、綾は頭に“？”が浮かんでいる。

『お婆さん、まずはコレで爺に一発お願いします（スッ）』

「分かりました。では……（スッ）」

「婆さん？ 一体何を…（ゴガンッ！！）（ブギャッ！！）（バタンッ！）」

私がお婆さんにフライパンを渡すと、お婆さんは源三に近づいた瞬間にフライパンを使って頭に強烈な一撃を下す。その事に源三は倒れた。

「……………（ピクッ…ピクッ…）」

『お見事ですなあ。一発で爺を気絶させるとは』

「いつ言つ事には慣れていきますので」

『それはそれは』

源三をあっと言つ間に気絶させるお婆さんに私は替辞を呈する。

「？ 旅人さん、何かあったの？」

『さあ来牙と絵梨、綾ちゃんを君達の部屋に連れてってくれ』

「分かった」

「綾ちゃん、あたしの部屋に行きましょうね」

「????」

未だに来牙と絵梨に目と耳を塞がれている綾は、絵梨の部屋へと連れて行かれた。

『行ったか……さあお婆さん、この愚か者をどうすればいいですかねえ』

「そうですねえ、取り合えず起こして頂けませんか？」

3人がいなくなった途端に私とお婆さんは蔑んだ笑みを浮かべている。

『了解（パチンツ！）』

「……む？ 此処は？」

私が指を鳴らすと、気絶していた源三が起きた。

「（な…何で婆さんと旅人がワシの目の前に立っておるのじゃ？）  
ば…婆さんや、綾ちゃんは一体何処に行ったのじゃ？」

「あの子でしたら、絵梨が部屋に連れて行きましたよ」

「そ…そうか、残念じゃのう。折角綾ちゃんと話したかったのに…」

「へえ、綾ちゃんを部屋に連れて何をするつもりだったんですか？」

「それは勿論……ワシと旅人しか知らぬコミュニケーションを……」

『ほう？ 貴様しか知らないコミュニケーションねえ。私はそんなの全く知らないがな……』

「そ…そうじゃったかのう？（な…何じゃこの二人、まるでワシを逃がさんかのように……）」

源三が逃げようと試みていたが、私とお婆さんが退路を塞いでいるので逃げられなかった。

『なあ爺、ちよつと話をしないか？（スッ）』

「アタシもお爺さんとお話をしたいんですよ（スッ）」

「ま…待つのじゃ二人とも、話をするのに何故バットやフライパン何かを使うのじゃ？」

『フフフフフ……何故かな？』

「ふふふふふ……どうしてでしょうねえ？」

私とお婆さんはそれぞれの武器を持って構えて……。

「や…止めてくれ……ワシはただ綾ちゃんと二人きりで触りっこしようかと………」

『「」……………くたばれ変態爺!!』

ドガツ！ バキツ！ ドゴツ！ ゴスツ！ グシャツ！！

「ギヤアアアアアア~~~~~!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

死刑が開始お話しされるのであった。

場所は絵梨の部屋へと変わり……。

「綾ちゃん、この子がユーにゃんだよ」

「にゃ〜」

「可愛い〜」

絵梨が綾にユーにゃんを紹介していた。

「にゃにゃ？（あれ？ ご主人様がもう一人？）」

「うわゝ、ユーにゃんが首を傾げてアタシを見る所も可愛い」

「だよねえ」

「……………（何か俺はお邪魔みたいだな）」

絵梨と綾のやり取りを見て来牙は隅っこで見ている。

「絵梨お姉ちゃん、アタシもユーにゃんを抱っこしてもいいかな？」

「勿論」

絵梨は抱いているユーにゃんを綾に抱かせた。

「ああゝゝホントに可愛いよゝゝ」

「にゃにゃゝ（ご主人様に似ているけど違う）」

「あれ？ ユーにゃんはアタシと絵梨お姉ちゃんの違いが分かるの？」

「にゃん！（当然！）」

「凄いなえゝユーにゃんは」

「……………え？」

綾がユーにゃんと会話している様に見える絵梨と来牙は目が点にな



る。

「あ…綾ちゃん、ちょっといいかな？」

「どうしたの絵梨お姉ちゃん？」

「い…今ユーにゃんとお話してなかった？」

「うん、話してたよ。だよねユーにゃん？」

「にゃ〜）そうだよ〜）」

「……………」

あっさりと言う綾に来牙と絵梨は無言になった。

「ユーにゃんは絵梨お姉ちゃんの事が大好き？」

「にゃん！ にゃにゃにゃ！（勿論だよ！ 僕のご主人様なんだからー！）」

「そうなんだ〜。あ…いい忘れてたけど、アタシの名前は綾だから」

「にゃ！ にゃにゃにゃ！（よろしく！ 綾お姉ちゃん！）」

「にゃにゃにゃ〜」

「……………ど…どつちら本当に綾はユーにゃんと話しているみたいだな」

「こ…これは予想外もいい所だよ……でも、ユーにちゃんと会話が出来るなんて羨ましい」

来牙と絵梨は驚いていたが、絵梨は途中から綾を心底羨ましそうに見ていた。

「（あ……もしかしたら）…綾ちゃん、聞きたい事があるんだけど」「何？」

「ユーにちゃんと会話が出来るのは、もしかして旅人さんに何かしてもらったの？ 旅人さんに頼んで動物と会話出来るようにしてもらったとか……」

「そうだな、そう言う事が出来るのは旅人さんしか考えられないな……」

絵梨と来牙は綾がユーにちゃんと会話出来るのは私の仕業だと思っていた。

が……。

「うっん、そんな事してもらってないよ」

「……え？」

「アタシ、物心が付いた時から動物と話せるの」

「……はあっ！？」「」

綾の発言に来牙と絵梨は素っ頓狂な声をあげた。

おまけ

和室で私とお婆さんが源三とのお話が終わり……。

『全く、綾ちゃんに手を出そうとするとは。本当に下種野郎だな、この爺は』

「家の亭主がご迷惑をお掛けして申し訳ありません（ペッコ）」

『お婆さんが謝る必要は無いですよ……悪いのは（チラッ）』

「（ピクッ…ピクッ…ピクッ）」

私が見ると、そこには少々グロテスクな状態になっている源三が倒れている。

『取り合えず綾ちゃんが帰るまで、コレは物置に入れておきます。いいですか？』

「是非お願いします」

『では（パチンッ！）』

私が指を鳴らすと、倒れている源三の姿が消えた。

『さてと、一暴れしたからちよつと休憩しますか』

「そうですね、ではお茶をご用意します」

『すみませんねえ。では私は何時も通りにお茶菓子を用意しておきます』

「分かりました」

お婆さんはお茶を用意する為に台所へ向かい……。

『では、本日のお茶菓子は、大福餅で（パチンッ！ パッ！）』

私が指を鳴らすとテーブルから大福餅が出てきた。

『これでよしと……ん？』

「バウバウ！（よお旅人！）」

私の隣にはブルドックの長嶋三番がいた。

『長嶋三番か、何の用だ？』

「バウバウバウバウ！！（その大福を俺様に寄越せ！！）」

『何故お前にやらなければならん？ てか犬が大福餅なんて食べるのか？』

「バウバウ！ バババオ！！（ごちゃごちゃうるせえ！ 頂くからな！！）」

『あ！ コラ！！』

長嶋三番が大福餅が入っている小さな箱を口に啜えて持って行き逃げようとする……。

「旅人さん、お茶を用意……」

「ブブー！（うおっと！）」

「（ドンッ！）ああ！？（ガチャン！）」

『あ……』

お婆さんが和室に入ると長嶋三番にぶつかり、その拍子でお婆さんが持っていた湯飲み茶碗を落としてしまった。

「お…お婆さん！ 大丈夫ですか？」

「は…はい、アタシは平気です。ただ……湯飲み茶碗が……」

お婆さんが落とした湯飲み茶碗を見ると、それは割れていた。

『大丈夫ですよ。私の方で直しましょう』

「バウバウバウバウ！ バウバウバウ！（情けねえババアだぜ！あれくらいはかわせよな！！）」

『……………』

と、私が割れた湯飲みを戻そうとした時、お婆さんにぶつかつた長嶋三番は反省する様子を見せずに大福餅を食べていた。

「ペツペツペ！ バウバウ！ バウバウ！ バウバウバウ！（何だコレ！？ 不味いじゃねえか！ とても食べたもんじゃねえ！！）」

『……………』

「バウバウ！ バウバウバウ！ バウバウバウ！（おい旅人！ もっと美味しい食い物を出せよな！！ ったく使えねえ野郎だぜ！！）」

『……………（ブチッ！）……………どうやらこのバカ犬にもお仕置きをする必要があるみたいだな（スッ）』

「バウ！ バウバウバウ！ バウ！（へっ！ てめえみてえなノロマに捕まる俺様じゃねえ！！ あばよ！！）」

キレた私を見た長嶋三番は逃げようとしたが……………。

『逃がさん（パチンッ！）』

私が指を鳴らすと……………。

ジャラジャラジャラ！！

「バウ！？（何だ！？）」

鎖が現れて長嶋三番に巻きついた。

『このブサ犬、貴様には地獄を味遭わせてやるよ』

「長嶋三番が何を言ったのかは知りませんが、取り敢えずお願いします」

私が長嶋三番を捕まえたのを見たお婆さんは助ける気は無く黙って見ていた。

宮本綾 宮永家の訪問 ?

「ま…まさか綾ちゃんが動物と話せるなんて……」

「旅人さんならいざ知らず、綾にもそんな能力があったとは……」

絵梨と来牙は綾の意外な能力に驚いていた。

「にゃにゃ〜？（ねえ綾お姉ちゃん、ご主人様達はどうしたのかな？）」

「アハハ……まあ絵梨お姉ちゃんたちが驚くのは無理もないよ……」

「にゃ〜？（どうして？）」

「動物とお話ができる人は普通いないからね」

「にゃにゃ〜？（でも旅人さんも僕と話せるよ？）」

「……ま…まあ旅人さんは…ねえ……」

ユーにゃんの質問に答えていた綾だったが、最後の質問には答える事が出来なかった。

「もしかして綾ちゃんが動物と話せる事は旅人さんも知ってるの？」

「うん、知ってる。アタシが教えた」

「旅人さんの他にも知ってる奴はいるのか？」



「ううん、この事を知ってるのは旅人さんだけだよ。旅人さんは絶対に教えちゃダメだって言ってるから……」

「（確かに……）」

来牙と絵梨は内心当然だと思った。もし誰かに動物と話せるなんて言ったら、周りから可笑しな子だと誤解されるのが容易に想像が出来る。

「なあ綾、聞いた俺達が聞くのもなんだが、旅人さんに能力の事は口外するなって言われてたのに、どうして俺達には教えてくれたんだ？」

「あたしと来牙君の質問には、適当にはぐらかすべきだったよね？」  
「……………」

来牙と絵梨の質問に無言だった綾に……。

「あ……いや、俺達は別に……」

「悪気があって言ったんじゃないよ……」

気分を害したのだろうかと言いつつ謝りながら言う。

「……………だって、絵梨お姉ちゃんと来牙お兄ちゃんは……」

「え？」

「……信じてくれると思ったから話したの」

「「……………」」

今度は来牙と絵梨が無言になった。

「アタシ、旅人さんや愛奈お姉ちゃん達に会う前までは友達がい人もいなかったんだ。こんな体格だから、周りの人から色々な悪口を言われたり苛められたり……そんなアタシを慰めてくれたのが動物達だったんだ。アタシが苛められた後に一人で泣いていると、動物達が来て必死に励ましてくれたの」

「綾ちゃん……」

「綾……………」

「もし動物達と話す事が出来なかったらアタシは今頃、旅人さんや愛奈お姉ちゃん達に会わずに、ずっと家に引籠もってたかもしれないね」

「「……………」」

来牙と絵梨は後悔した。興味本位で聞いたとは言え、何時も笑顔でいる綾にそんな暗い過去があったとは思いつかなかったのだ。

確かに綾の体格は高校生並のスタイルなので、周りから見れば綾は他の同級生達より一回り大きいので苛めの対象になるだろう。

「あ……でもアタシは今、誰にも苛められていないから。旅人さんのお蔭で……………」

「だろっな……」

「でしょうね……」

綾の台詞に予想が付いていそうに頷く来牙と絵梨。

「あんまり詳しい事は知らないけど、旅人さんがアタシを苛めていた同級生達に会った翌日……」

「ソイツ等が泣きながら一斉にお前に謝ったつてところか……」

「そうだよ。よく分かったね、来牙お兄ちゃん」

「大体想像が付くからな……」

「だよね、旅人さんの事だから……」

2人は私が綾を苛めていた同級生にキツイお仕置きをしたんだろうと思った。

それでもしなければ同級生達が泣いて謝るなんて事は絶対に無いだろうと……。

「旅人さんは相手が子供だろうと容赦しないからな……まあ綾を苛めていた同級生達には同情する気は無いが」

「そうだね。寧ろやって良かったと思うよ」

「あ……あははは……」

来牙と絵梨が私に同調する事に綾は苦笑する。

「それに……もし旅人さんがいなかったら、綾ちゃんと会うことがなかったからね（ギョウツ！）」

「絵梨お姉ちゃん？」

「にゃ〜？（どうしたのご主人様？）」

絵梨に突然抱きつかれた綾は分からない顔をし、先程まで綾達の話聞いていたユーにゃんも分からない顔をする。

「綾ちゃん、これからはあたしにも遠慮なく頼ってね。綾ちゃんを苛める連中がいたら、あたしがぶっ飛ばしてやるんだから」

「……………ありがとう」

「にゃにゃ〜！（僕も綾お姉ちゃんを守る〜！）」

「……………ユーにゃんもありがとう」

「……………（何だか本当の姉妹みたいだな……………）」

綾に抱き付いている絵梨を見て姉を見ている感じだと思っ来牙であった。

と、そんな時……………。

ガチャ！

『待たせて悪かったねえ〜綾ちゃん……………アレ？ お取り込み中でしたか？』

私がノックもせず絵梨の部屋に入ってきた。

「あ、旅人さん」

「旅人さん、来るのが遅いよ」

「随分と話が長かったんだな」

『いや〜ちよつとねえ〜』

私が綾の隣に座ると綾は嬉しそうな表情になり、絵梨と来牙は私が来るのを遅かった為に顔を顰めながら言う。

『爺との話はもう終わったんだが……………長嶋三番がちよつとな』

「お父さんに続いて今度は長嶋三番が何かやかしたんだね……………」

「で、長嶋三番は何をしたんだ？」

『お婆さんにぶつかって湯飲み茶碗を落として割っても何の悪びれせず、拳句には人の出したお茶菓子を勝手に食っておきながら不味いとほざいていた』

「アンタの事だから、お仕置きしたんだろ？」

『何を当たり前な事を』

私はさも当然の様に言う。

と、突然……。

「ね…ねえ旅人さん、長嶋三番が割った湯飲み茶碗に文字が書いてなかった？」

綾から離れた絵梨は焦ったかのように私に聞く。

『文字？ …… ああそう言えば、“お母さん、いつもありがとう”って書いてたな』

「!!! 旅人さん！？ それは本当か!？」

『あ…ああ、そうだが』

来牙が何故こんな焦っている顔になっているのかが分からなかったが……。

「……………ふ……………フフフフフ…………… そうなんだ…………… 割ったんだ…………… 長嶋三番が……………」

『え…絵梨、どうしたんだ?』

「フフフフフ…………… その割った湯飲み茶碗はねえ…………… あたし

が小さい頃に作って、お母さんにプレゼントしたんだよ……」

『（ああ、そう言う事か……）』

絵梨の顔を見てすぐに分かった。

「それで旅人さん、長嶋三番は何処にいるの？」

『大丈夫だよ、その湯飲み茶碗は私が既に直して……』

「何処にいるの？」

『……………』

笑みを浮かべながら私に近づいて長嶋三番の居所を知る絵梨に、私は最後まで言う事が出来なかった。

「え…絵梨お姉ちゃんが怖い……………」

「にゃ〜…………（ご主人様、相当怒ってる…………）」

「絵梨、湯飲み茶碗は旅人さんが直してくれたんだから……………」

「ねえ旅人さん、あたしを長嶋三番がいる所に転送シテクレナイ？」

『はいはい、分かったから私にそんな黒い笑みを見せないでくれ』

「って聞いてないし……………」

来牙を無視する絵梨に私は絵梨に長嶋三番のいる所へ案内する事に

した。

『それじゃあ私と絵梨はちょっと席を外すから。綾ちゃんはユーにやんと来牙と一緒に遊んで待っててくれ』

「うん。分かった」

「にゃ！（了解！）」

「なるべく早めにな……」

綾とユーにやんと来牙は了承したので……。

『じゃあ行くよ絵梨<sup>スッ</sup>』

「何時デモイヨ」

『では（パチンツ！ ピシユツ！）』

指を鳴らして、私と絵梨は姿を消した。

「消えた……取り敢えず、旅人さんと絵梨が戻ってくるまで待つか……」

「そ……そうだね」

「にゃ」（早く戻ってきて欲しい）

「それはそうと綾、話を蒸し返すようで悪いが、動物と話せる事は旅人さんの言うとおりに口外しないほうがいいぞ。俺と絵梨を信じ



て話してくれたのは嬉しいが、あまり言って良い事じゃないからな」

「うん、分かってる」

来牙の忠告に綾は頷く。

「ならいいが……」

「そう言えば来牙お兄ちゃん、アタシからも聞きたい事があるんだけど」

「何だ？」

「来牙お兄ちゃんが絵梨お姉ちゃんを好きになった理由を教えてください」

「！…いきなりなんだ!？」

来牙は綾の質問に戸惑う。

「ねえ教えて、どうして絵梨お姉ちゃんを好きになったの？」

「あ…いや……それは……」

「教えてよ」来牙お兄ちゃん

「にゃ〜（僕も知りたい〜）」

「ユーにゃんも知りたいんだって〜」

「ゆ…ユーにゃん、お前もか……」

綾とユーにゃんに詰め寄られる来牙はただただ戸惑うばかりであった。

宮本綾 宮永家の訪問 ?

『(ピシユッ!) ほれ着いたよ』

「旅人さん、此処は？ 凄く暗いけど……」

『私が用意したお仕置き部屋だ』

私と絵梨は長嶋三番がいるお仕置き部屋に到着した。周りは真っ暗で何も見えない状態になっているので絵梨は私から離れないように近くにいる。

「暗くて長嶋三番が何処にいないのか分からないんだけど……」

『今電気を付けるよ(パチンツ……パツ)』

「あ…電気が付いた」

私が指を鳴らすと、部屋に明かりが着いた。

「それで長嶋三番は何処？」

『あそこだ(スツ)』

「……………え？」

絵梨は私が指をさした方を見ると……。

「(ピクツ…………ピクツ…………ピクツ)」

「……（チュ！ チュ！）バウウーン（さあアナタ、まだまだこれからですわよ）……」

オスと思われる4匹ブルドックの犬が鎖で巻かれて気絶している長嶋三番にキスしていた。

「ね……ねえ旅人さん、長嶋三番にキスしている犬達って……」

『勿論オスだよ』

「………何でオスの犬がオスである長嶋三番にあんな事してるの？」

『オカマ犬だから』

「………」

私があっさりと言つと絵梨は無言になる。

『まあ最初はメス犬が大好きな立派なオスだったんだけど、ローズ達がねえ……』

「ローズって………もしかしてあのオカマの人達が……」

『よく知ってるね。あの犬達はローズに飼われた故あなただったんだ』

「………オカマの人達に飼われてた、あの犬達が凄く気の毒に思  
うよ」

『長嶋三番には同情しないの?』

「アレには全く無いから」

『まあ私もだけど』

私と絵梨は長嶋三番の様なバカ犬には同情する気は微塵の欠片も無い。

『それでは長嶋三番にキスしている犬達を退かせるか……おい!』

「……!!……バウウーン (貴方でしたか)」「」「」

『……揃って同じ台詞を言うな』

「……あのオカマさんに似て気持ち悪い」

4匹のオカマブルドックが揃って同じ台詞を言った事に対して、私と絵梨は嫌な顔をする。

「……バウバウウーン? (何の御用ですか?)」「」「」

『……まあいい、君達の役目は終わったから退場してもらおうよ。もう十分楽しんだろ?』

「……バウバウウーン バウウーン (それはもう楽しみましたわ では失礼しますわん)」「」「」

4匹のオカマブルドックはトコトコと何処かへと行った。

「……………旅人さん、あの犬達は元に戻せないの？」

『ローズ達にオスのみを好きになれと完全に洗脳されているから無理だ』

「……………ホント気の毒に」

絵梨はオカマブルドックに合掌する。

『さてと……………では本題に入りますか』

「……………そうだね。じゃあコイツ起こして」

『ほいほい（パチンッ！）』

私が指を鳴らすと……………。

「……………バウバウ……………バウバウ……………（旅人……………てめえよくも俺様にあんな地獄を……………）」

長嶋三番が目覚めて、ジタバタと暴れている。

『目覚めてすぐ元気になったか……………そんなにアイツ等のキスが気持ちよかったの？』

「バウバウ……………バウバウバウバウ……………（ふざけんじゃねえ……………地獄を彷徨ったかと思ったぞ……………）」

『まあそんな事はどうでもいいし』

「バウバウ！！ バウバウバウ！！（一言で片付けてんじゃねえ！  
！ てめえ絶対許さねえぞお！！）」

『鎖に巻かれている状態で言われてもねえ』

「……………旅人さんって犬とも話せるんだね」

私と長嶋三番のやり取りを見て、絵梨は呆れたかのような目で私を見る。

『そんな事より絵梨、コイツに用があるんでしょ？』

「そうだったね……………ねえ長嶋三番？」

「バウツ！？ バウバウ！（てめえは絵梨！？ 何で此処に！？）」

「何を言ってるかは知らないけど、よくもお母さんの湯飲み茶碗を割ってくれたわね」

「バウバウバウ！（何の事が知らねえぞお！！）」

長嶋三番は全く身に覚えが無いように言う。

『お前がお婆さんにぶつかった時のだよ』

「バウ？ ……バウバウバウバウ！（ああ？ ……そう言えば  
そんな事があったなあ。あのババアがノロマだったのが悪いんだよ  
！！）」

「……………ねえ旅人さん、コレ何て言ってるの？」

『コレ呼ばわりか……えっと……“ そうですね”が あった  
なあ。あのババアがノロマだったのが悪いんだよ”だとさ』

「……………ふゝん…そうなんだ」

私が長嶋三番が言った事を翻訳すると、絵梨はキレる寸前の顔にな  
っている。

長嶋三番はそんな絵梨の様子に気付かずに……。

「バウバウバウバウ！！（あのババアの顔は愉快だったぜ！ たか  
が湯飲みが割れた位で面白れえ顔になってたからな！！）」

火に油を注ぐ発言をした。

「……………（ピキッ！）……………タビビトサン、モノスゴクフカイナコ  
トライワレタトオモウケド、ホンヤクシテクレナイ？」

『……………（あ、絵梨が黒くなった）』

「ハヤクイツテクレナイ？」

『は…はい。えっと……………“ あのババアの顔は愉快だったぜ。 たか  
が湯飲みが割れた位で面白れえ顔になってたからな”です』

「……………（ブチブチブチッ！）……………ナガシマサンバン、イキテカ  
エレルトオモワナイデネ」

絵梨は完全にブチ切れてしまった。



「バウ!? バウバウバウ!? (何だコイツ!? 何であんなにキ  
してる顔をしてやがるんだ!?)」

『お前が絵梨を怒らせたからだよ』

「バウ!? (はあ!?)」

長嶋三番は訳が分からない顔をするが……。

「タビビトサン、コレヲツルシテクレナイ?」

『どうしてだい?』

「ヒサビサニボクシングノレンシュウヲシタイカラ、サンドバック  
ガヒツヨウナノ」

『了解(パチンッ!)』

「ば…バウ!? (な…何だ!?)」

「フフフフ……」

私が指を鳴らして長嶋三番を吊るすと絵梨は真っ黒な笑みを浮かべ  
ている。

「バウ! バウバウバウ!? (旅人! てめえ俺様に何をしゃがる  
!?)」

『ほら絵梨、ボクシンググローブだ』

「ウン。アリガトウ」

「バウバウ〜〜！！（無視してんじゃねえ〜〜！！）」

長嶋三番が吼えても、私は無視して絵梨にグローブを渡す。そして絵梨がグローブを付けると、長嶋三番に近づいて構えを取る。

「サアナガシマサンバン、アタシノレンシュウニツキアツテモラウヨ」

『絵梨、その横柄な犬にはキツイのを頼むよ』

「ハ〜イ…………ソレジャアハジメヨウカ（スッ）」

（バウバウ！ バウバウバウ（ドゴツ！！）バウ〜〜〜〜！！！！）  
待て絵梨！！ 湯呑だったら旅人の野郎がとくに直してギヤアア  
ア〜〜〜〜！！！！！！！！！！）

絵梨は長嶋三番の処刑を始め、湯呑茶碗は直つていると言おうとした長嶋三番であったが絵梨の強烈なパンチを喰らって悲鳴をあげた。

場所は変わって絵梨の部屋では……。

「ねえ来牙お兄ちゃん、教えてよぉ〜」

「にゃ〜〜（僕にも教えて〜）」

「い…いや…だから………」

綾とユーにゃんに問い詰められている来牙は物凄く困っていた。

「どうして絵梨お姉ちゃんを好きになったの〜？」

「にゃにゃ〜（ご主人様を好きになった理由を知りたい〜）」

「こ…コレばかりは……いくらなんでもお前達には………」

「教えてくれないとこっしちゃうよ〜〜（スッ）」

「お…おい綾…何を？」

綾は来牙の両肩に手を乗せると……。

「えいー！（ドシンー）」

「うおっ！ い…いきなり何をするんだ!？」

来牙を押し倒して覆い被さった。

「さあ来牙お兄ちゃん、もう逃げられないよ?」

「にゃ〜(逃げられないよ〜)」

「……………(何か絵梨に問い詰められているみたいだな)」

来牙がその気になれば綾を退かせる事は出来るが、何故か出来なかった。

「今度はダンマリ? それじゃあこうしてあげる(スッ)」

「綾、何を……………(ムニユ!)おい!？」

「んんっ! な…なにコレ?」

綾は来牙の手を掴んで自分の胸を触らせると気持ち良くなる様な顔をする。

「綾! お前何してんだ!？」

「何だろ? 自分で触っても何とも無いのに、来牙お兄ちゃんに触られると(ムニユムニユ)……………気持ちいい……………」

本当だったら胸を触らせて来牙を自白させようとした綾であったが、初めての感覚に戸惑いながらも感じている。

「（愛奈お姉ちゃんがこうすれば絶対自白するって言ってたけど、何だかどうでもよくなって来ちゃった）……ねえ来牙お兄ちゃん、アタシのもっと触って……」

「おい！ 何か目的が違っているぞ!？」

「にゃ〜?（綾お姉ちゃん、どうしたの?）」

「お願い来牙お兄ちゃん、今度は直に触ってみて……（スルッ）」

「ちよ!?! ふ…服を脱ぎだすな!！（ガシッ）」

上着を脱ぎ始める綾に来牙は綾の手を掴んで阻止する。

「だってえ、直に触られると、どれ位気持ちいいのか確かめたくて……」

「そんなのは俺じゃなくて旅人さんにやって貰え!」

「!?!?! ……た…旅人さんは…その……（//////////）  
「」

「……………取り敢えず離れてくれ」

「……………うん、ゴメン来牙お兄ちゃん」

綾は来牙から離れると、来牙は何故か凄く安堵した顔をしている。

「（あ…危なかった。もしあのまま続けていたら俺は綾を……）」

「どっしたの？」

「！！…何でもない」

「？」

「にやにや〜（ねえ綾お姉ちゃん〜、ご主人様の事を聞かないの〜？）」

来牙の反応に綾は分からない顔をしている時に、ユーにゃんが綾に詰め寄る。

と、そんな時……。

ピシユツ！

『ただいま』

「今戻ったよ〜」

私と絵梨が戻ってきた。

『どっしたの二人とも？ 何かお互い気まずい顔をしているけど…』

…『

「何かあったの？」

「いや、何でもない」

『「？」』

来牙と綾は揃って何でもないと言い、私と絵梨は意味不明であった。

そして私達は4人揃って談笑したりゲーム等々をして、夕方になるとお婆さんが夕飯を作ってくれたので私と綾は宮永家の食卓に混ざる事にした。

食事中にて……。

「所で旅人さん、爺さんは何処にいるんだ？」

『来牙、食事中に聞くものじゃない』

「旅人さんの言うとおりだよ、来牙」

「……あっそ（旅人さんと婆ちゃんって、こつ言つ時には息がピツタリだなあ）」

来牙が源三の行方が気になったが、私とお婆さんに聞くなと言われたので止める事にした。

「お婆ちゃんの作ったご飯が凄く美味しい」

「そうかい？ なら遠慮なくたくさん食べな、まだまだあるよ」

「うん」

「何だか孫が増えたかのような感じだねえ」

一杯食べる綾にお婆さんは嬉しそうな顔をする。

「お母さんだったら……ユーにゃん、お代わり食べる？」

「にゃん（まだ食べる）」

お婆さんのホクホク顔を見て苦笑する絵梨だったが、ユーにゃんが何時の間にか食べ終わっていたのでお代わりを出す。

食事を食べ終え……。

『それでは私達はこれで失礼します』

「また来ます」

私と綾はお暇する。

「綾ちゃん、また遊びに来てね」

「にゃん（待ってるよ）」



「また来るのを楽しみにしてるよ」

「またな」

絵梨、ユーにゃん、お婆さん、来牙は別れを告げると……。

『それでは(ピシユッ!)( )』

「またね〜 (ピシユッ!)( )」

私と綾は姿を消した。

おまけ

「(ドンドンドンドン!)(ばーさんや〜、ここから出してくれえ〜  
〜!〜!〜!)(ドンドンドンドン!)( )」

鍵を掛けられた物置部屋の戸を叩きながら開けてくれと懇願する源  
三と……。

「(ピクッ…ピクッ…ピクッ)……ば…バウバウ(い…犬殺しが  
いる)」

私のお仕置き部屋で絵梨にぶちのめされて未だに吊るされている長  
嶋三番が呟いていた。

## ローズVS鉄人(前書き)

今回はGAUさんのオリキャラであるクリスティーナ・ウエストロ  
ードが参加しています。

前もって許可は貰ってます。

それではどうぞ!!





『そ…そうですね。と言うか人に指をささないで下さいね』

「それと旅っち!! 貴方にもう一つ言いたい事があるよん!」

『はい? (旅っち…変な呼び方だな)』

アメリカンクリスが私に顔を近づけて真剣な顔をする…。

「どうして…どうして…にしむーのレスリング動画のDVDをおねーさんに譲ってくれなかったの!？」

『…そんな真剣な顔をして聞く事ですか?』

「当然だよん! だって…にしむーのレスリングが…」

どうやら彼女は以前のレスリング動画を見せてくれなかった事に相  
当悔しがっているみたいだ。

『…観客席の皆さんは見たいですか?』

「「「「「「「「見たくねえよボケ!!」「「「「「「「」

私の質問に観客達は一斉に否定する。

『だそうですが?』

「きつと今回の試合を見ればきつと分かるよん だから旅っちい  
く、あちしにあのDVDを譲ってよ〜ん」

強請るかのように言ってくるクリス。

『それでは試合を始めさせて頂きます!!』

「無視された!? 酷い…酷いよ旅っち…ヨヨヨ…」

明らかに嘘泣きをしているであろうアメリカンクリスを放っておいで、私は選手入場を始める事にした。

『それでは選手入場です!! 赤コーナー! お色気レンジャーのリーダー ローズ!!』

パッ!

光がある方向へと照らすと……。

「フンッ!! (ビリビリビリ!!) お手柔らかに頼むわよ〜!」

「おおぅ……あのオカマさんが着ていた服が一瞬で破れた………凄  
い筋肉だねい あれは生半可の鍛え方じゃないよん」

『ローズ曰く、十余年の特訓によってあそこまで鍛えたと言っ  
てましたよ』

メイド服を着ていたローズがポーズを決めると服が破れてレスリン  
グのユニフォームを着て登場する。因みにローズは今回のレスリン  
グで大して化粧はしておらず、殆ど素顔に近い。



『おおつとお！ 西村先生は、自身の鍛えた肉体をローズに見せ付けているかの様だ！！！！』

「ああ……にしまーの逞しい体……こんな近くで見れるなんて……旅つち！！」

『何です？ 今は実況をやっている最中なんですが……』

私が入況中に突然、アメリカンクリスが私の方を見る。

「此処に呼んでくれてありがとう……！！！！（ギュウツ……） おねーさんは今も……れつに感動してるよ……！！！！」

『だ……！！！！ 私に抱き付くな……！！！！』

アメリカンクリスは喜びの余りに、感謝のつもりだろうか私に抱きつく。

と、そんな時……。

「旅人様あゝ早く試合を始めませんかあゝ？」

「早くしろ“さすらいの旅人”！」

ローズと鉄人が試合を始めると言い……。

「旅人！！ 貴様はワシ等のアメリカンクリスに何をしとるんじやあ……！！！！」



「ふざけんな旅人！！ テメエぶつ殺されてえのか！？」

「拙者達はムサイ連中と一緒にいると言つのに！！」

「ヒトリダケ涼シイ所で潤ウナ～～！！」

「旅人！！ 貴様は絶対にぶつ殺してやる！！ 異端審問会会長の名にかけて！！」

「～～～～一人だけ良い思いしてんじゃねえぞクソヤロウが～～～～！！！！」

「そんなもんはどうでもいいから俺を家に帰らせろ～～～～！！！！！！」

「クリス～～！！ 旅人さんより俺様に抱き付いて癒してくれ～～～～！！！！！！」

観客席からはブーイングが飛んで来た……………雄二と翔はブーイングではなかったが。

『……………ゴホンッ！ アメリカンクリスさん、試合を始めたいので私から離れて下さいね』

「ほ～～い、分かったよん」

アメリカンクリスが私から離れると私は試合開始の進行をする。

『それではこれより “ローズ VS 西村宗一” の試合を始めさせていただきますー！！』

「（ガシツ！）手加減はしないわよお〜！」

「（ガシツ！）俺もだ！！ お前みたいな相手は初めてだが、俺は決して負けない！！！」

試合前の固い握手をするローズと鉄人。

「ワタシもよ西村さん、最強の座はワタシが頂くわ！！（バチバチ！！）」

「それは俺とて同じだ！！（バチバチ！！）」

握手してもお互いに勝利は譲らんと言わんばかりに、目を合わせて火花を散らすローズと鉄人に……。

『お〜試合前から凄いですな〜』

「頑張つてにしむ〜！ おねーさん応援してるから〜！！！！！」

『貴方は観客じゃなくて解説役でしょうが……』

二人の睨みあいと凄んでいた私であったが、アメリカンクリスは解説などお構い無しに鉄人に応援しているのを見て私は突っ込み……。

「……………こんな暑苦しい試合なんか見たくねえ〜！！」

「……………」

観客席側は必死に逃げようと暴れている。

『試合開始！！（カンッ！！）』

そして試合開始のゴングが鳴り響いた。

## ローズVS鉄人？

試合が開始されて数分後……。

「ウウウウウー！！（グググググググー！！！！）」

「ズアアアアー！！（グググググググー！！！！）」

ローズと鉄人はタックルで相手を倒して技を仕掛けようとしたが、倒れてはくれずお互い抱きついた状態になっても倒そうと必死になっている。

「ウウウウウー！！ やるわね！！」

「ガアアアアー！！ お前もな！！」

2人は共に汗を掻いて血管を浮かび上がらせながらも相手を賞賛する。

『凄いですねえ〜アメリカンクリスさん。そろそろどっちかが倒れると思っていたんですけど、まだ続いていますねえ〜』

「……………」

『ん？ どうしました？ さっきから無言ですけど……………』

「……………頑張れ」

『はい？』

「（ガタンー！！）……頑張れにしむ……！！！！！！！！！！ ローズ  
イーに負けるな……！！！！！！！！！！」

『貴方は解説役でしょうが!? 中立である貴方が応援してどうするんですか!?!』

突然立ち上がって鉄人を応援するアメリカンクリスに私は突っ込む。

「だって……だってあんな……にしむの頑張ってる姿を見て応援しなきゃダメでしょうが!!!」

『気持ちは分かりますが解説に専念して下さい!!!』

「無理!! おねーさんは、にしむの応援させて頂きます!!!!!  
頑張れ……!!!!!!」

アメリカンクリスは席を立って観客席の方に移動した。

『……ハアツ……連れて来たのは間違いだったかな?』

まさかアメリカンクリスがここまで鉄人にお熱だったのは予想外であつた。

『こんな事になるんだつたら私一人でやればよかったよ……ん?』

私がふと試合の方を見ると……。

「ブルワアアア……!!!!!!」

「ぐっ！！（バタンツ！！）」

鉄人が一瞬気を抜いた隙にローズがすぐさま全力で鉄人を倒して技を仕掛けた。

ローズは自慢の大胸筋で鉄人の顔を圧迫している……………何故か柔道技の上四方固めをしているが。

「ウウウウウウ！！！！ さあ西村さん！！ 貴方の敗北が近づいて来てるわよお！！（グググググググ！！！！）」

「ヌウウウウウ！！！！ 貴様！！ これは柔道ではないぞ！！（ググググググ！！！！）」

必死に鉄人の両肩をマットに付かせようとしているローズであったが、鉄人がローズにルール違反だと言う。

「あら知らなかったあ？ この大会ではどんな締め技も通用するのよ！！ ルールブックは見なかったのかしらあ！！（グググググググ！！！！）」

「！！！！ た…確かに書いてあったなあ！ だがこれはレスリングだぞ！！（ググググググ！！！！）」

「この大会の主催者は旅人様よ！！ あの人がルールに拘ると思っているの！？（ググググググ！！！！）」

「……………そうだったな。あの男のやる事は何時も非常識だからな！！（ググググググ！！！！）」



「……………」 翔

ローズと鉄人の暑苦しい試合を見た所為か完全に気絶していた。私とアメリカンクリスはそんな事を気にせず2人を応援している。

「ローズ！ 最強の座がもうすぐ目の前だ！！ 早く決着をつける！！！！」

「分かりましたわ旅人さまあ……………！！！！！！！！！！（グググググググググ！！！！）」

「グウウウウウウ！！！！ 絶対に付けないぞ……………！！！！！！！！（グググググググググ！！！！）」

私の声援でローズは最後の力を振り絞って鉄人の両肩をマットに付けさせようとするが、鉄人は嫌だと言わんばかりに激しく抵抗している。

「にしむ……………！！！！ 貴方の力はこんなもんじゃ無い筈……………！！！！！！！！！！ にしむ……………の底力をローズイーに見せ付けて……………！！！！！！！！！！」

「ウエストロードに言われなくてもそのつもりだ……………！！！！！！！！！！（ググググググググググ！！！！！！！！！！）」

「！！！！ な……………何ですって！？（バタンツ！！！！）」

アメリカンクリスの声援に鉄人は固め技をしているローズの腰を片手で掴み、全腕力を片腕に集中したのかローズを持ち上げて投げ飛



ばした。

常識的に考えて普通は無理な筈なんだが鉄人はその常識を覆し……。

「うおおおおおおお~~~~~!!!!!! (ガシッ!!!!)」

「!!!!!! しまった!!!!!!」

投げ飛ばされたローズの意識が朦朧としている隙について、鉄人はお返しと言わんばかりにローズがさっきまでやっていた上四方固めを使った。

鉄人の汗まみれの胸筋がローズの顔を圧迫する。

「形勢逆転だなローズ~~~~~!!!!!! (グググググググググググ!!!!!!)」

「又ウウウウウウ!!!!!! わ……ワタシとした事が~~~~~!!!!!! (ググググググググググ!!!!!!)」

上四方固めをしていたローズから鉄人に変わると……。

『ま……まさかこんな……ここで引っ繰り返されるなんて……』

「当たり前よ~~~~~!!!!!! にしむ……が負けるなんてありえないんだから~~~~~!!!!!!」

私は鉄人の底力に驚愕し、アメリカンクリスは当然だと私に言う。

そして鉄人は……。

「これで最後だ~~~~!!!!!! (グググググググググググ!!!)!!!!!!」

「まだまだよ~~~~!!!!!! (グググググググググググ!!!)!!!!!!」

勝負を決める為に残った力を最後まで出し切ってローズの両肩をマツトに付けさせる。しかしローズも負けておらず、両肩を付かない為に必死に抵抗している。

この状態が数分続き……。

『意地を見せるローズ!!!! チャンピオンベルトが待ってるぞ~~~~!!!!!!』

「にしむ~~~~!!!!!! 決めてやれ~~~~!!!!!!」

『ローズ!! ローズ!! ローズ!! ローズ!!』

「にしむ!!! にしむ!!! にしむ!!! にしむ!!!」

『ローズ!! ローズ!! ローズ!! ローズ!!』

「にしむ!!! にしむ!!! にしむ!!! にしむ!!!」

私とアメリカンクリスも声が囁れるまでずっと応援していた。

そして……。

「ウオオオオオオオオオオオ~~~~~!!!!!!!!!!!!!!!!!!  
(グググググググググググ!!!!!!!!!!!!!!!!!!)」

「ギギギギギギギ!!!!!! も……もうダメ~~~~~!!!!!!!!!!!! (バ  
タンツ!!!!!!)」

鉄人はでかい雄叫びを上げながら渾身の力で押し切り、ローズは限界に達したのかマットに両肩を付いた。

カンカンカーンッ!

『グウツ!!!! (泣) ……………勝者 西村宗一~~~~~!!!!!!!!!!!!』

「やった~~~~~!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!! (泣)」

私は悔し涙を流しながら勝者した鉄人の名を言い、アメリカンクリスは嬉し涙を流しながら万歳していた。

一応、観客席側は……。



おまけ

レスリング大会が終わった翌日の事……。

「フンッ！ フンッ！ フンッ！ フンッ！」

『……………おいローズ、少し体を休めたらどうだ？ 昨日からずっとトレーニングをやっているんだぞ？』

「いいえ！ 西村さんに勝つためにはこれ位しなければ！！ フンッ！ フンッ！」

『……………』

とあるスポーツジムでローズが夜中まで特訓をしていた事に私は休むように言ったが、ローズは私の言葉を聞き入れずにまだ続けている。

『言っておくけど、次の大会は当分無い。だから今日から数日間は体を休めろ。そんな酷使したトレーニングを続けた所で体を壊すだけだ』



「以上ですわ旅人様!!!」

『そ……そうかい、では伝えておこう(ピシユッ!)』

私が姿を消すと……。

「待つてなさい西村さん!! 次の大会でワタシは更に腕を上げて貴方に挑むわ!!!」

ローズはメラメラと燃えていた。

ローズVS鉄人 ? (後書き)

クリスティーナ・ウエストロード、次の大会でも君を呼ぶから必ず来るように!!



来牙×絵梨7 一週間の禁欲生活

ある朝の事……。

「ん……んん……（ムクッ）……ふわ……」

「んんん……あ……お早う、来牙君……」

来牙の部屋のベッドで来牙と絵梨が起きた。

「ふあ……さて……眠気覚ましにゲームでもするか……（スッ）」

「……ね……ねえ来牙君……」

「ん？」

「ら……来牙君のココが凄く大きくなってよ（サワサワ）」

「ああ、そうだな」

絵梨が来牙のアレを触っても全く動じていない。

「鎮めるんなら……シテもいいよ？」

「ただの生理現象だ。ってか絵梨、旅人さんに掛けられた暗示が解除されていない俺にその気にさせようとしても無意味だぞ？」

「うっっっ！」

「今日の夜で解除されるからそれまで我慢してろ」

「だって……こんな生殺しだよ……あれから一週間も経ってエッチしないって……旅人さんのバカ……」

「仕方ないだろ、俺だってホントはしたいんだから……」

これを読んでいる読者の皆様は、どうして来牙と絵梨がこんな会話をしているのが全く理解出来ないと思われますので、少し時間を遡らせて頂きます。

それは一週間前の事……。

「ら……来牙くうん……ダメだよ……旅人さんが来ちゃう……あああ」

「大丈夫だ、旅人さんの事だからあと30分は帰ってこない……」  
モミモミ」

「ああん！ もう……来牙君のエッチ……」

来牙は路地裏で絵梨に抱き付きながら胸を揉んで服を脱がしている。

「あたし達、この所エッチばかりしてるね」

「何だ？ 絵梨はしたくないのか？」

「……あたしが来牙君とのエッチを拒むと思ってるの？」

「冗談だ、それじゃあ始めるか……」

「うん……」

絵梨が目を閉じて来牙がキスをしようとした時……。

『此処にいたのか来牙！』

「「！」「」

『探したぞ……っておい』

私に見付かったので中断された。

そして5分後……。

『あのさあ来牙、私が席を外している間にエッチして時間を潰すのはどうかと思うけど……』

「……………悪かった」

『絵梨もだよ』

「1」…ゴメンなさい」

私は来牙と絵梨を正座させて軽い説教をしている。

『お前等はまだ若いからエッチしたい気持ちは分かるけど、少しは自制なさい』

「……………はい」

『のめり込み過ぎると後々とんでもない事になるんだぞ？』

「……………はい」

『私だからまだこの程度で済むけど、他の人だったらキツイ説教を喰らっているんだからね』

「……………はい」

『……………アンタ等さあ、本当に理解してるか？ さっきから“はい”しか答えてないけど……………』

「「勿論です」「」

来牙と絵梨が揃って同じ事を言うので私はどうも説教を聞き流しているように思える。

私がちよつと頭の中を覗いて見ると……………。

「（旅人さんがこんなに早く帰ってくるのは予想外だったな、次からは旅人さんがいない時にした方がよさそうだな）」

「（もう……、旅人さんも少しは空気を読んで欲しかったよ……………）」

『……………お前等、全く反省して無いだろ』

予想通りだったので、私は2人に突っ込む。

「何の事だ？」

「あたし達、ちゃんと反省してるよ？」

『じゃあ何で言ってる事と頭の中で考えている事が全然違うんだ？』

「「……………（しまった……………）」」

私に心を読む事をすっかり忘れていた来牙と絵梨は揃って私から目を逸らす。

『……………ハアツ……………人の色事に口を出す気は無かったけど、今回ばかりは出させて貰うぞ』

「今回ばかりって……………何かするつもりなのか？」

「まさか此処で長い説教をするの？」

『そんな事した所で、どうせ聞き流すつもりだろ？』

「……………」

『説教するより効果的な手段だ。2人にはある事をして貰うよ（ゴソゴソ……………バツ！）』

私が懐から紙を取り出して2人に見せると……………。

『さあ御兩人、この紙に書かれている内容を読んで』

「え〜つと何々……………“今日から一週間、宮永来牙と宮永絵梨は互いにエッチする事を禁ずる”っておい……………」

「何コレ!?!」

予想通り、嫌そうな顔をしてくれた……………特に絵梨が。

『あら？ 何かご不満かな？』

「当たり前よ!! 何で今日から来牙君とエッチしちゃダメなのよ!?!」

『言ったでしょ？　今回は御両人の色事に口を出させて貰うって。まあその後は……』

「だからってコレは無いでしょ!？」

私が言っている途中で絵梨が猛抗議してくる。

まあ絵梨が怒るのは無理もない。何時も来牙と一緒にいてエッチする事がよくある絵梨にとって今回やろうとしている事は拷問にも等しいのだ。そんな絵梨が猛抗議する事に私は予想済みである。

『落ち着け絵梨、まだ話の途中だよ』

「落ち着ける訳が無いでしょ!？　旅人さんがあたしと来牙君の愛を引き裂こうとしているんだから!！」

『愛を引き裂くって……たかが一週間エッチしない事でそんな大袈裟な……』

「こればかりはいくら旅人さんでも!（ダッ!）」

絵梨が私に襲いかかろうとしたが……。

「（ガシッ!）待て絵梨!　お前がこの人に勝てる訳が無いだろ!？」

「止めないで来牙君!　喻え勝てないと分かっても挑まなきゃいけないんだから!！」

来牙が絵梨を羽交い絞めにして抑えた。

『へえ〜……それじゃあローズと相手をするか？（スツ）』

「！……！……すいませんでした」

私がローズを呼ぼうと指を鳴らそうとしたが、ジタバタと暴れる絵梨は抵抗を止めて私に謝った。

『では話を最後まで聞くか？』

「……………はい」

『よろしい。来牙、絵梨を離してやれ』

「やれやれ……………」

絵梨が落ち着いてくれて安堵した来牙は羽交い絞めしていた絵梨を離す。

『では……………来牙と絵梨が今日から一週間我慢出来たら、その後は好きなだけエッチしても構わん』

「……………」

『言うておくけど、私はその後から口を出す気は無いからね。と言  
う訳で絵梨、分かったかな？』

「……………でも……………あたし達はここ数日エッチばかりしていたから、一  
週間も我慢出来ないよお」



「多分、1日も持たないだろうな」

絵梨と来牙がどれだけエッチしている回数がよく分かる位の回答であつた。

私は当然それは予想しており、ある事をする。

『大丈夫だ、ちゃんとそれも見越してある(スッ)』

「(トンツ)お…おい旅人さん、何を？」

『来牙は今日から一週間の禁欲生活に耐えられる、と』

私は来牙の額に右手の人差し指を当てて暗示をかける。

「ああ成程、予め暗示を掛けておけばあたしと来牙君は耐えられ…

…」

『言っておくけど、絵梨には暗示を掛けないからね』

「ええ!？」

絵梨は私の予想外の答えに大きく戸惑う。

「ど…どうして!？」

『二人に暗示を掛けた所で意味が無いだろうが』

「だ…だからって…何であたしには…」

『絵梨だけに暗示を掛けていくらその気が無くても、来牙はそんな事お構い無しにやりそうだからね。そうだろ、来牙?』

「……………そんな事は無いと言いつ返したいが、全く持ってその通りだ」

『お分かり頂けましたか?』

「うっ~~~~~~~~!!!」

物凄い目で私を睨む絵梨であつたが全然恐くなく、私から見れば最後の悪足掻きみたいな物である。

「絵梨、もうここは覚悟を決めるしかない」

「来牙君は暗示を掛けられているから大丈夫だけど、あたしは一週間我慢しなきゃいけないんだよ」

「そ…それは…………」

涙目で訴える絵梨に来牙は言い返すことが出来なかつた。

『ま、そう言う訳で今日は家に帰ってゲームでもしてな』

「他人事だと思つて…………!!」

『恨むんなら、自分の抑え切れない性欲を恨む事だな。それじゃあ一週間後の夜に君達の部屋に来るから(ピシユッ!)』

私は言いたい事を言つと姿を消した。

「……………絵梨、取り敢えず今日から一週間は何とか乗り切ろう……」

「……………」

「絵梨？」

無言だった絵梨に来牙は声を掛けたが……。

「旅人さんの鬼……！！！！ 悪魔……！！！！」

「……………いい加減諦めろよ」

空に向かって私の悪口を言っている絵梨に来牙は突っ込んだ。

来牙×絵梨7 一週間の禁欲生活？

私が来牙に禁欲の暗示をかけた翌日の昼頃……。

来牙の部屋で……。

「ね…ねえ来牙くん……（ギユウ）」

「絵梨、まだ一日しか経ってないぞ」

「だってえ……体が来牙君を欲しがってるんだもん。ねえ……しょ」

絵梨が来牙に抱き付いて誘うようにしているが、来牙は全く反応していない。

「残念だが、旅人さんに暗示を掛けられた俺には全くその気が無い」

「え？（サワサワ）……な…何で大きくならないのお？」

服越しに来牙のアレを触った絵梨だったが、大きくなっていない事に不満顔となる。

「だから言ったら、暗示を掛けられたって」

「……………夜に旅人さん呼んで闇討ちしようかな？」

「止めとけ、そんな事しても返り討ちに遭うだけだ」

来牙が物騒な事を考えている絵梨を踏み止まらせている時に……。

「来牙〜！ 絵梨〜！ 昼御飯が出来たよ〜〜！」

扉からお婆さんの声が聞こえた。

「ほら絵梨、行くぞ…（ガチャ）」

「……………来牙君が冷たい、何時もだったらあたしの疼いた体を鎮めてくれるのに……………」

「何時もだったら、な」

「……………」

絵梨は無言で来牙と一緒に1階へと向かった。

2日後……………。

「はあ……………はあ……………はあ……………」

「どうしたんだい、絵梨？ 息が上がってるけど」

「え？ …… あ… いや、何でも無いよ」

台所でお婆さんと一緒に食器洗いの手伝いをしていると、また体が疼き始める絵梨であった。

「顔がいつもより赤いね、風邪でも引いているのかい？」

「風邪なんか引いて無いよ、お母さんったら心配性なんだから」

「心配にもなるよ。絵梨が風邪を引いたって、お爺さんがもし知ったら……」

「絵梨よ！！ 風邪を引いておるのか！？」

「お…お父さん……」

「こつ言う事になっちゃうからね」

源三がいきなり現れた事に絵梨は少し引き気味になっており、お婆さんは来て欲しくない顔をする。

「絵梨よ！ 風邪を引いておるなら早く部屋に戻って寝るのじゃ！」

「お…お父さん、あたしは別に風邪なんか引いてないよ」

「いいやきつと引いておる！ それを確かめるためにワシの手で絵梨の肌を直に触って体温を……」

源三が絵梨の腕を引っ張って部屋に連れて行くこととする時……。



「お爺さん、娘にセクハラはいけませんよ（ポチッ！）」

「&《\$《《%》、\$《《%》《《#&》（%%）&）（%&）！！！！！！！！！！（ガクッ！！）」

お婆さんが再度スイッチを押すと、源三が先程以上の悲鳴にならない声を出した後にまた気絶した。

「本当に便利な道具だねえ」

「（ああ……お母さんが旅人さんみたいだよ……）」

私に染まっていくお婆さんを見て恐怖のあまりに顔が引き攣っている絵梨であった。

3日後……。

「ああ……まだ3日目だよ（泣）……」



「なあ絵梨、そんなに我慢出来ないんだったら一人ですればいいんじゃないか？」

絵梨の部屋でゲームをしている来牙と絵梨であつたが、嘆いている絵梨を見て解消する為の提案を出した。

「そうしようと思つてただけど……昨日こんなメールが届いたの（スッ）」

「ん？ ……これって旅人さんからのメールか？」

「うん、中身を読んでみて……」

「どれどれ……」

来牙は絵梨の携帯のメールを読み……。

“ 絵梨へ

言い忘れていたけど、我慢出来なくなつて一人でエッチしたら一日追加するからね。例え誤魔化そうとしても、私が来た時には速攻で君の頭の中を読んで1週間の行動を確認するから。どうしても我慢出来ないならやつても構わないけど、日数を追加するから覚悟しておくように。それと来牙、もし絵梨に加担した場合には私が掛けた暗示は解除しないでそのままにしておくからね。と言う訳で御兩人、最後まで頑張つてね

By さすらいの旅人”

「……………旅人さんに先手を打たれたって事が」

メールを読んだ来牙は絵梨が一人でエッチする事が出来ない理由が分かった。

「旅人さんの鬼……………悪魔……………」

「まあ俺から言える事は……………（ポンツ）とにかく頑張れ」

「うう……………ああ……………！！ 旅人さんの人でなし……………！！！！！！！！」

絵梨の肩に手を置いて応援する来牙であったが、絵梨は悔し涙を流しながら私を罵倒する。

4日後……………。

絵梨が来牙のベッドに入って就寝する時……………。

「なあ絵梨、今日からは別々の部屋で寝ないか？」

「ええ！？ どうして!？」

「どうしてって……お前この数日、俺とが寝ている時、服に手を突っ込んで俺のアレを触ってただろ？」

「!?!?!」

来牙の発言に絵梨がビクツと体を震わせた。

「な…何で知ってるの？」

「夜中に絵梨が眠っている最中、俺がトイレに行く時に目を覚ますと何故か俺の股間に絵梨の手が置かれていたんだよ」

「……………」

「どうせ俺のアレを大きくさせようと必死に触り続けていたんだろ？」

「……………はい、仰るとおりです」

「……………ハアツ」

絵梨は降参したかのように素直に白状し、そんな絵梨を見た来牙は呆れながら頭に手を置いて溜息を付く。

「今はまだ不発に終わってるからいいが、もしこれが旅人さんに知

られたら延長されるぞ。それでもいいのか？」

「だ……だって……来牙君と一緒に寝てると体が疼いて……」

「だからそうならない為に別々で寝るんだよ」

「……………ゴメン来牙君、もうしないから一緒に寝かせて」

絵梨は謝りながら来牙と一緒に寝ようと言つが……。

「そうしてやりたいのは山々だが、今回はかりはダメだ」

「そ……そんなあ……あんまりだよお……………」

来牙にダメと言われて涙目になる絵梨である。

「分かってくれ絵梨、俺だって辛いんだよ」

「旅人さんに暗示を掛けられてる来牙君は別に何とも無いんでしょ？」

「それでもない。俺もこの数日、絵梨に手を出す事が出来なくて歯痒いんだから」

「……………え？」

来牙の意外な言葉に絵梨はキョトンとする。

「最初は自分から絵梨に手を出さずに済んで良かったと思っていたんだが、この数日……絵梨とエッチしようと思つても、ア

レが全然大きくならない事に時々……自分は不能なんじゃないかと思っただ」

「そ…それってつまり来牙君も……」

「絵梨とエッチしたいって願望があっても、全くその気になれない事に悩まされているんだ」

「……………」

来牙が苦々しい思いで言うのを見た絵梨は何も言い返すことが出来なかった。

「……………そっか、来牙君も辛いんだね」

「ああ。だから絵梨、悪いが今日は自分の部屋で寝てくれ」

「……………うん、分かった」

絵梨は来牙の言うとおりに自分の部屋で寝ようと、ユーにゃんを抱いて来牙の部屋から出る。

「（ガチャッ！）……………お休み、来牙君」

「お休み」

「それじゃあ（バタンッ）」

「……………さっさと寝るか……………」

絵梨が部屋から出ると来牙は横になって寝始めた。

来牙と絵梨がエッチ出来るまで……あと3日。

来牙×絵梨7 一週間の禁欲生活？

私に来牙に禁欲の暗示をかけて5日後……。

『フムフム、ちゃんと守っているみたいだね。まあ危ない所もあつたが良しとしよう……』

私はローズのセーフハウスのリビングで、携帯テレビを使って来牙の部屋を見ていた。

『今日を含めてあと3日、それまで絵梨が持ち堪えてくれるといいんだけどねえ』

「何を見ているんですか？」

『ん？ 明菜か』

私が携帯テレビを見ている最中に明菜がやって来た。

『明菜が此処に来るなんて珍しいな』

「今日はおと……では無く、ローズさんに御用がありました」

『ローズなら此処にはいない。ついでに他の連中もね』

「……………そうですか」

私がローズはいないと言うと明菜は悲しそうな顔をする。

『（ローズの奴……もしや明菜が来ると予想して出掛けたな）』

「旅人さんはローズさんが何処に行ったかご存知ですか？」

『さあねえ、アイツの事だからバーの下準備でもしてるんじゃないの？』

「……………分かりました。では……………」

明菜がセーフハウスから出ようとするが…………。

『待て明菜、お前がバーに行った所で、どうせ奴は姿を隠す』

「けど……………」

私は明菜を引き止める。

『ローズは自らああなったんだ、今は何を言っても奴は医者に戻る気は無い』

「それでも言いたいのです。あの手術ミスはお父さんの医術を妬んだ医者が患者に別の薬を投与して……………」

『明菜！……………』

「……………！！（ビクッ……………）」

私が最後まで言わせない為に大声で呼ぶと明菜は体を震わせる。

『それ以上は言うな……………』



「……………」

『あ……わ……悪い明菜、急に怒鳴っちゃって』

「いえ……………」

私が謝っても明菜は顔を伏せている。

『そ…そうだ！ 今日明菜の家に行ってもいいかな？ 久々に君の手料理を食いたいんだけど』

「……………何を食いたいんですか？」

『今日は中華を食いたい！』

「……………ふうっ……………分かりました。では材料を買わないといけませんね」

『荷物持ちなら私にお任せを』

「ではお願いします」

『ほいほい それじゃあスーパーへGO！』

私と明菜は材料を買う為にスーパーへと向かった。

一方、来牙の家の庭で……。

「フンツ！ フンツ！ フンツ！（ボスッ！ ボスッ！ ボスッ！）

「……………絵梨、何してるんだ？」

スポーツウェアを纏った絵梨がグローブを身に付けサンドバッグにパンチしている所を、学校から帰ってきた来牙が絵梨に問う。

「見て分からない！？ ボクシングの練習してるの！！（ボスッ！ ボスッ！ ボスッ！）」

「いや、それは分かるんだが……………どうしてそんな事をしているのかと……………」

「少しでも気を紛らわす為にやってるの！！（ボスッ！ ボスッ！ ボスッ！）」

来牙の質問に答えながらも絵梨はサンドバッグを殴り続ける。

「気を紛らわすって……………お前、俺が学校に行ってる間にずっとやっ

てたのか？」

「そうだよ！！（ボスッ！ ボスッ！ ボスッ！ ボスッ！）」

「今日はバイトじゃなかったのか？」

「店長に頼んで休ませて貰ったの！！（ボスッ！ ボスッ！ ボスッ！ ボスッ！）」

「……………ならいいが」

「来牙君！！ お願いだから今は話しかけないで！！ 集中できないから！！（ボスッ！ ボスッ！ ボスッ！）」

「わ…分かった、頑張れよ」

これ以上聞くのは不味いと思った来牙は家に入ることにした。

「ハアッ！ ハアッ！ ハアッ！ ハアッ！」

来牙の姿がいなくなったのを確認した絵梨は練習を止め…………。

「旅人さんのバカ…………！！！！（ボスボスボスボス！！）」

再度殴り始めた。しかもさっきまでのパンチが更に威力が上がっている。

どうやら絵梨はサンドバッグを私だと思って殴り続けていたみたいである。

「…………やはりな」

自分の部屋の窓から庭を見ていた来牙はすぐに分かった。私に対する怨念をサンドバッグにぶつけていたのだと。

「頑張れ絵梨、俺も頑張っているから」

来牙はサンドバッグを殴り続ける絵梨を見てエールを送る。

「ふうっ…（ポスッ）」

来牙が着替え終わってベッドに座ると……。

「しかし旅人さんの言うとおり、俺達も少しは自粛した方がいいかもしれないな」

自分達の行動を考え直していた。

「前までは気にする事も無く絵梨とエッチしまくったが、それが仇となつてのめり込み過ぎた。今度からは回数制限をした方がよさそうだな」

私がやった意味を理解してくれた来牙は絵梨とのエッチに関しての制限を課そうとしている。

「するのは4日に一度……長過ぎるからダメだ。じゃあ2日に一度……ダメだダメだ、短すぎて絵梨に強請られたらすぐにしてしまう。だったら3日に一度……微妙な所だな……」

数日置きにしようと考えている来牙はどうしようかとずっと考えて

いた。

6日後……。

「早く明日になれ……早く明日になれ……早く明日になれ……早く明日になれ……」

「絵梨、そんな事を言っても明日にはならないぞ」

「何をブツブツ言ってるんだい？」

3人での朝食の最中に、絵梨がブツブツ言っていたので来牙は突っ込み、お婆さんは絵梨の様子が気になったので聞いてみた。因みに源三は部屋で寝ている。

「早く明日になれ……早く明日になれ……」

「婆ちゃん、絵梨の事は気にしないでくれ」

「けど食事の際には絵梨がずっとブツブツ呟いているんだよ。気に

ならない方がおかしいと思うけど？」

来牙はお婆さんを諭しているが、絵梨がここ数日にブツブツと呟いている事に何かあったのでは無いかと気に掛ける。

「まあ絵梨にも色々あるんだよ、察してくれ」

「母親のアタシにも言えない事なのかい？」

「……………そんな事より、爺さんもバカだよなあ。気が立っている絵梨に話しかけるんだから……………」

「……………（やっぱり何かあったんだね）……………そうだねえ、絵梨にセクハラ行為をしようと近づいたけど、ボコボコに伸されたから」

話題を変えた来牙であったが、何か隠し事をしているとお婆さんは気づいた。しかし敢えて来牙に合わせて朝食を食べる前の事を思い出す。

朝食前に……………。

「絵梨よ～～、今日も一段と可愛いのお～～」

「……………（イライラ）」

「どうしたのじゃ絵梨？ 元気が無いのお？」

「……………（イライラ）」

源三が絵梨に話しかけても無言であった。絵梨は源三に話しかけられて苛々しているが。

「……………ハッ！ さては来牙、お主は絵梨に何か不埒な事をして機嫌を損ねさせたのか！？」

「何で絵梨に関する事はいつも俺なんだよ」

源三は絵梨が無言になっている原因が来牙だと指摘すると、来牙は呆れながらも否定する。

「そうではないか！？ お主等はこの頃、妙に距離を取っておるし会話も少ない。じゃったらお主が絵梨に何かをしたとしか思えんじやろう！！（ビシッ！）」

「確信の迫った推理だと思っているだろうが大ハズレだ……………（絵梨がああなっているのは俺じゃなくて旅人さんだ）」

源三の推理は違つと言いながら、内心で絵梨をあそこまでの犯人は私だと示唆する。

「ではどうして絵梨がこうなっておるんじゃ！？ 知っておるなら話せー！！」

「……………言った所で爺さんがどうする事も出来る相手じゃないぞ」

「何じゃと!?!」

源三が来牙に詰め寄るが……。

「……………うるさい」

「ん? おお絵梨、漸く喋ったのう。ワシは心配しておったのじゃよ」

絵梨が喋りだしたので源三は絵梨に近づぐ。

「何があつたのじゃ絵梨? 悩みならワシに相談を……………」

「……………うるさい」

「へ? い…今、何と言つたのじゃ?」

「……………うるさいって言うのが分からないの!?!???)  
ドカツ! バキッ! ドゴッ! ゴスッ!」

「ウギヤアアアア~~~~!!~!!~!!~!!~!!~!!~!!」

「……………相当ストレスが溜まつてるな」

爆発した絵梨は近づいた源三をぶっ飛ばして憂さ晴らしをすると、源三はボコボコにやられて気絶し、来牙は絵梨の容赦ない攻撃に引き気味になる。

絵梨がこうなっている原因は来牙と別々に寝ているからである。何



時も来牙と一緒に寝ている絵梨であるが、一昨日の夜に来牙が別々に寝ようと言われたので仕方なく一人で寝たのだが、来牙と一緒に寝る事に完全に慣れてしまった絵梨は寂しい夜を過ごしていたのであった。

そんなこんなで来牙の肌が恋しくなった絵梨が来牙の部屋に行こうと何度も考えたが、来牙との約束を破ってはいけないと自身を戒めていた。来牙も必死に耐えているのだと。

と言うのが2日続いたので、絵梨のストレスが最高潮に達していたのである。

「ハアッ！ ハアッ！ ハアッ！ ハアッ！ ハアッ！」

「（ピクッ…ピクッ…ピクッ…）」

「ハアッ！ ハアッ！ ……あれ？ あたし何をしてたの？」

源三が虫の息状態になった所で漸く元の状態に戻った絵梨は記憶が無いみたいだ。

「お前が爺さんをぶっ飛ばしてたんだよ」

「え？ ……お…お父さん！？ 大丈夫！？」

「…絵梨が…絵梨が…（泣）」

源三を介抱している絵梨であったが、殴られたショックのためか源三は涙を流している。

「絵梨、お爺さんを殴っても構わないけど、せめて朝食を終わらせ  
てからにしてくれないかい？」

「お……お母さん……」

「……………絵梨の言ったとおりだったな。婆ちゃん、本当に考え  
ている事が旅人さんに似てきてるぞ」

「そうかい？ アタシは素直に思った事を言っただがねえ」

「……………」

お婆さんの発言に来牙と絵梨が無言になった。

来牙×絵梨7 一週間の禁欲生活？

私が来牙に禁欲の暗示をかけて6日後の続き……。

「ね…ねえ来牙君……」

「ん？」

朝食を食べ終えた来牙は学校に行こうとするが玄関前で絵梨に声を掛けられる。

「どうした？」

「あ…あのさあ……今夜の事なんだけどお……」

「言っただろ？ 暗示が解除されるまでは別々で寝るって」

「うっつ！」

絵梨が今夜は一緒に寝ようと言うとする前に、来牙は即座にダメ出しをする。

「明日の夜になったら俺に掛けられている暗示が解除されるんだから、あと1日辛抱しろ」

「で…でも、来牙君だって一人寝は寂しかったでしょ？」

「否定はしないが、絵梨と一緒に寝る前の状態に戻っただけだ。そう考えただけで、そこまで寂しくは無かったよ」

「!!!!(ガーン!)そ…それって……あたしと一緒に寝なくても平気だったって事?」

「いや、何もそこまで言っていないんだが……」

ショックを受けた絵梨に来牙は少々言い過ぎたかと思い言い直そうとしたが……。

「うづうづ……来牙君のバカ!!(ダッ!)」

絵梨は部屋に戻った。

「……………寂しくないと言っただけなのに……そんなにショックな事なのか?」

オーバー気味な絵梨に呆れながらも来牙は家を出て学校へと向かった。

そして昼過ぎ……。

「うづうづ……来牙君のバカバカバカ……」

あれから絵梨は部屋に戻ってあの後からベッドに入って不貞寝していた。

そして目が覚めると、此処にいない来牙に悪態をついている。

因みに今日はバイトがある日であったが、また店長に頼んで休みを貰っていた。最初はこれ以上は休めないかと思った絵梨であったが、店長が休んでも構わないと言われた事に驚いた。店長もこの頃、絵梨が休日の最中に何度も急な呼び出しをしているから申し訳ない気持ちになっていたので、せめてもの罪滅ぼしであったのだろう。

と言う訳で店長が絵梨に前もって連絡してくれば休んでも構わないと言われたので、絵梨はお言葉に甘える事にしたのだ。

しかしバイトを休んでいる絵梨は……。

「今日が最後とは言え、また来牙君と別々で寝るなんて……………もう耐えられないよお……………」

ベッドで横になりながら来牙と一緒に寝れない事に愚痴っていた。周りが聞けば実に下らないと思われるだろうが、絵梨にとっては重大な事だ。

ただでさえエッチが出来ない状況なのに、大好きな来牙と一緒に寝れない事はエッチが出来ない以上の拷問である。

「……………今日は来牙君に無理を頼んで一緒に寝て貰おうかな？」

そこまで来牙は鬼では無いだろうと思っている時……………。

ガチャッ！

「絵梨、何時まで寝てるんだい？」

「お……お母さん……」

お婆さんが絵梨の部屋に入ってきた。

「来牙と何があったかは知らないけど、取り敢えず起きなさい」

「……………（ムクツ）」

「頼むからお爺さんみたいな行動はしないでくれ」

「あ……あはは……お父さんはまだ寝てるの？」

「絵梨に殴られたのが相当ショックみたいで、今でも涙を流しながら寝込んでいるよ」

「……………（お父さん、ゴメンなさい）」

絵梨は源三をボコボコにした事に大変申し訳ない気持ちになっていたが……。

「絵梨が気に病む事じゃないよ、機嫌の悪い絵梨に不用意に話しかけてセクハラをするお爺さんが悪いんだから」

「……………」

お婆さんの容赦無い言葉に無言となる。

「それはそうと絵梨、この後は何か予定はあるのかい？」

「別に何も無いけど……」

「そうかい。だったら今からアタシと一緒に出掛けないかい？」

「え？」

お婆さんの提案に絵梨はキョトンとする。

「久々に親子水入らずで出掛けようかと思ってね」

「で……でも……」

「なんだい、年老いた母親のアタシと一緒に出掛けるのは嫌かい？」

「そんな事無いよ。お母さんと一緒に出掛けるのはホントに久々だからつい……」

「……まあいいさ、じゃあ早く準備しな。アタシは玄関で待つてるから（ガチャッ…バタンッ）」

お婆さんは準備をする為に絵梨の部屋を出た。

「お母さんとお出掛けかあ……たまにはいいかも」

そして絵梨はベッドから離れて出かける準備をする。

.....  
家から出た絵梨とお婆さんは商店街にいた。

「ねえお母さん、どうして急にあたしと出掛けようなんて言ったの？」

「お爺さんの囁り泣きを聞くのが、いい加減ウンザリしてたんだよ」

「..... だったらあたしと一緒に掛けなくても.....」

「いいのかい？ もしあのまま絵梨が寝ていたら、お爺さんが部屋に忍び込んで襲ってたかもしれないんだよ？」

「.....」

お婆さんの言い分に絵梨は一緒に出かけて良かったと内心思っていた。

「今日は絵梨がいるから、材料を多めに買った方がいいね」

「..... お母さん、あたしを荷物持ちにさせるつもりで誘ったの？」

「いいじゃないか。いつも一人で買い物しているアタシが重い荷物を持って家に帰ってるんだから」



「……………」

「偶にはアタシに楽をさせてくれないかねえ」

「……………ハアツ……………しょうがないなあ」

お婆さんをジト目で見ていた絵梨であったが、お婆さんに簡単に切り返されたのでここは素直に従う事にした。

「買い物をする前に何処かで腹ごしらえでもしようかねえ」

「それじゃあ……………あの店で食べる？」

絵梨がファーストフード店を指すと……………。

「アタシはどうもああ言うのは苦手だねえ」

「じゃあ何処が良いの？ この近くにはあんまりレストランとか見掛けないけど……………」

お婆さんが嫌がっていたので、絵梨は周りを見ていたが和食店やレストランが見当たらなかった。

と、そんな時……………。

『おや、お婆さんと絵梨じゃないですか』

「あら旅人さん」

「……………」

私とばったり会った。

お婆さんは私を見ても何とも無かったが、絵梨は憎いと言つような目で見ている。

『こんな所で会うなんて奇遇ですねえ』

「それはアタシにも言える事ですよ」

『確かに。で、今日はどうしたんですか？ 絵梨と一緒に出掛けていますけど』

「今日は絵梨と一緒に買い物しようかと」

『ほほう、絵梨を荷物持ちにさせる気で？』

「よく分かりましたね」

『いつも一人で買い物をしている貴方が絵梨と一緒になのは、荷物持ちで連れて来たんだな』と思って』

「それはそれは。けど買い物の前に何処かで腹ごしらえをしようかと……」

私とお婆さんが世間話をしていると絵梨が私に近づいて来る。

「ねえ旅人さん、ちょっとお話があるんだけど」

『ん？ おお、絵梨。どうした？』

「お母さんの前で話せる内容じゃないから、場所を変えて（ボソボソ）」

『……………いいだろう。お婆さん、申し訳ありませんが絵梨をお借りしますね』

「ええ、いいですけど」

『では』

私と絵梨はお婆さんから離れて近くの路地裏で話し始める。

『それで？ 私に話しとは何だ？』

「聞かなくても分かるでしょ？」

『ハツハツハツハツハ、その様子だと相当ストレスが溜まっているみたいだねえ』

「誰の所為でこんな事になったと思ってるの!？」

私が笑いながら言うと絵梨は憤慨する。

『元はと言えば、君と来牙がエッチにのめり込み過ぎたのが原因だ』

ろづが』

「だからって!!」

『明日になれば来牙と好きなだけ出来るんだから、それまで待つてろ』

「……………待てないよ」

『ん?』

「明日までなんか待てないよ!!」

絵梨が爆発したかのように私に向かって叫ぶ。

『何故だ? 後1日我慢して翌日の夜には……………』

「それが嫌なの!!」

『はあ?』

絵梨の言ってる事がよく分からない私である。

『絵梨、何が嫌なんだ?』

「寝るのが嫌なの!!」

『……………何故?』

「この2日、来牙君と別々で寝ていたんだけど、あたしにとっては

それが苦痛で……」

『来牙が眠っている最中にアレを触っていたから、別々で寝るように言われたからだろ？ 原因を作ったのは絵梨じゃないか。自業自得だろう』

「それは分かっているけど……って何で知ってるの!？」

私が絵梨がやっていた行動を言うと、絵梨が途中からどうして知っているのかと問う。

『後から言うつもりだったけど、君達の行動はリアルタイムで監視していたんだよ』

「なっ!？ 1週間後に来てから調べるんじゃないの!？」

『2日程は監視しなかったけど、そろそろ絵梨が何かを仕出かすと思っただから……にしても今朝は凄かったね、ストレスを発散させる為に爺をボッコボコしてたんだから』

「うっつっ!?!」

絵梨は今朝の事を思い出しながら源三に申し訳ない気持ちになった。

『まあ爺にも原因があったから自業自得だけど』

「と…とにかく! あたしと来牙君はもう充分耐えたんだから、来牙君に掛けている暗示を解除してよ!！」

『ダメだ』

「これ以上はもう耐えられないよ!~!」

『.....』

駄々を捏ねる絵梨に私は無言となり.....。

「だから今日は何が何でも来牙君と（パンツ!）!~!~!」

絵梨が言っている途中に頬を叩いた。

「何するのよ!~?」

『絵梨.....いい加減にしろ』

「!~!~!」

私がドスの利いた声を出すと絵梨は怯える顔になった。

来牙×絵梨7 一週間の禁欲生活 ?

初めて私に頬を叩かれた絵梨は……。

「（こ…怖い…旅人さんの目が…）」

私に睨まれる事の方が恐ろしかったみたいだ。

『絵梨、お前は……と、その前に少しの間だけ時間を止めるか（パチンツ！）』

絵梨に説教をしようと思った私であったが、少々長くなりそうだなと思ったので時間を止める為に指を鳴らした。

そして私が指を鳴らした瞬間に、辺りの物や人が全て止まった。

『これでよしと。悪かったね、話の途中で……』

「……………」

絵梨は私が時間を止めた事に大して驚かなかった。

『では続けよう。絵梨、私がどうしてお前達に禁欲生活をしろと言ったのが理解していないみたいだな』

「……………」

『私がお前と来牙に意地悪をする為にやったと思っていたのか？』

「……………そうとしか思えないよ」

漸く絵梨が言葉を発した。

『……………ハアツ……………来牙はもう既に気付いたのに、お前はまだ気付かないとは……………』

「……………どう言う事？」

『やれやれ。どうやらフラストレーションが溜まり過ぎてて、私がやった事についての意味をあんまり考えていなかったみたいだな』

「だから！ どうしてあたしと来牙君にこんな事をしたのよ！？」

私の言い方が癪に障った絵梨は乱暴な口調で私に聞く。

『本当は自分で気付いて欲しかったけど……………まあいいか。今回、私がお前達に禁欲生活を課した目的は、お前達の行動を自粛するためにやったんだ』

「自粛？」

『何故そんな事をしなければいけないと言う顔をしているな』

「当たり前よ！」

『……………余り言いたくは無かったけど……………来牙と絵梨は病気になるにかけているんだ』

「……………」



私が病気と言うと絵梨は驚愕の顔をする。

「あ…あたしと来牙君は別に体は何とも……」

『体の障害じゃない……心の方だ』

「心？」

『ああ、お前達は軽い性行為依存症になりかけている。現にお前達はちよつとでも我慢出来なくなると、すぐにエッチしてしまうだろうっ。』

「……………」

それは絵梨にも心当たりがあった。私が来牙に暗示を掛けられる前の数週間は1日も欠かさずエッチしており、お互い少しでも欲情した場合ではすぐにヤツていた。

思い出した絵梨は先程まで怒っていた表情が嘘のように無くなり、シユンとした表情になる。

『だから私はそんなお前達を見て、どうにかしなければいけないと思っただ』

「……………ごめんなさい、旅人さんがあたし達の事を思っただ事だと気付かなくて……」

『分かってくれたなら、私もこれ以上何も言う気は無い』

「……………」  
謝る絵梨を見た私は念の為に絵梨の頭の中を読んでみたが、本当に心から申し訳ない気持ちになっていた。

「あたし……………来牙君と暫くエツチするのを止める……………」

『おいおい、私は何もそこまでしろとは言っていない。ただし控えろと言ってるんだ』

「でもあたし、そうでもしないと何度でも来牙君を求めちゃう。そして来牙君もあたしを……………」

『その辺りの話は私じゃなくて来牙と相談してくれ。心配するな、来牙はもう既に2〜3日を置いてエツチするって考えているみたいだから。ああそれと……………(スッ)』

「? ………………」

私が右手で叩いた絵梨の頬を触れると……………。

『さつきは叩いてすまなかった。痛かったろ?』

「……………」

『ゴメンな(ギョウ)』

「!?!?!」

私はそのまま絵梨を抱き締めた。

「……………」

『絵梨?』

「……………旅人さん、セクハラだよ?」

『え? ……………わ…悪い!! (バツ) 綾ちゃんにしていた事をつい……………』

絵梨にセクハラと言われた私はすぐに離れて絵梨に謝る。

「綾ちゃんにいつもそんな事をしているの?」

『いや、綾ちゃんに抱きつきながら謝ると、何故か急に大人しくなるんだよね。それも顔を真っ赤にして……………何でだろう?』

「……………(この人、綾ちゃんが旅人さんの事を好きな事に気付いていない?)」

絵梨は私の言った事に呆れながら無言となる。

『どうした絵梨? その呆れた視線は何だ?』

「……………旅人さん、綾ちゃんの事は好きですか?」

『そりゃあ好きだよ。友人として』

「……………(最後が余計だよ。綾ちゃんがどうして旅人さんに抱き付いているのかが分かったよ……………)」

私の鈍感ぶりに絵梨は綾が凄く気の毒だと思った。

そして綾が何時も私に抱き付いているのは、私の事を異性として好きだと言つ事の行動であつた為だと気付いた。

「（綾ちゃん頑張つて、あたし応援してるから）」

『絵梨、悟つた顔をしているけど何かあつたのか？』

「……………（ジロツ）」

『な…何だ？』

絵梨がいきなり睨んでくる事に私は怯んだ。

「あたしから一つ言いたい事があるんだけど……………」

『……………取り敢えず聞こう』

「……………旅人さんの鈍感」

『はあ？』

「旅人さん、もう話は終わりましたから時間を元に戻してね（スタスタ）」

『ちょ…ちょっと待て絵梨！ 私が鈍感とはどう言つ事だ！？（パチンツ！）』

絵梨は路地裏から出てお婆さんがいる所へ行き、私は絵梨を追いかけながら時間を戻すために指を鳴らす。

夜中、来牙が寝ようとする……。...

ガチャッ！

「来牙君……」

「絵梨か、どうした？」

絵梨が来牙の部屋に入ってきた。

「今日は来牙君と一緒に寝ようかと……」

「絵梨、俺の言った事をもう忘れたのか？ 今日までは……」

別々で寝るからダメだと言おうとした来牙であったが……。

「大丈夫、エッチな事はしないから」

「……………悪いがその言葉は信用出来ない、また我慢出来なくなつて俺のアレを触りそうな気がするからな」

絵梨があつさり言う事に少々気になったが、2日前の出来事を言つて一緒に寝ない様に説得する。

「もしあたしがそう言う事をしたら、旅人さんに日数を追加されるから?」

「そつだ。分かつてるなら……………」

「だったら追加しても構わないよ」

「……………何だと?」

絵梨の思わぬ言葉に来牙は意外な顔をする。

「絵梨、それは本気で言つてるのか?」

「勿論だよ」

「……………(ピュッ)」

「……………来牙君、何をしてるの?」

来牙が何かを確認する為に絵梨の額を触っている事に絵梨は疑問を抱く。

「熱でもあるのかと思ってな……」

「あたしは正常だよ」

「……………今日は何かあったのか？ 妙にスッキリした顔をして  
いるみたいだが」

「別に大した事は無いよ」

「……………そうか（何だ？ 絵梨は一体どうしたんだ？）」

来牙は明らかに変わった絵梨を見て更に分からなくなった。

「そんな事より来牙君、一緒に寝ちゃダメなの？ もしあたしが来  
牙君にエッチな事したら日数を追加されても構わないんだけど……」

「……………分かった、今日は一緒に寝よう」

「ホントに!?!?」

「ああ、但し……………」

「やっと来牙君と一緒に寝れる!!!(ギユウツ!)」

「お…おい絵梨!?!?」

絵梨は嬉しさの余り来牙に抱きつく。

「ああ〜久しぶりの来牙君の匂いだ〜」

「久しぶりって……たかが2日程度だろ？」

「それでもあたしにとっては久しぶりなんだよ〜」

「やれやれ……それじゃあ寝るか」

「うん」

来牙が電気を消してベッドに入ると絵梨も一緒に入る。

「しかし本当にどうしたんだ？ あの時とは大違いだぞ？」

「……まあ色々」

「何だ、教えてくれないのか？」

「黙秘します」

「……まあ言いたくないなら別に構わんが」

絵梨が変わったんなら聞く必要は無いかと思っただ来牙である。

「ねえ来牙君、明日は一杯エッチしようね？」

「そうだな」

「あたしが満足するまでずっと続けるからね」



「絵梨こそ、お前が嫌だと言っても俺は続けるからな」

「うわゝゝ来牙君のケダモノゝゝゝ」

「絵梨も似たようなもんだろ」

「かもね……………あゝゝ明日が楽しみだなゝゝ」

「俺もだ」

ベッドの中で談笑している来牙と絵梨は早く明日にならないかと心待ちにしている。

そして来牙と絵梨は眠ったのであった。

来牙×絵梨 7 一週間の禁欲生活 ? (後書き)

次回は久々のアツチです!!

ですので更新は向こうの方になりますのでお楽しみに!!!!

## 遊佐翔のお仕置き(前書き)

今回の話はマロさんの作品『バカとテストと優等生?』の第二百二十五話(第二百三十話であった番外編となっております)の第二百一  
そして翔が惨い事になっていきますのでご注意ください。

## 遊佐翔のお仕置き

鉄人に米俵を持たされておられるかのように担がれている翔はFクラスの隣にある空き教室まで行き……。

ガラッ！

「さあ着いたぞ遊佐。旅人！ 連れて来たぞ」

『ご苦労様です、西村先生』

「ってアンタかよ！？ 何で旅人さんが此処にいるんだよ！？」

鉄人は私に質問している翔を無視して床に放り投げる。

「（ドサッ！）うおっ！！ 痛えじゃねえか鉄人！！ もっと優しく扱えよ！！」

『フフフ……何時までその生意気な態度を取れるかが見物だよ』

「つつか旅人さん！！ アンタは俺様に何の用なんだよ！？」

翔の質問に……。

『西村先生、後は私の方でやっておきますので……』

「分かった。そいつには遠慮する必要は無いから思いっきりやって

おいてくれ（ガラツ……ピシャツ！）

『了解しました』

私は無視して、鉄人が空き教室を出るのを見送った。

「無視すんなよ!？」

『そう慌てるな翔、ちゃんと質問に答えてやるから』

切れ気味の翔に私は宥めながら本題に入る。

『では私が此処にいる理由だけ……お前にお仕置きをする為に来たんだよ』

「お仕置きって何だよ!？ 俺様はアンタに恨まれるような事はしていないだろ!？」

『確かに私は翔に恨みは無い。けどな、お前は今回のゲームで犯罪行為を犯しただろ?』

「!!! な…何の事だ？ 俺様は全く身に覚えが無いんだが……」

私の言った事に翔は急にさっきまでの勢いが無くなって、取り繕うかの様に言ってきた。

『ほう？ 身に覚えが無いねえ……』

「寧ろ俺様は被害者なんだぜ。絵梨には金的攻撃をされるわ、来牙には後頭部を叩かれるわで酷え目に遭っているんだから」

『ふう〜ん……………それじゃあ…(ゴソゴソ)……………コレは何かな?(ポイツー!)』

私が懐からある物を取り出し、翔に向かって投げると……………。

「ん? ……写真……………っておい!？」

その4枚の写真に写っているのは翔が工藤・優子・美咲、そして絵梨を襲っている場面であった。

『これでもまだ言い逃れが出来るのかな?』

「な…な…な……………何でアンタがコレを!？」

『さあ? 何故でしょうね〜? それより翔、相手から合意を得ていないのに、あんな事を仕出かすと……………俗に言うレイプって言うんだよ?』

「…………………………」

『人として最低な事を翔はやったんだよ? そこ分かってる?』

私が問い詰めると翔は言い逃れが出来無くなり無言となった。

『おやおや、今度はダンマリか。なら仕方ない、認めさせる為に自白をさせるか(スツ)』

私が指を鳴らそうとすると……………。

「……………だから……………ないだろ……………」

『ん？』

「別にこれは本編とは何の関係も無いんだからいいじゃねえか！  
どうせこの後に俺様達は記憶が無くなって、何も覚えていない  
だから！！」

『…………………………』

翔がいきなり開き直った事に今度は私が無言となった。

「だから俺様は記憶が無くなる前に楽しんだんだ！ 愛子や優子や、  
あの沢渡美咲だって俺様のした事をどうせ忘れるんだから俺様は…  
……………」

翔がやけくそに言っている最中……………。

「翔、アンタ随分と好き勝手な事を言ってくれるわね」

「翔君、今回ばかりは許さないよ」

「アンタ、覚悟は出来ているんでしょうね？（バチバチ！！）」

「……………は？」

被害者側の優子、工藤、美咲が翔に軽蔑の眼差しを向けている……………  
特に美咲はスタンガンを持って今でも翔に襲い掛かって行きそうな  
状態であるが。

『では御三方、開き直ったコイツを制裁しても宜しいですね?』

「「「当然!」「」」

『それじゃあ、これから制裁を始めますので補習室で待っていて下さいね（パチンツ!）』

私が指を鳴らすと被害者3人は姿を消した。

『では翔、覚悟はいいかい?』

「待て!! 何で補習室にいた筈の愛子達が此処にいたんだ!？」

『そんなの聞くまでも無いと思うけど……私の方で彼女達を此処に転送したんだ。お前がやった事に対して、どう思ったかを聞かせる為に、ね』

「汚ねえぞアンタ!! 俺様を嵌めやがったな!？ この卑怯者!」

『自分からベラベラと喋ったくせに……まあいい、それではお仕置きタイムだ（パチンツ!）』

私を卑怯者呼ばわりする翔に私は無視して指を鳴らすと……。

ボンツ!!

「うおっ!？ な、何だ!？」





「くそっ！！ とうなったら！！（バツ！！）」

翔は窓から出ようとしたが……。

『無論、窓にも私の方で開かなくしているし、防弾強化ガラスにもなっているから壊す事も出来ないよ』

「……………（ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！）」

私が言っても窓に体当たりをしている翔であった。

『往生際の悪い奴だな。お色気レンジャー、翔を捕まえる』

「……………はあ〜い（ガシッ！！）」

「や…止める〜！！！！！！」

ローズ達は私の指示で翔を捕まえると、翔は必死に暴れていた。

『さあローズ達、翔と好き放題しても構わんぞ それもとびつきりハードにな』

「待て！！ アンタには良心が無えのか！？ 俺様にこんなオカマ軍団を喰わせる事に何とも思わないのか！？」

『大丈夫大丈夫、これは本編とは関係無い。どうせ記憶から消去されるんだから』

「いくら記憶がなくなっても嫌だ！！ こんなオカマ軍団に無理矢



そして10分後……。

『これはこれは……』

私が見ているその先には……。

「（ズンズン！）ああ〜翔ちゃん。貴方の穴の締りが凄く気持ちいいわあ〜」

ローズは全裸になった翔を四つん這いにさせて凄い事をしており……。

「いいわあ〜翔ちゃん。もっと舐めてえ〜（グイグイ！）」

そんな四つん這いになった翔をマーガレットは翔の頭を掴んで自身の股間に顔を当てさせており……。

「ペロペロ……翔ちゃんの汗が美味しいわあ……ペロペロ……」

チューリップは翔の背中から出ている汗を舐め取っており……

「（ニギニギ）……ああ翔ちゃん……ワタシもっ……イクー！」

ラベンダーは大きなアレを握って翔の横顔に目掛け、欲望をぶちまけた。

「……………」

言うまでも無いが翔の意識は既に無くなっている。

『…………… 凄い光景だな』

私はそれしか言う事が出来なかった。

「（ズンズン！！）か…翔ちゃん…ワタシもうイキそうよ」

「（グイグイ！！）ろ…ローズ様…ワタシも……………」

『げ……………』

「…い…イク！…！」

ローズは翔の尻の中に、チューリップは翔の口の中に欲望をぶちまけた。

そして更に30分後……………。

「「「はあ〜〜気持ちよかったわあ〜」

」……………」

ローズ達が行為を終えた翔を見ると……。

「……………（ピクッ……………ピクッ……………」

全身がローズ達の欲望塗れになっており、尻や口からも欲望が出ていた。

「「「感謝しますわ旅人様あ〜」

」……………はいはい。それじゃあまた今度呼ぶから（パチンッ！）」

「「「「楽しみにしてますわあ〜（ピシユッ！）」

私が指を鳴らすと、ローズ達の姿が消えた。

「……………さて、さっきの行為をビデオカメラに撮った事だし、帰つてすぐにDVDにコピーしよ。と、その前に（パチンッ！）」

帰る前に私が指を鳴らすと、欲望塗れになっていた翔が元の状態に戻った。

『では翔、記憶が無くなるまでローズ達との行為を最後まで思い浮かべている（ピシユッ！）」

そして私は姿を消した。

明久×秀吉3（前書き）

久々の明久と秀吉のカップリング話です!!  
そして何気に100話達成です。  
それではどうぞ!!

### 明久×秀吉3

とある平日の夕方頃……。

「ふうっ、今日の練習はきつかったのう……」

部活を終えた秀吉が一人で帰宅中であつた。

が……。

「この所は部活ばかりで明久と一緒に過ごす日が余り無くて寂しいのう……」

『だったら偶には部活を休んで明久と過ごせばいいじゃないか』

「そうは言っても、明久が自分より大好きな演劇を優先した方が良  
いと言われて……」

『それで渋々と従っているって事？』

「確かに演劇はワシの生き甲斐なのじゃが、ワシとしては……っ  
て何故お主がワシの隣にいるのじゃ!？」

漸く秀吉は私と会話している事に気付いた。

『何だ、てつきり私に気付いて会話しているかと思っていたが……』

「旅人殿はどうして前触れもなく現れるのじゃ!？」



『いや、私が神出鬼没なのは今更な事でしょ？』

「……………そうじゃな。お主はそう言う男だと言う事を忘れておっ  
たぞい」

『思い出してくれて何よりだ』

「それで、今日はワシに何の用じゃ？」

私の性格を思い出した秀吉は先程の質問を止めて用件を聞き出す。

『明久と一緒に過ごす日があんまり無くて寂しい思いをしている秀  
吉に食事を誘いに』

「……………前置きが余計じゃ」

『でも事実でしょ？』

「むっっ……………」

私の質問に言い返すことが出来ない秀吉であった。

『で、返事はどうするっ？』

「折角の誘いじゃが、ワシは自分の家で食べるから結構じゃ」

『つれないねえ』

「そう言った誘いは前もって言って欲しいのじゃ。そうであれば行  
ってるからのっ」

『では次からはそうしましょう』

「用はそれだけかの？ じゃったらワシはこれで失礼するのじゃ」

秀吉は帰ろうとするが……。

『残念だねえ、明久が腕を奮った料理を食べないとは……』

「！！！！（ピタッ！）」

私が態とらしく言うと足を止めた。

『（食いついた）明久の料理は凄く美味しいんだが……仕方ない、秀吉の分は私が全部食べるとするか（スタスタ）』

と、私が明久の家に向かおうとするが……。

『さくて（クイツ）……どうしたの秀吉？ 帰るんじゃないの？』

「あ……いや……その……」

秀吉が私の腕を掴んだので、私は秀吉を見ると顔が赤くなりながら背けていた。

「か……考え直して見たのじゃが……やはりワシも……」

『ワシも？ 何？』

「（／／／／／／／／／／／／）……………ワシも相伴させて貰おうかのう」

『あれ？ さっきまではキツパリと断ったのに、明久の事となるとコロツと変わるんだね』

「（／／／／／／／／／／／／）……………」

『そつだよねえ。久々の恋人の手料理は食べたいよねえ』

「か…からかうでない！（／／／／／／／／／／／／）」

秀吉は頬を赤らめる。

『明久の手料理を食べた秀吉は、自分から服を脱いで“ワシがお主のデザートじゃ、思う存分食べてくれ”と。そして明久はそんな秀吉を見て押し倒し……………』

「旅人殿！！！！ それ以上言うと成敗するのじゃ！！！！（／／／／／／／／／／／／）」

『あら失礼 でもそう考えているんじゃないの？』

「……………！！！！（／／／／／／／／／／／／）」

『あいら、ちょっとからかい過ぎたか……………』

秀吉をからかって楽しんでいた私であったが、秀吉の顔が茹蛸みたいに真っ赤だったので止める事にした。

「お…お……………お主は……………！！！！（ポカポカ）」

『スマンスマン、ちょっと調子に乗りすぎた。だからこの通り……』  
秀吉の弱い攻撃を受けながら謝っている私であったが……。

「おいテメエ！ 木下に何してやがる！！」

「！！！！！」

『ん？ お前は確か……』

いきなり怒鳴り声が聞こえたから、声が聞こえた方を見ると常夏コ  
ンビの常村がいた。

『確か……変態モヒカン！』

「常村だ！！」

『では秀吉に告白紛いの詩を送った変態！！』

「……………」

『おい！ そこは否定しないのか！？』

急に無言になりながら顔を赤らめる常村に私は突っ込む。

「そ…そんな事はどうでもいい！ 木下からさっさと離れる！！」

「ひいっ！！」

『おい秀吉、何故私の後ろに隠れる?』

「そう言われても……（ギュウツ!）」

秀吉は私の後ろに隠れながら離れたくないと言わんばかりに抱きついてくる。

「テメエ! 木下に抱き締められてんじゃねえ!!!」

『私にそんな事言われたって………つてか秀吉、こつ言つ事は恋人の明久にしなさい』

「そんな事より早くあの男を何とかして欲しいのじゃ!!!」

未だに私の後ろに隠れている秀吉に言っていると……。

「……………こ…こ…恋人だと?」

常村は何か聞き間違えたかの様な顔をする。

「おいアンタ……俺の聞き間違いか? 今さっき恋人がどうか言つてなかったか?」

『それがどうした? 秀吉には吉井明久という大事な恋人がいるんだが……』

「た…旅人殿! 何も此処で言わなくても……」

「!……!……!（ピシッ!）」

石化したかのように常村は固まった。

『と言う訳で常村さん。秀吉はもう売約済みですのでお引取り下さい』

「ワシを物扱いしないで貰いたいのじゃが……」

『こう言ったら相手方も納得するかと思って。ってか秀吉はもう既に体と心は明久に捧げてるでしょ？』

「（／／／／／／／／／／／／……お……お主はまた……）」

私が秀吉をまたからかっている時に……。

「……………認めねえ」

『「ん？」』

「木下が吉井と付き合っているなんて誰が認めるかぁ……！！！！！！！！」

先程まで石化状態になっていた常村が復活して、デカイ叫び声を出した。

「あんなバカな吉井なんかより俺の方がいいに決まってる！！！！」

『アンタは秀吉に気味悪がられているのに、どうしてそんな自信を持って言えるのが分かんらん』

「木下！俺の書いた詩をもう一回聞いてくれれば分かってくれ



「え？ …… あ！（バツ！）」

『もし此処に明久がいたら、私は明久に異端者扱いされていたかもな』

「あ…明久はそんな小さい男では無いのじゃ！！」

『君の場合、私が明久とじゃれあっていたら嫉妬に狂って私に襲い掛かってきたけど？』

「……………早く明久の家に行くのじゃ（スタスタ）」

私が出つ込むと秀吉は聞かなかったかのように明久の家へと向かった。

『やれやれ、都合の悪い時だけは聞き流すんだから。おい待て秀吉！ 私を置いて行くなよ』

そして先に行った秀吉を追い掛ける為に私も明久の家へ向かうのであった。

おまけ

私と秀吉が明久の家に向かっている最中……。



『所で秀吉、家に連絡しなくていいのか？』

「あ…………忘れておつたのじゃ……………」

私が秀吉に家の事を言つと、今頃思い出す秀吉であった。

『……………本当に秀吉は恋人の明久の事となると、どうしてもよくなるんだね？』

「（／／／／／／／／／／／／／／／／）」

『まあいいや、じゃあ優子にでも連絡して友達の家で食べてくるからいらないうって言いな』

「……………ワシは携帯を持っておらんから」

『まだ携帯持ってなかったの？』

「あまり必要が無くてのう」

『人の事をどうこう言つつもりは無いけど、持った方が良いんじゃない？ 仕方ない、私が代わりに連絡しよう（ゴソゴソ）』

携帯を持っていない秀吉に代わって、私が優子に連絡する事にした。

『えっと優子は（ピッ……………ピッ……………トゥルルル……………トゥルルル……………プッッ！）』

《もしもし》

『やあ木下さん』

《旅人さん、何か用かしら？ もうすぐ夕飯なんだけど……》

優子は用件を早く言って欲しいみたいだ。

『実はね……』

私が優子に用件を言うと……。

《……ふん、秀吉が吉井君の家で夕飯をねえ。いいわねえ、恋人がいる秀吉は……》

優子は何だか羨ましそうだった。

『だったら木下さんは来牙の家に行って、料理を奮えばいいじゃない。大好きな来牙の為にね』

《……！！！！ な……何言ってるのよ！？ あ……あたしと宮永君はまだそんな関係じゃ……》

『ほう？ エッチした後にあんな大告白をして？』

《……！！！！！！！！ と……とにかく秀吉が夕飯をいらないうって事はお母さんに言うておくから！！（ブツツ……）》

『（ツ……ツ……）……あらら、切れちゃった』

「た……旅人殿、さっきの話は本当かろう？ 姉上が来牙と……」

私が優子との通話が終わると秀吉が通話中に話していた事を聞いてくる。

『あれ？ 秀吉は知らなかったの？』

「この間、姉上が顔を真っ赤になりながら家に帰って来てすぐに部屋に閉じ籠ってたのじゃ」

『ほほう〜？』

「何があつたのかは知らなかったのじゃが、まさか姉上が来牙とそんな事をしておつたとはのう……」

『秀吉、君が優子にそんな事を言ったらタコがイカにされるから止めときなよ？』

「分かっておる、ワシとて命は惜しいのじゃ。」

私の忠告に秀吉は優子の危険性を理解しており下手な事は言わないみたいだ。

「もし姉上が来牙と付き合う事になったら、来牙の事を義兄上と呼ぶなければいけないみたいじゃの……」

『おいおい、発展しすぎだつての』

「そうじゃ旅人殿、お主が姉上と来牙を恋人同士にさせてくれないかのう？」

『……………はあっ！？』

秀吉の提案に私は大きく戸惑った。

『な…何で私を？』

「旅人殿だつたら簡単じゃろう？」

『いや…それは本人同士が決める事で……』

「何を言っておるのじゃ。雄二と霧島を婚約関係にさせておいて今更……」

『そ…それを言われると……（出来れば私もそうしてあげたいけど……絵梨がなあ……）』

私は絵梨が来牙と優子を恋人同士にさせない為に絶対阻止するだろ  
うと容易に予想が出来たので、イエスと答えることが出来なかった。

「旅人殿、ここは姉上の弟として頼むのじゃ」

『あ…いや……それは……そのう……（どうしよう……そんな事し  
たら私は絶対、絵梨に殺される）』

明久の家に着くまでに秀吉はずっと私に優子と来牙を恋人同士にし  
てくれと頼まれ続けた。

明久×秀吉3（後書き）

すいません、カップリングなのに明久が出ませんでした！！

明久×秀吉3 ?

秀吉が私に来牙と優子を恋人同士にしてくれと頼まれている最中に、明久の家に着いた。

『では……（ガチャツ！）』

「旅人殿、ワシの話はまだ……」

『明久〜！ 秀吉を連れてきたぞ〜！』

私は秀吉を無視して奥にいる明久に声を掛ける。

「待ってましたよ旅人さん。それと秀吉、いらっしやい」

「う…うむ……」

『（明久が出た途端、急に大人しくなったな）』

明久の登場に秀吉は私に話し掛けるのを止めて、明久の方に集中した。

「さあ二人とも、上がって上がって」

『ほいほい……』

「お…お邪魔するのじゃ」

私がリビングに入ったのを確認した明久は……。

「秀吉……」

「ん？ ……（ギユウツ！）な…何をするのじゃ明久！？」

秀吉の腕を掴んですぐに抱き締めた。

「ゴメン、秀吉とこうするのが凄く久しぶりだったから……」

「あ…明久……」

「もしかして嫌だった？ だったらすぐに離れるけど（スツ）」

「そ…そんな事無いのじゃ。ワシだって明久とこうしたかったのじや（ギユウツ！）」

明久と離れたくないと言わんばかりに秀吉は抱き締める。

「じゃあ今度は…久しぶりにキスしてもいいかな？」

「……ワシが明久のキスを拒むと思っておるのか？」

「聞いただけだよ」

「……聞かなくてもワシの答えはこうじゃ……ん」

秀吉は目を瞑って無防備になりながら明久からのキスを待った。

「……………（スツ）」

「（あっ）」

明久は秀吉の顎をクイツと持ち上げてキスしようとする、秀吉はそっと目を閉じる。

明久と秀吉の唇が合わせようとする時……。

『あのさ〜お二人さん。イチャ付くのは構わないんだが、それは夕飯を済ませた後にしてくれないか？』

「「！！！」」

未だにリビングに入ってこない明久と秀吉に声を掛ける私に、2人は驚いてキスを止めた。

『それとも明久、秀吉を夕食前に食べるつもりかい？』

「な…何言ってますか!？」

「そっじゃ! それにワシは夕食ではなくてデザート……あ……」

「ひ…秀吉?」

『お前……やっぱりそう考えていたんだな』

「……………（//////////……………）」

明久は呆然とし、私はまさか秀吉が本当にそんな事を考えていたとは予想外であった。凄い事を口走った秀吉はただただ顔を真っ赤に



していた。

20分後……。

何とか秀吉を宥めた私と明久はやっとの事で夕飯を食べ始めた。

『(モグモグ……)……うん 本当に明久の料理は美味しいなあ』

「(モグモグ……)……お…美味しいのう……」

「そう言ってくれて何よりだよ」

「そう言えば明久の姉上はどうしたのじゃ？ 姿が見当たらんのじやが……」

『「」……「」』

秀吉が玲の事を話題にすると、私と明久は無言になる。

「どうしたのじゃ？」

「いや……姉さんは…そのう……」

『私の方で明日の昼までは家に帰って来ないように暗示を掛けた』

「……………何故そんな事をしたのじゃ？」

『……………あの阿呆はな』

私が秀吉に玲を退場させた理由を話す……………。

……………

私が秀吉と会う前の事……………。

『カタカタ  
なあ明久』

「何ですか？（カタカタ）」

学校で授業を終えた明久が帰宅中の時に私とバッタリ会ったので、明久は久々に私とゲーム対決をしようと私を家に招き入れた。

因みにやっているゲームは「ストーリー○ファ○ター？」であった。私が豪鬼を使い、明久はリュウを使っている。

『この頃、秀吉と二人つきりで過ごしていないでしょ？（カタカタ）』

」

「!!! い…いきなり何言ってるんですか!?(カタカタ)」

『私が調べた情報だと、休日でも秀吉に会ってないし……(カタカタ)』

「……………何処で知ったかは知りませんが、僕は秀吉に大好きな演劇を優先させているんです(カタカタ)」

会話をしながらも私と明久は手を休めずにキャラクターを操って対戦している。

『けど秀吉はこの頃、明久に構って貰えなくて寂しがつているぞ?(カタカタ)』

「寂しがつてるって……僕と秀吉は何時も学校で会っていますよ)カタカタ)」

『そうじゃない、明久と二人きりで過ごせなくて寂しがつているんだ(カタカタ)』

「そんな事言われても、もし学校で秀吉とイチャ付いたりしたら須川君達が……(カタカタ)」

『あの大バカ共には本当に呆れるよねえ)。ってかお前も異端審問会の一人じゃなかったか?(カタカタ)』

「うっ……………(カタカタ)」

明久は痛い所を突かれたかの様な顔をする。

『恋人の秀吉がいるくせに、まだ脱会してなかったのか？（カタカタ）』

「だって……脱会なんかしたら須川君達に絶対リンチされますよ？裏切り者には死を！！ って（カタカタ）」

『……異端審問会の頭の中では“脱会”女が出来た” って方程式でも成り立っているのか？（カタカタ）』

「その通りです（カタカタ）」

『……………（カタカタ）』

私はゲームをやっているながらも、異端審問会のバカ共に呆れていた。

『あのバカ共は自分達のやっている事が女を遠ざけているって事に全く気付いていないんだよな？（カタカタ）』

「まあそうでしょうね（カタカタ）」

『……二度と女に興味を持たせない為に、またローズをけしかけて男好きにさせてやるのかな？（カタカタ）』

「それだけは勘弁して下さい！！」

またあの時（“Fクラス成敗物語”参照）のおぞましい光景を思い出した明久は、手を止めて私を見ながら止めてくれと言った。

『隙あり!! (カタカタ)』

「ああっ!!! しまった!!!」

私が豪鬼のウルトラコンボ “真・瞬獄殺” を使ってリュウを倒した。

『おっしゃあ!! 私勝ち!!!』

「ああ……負けた。あともうちょっとで倒せたのに……」

『最後の最後まで隙を見せちゃいけないよ』

「つてか旅人さんが恐ろしい事を言うからじゃないですか!?!」

『ハッハッハッハッハ!!!』

明久の文句を私は笑い飛ばした。

「旅人さん! もう一回勝負です!!!」

『ハッハッハッハ! 何度でも来い!!!』

また対戦しようとした私と明久であったが……。

「アキくん、そろそろ30分過ぎますよ」

「え? ……姉さん!?!」

『おや?』

何時の間にか玲が家におり、明久にゲームを中止しろと言ってきた。

「ね…姉さん、今日は一日中いない筈じゃ無かったの？」

「早く終えて帰ってきたのです。それよりアキくん、それ以上ゲームをしてはいけませんよ」

「あ…いや…でも」

『明久、ここは従っとけ。30分過ぎたら何か不味いんだろ？』

「……………そうだった。ゴメン旅人さん、また今度で……………」

30分過ぎたら玲にキスをされるのを思い出した明久は、私に謝りながらゲーム機の電源を切って片付けた。

『それにしても久しぶりですねえ、玲さん。貴方と会うのは……………』

「？ 貴方とは初対面の筈ですが？」

「（旅人さん！ 姉さんに暗示を掛けたのを忘れたの！？）」

『（あ！）……………これは失礼しました。確かに私と貴方は初対面でしたね』

明久のアイコンタクトで玲に記憶消去の暗示を掛けていたのを思い出した私は謝罪しながら挨拶をする。

『初めまして。私は“さすらいの旅人”です、以後お見知りおきを』

「初めまして。吉井明久の妻の玲です」

「って違うでしょ!!」

『アンタは姉だろうが!?!』

明久と私は即座に玲に突っ込む。

「すみません、アキくん。つい流れで」

「嘘だ! 今の会話で妻を名乗るような流れはどこにも存在しない  
!?!」

『普通に姉と名乗れんのか!?!』

「このやり取り前にもやったよね!?!」

玲に姫路の両親が来た時の事を思い出させる明久であったが……。

「ではアキくんの妻だと証明する為に今から不純異性交遊をしなければいけませんね」

「違うでしょ!?!」

『待てコラ!! 妻の証明以前にアンタは実の弟にそんな事するのか!?! 人として間違ってるだろ!! (てかこのやり取り前にもやったよな!?!)』

私は始めて玲に会った事を思い出しながら玲に突っ込み続ける。

「愛し合っている姉さんとアキくん、血の繋がりがりなんて関係ありません。ではアキくん、今から姉さんの部屋で……」

「待つて！！ 確かに僕は姉さんが好きだけど愛し合っていないよ！！」

『止めんか！！！ アンタは世間を敵に回す事をやろうとしているんだぞ！？（来牙と絵梨は既になってるけど！）』

明久の腕を掴んで部屋に連れ込もうとしている玲を必死に止めようとしている私であるが……。

「世間が何を言おうと関係ありません。姉さんとアキくんは愛し合っているんです」

『アンタはそれでも、明久は愛してないって言うてるだろうが！！！！』

「姉さん！！ 何処をどう間違えたのかは分からないけど取り敢えず僕の腕を離して！！ 僕は姉さんと不純異性交遊をする気は全然無いから！！！！」

「いいえ、そんな事ありません。アキくんは姉さんの事を愛しているのです。ですから今から子作りを……」

全く話を聞こうともしない玲であった。

『（もうやだコイツ！！ 全然話が噛み合っていないし、聞こうともしねえ！！！！）』





暗示を使って玲を家から追い出した。

『……………ふうっ。取り敢えずこれで一安心だ』

「でも旅人さん、姉さんに明日の昼まで帰らないようにしたって言うけど大丈夫なの？」

『問題ない。ビジネスホテルに泊まらせておくようにも設定しているから』

「……………それなら大丈夫ですね」

後先の事を考えていた私に明久は安堵した。

『はあ〜、何か安心したら急に腹が減ったよ』

「そう言えば……………もう夕方ですよ」

『何？……………本当だ』

私が見ると夕日が差していた。

『……………なあ明久、今日は君の家で夕飯を食べてもいいか？  
材料は私が出すから』

「いいですよ。じゃあ今から夕飯の支度を……………」

明久は夕飯の準備をした途端……………。

『そつだ、今から秀吉を連れてこないか？』

「え！？ 秀吉を？」

私の提案に明久は驚いた顔をする。

「でも秀吉はきつと家で食べると思いますよ」

『大丈夫だ、秀吉の事だから絶対来る』

「……………どうして自信を持って言えるんですか？」

『フッフ……………まあいいからいいから、それじゃあ私は今から秀吉を呼んで来る』

「ちょ……………ちょっと旅人さん！」

『おつと、行く前に材料をとつと（パチンツ！）』

私が明久の家に出る前に指を鳴らして、パエリアの材料を出しておいた。

『では頼むよ明久（ピシユツ！）』

「ああ！……………消えちゃった。……………まあいいか、僕も久々に秀吉と過ごしたいし。さてと、夕飯を作りますか」

私の気遣いに感謝しながら、パエリアを作り始める明久であった。

明久×秀吉3 ?

『と言う訳で玲を退場させたんだよ』

「……………」

『笑えるだろ、秀吉？ 姉が実弟と子作りしようだなんて…………』

「……………」

話を聞いていた秀吉はずっと無言であった。

『だから私や明久としては秀吉が来てくれて助かったんだよ』

私は話を通じる相手として、明久は心を癒してくれる恋人としてである。

「……………お主等……………大変だったんじゃないのう……………」

『全くだよ』

『ああ……………姉さんの事を思い出したらまた……………』

「明久……………」

明久がまた疲れ切った顔になったので秀吉は明久を慰めた。

『さあ、今日は玲の事は忘れてさっさと食おう』

「……………そうですね」

「……………そうじゃの」

そして私達は明久の作ったパエリアを食べ始めた。

そして15分後……………。

『はあゝ食った食った』

「御馳走さまじゃ」

「お粗末さまでした」

私達は夕飯を残す事無く全て食べ切った。

『では私が片付けるから、明久と秀吉は風呂でも入ってゆっくりイチャイチャしてな』

「旅人さん！（殿！）」

『あら？ 久々に二人っきりでイチャイチャしたくないの？』

「……………」

否定する事が出来ない明久と秀吉は言い返せなかった。

「け…けどワシは着替えは持っておらぬし……」

『安心しろ、私の方で用意しておくから』

「じゃが、ワシもそろそろ家に帰らないと……」

『それも安心して、私が優子に秀吉は明久の家に泊まるって言うておくから。だから秀吉は明久とゆっくりしてな』

「……旅人殿、お主は最初からワシを明久の家に泊まらせよつと……」

『はて、何の事やら?』

私の意図に気付いた秀吉であったが、私は敢えて惚けた。

「しかし、ワシが泊まったら明久に迷惑を……」

「秀吉がいいんなら僕は歓迎だよ。今日は姉さんがいないからゆっくり過ごせるし」

『こんなチャンス逃してもいいのか?』

「うっ……」

秀吉はかなり迷っている顔をしている。

本当ならこのまま明久の家に泊まりたいが、そうしたら自分は明久にずっと甘えてしまいそうで帰りたくなくなるのではないかと思っ

ていた。

「（それに……）」

明久に優しいキスをされたら、自分は完全に理性を失って後の事は  
どうでもよくなってしまおうと思った矢先……。

『やれ、明久』

「え……あ……はい……秀吉<sup>スッ</sup>」

「ん？ んむう！？」

私の指示で明久は悩んでいる秀吉の顎を持ち上げてキスをした。

『さてと、私は食器洗いでもしますか』

明久が秀吉にキスをするのを見た私は、もう秀吉は拒む事は出来な  
いだろうと思いい、テーブルに置いてある食器を全部持って台所に行  
き食器洗いを始めた。

「んちゅ……ちゅぷ……んん……はあ……秀吉、これでもまだ帰り  
たい？」

「……明久は卑怯じゃ、あんなキスをされたらもう拒めないの  
じゃ……」

「それじゃあ一緒にお風呂に入ろっか？」

「……………（コクッ）」

明久が風呂場に行くと、秀吉は無言で明久に付いて行った。

『フフフフフ……ナイスだ明久。さてと、2人がいない間にさっさと済ませるか……』（ガチャガチャ）』

明久と秀吉が風呂場に行ったのを見た私は、手早く食器洗いをする。

10分後

『フッフッフッフッフ……さくって準備完了だ』

食器洗いを終えた私は、二人の風呂上りの為の冷たいジュースを用意していた。

明久にはグレープジュースで、秀吉にはオレンジジュースだ。

が……。

『クククククククク……秀吉、お前には一時的に女になって貰うよ（ポチャン……ジュワ）』

私が秀吉に飲ませるオレンジジュースにある薬を仕込んだ……性転換薬を。



『さあ秀吉、お前が女になったらどうなるんだろっな？ 顔は可愛いからいいとして、スタイルがどうなるかが楽しみだよ……優子と同じく貧乳か……もしくは姫路みたいな巨乳になるか……』

私は女体になった秀吉を想像しながら、早く秀吉が風呂から上がってジュースを飲ませたかった。

明久×秀吉3 ? (後書き)

さて、明久と秀吉の風呂場の状況を見たい方はアッチの方へと行って下さい！

そうしたら状況が分かりますので！！

明久×秀吉3 ? (前書き)

いよいよ秀吉が女の子になっちゃいます!!

それではどうぞ!!

明久×秀吉3 ?

明久と秀吉は風呂から上がってリビングに来た。

「気持ち良かったね、秀吉。色々な意味で……」

「(////////////……知らんのじゃ(プイッ))」

明久が秀吉に風呂場での出来事を言うと、秀吉は頬を赤くなりながら顔を背ける。

「そんな事言っちゃって、秀吉だって気持ち良さそうな顔をしてたじゃないか」

「あ…あれは明久が……」

「最初に僕をその気にさせたのは秀吉じゃないか。僕の所為じゃないよ」

「うっ……」

秀吉は言い返す事が出来なく口籠った。

「そ…それにしても、脱衣所に置いてあった服が何故パジャマだったのじゃ？ ワシの制服がどこにも見当たらないのじゃが……」

「いいじゃない。いつそ今日は泊まつたら？ 僕は全然構わないよ」

「じゃが姉上達が……」

『大丈夫だよ秀吉、私の方から優子に連絡しておいたから』

明久と秀吉の会話の最中に私が割って入ってきた。

「……………」

『どつたの、秀吉？』

「……………旅人殿が相変わらず行動が早いと思っただけじゃ」

『いや〜それ程でも』

「……………別に褒めたつもりは無いのじゃが」

秀吉が呆れながら私を見ている。けれど私にとっては褒め言葉みたいな物だから、つつい照れてしまう。

「まあいいじゃない、秀吉。僕にとっては秀吉と泊まるのは凄く嬉しいから……………もしかして僕と泊まるのは嫌だった？」

「……………ワシが明久と泊まるのが嫌なわけが無いのじゃ」

『では秀吉は了承したと言っ事で』

「……………何故お主が仕切るのじゃ？ 此処は明久の家なのに……………」

私が仕切っていることに秀吉は怪訝な顔をする。

『気にしない気にしない さあ御両人、風呂上りに冷たいジュー

スをどうぞ (コトツ) 『

事前に用意したジュース入りのコップをテーブルに置く私。

「えっと……僕はどっちを飲めばいいんですか？」

『明久がグレープで、秀吉がオレンジだよ』

「そうですか、では……」

「……頂くのじゃ」

明久と秀吉がジュースを持って……。

「(ゴクツ…ゴクツ…ゴクツ…) ……はあ、冷たくて美味しい」

「(ゴクツ…ゴクツ…ゴクツ…) ……ふうっ、生き返るのじゃ」

一気飲みをした。

『(クツクツクツクツクツ…) よし！(さあさあ、お代わりはまだあるよ (スツ)』

秀吉が全部飲み干した事にニヤツと笑みを浮かべる私は、ジュースのお代わりを出す。

と、そんな時……。

「はへ？ な…何じゃ？」

「ひ…秀吉!？」

秀吉がフラフラし始めたので明久が介抱した。

『(フッフフ…薬が効いて来たな)』

「あ…明久、何か変なのじゃ」

「変って…一体どうしたの？」

私が上手く行ったと思っている最中、明久が秀吉に何かあったかを聞く。

「はあ…はあ…体が…体が急に熱くなって来たのじゃ…はあ…はあ…(ギユウツ!)」

「ちょ…ちょっと秀吉!？」

秀吉にいきなりを抱き締められた明久は戸惑った。

「じゅ…ジュースを飲んだ瞬間に…急に体が…はあ…はあ…」

「ジュースって…旅人さん!! 秀吉に何を飲ませたんですか!？」

明久はジュースを飲ませた私に怒鳴ってきた。

『落ち着け、明久』

「秀吉がこんなに苦しんでいるんですよ!？」  
落ち着ける訳が無い

「じゃないですか!？」

『大丈夫だ、もう秀吉は落ち着いているよ。見てみな(スッ)』

「え? ……秀吉?」

「う…うむ、大丈夫じゃ明久」

私が秀吉の方に指をさし、明久が秀吉を見ると本当に落ち着いていた。

「ほ…ホントに大丈夫? さっきまでは苦しんでたけど…あれ?」

「ん? どうしたのじゃ、明久?」

明久は秀吉を抱き締めていると妙な違和感を感じたみたいだ。

「何だか……秀吉の体がさっきより柔らかくなった気が…」

「? ワシは何ともないぞい」

「それに……何か秀吉から凄くいい匂いがする」

「何を言っておるのじゃ、それはワシが明久と一緒に風呂に入って石鹸で体を洗ったからじゃろう」

「違う……違うんだよ秀吉。僕が言ってるのは、そう言っんじゃないよ」

明久と秀吉の会話が噛み合っていない事に…。



『フフフフ……どうやら成功の様だな』

私が妙な事を口走った。

「成功？」

「何が成功なのじゃ？」

明久と秀吉は私の言っている意味が分からなかった。

『フフフフフ……明久、ちよつと秀吉から離れて』

「え……あ……はい（スッ）」

「？」

明久が私の指示で秀吉から離れると……。

『答えはコレだ（ガシッ！グイッ！）』

「ちよ……ちよつと旅人さん！？いきなり何を！？（ムニユッ）……へ？」

「ひゃあん！！な……何をするのじゃ旅人殿！？……え？」

私が明久の腕を掴んで秀吉の胸を揉ませた。

「あ……あれ？秀吉の胸が………凄く柔らかい（ムニユムニユ）」

「ああん！ あ…明久！ そんなに強く揉まないで欲しいのじゃ！」  
「何で？ どうして秀吉の胸がこんなに大きくて柔らかいの？（ムニムニユ）」

「ひゃああん！！ や…止めるのじゃ明久！！」

明久は秀吉の胸の触り心地が気持ちよかったのか、両手を使って秀吉の胸を揉みしだく。秀吉は口では止めると言っているが、明久に触られて気持ちよさそうな顔をしている。

『……………答えを教えたつもりだったんだが。おい二人とも、盛ってる所を悪いが後にしてくれないか？』

「「！！！！」」

私が声をかけると明久と秀吉は漸く気付いてくれた。

「た…旅人さん！ こ…これってつまり……………秀吉が…お…おん……………」

「ワシが……………ワシが……………」

『そう。秀吉が女になったって事だよ』

私が答えを言うと……………。

「「ええええええ……………！！！！……………」」

明久と秀吉はデカイ声を出した。

『どうだい、秀吉？ 女になった感想は？』

「……………（ムニユムニユ）胸があつて……………（バッ！）下が無いのじやー！…」

『だから女になってるって言ってるだろうが……………』

秀吉が自分の胸や股間を触ってショックを受けたかのような顔をした事に、私は呆れながら突っ込む。

「な…何でワシが女になっておるのじゃ！？」

『明久、秀吉の胸の大きさはどれ位だった？』

「スルーされたのじゃ！」

「えつとお……………多分C〜D位だったかな？」

「（／／／／／／／／／／／／／／／／）明久は何を言っておるのじや！？」

胸のサイズを言った明久に秀吉は突っ込む。

『ほほう、同じ遺伝子なのに貧乳の優子とは大違いだな』

「……………旅人さん、その言い方だとまるで木下さんの胸を見たかのような言い方だけ……………」

『服の上から見ただけでも、優子が貧乳だったのが分かるだろ？』

「まあそうですね」

「……お主等、もし姉上が聞いたら絶対に折檻されるぞい」

私と明久が何気に優子を貶している事に秀吉は怖いもの知らずだと思っただ。

『けど秀吉だって優子が貧乳だと思ってるだろ?』

「……………」

『沈黙は肯定と受け取るからね』

どうやら秀吉も優子の事を貧乳だと思っていたみたいだ。

『まあ今は優子の事はどうでもいいとしてだ。話を戻すけど秀吉、今の君は立派な女になっているから“ワシは男じゃ!”って台詞はもう使えないからね』

「そ…それは……………」

『それに…………女になった自分で明久を更に悦ばせたいんだろ? (ボソソソ)』

「!!!!!! な…な…………な!? (//////////)」

何故知っているのかと聞こうとする秀吉であったが…………。

『私を誰だと思っているんだ秀吉? (ボソソソ)』

「……………そうじゃった、お主にはワシの考えが読めたんじゃった……………」

『分かってくれて何よりだよ（ボソボソ）』

私の眩きに今更思い出したのであった。

「旅人さん、秀吉と何を話しているんですか？」

『そこは気にしないでくれ明久』

秀吉とヒソヒソと話している私に明久が顔を顰めていた。

『では私はこれで失礼するよ』

「え？ 旅人さんは泊まっついていかないんですか？」

『……………あのさあ明久、私が君と秀吉のエッチしている喘ぎ声を聞きながら眠れって言うのか？』

「！！…それは……………」

「勘弁して欲しいのじゃ……………」

『アンタ等は風呂場でも充分激しい事をしたのに、夜でもヤル気満々なんだね』

「……………（……………）……………」

私の突っ込みに明久と秀吉は互いに顔が赤くなっていた。

明久としては女となつた秀吉の胸を揉んだ為か、早く秀吉を部屋に連れてエッチしてみたいと思つているのである。それは秀吉にも言えることであるが。

『では失礼　と、その前に』

私が姿を消そうとしたが……。

『言い忘れていたけど秀吉。君は女になっているけど、明日の午前6時になつたら元に戻るから』

「え？」

『と言う訳で御兩人、また会いましょう（ピシュッ！）』

大事な事を言つて姿を消した。

「……いなくなつちやつたね、秀吉」

「そつじやのう……」

「……確認するけど……旅人さんは明日の午前6時になつたら秀吉は元に戻るって言つてたよね？」

「今は午後8時じゃから、ワシが女になつてるまで……あと10時間じゃのう」

「あと10時間……（ゴクッ）……ねえ、秀吉（ギユウッ！）」

「あ…明久！ いきなり何じゃ!？」

明久がいきなり背後から抱き付いて来たので秀吉は戸惑った。

「ああ……秀吉の体が柔らかいよ（チュッ）」

「ひゃん！ な…何をするのじゃ!？」

秀吉の首筋にキスをする明久に秀吉は感じながらも叱咤する。

「ゴメン秀吉、僕また我慢出来なくなつて来た（サワサワ）」

「ああん！ や…止めるのじゃ……」

「コレが……秀吉の胸……これが秀吉のアソコ（クチュクチュ）」

「あん！ せ…セクハラじゃぞ明久……（明久に触られると……感じてしまうのじゃ……）」

秀吉は明久に胸や秘部を触られてかなり感じているみたいだ。

「秀吉、今すぐ君を抱きたい……犯したい位に……」

「い……いいのじゃ……ワシも……女になった体で……明久としてみたかったのじゃ……じゃから……ワシを好きな抱いてくれ……」

「……（プツンッ!）……秀吉!!（バツ!）」

「あっ（ポスンッ!）ん……んっ!」

秀吉の言葉に明久は理性の糸が切れて、秀吉をソファーに押し倒すとキスをする。

そして明久は女になった秀吉とエッチするのであった。

おまけ

私や明久が優子に貧乳と言った時……。

「は……は……はつくしよん!! はつくしよん!!」

優子が自分の部屋でBL本を読んでいる時にくしゃみをしていた。

「……………何か不快なくしゃみだったわね。誰かがアタシの噂でもしてるのかしら……………」

そして秀吉も優子が貧乳だと思った時……………。

「はつくしよん!!」

優子はまたくしゃみをした。

「……………何なの？ さっきのと比べて物凄い不快感があったくしゃみだったけど……………それと同時に敗北感も……………」

理解不明な優子は何でここまで不快なくしゃみをしたのかと無駄に



考えていた。

明久×秀吉3 ? (後書き)

次回は明久と秀吉( )のラブシーンですので、明日はアッチの方に更新しますので、お楽しみに!!!!

## 閑話短編（前書き）

今回はその後と、次回に向けての前書きの話です。  
それではどうぞー！！

## 閑話短編

短編？ 明久と秀吉（ ）がエッチした後。

ある朝の事……。

「ん……んん……」

「お早う秀吉」

「ん？ 明久、何故お主が……そうじゃった、此処は明久の部屋でワシは……」

秀吉が目覚めると、隣には全裸の明久がいた。

「と言うか明久、何時から起きてたのじゃ？」

「ついさっきだよ。秀吉の可愛い顔を見たら眠気が覚めちゃって……」

「（／／／／／）……全く、お主はいつもワシをからかって……」

「事実じゃないか。それより秀吉、体は大丈夫？」

「大丈夫って……あ……」

明久の言っている事が分からなかった秀吉であったが、昨日の事を思い出し……。

「……………ホントに元の男に戻っておるのじゃ」

自身の体を触って男に戻ったと実感する。

「僕が言ったのはそう言う意味じゃなくて、男に戻って何か異変は無いか聞いているんだよ」

「大丈夫じゃ、何とも無いのう」

「……………ならいいけど」

「どうしたのじゃ明久？」

明久の様子がおかしい事に秀吉は何かあったのかを聞く。

「いや……………その……………僕が女の子になった秀吉と合体して中に出しちゃったから、何か異変が起きてないかと思って」

「（／／／／／／／／／／／／……………そ…そうじゃったか」

昨日の激しい夜を思い出した秀吉は顔を真っ赤にする。

「元に戻るとは言え、秀吉の中に思いつきり出しちゃったから妊娠したかと思っちゃったんだよ」

「それなら問題ないじゃろう。旅人殿の事じゃから、そう言った事も考えて手を打っていると思うのじゃ」

「……………そうだね」

秀吉の言い分に明久は納得した。

「……………（けど、女の体になって明久に抱かれたら……………明久の子供が欲しくなってきたのじゃ）」

「どうしたの秀吉？」

また女になりたいと思いつている秀吉に明久はやはり何かあったかと聞いてみたが……………。

「！！… な…何でもないのじゃ……………」

「そ…そう」

秀吉は何とも無いと言つので、取り敢えず気にしないようにするのであった。

そして二人は玲が帰って来るまでに二人っきりの時間を堪能した。

短編？ 優子が来牙とデートする3時間前の事。

「うっ…ん、コレにしようかなあ？ でもこっちも捨てがたいし…」

優子は来牙とデートする為の服を選んでいた。

「今日は宮永君とデートか……ち、違う!! アタシはただ宮永君と遊ぶだけで、け…決してデートじゃないんだから!!」

先程までは恋する乙女の顔であった優子だが、急に真面目な顔になって適当な言い訳をしている。

「そ…それに、旅人さんがふたりっきりにさせると言っても、どうせ妹さんが来ると思うし……デートになる訳が無いわ。うん、きつとそうよ」

何だ、来牙と二人っきりにさせたのに絵梨とも遊びたいのか。

だったら絵梨も呼ぼうとするか……。

「ひ…必要ないわよ!!! 妹さんを連れてくる必要なんか絶対無い!!!」

あらそうかい? ってか優子、ナレーションに言っなよ。

「貴方が余計な事を言うからでしょ!?!」

はいはい、私が悪かったよ。

「全く………やっぱりこの服にした方がいいわね。このミニスカートだと宮永君に態と下着を見せる事が出来る………って何考えてんのよアタシは!?!」

どうやら優子は来牙を誘う気満々でエッチする事も考えているみたいである。

そしてデートが始まる30分前まで、どの服を選ぶか悩んでいる優子であった。

短編？ 優子が来牙とデートする1時間前の事。

「来牙！！ 貴様は大罪を犯したのじゃ！！」

「いきなり何だよ」

「どうしたの、お父さん？」

来牙の家では、源三が昼御飯を食べている来牙に変な事を言っていた。来牙と同伴している絵梨も源三の行動に疑問を持ちながら聞く。

「二人とも、お爺さんの事は気にしないで早く食べな」

「そつだな」

「そつだね」

「無視するでな〜い！！！！！！」

お婆さんの一言に来牙と絵梨は無視する事にしたが、源三が怒鳴り散らす。

『爺、お前は何が言いたいんだ？』



「決まっておろう！ 来牙が絵梨にご飯を食べさせていたのじゃ！」

『……要するに絵梨が来牙に“はい、あーんして”って所を見た事に腹を立てただけだろ？ 下らない事で怒るなよ』

「下らなくは無い！！ これはれっきとした犯罪で……って何でお主がここにおるのじゃ！？」

『さつきからいたんだけどねえ』

漸く私と会話している事に気付いた源三は私の顔を見て素っ頓狂な顔をする。そんな爺の顔を見ている私は面白そうな顔をしていた。

『犯罪と言っているけど、だったら爺が絵梨にセクハラをした事は犯罪じゃないの？』

「そんな事はどうでも良いわい！！ お主は何時から此処におったのじゃ！？」

『だから言っただろ？ さつきからいたって………ですよ、御三方？』

と私が3人に聞くと……。

「ええ、2時間前からいましたねえ」

「俺は昼飯を食う前に旅人さんとゲームしてたぞ」

「あたしは旅人さんにある物を取り寄せて貰ってたよ」

お婆さん、来牙、絵梨は私がいた事を認めていた。

「（ガーン！）………旅人………！貴様はワシが成敗してやるのじゃ………！」

『どう言う理由で私を成敗するのは知らんが、テレビ見てみな？面白い物が映ってるぞ』

「何？………！！！」

爺がテレビの方を見ると………。

《ジミーさん、貴方はとても素敵だわ》

《流石はグレートレンジャーのリーダーね》

《いや〜照れるでござるな〜》

そこにはグレートレンジャーのジミーが美女達に囲まれていたのが映っていた。

「なんじゃこりゃあ………！！？？ 何故ジミーが美女達に囲まれておるのじゃ………！！？？？」

『さあ？ 何でだろうね〜？』

「じつではおられん………！今すぐジミーを八つ裂きにしてやるのじゃ………！」

「俺様も行くぜ源三！！ あのクソ野郎は何て羨ましい……じゃなく  
くて！ けしからん事をしやがる奴をぶっ殺してやる！！」

「おのれジミー…… ミー達を裏切ツタナ……！」

他のグレートレンジャー共はジミーを抹殺する為に去って行った。

『アイツ等、ジミーがいる所を知ってるのかな？ …………… まあいい  
や、本題に入るとしよう。来牙、ちょっといいか？』

「何だ？」

昼飯を食い終えた来牙に私は声を掛ける。

『この後、何か予定はある？』

「特に無いが……」

『じゃあ今から私と一緒に出かけよう！ そうしよう！（ガシッ！）』

「お……おい！？」

「ちょっと旅人さん！ 来牙君を何処に連れて行く気なの！？」

私が入牙の腕を掴んで出掛けようとすると思梨が阻んだ。

『絵梨、すまないけど来牙を少々借りるからご了承下さい』

「だから！ 来牙君をどうする気なの！？」

『絵梨には内緒』

「おい旅人さん、その前に俺はまだ行くとは一言も言ってないんだが？」

絵梨が私に抗議していると来牙も文句を言ってくる。

『まあまあそんな事仰らずに、来牙にとっては凄く楽しいから。私が保証するよ』

「アンタに保証されてもな……」

『では行きましょう』

私が絵梨を無視して来牙を連れて行くことになると……。

「（ガシッ！）旅人さんが言わないなら、あたしも来牙君と一緒に行く！」

絵梨が来牙の腕を掴んで自分も行くと言ってきた。

『悪いけど絵梨、今回は君に邪魔をされる訳には行かないから（スッ）』

「え？（トンッ）」

『今日はお婆さんと一緒に過ごしていなさい』

「……………分かった。お母さん、肩を揉んであげるね」

「おお、すまないねえ」

私が絵梨に暗示を掛けると絵梨はお婆さんの肩揉みを始めた。

「おい、どうして絵梨に暗示を掛けるんだ？」

『まあいいからいいから　それではお婆さん、来牙を借りますので』

「ええ、分かりました」

「ばーちゃんもばーちゃんて勝手に決めるし……俺の意思はどうでもいいのかよ」

来牙はもう自分の周りに味方がいないと思った。

『そんな事を言わないでくれよ来牙……今日は君が優子とデートをするんだから（ボソボソ）』

「!!!!　あ…アンタまさか絵梨に暗示を掛けたのは……」

『フフフフ……では行きましょう（ピシユッ）』

「おいちょ（ピシユッ）」

私が姿を消すと来牙も一緒に消えた。

そして家には絵梨とお婆さんだけになったのである。

「ふふふ……来牙は本当に女の子にモテるんだねえ（ボソッ）」

「お母さん、何か言った？」

「何でもないよ。それと絵梨、もうちょっと力を弱めてくれないかい？」

「はい」

絵梨はお婆さんの肩を揉み続けていた。

### 来牙×優子3

前回の短編で私が来牙を連れてきた所は……。

『(ピシユッ!) はいご到着』

「(ピシユッ!) ここは遊園地か……ってか俺の服が……」

如月グランドパークであった。

そして来牙の服が出掛け用の服に何時の間にか変わっていた。

『移動中の際に私の方で変えておいた。安心しろ、着ていた服は来牙の部屋に置いといてあるから』

「……………準備がいい事で」

『それが私だもん』

「……………で、木下はいないみたいだが？」

来牙はもう私に突っ込むのを止めて、すぐに本題に入った。

『今から私が連れてくるから、これで時間潰して(スツ……………ピシユッ!)(』

「……………PSPか、どれどれ……………何だよコレ、色々なゲームが入っているじゃないか。それに俺が買おうとしてたゲームもあるし」

帰ってきたら私に文句を言おうとしていた来牙であったが、私に渡されたPSPに入っているメモリスティックを見た途端に近くのベンチに座ってゲームをやり始めた。

.....

場所は変わって優子の家の前……。

『（ピシュッ！）あれ？ 優子がないな。まだ準備してるのかな？』

指定の時間に此処にいる様にと優子に言っていたが、意外な事に優子がいなかった。

『あの優等生さんが時間を守らないなんて珍しいな……どれどれ（スッ……ピッ）』

私は懐にある携帯を使って優子の携帯に連絡した。

『（トウルルルル……トウルルルル……プッッ）』

《も…もしもし》

『どっしたの木下さん、まだ準備に梃子摺ってるの？』



《……も…もうちょっと待ってくれないかしら?》

『……………はあ?』

優子の珍しい発言に私は素っ頓狂な声を出す。

《あ…あと10分待って》

『……………珍しいね、木下さんが待ってだなんて。相当考えているんだね、来牙に見せる服を…ね』

《!…! な…何言ってるのよ!?!(プツッ!)(》

『(ツ…ツ…)( 図星か……………まあ後10分待ちましょう』

そして待つてから10分後……………。

ガチャッ!

「お…お待たせ」

『本当に10分ピッタリで来たね』

優子が家から出てきた。

『ほほ…う……………これはこれは (ニヤニヤ)』

「な…何よ……」

私は優子の服を見てニヤニヤと笑みを浮かべていた。優子の格好は黒のロングカーディガンを纏い、中には白いＴシャツを着ている。そして極め付けは足を綺麗に見せる黒のミニスカートを穿いていた。

『木下さん（ポンッ）……頑張りなよ』

「……………何を頑張るのかを聞いてもいいかしら？」

『そりゃあ勿論……来牙とのエッ……』

「（ガシッ！）……殺すわよ？」

優子の肩に手を置いて応援する私であったが、優子は私の腕を掴んで間接技を仕掛けようとする。

『じょ……冗談だから関節技は止めて……』

「フンッ！」

『と……取り敢えず行きましよう（ピシユッ）』

私が姿を消すと優子も消えた。

場所はまた遊園地前に戻り……。

「このゲームは中々面白いな。後で旅人さんにデータ移動させて貰おう」

来牙はベンチに座ってゲームをやっていた。

と、そんな時……。

『（ピシユツ！）お待たせ来牙』

「（ピシユツ！）み…宮永君」

私と優子がいきなり来牙の前に姿を現した。優子は来牙の顔を見ると妙に気まずそうな顔をしている。

「旅人さん、アンタにしては随分遅かったな。何かあったのか？」

『まあ其処は気にしないで。ほら木下さん、来牙に挨拶しないの？』

「…今日は……宮永君」

「あ…ああ……」

私がいきなり現れても特に気にしていなかった来牙であったが、優子と顔を合わせると気まずそうな顔をする。

『（あれ？　もしかして来牙は優子の事を意識してる？）』

どうやら来牙も来牙で以前の優子の告白に未だ引き摺っていたみたいだ。何か妙に初々しい感じがする来牙と優子であった。

『（まあ取り敢えず私の目的は終わったから去るとしますか）……それではお二人さん、私はこれで失礼するよ。遊園地は私の方でタダで遊べるようにしておいているから楽しんできな』

私が行くうとすると……。

「（ガシッ！）ちょっと待ってくれ、旅人さん」

「（ガシッ！）出来れば一緒に入ってくれないかしら？」

来牙と優子にそれぞれ腕を掴まれた。

『な…何で？　私がいると邪魔でしょ？』

「いや、そんな事は無い（グイッ！）」

「そうよ、だから一緒に遊園地に入りましょう（グイッ！）」

『（ズルズルズルズル）……何故だ……！？』

妙に息の合っている来牙と優子に私は引き摺られて遊園地に入ることになってしまった。

遊園地に入り……。

『くそっ……こんな事になるなら早く姿を消せばよかったよ。何で私まで付き合わされなければならんのだ』

「いいじゃないか、アンタだって遊園地で遊びたかっただろ？」

「そうよ、旅人さんだって暇を持って余しているんならアタシ達に付き合いなさいよ」

私は予想外な事に嘆き、来牙と優子は私を逃がすまいと腕を掴んでいる。

『（何なんだコイツ等は？ ……まるで二人つきりにさせない為に私を監視しているみたいだ）』

本当なら私は姿を消したいのだが、そうすると二人も一緒に消えてしまうので意味が無い。それを何とかする為に、私は来牙と優子を二人つきりにさせる為の案を考えている。

『（仕方ない、ここは暫く2人に付き合おうとしよう。此処で無理矢理に姿を消したとしても、コイツ等は絶対遊園地から出るだろうし）……お二人さん、そろそろ離してくれないかな？ 私は逃げないから』

「そうは行かないな、離れた途端にすぐ姿を消しそうだからな」

「簡単には離せないわね」

『少しは信用してくれ。私が今までに君達に嘘を吐いた事はあったか？』

「……………(スツ)……………」

私の言い分に来牙と優子は少し考えた後、掴んでいた私の腕を離してくれた。

『離してくれてアリガトウお二人さん。それじゃあ先ずは記念写真を撮るか(スツ)』

「……………まあいいか、逃げないだけマシだな」

「記念写真って……………何で撮る必要があるの？」

カメラを取り出す私に優子は疑問に思っただけ聞いてみた。

『あれ？ 此処が何処だか忘れてない？ この如月グランドパークはカップルがいると記念写真を撮るって決まりになっているんだよ？』

「……………そうだったかしら？」

「木下、取り敢えず此処は撮って貰う事にしよう」

「……………でも……………」

「此処で拒んだら旅人さんは絶対逃げ出すと思うが？」

「……………し…仕方ないわね。じゃあ宮永君、ちよつと失礼（スツ）」

私が逃げ出すのを阻止する為に、優子は仕方なく来牙の腕を取ってポーズを決めていた。

「お…おい木下。ちよつとくっ付き過ぎじゃないか？」

「こ…コレ位しないと旅人さんが逃げちゃうんでしょ？」

「……………まあそうだが」

『はいはいお二人さん、もうちよつとくっ付いてねえ〜（サツ）』

「……………！」

来牙と優子のポーズがいまいちだったので私はもつと密着させて、恋人同士らしく抱き合っているポーズにさせた。

『はい、チーズ（パシャ！）…………ハツハツハツハ！ 中々上手く撮れているな』

出来た写真はよく撮れていた。サービス加工もしており、二人を囲うようなハートマークと『私達、結婚します』と言う文字も入れている。

「ちよ…ちよつと旅人さん！！いきなり何するのよ!？」

「……………」

来牙と密着状態にさせた私に優子は抗議をするが、来牙は無言だった。

『別にいいじゃない。今日は五月蠅い絵梨がいないんだから恋人気分を満喫すればいいじゃん』

「……………恋人！？（ボンツ！）」

私が恋人と言ったら優子は一瞬で沸騰したかのように顔が真っ赤になった。

「あ…アタシと…宮永君が…恋人同士…（//////////  
//////////）」

「……………（木下の体…凄く柔らかかったな…って俺は何を  
考えているんだ！？）」

優子と来牙がそれぞれ考えていると……………。

『あのお二人さん？ 邪魔でしたら私は引き上げますけど？』

「ダメだ（よ！！）」

私が帰ると言うのと即座にダメ出しをされた。

『（こつ言つ時だけ息がピッタリだな…ではコイツ等には私が邪魔だと思わせる位のシチュエーションを作るとするか。しかし何かいい手は…待てよ、確か此処は……………）』



私は何か思い出したみたいだ。

『（……………そうだ、此処はアレが出来るじゃないか。絵梨には悪いが来牙と優子には“アレ”をやって貰おう）さあ2人とも、今度はお化け屋敷にでも行こう（ガシッ！）』

「何？」

「え？」

私は来牙と優子の腕を掴んでお化け屋敷がある所へと向かった。

「ちょ…ちょっと旅人さん、何でお化け屋敷なんだ？」

「あ…アタシ、お化け屋敷はちょっと……」

『まあいいからいいから、とにかく行きましょう　それとも私が帰ってもいいのかい？』

「……………」

私が帰ると言い出すと2人は黙って従ってくれた。

『（先ずは来牙と優子にはラブラブな雰囲気を作る為にお化け屋敷で……………クッククック）』

私はお化け屋敷に行っている最中に流れを考え……………。

『（お化け屋敷でいい雰囲気になったその後は……………来牙・優子、お

前達にはウエディング体験してもらおうぞ!!」

2人を仮の夫婦にさせて……。

『（そして誰もいない個室に連れてってエッチさせてやる!!）』

初夜の真似事をさせようとしていた。

来牙と優子は私がそんな事を考えているの知らずに、私に付いて行っている。

おまけ

私達がお化け屋敷に向かっている最中。

『そつだ木下さん。忘れる前に、この写真あげるよ（スッ）』

「え？ …… な… なっ!？」

「どうした、木下？ …… っておい!!」

先ほど撮ったサービス加工済みの写真を渡すと、優子は顔を真っ赤

にしており、来牙は俺に突っ込んだ。

来牙×優子3 ?

『さあお化け屋敷にご到着』

「.....」

私がノリよく到着すると、来牙と優子は未だに無言であった。

「.....ん？ このお化け屋敷.....前回見た時とは違うな」

「そうなの？ アタシは初めてだから、よく分からないけど.....」

お化け屋敷を見た来牙が前と違う事に気付いたみたいだ。

『よく気付いたね、来牙。そう、このお化け屋敷は私の方で少々変えたんだよ』

「.....どう言う風に変えたんだ？」

『それは入ってからの楽しみだよ』

「.....まあいい、さっさと入るぞ」

来牙は優子を連れてすぐにお化け屋敷に入ろうとするが.....。

『待て来牙、入る前にちょっとやって貰いたい事がある。あと木下さんもね』

私が止めた。

「何をする気だ？」

「タダで遊べるんじゃないの？」

『そうじゃない。入場前に、この誓約書にサインをして貰おうかと  
(パチンツ！ パツ！)』

私が指を鳴らすと、誓約書が挟まれているバインダーを出した。

「サインだと？」

「何でそんな事をする必要があるの？」

『知つての通り、私がお化け屋敷を変えたから、ちょっと危険  
が伴っているんだよね。だから万が一の為、誓約書にサインして貰  
うんだよ』

「……………」

私の説明に来牙と優子は無言で納得した。この二人の事だから、私  
がかなり恐ろしい内容に変えているのだろうと思っっているに違いな  
い。

「……………まあサインする位はいいだろう」

「そうね。それに、もしもの事があつたら旅人さんに訴える事が出  
来るし」

『ではどうぞ(スッ)』

私はバインダーを来牙に渡すと……。

「何々……誓約書 私、宮永来牙は、木下優子を妻として生涯愛し、苦楽を共にすることを誓います……っておい!？」

「これの何処が誓約書なのよ!？」

来牙が誓約書を読み上げると、優子と一緒に突っ込んだ。

『ペンがバインダーに挟んであつて、(スツ)君達の実印は私が持つてるよ。そうそう、朱肉を忘れてたね(パチンツ!)』

来牙と優子の突っ込みを無視した私は左手で実印を持ちながら、右手で指を鳴らして朱肉を出す。

「何の冗談だこれは!？」

「で……でもこれって……アタシが宮永君の妻になれるって事なの？」

「おい木下!？ アンタは何を考えているんだ!？」

優子に変な妄想に浸っている所を来牙が突っ込む。

『それと二枚目はカーボンで婚姻届になっているから』

「……………宮永君!! 今すぐサインしよう!!」

「ちょ……ちょっと待て木下!! お前おかしいぞ!？」

優子がサインしようとするが来牙が阻止する。

「ねえ旅人さん！ これにサインしたらアタシと宮永君は夫婦になれるの！？」

「いや無理だろ！！ 俺等はまだ高校生で夫婦になれないから！！」

『……………冗談のつもりだったんだが、まさか木下さんが此処まで暴走するとは思わなかったな（パチンツ！）』

私が指を鳴らすと用意した誓約書、ペン、実印、朱肉が消えた。

「あ……………」

「おい旅人さん、悪ふざけは止めてくれないか？」

それを見た優子は非常に残念そうな顔になり、来牙は怒気を込めながら私を睨む。

『あ、怒った？ だったら私はもう退散しようか？』

「（まさか旅人さんの狙いは……………）……………その必要は無い。まだ俺達と一緒にいてくれ」

『……………あっそう……………チッ』

「（やはりそう言う魂胆だったか）じゃあさっさとお化け屋敷に入るぞ」

私が小さく舌打ちした所を見た来牙は、狙いが分かっているながらも

私を逃さないかのように引き止めてお化け屋敷に入ろうとする。

「おい木下、入るぞ？」

「…………え？ あ…そ…そうね」

『（フフフフ…………いいぞ、優子は段々と素直になり始めてきた）』

私の本当の狙いは優子を素直にさせて来牙に大胆な行動をさせる為であった。優子があそこまで暴走したのは予想外であったが、私としては大変好都合だ。この後から優子は来牙を欲情させる為に色仕掛けをすると私は予想する。

『ではレッツゴ〜』

そして私達はお化け屋敷へと入ったのであった。

……………

お化け屋敷に入ってから5分後…………。

「み…宮永君（ギユウツ！）」



「成程、確かにかなり怖いお化けになっているな……」

優子は来牙の腕を掴んで引っ付いており、来牙はお化け屋敷の中身を見て納得した。

『でしよう？ ちょっと苦労したけどね……』

「しかしまあ、ゲームで出て来たお化けを本物に見せるとはな、恐れ入ったよ」

『来牙はその割りに大して怖がっていないね』

「俺は逆に面白く見させて貰っているよ……おい木下、何時まで俺に引っ付いているんだ？俺としては歩きづらいんだが……」

来牙は引っ付いている優子に離れるように言う。

「だ…だって…こんなに怖いお化けが出て来るなんて全く予想し  
てなかったから。て言うか、宮永君は怖くないの？」

「大して怖くは無い。さっきも言ったが面白く見ているからな。ゲ  
ームで出て来たお化けを実物で見れているから」

「そ…そう………きゃあー!!」

『おお、動く鎧武者か……』

優子が驚いたお化けは人間の動きにそっくりな鎧武者だった。

「アレは本当に人が入っていないのか？」

『勿論だよ』

「その割には随分と動きが人間そっくりだな。どうやってあんな風に動ける様にしたんだ？」

『フフフ……そこは企業秘密だよ』

私と来牙が話していると……。

「み……宮永君、アタシをギュッと抱き締めて？」

「は？ な……何でだ？」

優子がいきなり来牙に抱き締めてと懇願した。

「アタシ……凄く怖くて……（これで宮永君をその気にさせて……）」

『（フツ……優子、ここで仕掛ける気か）』

私は優子の狙いが最初から読めていた。優子は怖がっているフリをして来牙と抱き合っつもりだ。

そんな事に気付いていない来牙は……。

「……………しょうがないな、俺から離れるなよ？（ギュッ！）」

「（やった！）う……うん、ありがとう」

片腕を使つて優子を抱き締めた。

『（上手く行つたようだね優子）……ではお二方、進みますよ？』

「あ…ああ」

「ええ（宮永君に抱き締められてる……嬉しい）」

優子は私達と一緒に進みながら、来牙に抱き締められて幸せな気分  
に浸っていた。

そして更に5分後……。

「なあ旅人さん、まだ続くのか？」

『この先はちよつとした迷路になるから、もうちよつと続くよ』

「迷路つて……ここはお化け屋敷だろ？ 何で迷路なんかを……う

あ！」

『来牙？』

私が来牙と話していると、来牙が途中から変な声を出したので私は  
進むのを止めた。

『どうした来牙？ いきなり変な声を出して』

「宮永君、どこかぶつけたの？」

「……………いや、何でもない」

『そう？　なら進むよ』

私は再び進むと来牙と優子も付いて行った。

と、そんな時……………。

「おい木下、どう言うつもりだ？」

「何の事かしら？」

来牙が未だに抱き締めている優子に小声で話し始めた。

「惚けるな、お前さっき俺の股間に触ったろ？」

「……………」

「何でそんな事をしたんだ？」

「……………ゴメンなさい」

来牙が小声で問い詰めていると優子が急に謝りだした。

「いや、謝る必要は無いんだが……………」

「宮永君の触った罰として（スッ）……………アタシの触っていいわよ」

「なっ！？」

『来牙、今度はどうした？』

優子が自身のスカートに手を突っ込ませた事に来牙は驚き、私は来牙の声を聞いてまた足を止めて振り向いた。

「き……気にしないでくれ」

『いや……気にするなと言う方が無理なんだけど』

「宮永君、ホントに大丈夫？」

「（コイツは……）大丈夫だ、何とも無いから」

元凶である優子を睨みつつも、大丈夫と答える来牙であった。

『……もう変な声を出しても私は無視するからね？』

「ああ……そうしてくれ」

『全く……（フツ……今度はお互い触りあうのかな？）』

私が再び進みながら、内心で来牙が変な声を出している原因が優子だと既に分かっていた。

「……………木下」

「今度は声を出さないようにね」

「……………お前という奴は」

「好きな所を触っていいわよ」

「……………後悔するなよ（スッ）」

来牙は優子のミニスカートに手を突っ込んで、下半身を触り始めた。

「……………んん……………宮永君の変態、いきなり直に触るなんて……………」

「触っていいって言ったのは木下だろ？ てかもう濡れてるし」

「んっ！ あ…アタシだって（スッ）」

来牙に触られている優子は感じて声を出しそうになったが何とか押し殺して、お返しと言わんばかりに来牙のズボンに手を入れてきた。

「……………！ 木下も変態じゃないか……………」

「だって……………宮永君に触られると……………アタシも宮永君の……………」

来牙と優子は進みづらそうであるが、それでも互いの下半身を触って歩いている。

『（あの二人……………お化け屋敷から出た後に絶対トイレに行くだろうな）』

当然、私は二人のやっている事に気付いていた。

そして二人がお化け屋敷から出た後にやるうとしている事も予想しており……………。

『（あの二人が盛っている最中にウェディング体験の準備をしておかなくちゃね）』

その後の予定も考えていた。

.....

そしてお化け屋敷から出ると.....。

『どうだった二人とも、お化け屋敷の感想は？』

「.....いいんじゃないか？」

「そうね、アタシは凄く怖かったし」

私は二人に感想を聞きながら顔を見ると、何時の間にか離れていた。

『そうかそうか それにしても.....二人とも妙に汗を掻いているが、そんなに暑かったか？』

「まあ少しな。所で旅人さん、俺ちょっとトイレ行って来る（スタスタ）」

「アタシも（スタスタ）」

来牙がトイレに行くと優子も追いかけるかのように付いて行った。

『フフフフ……… 本当に私の予想通りの動きをしてくれるよ。さてと、こちら準備を進めますか（スッ）』

私は来牙と優子がトイレに行っている間に携帯を出してウエディング体験の準備を始めた。



来牙×優子3 ? (後書き)

次回はアッチの方に更新しますので、ご注意ください。

来牙×優子3 ?

来牙と優子がトイレを済ませた二人を結婚式会場の控え室前に案内した。

『さあお二人さん、それぞれの部屋で着替えてね　来牙は右の部屋で、木下さんは左の部屋だから』

「.....」

私が入る部屋の場所を教えると、来牙と優子は無言であった。

「な...なあ旅人さん、ホントにやるのか？」

『当たり前。逃げたらどうなるか分かってるよね？（ジャラ）』

「.....こつなったら腹を決めるか」

「（い...勢いで来たけど.....今になってから凄く恥ずかしくなってきた.....）」

私が鎖を出したのを見た来牙は覚悟を決め、優子は先程までの勢いが無くなり逃げようかと考えていた。

『木下さん、やると言った君がまさか逃げようだなんて考えてないよね？（ジャラ）』

「.....わ...分かったわよ！！　着替えてくれば良いんでしょ！！（スタスタ.....ガチャッ！　ボタンッ！）」

来牙と同じやり方で脅すと優子は颯爽と部屋に入って行った。

『フッフ……さあ来牙、向こうの部屋でタキシードに着替えて来てね』

「分かったよ（スタスタ……ガチャツ……ボタンツ）」

『さあ〜て準備準備』

来牙が部屋に入るのを確認した私は結婚式の最終準備をする為に会場へと向かった。

.....

来牙の入った部屋が変わる。

「しかしまあ、まさかこんな展開になるとは思わなかったな.....」

来牙は服を脱いで目の前に掛けられている白のタキシードを着ると、自身の姿を見る為に鏡を見た。

「うわ……あんまり似合わないな」

タキシード姿を纏った自分を見た来牙は顔を顰めた。

「まさかこの歳でタキシードを着るとは……全然似合わないな」

「そんな事は無いのじゃ来牙、淒く似合っておるぞい」

「!!!!」

突然の声に来牙が後ろを向くと……。

「突然入ってすまぬのう」

「ひ…秀吉、お前……何で此処に？」

そこには紳士服を着た秀吉がいた。

「旅人殿から急に連絡が来て、姉上の結婚式の手伝いをしてくれと頼まれたのじゃ。ワシが了承した途端に、いきなり此処に連れて来られたのじゃ」

「……………あの人は……………」

来牙は私の行動に呆れていた。たかがウェディング体験でそこまでする必要は無いだろうと内心で突っ込む。

「……………それで？ 秀吉は何の手伝いをされるんだ？」

「花嫁の父親役を任されたのじゃ」

「……………それって確か新郎を渡す役じゃなかったか？」

「うむ。本当じゃったらワシの父上がやるのじゃが、ワシが替わりにやる事になってのう」

「ってかお前の父親が来たら不味いからな」

もしそんな事になったら、来牙は父親に何をされるかは分からないが、とんでもない事になるのは容易に予想が付く。

「来牙よ、これからお主の事を義兄上と呼ばせて貰うのじゃ」

「待て、どうしてそう言う流れになるんだ？」

「ウェディング体験とは言え、来牙と姉上が結婚するのじゃ。じゃから……」

「そんな必要は無い。今まで通りの呼び方にしろ」

「むう……来牙はノリが悪いのう。ちよつとした冗談なのじゃが……」

「お前の冗談はシャレにならんからな」

来牙は秀吉が本気みたいな感じだったので絶対に言わない様にと釘を刺した。

「ところで秀吉、お前がいるって事は旅人さんは他の人も呼んだのか？」

「うむ、姉上の所には……」

ちよつと時間を遡つて、優子が入った部屋に変わる。

「……優子、待ってた」

「やつほゝ優子」

「代表！ 愛子！ 何で貴方達が此処に！？」

目の前には霧島と工藤がいた事に優子は驚いた。

「……旅人さんに呼ばれて来た」

「優子もやるねえ、旅人さんから優子が宮永君とウエディング体験をするって聞いた時は凄く驚いたよ」

「……私達は優子の友人として参加する」

「あ……あ……あ……あの人は何を考えているのよ……！！  
！！……？……？」

優子はデカイ声を出しながら私に恨み言を吐く。

「まあまあ、そう旅人さんを邪険にしないで。さ、早く着付けをしようよ」

「……手伝う」

「ちょ……ちょっと二人とも!？」

工藤と霧島は有無を言わずに純白のウェディングドレスを着させた。

そして10分後……。

「うわあ〜　　凄く綺麗だよ、優子」

「……とても似合っている」

「そ……そう?」

2人にウェディングドレスを着せられた優子は照れながら問う。

「けど、これが体験だなんて勿体無いなあ〜。本物の結婚式だったら凄くいいのに」

「……もしそうだったら今頃は私と雄二は結婚してる」

「あ、そうだったね。でもいいじゃない代表、卒業したら本物の結婚式が出来るんだから」

「……出来るなら卒業する前に結婚したい。雄二が浮気をする前に」  
「どうやら霧島は婚約関係になっても雄二と早く結婚したいみたいだ。」

「代表、坂本君との結婚は後にして、今は優子の方に専念しなきゃ」

「……そうだった。優子、私達は先に会場に行ってるから」

「う…うん、分かった」

「それと優子、ボクたち以外にも……」

工藤が言おうとした時……。

コンコンッ

扉からノックする音が聞こえた。

「お、噂をすれば……入ってもいいよ」

ガチャッ

「失礼するのじゃ」

「秀吉！？まさかアンタも旅人さんに呼ばれたの!?!」



秀吉も入ってきた事に優子はまた驚く。

「うむ。しかし姉上……凄く似合っておるのじゃ、見てて惚れ惚れするぞい。ウエディング体験とは言え、これは本気で父親役をやらなければいけないようじゃのう」

「……………は？ 秀吉……アンタ今、何て言った？」

「何じゃ姉上、霧島達から聞いておらんかったのか？ ワシは旅人殿に頼まれて姉上のエスコート役を仰せつかったのじゃ」

「……………」

そこまでする必要は無いだろうと思う優子であった。

「さあ姉上よ、すぐにスタンバイするのじゃ（ガシッ！）」

「ちょ……ちよつと秀吉！ アタシは……………」

「ワシでは不服かの？」

「そ……そうじゃなくて……………」

「では行くのじゃ（グイッ！）」

「だから……！！！！」

秀吉は無言を言わず優子連れで行った。

.....

そしてウェディング体験が始まった。

会場にはには私・来牙・霧島・工藤や如月グランドパークのスタッフやその他の観客がいた。

因み配置はこんな感じである。

祭壇

私

優子(予定)

来牙

以降は席

工藤・霧島

スタッフ

その他の観客

『神父は私“さすらいの旅人”が勤めさせて頂きます。不慣れではございますが、一生懸命勤めさせて頂きますので、どうぞよろしくお願いいたします(ペコッ)』

私が言いながら頭を下げると観客側の方から拍手が響いた。

『まもなく後方より、新婦が木下秀吉様のエスコートで入場されます。ドアが開きましたら盛大な拍手をお願い致します』

と、後方のドアが開きウェディングドレスを纏いブーケを持った優子をエスコートをする秀吉が入場しバージンロードを進むと……。

）　　）　　）　　）　　）

パチパチパチパチパチ！！

オルガン演奏と盛大な拍手を送られた。

「（姉上、しっかりするのじゃ）」

「（な…何なのコレ……ホントにウェディング体験なの？）」

「……………（木下が凄く綺麗だ）」

優子は戸惑いながらも祭壇の前まで進み来牙の一步手前に止まる。来牙も来牙で優子のウェディングドレス姿に見とれていた。

『ここで花嫁の弟から、優子さんが新郎の来牙さんに渡されます。皆様もう一度拍手をお願いします』

「（来牙よ、後は任せたのじゃ）」

「（どう考えてもコレはリアルな結婚式にしか思えないんだが……）」

盛大な拍手の最中、秀吉は優子の手を来牙に渡し、来牙は優子の手を取る。そして来牙と優子は私に言われたとおりに秀吉に一礼して祭壇の前に進み、私の前に立つと一礼をする。

『これより、新郎新婦の結婚式を執り行うことをおごそかに宣言します』

「（旅人さんが神父なのは分かっていたが……）」

「（この人に誓いの言葉を言うのね）」

来牙と優子は私の顔を見て嫌そうな顔をしていた。

『（おいおい二人とも、そんな顔をしないでくれよ）』

私は内心で来牙と優子に突っ込みながらも誓いの言葉を言う。

『新郎、宮永来牙よ。汝は富める時も貧する時も、木下優子を愛し、共に暮らしていくことを誓いますか？』

「（……突っ込みたい所だが、ここは大人しく旅人さんに従っておこう）はい、誓います」

来牙はちゃんと誓い……。

『新婦、木下優子よ。汝は楽しい時も辛い時も、宮永来牙を愛し、共に歩いてゆく事を誓いますか?』

「（……アタシが……宮永君の妻になる……嬉しい）……はい、誓います」

優子は間がありながらも誓った。

『それでは新郎、新婦に指輪を（スツ）』

私が来牙にダイヤの指輪を渡すと……。

「あ…ああ。いいか、木下?」

「うん（スツ）」

手袋を外している優子の左手の薬指に指輪を嵌めた。（手袋とブーケは私の方で消している）

『では新婦、新郎に指輪を（スツ）』

私が優子に同様のダイヤの指輪を渡すと……。

「はい……宮永君」

「ああ（スツ）」

優子は来牙の左手の薬指に指輪を嵌めた。

『では誓いのキスをお願いします』

指輪を嵌めたのを確認した私は最後の誓いを言う。

「木下……（スッ）」

「宮永君……」

来牙は優子のベールを上に向けて両肩に手を置きながらキスをしようとする、優子は目を瞑る。

そして二人は……。

「……んん……」

キスをした。

それを見た席にいる人達は……。

「きゃ〜〜〜！！ 優子おめでとう〜〜！！！！！！（パチパチパチパチ！！）」

「……おめでとう（パチパチパチ！！）」

「姉上……ワシは感動しているじゃ！！（パチパチパチ！！）」

工藤、霧島、秀吉は満面の笑みを浮かべながら拍手をしております……。

「成功だ〜〜!!!!!!（パチパチパチパチ!!!）」

「おめでとう〜〜!!!!!!（パチパチパチパチ!!!）」

スタッフや観客達も盛大な拍手をしていた。

『これにてウエディング体験を終了させていただきます!!!!!』

私が終了宣言をしても未だ拍手の音が鳴り響いていた。

来牙×優子3 ? (後書き)

では皆様!! 来牙と優子に祝福の言葉をお願いします!!





『実はね、ウエディング体験をした二人には明日の朝までは夫婦と言う設定になっっているんだよ　そして夫婦になった二人はラブホテルへ行くって言うシナリオで……』

「ウエディング体験しただけで夫婦かよ!?　ってかアンタは学生の俺達にラブホテルへ行かせるって正気か!？」

「明日の朝まで……宮永君は……アタシの夫………凄くいいかも」  
私が説明している最中に来牙は突っ込み、優子はうっとりとした表情をしている。

『いいじゃん来牙、別にラブホテルに入るのは初めてじゃないんだから。美咲に連れられて行ったんでしょ?』

「な!?!　何でアンタが……」

何でアンタが知ってる!?!　と言おうとした来牙であったが……。

「ねえ宮永君、それどう言う事?　あの女と一緒にラブホテルへ入ったって本当なのかしら?」

「あ……」

先程までウツトリとしていた表情とは打って変わり、優子は恐ろしい笑みを浮かべながら来牙を問い詰めてきた。

『木下さん、此処は落ち着いて』

「旅人さんは黙ってて、アタシは宮永君に聞いているの。で、どうなの？ 本当にラブホテルへ行ったのかしら？」

「いや……それは……」

『（ガシッ！）向こうで話しましょうか木下さん（スタスタ）』

「ちょっと！ 離しなさいよ!!！」

私は来牙を問い詰める優子の腕を掴んで、来牙から少し離れた所で話を始めた。

.....

来牙から10m離れた私と優子は話をした。

「何するのよ!？ アタシは宮永君に……」

『まあいいじゃない、来牙が沢渡さんとラブホテルへ行っただけで嫉妬しない』

「!!！ し……嫉妬って何よ!？ あ……アタシは宮永君に嫉妬なんて……」

『ああそつだね。正確には沢渡さんが来牙をラブホテルに連れて行かせた事に嫉妬してるんだよね?』

「!!--!」

優子は凶星を突かれたかのような顔をする。

「ち…ちが! あ…アタシは……」

『やれやれ、漸く素直になったかと思つたけど、まだ完全ではないみたいだね。取り敢えず木下さん、今は私の話を聞いてくれ。当然、君にとって良い話だから』

「……………早く言いなさい」

どうやら優子は話を聞いてくれるみたいだ。

『アリガト では先ずちょっと嫌な話をするけど……木下さんは沢渡さんに嫉妬していたね? 来牙をラブホテルへ連れて行った事で』

「……………」

『悪いけど素直に答えてね。それでも答えたくないんなら(スツ) 私が優子に暗示を掛けようとしたが……』

「……………ええそつよ。今アタシは、あの女に嫉妬してるわ……憎いほごね」

『素直でよろしい。けど今回は私が君と来牙をラブホテルへ連れて行くから、それだと君は沢渡さんと同じ立場になる』

「……………」（……………）

ラブホテルへ行くと聞いた瞬間に、優子は無言になりながら顔を赤らめる。

『しかし君と沢渡さんには大きな違いがあるんだよ』

「え…違い？」

『そつだよ。沢渡さんの場合は口車に乗せて来牙をラブホテルへ連れて行つたけど、君の場合は……仮初めとは言え夫婦で行くんだよ。夫婦でラブホテルへ行つても問題は無い』

「……！ ……別にアタシは宮永君と夫婦なんて……………」

『よく言つよ、此処から出るまでの間に左手の薬指に嵌められている指輪をウツトリと見ていたくせに。来牙と夫婦になれたと言う幸せを噛み締めていたでしょ？』

「……………」

私の指摘に優子は言い返すことが出来なかった。それもその筈、優子はウエディング体験が終わった後でもじつと嵌められた指輪を見ていて、私や来牙、手伝わてくれた秀吉・工藤・霧島が声を掛けても全然反応が無かったのだ。これでも違うと否定出来る所があったら聞いてみたいが。

『もし君が沢渡さんに来牙とラブホテルへ行つたと自慢されても逆にこう言い返すことが出来る。“アタシは宮永君と結婚式に近いウエディング体験をした後にラブホテルへ行つた”って。流石の沢渡さんも、そんな強烈なカウンターを喰らったらシヨックを受けると思つよ？　そして絵梨にも……』

「……………確かに」

優子は私の言い分に納得し…………。

『（よし！）でしょう？　もし今すぐラブホテルへ行つて来牙と一晚過ごしたら、君は3人の中で凄く優勢な立場になる。そして……今日は一晩中、来牙を独り占め出来るんだよ？　大好きな男とウエディング体験しただけでなく、ラブホテルで過ごすんだから。コレは夢の一時と言つてもいい。さあ木下さん、この後の事を考えれば沢渡さんに対する嫉妬なんてどうでも良くなつてきたでしょ？』

「……………そうね、旅人さんの言うとおりだわ」

漸く素直になつてくれた。

『（よっしゃ！）では今から来牙とラブホテルへ行くね？』

「ええ。宮永君を……………来牙が妹さんと沢渡さんを忘れさせてやる位、熱い夜を過ごすわ」

『ほほ〜う、君が来牙を名前で呼ぶとはねえ〜』

「だってアタシと来牙は夫婦なんでしょ？　夫を名前で呼ぶのは当然じゃない」

『ご尤もです。では行くとしましょうか（スタスタ）』

「そうね。これ以上、夫を待たせるのはいけないし（スタスタ）」

そして私と（完全に素直になった）優子は来牙の所へと向かった。

.....

『ゴメン来牙、待たせたね』

「いや、別に構わないが……なあ木下、俺は……」

来牙は優子を警戒して見ていたが……。

「（ギユウ！）ゴメンね来牙、さっきは怒っちゃって

「……は？」

いきなり抱き付いて来た優子に素っ頓狂な声を出した。

「お……おい木下、お前どうした？ さっきまでと……」

「優子」

「え？」

「優子って呼んで。アタシ達は夫婦なんだから名前で呼ばなくちゃ」

「ふ……夫婦って……それはあくまで……」

『ダメだよ来牙。仮初めの夫婦とは言え、妻の宮永優子さんを名前で呼ばなきゃ』

来牙と優子のやり取りに私は口を出す。

「待て、勝手に木下を籍に入れるな」

『いいじゃないか。宮永優子……結構似合ってるよ。そしたら絵梨は宮永さんの義理の姉になるね』

「だから……」

「ねえ来牙、アタシが貴方の妻だと嫌なの？」

「……あ……いや、別にそう言う訳じゃ……」

私に抗議しようとする来牙であったが、優子が涙目で問いかけて来たので言い返す事が出来なかった。

「お願い来牙、明日の朝までアタシを妻として見て……その後は普通に宮永君って呼ぶから」



「……………分かったよ……………優子」

「嬉しい!!!(ギョウツ!!)」

優子は嬉しさの余りに来牙を力強く抱き締める。

『おやおや……………うわ、周りの人が二人を見てるよ(あ…向こうには秀吉達がいる)』

「お…おい! ここにはまだ人がいるんだぞ!?!」

「だって……………アタシ凄く嬉しくて……………」

来牙を抱擁する優子を見た周りの人はジロジロと見ており、秀吉達は優子のあまりの変わり様に信じられない目で見ていた。

『まあとにかく……………(ギロツ!!!!)』

「……………!!!!!!!!」

私が周りに殺気を込めた目で睨むと、野次馬達は颯爽といなくなってくれた。秀吉達はまだ見ているが私は気にしない事にした。

『さあお二人さん、今からラブホテルに行くよ。準備は良い?』

「ええ、良いわよ」

「……………もう好きにしてくれ」

私の問いに優子は快く返事をし、来牙はやけくそ気味で答えた。

『それじゃあ行くよ（パチンッ！……ピシユッ）』

「ふふふ……楽しみね、貴方（ピシユッ！）」

「おい、呼び方が変わってるぞ（ピシユッ！）」

私が指を鳴らして姿を消すと、優子と来牙も一緒に姿を消した。

そして次の舞台はラブホテルとなる……。

おまけ

来牙と優子のやり取りを見ていた秀吉達は……。

「あ……あの姉上がデレデレ状態になっていたのじゃ……」

「優子が旅人さんに何を言われたのかは知らないけど……凄く変わったね」

「……羨ましい」

秀吉と工藤は優子の変貌振りに驚き、霧島は羨望の眼差しを送っていた。

「ねえ弟君、念の為に聞くけど優子って家では、あんなキャラなの？」

「いや、それは無いのじゃ」

「だよねえ。所で代表、何か羨ましそうに見ていたけど？」

秀吉の返答に工藤は予想していた事だと分かったので、今度は霧島に問い掛けた。

「……雄二も優子と同じく素直になってくれたら私はどんなに幸せだったか……」

「……アハハハ、確かにそうだね」

「……私も旅人さんに頼んで、雄二とウェディング体験をして貰おうかな？」

「じゃが霧島、お主はもう既に雄二と婚約しておるではないか。今更そんな事をしなくても……」

秀吉の問いに霧島は……。

「……そうでもしなければ雄二はまた私を差し置いて他の女と浮気をしそうだから」

相当、雄二を束縛したいみたいである。

「いや、それは無いと思うのじゃが……」

「そつだよ代表、坂本君がそんな（命知らずな）事をするとはとても……」

そんな霧島に秀吉と工藤は突っ込んだ。

来牙×優子3 ? (後書き)

旅人『さてさて、絵梨と美咲が恐ろしい事になる前に逃げ……………』

ザクツ！ 槍が私の一歩手前に刺さる音

ダァンツ！ ダァンツ！ 銃弾が私の両足の周りに被弾する音

旅人『……………それでは失礼します(ピシュツ!)』

閑話短編2（前書き）

今回は閑話とその後の話です。

## 閑話短編2

短編？ 来牙と優子が遊園地にいる時

とある店の中で……。

「あ〜ん もう！ ジミーさんのエッチイ」

「すまぬでござる。その美しい乳房を見て、つい触ってしまったで  
「じゅん」

「ジミーさま、私の胸も触ってえ」

「おっと、拙者とした事が……はい（ムニユ）」

「いや〜ん 揉んじゃだめよお」

「「「ジミーさま 私達も」

横幅の広い椅子にジミーが座ってスタイル抜群の美女達に囲まれていた。何故ジミーがこんな美味しい思いをしているのかと言つと、二日前に時間を遡る。

.....

二日前……。

「旅人！！ 見つけたでござる……！」

『ん？ 何だジミーか』

私が商店街を歩いているとジミーが私を見つけて話しかけてきた。

『私に今までの恨みでも晴らす気か？ だったら遠慮なくかかって来い。返り討ちにしてやるから』

「ち…違つでござる…… お主は拙者を何だと思つておるのでござるか!？」

『自称最強を誇る弱小グループの一人である似非忍者』

「それは違つござる…… 弱小は源三殿達であつて拙者こそが最強でござる……！」

私が思つたままを言うと、ジミーは即座に否定して最強と名乗る。

『…………… まあそんな事はどうでもいい。で、やる気か？ (ポキポキ)』

私が指の骨を鳴らしてジミーに近づくと……。

「きよ… 今日はお主に頼みがあつて来たのでござる……！」

『頼みだと?』



ジミーの返答に私は足を止めた。

「そつでござる！ 拙者の頼みは……（バツ！）お願いでござる旅人殿！！ 拙者にハーレムを味合わせて欲しいでござる……！」

『……………』

ジミーがいきなり土下座して何を仕出かすかと思ったが、ハーレムと聞いた瞬間に私は言葉を失った。周りの人はジミーが土下座を見ると段々と野次馬化してきた。

『ジミー……寝言は寝てから言え、じゃあな（スタスタ）』

「ま…待つでござる旅人殿！！（ガシッ！）」

私が去ろうとすると、ジミーが私の足にしがみ付いて来た。

『離せ、ジミー（スタスタ）』

「お願いでござる……！ 拙者を見捨てないで欲しいでござる……！（ズルズル）」

歩いている私にジミーは必死にしがみ付いて引き摺っている。

『何で私がお前にそんな事をしなければいけないんだ？』

「む…無論タダでは無いでござる！ コレを！（スッ）」

ジミーが私に渡した物は……。

『いらん！（ポイツ！） 貴様バカにしてるのか！？』

うまい棒一本だったので即座に捨てた………しかも賞味期限が切れ  
ている。

「拙者にはこれしか無いのでござる！ だから……」

『ええい鬱陶しい！！ 早く離れろ！！ さもないと………（いや、  
待てよ………）』

私はジミーを引き剥がそうとしたが、咄嗟に何か思いついた。

『（仲間割れを見るのも一興かもしれないな）………いいだろう、お  
前の望みを叶えてやる』

「ほ………本当でござるか！？」

『ああ。よくよく考えてみれば、お前は他の連中とは違って私に土  
下座してお願いしたからな。だったら、それくらいの頼みなら構わ  
んよ』

「恩に着るでござる！！ これからはお主の事を旅人様と呼ばせて  
頂くでござる……」

ジミーは私の言葉に何の疑いも無く感動している。

ハーレムを叶えてやるだけで此処まで感謝されるのもどうかと思う  
が、私としては事が簡単に運んでくれているので敢えて突っ込まな  
い。

『（フッフ、見せて貰うよ。お前達の醜い争いをな……）ジミー、二日後この店へ行け（スッ）』

「此処は？」

『行けば分かる。いいな、二日後だぞ？』

「了解したでござる……！」

.....

そして二日後に……。

「（いやゝ旅人様には感謝でござるな。美女達が拙者に群がるのは当然でござるが、これ程素晴らしいとは……）」

指定の店に行ったジミーが美女達に囲まれていたと言っ訳である。

「ジミーさま、貴方様の素晴らしい話を私達に聞かせてえ」

「……私達も聞きたい」

「おお、そうでござるな。では拙者が何故忍者になったかのエピソードを話すでござる」

「「「「きゅん」」」」早く聞きたい」

ジミーが美女達に囲まれている最中に……。

「ジミ~~~~~!!!!!! 貴様は絶対に許さんのじゃ~~~~~!!  
!!!!!!」

「俺達を裏切った報いを受けてもらうぜ!!」

「ミミーの怒りのボルテージがMAXダゼ!!」

残ったグレートレンジャー共はジミーを探していた。

短編? 来牙と優子がラブホテルで甘い一時を過ごしている時

来牙の家の前で……。

『(ピシュッ!)よし、取り敢えず私が来牙に変身して……(パチンシュー!)』

私が指を鳴らすと、私の姿が来牙に変わった。

どうして私が来牙の姿になる必要があるのかと疑問に思うでしょうがこれには当然訳がある。

皆さん、本物の来牙が優子とラブホテルで過ごしているなんて絵梨に言ったら……どうなるかは既に予想が付くと思います。

それを防ぐために私が来牙になってやり過ごすのである。

『あと声も……あゝ……あゝ……俺は宮永来牙……俺は宮永来牙……よし！』

自身が来牙になったのを確認した私は家へ入った。

ガチャッ！

「おかえり、来牙君（ギユウツ）！」

『え……絵梨……』

ドアを開けた目の前に絵梨がいて、いきなり来牙になっている私（以降は偽来牙）に抱き付いて来た。

「もう何処に出かけて……ん？」

『どうした絵梨？』

「……………ねえ、来牙君だよね？」

『はあ？ 何言ってるんだ？（こ…コイツ、もしや気付いたか？）』

絵梨は偽来牙を見て怪訝な顔をしている事に、私はちよつと不味いと思つてきた。

「……………」

『おい絵梨、何を疑っているのかは知らんが、取り敢えず俺を家に入れてくれないか？』

「……………ごめん来牙君。あたしの思い違いだったみたい」

『そうか……………（やばい、絵梨はもう気付いているな）』

私は冷や汗を掻きながら家に入って、来牙の部屋に入る。

……………

来牙の部屋で……………

『くそつ、まさかこんな早くに絵梨に気付かれるとは』

ベッドに座った私は絵梨の勘の鋭さに舌を巻いた。これは私の完全な誤算であり、絵梨の来牙に対する思いを改めて認識しなければい

けないと思った。

と、そんな時……。

ガチャ！

「来牙君、ちょっと聞きたい事があるんだけど」

『何だ？ 聞きたい事って……』

絵梨がいきなり部屋に入って来たが、私は何とも無いような表情をする。

「うん、それはね（ポスツ……ジー）」

絵梨はベッドに座って偽来牙の顔を見てくる。

『お……おい、さっきからどうした？』

「……いつまでそんな芝居してるつもりなの？」

『……は？』

「だから……来牙君に変装して何をするつもりだったの、旅人さん？」

『……絵梨、言ってる意味が分からないんだが』

「早く正体を明かさないと、いい加減殴るよ？」

『……………どうして分かった？』

やはり絵梨にはバレていたみたいなので、私は元の声で絵梨に質問をする。

「来牙君に抱きついた時に違和感があったの。来牙君はいつもいい匂いがするのに全然しないんだもん」

『……………お前は犬か？　ってかそれだけで私だと気付くとは、流石は来牙の妹であり恋人だな。見事としか言いようがないね』

「そんな事はどうでもいいよ。（ガシツ！）それで、なんで旅人さんが来牙君に変装してるのかな？　そして本物の来牙君は何処にいるの？」

私の賞賛を一言で切り捨てた絵梨はすぐに私の腕を掴みながら本題に入って来る。絵梨の頭の中では、事と次第によつては私をボコボコにすると考えているみたいだ。

『……………絵梨さん、どうして私の腕を掴むのかな？』

「それは当然、旅人さんを逃さない為だよ」

『……………さいですか』

「さあ早く話して。来牙君が何処で何をしているのかを……………」

『……………もし此処で、それは秘密です　って言ったらどうする？』



「そりゃあ……（スッ）殴ってでも聞く」

絵梨は笑みを浮かべながら恐ろしい事を平然と言う。

本気じみた絵梨の言葉に私は……。

『では教えましょう……何てね（スッ）……トン（』

「あっ………」

『私を来牙と認識し、さっきまでのやり取りを忘れる』

「……うん、分かった」

非常手段として暗示を掛ける事にした。

『（フフフフ……甘いよ絵梨）……絵梨、夕食までまだ時間があるからゲームでもするか？』

「そうだね」

私が再び来牙の声を使って絵梨と話すと、暗示に掛かった絵梨は何の疑いも無くゲームをする。

そして私は明日の朝まで来牙として過ごした。因みに就寝の時には絵梨とは別々で寝るようにしている。いくら私が来牙に変装しているとは言え、人様の彼女と寝る気は毛頭無い。

絵梨に悪い事をした私は次に会う時に何か詫びとなるイベントを用

意しよつと考えた。

## 綾の職業体験

ローズのセーフハウスにて……。

『ふわあ〜〜……あ〜この間は凄く疲れたあ〜』

私はリビングにあるソファで横になっていた。

「疲れた割には随分と顔がニヤけていますわね、どうぞ（コトツ）」

『まあな。よつと……優子が素直になって、自分から来牙の妻って言った時から笑いを抑えるのが一苦労だったよ（ズズズ）』

白のメイド服を着ているローズが熱い緑茶をテーブルに置いたので、私は起き上がって緑茶を飲みながら先日の事を思い出す。

『それとジミーの方も結構面白かったがな』

「確か……お爺ちゃん達と仲間割れをする為に仕組んだとか……」

『ああ。ジミーが美女達と戯れている時に、爺達がどうやって見つけたのかは知らんが大騒ぎになっていたぞ』

私が来牙に変装している時にジミーがどうなっているかを携帯テレビを使って見たが、それには私の予想通りにジミーが源三達と仲間割れしていた。

源三は正義の鉄槌とかめかしながら嫉妬に狂ってジミーに襲い掛かり、食い太郎は“裏切り者には死を！”とFFF団染みた事を言っ

て飛び蹴りをしたり、マツハ吉田は“マツハアタック！”と言いながらもノロいタツクルを仕掛けていたりで、ジミーは美女達に良い所を見せる為に必死に応戦していた……と言う事があったのである。

『あ後は美女達が源三達を宥めて、グレートレンジャー全員でその子達に囲まれてウハウハーレムを味わっていたけど……』

「けど旅人様、ワタシの記憶が正しければ、お爺ちゃん達の行ったお店の子達は全員ニユ……」

『ローズ、時には知らない方が幸せだと言う事もあるんだよ』

ローズが真実を言う前に私がすぐにストップをかけた。

「あらワタシとした事が。申し訳ありません旅人様」

『分かればいい。所で……さっきから気になっていたんだが、何でメイド服を着ているんだ？』

「それは当然、旅人様にご奉仕をする為に」

『……………あつそ（ズズズ）』

ウインクするローズを見た私は見なかったかのようにお茶を啜る。

「そう言えば旅人様、ワタシちょっと詩を書いてみましたの」

『詩だと？』

「はい。詩と言っても告白同然の詩なんですけど」

私がお茶を飲んでいる最中にローズは詩が書かれているらしい紙を用意した……それも2枚。

『2枚あるって事は長文の詩なのか？』

「いいえ、翔ちゃん用とお爺ちゃん達用に分けてますわ」

『ほう……ローズがよければ詩の内容を聞かせてもらいたいんだが、構わないか？』

「勿論ですわ。その為に用意しましたの」

『そうか。なら読んでくれ』

「はい、では……ゴホンッ」

詩の書かれている紙を見て、ローズが朗読を始めた。

みんなのうた

『太陽と向日葵ひまわり』

気が付けばいつも

貴方の姿を追っている

思い出せばいつも

貴方の笑顔を求めてる

遊佐翔

たとえるならばワタシは向日葵で

貴方はワタシを照らす太陽です

貴方の輝きを追いかけて

ワタシは太陽の花を咲かせます

この気持ちをうまく表す言葉を知りませんが

それでも貴方に伝えたい

好きです翔ちゃん貴方のことが

M A T A 再び G A T T A I したい

作 ローズ

ローズが一つ目の詩を読み終わると……。

『……………（ププッ！）』

私は笑いを必死に抑え込んでいた。

「次行きますわ」

『……………つ……続けてくれ』

私の様子をお構い無しに次の詩を読み始めるローズ。

みんなのうた

『貴方達を求めて』

ワタシ達が求めるのはいつだって

貴方達と言う4人の存在だった

何かを思ったびにいつも

貴方達の笑顔を捜している

ワタシ達のグレートレンジャー

ワタシ達が貴方達を求めるのは

きつとこの想いが本物で

貴方達にいつか伝わると信じているからで

ワタシ達の心には見えています

ワタシ達と貴方達の輝かしい未来が

だから貴方達に敢えて言ってみたい

愛しているグレートレンジャー貴方達のこと

HONKI で MATA GATTAIしたい

「ふうっ………どうでしたか？ 旅人様」

『あ…あ。……とても良く出来た詩だったぞ』

詩を朗読し終えたローズは私に評価を聞いてくると、私は笑いを必死に抑えながらも賞賛する。

「ありがとうございますわ」

『ど……どういたしまして………（ズズズ）』

と、私が残ったお茶を飲み終えた、その時……。

ガチャッ！



「ご主人様！ アタシが御奉仕してあげます！（ギユウツ！）」

黒のメイド服を着た綾がリビングに入って早々、ソファーに座っている私に抱き付いて来た。

「ん？ 綾ちゃん、またメイド服を着てるのかい？」

「あらあゝよく似合ってるわねえゝ　ワタシが作った甲斐があったわあゝ」

「ありがとうローズお姉ちゃん。お姉ちゃんの着ている服も似合ってますて凄く可愛いよ」

「嬉しい事を言ってくれるわねえゝ綾ちゃん」

「……………」

ローズの着ているメイド服を似合っていると聞いた綾に私は無言となっていた。ローズが可愛い？ 全国の男に聞いても、そんな台詞は絶対に言わないだろう。私は一瞬、綾の目がおかしくなっていないかと危惧の念を抱いた。

「ご主人様、綾に何なりと御命令下さい」

考えている私を他所に綾は私に何かをして欲しそうに上目遣いで見してきた。

「……………あのさあ綾ちゃん、前にも言ったけど“ご主人様”って呼

び方は止めて。今まで通り“旅人さん”と呼んで……」

「ご主人様、綾の事が嫌いですか？（ウルウル）」

『……………』

綾は私にキスが出来そうな位に顔を近づけて涙目の上目遣いで訴えてくる。

これに私はいつも……。

『……………はあっ……………もう好きに呼んでいいよ』

「ご主人様大好き！！（ギユウツ！）」

何時もの如く負けて、綾は再度抱き付いてくる。

『綾ちゃん、私にご奉仕するのは良いんだが……………君は学校の宿題があったんじゃないかい？』

「うっ！……………何で知ってるの？」

綾は私から離れて、先程までの嬉しそうな表情から不味いという顔になっていた。

『真理奈から聞いた。“もし綾が私の所に来たら宿題をやらせるよ”って言ってたよ』

「……………もう、お母さんは何時も旅人さんに余計な事を言うんだから」

綾は真理奈と聞いたらガクンと顔を落とした。因みに真理奈とは綾の母親である宮本真理奈の事である。その人とは近い内に会う事になっているので今はここまでにしておく。

『コラコラ、母親にそんな事を言っちゃいけないわよお』

「そうだよ、綾ちゃん。お母さんを大事にしなきゃいけないんだから。で、何の宿題を出されたんだい？ 良かったら手伝っよ」

「……………今回はレポートを書くことになってるの、職業体験レポートを」

綾の宿題内容を聞くと……………。

『ほづ……………』

「それはそれは……………」

私とローズは面白そうな宿題だと思った。

『じゃあもう職業体験はやったのかい？』

「ううん、まだやってない。あと10日の内に体験しなければいけないんだけど……………」

『そうか……………（スクツ）じゃあ今から職業体験をしてみる？』

「え？」

「旅人様、綾ちゃんに何を体験させるつもりですか？」

『後で教える。それじゃあ今から行くよ（スッ）』

私が指を鳴らそうとすると……。

「ちょ……ちょっと待って旅人さん！ 出かけるなら今から服を着替えて……」

『大丈夫、その服に関係している店だから。それじゃあローズ、私と綾ちゃんは出かけるから何か遭ったら呼ぶ（パチンツ！……ピシユツ！）』

「行ってらっしゃいませえ〜」

綾がリビンググから出て着替えようとしたが、私がすぐに指を鳴らして綾と一緒に姿を消した。

とある店に着いて二時間後……。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

綾は店に入って来たお客さんの対応をしていた。

『お〜お〜、綾ちゃん凄いいじゃん』

私は裏方で綾の接客対応を見て感心している。

今回、私が綾を連れて来た店はメイド喫茶であった。メイド服を着ている綾には丁度良いと思い、私は此処の女性店長に“小学生の綾に職業体験をさせてくれ”と言ったら……。

「この子、凄く可愛いじゃない！ すぐにでも働いてー!!」

と言われて即時採用された。

そして店長がある程度の接客内容を教えて今に至るのである。他の客は綾を見て鼻の下を伸ばしていた。

「メイドさん、お水のお代わり貰える？」

「はい（トポトポ）……どうぞご主人様」

「メイドさん、コレを注文したいんだけどいいかな？」

「えっと……ブラックコーヒーですね、畏まりました」

客に呼ばれた綾は丁寧に接客して調理場に行く……。

「はあ……あの子すげ〜可愛い〜」

「俺めっちゃタイプだよ」

「だよな〜あの子の笑顔を見ると癒されるよ」

気持ち悪い笑みを浮かべながら綾の対応に満足していた。

『ハハハ……取り敢えず成功と言った所か』

「さすらいの旅人さん、あの子を連れて来た貴方にはお礼を言わなければいけないわね」

『ん？』

私は苦笑しながら見ていると女性店長がいきなり私に礼を言ってき

た。

『お礼って……私はただ綾ちゃんに職業体験をしてくれと頼んだだけで』

「それでもよ。あの子が来た途端に売り上げがドンと上がったわ」

『まだ二時間しか経ってないのに？』

「ちょっと綾ちゃんの顔写真を宣伝したよ……そうしたら……フフフ」

『（おいおい……）』

いつの間にか綾の写真を取って外で宣伝した店長の行動に私は素早いと思った。

『あの～店長さん、綾ちゃんは体験をしているだけで……』

「分かってるわよ。ちゃんとその辺は弁えてるから」

『（外で宣伝している時点で、弁えているとは思えないんだが……）』

店長の矛盾に私は内心で突っ込んだ。

しかし店長が綾を宣伝したがるのも無理もない。特別視している訳ではないが、綾は容姿やスタイルがモデル並であり、男子中学生や高校生によく告白される事がよくあるのだ。

ぶつちやけ、綾は秀吉と同様で男子生徒に多数告白されている事がある。中には物凄いイケメンがいるのだが、綾は好きな人がいるからゴメンなさいと何時も断っていた。告白を断っている事に私が綾に好きな人がいるのかと聞いても答えてくれない。その時は私に何か訴えてくるような目で見てくるが、私にはさっぱりだった。

とまあ、話が少し脱線したが綾の容姿やスタイルに惹かれて客が一杯来ている事に店長は大満足なのであろう。

「ああ〜あの子が小学生だなんて……もし高校生だったらすぐに採用したいのに」

『ねえ店長さん、私が綾ちゃんにそっくりな女の子がもう一人いるって言ったらどうします？ 15〜6歳の女の子ですけど……』

「!……!」

私が少々小声で言うと、裏方から綾を見ていた店長が急に私の方を見た。

「……………それ本当?」

『ええ……………けどまあ聞いてみないと分かりませんが』

「すぐに呼んで!!…そして働かせる!!…」

『いや、その子はアルバイトしているから、すぐには無理かと……』

店長の勢いに負けている私であったが、絵梨の事情を言った。



「バイト代はそれなりに弾むから呼んで!! 今すぐに!!」

『……………わ…分かりました。少々お待ち下さい』

私は店長から離れて懐から携帯を取り出した。

『やれやれ……………あの店長さんは決断が早い事で(ピッ…トゥルルルル…トゥルルルル…プツツ)もしもし絵梨、ちょっといいか?』

そして絵梨に事情を話し、絵梨の返答は……………。

おまけ

私が裏方で店長と話している時……………。

「(うゝん、此処を紹介してくれた旅人さんには感謝するけど……………  
やっぱりアタシとしては旅人さんに御奉仕したいな)」

綾は接客中にそんな事を考えていた。

「(ホントだったらメイド服で旅人さんを振り向かせる筈だったんだけど……………)」

「ねえ君、もしよかったら俺と付き合っ……」

「申し訳ありません。ご主人様のお誘いは大変嬉しいのですが、当  
店ではナンパはお断りですので」

「そ……そうか………はあっ」

考えている最中に下心丸出しの男の客からナンパされる綾であるが  
即座に断った。

男は綾の対応を見て無理だと判断し、諦めて席に戻り溜息を吐く。

「（もうこれで10回目………どうしてお客さん達はアタシにあんな  
事を言うんだろう？）」

容姿に惹かれてナンパする男共に綾は全く分からなかった。

## 綾の職業体験？

絵梨に連絡して翌日の午後の事……。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

「うお~~~~!! 今度はメイド姉妹か~~~~!!!!!!」

赤のミニスカメイド服を着た綾と絵梨が笑顔で出迎えると、客達は狂喜乱舞した。

メイド喫茶の入り口前でも（主に男の）客達が行列に並んでおり、窓の外からも綾と絵梨の姿をガン見している。

因みに二人の髪型だが、綾はツインテール、絵梨はポニーテールだ。それだけが二人を唯一見分ける事しか出来ない位にそっくりなのであった。

「ああ~~~~二人の姿が絵になってる~~~~（パシャパシャパシャ!）」

「おい店長さん、二人を撮影してないで仕事しろよ?」

裏方で綾と絵梨をカメラで撮っている女性店長に（何故か厨房の手伝いをしている）私は突っ込む。

.....  
絵梨に連絡した昨日の事……。

『なあ絵梨、もし暇だったらメイド喫茶のアルバイトを手伝ってくれないか？』

と頼んだ私であつたが……。

《遠慮しとく、自分のバイトで充分間に合っているから。それに今、あたしバイト中だし》

『さいですか……』

予想通りの返答をしてくれた。そこで私は一枚のカードを切る。

『残念だよ絵梨。折角、綾ちゃんが職業体験と言つ名目で今メイド喫茶で働いているんだけどね〜』

《!?!?!》

電話越しでも分かる位に絵梨は食い付いた。

『綾ちゃんの着ているメイド服は似合つてて凄く可愛いよ。絵梨が抱き付きたい位にね……』

《……………》

絵梨は無言になっている。恐らく頭の中で行くか行かないかで凄く迷っているんだろう。その迷っている絵梨に私はもう一つのカードを出す。

『もし手伝ってくれたら、メイド服を着ている綾ちゃんを撮影したって構わないし、好き放題にしても良かったんだけどねえ』

《……………》

『（あとちよつとかな？）悪いな絵梨、この話は無かった事に……』

《やる！！綾ちゃんと一緒にメイド喫茶でアルバイトする！！！》

『うおう！？』

絵梨がいきなり大声を出してきたので私は耳にくっ付けている携帯を離すが、再度くっ付ける。

『い……いいのか絵梨？今のバイトで充分間に合っているんじゃないのか？』

《あんな報酬を出されたら断るわけ無いでしょ！？》

『……………あつそう。それで今日は無理なら明日は大丈夫か？（食い付いてくれた）』

やる気満々の絵梨の発言に私は呆れながらも、内心上手く行っただと思っっている。

《明日の午後からだったらOKだよ》

『ほいほい、それじゃあ明日の午後1時に来てくれ。場所はメールで送っておくから』

《分かった、じゃあ明日ね (プツッ!)》

絵梨はすぐに電話を切ってしまった。

『(ツーン…ツーン)……と言つ訳で店長さん、今日は無理だけど明日の午後から大丈夫だってさ』

「……………まあいいわ。今日は綾ちゃんが来ただけでも収穫だから、楽しみは明日に取っておきましょう」

最初は不満顔の店長だったが、明日の事を考えると更に楽しくなりそうだからと思って諦める事にした。

『そう言ってくれると助かります』

「ウフフフフフ……早く明日になってくれないかなあ〜」

『……………』

店長が気持ち悪い笑みを浮かべているのを見た私は少し不安だった。

と、昨日はそんな事があって絵梨が来ていると言つ訳である。

「ご主人様、ご注文は如何致しますか？」

「（ああ〜）　　今すぐにも綾ちゃんを抱き締めたい〜）」

綾が接客している姿を見て絵梨は抱き締めたい衝動に駆られていた。

絵梨は花屋のバイトが終わって家に着いて早々、部屋に籠って色々なコスプレの服を出していたのだ。自身の分身とも言える綾に絵梨は別の服を着せたい衝動に駆られている。

絵梨も絵梨で店長と同様に早く明日になれとソワソワしながら早めに夕御飯と風呂を済ませて早々に就寝した。本当だったら来牙とエッチする予定だったが、絵梨はそんな事は気にもせずベッドに入り込んで寝てしまったのである。

来牙は絵梨とエッチする事が出来なくて残念だったが、偶にはそんな日もあるかと思い、ゲームをやり続けていたが。

「（早く綾ちゃんをメイド服以外の物を着せたいなあ〜）。あ！あの人、綾ちゃんのお尻を触ろうとしてる！　そうはさせないんだから！！）」

綾を見ている絵梨は、一人の男性客が綾のお尻を触ろうとしていたので……。

「（パシンッ！）ご主人様、その手で何をするつもりだったんですか？」

「え……あ……これは……その……」

その手を払いのけて怖い笑みを浮かべている。

「おイタはいけませんよ、ご・主・人・様？」

「……………すみませんでした」

絵梨の背後から悪鬼でも見えたのか、男性客は謝ってションボリとしていた。

「絵梨お姉ちゃん、どうかしたの？」

「何でもない。綾ちゃんは気にしないで」

「う…うん」

綾が再び接客をすると……。

「（綾ちゃんはあたしが守らなきゃ！）」

まるで大事な妹を守るかのように誓う絵梨であった。

『おい絵梨。何を誓っているのかは知らんが、取り敢えず仕事して



くれ』

「あ……」

私に突っ込まれた絵梨は思い出したかのような顔をする。

『はいコレ、あそこのお客さんに』

「……………はい」

絵梨は仕方なく仕事に専念する事にした……………綾に不届きな事をしようとする男性客の目を光らせながら。

綾、絵梨と何故か私も手伝わされて2時間後……………。

「綾ちゃん、絵梨ちゃん、休憩に入っっていいわよ。それと厨房にいる旅人さんも休憩に入るように伝えといて」

「あ…はい」

「分かりました」

店長から休憩と言われた綾と絵梨は裏方へと入っっていく……………。

「旅人さん、店長さんから休憩入っても良いって」

『ほいほい、それじゃあ3人で談笑でもしますか』

綾が私に店長からの伝言を伝えると私は休憩室に入った。

『ふうつ……まさか私も手伝わされるとは思わなかったな。それと絵梨、綾ちゃんのメイド服姿を見てどう思った？』

「もう最高だよ（ギョウツ！）」

「え…絵梨お姉ちゃん？」

いきなり絵梨に抱き締められた綾は戸惑い、綾を抱き締めている絵梨の顔は緩みきっていた。

「ああ〜〜こんなに可愛い綾ちゃんを抱き締めると凄く癒される  
〜」

『絵梨……それは暗に自分も可愛いと言っているようなもんだぞ？』

「アタシ何かより、絵梨お姉ちゃんの方が可愛いと思うけど……」

『……………（綾ちゃんは本心で言ってるんだろっな）』

私は絵梨の発言には突っ込んだが、綾の発言に関しては特に何も言わなかった。

「何よ、旅人さんだって綾ちゃんの事を可愛いと思ってるくせに…  
…」

『そりゃまあ……綾ちゃんは可愛いけど……』

「ええ!? ( / / / / / / / / / / / ) 」

私の発言に綾は頬を赤らめた。

「( お? これはもしや ) 」

「た…旅人さん……アタシはそんなに……」

『そんな事無いよ、私は笑顔で接客している綾ちゃんに思わず見とれてしまったからね』

「み…見とれ……はうつ~~~~ ( / / / / / / / / / / / / / / / / / ) 」

『綾ちゃん?』

綾がいきなり顔が茹蛸の様に真っ赤になって倒れそうになったが、抱き付いている絵梨が支える。

「ダメだよ旅人さん。綾ちゃんを口説くなら、あたしがいない時にやっつてよ」

『口説いたつもりは無い……本心で言ったただけだ。まあ綾ちゃんが私を異性として見ているんなら話は別だけど……』

「!……!」

絵梨は私の発言を聞いてチャンスだと言うような顔をする。

「綾ちゃん、今がチャンスだよ。早く大好きな旅人さんに告白したほうがいいよ？」（ヒソヒソ）」

「な…何で絵梨お姉ちゃんが知ってるの!？」

『どうしたの？ 綾ちゃん』

綾がいきなり大声を出したので私は綾の方に顔を向けた。

「……………何でもない」

「気にしないで、旅人さん」

『……………そう。それじゃあ男の私は休憩が終わるまでゲームしてるから、女子二人は仲良くお話しでもどうぞ』（ゴソゴソ）」

私は近くの椅子に座って懐からPSPを取り出してゲームを始め、綾は私がゲームをしたのを確認すると、小声で絵梨に話しかける。

「ど…どうして絵梨お姉ちゃんが知ってるの？ 話した覚えは無いのよ……………」

「そんな事どうでもいいから。さあ綾ちゃん、此処で“旅人さんの事を異性として好きだ”ってハッキリ言わないと（ヒソヒソ）」

「……………」

「（無いとは思っけど）旅人さんが他の女の子に盗られちゃっても

いいの？」

「!?!?!」

絵梨の発言に綾はハツとする。

「そ…それは確かに嫌だけど……真美お姉ちゃんに盗られたくないし……」

「へ？……（何？　もしかして真美さんも旅人さんの事が好きなの？……）」

意外な事実を知った絵梨はゲームをしている私を見て信じられない顔をする。

「（こ…これは予想外ね。まさか旅人さんに思いを寄せている人が他にもいたなんて……真美さんには悪いけど、アタシは綾ちゃんを応援させてもらうから）綾ちゃん、真美さんに盗られる前に早く告白しないと……」

「……………う…うん……………」

絵梨に催促された綾は決断してゲームをしている私に近寄る。

「あ…あの、旅人さん」

『ん？　どうしたの綾ちゃん』

綾がいきなり声を掛けてきたので私はゲームを止めて綾の顔を見る。

「アタシ……旅人さんの事が……」

『?』

「（よし！ そのまま行け綾ちゃん！！）」

絵梨がエールを送り、綾が告白をしようとしたその時……。

「絵梨ちゃん！ 綾ちゃん！ 悪いけどすぐに来て！！ それと旅人さんもすぐ厨房に入って！！」

店長がいきなり入り込んできた。

「店長さん……あたし達はまだ休憩中なんだけど（何でよりによってこのタイミングで来るの!?!）」

「え？ え？」

『まだ客の列が続いているんですか?』

空気を読めていない店長に絵梨は内心突っ込み、綾はいきなりの事に戸惑い、私は店長の慌て様を見てまだ客が多くいるのだと察した。

「そうなのよ、旅人さん！ お客さん達は綾ちゃんと絵梨ちゃんを出せって煩くて、おまけに食べ物ばかり注文してくるから厨房の人手が足りないのよ！！ だからお願い！！」

『やれやれ、折角の休憩中だが仕方ない（スツ）』

店長の言い分に私はゲームを止めて厨房に入る準備をする。

「それじゃあ二人とも、お先に（スタスタ）」

「さあ絵梨ちゃん！ 絵梨ちゃん！ 君達もホールに！」

「……………」

私が厨房に入ったのを確認した店長は二人に早く行くように催促するが、二人は無言だった。

「ど…どうしたの二人とも？」

「……………はあっ（スタスタ）」

「店長さんってKYなんですね（スタスタ）」

「へ？」

綾は残念そうに溜息を吐いて行き、絵梨は店長を睨みながら一言だけ言っただけでホールへ向かった。

「わ…私がKY？ ……………何故？」

絵梨にKYと言われた店長は何でそんな事を言われたのが全く分からなかった。

おまけ

綾と絵梨がホールで働いている時……。

「おい聞いたか？ 今話題のメイド喫茶で綾ちゃんと絵梨ちゃんがいるって」

「何！？ それは本当か！？」

「だったら今すぐに行かねば！！」

「紳士である我等が行かなければ彼女達に失礼だ！」

「待つてる絵梨ちゃん！」

「綾ちゃん！ あのクソ野郎何かより俺達がどれだけ素晴らしいかを教えてあげよう！！」

何処からか聞きつけたFFF団は一人のいるメイド喫茶に向かい……。

「何じゃと！？ 絵梨と綾ちゃんがメイド喫茶で！？」

「源三！ 今すぐにメイド喫茶に行くぞ！！」

「ミー達ノ勇姿ヲ彼女達ニオシエネバ！！」



「綾ちゃんに拙者達の素晴らしさを教えねばいけないでござるな！」

グレートレンジャー共もメイド喫茶へと向かった。

だがコイツ等はまだ知らなかった……私も二人と一緒にメイド喫茶にしていると話す事。

## 綾の職業体験？

綾と絵梨がメイド喫茶でアルバイトをして1日が経った日曜日の事。

メイド喫茶が午前10時に開店して1時間後……。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

「はい、ブラックコーヒーに紅茶ですね。畏まりました」

綾と絵梨やその他のメイドさんが大忙しで接客しており……。

「旅人さん！ カルボナーラとクリームリゾットとミルクレープとチョコレートパフェね！」

『はいはい分かりましたよ！ ってか店長！ 何で私も料理を作る事になったの！？』

「しょうがないでしょ！ お客さんが一杯来ているんだから人手不足なのよ!!!」

私はいつの間にか店長に料理担当にされて料理を作っていた。

『あゝも〜！ 一人で4つ作れないよ！ こうなったら……（パチンツ！ パツ！）』

注文の多さに私は一気に出すために指を鳴らすと、オーダーされた料理が4つ出てきた。

『はい店長さん！ 4つ出来たよ！』

「……………貴方って何者？」

『そんな事どうでもいいから早く運んで！ まだ注文する料理があるんでしょ！？』

私の行動を見た店長は不思議な目で見ていたが、私はそれを一蹴して早く料理を運ぶように示唆した。

「メイドさ〜ん、ストロベリーパフェーっ」

「俺はチョコレートパフェ」

「紅茶のお代わりお願い」

「はい、只今お持ち致しますので少々お待ち下さい（アンタ達は何時までいるのよ！？ 他のお客さんが待ってるんだから早く出てよ！…）」

絵梨は開店早々に入って来て色々な料理を注文している客に内心凄くウンザリしていた。

「メイドさん、俺にスマイルを一つ」

「俺も」

「は…はい（ニコッ）」

「あ〜〜眼福だ〜」

「（この人達、さつきからアタシばかり呼んでるけど、他の人を呼ばないのかな？）」

綾の所でも、先程から綾ばかり呼んでいて料理の注文や笑顔を求めてくる事に何故か分からない綾であった。

言うまでも無いと思うが、この満員状態であるメイド喫茶に来ている男達は絵梨と綾を見る為に来ているのである。その客の中には二人を撮影しようとしたり、セクハラ行為をやるうとする不届き者もいたが、店長や他のメイドさん達に注意されている。

『おりゃ！　おりゃ！　おりゃ！（パチンツ！　パチンツ！　パチンツ！）』

私は力をフルに使って、注文されていた料理を一瞬で出していた。

「凄い。料理が一瞬で出ちゃってるよ」

「一体どうやっているのかな？」

「もしかして本物の魔法使いだったりして？」

『ほらほらメイドさん達、早く料理運んで』

注文の催促をしていたメイド達は私の事を気になっていたが、私は店長と同様に一蹴した。そんなこんなで今現在メイド喫茶は大繁盛であり、私達は休む暇も無かった。

そして3時間後……。

「ご主人様方。誠に申し訳ありませんが、1時間ほど店を閉めさせて頂きます」

店長の言葉に客達はブーイングを浴びせてきた。

「俺まだ入ってないんだぞ!!」

「せめてメイド姉妹だけでも会わせてくれ!!」

「俺なんか2時間も並んでるんだぞ!! すぐに入らせるよ!!」

『はいはい、これ持っている人が優先して入れるので無くさないで下さいねえ〜』

私はブーイングを浴びながらも順番待ちの客に整理券を渡すが……。

「ふざけんな!」

「さっさと入れろ!!」

「男なんかにはねえ!! 俺達は綾ちゃん達に会いに来たんだよ!!」

客達は私に八つ当たりをして物を投げてきた。

『(カンッ!)……………貴様等に選択権を与えてやる。大人しく身を引いてくれるか、この町にいる筋肉隆々のオカマ達に食われたいか…………好きな方を選べ』

「……………!!!!!!」

私が筋肉隆々のオカマと言った瞬間に客達は恐怖に怯えた顔をする。

『まだ文句を言っただったら、今すぐオカマ達を此処に呼んで(スッ)(』

「……………すみませんでした……………!!!!!!(ダダダダ……………)

……………」

携帯を取り出して連絡をしようとする私を見た客達は一目散に逃げ出した。

『私に物を投げた連中は地獄行き決定だけどな(パチンッ!)』

私が指を鳴らすと、私に物を投げた客の数名が姿を消した。

そいつ等は素っ裸にされた状態でローズ達のセーフハウスに転送され……………。

「……………」あら若い子達

感謝しますわぁ旅人様ぁ

……………」

「「「ギャアアアア~~~~~!!!!!!」」」

ローズ達の餌食となった。

『ふん！ 最初から大人しく退けばいい物を』

「ね…ねえ、貴方が指を鳴らした瞬間に数名の客が消えたんだけど……何処に行ったの？」

『さっき言った筋肉隆々のオカマ達の家に送りました』

「……………」

『因みにそいつらは私の部下です。私の命令一つですぐに実行してくれる頼もしい奴等で……』

「……………（こ…この人は絶対敵に回したくない）」

店長は私に戦慄して敵に回さない事を誓った。

『さてと……メイドさん達はクタクタですから、先ずは休憩させないといけませんね』

「……………そうね、休憩の後は仕込みをしなくちゃ」

私と店長は店に入って綾と絵梨を含めたメイドさん達と一緒に少し

休憩した。

休憩中の最中……。

「はあ〜。働くってこんなに忙しいんだね」

「綾ちゃん、大丈夫？ 疲れてるんなら今日はもう帰っていいわよ？」

「いえ、皆さんが働いているのにアタシ一人だけ帰るわけには行きません。最後まで頑張ります！」

疲れ切っている綾を見た店長は帰らせようかと思ったが、綾は閉店までいると意気込む。

それを見た店長は……。

「……………嬉しいよ綾ちゃん！（ギョウツ！）」

「ほえ！？ ちょっとちょっと店長さん！？」

感動して綾に抱き付く。

「店長！ 綾ちゃんに抱き付くなんてズルイですよ！！」



「私も綾ちゃんに抱き付きたいのに!!」

「次は私です!!」

他のメイドさん達も綾に抱き付きたいみたいである。

『おやおや、綾ちゃんは男だけじゃなく女の子にも人気だねえ』

「当然だよ　だって綾ちゃんは謙虚で控えめだし、何より凄く可愛くて抱き締めたくなくなっちゃうんだから」

『だからさあ、絵梨。それって暗に自分が可愛いって言ってるようなもんだぞ?』

「店長!　綾ちゃんに抱き付いていいのはあたしだけなんですからねえ!!」

私の突っ込みを無視した絵梨は店長に抱き付いている綾を奪い返すかのように抱き付く。

「ああ、絵梨ちゃんずるい!!」

「自分が綾ちゃんに似ているからって横暴だよ!!」

「絵梨ちゃん、店長命令です。綾ちゃんをこちらに引き渡さない

「い・や・で・す!　綾ちゃんはあたしのだから!（ギョウツ!）」

「え…絵梨お姉ちゃん?」

今度は絵梨に抱きつかれた綾は更に戸惑った。

『はあっ……やれやれ』

女性陣が綾を囲みながらワイワイと騒いでいるのを見ている私は呆れながら休憩していた。

……  
……

休憩と仕込みが終わってすぐに店を開くと……。

「……………お…お帰りなさいませ……………ご主人様」

「……………」

綾と絵梨が物凄く嫌そうな顔をして接待する。

その理由は……。

「うおおお~~~~!!……この時を待っていた~~~~!!……!!」

「メイド服の綾ちゃん萌え~~~~!!……!!」

「絵梨ちゃんも萌え〜！！！！！」

「メイド姉妹最高〜！！！！！！！」

「ひゃっほ〜！！！！！！！」

FFF団が来ており……。

「コラ貴様等！！ ワシの娘達に手を出したらタダではおかんぞ！！」

「大丈夫だぜ二人とも、俺達が守ってやるからな！」

「この刀にかけて御主達を守るでござる！」

「その代わりお礼のキスをタノムゼ！」

グレートレンジャー共が同時に来たのだ。今この場に傍迷惑である2つのグループが来た事に綾と絵梨が嫌な顔をしているのである。

『……………来るとは思っていたが、まさか同時とは予想外だったな』  
言うまでもなく私も同様に嫌な顔をする。

「……………申し訳ありませんが、今は整理券を持っているご主人様を優先していますので……………」

絵梨は丁寧に接客しながらも、内心ではさっさと帰れと思っていた。

が……。

「心配ない！ 整理券ならここにある！！（バツ！）」

「……以下同文！！（バツ！）」

「ワシも持っておるのじゃ！！（バツ！）」

「……同じく！！（バツ！）」

何故かコイツ等は整理券を持っていた。

「……」

『（おかしい、アイツ等には整理券を渡した覚えは無いんだが……確かに本物だな）』

綾と絵梨が無言になっている中、私は裏からバカ共（FFF団・グレートレンジャー）の持っている整理券を確認した。

『（どう言う事だ？ 何故アイツ等が……ん？）』

何故か外にいる客達の様子がおかしかったので、私はそこに目を向けると……。

「くそ……！！ 変な覆面を被った集団に整理券を盗られちゃった……！！」

「何なんだよアイツ等……！！ いきなり現れて整理券を寄越せって言いやがって……！！」

「けど渡さなかったらランチされる所だったけど……」

「喝上げる連中より酷かったぞ!」

『(ほほ〜う?)』

どうやらFFF団は整理券を持っていた客から奪ったみたいだ。

「無い! 無い! 何処に行ったんだ俺の整理券!」

「折角入れると思ったのに何で無いんだ!」

「そう言えば、何か変な格好を爺さん達が俺達にぶつかって来たよな?」

「ああ、謝りながら整理券を渡したが……ってこれただの紙切れじゃねえか!」

『(あの爺共は……)』

グレートレンジャーはスリの真似事をして客の整理券を盗んだ様だ。

私は昨日アイツ等が来ていたのは知っていたが、余りに客が多い為に諦めて帰ったの見て安堵していた。しかし今日になって整理券を奪うとは私の予想外である。

『(すぐにあのバカ共をつまみだしてやる……いやそれは不味いか)』

バカ共を追い払おうとした私であったが、下手にそんな事をしてアイツ等に妙な真似を仕出かされたら逆に此方の立場が悪くなると思いを止めた。

『（奴等の事だから、客の立場を利用して私を追い出そうとするかもしれないな）』

私がメイド喫茶のスタッフである以上は下手に手を出す事が出来ないので、バカ共を敢えて店に入るのを黙って見ていた。

『（あのバカ共の事だから、きっと綾ちゃんや絵梨にセクハラする事は目に見えてるし……だからと言ってスタッフである私が動いたら……ん？ 待てよ……）』

私はふと閃いた表情をする。

そして……。

『（ゴソゴソ……ピッ！）もしもし、ちょっといいか？』

懐から携帯を取り出してある人物へと連絡していた。

綾の職業体験 ？（前書き）

今回は“とある過激派”が登場します。

## 綾の職業体験？

『よし！ アイツが了承してくれたから後は待つだけだが……』

私がとある人物への連絡を終えて、厨房からホールを覗いて見たら……。

「綾ちゃん！ 俺の所へ来てくれ！」

「旅人なんかより俺達の傍にいた方がいいと思うよ？」

「俺に水をくれ〜！」

「綾ちゃんのメイド服が凄く似合ってる可愛いわ〜（サワサワ）」

「（ガチャン！）ご…ゴメンよ綾ちゃん！ すぐに捨てるから……デ

〜（ニヤニヤ）」

「……………」

FFF団は綾をナンパしたり体を触ったり等々をして綾は辟易しながらも我慢しており……。

「コラ貴様等！！ ワシの綾ちゃんに何をしておるか！？」

「テメエ等の腐った根性を叩きなおしてやるぜ！！」

「拙者の刀で成敗してやるでござる……！」



「ミーのタツクルでブチコロスぜ!!」

「お父さん達、此処で騒ぎを起こしたら殴るよ? (あゝもっ! アイツ等あたしの綾ちゃんに何やってるのよゝゝ!!!)」

グレートレンジャーはFFF団を成敗しようとするが、絵梨によって止められていた。絵梨はグレートレンジャーを止めながら内心FFF団を抹殺したがつている。

「…………… (ヒクヒク) …… スウゝゝハアゝゝゝ…………… 落ち着け… 落ち着くんだ…」

当然私もFFF団を抹殺したかったが、深呼吸をして何とか怒りを抑えて見ていた。

「ご主人様方、ナンパやお触りはお断りしていますので止めて下さい」

「違つって、これは俺達のコミュニケーションなんだよ (ニヤニヤ)」

「そうそう、決してイヤらしい行為じゃないんだ (サワサワ)」

「ジェントルマンの俺達はそんな事を一切してないぜ? (サワサワ)」

「さあ綾ちゃん、此処に座って俺達の相手をしてくれよ (ニヤニヤ)」

店長は何度も注意をしているが、FFF団は適当に聞き流してまた

綾にセクハラ行為を続ける。

「……（ピクピク）……ご主人様達がジエントルマンでしたら綾ちゃんを開放して貰えませんか？ 厨房にいる“さすらいの旅人”さんが呼んでいますので……」

FFF団達の行動に切れそうになった店長であるが何とか怒りを抑えて綾を此方に引き渡してくれと懇願したが……

「別にいいじゃねえか。厨房なんて旅人だけに任せておけばいいだろ？」

「そうそう、あんな奴なんかより俺達の所にいた方がいいの。ねえ綾ちゃん？」

「しっかし旅人の野郎もとんでもない奴だな。こんな可愛い子を一人にさせておいて、誰かに襲われたらどうするんだ？ まあ今は俺達がいるから大丈夫だけど……」

「なあ綾ちゃん、君はやはり我等FFF団のマネージャーになるべきだ。どうか入団してくれないか？」

「だったら絵梨ちゃんも入ってくれないか？ そうしたら俺達は無敵になるんだが……」

勝手な事をほざきまくるFFF団であった。

「何を言っておるか貴様等！！ 綾ちゃんはワシ等グレートレンジヤーのマネージャーになるのじゃ！！ 貴様等みたいな低俗な集団には相応しくないのじゃ！！ ……おつと失礼<sup>サワッ</sup>」

「テメエ等いい加減綾ちゃんを離しやがれ!! 彼女が嫌がっているじゃねえか!! ……おっと!(サワッ)」

「やはりお主等は此処で成敗する必要があるでござるな!! お、ただならぬ気配が(サワッ)」

「綾ちゃん!! ミー達が守ツテヤルゼ!! お!(サワッ)」

「……何するのよ!?!」「」「」

グレートレンジャーはFFF団に抗議しながらも他のメイドの子達のお尻を触っていた。

「ちよつとお父さん!! セクハラはダメだって言ってるでしょ!?!」

「はて? ワシは何か触ったかのう?」

「全く見に覚えが無いな」

「絵梨の勘違いではござらんか?」

「ミーは何モシテマセ〜ン」

絵梨が怒鳴ってもグレートレンジャー達は惚けている。

流石に私もこれ以上は黙って見ている事は出来なかったの……。

『お客様、店内での騒動は大変困るのですが』

取り合えずスタッフ側として対応する事にした。

「「「「旅人!?!?!」」」」

「「「「何故此処にいる!?!?!」」」」

FFF団とグレートレンジャーは私の登場に戸惑っていたが……。

「ん? コツクの服を着てるって事は……此処で働いているのか?」

『ああ、そうだが?』

「……………へえ〜〜(ニヤニヤ)」

私が須川の問いに答えると、須川は何か思いついたかのような顔をする。

「って事はお前は此処のスタッフか」

『だからお前等、いい加減に綾ちゃんを……………』

「おい! 客に向かって何て口の利き方をしやがる!?!」

須川が優勢な立場になったかのように私に吼えると……………。

「そつだそつだ!! 俺達は客だぞ!!」

「金払って来てるんだ!! テメエは黙って料理でも作ってる!!」

「シツシツ!!」

「お前は邪魔だから早く消えて」

「スタッフのお前が俺達に何かしたら、どうなるか分かってるんだろうな!？」

『……………』

他のFFF団も強気になり…………。

「そうじゃ旅人!! 貴様はさっさと厨房に行ってワシ等が頼んだ料理でも作っておれ!!」

「早くしろよ!! 俺達は腹が減ってんだよ!!」

「サツサト働ケ!!」

「この間の事は感謝するでござるが、さっさと飯を作ってきて欲しいでござる」

『(コイツ等ドサクサに紛れて…………)』

グレートレンジャーも一緒になって私に吼えてきた。

「……………(ガタツ!!)」

綾が席から立ち上がるとFFF団とグレートレンジャーに何か言おうとするが…………。

『(よせ綾ちゃん)』

「(でも!)」

私が綾に止めるとジェスチャーをして阻止した。

「急に立ってどうしたんだ綾ちゃん？」

「もしかして俺に告白か!？」

「いやお前にそれは無いから」

「もしや俺か!？」

バカ共が何か言っているが私はそれを無視して綾に話しかける。

『……………綾ちゃん、途中で抜け出しちゃダメだよ。お客様に最後までご奉仕するのがメイドの本分だからね……………(それがアイツ等み  
たいなクス野郎でも)』

「……………申し訳ありませんでした、ご主人様 (ペコツ……………スツ)  
」

綾を叱咤する様に言うと、綾はバカ共に謝りながら席に座った。

「旅人、お前みたいな奴でも良い事言っただな」

「見直したぜ・ホンのちょこつとだけな」

「綾ちゃん俺達を守るから、さっさと厨房に行ってる」

「「シツシツ！」」

『……………それではお客様、どうぞ「ゆっくり」(スタスタ……………)』

「ちょ…旅人さん!!」

私が厨房に入っていくと、店長が私を追いかけるかのように来た。

去って行く私を見たFFF団とグレートレンジャーは優越感に浸ると……………。

「おっしゃあ!! さあ綾ちゃん、今から俺達がFFF団の素晴らしさを教えてあげよう」

「おい須川!! それは俺がやるんだ!!」

「絵梨ちゃんも一緒に来てくれ!!」

「宮永なんかより我等FFF団が良いと言つ所をたっぷり教えてやるよ」

「貴様らに絵梨は渡さん!! そして綾ちゃんをさっさとワシ等に寄越さんか!!」

「やっぱりテメエ等を始末する必要があるな!!」

「今すぐ成敗でござる!!」

「ミーのタックルで轢イテヤルゼ!!」

急に騒ぎ始めた。

そして……。

「もういい加減にしないでアンタ達！！ 綾ちゃんが困ってるですよ！？」

「（我慢……我慢しなきゃ……例え嫌な人でも）」

「『『『『『助けて旅人さ〜ん！！』』』』』」

暴走したバカ共を抑えることが出来なくなった絵梨は綾を守る事にし、綾はバカ共のセクハラにじっと我慢しており、他のメイド達は私に助けを求めた。

厨房にて……。

「ちょっと旅人さん！！ どうしてあの傍迷惑な客達を追い出さないの！？」



店長が私に何故あの連中を対処しないかと問い詰めてきた。

「あんな連中がいると店の評判がガタ落ちになっちゃうわ！　すぐに追い出して！」

『ダメですよ。そんな事をしたら更に評判が落ちてしまいます』

「どうしてよ!?!」

『私が奴等を追い出した時には、仕返しとして最低な店だの何だの言って周りにある事無い事を言い触らす筈です』

私に恨みを持っている連中ですから手段を選びませんと私は付け加える。

「恨みって……貴方あの連中に何をしたの？」

『えつとですね……』

私が店長にバカ共のやってきた事と制裁した内容を言つと……。

「……………それってあのバカ達の自業自得じゃないの？　と言つか何で懲りないの？」

滅茶苦茶呆れた顔をして、FFF団とグレートレンジャーを既にバカと呼ぶ事にした様だ。

『それはアイツ等がバカだからです。と言つ訳で、今は下手にバカ共を追い出すと不味いんです』

「……………じゃあどうするの？ このままあのバカ共の横暴を黙って見過ごせって言うの？」

『「心配無く。既に手は打ってありますから」』

と、その時……。

ガチャッ！

「よお旅人さん、言われたとおり裏から来たぞ」

厨房の裏口から私が連絡した人物である“久遠光一”が入って来た。

「ちよつと貴方！？ 此処は……………」

店長がすぐに出るように言おうとしたが……………。

『いいんですよ店長さん、私が彼を此処に呼んだんです』

「え？」

私がストップをかけて店長に説明する。

『この少年がバカ共を始末してくれる強力な味方です』

「……………この子が？ 言っっちゃ悪いけど、とてもそんなに強そうに

は思えないけど……」

店長は光一の細い体を見て、どうにも強力な味方とは思えなかった。  
が……。

『それで光一、武器はたくさん持ってきたか？』

「勿論だ（ドサツ！ ジー）見ての通り全部持ってきた」

「……確かに強力な味方ね」

光一のポストンバックに入っている色々な銃器を見てすぐに納得した。

『では光一、私の方で絵梨達を転送するから今すぐにバカ共を（スツ）』

私が指を鳴らそうとしたが……。

「待ってくれ旅人さん。始める前に俺の話を聞いてくれないか？」

『………続けて』

光一が何か考えがあるみたいなので私は手を止めた。

「此処に来る間にアイツ等を始末する内容を考えてな……」

そして光一はバカ共を始末する為のシナリオを話し始めた。

綾の職業体験 ？（後書き）

秋雨さん、許可を頂きありがとうございます。

## 綾の職業体験？

一方、ホール内では……。

「これで分かったろ、綾ちゃん。君は我等FFF団に入るべきだと」

「旅人というより俺達の所にいた方が何万倍もいいんだ」

「さあ綾ちゃん！ この契約書にサインしてくれ！！」

「そして絵梨ちゃんも！！」

「宮永なんかよりも俺達が良いというのが分かった筈だ！」

「何ふざけた事言ってるの！？ あたしと綾ちゃんはそんな所には絶対入らないからね！！」

「……………アタシも嫌です」

FFF団が綾と絵梨に入団しろと迫っているが、2人は頑なに拒否しており……。

「おのれ貴様等！！ ワシ等の娘達に何しとんじゃあ~~~~！！！！」

「今助けるぞ二人とも！！ 離せテメエ等！！」

「お主等汚いでござる……！！」

「クソ〜!! ミーのタツクルがデキネ〜!!」

グレートレンジャー共は他のFFF団に取り押さえられていた。

しかしバカ共は他のメイド達は急になくなっていく事に気付いていない。

何故いないのかと言うと……。

再び厨房にて……。

「準備はいいか？」

「……………いつでもいいです!! (ジャキツ!!)」「……………」

光一が店長と他のメイド達にそれぞれ武器を持たせて整列させていた。

「よし。それじゃあ俺が合図を鳴らすまで待機してくれよ」

「……………はい! ご主人様!!」「……………」

『……………光一は一体何をやる気だ?』

「まあ私としてはバカ共を追い払ってくれるなら構わないけど……………」

傍から見ている私は光一のやろつとしていた事が全く分からなかったが、後になって分かった。

.....

またホールに戻る。

「え…絵梨お姉ちゃん……アタシあの人たちもう嫌……」

「ちよつとアンタ達！！ これ以上綾ちゃんに近づいたらタダじゃおかないからね！！」

綾はFFF団のセクハラ行為にもう耐えられなくなって絵梨の後ろに隠れ、絵梨は綾を守っている。すぐに成敗したい絵梨であったが、綾を守りながらバカ共の相手をするにはリスクがある。下手に動くとFFF団がまた綾にセクハラをやるうとするのだ。だからこそ絵梨は綾に近寄らせないように必死に牽制している。

「（早くして旅人さん！ あたしだけじゃ綾ちゃんを守りきれないよー！！）」

絵梨は私がバカ共に何もせず厨房に行った事に何かやると思い黙って見ていたが、まだ来ない事に悪態を吐く。

「さあ絵梨ちゃん、綾ちゃんと一緒に俺達にご奉仕をしてくれないか？」

「美人メイド姉妹に御奉仕されたら俺達は凄く幸せな気分になるかな」

「そうだな、もう二人はFFF団の女神だし」

「二人がいれば俺達に恐れる者は誰もいない!!」

「ちょっと!! あたしや綾ちゃんはFFF団なんかに入っていないからね!!」

勝手な事をほざいているFFF団に絵梨はすぐに突っ込むが……。

「その通りじゃあ!! 絵梨と綾ちゃんは我等グレートレンジャーのマネージャーじゃ!!」

「何勝手に入団させているんだよ!! ふざけんな!!」

「拙者達に無断でそのような横暴は許さないでござる!!」

「くそう!! コイツ等が邪魔しなければすぐにタツクルが出来ル  
ノニ!!」

「……………」

グレートレンジャーもFFF団と同様な事を言って突っ込む気になれない絵梨であった。

と、そんな時に一人の少年が店に入って来る。



「お邪魔しま〜すと」

「誰だ!!! 我等の平穩な一時を邪魔するのは!!!」

須川が無粋だと思っっている少年の顔を見ると……。

「だったら貴様等の平穩を俺が今すぐに壊してやるよ（ジャキッ！  
！ バチバチ!!!）」

「き…貴様は久遠光一!!!」

久遠光一だと分かると驚いた顔をする。

「久遠君？」

「あ、あの人が旅人さんの言っていた……」

「お二人さん、今すぐ助けるから待ってろ」

呆然とする絵梨と綾に光一は優しく声を掛け……。

「そしてお前等は……俺の的になれ!!!（ドババババババババババ！  
！……!!!）」

「……ギヤアアアア〜……!!!……!!!……!!!」

そしてすぐに持っているエアマシンガンをFFF団にぶっ放して駆逐していった。当然、絵梨と綾には当てていない。

余談であるが、光一の使っているエアマシンガンは改造しており凄

い威力である。

それを喰らったFFF団は……。

「か…かか……………」

「いてえ…………いてえよお……………」

「ああ…………こ…股間に…………モロ当たった…………% ) & ( ……」

「だれかあ…………医者を呼んでくれえ……………」

「(ピクッ…………ピクッ…………)」

倒れながら当たった箇所を手を当てて物凄く痛そうな顔をしていた。

「大丈夫か？ 絵梨」

「あたしは大丈夫だけど、綾ちゃんがFFF団に散々セクハラされて参ってるよ。だから久遠君、もっと痛み付けてくれる？」

「元からそのつもりだ。このバカ共には徹底的に痛み付けよう…  
…」

光一が絵梨と話していると……。

「よくやったぞ、久遠光一！ 流石はワシ等の切り札じゃ！…」

「こんな奴等は俺達だけでも充分だったがな！…」



「う……うん」

「旅人さんから聞いてたけど、ホントに絵梨とそっくりだなあ」

「当たり前だよ！ 綾ちゃんはあたしの自慢の妹なんだから！！（ギユウツ！）」

「……………随分その子を気に入ってるんだな」

綾に抱き付く絵梨に光一は少し入れ込みすぎではないかと思った。

「まあいい、それじゃあ俺は次の段階に移るから二人は厨房に避難しててくれ。此処はもうすぐ戦場になるから」

「え？ もう終わったんじゃないの？」

「いや、これからが本番なんだ。さあメイドさん達！！ 出番だ  
！……」

光一が裏方に向かって大声を出すと……………。

「……………待ってました！！（ジャキツ！！）」

「……………」

「さあ綾ちゃん、あたし達は厨房に入ろうねえ（凄い事になりそう……）」

光一から貸して貰った武器を持ったメイド達が現れ、呆然としてい

る綾を絵梨が厨房に連れて行った。

絵梨と綾が厨房に入ったのを確認した光一は……。

「ではメイドさん達に聞きます。此処にいる連中は客だと思いませんか？」

「……………いいえ！！！！ 営業妨害をする迷惑集団です！！！！」

「こんな集団に制裁をする必要はありますか？」

「……………あります！！！！」

何故かメイド達に軍隊形式で整列させていた。

「この迷惑集団を制裁する事に異論のある方はいますか？」

「……………いません！！！！」

「そうですね。では……………これより迷惑集団をの撃滅せよ！！ 総員構え！！」

「……………はい！！！！（ジャキッ！！！！）」

光一の掛け声でメイド達は倒れている連中に武器を向け……

「な…なあ、あのメイドさん達はどうして俺達に銃口を向けているのかなあ？」

「俺達は何も悪い事はしてない筈だよなあ？」

「だよな。俺達はメイドさん達には紳士に接していたのに」

「なあメイドさん達、何でそんな物騒な物をこっちに向けてるの？」

「ってか何でそんな奴の言いなりになってるの？」

漸く回復したFFF団はメイド達の行動に疑問を抱き……。

「何故じゃ？ ワシ等はメイドさん達に恨まれるような事は何もしておらんぞ？」

「そうだぜ、俺達は正義の味方で……」

「全く悪い事はしていないでござるよ？」

「何カの間違いじゃナイカ？」

散々メイド達にセクハラ行為をしていた事を都合の言い様に忘れて  
いるグレートレンジャーであった。

「……………（ブチッ！！！）」

好き勝手ほざくバカ共にメイド達は完全に切れて……。

「……………さつさとくたばれ変態！！！（ドババババババババババ

！！！！！！！！！！）……………」

「……………何故だあ……………！！！！！！！！！！……………」

「「「」

一斉射撃を開始した。

.....

厨房から覗いている私は……。

『成程。光一はメイドさん達にバカ共を制裁させるつもりだったのか』

漸く光一の狙いに気付いた。

『確かに私がやるより、あの子達にやらせた方がいいな』

あのバカ共の頭の中には、自分達は崇高な存在だから女に好かれて  
いるのは当然だと訳の分からない解釈をしている。

しかしその好かれてる女に攻撃されたとなるとバカ共はパニック  
になり……。

「さあメイドさん達！！ 次は鈍器を使って撲滅だ！！！！」

「「「「「了解！！！！」ドゴッ！ ドガッ！ ゴスッ！」「「「」

「  
光一の掛け声でメイド達は銃から鈍器に持ち替えてバカ共に攻撃をする。」

攻撃しているメイド達は……。

「絶対許さないんだから!!! (ゴスツ!!!)」

「百倍にして返してやるわ!!! (ドガッ!!!)」

「自意識過剰な連中はさっさと消えなさい!!! (ドゴツ!!!)」

「アンタ達は紳士じゃなくただのド変態よ!!! (グシャッ!!!)」

「犬畜生にも劣るケダモノよ!!! (ガンッ!!!)」

罵倒も浴びせていた。

『あの子たち段々と口汚くなっちゃってるよ。それと同時にアイツ等も(チラッ)』

メイド達のダブル攻撃を喰らってショック状態になっているバカ共を見ると、ショックを受けている顔になっている。

更に……。

「アンタ達みたいなのケダモノはどうせ)ピー!(で)ピー!(何でしょー!?!」



「女を喜ばすことの出来ない（ピー！！）の分際で！！！！」

メイドの中に過激な事を言っている子がいたので……。

『おいおい……女の子が言う言葉じゃ無いぞ？』

私は思わず突っ込んでしまう。

「ねえ旅人さん、ホールは今どうなってるの？」

「何か凄い音が聞こえるけど？」

絵梨と綾がホールが気になって覗こうとする。

『綾ちゃん、君は見ちゃダメ』

「え？」

『絵梨、君は休憩室で綾ちゃんと一緒に待ってて』

「……………そうだね、じゃあ行こう綾ちゃん」

「え？ え？ え？」

少しホールを覗いた絵梨は、確かに綾には見せられない光景だと分かかってすぐに休憩室へと連れて行った。

『……………しかしまあ、店長も口汚くなっているし。相当イラついてたんだね』



## 綾の職業体験？

店長含むメイド達がバカ共（FFF団＋グレートレンジャー）を制裁して15分後

「おいテメエ等、もう二度と来るなよ。いいな？」

「……………はい……………」

「……………申し訳ありませんでした……………」

店長のドスの利いた声に真っ白になっているバカ共は素直に聞いていた。言うまでも無いと思うが、バカ共が真っ白になっているのはメイド達の制裁による物である。

「店から出る前に迷惑料としてガキ共は5千円、爺共は2万円出しな。オラ、さっさと出せ！！」

「……………どうぞ……………」

バカ共は財布を出してすぐ店長にお金を渡すと……………。

『え〜つと……………FFF団は明久とムツツリー二を覗いて43名×5000円＝21万5千円で、グレートレンジャーは4名×20000円＝8万円だから……………計29万5千円だね』

私は頭の中で合計金額を計算した。

「本当だったらテメエ等を警察に突き出す所だが、旅人さんの温情によってコレだけで勘弁してやるからありがたく思いな。オラ！！ さっさと出てけ！！」

「…………二度と来ないでよ！！！！」

「……………………（スタスタ）……………」

店長とメイド達に出て行けと言われたバカ共は口応えをせず去って行った。

『あそこまでズタボロにされて帰っていく連中を見ても、気の毒とは思えないな』

「同感だ」

「あたしとしてはあの人達が綾ちゃんに散々セクハラしておいて、あの程度で終わらせる旅人さんの考えが分からないけど」

バカ共が無言で店から出て行く連中を見て何にも感じない私と光一に対して、絵梨は私の処断に不満のようだ。

『あれだけメイドさん達にズタボロにされて、ボロクソに言われたら連中も暫くはショックを受け続けると思うてね。それに…………』

「もしアイツ等を警察に連行させたら、文月学園の評判がガタ落ちになるんだろ？」

『……………光一、私が言おうとした事を』

光一に言われた事に私は顔を顰めた。

「あたしは学園がどうなるかと、別に知った事じゃ無いけどね」

『文月の生徒では無い絵梨はそうだろうが、私や光一は困るんだよ』  
学園長にはそれなりの借りがあるからなと私は付け加える。

『それはそうと光一、今回の協力感謝する』

「どういたしまして。俺としてもマシンガンを思いつきり乱射出来る機会が出来て良かったよ」

「ありがとう、久遠君。迷惑集団を一掃してくれて」

「殆ど一掃したのは店長さんとメイドさん達だけだな。……………それにしても店長さんの変わり様は俺としては予想外だったが」

『確かになあ、私も驚いたよ。あの店長さんが……………』

「あたしも。あの人は過去に何か……………」

私と絵梨が店長の事を話していると……………。

「私がどうかしたかしら？」

いつの間にか元の口調に戻った店長が私達に声を掛けてきた。

『……いや、何でもないです……アハハハ』

「……うん。気にしないで下さい……アハハハ」

「？」

「それで店長さん、バカ共から徴収した迷惑料はどうするつもりなんだ？」

光一が機転を利かせて話題を変えてくれた事に私と絵梨は感謝した。

「ああコレはね……綾ちゃん、ちょっとこっち来てくれない？」

「は……はい……」

店長が裏方から隠れて見ていた綾を呼び……。

「綾ちゃんと絵梨ちゃんの慰謝料と（ポンツ）……今回来てくれた久遠光一君への報酬ね（ポンツ）」

「「え？」」

「いいのか？」

綾と絵梨に10万円、光一に2万円を渡した。

「こ……こんな大金受け取れません。それにアタシは今回、職業体験で来ただけで……」

「店長、あたしもこんなには……」

「いいのよ2人と。バカ共から散々な目に遭ったんだから、それは貴方達2人が受け取る権利があるの」

「……………まあいつか」

「……………」

店長の言葉に絵梨は貰う事にしたが、綾の方は未だに納得していなかった。

『でしたら綾ちゃんの持っているお金は私の方で預かりましょう。慰謝料とは言え小学生の綾ちゃんには大金ですからね。と言う訳で綾ちゃん、お金をこっちに渡してくれる？』

「う…うん」

『いい子だ（ナデナデ）』

「」

お金を渡した綾に、私は頭を撫でると気持ち良さそうな顔をする綾であった。

「ってか俺もこんなに貰っていいの？俺はついさっき来たばかりで……………」

「いいのいいの。貴方にはバカ共を一掃してくれた恩があるから。だから受け取って」

「……まあ店長さんがそう言うんなら、コレは貰っておくか」

『で、残った7万5千円はどうするつもりなんですか？』

光一が受け取った報酬を財布に収めると私は店長に残りの迷惑料をどうするかを聞く。

「それは当然、この後のパーティー代の為に使わせてもらうわ」

『おいおい………』

「さあ皆！ もう店を閉めてー!!」

「「「「「はい！」「」「」「」

店長の指示でメイド達は颯爽と店を閉め始め……。

「それと旅人さんは店の周りを綺麗にして貰えないかしら？」

『はいはい……（パチンツ！）』

私が指を鳴らすと先程まで荒れていた店内が一瞬で元に戻った。

「ホントに貴方の能力は便利ねえ」

『それはどうも。……しかし本当にいいんですか？ 迷惑料をパーティーに使ったりしちゃって………』

「いいの！ あのバカ達を忘れさせる為にはこうでもしなきゃやってられないわ！」





「「「「」」」」」

絵梨と綾のデュエットに私や光一、店長含むメイドさん達が大喝采していた。因みに曲はマクロ○Fのライオンである。

「綾ちゃん歌上手いねえ。あたし思わず綾ちゃんの歌声に、つい歌うのを止めちゃいそうだったよ」

「そ…そう？ アタシそんなに上手いかな？」

と、絵梨が綾を褒めている時に……。

「ねえ綾ちゃん、次は私と一緒に歌おう」

「今度は私が綾ちゃんと歌うの」

「ここは店長に譲りなさい。綾ちゃん、私と一緒に歌いましょう」

「ダメ〜〜！！ 綾ちゃんと歌うのは姉のあたしだけなんだから〜  
〜！！！！」

メイドさんや店長が綾と一緒に歌いたがっているのを、絵梨が阻止していた。

「綾ちゃんって凄い人気あるんだな（モグモグ）」

『もう完全にマスコットキャラになっているよ（モグモグ）』

端から見ている私と光一は料理を食べているのであった。

『あ〜〜疲れたな〜』

「ホントだよ。あの店長さん最初から最後までテンション高かったから……」

「俺は結構楽しめたがな」

「……スウ……スウ……」

パーティー（はつきり言って飲み会）を終えた私達は一緒に帰っていた。その途中に綾は疲れて眠っており、私がおぶっている。

『そう言えば光一、メイドさん達とメアド交換してたでしょ？』

「ああ。また何か遭った時に呼ぶ為の非常手段だと……」

「そう言ってる割には随分と嬉しそうに交換してたよね？」

『ああ、顔が凄くニヤけていたぞ』

「……………」

私と絵梨の突っ込みに光一は事実な為にも何も言い返せなかった。

「そ…それじゃあ俺はこれで失礼するから。何か遭った時はまた呼んでくれ、じゃあな（タツタツタ）」

『……………逃げたな』

「……………逃げたね」

颯爽と去って行く光一を見て私と絵梨は逃げているようにしか見えなかった。

『まあいい、では絵梨。私も此処で失礼させて貰うよ。じゃあね』

綾ちゃんを家に送らなければいけないからと私は付け加えて去って行くと……………。

「あ、待つて旅人さん！」

『んっ？』

絵梨が私を引き止めた。

「言いそびれたけど、報酬の件は忘れないでね」

『……………ああ。綾ちゃんのメイド服の撮影の事？』

「そう。でもあたしとしては綾ちゃんに色々なコスプレをさせてみたいんだよねえ。いいかな？」

『本人が良ければいいんじゃない？　ってか綾ちゃんはメイド服以外にもナース服着て私を看護するとか言い出してたし……』

「嘘！？　綾ちゃんってコスプレしてたの!？」

絵梨は寝ている綾の顔を見て信じられない顔をしていたが、段々と笑みを浮かべている。

「じゃあ……既にコスプレしている綾ちゃんだったら、すぐに許可取れるから大丈夫か……ウフフフフ」

『おい絵梨、邪悪な笑みになり掛けているぞ?』

「と言う訳で旅人さん、明日の午後辺りに綾ちゃんを家に連れて来て」

『……分かったよ』

断ると不味いと判断した私は絵梨に従う事にした。

「それじゃあ旅人さん、明日楽しみに待ってるからねえ」  
タッタッタ」

絵梨が去って行ったのを確認した私は……。

『……で、綾ちゃんはいいいのかい?』

「アタシは別に構わないよ」

いつの間にか起きていた綾に話し掛ける。

『そうかい。では明日は絵梨の部屋で撮影会だね』

「旅人さんも来るの？」

『一応ね。それはそうと綾ちゃん、もう完全に起きてるんなら下ろしていいかな?』

「……………（ギョウツ！）ヤダ」

『ちょ…ちょっと綾ちゃん……………』

綾は私と離れたくないと言わんばかりにしがみ付く。

「このまま家まで送って……………」

『……………（コレは下手に放したら色々と不味いな）……………しょうがないなあ〜綾ちゃんは。じゃあ綾ちゃんをおぶったまま、家まで頑張って歩きますか（スタスタ）』

「（旅人さん、大好き）」

私が綾をおぶったまま歩くと、綾は家に着くまで幸せそうな顔をしていた。

おまけ

翌日……。

約束通り私が綾を連れてくると絵梨は物凄い勢いで部屋に連れて行き……。

「さあ綾ちゃん、今日はたっぷり時間があるから最後までやろうねえ」

「うん……うん（何か……絵梨お姉ちゃんが怖いかも……）」

いつでも着せ替え人形出来る状態であった。

「じゃあ最初は……コレ着てみて」

「分かった……これでいいかな？」

「うんうん。凄く似合ってるよ綾ちゃん（パシャパシャ）」

綾がミニスカ巫女服に着替えると絵梨は絶賛しながら撮影を開始する。他にも猫耳メイド服、ナース服、レースクイーン、ラウンドガールやそれ以外の格好をさせて撮影し、絵梨は大満足するのであった。

さらにおまけ

昨日に時間を遡り、バカ共（FFF団とグレートレンジャー）が店から追い出された後……。

「「「地獄に仏じゃ〜!!!!」「」「」 グレートレンジャー

「「「「ここは天国だ〜!!!!」「」「」「」 FFF団

「「「「いや〜ん」「」「」

傷ついた心を癒す為にジミーが行っていた店で美女達と遊んでいた。

「でかしたぞジミー！ 流石はワシの配下じゃ！」

「テメーを見直したぜジミー！」

「ジミーは嬉しいぜ!!！」

「誰がお主等の配下でござるか!! それに此処は旅人が拙者に用意してくれた楽園なのに何故来ているのでござるか!?!」

ジミーは憤慨していたが源三達は全く聞く耳持たず、FFF団も同様であった。

「ねえお姉さん、貴方のメアド教えてくれないかな？」



「待て須川！ 俺だつて！！」

「いいわよお。私達も貴方達の知りたかつたから」

「「最高じゃ〜！！！！」」

FFF団全員はこう思った。やはり自分達は女達に好かれていると。そして調子に乗ったFFF団の一人が……。

「おっと！ 手が滑っちゃったよ（グニユ）……………え？」

美女の下半身に触って女にあつてはならない触ると信じられない顔をした。

「もう！ 何処触ってるのよ」

「え？ 何だ？ 今の感触は？」

「どうしたんだ？ 武藤」

武藤の様子がおかしい事に気付くと……………。

「あれ？ お姉さんの股間にあつてはならない物が……………」

「はて？ 何なのじゃこの感触は？」

他の連中も気付き始めた。



綾の職業体験 ? (後書き)

以上、綾の職業体験でした!!

## ユーにゃん擬人化物語（前書き）

タイトルのとおり、ユーにゃんが人間になっちゃいます。

## ユ―にゃん擬人化物語

みんなのうた

『貴方を愛してる』

左手の薬指を見るといつも

貴方との結婚式を思い出してしまう

誓いのキスをされた瞬間に

私は涙が出るほどの喜びに満ち溢れた

仮初めとは言え貴方の妻になれたという幸せを

そしてあの場所で夫婦の契りを果たす

私と貴方しか知らない契りを

宮永来牙

アタシを愛してくれている夫

貴方の逞しい胸板でアタシを抱きしめ

愛していると呟かれ

アタシは誰にも貴方を渡したくないと思ってしまっ

貴方の体と心を

全て私の物にしてしまいたい

来牙貴方を愛している

A T A S H I の K O K O R O H A A N A T A N O M O N O

作 宮永優子（旧姓：木下優子）

さすらいの旅人のコメント

思わず本気の結婚式を考えようかと思いました。

江藤愛奈のコメント

熱意の籠った想いに私は頑張れと言いたくなりました。

沢井真美のコメント

思った事を素直に伝えるのを見て私も頑張ってみようかと思いました。

吉田明菜のコメント

どうかお幸せに。

とある平日の午前中に私は来牙の家の和室でお婆さんと談笑していた。因みに来牙は学校で、絵梨はバイトでいない。

『そう言えば先日の事ですけど、絵梨はその後どうなったんですか？』

「あの後ですか……………綾ちゃんの写真を見ては顔が緩みきっていましたよ」

『やはり……………』

お婆さんの返答を聞いて私は予想通りだと思った。

先日の綾のコスプレ撮影会で絵梨はこれ以上無い位に張り切り、終わった後は大変満足しきった顔をしていたのだ。

『けど爺の事ですから、絵梨が見ている写真を覗いたんじゃないですか？』

「ええ。けれど絵梨が絶対見せないようにしていましたが……見たらお父さんでも殴るって言ってましたよ」

『でしようね』

「意外でしたよ。あの絵梨がお爺さんを殴るって聞いた時は」

『ああ、それはですね……』

私が先日にあつたメイド喫茶での出来事を話すと……。

「……………本当に申し訳ありませんでした。お爺さんに代わってアタシが謝罪します」

お婆さんはすぐに頭を下げた謝罪した。

『別にお婆さんが謝らなくてもいいですよ。あの愚か者にはキツチりお仕置きしましたから』

「それでも謝らずにはいられません。折角の綾ちゃんの貴重な職業体験を……………」

絵梨と同様に綾を気に入っているお婆さんとしては確かに許せないのだろう。

「何でしたら今寝ているお爺さんを（スッ）」

『まあまあ、そう怒らずに……………ってか爺はまだ寝ているんですか？』



立ち上がるうとするお婆さんに私は止めて話題を変えた。

「はい、そろそろ起きると思いますが……」

「旅人！！ お主また来たのか！？」

「………来ちゃ悪いのか？」

何時の間にか和室に入っていた源三は私の顔を見た途端に嫌そうな顔をしている。私も源三を見て嫌な顔をしているが。

「当然じゃ！！ 家主であるワシの許可を得ずに何度も何度も勝手に上がりおって！！」

『お婆さん、今日はカステラを用意しましたよ』

「あらあら、何時もすいませんねえ。ではお茶の用意を……」

「無視するでないわ！！ それに婆さんも無視しないでくれ！！」

私とお婆さんが無視すると源三は憤慨する。

『まったく五月蠅いな。私とお婆さんの憩いの一時を邪魔しないでくれるか？』

「そうですよお爺さん。用が無いのでしたら出てって下さい」

「………旅人、まさか貴様は……」

『ん？』

「貴様は婆さんを狙っておるのか！？　じゃとしたら、とんだ老婆好きじゃわい！」

『……………（スクツ）』

源三がいきなり見当違いな事をほざいた事に私は立ち上がり……………。

『お婆さん、やはりコイツは私達の手で始末しましょう……………どうぞ（スツ）』

「そうみたいですね（スクツ）……………これは素晴らしい武器ですねえ旅人さん」

お婆さんも立ち上がって私から渡された釘バットを持つと源三に近づく。

「た…旅人、何をする気じゃ？　それに婆さんまで……………何故そんな恐ろしい武器を持ってワシに近づくのじゃ？」

『それはな……………』

「それはですね……………」

「……………」

『「見当違いな事を言ってるクソ爺（お爺さん）にお仕置きをするんだよ（するんですよ）！…！」』

私とお婆さんが声を揃えると……。

ドガッ！ バキッ！ ドゴッ！ グシャ！

「ギヤアアアアア~~~~~！！！！！！！！！！」

すぐさま源三を滅多打ちにした。

それから10分後……。

『全く、あの爺と来たら……（ズズズズ）』

「本当にすいません（パクッ……モグモグ）」

私はすぐに滅多打ちにされて気絶している源三を鎖でグルグル巻きにして物置部屋へと監禁させた後にお茶を啜り、お婆さんはカステラを食べていた。

『お婆さん、いい加減に爺と離婚したらどうです？ 私の方で新しい家を提供しますよ？』

「大変魅力的なお誘いですが、今は遠慮しておきます」

『ほう。“今は”ですか……フフフフ』

「ええ。“今は”……ふふふふ」

私とお婆さんは互いに怪しい笑みを浮かべていた。

と、そんな時……。

「にゃあ〜（いらっしやい旅人さん）」

『おお、ユーにゃんじゃないか』

「あらユーにゃん、また絵梨の部屋から抜け出したのかい？」

ユーにゃんが和室に入ってきて私を歓迎した。

「にゃ〜？（騒がしい音がしたけど何かあったの？）」

『いやいや、何でも無いよ』

「そうよユーにゃん、気にしないで」

私がユーにゃんと話しているとお婆さんは何時の間にか翻訳機を持って会話に混ぜる。

『すっかりその翻訳機はお婆さんの必須アイテムになっていますね』

「ええ、それはもう。ユーにゃんとお話するのがアタシの楽しみの一つですから」

『そうですね……ユーにゃんもお婆さんと話せて嬉しいかい？』

「にゃ〜（お婆ちゃんと話せて嬉しい〜）」

「そうかいそうかい。アタシも嬉しいよユーにゃん」

お婆さんの緩みきっている顔を見て絵梨と一緒にだと思った。

『（絵梨とお婆さんって本当は血の繋がった親子じゃないのか？）

……所でお婆さん、その翻訳機は絵梨にも貸しているんですか？』

「いいえ、貸していませんよ。そしてこの翻訳機は絵梨に教えていません」

『絵梨もユーにゃんと会話したいんじゃないんですか？』

「あの子の事ですから、アタシがない隙を見計らって勝手に使ってしまうので……」

『……………確かに』

常にユーにゃんと一緒にいる絵梨としては、ずっと会話をし続けるだろうと私は思った。お婆さんの言つとおり、このまま黙っていた方がいいかもしれない。

『しかし絵梨も一度でいいからユーにゃんと話したいと思ってるんじゃないですか？』

「多分そうですね」

『けどお婆さんは翻訳機を絶対に教えないと……』

「ええ」

『ふむ……』

お婆さんの意思が固いと分かった私はユーにやんを見ながら考え込む。

「にゃ〜？（どうしたの旅人さん？）」

『……なあユーにやん、絵梨とおしゃべりしてみたいか？』

「にゃ？（え？）」

「はい？」

私の質問にユーにやんは首を傾げ、お婆さんも同様に首を傾げる。

『どつなのユーにやん？』

「にゃ………にゃにゃ〜（そりゃあ………ご主人様とおしゃべりできるならしてみたいけど）」

『よし決まりだ！ ではさっそく……』

「旅人さん、一体何を？」

私がユーにゃんを抱き上げて立ち上がるとお婆さんは訳の分からない顔をする。

『フフフフフ……ちよつと面白い体験をして貰いますよ。ではユーにゃんを少々お借りしますので)ピシユッ!』

「……………」

いきなり姿を消す私にお婆さんは呆然としていた。

そして30分後

『(ピシユッ!) お待たせしました〜』

「(ピシユッ!)……………」

再び私が戻ってきた……同時に私の背後に隠れて黒い服を着ている小さな少年がいたが。

「旅人さん、ユーにゃんはどうしたんですか？」

お婆さんはユーにゃんがいない事に気付く。

『フフフフフ……ほら、何時まで隠れてるの？』

「だ……だって……恥ずかしいんだもん……」

「？」

私が笑みを浮かべると背後にいる少年に声をかけるのを見たお婆さんは更に分からない顔をする。

『そんな事無いか……ら！（ヒョイツ！）』

「うわあー！」

私は黒い服を着ている少年を抱き上げて抱き上げ……。

『はい、ご対面〜』

「じ……こんにちは……」

お婆さんに少年の可愛らしい顔を見せた。

「……あのう、旅人さん……この子はどなたですか？」



「や…やっぱりダメだよ、旅人さ〜ん。こんな姿になってたら誰だって分らないよ〜」

『う〜ん、やはりいきなりは無理か……』

「ですから旅人さん、一体この子は？ それにユーにゃんはどうしたんですか？」

私の訳の分からない行動にお婆さんは顔を顰めながら聞く。

『ユーにゃんは貴方の目の前にいますよ』

「……………え？」

お婆さんは少年の顔をじっと見る。

『だから、この少年はユーにゃんです』

「お婆ちゃん、旅人さんの言うとおり僕はユーにゃんだよ」

「……………」

今度は目が点になり無言となるお婆さんであつたが……………。

「はあっ！？」

いきなり素っ頓狂な声を出した。

おまけ

私が擬人化したユーにゃんをお婆さんに見せている時……。

「今日のバイトは意外に早く終わっちゃった……まあいいか、ユーにゃんと遊ぶ時間が増えた事だし」

バイトを終えた絵梨が家に帰っている途中であった。

「ユーにゃんと遊ぶ事は確かにいいんだけど……出来たらユーにゃんと会話したいな。そうしたらもっと楽しく遊べるんだけど……」

動物と会話できる旅人さんは羨ましいなと絵梨は思う。

「旅人さんに頼んでユーにゃんと会話が出来ると翻訳機でも頼もうかな？ いや、もしくはユーにゃんを擬人化して……あゝ無理無理。いくら旅人さんでも猫を人間にするなんて無理に決まってるよ。バカな事を考えてないで早く帰ろうと……」

そんな非現実的な事は出来ないと思いつながら絵梨は帰る足を速める。しかし絵梨はまだ知らなかった。まさか私が本当にユーにゃんを人間にしていると言つ事を。

ユーにゃん擬人化物語（後書き）

旅人『では此処で人間になったユーにゃんを紹介しま〜す!〜!』

ユーにゃん「は…初めまして皆さん。ユーにゃんです（ペコッ）（

愛奈「か…可愛い〜〜（ギユウツ!）」

ユーにゃん「うにゃ!?!」

真美「ちよつと愛奈!〜! ずるいわよ!〜!」

綾「あ…アタシも………」

明菜「私もユーにゃん君を抱き締めたいんですが………」

旅人『ちよ、ちよつと待って君達。今私はユーにゃんの紹介を………』

愛奈「あ〜〜癒される〜〜（スリスリ）」

ユーにゃん「にゃにゃにゃ!?! お姉ちゃんくすぐりたいよ〜〜）

ピロピロ）」

愛奈「猫耳としっぽが動いている所も更に良いよ〜〜（スリスリ）」

綾「愛奈お姉ちゃん、アタシもユーにゃんを抱かせて………」

真美「ダメよ綾ちゃん。次は私なんだから」

明菜「いいえ。私です」

旅人『……………』

ユーちゃん「ちょ…ちょっとお姉ちゃん達、今回は僕の紹介じゃ…」

愛奈「そんな事はどうでもいいから、お姉ちゃん達と遊びましょ」

綾「ユーちゃん、アタシと遊ぼう」

真美「わ…私だって…」

明菜「私も…」

旅人『……………ちょっと君達は一時退場ね（パチンツ！）』

四人「……あ（ピシュツ！）」「……」

旅人『全く、今回は紹介コーナーなのに……………』

ユーちゃん「た…助かった。ありがとう旅人さん」

旅人『どういたしまして。それでは本題に入ろうか』

ユーちゃん「うん」

旅人『では少年ユーちゃんのプロフィールについて話しましょう』

名前 ユーにゃん

身長 93cm。 体重 13kg。 声：浅野〇澄

外見年齢 3〜4歳

容姿 サラサラの黒の短髪で、中性的な顔立ちをして肌は色白。目の色は黒。

服は長袖の黒いTシャツと黒のジーンズを着ている。

旅人「とまあプロフィールはこんなところかな？」

ユーにゃん「僕はご主人様と同じ声なんだ」

旅人「まあね、所で人間になった感想は？」

ユーにゃん「まだよく分からない……」

旅人「それもそうか……まあそれは向こうの来牙達に聞かせて貰うとするか」

ユーにゃん「所で旅人さん、僕はご主人様と会う予定なの？」

旅人「うっ、ん、絵梨が家に帰って来た時に元の姿に戻る事になっているんだけど……」

ユーちゃん「出来たらこの姿でご主人様と遊んでみたい」

旅人『……………ユーちゃんがそう言うなら』

ユーちゃん「わーい　ご主人様、僕楽しみに待ってるからねえ」

「

旅人『それではこれにて失礼します。ではユーちゃんを其方にお返しします（パチンツ！）』

ユ一にゃん擬人化物語 ？

みんなのうた

『愛する秀吉』

僕はいつもずっと君を見ている

君の笑顔を見ると

僕の心はすぐに癒される

君を僕の胸の中に抱き止めると

誰にも渡したくないと言う独占欲で一杯になる

僕の大好きな秀吉

いつも僕が君を求めると

君は温かく迎えてくれる

そんな君を見ていると

僕はすぐにでも君の唇にキスをしたくなってしまっ

そしてこつ伝えたい

愛している秀吉

BOKU の SUBETEW O SASAGETAI

作 吉井明久

さすらいの旅人のコメント

二人のラブラブっぷりに火傷する位凄く熱く感じました。

江藤愛奈のコメント

ボクは応援してるからね吉井君。何時までも続きますように。

沢井真美のコメント

木下君もお幸せに。

吉田明菜のコメント

吉井君の想いが凄く伝わりました。



『お婆さん、そろそろ現実を直視して貰いたいんですが？』

「……………」

少年ユーにゃんを紹介されたお婆さんは未だに啞然としていた。

『まあ無理もない……………猫から人間になるって非現実的な現象を目の当たりにしたら誰だってこうなるか……………』

「旅人さん……………」

『ん？ どうしたユーにゃん？』

ユーにゃんが涙目になりながら私の方に顔を向ける。

「やっぱり僕を元の姿に戻して」

『何で？ 人間になってお婆さんと遊びたかったんでしょ？』

「だって……………お婆ちゃんは人間の僕より猫の方が……………」

「そ…そんな事無いよユーにゃん！」

お婆さんがいきなり大声を出すと……………。

「え？ でもお婆ちゃん……」

「ごめんねユーにゃん、余りの出来事に驚きすぎちゃって……どうか許してくれるかい？（ギユウツ！）」

『……………（スツ）』

いきなりユーにゃんを抱き締めたので私はそっと離れる。

「ぼ…僕もゴメンねお婆ちゃん……」

「いいんだよ。ユーにゃんは何も悪く無いから。さあ、アタシに笑顔を見せてくれないかい？」

「うん！（ニコッ！）」

「……………（ドキーン！）……………何て可愛い笑顔なんでしょう〜（ギユウツ！）」

「うにゃっ！？ お…お婆ちゃん！？」

ユーにゃんの笑顔を見たお婆さんは射抜かれたかのように魅了されて力強く抱き締める。

『（お婆さんは完全に堕ちたな）』

差し詰めユーにゃんの笑顔は別名“エンジェルスマイル”と呼んだ方がいいだろう。恐らくシヨタコンじゃ無い女の子でも、ユーにゃんの“エンジェルスマイル”を見たら絶対に手を出すと思う。

『（絵梨がユーちゃんを見たら絶対終始抱き締め続けているだろうな……ん？）』

「お婆ちゃん、だ〜い好き（ニコッ）」

「……………（ブ〜〜〜！！！）」

『ちよ！？ お…お婆さん！！！！』

再びユーちゃんのエンジェルスマイルを見たお婆さんは少し間が経った瞬間に鼻血を噴出し気絶したので、私は即座に介抱した。

それから10分後、私はお婆さんを何とか元の状態に戻した。

「お婆ちゃん大丈夫？」

『大丈夫ですか？』

「だ…大丈夫だよユーちゃん。それと旅人さん、お見苦しい所を見せてしまい、すいませんでした」

お婆さんはティッシュを鼻に詰めて私に謝る。何とも無いように振舞っているお婆さんであるが、先程までは死ぬ寸前の状態だった。

気絶していたお婆さんの顔は死んでも後悔は無いと言う位の笑顔を見せていたので、私は本気であの世に行きそうだと危惧して輸血と

心臓マッサージを行い一命を取り留めたのだ。

『もう鼻血は出ませんよね？』

「はい、もう大丈夫です」

『………ならいいですけど』

何度も言わせて貰うが、お婆さんは本当に死ぬ寸前であったので確認しないとイケなかった。

「ねえお婆ちゃん、遊ぼうよ（クイクイ）」

ユーにゃんは私の苦労を知らずにお婆さんの袖を掴んで遊んで欲しいと懇願している。

「そうだねえ、ユーにゃんは何して遊びたい？」

「うーんとねえ………ボール遊び！」

「ボール遊びかい？ でも家にボールは………」

『ご心配なく、私の方で用意します（パチンツ！ パツツ）………はいどうぞ（スツ）』

私が指を鳴らすと、私の左手からプラスチック製の柔らかい白いボールが出るとお婆さんに渡す。

「すみませんねえ。それじゃあユーにゃん、お婆ちゃんと遊ぼうか」

「うんー！（ニッコウー！）」

「……………」

『はいはい、気をしっかり持って下さいねえ』

お婆さんがユーにゃんのエンジェルスマイルで昇天しそうだったので私がすぐに引き戻した。

そして……。

「ほらユーにゃん（コロコロ……）」

「んつと……えいつ！（ヒョイ！コロコロ……）」

「凄いねユーにゃん、アタシの所まで届いているよ（パチパチ）」

『（完全に祖母が孫と遊んでいる光景だな）』

ユーにゃんとお婆さんはお互い距離をとってボール投げをしている。

ユーにゃんがボールを投げてお婆さんの所まで届くと、お婆さんは褒めながら拍手をする。それを見ている私はいいい光景だと思った。

「ねえ旅人さ〜ん、一緒にやろうよ〜？」

ユーにゃんがいきなり私に声を掛けてくる。

『私もかい？』

「うん！ 旅人さんも一緒にやった方が楽しいと思って」

『いやいや、私は見てるだけでも楽しんで……』

「ダメ？」

少々涙目になったユーちゃんが私を見ると……。

「旅人さん？（まさかユーちゃんの誘いを断る気では無いでしょうね？）」

『……………（汗）』

恐ろしい顔をしているお婆さんが私を睨んで来た。しかも断ったらどうなるか分かっているのかと。

そんなお婆さんを見て私は混ざる事にした。

『よ……よし、それじゃあ私も混ざるとするか』

「うんっ！（ニコッ！）」

私が参加するとユーちゃんは私にエンジェルスマイルを見せる。

『……………（お婆さんが昇天する理由がよく分かったよ）』

最早ユーちゃんの笑顔は凶器だなど思いながら私はボール投げに参加した。

一時間後……。

「(トンツ…トンツ…トンツ…) お婆ちゃん、痛くない？」

「ええ、凄く気持ちよくて良いよ」

私達はボール投げの他にブロック遊びやお絵かき、動物ごっこ等々  
やった。その時にお婆さんが疲れた顔をしていたのでユーにゃんが  
肩叩きをしている。

ユーにゃんに肩叩きをされているお婆さんは至福の一時を味わって  
いるかのように顔が滅茶苦茶緩んでいた。

と、そんな時……。

ガチャツ！

「ただいま」

絵梨が帰ってきた。

「！！！！ ご主人様！（ダツ！）」

「ちょ… ちょっとユーにゃん!？」

絵梨の声が聞こえたユーにゃんはすぐに玄関へと向かった。

場所は玄関に変わる。

「あ、また旅人さんが来てるんだね。 …… そうだ」

絵梨は玄関に私が履いている靴を見ると丁度良さそうな顔をする。

「折角だから旅人さんにユーにゃんと会話が「お帰りなさい、ご主人様！（ギユウツ！）」 …… え？」

黒い服を着た小さな少年に抱きつかれた絵梨は呆然とする。

「ご主人様」（スリスリ）」



「え……えっと……」

少年に頬ずりされている絵梨は何が何だか分からない状態になっており……。

「君は誰なのかな？」

「……！」

誰なのかと聞くと少年はハッと気付く。

『「ユーにゃん。気持ちは分かるが、いきなり抱きついたら絵梨が驚くだろ」』

「あ……旅人さん……」

「……え？ ユーにゃん？」

私が少年を叱咤すると絵梨は聞き捨てなら無い名前を聞いた。

『「やあ絵梨、お邪魔してるよ」』

「そ……そんな事より旅人さん、今さっき何て言ったの？ それにこの子は？」

『「フフフフ……聞いて驚くなよ絵梨」』

「？」



『どっしたの絵梨？』

「……………」

私がユーにゃんをじっと見ている絵梨に声を掛けても反応は無かった。

「………ねえ旅人さん」

『何？』

「あの子はホントにユーにゃん何だよね？」

『ああ。真正正銘、小さな黒猫から少年に変身したユーにゃんだよ。何だったら証拠でも見せようか？（スッ）』

元の猫の姿に戻そうと私が指を鳴らそうとすると……………。

「だ…ダメ！ 今戻しちゃダメ！！」

『………あつそ』

絵梨がストップを掛けたので手を引っ込めた。

「ね…ねえユーにゃん」

「ん？ な…に、ご主人様」

お婆さんに肩叩きをしているユーにゃんに絵梨は声を掛ける。

「ユーにゃん、あたしの事好き？」

「うん！ 僕ご主人様大好き！！（ニコッ！）」

「…………（ドキーン！）…………ユーにゃん！！（ギョウツ！）」

「うにゃ！？ ご…ご主人様！？」

絵梨はお婆さんと同様にユーにゃんのエンジェルスマイルに魅了されて力強く抱き締める。

「ああ〜ユーにゃんがこんなにすっごく可愛いなんて〜（スリスリ）」

「くすぐったいよお〜ご主人様あ〜」

「ちょっと絵梨、邪魔をしないで貰えるかい？」

ユーにゃんの頬に頬ずりしている絵梨を見たお婆さんは痺れを切らしたかのように睨む。

「今はアタシがユーにゃんに肩叩きをされているんだよ。抱き付くなら後にしてくれないかい？」

「無理だよお母さん、こんなに凄く可愛いユーにゃんを見たとすく抱きつきたくなっちゃうよ」（スリスリ）」

「何言ってるんだい、ユーにゃんが困っているじゃないか」

お婆さんは絵梨からユーにゃんを引き剥がそうとしたが……。

「お婆ちゃん、僕は別に困ってないよ。ご主人様とこうするのは僕も嬉しいから」

「そ…そうかい？」

ユーにゃんの発言に少々悲しそうな顔をする。

「ほら、ユーにゃんだってこう言ってるし　ユーにゃん、今度はあたしと遊ぶ？」

「うん！　ご主人様と遊びたい　（ニコッ！）」

「……………（ブ~~~~~~~~！！！！）」

『おいおい！？　今度はお婆さんに続いて絵梨もかよー！！』

ユーにゃんのエンジェルスマイルに絵梨とお婆さんは大量の鼻血を噴出し、私は2人に輸血と心臓マッサージを開始した。

「ご主人様たちどうしたの？」

『ってかこの2人、ユーにゃんに鼻血が当たらないように顔を反対方向に向けているな』

輸血をしている最中に、一瞬2人をムツツリーニかと思ってしまった私であった。

## ユーにゃん擬人化物語 ？

お婆さんと絵梨を復活させた私は絵梨の部屋にいた。

『やれやれ、私がいなかったらお婆さんは確実に死んでいたぞ。てか絵梨、お前まで鼻血を出すか？』

「だって……だって……ユーにゃんが凄く可愛いんだもん！！（ギョウツ！）」

「……ご主人様〜ちよつと苦しいよ〜」

ベッドに座っている絵梨はユーにゃんを力強く抱き締めながら主張するが、ユーにゃんは苦しそうな顔をする。

『……………はあっ』

絵梨の主張に私は溜息を吐く。

何故私と絵梨とユーにゃんが此処にいるかと言うと、和室でお婆さんと絵梨が鼻血を出してぶっ倒れて私が介抱したのだが、お婆さんが二度目の鼻血噴出の為か意識を失っていた。

そんなお婆さんを私は寝室に連れて行き、布団を用意して寝かせた。流石に和室で談笑するとお婆さんに迷惑が掛かると思ったので私はフラフラとなっている絵梨とユーにゃんを連れて絵梨の部屋へと言ったのである。

『絵梨、ユーにゃんを放してやれ。苦しがつているぞ』

「え？ あ！ ゆ…ユーにゃん、ゴメン！！」

絵梨は苦しがつている顔をしているユーにゃんを放した。

「だ…大丈夫だよ、ご主人様……」

「ゴメンねユーにゃん、あたしったらっつい……」

「平気！ 僕は男の子だから！！（ニコッ！）」

「……………（ブ~~~~~！！）」

『はあっ……またか』

ユーにゃんのエンジェルスマイルに絵梨はまた鼻血を噴出したので、私は再び絵梨を介抱する。

そして五分後

『お前はムツツリーニか！？ 何度鼻血を出せば気が済むんだ！？』

絵梨を復活させた私は説教染みた突っ込みをする。

「1」…ゴメンなさい。ユーにゃんが可愛すぎて……」

『……………もう鼻血を出さない為に暗示を掛けておくか（スツ…………ト  
ンっ）』

介抱するのがバカらしくなっていると私は付け加えながら絵梨に暗示をかける。

『これで大丈夫だろう』

「ありがとう旅人さん。これでやっとユーにゃんの可愛い顔をじっくりと……………ユーにゃん、今からあたしと遊ぼうか」

「うん！（ニコッ！）」

「……………（ブ……………！）」

『嘘だろおい！？』

暗示を掛けたのにも拘らず絵梨はユーにゃんのエンジェルスマイルを見て、またまた鼻血を噴出して倒れた。

「ご主人様？」

『……………ユーにゃん、これ以上その姿でいると絵梨が危険な状態になるから元の姿に（スツ）』

私がユーにゃんを元の姿に戻そうと指を鳴らそうとすると……………。

「待つて旅人さん！ ユーにゃんを元に戻さないで……………！」

『うおっ……………』



「うにゃ!?!」

倒れていた絵梨がいきなり起き上がって戻すなど阻止してくる。

「お願い!! お願いだから元の猫に戻さないで!!」

『分かった分かった。だから鼻血を拭け』

鬼気迫る表情で私の腕を掴んでいる絵梨を見た私は戻すのを止めて、絵梨の鼻から出ている鼻血を拭き取る。ついでにベッドや床に付いている絵梨の鼻血は私の力を使って消しておいた。

『まったく、まさか私の暗示を打ち消すとは……別の意味でユーにやんの笑みは人を殺してしまいそうだな』

「そうだね。ユーにゃんはタダでさえ可愛いのに、あんな笑みをされたら誰だってイチコロだよ」

『……まあ被害者二号が言うなら確かにそうなんだろうな』

「?」

私と絵梨のやり取りを見たユーにゃんは何の事がさっぱり分からな  
いと言う顔をする。

「ああ……首を傾げる所も更に良いよお」

『バカな事言っていないで、さっさとユーにゃんの遊び相手をしたら  
どうだ?』

「……………そ…そうだった。ユーにゃん、何して遊ぶ？」

「うーんとねえ〜（ク〜）あ、お腹空いちゃった」

ユーにゃんのお腹から可愛らしい音がすると、ユーにゃんは両手で自身のお腹に触る。

「そう言えば……………あ、もう昼過ぎだ。待っててユーにゃん、今ご飯を用意するから（スツ）」

絵梨がツナ缶を出そうとするが……………。

「……………ねえ旅人さん、ユーにゃんは人間になっているけど、食べ物はどうなの？」

今まで通りのご飯を与えてもいいのかと私に聞く。

『食べ物に関しては今まで通りで大丈夫だよ』

「へえ〜そうなんだ」

『けどまあ、今のユーにゃんは普通の人間と変わらないから何でも食べられるぞ』

「え……………それってつまり……………」

「ご主人様！ 僕ご主人様の手料理食べてみたい！」

「へっ？」

私が何でも食べられると聞いたユーにゃんは絵梨に引っ付き手料理を食べたいと懇願する。

『ほお？ ユーにゃんは絵梨の手料理を食べたいのか？』

「うん！ 僕ハンバーグって食べてみたかったんだ！ ご主人様、いいかな？」

ユーにゃんが上目遣いで絵梨を見ると……。

「うん！ 分かった！ すぐに作ってくるからちよっと待ってて！  
！（ガチャツ！ バタンツ！！）」

絵梨は即座に部屋から出て台所へ向かいハンバーグを作り始めた。

『……………行動早いな』

「ご主人様の手料理楽しみ〜」

絵梨の素早い行動に呆れる私と、絵梨の手料理を心待ちにしているユーにゃんだった。

『ユーにゃん、絵梨が来るまで私と遊ぶか？』

「うん！ でもその前に……………」

絵梨が戻ってくるまで時間を潰そうとユーにゃんと遊ぶ事にした私であったが……………。

「旅人さん（ギユウツ！）」

『……………おい、私と遊ぶんじゃないの？』

ユーちゃんがいきなり私に抱き付いて来た。

「ありがとう旅人さん、僕を人間にしてくれて」

『別に礼を言われるほどじゃ無いと思うけど……………』

「ううん、だって旅人さんがいなかったら僕はご主人様とおしゃべりする事が出来なかったんだもん。だからありがとう……………」

『……………どういたしまして（ナデナデ）』

「旅人さんの撫で方が凄く気持ちいい」

私がユーちゃんの頭を撫でると気持ち良さそうな顔をするユーちゃんであった。

それから10分後

ガチャツッ！

「お待たせユーちゃん！ さあ今からあたしとご飯を……………って何し

てるの旅人さん!？」

『ん? ああ絵梨か……作るの早いな。もうちょっと掛かるかと思っ  
っていたが』

絵梨がハンバークを乗っけている皿を持って部屋に戻ると、私の背  
中に引っ付いているユーにゃんを見て私を睨む。

『何をしてるって……ユーにゃんが私に甘えているんだが……』

「（スリスリ）……旅人さ〜ん」

『元々コイツは生まれたばかりの猫だからな、親しい人間には誰に  
でも甘えたいんだろ（ナデナデ）ほらユーにゃん、絵梨が戻って  
来たよ』

「〜……あ! ご主人様!！」

私に頭を撫でられて気持ち良さそうな顔をしていたユーにゃんであ  
ったが、絵梨の顔を見た途端に私から離れて絵梨に近づく。

「待たせてゴメンねユーにゃん、今から一緒に食べようねえ〜（人  
が料理してる時に何て羨ましい事を!！」）

「うん!」

『……………』

ユーにゃんに爽やかな笑みを見せる絵梨であったが、私の顔を見た  
途端に嫉妬するかのよう睨んで来た。

そんな絵梨に私はつまない事で嫉妬するなよと突っ込みたかったが、それを言ったら絵梨が私に突っかかりそうな気がしたので敢えて無言を貫いた。

そして……。

「さあユーにゃん、あ〜んして……」

「あ〜ん（パクツ……モグモグ……ゴクン）……おいし〜」

「一杯あるからたくさん食べて（ああ〜美味しそうに食べてるユーにゃんが可愛いよ〜）」

『（絵梨は幸せな満喫気分だな）』

絵梨はユーにゃんにハンバーグを食べさせ……。

「んつと……こうで……こう……はい！ ご主人様！」

「よく描けてるねユーにゃん、凄く上手だよ」

『（ふむ、絵梨の似顔絵か）』

ユーにゃんが絵梨の似顔絵を描き……。

「んしょ…んしょ…んしょ……」

「頑張つて、ユーにゃん」

『（あれは完全に母子みたいだな）』

庭で三輪車に乗って漕いでいるユーちゃんに励ましの言葉を送り…

「すづ…すづ…」

「んん…ユーちゃん…すづ…すづ…」

また部屋に戻って疲れているユーちゃんに絵梨と一緒に昼寝をしていた。

『フフフ…絵梨も充分楽しんだみたいだな。さて、ここでタイムアップだ（パチンッ！）』

「すづ…すづ…（ポンッ）…にゃ？」

私が指を鳴らすと先程まで人間の姿をしていたユーちゃんが元の猫の姿に戻るとすぐに目覚めた。

『ユーちゃん、悪いけどここで終了だよ』

「（トコトコ）にゃ〜（もうちょっと人間のままでいたかった）」

起きたユーちゃんは私に近づき残念そうな顔をする。

『心配するな。またお前を人間の姿にしてやるから、それまで待ってる』

「にゃ？（ホントに？）」

『勿論だよ。それじゃあ私はこれで失礼する。じゃあね（ピシユッ  
』！）』

「にゃ〜（ありがとう旅人さ〜ん）」

私が姿を消すと同時にユーにゃんは私に礼を言った。

その後、絵梨が目覚めたらユーにゃんが元の姿に戻っていた事に物  
凄く残念がっていたそうなの。



ユーにゃん擬人化物語 ? (後書き)

旅人「さて、ユーにゃんも元に戻った事だし……………」

「…………旅人さん! ! !」

旅人「うお! ?」

愛奈「あの子は! ? あの子は何処に行っただんですか! ?」

旅人「ちよ…ちよつと愛奈ちゃん。あの子ってユーにゃんの事かい?」

真美「そんな当たり前の事を聞かなくても分かるでしょう! ! さあ旅人さん、あの子を早く私に……………」

旅人「真美ちゃんまで……………」

綾「旅人さん、アタシもユーにゃんを抱き締めたい」

明菜「すぐに呼んでくれませんか?」

旅人「君達もか……………残念だけどユーにゃんは元の猫に戻したよ」

四人「…………え……………! ! ! ? ? ?」

旅人「……………そんなショックな事か?」

真美「何て事をしてくれたんですか! ?」

愛奈「ボクはまだ抱き締め足りなかったのに!!」

綾「酷いよぉ〜旅人さ〜ん……」

明菜「私も抱き締めたかったのに……!」

旅人『……………』

真美「こうなったら……絵梨ちゃんの家に行ってユーちゃんを……!」

旅人『ちよつと待て! ユーちゃんを誘拐する気か!? そんな事したら絵梨が怒るぞ!?』

真美「構いません!! あの子の為だと思っなら犯罪の一つや二つ……………」

愛奈「ボクも真美ちゃんと同じです!!」

綾「お…お姉ちゃん達、それはちよつと……………」

明菜「気持ちわかりますが……………」

旅人『ほら! 綾ちゃんや明菜もこう行ってる事だし……………』

真美「行くわよ愛奈!!」

愛奈「うん!!」

旅人『つて聞いちゃいないし!! 待てコラ二人とも!! 行つたら二人の秘密を絵梨にバラすぞ!?!』

愛奈&真美「ううっ!!!(ピタッ!)」

旅人『つたく、何考えてんだ……折角、君達の為に少年ユーにゃん人形を用意すると言つのに……』

綾「え!? ユーにゃんの人形を持つてるの!?!」

旅人『ああ。ほれ(パチンッ!)』

パツ! パツ! パツ! パツ!

四人「……」

旅人『ほら、コレをユーにゃんだと思って……』

四人「……可愛い……!!!(ギユウッ!!)」

旅人『……早々にユーにゃん人形に抱きつくか……』

愛奈「ああ……やっぱり可愛いよ……」

真美「本物とは違つけどコレはコレで良い……」

綾「やっぱりユーにゃんは可愛い……」

明菜「いつかは本人を抱き締めたいですね」

旅人「……………完全に4人は少年ユ―にやんの虜になってるな、美咲にもアレをあげたら同じ行動を取るかな？」

## ローズVS鉄人2（前書き）

今回はGAUさんのオリキャラ 支倉ひばり、来島アキ、クリステ  
イーナ・ウエストロードが参加しています。

GAUさん、許可を頂きありがとうございます。

## ローズVS鉄人2

ここはとある会場である。

その場所で……。

「やあ旅っち！ 久しぶりだねえ」

『また会えて嬉しいよ、アメリカンクリス。いや……クリスティーナ・ウエストロード』

私はクリスと再会していた。

「んもう、クリスって呼んでよん おねーさんと旅っちの仲じゃない」

『ではクリスと呼ぼう。それで、他のゲストさんは？』

「旅っちの後ろにいるよん」

『え？』

私が後ろを振り向くと……。

「初めまして“さすらいの旅人”さん、来島アキです」

何と来島アキもこのイベントに参加していた。

『これは御親切に。私の事を知っているとは光栄ですな』

「貴方の噂はよく耳にしていますよ。何でもバカ共を制裁しているとか……」

『ええ。何時も下らん事をするバカ共に地獄を見せていますよ。この間は「あの〜?」「……ん?」』

突如下から声が聞こえたので私は下を見ると……。

「あたしもいるんですけど……」

支倉ひばりが背伸びしていた。

『……あの支倉さん、そんな無理に背伸びしなくても……』

「だって……」

『自分が小さいと認めているようなもんですよ?』

「ちっちゃいってゆーなーっ！ あたしちっちゃくないもーん!!」

『……………』

ひばりの台詞にあまり説得力を感じられなかった。

と、そんな時……。

「旅人さん、準備出来たよ」

『綾ちゃん……っつておい』

「………何でラウンドガール？」

ラウンドガールの格好をしている綾の登場にクリスマス達は綾を見る。

『綾ちゃん、何故にラウンドガールなの？』

「ローズお姉ちゃんがコレ着て応援して欲しいって」

『………何考えてんだ、ローズは』

綾の答えに私は頭に手を置く。

『まあいい。取り敢えず綾ちゃん、この人達に自己紹介を』

「あ……うん。えっと……初めまして、宮本綾です（ペコッ）」

「君があややんか　　ホントえりりんにそっくりだねい」

「知ってるの？　クリスマスさん」

「うむん、旅うちから聞いた」

来島の問いにクリスマスはすぐに答える。

「皆さん、今回は宜しくお願いします」

「うん、よろしくね宮本さん。あたしは支倉ひばりだよ」

「宜しくお願いします、支倉さん」



ひばりは綾に気兼ねなく声を掛ける。

「ところで宮本さんって何処の高校に通っているの？」

「え？ あ…あの、アタシは……」

「！！ ダメひばりっち！！ それ聞いちゃ……」

クリスはすぐにストップを掛けようとするが……。

「アタシは小学生です」

「！！！！！！（ピシッ！！！！）」

綾がすぐに答えると、ひばりは石化状態になってしまった。

「あちゃ〜〜〜」

「え？ ……小学生？」

クリスは頭に手を置き、来島は目が点になっている。

『おやおや、支倉さんは相当ショックをうけているみたいですね』

石化になっているひばりを見て私は予想通りの反応だと思った。



『綾ちゃん、そう緊張しないで（ボソボソ）』

「だって……こんな初めてだから」

緊張している綾に私は小声で言う。

「ちょっと旅っち！！ おねーさんが解説役じゃないの！？」

『残念ですが、貴方は前回の試合で全く解説をしていませんでしたので今回は無しです』

前回のクリスは完全に鉄人の応援だけしかしていなかったため、今回も絶対また同じ事をやるのだと思い解説役から外したのである。

「そんな！？ にしむーの解説を出来るのはおねーさんだけなのに！！」

『そしてゲストにクリステイナ・ウエストロードさん、来島アキさん、支倉ひばりさんを迎えております！』

「スルーされた！？」

私は抗議をしているクリスを無視してゲスト側の紹介をする。

「えっと……今回の試合に呼んで下さってありがとうございます」

「おねーさんはゲストじゃなくて解説役だよ！！」

「……………」

来島は一通りの挨拶をし、クリスは未だに抗議しており、ひばりはまだ石化状態である。

『そして観客席には、この試合を再び待ち望んでいたグレートレンジャー！ FFF団！ 坂本雄二！ 遊佐翔がいます！！』

私が観客席に向かって言うと……。

「……待ち望んでいる訳が無いだろうが……！！！！！！！！！！」

「……俺達を帰らせろ……！！！！！！！！！！」

「何でまた俺を連れて来るんだよ……！！！！！！！！！！」

「もう勘弁してくれよ！？ 俺様は悪さなんてしてねえのに何でこんな目に遭うんだよ……！！！！」

上から順に、グレートレンジャー、FFF団、雄二、翔が前回と同じく揃いも揃って私にブーイングをして鎖に巻きつかれている観客共であった。

「旅人さん、あの人達も連れて来たの？」

『大丈夫だよ綾ちゃん、アイツ等はあそこから動くことが出来ないから。それに……（アイツ等の苦しむ顔を見たいし）』

「？」

『それはそうと支倉さん、何時まで石になっているんですか？』

「……………」

綾が分からない顔になっていたが、私は話題を変える為に石になっているひばりに声を掛ける。しかし声を掛けてもひばりは石になっただけである。

『そろそろ現実を見て下さいね（パチンツ！）』

「（パッキーンツ！）……………あれ？ あたしは何を？」

私が指を鳴らすと石になっていたひばりが元に戻った。

「……………あれが旅人さんの能力ですか」

「相変わらず何でもありだねい」

私の能力を見た来島は観察し、クリスは面白そうに見ている。

『支倉さん、そろそろ試合が始まりますので』

「え？ あ……………はい！！ りよ……………両者頑張ってください！！」

『綾ちゃん、君は支倉さんの隣に……………』

「う……………うん。（スツ……………ストツ）支倉さん、今日はよろしくお願ひします」

「……………うん(ず〜ん)」

ひばりは隣に座った綾を見ると石にはならなかったが落ち込み始めた。

「あの……支倉さん？」

「あたしなんか……どうせちっちゃいよ……」

「……………ひばりお姉ちゃん、教えてもらいたい事があるんだけど」

「へ？」

落ち込んでいるひばりが綾を見ると……。

「今回のトライアスロンって言う競技のルールが全く分からないから、ひばりお姉ちゃんに教えてもらいたいんだけど……ダメかな？」  
旅人さんがひばりお姉ちゃんに聞けば何でも教えてくれるからと綾は付け加える。

「え……あ……」

「アタシとしても、ひばりお姉ちゃんだけが頼りで……」

「……………うん！ 教えてあげる！ お姉ちゃんが何でも教えてあげるよー！」

突如ひばりがお姉さんモードに入って綾にトライアスロンについて

説明する。

「旅人さん、宮本さんを使って支倉さんを元気付けさせましたね」

「あらバレた？」

「おねーさん達にはバレバレだよん」

「……さいですか」

私と共にひばりが元気になって良かったと思っ来島とクリスであった。

「「「「「「いい加減に俺達を解放しろ〜〜〜!!!!!!」」」」」

「「「「「」

## ローズVS鉄人2？

『では選手入場です！！ 先ずは挑戦者である、お色気レンジャーのリーダー　ローズ！！』

「ブルワアアアア~~~~~！！！！！！！！！！」

トリアスロン専用のウェットスーツを纏い薄化粧をしているローズは登場と同時に大きな雄叫びを上げる。

「ローズお姉ちゃん、凄い気合が入ってる……………」

「あの人がクリスさんの言っていたオカマさんですか……………確かに凄い人ですね」

「おお　何時見てもろーずいの筋肉は凄いねい」

「……………あたし、あの人の応援は出来そうも無い」

綾たちはそれぞれ思った事を言う。特にひばりはローズの顔を見て気持ち悪そうな顔をする。

因みにローズは観客席の近くにいるので当然……………。

「~~~~~ウギャアアア~~~~~！！！！！！！！！！」

間近で見た観客共（グレートレンジャー・FFF団・雄二・翔）はデカイ悲鳴をあげる。恐らくローズに喰われた出来事でも思い出し



ているのだろう。そうでなければ、あの様な絶望に満ちた悲鳴は上げない筈だ。

「観客席側からは物凄い悲鳴を上げていますね」

「きっと、ろーずいーの逞しい筋肉を見て興奮してると思うよん」

「クリス、それは絶対違うと思うよ」

クリスの見当違いにひばりは即座に突っ込む。

「ねえ旅人さん、あの人達はどうしてローズお姉ちゃんを見た途端あんなに大声を出してるの？」

『……………綾ちゃん。後で教えるから今は聞かないで』

「う…うん。分かった」

綾の質問に私は答えなくなかったので私はさっさと鉄人を紹介することにする。

『そして前回のチャンピオンである、西村宗一！！』

「ウオオオオオ~~~~！！！！！！」

こちらもトリアスロン専用のウェットスーツを纏い腰にチャンピオンベルトを装着して雄叫びを上げる鉄人。

ローズと鉄人は互いに近づき……………。

「この時を待つてたわ西村さん!! (ガシッ!)」

「俺もだ! (ガシッ!) お前と再び戦える日を心待ちにしていたぞ!!」

「今度は負けないわよ!! そしてチャンピオンベルトはワタシが頂くわ!! (バチバチ!)」

「そう簡単にコレは譲れんな!! 次も俺が勝たせてもらう!! (バチバチ)」

握手をした後に火花を散らして睨みあっていた。

「『『『またこのシーンかよ〜!!??』』』」

「『『『もう勘弁してくれ〜!!!!』』』」

「あの二人を見てるだけでむさ苦しいんだよ!!」

「旅人さん!! 頼むから俺様をクリス達の所の席に移動させてくれ!!!!」

観客共の発言に私は無視していた。

と言うより、司会席とゲスト席側の方には観客席側の声は聞こえないように私が設定しておいたが。

「おうおう るーずいーとにしむーの睨み合いがすごいよん」

「既に戦っているかの様な感じですね」

「凄いビジュアルだよ……」

クリスは楽しそうに見ており、来島は冷静に二人を観察し、ひばりは少々嫌そうな顔をしていた。

「では二人の選手が入場したのでご説明します！ 今回のトライアスロンは国際トライアスロン連合の規格に基づきましてアイアンマンレースです！！ スイム 3.8 Km バイク（自転車）180 Km ラン 42.195 kmを完走して頂きます！！ お二方、異論はありませんか？」

「無いですわ！！」

「俺もだ旅人！！」

「異論が無いみたいですね。ではスイムキャップとゴーグルを付けて位置に着いて下さい！！」

私の指示によりローズと鉄人は準備をする。

「ねえひばりお姉ちゃん、アイアンマンレースって何なの？」

「えつとね、簡単に言うとトライアスロンの中で一番距離が長い競技なんだよ。このレースを完走するとアイアンマン（鉄人）の称号が受ける事が出来るの。因みに……」

「にしむーは、過去に完走したから学校の皆から鉄人って呼ばれているんだよん」

ひばりが綾に説明している最中にクリスが割って入って来た。

「へーそうなんですか。ウェストロードさんはよく知っているんですね」

「まあねい あやちゃん、にしむーの事を知りたかったらおねーさんに聞いてね あとおねーさんの事は親しみを込めてクリスって呼んでねい」

「……あたしが綾ちゃんに説明していたのに」

『まあまあ、支倉さん』

いきなり割って入って来たクリスにひばりは顔を顰めていた。

と、ゲスト側がこんなやり取りをしている時に……。

「旅人様あゝ準備はいいですわあゝ」

「何時でもいいぞ旅人！」

ローズと鉄人はスタートラインに立っていた。

『それではトライアスロンを開始します！！ では綾ちゃん！！』

「う……うん。えっと……位置に着いて、用意……」

「……（スツ）」

ローズと鉄人は構え……。

『スタート!!!』

「ウオオオオオ~~~~~!!!!!! (ザバザバ~~~~~! !!!!!)」

綾の掛け声でいきなり猛烈なスピードで泳ぎ始めた。

『さあ、トライアスロンが開始しました!! 両者はいきなり凄いスピードで泳いでいます!!!』

私は目の前のテレビに映っているローズと鉄人を見て実況する。

「にしむ~~~~!! 頑張つて~~~~!!!!!」

「凄いですね、あのオカマさん。西村教諭と互角にやりあうなんて……」

「西村先生もオカマさんに負けじと本気でやっているし……」

クリスは鉄人の応援をしており、来島とひばりは本気で泳いでいる二人を見て驚いている。

『まあ少し経つたら二人は冷静になってペースを落とすでしょう』

「あ……西村さんとローズお姉ちゃんのペースが落ち始めた」

泳いでいる鉄人とローズは……。

「（いけないいけない、ワタシとした事が……）」

「（俺とした事がペースを上げすぎた……まだまだ先は長い。此処は温存しておかねば……）」

自身を戒めて少しずつスピードを落としていた。

……

『ふむ……では此処からは（パチンツ！）』

「およ?」

「あら?」

「へ?」

私が指を鳴らすと、クリス達は素っ頓狂な顔をする。

「旅人さん、今何をしたんですか? 西村教諭とオカマさんが凄く速くなっているんですが……」

『アイアンマンレースとなると物凄い時間が掛かるから、私の方で時間を早めたんですよ』

「なるほど……」

「確かにそうしてくれた方が、あたしとしては好都合ですね」

来島とひばりは私のやった事に納得してくれたみたいだ。私としても10時間以上は見ている気は無いので早く終わらせるようにした。

が……。

「ちよつと旅うち！　こんな素晴らしいレースを早めるなんて酷いよー！」

クリスはご不満であった。

『文句を言わないでくれクリス。ゲストである君達をあんまり長居させると此方としては色々和不味いんだから』

「そんなの関係無いよー！！　だから時間を元に戻してー！！」

『あんまりしつこいと君を元の場所に送り返すよ？（ニコツ……スツ）』

「……………わかったよん……ブ〜」

私が笑みを浮かべて脅しを掛けるとクリスは引き下がった。流石にレースの途中で転送されたら溜まったものでは無いと判断し、大人しくテレビを見始めた。

「ねえ旅人さん」

『ん？ どうした綾ちゃん』

「観客席にいる人たちの様子がおかしいけど、どうしたのかな？」

綾が指をさした方向を見ると……。

「「「「ギヤアアアア~~~~~!!!!!!」」」」

「「「「止めてくれ~~~~~!!!!!!」」」」

「や…止める……俺にこんなものを……グアアア~~~~~!!!!」

「ウギヤアアア~~~~~!!!!」

グレートレンジャー、FFF団、雄二、翔の叫び声と呻き声は此方からは聞こえないが、観客全員が拷問されているかのような顔をして苦しんでいた。

『ほほう、相当効いているみたいだね〜』

「効いているって……旅人さん何をしたの？」

全く飲み込めていないひばりが質問してきたので私は答える。

『アイツ等には私の方でちょっと仕掛けを施してね』

「仕掛け？」



『アイツ等はローズと西村先生の感覚を共有させているんです。まあ分かりやすく言えば、二人のどちらかの背中に抱き付いて荒い呼吸と熱い体温を感じているみたいな所ですよ』

「……………うつつ」

ひばりはローズに抱き付くのを想像したのか、口に手を当てて吐きそうな顔になっている。

「……………観客さん達はさぞかし辛いでしょうね。拷問にも等しい仕打ちをされて」

『ふん！ 綾ちゃんにセクハラしたアイツ等には丁度良いお仕置きですよ』

雄二と翔はついですけどと私は付け加える。

「セクハラって……………あの大バカ軍団は小学生の宮本さんにセクハラをしたんですか？」

『ええ、アイツ等はこの間のメイド喫茶で……………』

私がメイド喫茶の出来事を話すと……………。

「……………あの人は最低ですね」

「……………」

来島は苦しんでいるグレートレンジャーとFFF団に軽蔑の眼差し

を送り、綾はあの時の事を思い出したのか顔を顰める。

「でも旅人さん、坂本君と遊佐君は何も悪い事はしてないんじゃない……？」

『いやあ、雄二と翔が是非もう一回見たいと私に言ってきて、自ら感覚を共有してくれと頼んできたんですよねえ』

「そ……そうなの？」

「……………（絶対嘘ですね）」

「……………（もっちゃんとかけるんがそんな事言うなんて絶対にありえないねい）」

まんまと私に騙されているひばりに、来島とクリスは内心で私の嘘を見破っている。

『まあ今はアイツ等の事はどうでもいいですから、二人の方を……おや、もう泳ぎきってバイクエリアに入っていますね』

テレビに映っているローズと鉄人を見ると、何時の間にかバイク走行をしていた。二人の走行ペースは全く同じで横に並んでいる状態であった。

「ふっ！ ふっ！（流石ね西村さん。スイムで結構体力を使ったかと思いきや、まだまだ余裕そうね）」

「ふっ！ ふっ！（ローズも中々やるな。泳ぎきっても体力がまだ落ちないとは）」

バイクで走行しているローズと鉄人は互いに相手を賞賛している。

「西村さん、そろそろペースを上げたほうがいいんじゃないの？」

「お前こそペースをあげたらどうだ？ そうしないと俺に追い抜かれるかもしれないぞ？」

「あらご冗談を。その台詞はそっくりそのままお返ししますわ」

二人はいかにも余裕と言わんばかりに相手に顔を見せる。

「しかし残念ですわね西村さん」

「何がだ？」

「今回の勝負はワタシが勝ってしまうから、西村さんはもうチャンピオンベルトの感触を味わえる事が出来ないと思ひまして、ウフフフ……」

「安心しろ、お前に俺のチャンピオンベルトは渡さん。そして今回

も俺が勝つ」

ローズの挑発に鉄人は乗らずに軽く言い返す。

「あらしは勝者の余裕ですか？ 油断してるとワタシに負けるか  
もしれませんわよ？」

「どうかな？」

一見、二人は互いに余裕に会話をしているが……。

「（絶対勝ちますわよ西村さん！！！！）」

「（お前にチャンピオンベルトは絶対渡さん！！！！）」

内心では物凄く燃えていたのであった。

ローズVS鉄人2 ? (前書き)

今回は何時もより短いです。

## ローズVS鉄人2 ?

ローズと鉄人がバイク走行をして50km進んでいた。

『一見、余裕そうな会話をしている二人ですけど……』

「ローズお姉ちゃんは絶対メラメラと燃えているね」

「そ…そうなの、綾ちゃん？」

綾の発言に隣にいるひばりが綾に問いかける。

「うん。ローズお姉ちゃんの考えている事はアタシ分かるから」

「……………」

『ハハハ……（普段からローズと一緒にいる綾ちゃんだからこそ分かるんだよねえ……）』

綾の答えにひばりは一瞬、ローズに洗脳されているのでは無いかと思っ私を見ており、私は苦笑しながら内心で確かに分かるだろうなと思っていた。

「へえ〜、あややはろーずいの事をちゃんと見てるんだねいけれど！ おねーさんだって、にしむーの考えている事は分かるんだから！」

「そっなんですか……」

「クリスさん、小学生の宮本さん相手にムキにならないで下さい」  
何時の間にか元気になっていたクリスが綾に対抗心を剥き出している事に、来島は突っ込む。

「チツチツチ、アキぴょん。こつ言う事はキチンと宣言しておかないとダメなのよん　にしむーの専属マネージャーとしてねい」

「貴方は何時から西村教諭のマネージャーになったんですか？」

「学園に入学してからだよん」

「……………」

最早どう突っ込めばいいのか分からない来島であった。

『来島さん、クリスの事を一々気にしてたら身が持ちませんから放っておきましょう』

「……………そうですね」

私の発言に来島はクリスを無視してテレビに集中する事にした。

「にしむー！　再びろーずいーに勝って2連覇を目指してー！！」

『おつ、半分進んだ所で補給し始めましたね』

テレビを見てみると、ローズと鉄人は走行しながらバイクに取り付けているボトルを取って水分補給していた。





「ああ……た……頼む……もう……これ以上聞くと……死んじまう」

「お……お願いだ……俺様を……早く此処から……」

雄二と翔も死ぬ寸前であった。

『おやおや、観客共は命が尽きそうだな……』

「あの…旅人さん。あたしはそろそろ解除した方がいいと思うんだけど？」

ただでさえ無理矢理連れて来たんですからとひばりは付け加える。

『支倉さんには悪いけど、私は解除する気はありませんよ』

「でも……まあ綾ちゃんにセクハラをした人たちは許せないでしょうけど、坂本君と遊佐君は解除した方が……」

『雄二と翔には、いずれちよつとした天国を見せてあげるからご心配なく』

「て……天国？」

『フッフ……実は（ヒソヒソヒソ）』

私がひばりに耳打ちをすると……。

「（//////////……………きゆう（ボタンツ！）」

『おや？ 支倉さんはこう言った話は苦手だったのかな？』

ひばりは顔が真っ赤になって倒れてしまった。

「ダメだよん旅っち。ひばりんはウブなんだから」

『そうかい。綾ちゃん、悪いけど倒れている支倉さんを休憩室に連れてってくれないか？』

「うん、分かった（スツ）……んしょ（スタスタ）」

綾はひばりをおんぶして休憩室へと連れて行った。

「旅人さん、支倉さんが宮本さんにおんぶされたら知ったら傷付くんじゃないでしょうか？」

「まあまあ。あややんの事を妹みたいに思っているひばりっちなら大丈夫だよん　だよね旅っち？」

『だと良いけど。………後で支倉さんには気絶させてしまったお詫びをしないとね（ボソツ）』

「何か言いましたか旅人さん？」

『いえ別に。では再びレースを見ましようか』

私達は再びレースをしているローズと鉄人を見始める。

バイクで150kmまで走行したロードと鉄人は……。

「ふっ！ ふっ！ ふっ！ ふっ！（ワタシもそろそろ息が上がり始めて来たわね）」

「ふっ！ ふっ！ ふっ！ ふっ！（どうやら奴も息が上がっているみたいだな）」

互いに息が上がっていた。

と言うか、あそこまで走行して息が少しだけ上がっているのは少々おかしい所である。それだけ二人の体力が並外れた者では無いと言う事がよく分かったが。

「あら西村さん？ 息が少し上がっているんじゃないか？」

「それは貴様も同じだろうか？」

「はいいえ、ワタシはまだまだ余裕ですわよ」

「フン！ それは此方とて同じだ」

バイク走行なのかロードと鉄人はまだ余裕な会話をしている。

「ウフフフ……ま、その余裕が何時まで持つか見ものですけど」

「軽口を叩いている暇があったら走行に集中したらどうだ？ 気を抜いていると俺に抜かれるかもしれんぞ？」

「御心配なく その時はワタシが一瞬で追い抜きますから」

鉄人の言葉にローズは片目ウィンクをしながら言い返す。

「どうかな？ 言っておくが俺はまだ全力を出してはいないぞ」

「それはワタシもですわ 何でしたら本気を見せて差し上げましようか？」

「俺がそんな挑発に乗ると思うか？ ………………とやりたい所だが」

鉄人は先程までの余裕な顔から真剣な顔に変わり……………。

「そろそろお互い全力を出さないか？ 何時までも貴様と長話をする気は無いからな」

「あらそうですか。では西村さんの言うとおり、全力を出すとしましよう……………」

ローズも真剣な顔に変わった。

「じゃあ行きますわよ、西村さん？」

「ああ。これ……………」

「勝負！！！」

二人はいきなりスピードを速めた。

「ブルワアアア~~~~！！！！！！」

「うおおおお~~~~！！！！！！」

両者は凄まじいスピードを出して一気に残りの30kmを走りぬけて、ランに持ち込んだ。

## ローズVS鉄人2 ?

『おお……バイク残り30kmでローズと西村先生が、車並みのスピードを出して一気にランまで行ったな』

「すい……」

「流石は、にしむーとろーずいゝ　でもおねーさんは、にしむーの応援に専念するよん」

『「どづぞづ自由に」』

クリスの鉄人好きは知っているので、私と来島はどつでもいいように一言で片付ける。

「………ねえ旅つちとアキぴょん、何かおねーさんをどつでもいいように思ってない？」

『「滅相も御座いません」』

「………揃って同じ事を言うのがなぐんか引つ掛かるんだよねい」

私はクリスの疑わしい視線を無視して実況に専念した。

『おおつとお！！　ローズと西村先生がお互いに全速力で走り続けています！…！』

「時間を早めている分、二人の走るスピードが凄く速く見えますね」

『じゃあ此処からは元の時間に戻してじっくりと見ましようか（パチンツ！）』

「あ……雲の流れの速度が元に戻った。けど……あちらは大して変わりませんね」

来島は空を見て時間が元に戻ったのを確認したが、テレビに映っているローズと鉄人を見て速さが落ちているのには変わりはないが、それでも常人が出すスピードではないと思った。

《ブルワアアア~~~~！！！！！！（ダダダダダダ~~~~！！！！！！）》

《うおおおおお~~~~！！！！！！（ダダダダダダ~~~~！！！！！！）》

雄叫びをあげながらお互い全速力で走りきっているローズと鉄人である。

当然あの二人の体温や呼吸は最高潮になっているので……。

「~~~~（ピクツ……ピクツ……ピクツ……）~~~~」

「あ……あつい……オカマと鉄人の……体が……グハツ！（ガクツ！！）」

「~~~~（ピクツ……ピクツ……ピクツ……）~~~~」

「……………ウプツ！（ゲボゲボゲボ！！）」

「ち…………ちくしょう…………俺様は…………もう…………（ガクッ!）」

観客側（グレートレンジャー・須川・FFF団・雄二・翔）の全員は屍となっていた。

『……………（パチンツ!）』

「……………フオオオオ……………!!!……………」

私が無言で指を鳴らして、観客側にいる全員に美女の映像を見せて目を覚まさせたが……………。

『……………（パチンツ!）』

「……………ウギヤアア……………!!!……………」  
クッ!……………」

再び指を鳴らして、ローズのヌード映像を見せたらまた気絶した。

「旅人さん、何をしてるんですか?」

『あそこにいるバカ共を見てみな（スツ）ちょっとしたコントだから』

「え?」

私が来島に観客側を見ると指をさし、来島がそこを見ると……………。

『まずは美女の映像を見せて（パチンツ!）』





「！！！！」

.....  
.....

「ブルワアアア~~~~！！！！！！（ダダダダダダ~~~~！！！！！！）」

「ウオオオオオ~~~~！！！！！！（ダダダダダダ~~~~！！！！！！）」

ローズと鉄人は未だに全速力で走っている。

「（くっ！ 西村さんもしぶといわね！！ けど勝つのはワタシよ！！！！）」

「（中々粘るなローズ！！ だが勝つのは俺だ！！）」

勝利への執着を最後まで捨てていない二人は更に闘志を燃やし、スピードを維持している。

ゴールまで残り20km。

.....  
.....

「来島さん、最早あの二人は完全に人間の領域を超えていますねえ」

「ですね。数十km走っても尚スピードが落ちませんから」

何かを悟った私と来島はテレビに映っている二人を生暖かい目で見ている。

「頑張れにしむー！！ 後15kmだよー！！！！」

「普通ならもうとつくにスピードは落ちてもいい筈なんですけど」

「あの二人はもうオリンピック選手が真っ青になる位の超人ですね」

クリスが鉄人を応援する中、私と来島は実況しながら解説している。

そして20分後……。

「ブルワアアア~~~~！！！！！！（ダダダダダダ~~~~！！！！！！）」

「ウオオオオオ~~~~！！！！！！（ダダダダダダ~~~~！！！！！！）」



「二人とも頑張つて下さい!!!」

クリスは声が囁れる位の大声で鉄人を応援しており、来島も負けじと言わんばかりに二人を応援する。

『150m! 100m! 50m! 20m!』

「ワタシが勝つわよ西村さ〜ん!!!!!!」(ダダダダダ!!!!!!)」

「俺だ〜〜!!!!!!」(ダダダダダ!!!!!!)」

二人はラストスパートを駆け……。

「ダアアアアアア〜〜〜!!!!!!」

そしてゴールした……それも同時に。

『なっ!?! ど…同着! 同着です!?!』

「何(ですって・だと)!!? ハアッ!! ハアッ!! ハアッ!!  
ツ!!!!」

私の発言にローズと鉄人は物凄く息が上がりながらも此方を睨み……。

「何言ってるの旅っち!? にしむーが勝つたに決まってるでしょ!!!!」

「旅人さん! 早くスロー映像を出して下さい!!!!」

クリスが鉄人が勝つたと豪語し、来島は勝敗が気になるのかゴールシーンのスロー映像の要求をしてきた。

『ちよ…ちよっと待つてください！　すぐに映像を出します！…！）  
パチンツ！…！皆さん！…　あちらをご覧ください！…！（ビシッ！…！）』

私が指を鳴らした後に大型テレビの方へ向けさせる。そこにはゴール寸前の二人が映っていた。

「ほら…！　やっぱりにしむーが勝ってるじゃない…！」

『クリスは静かに…！　どうだい来島さん！？』

「う…う…ん…！…！これは…！…！オカマさんが若干早くゴールに到達しています…！」

『…！（ジ…）確かに…！　第二回最強王者決定戦　IN　トラ  
イアスロンの勝者はローズです…！…！』

私がローズに勝利宣言をすると…！…！。

「ブルワアアア…！…！…！…！」

「ぐ…う…！…！（バタンツ！）」

ローズは両腕を天高く掲げながら雄叫びを上げ、鉄人は悔しそうな表情をした瞬間に倒れた。

「…！…！に…！…！に…！…！…！…！…！」

『以上！！ 第二回最強王者決定戦 IN トライアスロンでした  
~~~~！！！！』

クリスは倒れた鉄人に駆け寄り、私は終了宣言をした。

おまけ

トライアスロンが終わった後……。

「ローズお姉ちゃんが勝った！ わ〜い！！」

「うっそ〜。オカマさんが西村先生に勝っちゃった……」

休憩室に設置してあるテレビを見て、ローズが勝ったの事に綾は喜び、ひばりは信じられない顔をしていた。ひばりは20分前からとつくに起きていたのだが、涼しい部屋である休憩室で見ていた方が良いと思い、綾と一緒にテレビ観戦をしていた。

と、そんな時……。

『何だ支倉さん、起きてたんなら来れば良かったのに……』

「旅人さん……」

「あ、旅人さん」

私が休憩室に入るとひばりと綾は此方に顔を向けた。

『どうでしたか支倉さん？ ローズが勝った所を見て……』

「……正直驚きました。まさか西村先生に勝つなんて予想していませんでしたので」

『けどローズが勝った 私としても凄く嬉しいよ』

「そうですね……けど！（スタスタ）」

意外そうな顔をしていたひばりが急に顔を顰めて私に近寄り……。

「坂本君と遊佐君にエッチな事するのは許しません！！ そう言う事は大人になってからで……」

綾に聞こえないよう小声で説教を始めた。

『はいはい、それはお詫びをした後でじっくりと聞かせて貰いますから』

「お詫び？」

私の発言にひばりは説教を止めた。

『そう、お詫びです。出て来い!!（パチンツ!）』

ボンツ!!

「「!!!!」」

私が指を鳴らすとひばりの隣から突然白い煙が出て来ると、綾とひばりは即座に顔を向ける。

そして煙が晴れると……。

「うにゃ?」

少年ユーにゃんが現れた。

「へ?」

「あ! ユーにゃん!（ダツ!）」

『綾ちゃん、今回は抱きついちゃダメだよ』

綾がユーにゃんを抱き締めようとするが私が阻止した。

「た…旅人さ…ん! あの子を抱かせて…!!（ジタバタジタバタ…!!）」

「あ…あの旅人さん、この子は?」

『フッフッフッフ……さあユーにゃん、支倉さんに御挨拶をして』

「はい 初めまして、ひばりお姉ちゃん！ 僕はユーにゃんです！（ペコッ）」

『因みに絵梨の飼い猫だよ。知ってるでしょ？』

「……………え……………！！！？！？？」

ユーにゃんが自己紹介をするとひばりは凄く驚いた顔になって大声を出した。

「た…旅人さん……………こ…こ……………この子が……………あのユーにゃんですか？」

『はい 私の力で猫だったユーにゃんを人間にしたのです！！』

「……………猫が人間に……………旅人さんはホントに何でもアリなんだね（けどこの子凄く可愛い）」

私の能力にひばりは人間になったユーにゃんをマジマジと見る。

『ではユーにゃん、支倉さんにある事を言っつて』

「はい」

「？」

ひばりは分からない顔をするが……………。

「えっと……ひばりお姉ちゃん大好き（ニコッ！）」

「……………（ドキューンッ！！！！）か…か…可愛い…！！！！（ギョウツ！！！！）」

「うにゃーっ？」

ユーにゃんのエンジェルスマイルに魅了されて即座に抱き締めた。

「ああ〜〜 何て可愛いの〜（スリスリ）」

「ひ…ひばりお姉ちゃん、くすぐりたいよ〜」

「放して旅人さん！！ アタシもユーにゃんに抱きつきたい！！」

『はいはい。もういいよ（パッ）』

「ひばりお姉ちゃん！ アタシも抱かせて！！」

私が綾を放すと即座にユーにゃんに抱き付いているひばりに近づくと

『ハッハッハッハ！ 支倉さんもユーにゃんの虜になって良かった良かった』

因みにひばりと綾は満足するまでユーにゃんを抱き締めていた。

20分後

『では支倉さん、貴方にもう一つ良い事をしてさしあげましょう』

「良い事？」

綾がユーにちゃんと戯れている時に、私がひばりを連れて別室に移動し、ある事をやるうとしていた。

『良い事と言ってもほんの少し夢を見る程度だけどね。ほれ（パチンツッ！）』

ボンツッ！

「ごほっ！ ごほっ！ ちょ…ちょっと旅人さん！」

私が指を鳴らした瞬間、ひばりの周りから白い煙が出た。その事にひばりは咽ながら私に怒鳴る。

「もう〜〜！！ 酷いよ旅人さん！ 良い事なんて言ってあたしに意地悪したいだけでしょ！？」

『そんな事無いよ。そのこの鏡を見てご覧』

「え？ ………………！！！！！」

煙が晴れて私が鏡がある方に指し、ひばりはそれを見ると驚愕した。

それは……。

「え？ え？ え？ な…何？ 何なの？」

『君の身長を25cmほど伸ばしてみたんだが……お気に召さなかつたかな？』

何と身長が伸びたひばりが映っていたのであった。

『確か支倉さんの身長は138cmだから、25cmプラスして163cmだね。いやはや、これは見事な美女に変身したと言うか何と言うか……ん？』

「……………」

ひばりが何故か無言だったので、私は顔を覗いて見ると……。

『……………あらら、予想外な事が起きちゃって気絶しちゃってるよ』
器用な事に立ちながら気絶していた。

その後は私の方でひばりが気絶している最中に元の身長に戻すと、彼女は暗示を掛けていないのにも拘らず記憶が無くなっているかのように忘れていたのであった。

ローズVS鉄人2 ? (後書き)

以上、トライアスロンでした!!!
GAUさん、ご協力ありがとうございました。

ちよつとした一日

ユーにやんを擬人化した翌日……。

「ふわあ~~~~」

私は欠伸をしながら街中を散策していた。

「昨日は大変だったなあ〜」

私が絵梨の部屋から姿を消して数時間後、絵梨から電話が掛かってきてユーにやんをまた人間にしてくれとせがまれたのだ。

最初はコツチにも色々と規則があるからホイホイと人間にする事は出来ないから無理だと断ったのだが、絵梨は人の話を聞いていない感じで執拗に人間にしてくれと同じ事を何度も言い続けた。

いい加減にウンザリした私は電話を切ったのだが、再び絵梨から電話が掛かって来たので携帯の電源を切り、暫くは絵梨と会うのは止めておこうと思った。

「絵梨に見付かった時は暗示でも掛けて帰らせるか……ん？」

絵梨の対処方法を考えている最中にある二人を見かけたので私は歩いている足を止めた。

「どうだ愛子。此処のカツは最高だろ？」

「うん！ 外はサクサクで中は肉汁たっぷり。流石は翔君だね」

制服姿の翔と愛子が一緒に歩きながらカツを食べていた。

『あの二人を久々に見たな……どれ、ちょっと私も（パチンツ！……パツ！）』

そして私は指を鳴らし、カツサンドを出して食べ始めた。

……

「ん!？」

「翔君、どうしたの？」

翔の足が止まって周りを見た事に愛子は何か遭ったかと聞く。

「この匂いは……（クンクン）」

「匂い？」

「（クンクンクン）……そこだ〜!!!!（ダツ!!）」

「ちよ!？ 翔君!？」

匂いの発生源を突き止めた翔が駆け出すと、愛子も一緒に付いて来

る。

.....

『(モグモグ)……そろそろかな?』

私のもう一つのカツサンドを食べようとすると……。

「ちよつと待った~~~~!!!!　そこでカツサンドを食べようとしている旅人さん!!!(ビュオツ!)」

翔が物凄いスピードで私の持っているカツサンドを奪おうとする。

が……。

『(スカッ)　甘いよ、翔。　あ〜ん(モグモグ……ゴクン)』

「あ~~~~!!???」

私はすぐにかわしてさっさとカツサンドを食べた。カツサンドを食べた私を見て翔はショックを受けたかのように大声を出す。

「ああ……旅人さんのカツサンドが食べなかった……」

『……何もそんなにショックを受けなくても。　ってか翔、お前は人の食べ物を奪って当然の顔するなよ』

窃盗罪になるぞ？ と私は付け加える。

「あんな美味そうなカツサンドを見たら、誰だって奪うに決まってるだろうが！」

『いや。んな事するのはお前だけだから』

「頼む旅人さん！ もう一度カツサンドを出してくれ！ カツカレーでもカツ丼でもいいから！！」

『今度は要求かよ……』

人の話を全く聞いていない翔に私は呆れるしかなかった。

「翔君、それは人に物を頼む態度じゃないと思うよ？ ごめんね旅人さん、翔君に代わって僕が謝るよ」

『おや愛子ちゃん、お久しぶりだね』

翔に指摘しながら私に謝る愛子に私は挨拶をする。

「いいんだよ愛子。旅人さんはあの程度で怒る人じゃねえんだから。それに俺と旅人さんは仲良しだしな」

『“親しき中にも礼儀あり”と言う諺があるだろうが』

「アンタに礼儀なんて必要か？」

『……………そうか。お前は私に喧嘩を売ってるんだな？（

ゴソゴソ」

礼儀が全く無い翔に私は懐から携帯を取り出す。

「ああ？ 携帯なんか出してどうするつもりだ？」

『今からローズ達を呼んでお前を襲わせる命令を「すみませんでした〜〜！！！！」素早い土下座だな……』

「流石の翔君でも、オカマさんたち相手では無理みたいだね」

即座に土下座して謝罪した翔を見た私と愛子は、翔の早変わりを面白そうに見ていた。土下座している翔は必死な顔をして私にペコペコと頭を下げている。

「俺様が悪かった！ 頼むからオカマ軍団だけは……！！」

『……今度ふざけた態度取ったらホントにローズ達に喰わせるからな。肝に銘じておけよ？』

「ははあ〜〜！！」

『（とは言ったけど、お前はもう既にローズ達に喰われたけどな）』

まあ記憶が無くなっている翔に既に喰われたと言っても絶対信じるとは思えないけど。一応、番外編での出来事を思い出せる為のDVDを私は持っている。

本当だったらこの場で翔に見せてやりたい所だが、翔にあそこまで

の土下座をされると気の毒であるので見せるのを止めた。

『ところで愛子ちゃん、君達はこれからどうするつもりなんだい？』

「えっと……取り敢えず翔と一緒に美味しい物巡りに」

「俺様が愛子に美味しいカツを紹介してんだ」

『カツを食べるのは程ほどにな』

「太るぞ？ と私は愛子に失礼ながらも忠告をする。

「でも美味しい物を食べてると……」

『気にしてもらえない……か。だったら愛子ちゃんにコレをあげるよ）
ゴソゴソ……スッ（』

「コレって……野菜ジュース？」

私が懐から野菜ジュースを取り出し愛子にソレを渡す。

『ただの野菜ジュースじゃ無いよ。私特製の野菜ジュースで、ソレを飲んだ後に一杯食べても脂肪を分解して太らないと言う優れた物だ』

「え！？ そ…それホント!？」

『あゝ』

「やったあ〜〜!!!! ボクこう言っの欲しかったんだ!」

私特製の野菜ジュースの効果を教えると愛子は嬉しそうに舞い上がる。

「なあなあ旅人さん、俺様には何か無いの？」

『お前は肝に銘じろと言った早々にまた強請るのか？』

「いやいや、愛子にそんな嬉しい物をくれたんなら俺様にも最高級のカツを……」

『やらん』

「そんな!？」

私の発言に翔はショックを受けた。

「(ズーン)……あんまりだぜ旅人さん……アンタの出すカツは滅茶苦茶美味しいのに……」

『では私はこれで失礼するよ。愛子さん、野菜ジュースがあると云っても食べ過ぎないように。では(スタスタ)』

「またね〜」

「ってもう行っちゃったし!」

ショックを受けている翔を無視して私は二人から去って行った。

と言うより、これ以上翔に付き合いきれない。あのままいたら延々と翔にカツを出してくれと懇願されると思ったので私は去ったのだ。

翔は私を追いかけたのだが既に見付からず悔しそうな顔をしている。

「くそう！ 次は絶対カツを貰うからな、旅人さん！！」

「その前に翔君、君は少し態度を改めた方がいいと思つよ？」

貰って当然だつて言う態度を取るから旅人さんに断られるんだよと愛子は付け加える。

「……………」

「さ、行こっか」

「……………くそ~~~~！！！！ 今日はやけ食いだ~~~~！！！！」（ダダダダ……！！）

「あらあら……ちょっと翔君を置いてかないですよ」（タッタタッタタ）

急に走り出した翔に愛子は追いかけて始めた。

ちょっととした一日（後書き）

この話の続きはアッチの方に掲載しております。

ちよつとした一日？

『ではメール送信つと（ピッ）……これでよし』

私は翔の携帯にメールを送信していた。何故そうしているのかは、アッチの方をご参照して下さい。

『では再び散策開始とすると……ってそう言えば雄二の奥さんの坂本翔子さんは今頃何を』

私がふと思い出しながら言うと……。

「……呼んだ？」

『これはこれは。お久しぶりですね』

後ろから霧島に声を掛けられたが、私は狼狽えずに挨拶をする……何故か霧島は気絶している雄二を連れていたが。

「……こんな所で会うなんて奇遇ね」

『そうだねえ。坂本と会うのは真美ちゃんを連れて来た時で「勝手に翔子を入籍させるな旅人！」……何だ、起きてたのか』

私が霧島に坂本と言うと雄二はすぐに目覚めて即座に訂正をして来る。

『ってか雄二、お前はもう霧島と婚約したんだから別に坂本と呼んでもいいだろうが』

「まだ翔子とは籍を入れてねえ!!!」

『そうは言うけど、その左手の薬指に嵌められている指輪が何よりの物的証拠で……』

「テメエがそうさせたんだろうが!!!」

何か言う度に坂本は大声を出して私に突っかかってくる。いい加減、雄二には現実を見て貰いたいのだが簡単には認めないので私は早く素直になって欲しいと思った。

『そうだったね。ところでさ、雄二は何で霧島に引き摺られてんの?』

「……………翔子に有無を言わずに連れて来られたんだ」

『つまりは強引なお出掛けって事か』

「そう言う事だ……………はあっ」

雄二が何やら疲れていそうな顔で溜息を吐く。この顔から察して、雄二は霧島に何度も強制的に連れて行かれたと言うのが分かった。強制的に連れて行かれたくなければ、雄二が霧島をどこかに誘って行けば霧島も多少大人しくなると思うのだが。

『（ポンッ）まあその内良い事あるよ?』

「元はと言えばテメエの所為だろうが!?!（ガシッ!）」

私が雄二の肩に手を置いて慰めると、雄二は振り払って私の胸倉を掴む。

『おや？ 私を殴る気かい？』

「テメエをぶん殴らなきゃ俺の気が治まらねえんだよ！！（ブオンッ！）」

雄二が私を殴ろうとしたが……。

「（ガシッ！）……雄二、旅人さんへの暴行は許さない」

「放してくれ翔子！！俺はこのクソ野郎をぶん殴らなきゃいけねえんだ！！」

霧島が雄二を羽交い絞めにして動きを封じる。

『では雄二、私がお前に霧島さんを大人しくさせる方法を教えてあげよう（スッ）』

「待て！！ テメエはまた俺に暗示を掛けるのか！？」

『いいじゃん別に。それに霧島だって素直になった雄二には従順になるんだから、でしょ霧島さん？』

「……私は雄二の妻だから何でも従う」

私の問いに霧島は当然の様に答えたので私は雄二に暗示を掛けようとする。

『だそうだ雄二。では（スツ……トンツ）』

「ま…待て!!」

『“いい加減素直になれ”』

「……………分かった（またこのパターンかよ〜!!??）」

以前と同じように、意思があっても体が動くことが出来ない状態である。

『ほら雄二、婚約者なら周りに見せ付けなと』

「そうだったな。（スツ）さあ翔子、俺を何処に連れて行くんだ？ラブホテルか？（何を言ってるやがんだテメエは〜〜!!??）？」

雄二が霧島の肩に手を置いていきなり凄い発言をする。

「……………行くのはレストラン……………雄二のエッチ、旅人さんの前でそんな恥ずかしい事を言わないで」

霧島は顔を赤らめながら雄二に行き先を教えた後に軽く叱咤する。

「悪い悪い。翔子の近くにいると、つい抱きたくなっちゃって（ふざけんじゃねえ〜!!!!）」

『はいはい、そう言った話は私がない時にしてね。それじゃあお二人さん、私はこれで失礼するよ』

「……………待つて、旅人さん」

私が去ろうとすると霧島が私を引き止める。

『なんだい？』

「……………旅人さんも私たちと一緒にレストランに行かない？」

雄二と婚約関係にしてくれた恩もあるからと付け加える。

『いやいや、二人っきりの食事に私がいると邪魔でしょ？ お礼はまた今度で……………』

「……………私としては今お礼をしたい。そうでもしなきゃ、何時また旅人さんに会えるのかは分からないから」

『……………本当にいいのかい？』

「……………（コクッ）」

霧島の意味が固かったので私は確認の為に雄二に聞く。

『雄二は？』

「別に構わないぞ。俺としてもアンタに翔子と婚約出来た礼をしたかった所だし（このクソ野郎に礼なんかいらねえよ！！ ってか殴らせろ！！！！）」

『……………ではお言葉に甘えるとしましうか、丁度腹も減っていた所だしね（さっきから心の雄二が五月蠅いから黙らせておくか）』

本体の雄二が五月蠅かったので私は二人に見えないように指を鳴らすと……。

「それで翔子、今日はどんなレストランに行くんだ？（……！！！！）」

完全に雄二の声が無くなっていた……けれど何かに抗っているみたいな感じがするが。

「……中華レストランに行く。その方が雄二もお腹一杯に食べられると思うて」

「そうか、それは楽しみだな」

「……旅人さんも遠慮なく食べて。今日は私が奢るから」

『それはご親切に（グ〜）……失礼』

中華料理が一杯食べられると分かった瞬間に私のお腹が鳴ってしまった。

「何だ旅人、そんなに腹減ってんのか？」

『いや〜そんな事はないんだけど……中華料理を食べられると思ったら急に腹が……』

「……旅人さんは意外に食いしん坊」

『ハハハ……恥ずかしい所を見せてしまったなあ（ポリポリ）』

雄二と霧島の突っ込みに私は恥ずかしながら頭を掻く。

『じゃあこれ以上お恥ずかしい所を見せたくないので行くと思いますか』

「…………案内する」

霧島が歩くと、私と雄二は付いて行った。

案内されて数十分後

「…………此処がそのレストラン」

「中々洒落た店だな」

『ほお〜〜見るからに高そうな店だなあ〜』

目的地に着いた私と坂本夫婦（笑）は入り口の前に立っていた。ゴージャスな中華レストランを見て私は思わず辺りを見回す。

『しかも周りにある他の店も高級な店ばかりだし…………流石はお嬢様だな』

「……旅人さん、早く入って」

『ん？ おおスマンスマン』

何時の間にか店に入っていた坂本夫婦（笑）に私はすぐ中華レストランに入った。

回転テーブル席に座り、私は料理が来て早々に……

『（ガツガツガツガツ！！！！）』

物凄い速さで食べまくっていた。

『（ゴクンツ！）あゝ美味しい！！ 此処の料理は最高だなあゝ（ガツガツガツガツ！！！！）』

「……………」

私の食べるスピードに雄二と霧島は目が点になっている。

何しろ私はチンジャオロース・麻婆豆腐・北京ダック・フカヒレ・

エビチリ・チャーハンを一気に平らげているのだ。

「……凄い食べっぷり」

「俺は旅人が、とある某戦闘民族じゃないかと思うんだが……」

霧島は何故か感心しており、雄二は私がサ○ヤ人ではないかと思いを始めていた。

『霧島、多分私が食べている料理の値段が凄いと思うから、やっぱり自分で払っとく（モグモグモグ）』

「……別に気にしなくていいのに」

『いやいや、こんな美味しい中華レストランを紹介してくれただけでも充分お礼に入るから（ガツガツガツ！）』

「おい旅人、食つか喋るかどっちかにしろ」

私が食べながら霧島と話していると雄二が突っ込みを入れる。

『（ムシヤムシヤムシヤ！……ゴクンッ！）……ああ〜うめえー！ 店員さん！ 小籠包と海老餃子と肉シユウマイとホイコーローと五目焼きそばと五目野菜炒め下さ〜い！』

「全然聞いてねえな……」

「……私としては旅人さんがこんなに喜んで食べてくれるのは嬉しい」

霧島はやはり私を連れて来て正解だと思っていた。

「……………なあ翔子」

「……………何？」

雄二はもう私を無視して霧島に小声で話しかける。

「ちょっと俺と一緒に来てくれないか？」

「……………何処へ？」

「付いて来れば分かる（グイッ）」

「あ……………」

霧島の腕を掴んで雄二は席を離れてある場所へと行く。

『（ガツガツガツガツ！！）……………ん？ 雄二と霧島が何時の間にかいないな』

料理を食べている最中に二人がいなくなった事に気付いたが……………。

『……………恐らく雄二が霧島を食べる為にトイレに連れて行ったんだな……………まあ私に関係の無い事だ。お！ 来た来た』

すぐに理由が分つても食べる事に専念する私。

その後は少し時間が経つと雄二と霧島が戻り、料理を食べ尽くした私は霧島にとある物を渡して帰っていったのであった。

ちょっとした一日？（後書き）

次回はアツチの方で雄二と霧島が何をしていたのかと、その後の話となります。

愚か者達への制裁（前書き）

今回の話は「バカとテストと優等生？」 第二百四十二話「その後の話」となっております。

愚か者達への制裁

アツアツ夫婦の詩

みんなのうた

『愛する翔子』

俺はいつもずっとお前を見ている

お前の笑顔を見ると

俺の心はすぐに癒される

お前を俺の胸の中に抱き止めると

誰にも渡したくないと言う独占欲で一杯になる

俺の愛しい翔子

いつも俺がお前を求めると

お前は温かく迎えてくれる

そんなお前を見ていると

俺はすぐにでもお前の唇にキスをしたくなり

抱きたくなってしまう

そしてこう伝えたい

愛している翔子

OMAE を DARENIMO WATASANAI

そして早く俺に翔子との愛の結晶）“こしょう”と“しょうゆ”
を見せてくれ

作 坂本雄二

さすらいの旅人のコメント

素直になった雄二に私は嬉しく感じました。（私が暗示を使って書
かせたけど……）

江藤愛奈のコメント

坂本君と霧島さん、結婚式には是非呼んで下さい。

沢井真美のコメント

こしょうとしょうゆって出来た子供の名前ですか？ だとしたら随
分と味のある名前ですね。

宮本綾のコメント

どうして告白の詩なのに調味料が出て来るのかな？

吉田明菜のコメント

最後がどう突っ込めばいいのかわかりませんでした。

みんなのうた

『貴方を愛してる』

左手の薬指を見るといつも

屋上での出来事を思い出してしまっ

愛していると言われた瞬間に

私は涙が出るほどの喜びに満ち溢れた

貴方の妻になれたという幸せを

そして屋上で夫婦の契りを果たす

私と貴方しか知らない契りを

雄二

私を愛してくれている夫

貴方の逞しい胸板で私を抱きしめ

一緒に幸せになろうと呟かれ

私は誰にも貴方を渡したくないと思ってしまう

貴方の体と心を

全て私の物にしてしまいたい

雄二貴方を愛している

W A T A S H I の K O K O R O H A A N A T A N O M O N O

作 坂本優子（旧姓：霧島翔子）

さすらいの旅人のコメント

卒業後の結婚式を楽しみに待って下さい。

江藤愛奈のコメント

夫婦揃ってアツアツですね。

沢井真美のコメント

互いに愛し合っていると感じ思わず涙が出ました。

宮本綾のコメント

末永くお幸せに。

吉田明菜

結婚後の人生は障害が付き物ですが、頑張ってください。

文月学園が昼休みの頃……。

ガラッ！

『こんにちは』

Fクラスの教室に私が入って来た。

そして何時もの如くFFF団が襲い掛かってくるかと思いきや……。

「……旅人さん」

「あ、旅人さんだ……」

「今日はボク達に何か用なの？」

「旅人さん、ついに俺様に最高級のカツをくれるのか？」

「さすらいの旅人！ 何の用で此処に来た!？」

上から順に霧島、優子、愛子、翔、久保、そして他のAクラスメン
バーだった。

『……（そうか。FクラスはAクラスに勝ったから設備交換して、
このEクラス設備の教室には霧島達がいるんだ……）失礼しま
した（ピシヤッ！）』

私は何も無かったかのように戸を閉めてAクラス設備の教室に向か
ったのであった。

「ああん？ 旅人は一体何しに来たんだ？ 俺様にカツをくれるん
じゃなかったのか？」 翔

「……さあ……？」

「もしかして教室を間違えたとか？」

「愛子、旅人さんがそんな間違いをするとは思えないわ」

「おのれ“さすらいの旅人”……！ 貴様は何時か僕の手で……！」

工藤の予想が当たっていないながらも、私の行動に疑問を抱くAクラス
メンバーであった……久保は恨みを晴らそうと呟いていたが。

それと……。

「またアイツか……」

「勇気、何を考えているかは知らないけど止めといた方がいい」

「沙代の言うとおりで、あの男はお前が手に負える相手じゃない」
忌々しそうに私を見て不穏な事を考えていそうだった佐野勇氣に、
石田沙代と西園寺泰祐が抑える。

「だとしても、どうして代表は学園の教師でも生徒でもないアイツ
を見過ごしているのかが分からないよ。僕だったら直ぐにでも追い
出すけどね。いつそ今から訴えて……」

「だから止めろと言ってるだろう」

不穏な事を考えていた佐野に石田は再度止めろと言う。

「あの男はその程度の事で追い出す事は出来ないぞ、逆に返り討ち
に遭うだけだ。それに奴は妙な力を使って相手を倒すからな」

「……………」

西園寺に言われた佐野は、私が以前に指を鳴らして久保を倒す所を
見たのを思い出した。

「聞いた話だと、奴は相手にこれ以上無いと思わせる位の悪夢を見
せる事が出来るらしいぞ」

「（ギリッ！）……………クソッ！ ただでさえ僕から絵梨を奪う宮永
が煩わしいのに……………」

「それに暗示も掛ける事が出来ると言ってたな」

「……………何？」

話を聞いていた佐野が急に西園寺の方に顔を向ける。

「泰祐、ソレは本当か？ あの男は暗示を掛ける事が出来ると」

「ああ。代表の話だと抵抗していたFクラス代表の坂本雄二暗示を掛けた途端、性格が180度変わったかのように素直になったと言ってたぞ。いきなりそんな事を聞いてどうした？」

「……………どうやらあの男には使い道があるみたいだな。待っててくれ絵梨。必ず僕が助けに行くから」

「……………」

独り言を呟きながら笑みを浮かべる佐野に西園寺と石田は無言で見ている。

「さすらいの旅人、絵梨を助ける為に僕の手足となって貰うよ……………」

ガチャッ！

『また改めましてこんにちは』

Aクラス設備の教室に入った私は挨拶をすると……。

「旅人！！ テメエは絶対にブッコロス！！（ダッ！！）」

『ローズ達を呼ぶよ？』

「！！（キキ！！）」

偶然入り口にいた雄二が私に襲いかかろうとしたが、私の一言で急ブレーキした。

「すぐにオカマ軍団を呼ぶなんて汚ねえぞ旅人！！」

『はっ。戯言にしか聞こえんな。それにお前も体育祭の時に言ってたじゃないか、“卑怯汚いは敗者の戯言”だと』

「ソレとコレとは話が別だろ！？」

内容が違つと雄二は突っ込む。

『一々うるさい奴だ。ローズ達が嫌なら今から私が昨日の夜に雄二が霧島と………』

「俺が悪かった！！ 頼むから言わないでくれ！！」

昨日の夜の事を此処で暴露されたら間違いなくFFF団に処刑される事が安易に想像が出来た雄二は、土下座しながら私に謝罪する。

『（ポンッ）大丈夫だよ雄二、あの薬を飲んだら子供が出来ない様

に施してあるから』

「（ギリギリ！！）……………本当だったらデメエをぶっ飛ばしたいが、不幸中の幸いだと思って感謝しておく」

私が雄二の肩に手を置きながら精力増強剤のデメリットを教えたと、雄二は歯軋りをしながら睨み、取り敢えずと言った感じで礼を言った。

「それで、今日は何の用で此処に来た？」

『いや〜Aクラスに勝ったお前たちFクラスの状況を見ようかと思つて』

「……………周りを見れば分かるぞ」

『どれどれ（キヨロキヨロ）……………これは酷いな』

私が辺りを見回すとFFF団全員が完全に寛ぎ状態になっており、我が物顔の様に使っていた。

「一体何時になったら女子達は来るかな〜？」

「俺達の姿を見ればイチコロになるんだが」

「旅人のクズ野郎が綾ちゃんを連れて来て欲しいんだけどな〜」

「けどその前にあのクズ野郎を始末して綾ちゃんを此方に引き入れないとダメだし……………」

「次の授業で旅人をどうやって始末しようか考えようぜ？」

「そうだな、Aクラスに勝った俺達に敵はいないからな」

「……異議なし！！」

紅茶を飲んで上品振るFFF団共は好き勝手な事をほざいている。

『……………あの連中は自分達がAクラスに勝ったと言っているけど役に立ったの？』

「全然。明久と同じく全く使えない捨て駒共だ」

『全く戦いもしなかった雄二が言える台詞とは思えないけど？』

「……………」

私が出つ込むと雄二は痛い所を突かれたかのような顔になる。まあ下手に雄二が霧島と戦っていたら逆に負けていただろうから、それはそれで却って良かったが。

『急に話は変わるが、明久達はどうしているんだ？』

「今は姫路の弁当で……………」

『OK、それだけで分かったよ。待ってる明久、すぐ助けに行くぞ（スタスタ）』

「……………アイツはホントに明久に対しては優しいな。あのバカのどこがいいのか俺にはさっぱりだ」

私が明久達のいる所へと向かい、雄二は面倒事にならない為に教室から出た。

「さあ明久君、一杯食べてくださいね」

「う…うん…」

明久は死を覚悟して姫路の弁当を食べようと、おかずを口に運ぼうとしたが……。

『やあ皆さん、お久しぶりです』

「え？ ……あ！ 旅人さん！」

私がやってきたので箸を止めた。

「僕たちに何か？（ナイスタイミングです旅人さん！！）」

「旅人殿ではないか。お主が学校に来るとは久しぶりじゃのう（助かったのじゃ旅人殿！）」

「…………お久しぶりです…………これで姫路の弁当を食う事は無い」

姫路の殺人弁当の恐ろしさを知っている面子は歓迎しながらも内心ではホッとしており……。

「本当にお久しぶりですね、旅人さん」

「アンタまた来たの!？」

姫路は以前と同じく私に対して恨みを抱いておらずに挨拶をし、島田は憎々しげな目で見て……。

「んで？ 今日は何しに来たんだ？」

用件を知りたいと言わんばかりに絵梨に作って貰った弁当を食べながら早く本題に入る来牙であった。

『用と言う程じゃないけど、Fクラスが此処の設備を使ってどうしてるのかと思って来たんだよ』

「そうか。けどアイツ等を見てもう分かっただろ？」

『……………まあね』

来牙がFFF団の方へ顔を向けながら言う。私は頷く。

『それはそうと明久、随分と美味しそうな弁当を食べているんだな』

「え？ あ…こ…コレは姫路さんが……」

「宜しかったら旅人さんも食べますか？」

「ちょっと瑞希！　こんな奴にあげる必要は無いわよ！」

姫路が私に弁当を食べても言い様に言つと、島田がすぐ割つて入つて来た。

『こんな奴とは随分な言い草だね。ところで島田さん、アレ以来は清水さんとうなつたの？』

「……………あ……………ああ……………いや〜……………！！！！（ダダダダダ〜）……………！！！！」

「み…美波ちゃん！？　どうしたんですか！？　（タッタッタッタ）」

『おや？』

島田は悪夢を思い出したかのように教室から出て行ってしまい、姫路は島田を追いかけた。

愚か者達への制裁？

島田が叫びながら教室から出て行き、姫路も一緒に出て行ったので私としては好都合だった。

『どうやら島田さんは未だに以前の出来事を引き摺っているみたいだねえ』

「そうさせたのはアンタだろうが……」

人事のように言う私に来牙が突っ込む。

『そうだったね。まあそんな事より……明久、その弁当をコッチに』
どうでもいいように答える私は明久に持っている姫路の弁当を渡すように言う。

「ど…どござ(スッ)」

「旅人殿、姫路の弁当をどうするつもりなのじゃ？」

「……まさか食べる気では？」

『違う！ どれどれ……うわ、これは……』

「」「」「え？」「」「」

私は恐ろしい事を言うムツツリー二に即座に否定し、姫路の弁当のおかずに含まれている化学薬品を調べてみると嫌な顔をする。そし

て私の顔を見た明久達は冷や汗を掻いた。

『何だよコレ……こんなもん食ったら確実に死ぬぞ』

「あ……あの……旅人さん……」

「さ……参考までに聞きたいのじゃが……」

「……そのおかしには何が入っているんですか？」

「俺は大体予想が付いてるから聞く気は無いがな……」

明久、秀吉、ムツツリーニは震えながら私に何が入っていたのかを聞く。中でも明久が一番にブルブルと震えていた。

『……聞いても後悔するなよ？』

「……（コクッ）……」

「だから、俺はいいって……」

来牙の言葉を無視して私は中身を言った。

『このおかしにはね……塩酸や酢酸、硫酸、青酸カリ、硫黄が大量に含まれている。食ったら確実に死ぬぞ』

「……（ガタガタガタガタ）……」

ガター！）「……」

「……おい旅人さん、その弁当さっさと消してくれ」

私が入っている化学薬品を一斉に言うとな久達は汗を大量に掻きながら震えており、来牙はもう見たくないと言わんばかりに捨てると言う。

『と言う訳で姫路の弁当をを廃棄する事に異論がある方はいますか？』

「」「ありません！」「」

「異論は無いから早く……」

『では（パチンツ……パツ）はい消しました』

私が指を鳴らすと、姫路の弁当箱に入っているおかずが一瞬で消えた。

「はあ~~~~~……危うく食べる所だった……」

「（ポンツ）……明久よ、生きていると言うのは素晴らしいの……」

……

「……旅人さんに凄く感謝」

「もういい加減、姫路に二度と料理をするなど言いたいんだが」

明久が椅子に座りながら正に九死に一生と言わんばかりの顔になっており、秀吉は明久の肩に手を置いて諭すように言い、ムツツリーニは真心を込めて礼を言う。来牙はウンザリしていると云っていい位の顔になっている。

『それで？ 姫路さんの弁当を消したけど、明久達の昼飯はあるのかい？』

来牙は弁当があるからいいけど私は付け加える。

「いや……今日は持ってきてなくて学食で食べようかと……」

「学食に行こうとした時に姫路に捕まっただけ……」

「……けど雄二が逃げた、ゆるすまじー！」

『……なるほど、だから雄二は入り口の近くにいたって事か』

私と一緒に付いて来なかったのは姫路の弁当から逃れる為だったのかと結論に至った。けれど、もし私が雄二の立場であったら絶対同じ事をしているに違いないだろう……明久達にも言える事であるが。

『だったら昼飯は私の方で用意してあげよう（パチンツ！ ……パツ！）どうぞ』

「」「」おおー！」「」

私が指を鳴らすと、カツ丼、カツカレー、カツサンドが出てきた。

「カツ料理ばっかだな。翔が食べたがる物ばかりじゃないか」

『本当は翔に食べさせるつもりだったけどねえ、絶品のカツ料理を』

「えー！？ ……これって凄く美味しいんですか！？」

『勿論だよ明久。最高級の無菌豚を使っているカツは柔らかくて無茶苦茶美味いぞ〜』

「……………」

最高級と聞いた明久はカツ丼をジッと見て……。

「……………（ゴクツ）……………頂きます!!」

「ああ！ズルイのじゃ明久！ワシだって食べたいのじゃ!!」

「……………俺も!!」

即座にカツ丼を食べると、秀吉はカツサンド、ムッツリーニはカツカレーを食べ始めた。

「う……………美味い!!」

「何て美味なのじゃ!!…これほどのカツサンドは今まで食べたことが無いのじゃ!!」

「……………生きてて良かった」

『そう言って貰えると嬉しいよ。さあ一杯食べな』

「この場面を翔が見たら確実に怒り狂うだろうな」

明久達は凄い勢いで食べ、私はお代わり自由だよと言い、来牙は翔が来ないように祈った。

明久達が食べている中……。

『では私は（パチンツ！ パツ！ モグモグモグ……）やっぱりこれも美味しいなあ〜』

「旅人さんは中華丼か？ それにカツも入っているみたいなの……」

私は昨日に食べた中華カツ丼を出して食べているおり、来牙が珍しそうに見ていた。

『（モグモグモグ）これは中華カツ丼ってやつだよ。先日、中華レストランでコレ食ったら凄く美味くて見事に嵌っちゃったんだ。来牙も食べるかい？』

「いや、俺は弁当があるから遠慮しとく」

『そうか。明久〜、中華カツ丼も食ってみるか？』

「是非お願いします!!」

Aクラスの教室では……。

「……………はっ！！！！」

「翔君、どうかしたの？」

いきなり翔が何かを感じ取ったのか急に顔を上げた。

「何だ？ 急に怒りが湧き出て、同時に俺様の大切な物を奪われた喪失感が……………」

「はあ？」

意味不明なことを言っている翔に愛子は全く分からなかった。

……………

「はあ〜〜美味しかった〜」

「うむ、美味しい料理を食べるとお代わりしなくなったのう」

「……………大変満足した」

『凄いなお前等。少量のお代わりとは言え一通り食べるとは……………』

満足した明久達は幸せそうな顔をしていた。

「まあ旅人さんが出す料理は美味いからな。翔も何度もお代わりしたし」

『アイツのカツ好きには少々呆れるがな……』

「え？ 遊佐君は以前に旅人さんが出したカツを食べた事があるんですか？」

私と来牙の会話に明久が割り込んで質問する。

『ああ。何度もお代わりを催促されて少しウンザリしたが……』

「そうなんですか……でも遊佐君に食べさせるのは勿体無い気がしますね」

『何故だ？』

「遊佐君って只管カツひたすらを食べるから、味わって食べるイメージがなくて」

『……まあ確かに』

以前私が翔にカツ料理を出したのを思い出し、とても味わって食べていると言う感じがしなかった。

「だからそんな遊佐君に最高級のカツを出しても、宝の持ち腐れと言うか何と言うか……」

「それはつまり翔には食べさせる必要は無いつて事か？」

「うん。遊佐君が旅人さんの出したカツ料理を食べるのを想像したら、安っぽく見えるし」

来牙の質問に明久は翔に対する暴言とも言ってもいい台詞を口にする。もし此処で翔が聞いていたら確実にキレて明久をぶっ飛ばしていると思えそうだ。

「明久よ、そんな事を言ったら遊佐に殺されるぞい」

「大丈夫だよ秀吉。どうせ遊佐君は今頃安いカツを食べて満足……」

と、明久が言っている途中に……。

「ほお？ それは俺様に喧嘩売ってるって事で良いんだな、吉井？

(ポキポキ)」

「……………え？」

何故か翔が明久の背後にいた……………それも頭に青筋を浮かべてポキポキと指の骨を鳴らしている。

「な…何で遊佐君が此処に？」

『あら翔じゃない……………』

「お前、何時からいたんだ？」

「「……………」」

明久は滅茶苦茶やばそうな顔になり、私と来牙は何時の間にかいた翔に声を掛け、秀吉とムツツリー二は翔の顔を見て無言になっている。

「おい吉井、てめえ俺様がないのを良い事に随分好き勝手ほざいてくれたじゃねえか、ああ？」

「あ…いや…これは…その……」

「それに俺様が食う筈だったカツを全部食っちゃまったみたいだし…
…コレはお仕置きをしなきゃいけねえなあ……」

『いや、私が明久達に食わせたんだけど』

「俺様は悲しいぜ、吉井。何しろテメエを今すぐぶっ殺さなきゃいけねえんだから……」

翔は私の話を全く聞いておらず、すぐにでも明久に襲い掛かりそう
だ。

「あ…あの、遊佐君。い…一体どこら辺から聞いていたのかな？」

明久はジリジリ近づいてくる翔に離れながらも質問する。

「テメエが“遊佐君に食べさせるのは勿体無い気がしますね”と言
ったあたりからだ」

「って最初から聞いてたって事!？」

「はっ！ た…旅人殿！！ すぐに明久を助けないと！！」

正気に戻った秀吉は私に明久を助けて欲しいと懇願する。

『う…う…うん……けどねえ……』

「はっきり言ってアレは明久が悪い。あんな事を言わなければ、翔もあそこまでは怒らなかつたからな」

「……自業自得」

言葉を濁す私に来牙とムツツリーニはバツサリと切り捨てる。

「そうじゃとしても、このままでは明久が遊佐に殺されるぞい！」

『……では助けるとしますか。元はと言えば私が元凶だし』

そして私は明久を追いかけている翔を鎖を使って引きとめて、記憶の一部消去の暗示を使い先程までのやり取りを無かつた事にしたのであつた。

おまけ

再びAクラスでは……。

「なあ勇氣、本気でやるつもりか？」

「当たり前だ。絵梨を救う為なら僕は何だってする」

「俺はあの男が勇気の指示に従うとは思えないがな……」

意思の固い佐野を何とか止めさせようと石田と西園寺は説得していた。

「その時は多額の金を出して雇うさ」

「そんな事したらまた謹慎されるぞ？」

「構うもんか。絵梨が僕の所に戻ってくれるなら、ソレくらい安いもんだ」

「だが勇気、もし金を出しても断られたらどうするんだ？」

「……………」

石田の言葉に佐野はどうでもいいように言い返すが、西園寺の質問に無言になる。

しかし……。

「それでも無理だったら……………アイツが以前連れて来た江藤愛奈や沢井真美を人質にする」

「……………」

佐野の言葉に今度は二人が無言になった。

「コレは全て絵梨の為にやるんだ。絵梨が僕の所へ戻るんだったらどんな手を使ってでも……絵梨、お兄ちゃんが必ず助けるから、もうちょっと辛抱しててくれ」

(どっつでも良すぎる) おまけ

旅人『ではここで、どうでもいい話をお送りします！』

明菜「旅人さん、どうして私を呼んだんですか？」

旅人『いや〜。明菜は最近出番が無いから、此处で出そうと思って』

明菜「……………」

旅人『そんな睨まないでくれよ。今回は君に料理について聞くこと思っでいてね』

明菜「料理？」

旅人『おう！ と言う訳で、お題は“カツ丼”です！』

明菜「……………カツ丼って。どうしてカツ丼なんですか？」

旅人『まあ良いから良いから。明菜、カツ丼について説明を』

明菜「はあ……。えっと、カツ丼は丼に盛ったご飯の上に、調理した豚カツを出汁と砂糖と醤油で鶏卵とじにした具を乗せた丼料理の一種で、日本料理の一つでもあります」

旅人「はい、簡単な説明をありがとうね。因みに明菜が説明したのは一般的なカツ丼であり、それ以外にも、日本各地にさまざまなバリエーションが存在するのを知っているかい？」

明菜「ええ、まあ。ソースカツ丼や味噌カツ丼がありますね」

旅人「他にも色々あるよ。こんなにね（パチンツ！）」

それぞれのカツ丼のバリエーション

- ・ソースカツ丼
- ・煮込みソースカツ丼
- ・ドミカツ丼
- ・タレカツ丼
- ・カレー風味カツ丼
- ・かつ皿
- ・タルタルカツ丼
- ・味噌カツ丼
- ・あんかけカツ丼
- ・てりカツ丼
- ・塩カツ丼
- ・おろしカツ丼
- ・カレーかつ丼
- ・シチューカツ丼

- ・洋風カツ丼
- ・トマトカツ丼
- ・煮カツ丼
- ・えびカツ丼
- ・ビフカツ丼
- ・チキンカツ丼
- ・メンチカツ丼
- ・わらじカツ丼
- ・変わりカツ丼

旅人『とまあこんな感じだ。因みに私が今回食べた中華カツ丼はあんかけカツ丼に入るね』

明菜「こんなにあるんですか………凄い数ですね」

旅人『他にもあるみたいだけどね。それと翔、お前はどのカツ丼に興味があるかな？ 是非教えてくれ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7752v/>

バカとテストと優等生？ IFシリーズ

2011年12月23日00時53分発行